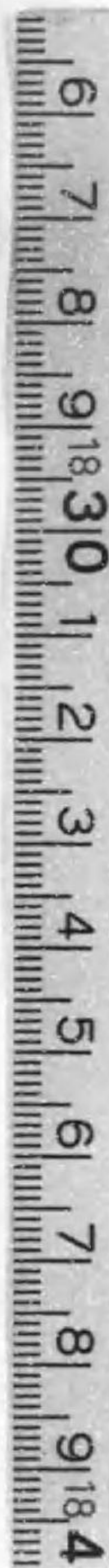


介紹と論評

本日之物人

版念記年百六千二九紀

社本日之物人



始



版念記年百六千二元紀

本日的人物



行刊の辭

新體制下に於ける

人的要素檢討の意義

悠久紀元二千六百年の歴史の上に築き上げられたる近代日本は、世界無比の團體を有して嚴然たる國威を輝かし、新東亞の盟主として躍進の一途を邁進するに至りたるは、皇室の御光被の下軍、官、民一致の努力の然らしむるところであるは言を俟たない。武人は武人としての本分を盡し、財ある者は財の運用に萬全を期して過たず、智ある者は智に據り、各々その特性を發揮して渾然として一致を成し、國運の進展に資するところ寔に大なるものがある。

今やわが皇國は大陸に於ては聖戰に血肉を割き、國內には新體制の叫びは上げられまこと驚天動地とも云ふべき一大轉換期に當面してゐるのである。然してこの大業を完遂し得るの鍵は一つに懸つて人物てふことの一事にある。即ち『偉大なる事業は偉大なる人物に依つて完成さる』ことは歴史に明らかなるところである。

茲に於て我社は紀元二千六百年を記念すると共に、新體制の線に沿ふて軍、官、民等各界に馳驅する巨人、或は過去に大なる功績を残せる人、或は近時擡頭して正に國家のため雄飛せんとする人々を仔細に検討して人的要素の發見に寄與し、以て皇國百年の大計樹立に資せんことを念願し微力を致して來た。元より一々これを執つて検討論及するは、千差萬別殆んど數ふべからざる多くがあつて到底短日を以て成し能はざるところである。さればその中から、現在最も活躍顯著なる人々、推進力大にして世の師表とも仰ぐべき人物を抽出して検討を加へ、人とその力の聯關性を闡明し、國家的有爲の人物の顯揚に盡すと共に、後進の研磨訓陶に資するは實に以て新體制下に於ける實力充實への重要々素たるを確信し敢えて刊行の辭とす。

紀念版 人物之日本 (中)

目次 (五十音順)

阿部 威氏 (一)	有賀 松夫氏 (七)	市川 準一氏 (六)	宇野 藤兵衛氏 (六)	尾關 篤二氏 (五)
青木 運之助氏 (一)	井口 重次氏 (七)	市川 勝久氏 (六)	宇野 秀吉氏 (六)	織田 金吉氏 (五)
青木 幸平氏 (一)	井上 榮造氏 (八)	市川 三郎氏 (六)	宇野 健造氏 (六)	大倉 彦一郎氏 (五)
青木 作雄氏 (一)	井上 信太郎氏 (八)	市川 勳造氏 (六)	鴨木 健造氏 (六)	大島 孝吉氏 (五)
青木 貞吉氏 (二)	井上 德兵衛氏 (八)	市川 勳造氏 (六)	上田 信三郎氏 (六)	大塚 俊雄氏 (五)
青木 仁三郎氏 (二)	井上 正幹氏 (八)	石川 芳次郎氏 (四)	上田 良次氏 (六)	大山 喜四郎氏 (五)
赤阪 良太郎氏 (二)	井上 守義氏 (九)	石川 九一氏 (五)	上田 英夫氏 (六)	大山 綱國氏 (五)
明石 和衛氏 (二)	井上 好三郎氏 (九)	石川 慶藏氏 (五)	植松 益市氏 (六)	太田 家十二氏 (五)
淺井 伊兵衛氏 (三)	井上 米三郎氏 (九)	石橋 慶藏氏 (五)	内田 賢二氏 (六)	太田 一夫氏 (五)
淺井 保七氏 (三)	井上 良一氏 (九)	石橋 周也氏 (六)	内山 直氏 (六)	太田 恭平氏 (五)
淺原 源七氏 (三)	井村 健次郎氏 (三)	石原 新三郎氏 (六)	梅田 千代松氏 (三)	太田 貞己氏 (五)
朝鍋 信一氏 (四)	井本 義亮氏 (三)	石原 彌助氏 (七)	梅田 宗吉氏 (三)	太田 茂實氏 (五)
藤田 亨介氏 (四)	井東 直三氏 (四)	石原 米太郎氏 (七)	梅田 宗吉氏 (三)	太田 七氏 (五)
藤田 泰三氏 (四)	伊藤 嘉祐氏 (二)	石本 音彦氏 (七)	今井 拾吉氏 (三)	太田 惣七氏 (五)
藤田 兵衛氏 (四)	伊藤 重義氏 (二)	石山 末松氏 (七)	今井 五六氏 (三)	太田 眞平氏 (五)
東 泰平氏 (五)	伊藤 祝逸氏 (二)	石山 末松氏 (七)	今井 文平氏 (三)	太田 眞己氏 (五)
熱田 謙治氏 (五)	伊藤 晴一氏 (二)	石渡 吉治氏 (八)	今井 雄七氏 (三)	近江 政太郎氏 (五)
天野 利三郎氏 (五)	伊藤 誠一氏 (二)	石渡 由太郎氏 (八)	今井 正一氏 (三)	岡崎 眞一郎氏 (五)
雨宮 良孝氏 (五)	伊藤 武男氏 (三)	泉 仁三郎氏 (八)	今村 信吉氏 (四)	岡田 儀一氏 (五)
綾部 利右衛門氏 (六)	伊藤 萬藏氏 (三)	泉 彌市氏 (九)	色川 俊二氏 (四)	岡田 源吉氏 (五)
荒井 惣太郎氏 (六)	飯田 彌三郎氏 (三)	泉 彌市氏 (九)	入澤 基二氏 (四)	岡田 光治氏 (五)
荒木 重義氏 (六)	飯田 彌三郎氏 (三)	泉 彌市氏 (九)	今村 信吉氏 (四)	岡田 庄作氏 (五)
荒木 忠雄氏 (六)	池田 久一氏 (三)	磯村 利水氏 (二)	今村 信吉氏 (四)	岡田 源吉氏 (五)
新井 章治氏 (七)	磯村 利水氏 (二)	磯野 七平氏 (九)	今村 信吉氏 (四)	岡田 庄作氏 (五)
新家 正次氏 (七)	磯野 七平氏 (九)	磯野 七平氏 (九)	今村 信吉氏 (四)	岡田 源吉氏 (五)

明治生命保險・臺北支部長

阿部 威氏

人材雲集する臺灣財界に在つて生保界の爲に氣を吐き、社業の達成を圖ると共に持前の事業的手腕を驅使して漸次據頭を重ね、今日の堂々たる勢力を扶植するに至つた人に我が阿部威氏がある。氏は大分縣士族本田嘉太郎氏の二男として明治三十一年二月に誕生、其後阿部廣吉氏の養子となり養父の後を承けて家督を相續したものである。大正十一年に慶應大學政治科を卒業し、すぐその足で明治生命保險株式會社に入り爾來神戸支店、臺北出張所等の勤務を経て昭和十四年に臺北支部長となつたもので、流石に斯界に於ける權威者の採配下にあるだけに業績いとも順當に運ばれつゝあり、然も尙飛躍の業容を示し業界の白眉として、その存在に益々光りを加へつゝある。斯道一筋を歩んで來たゞけに氏は豊富な體験の所有者である。それだけに氏の計畫は實に細かなところまでに眼が届く、したがつて杜撰といふものがない。用意周到といふ言葉が氏によく當嵌るのも、氏が堅實性をあくまで活かすことにある。

青木商店・社長

青木 幸平氏

氏は佐賀縣人青木初太郎氏の令息にして明治十二年に誕生した。三十年前より電氣用硝子の製造販賣を創め、現に株式會社青木商店並びに朝鮮電球販賣株式會社々長たるほか株式會社洪益銀行取締役として、その卓腕を顯はれつゝあり、士魂商才の錚々たることをよく一言に盡してゐる。ことほどさやうに氏の經營的手腕は縦横に驅使され、その牙城青木商店の社礎を今日在らしめてゐるのである。夙に業界の指導的立場に置かれてゐる人物であつたが、今や業界の長老であり、功勞者として亦は大立物などと呼稱されつゝ偉大なる存在となつてゐる。しかしその氏も最早四十餘年の業界生活を繰て、六十の老坂だ。しかし老驥なほ鞭鏢として青木商店始め他の實務各範を指導統率し、キビ／＼とした働らきぶりを示してゐる。斯くの如く主たる氏のエネルギーな活動ぶりを目のあたりにしてゐるので、社員従業員などは何れも我劣らじと精魂を傾けて業務に對し熱誠を吐露しつゝある。眞に勇將の下に弱卒なしである。

青木ロール製造所・社長

青木 運之助氏

株式會社青木ロール製造所と云へば市川市に於て絶大なる信用を博し、赫々たる父業をよく繼いで、あつばれ父子相傳の實を擧げてゐる。之も偏へに社長たる氏の誠實一途の經營ぶりの然らしめるところであり、また所謂暖簾が物を云ふのである。氏は近代的文化の洗禮を受けた新智識に造詣深い人物だけに、斯界に隠然たる勢力を扶植しつゝあることはもとより、先代に勝るとも劣らぬほどの人格は近隣の公共事業に盡力する事も尠らず、識徳兼備の逸材として同地方に於ける世話役的存在をなしてゐる。而して永年斯界を馳驅して來たゞけあつて、技術部門の指導といひ、事業上の手腕といひ確かに世評を裏切らぬものがあり、今日時局景氣の豪華なフットライトを浴びて國策線上に呼號しつゝあるのも、寧ろ當然のこと、云はねばならぬ。氏は千葉縣の産、青木勘藏氏の長男として明治二十九年十月に誕生、昭和八年父君退隱の後を承けて家督を相續したもので、鐵工業を營みつゝ青木ロールの社長として今日に及んでゐる。

山陽ビル・取締役

青木 作雄氏

下關市の青木作雄氏と云へば、同地きつての大家主としてよく知られてゐる。現に株式會社山陽ビルディング取締役の任にあるほか、同地市會議員として颯爽市政壇上にその勇姿をひるがへしつゝあり、若冠とは雖も既に俊才のほまれ高く、大器の英質は遺憾なく發揮されて昭和十二年四月には遂に逐鹿戦に奏効して、あつばれ衆議院の議席を獲得、錚々氣鋭の政客として一方の理論を指導するは勿論、今やその威名天下にあまねく、山口縣多額納稅者としての貴録と相俟つて近隣を壓倒しつゝある。氏が今日の如く政、財兩方面にかけて繁榮を贏ち得たのも歸するところ時運を觀るに敏にして進取性に富み、事業擴張にはあくまで積極的、一度成算を得れば果斷邁進、一として異算を見せぬ卓抜なる才腕家だつたからで、而も之に加ふるに春風駘蕩自ら人を感化せしむる謙讓寛容の徳を備へてゐたればこそである。氏は山口縣人青木平七氏の長男として明治三十一年二月に誕生、大正十二年に家督を相續したものである。

原合名・支配人

青木貞吉氏

横濱財界を牛耳りつゝある原富太郎氏が主宰せる原合名會社の名譽謀として、青木貞吉氏の令名は夙に高いた。氏は神奈川縣人青木金兵衛氏の長男として明治十三年十二月に誕生し、明治三十三年横濱商業學校を卒業後、原合名會社に入り副支配人を經て、昭和四年に支配人に就任したもので、同社生へ抜きの人材だけにその信望こそは實に根強いものがある。氏は純情多血、しかも術策なき氏は率直に正を正とし、邪を邪とする。そこに清廉な氏らしい一風格が偲ばれる。氏の今日の地位も決して且夕に達成されたものではない。そこには過去四十餘年の實業生活に於ける人知れぬ苦闘努力と、縦横に驅使された商才の賜物に依ることとが明らかに看取される。且つ人情に厚いので傘下の全員が氏の一舉一投足に従がつて意の如く動き、水火の勞を惜しまぬ精勵を致したこと、氏の事業運営が至誠一途の方針で顧客の絶對的信望を博したことに依るもので、腕の成功者であると同時に徳器を成就せしめたものと云へる。

鹽釜瓦斯・事務取締役

青木仁三郎氏

鹽釜瓦斯株式會社事務取締役を始め、新潟瓦斯株式會社取締役兼支配人、三條瓦斯、新發田瓦斯株式會社取締役等の任にある青木仁三郎氏こそ文字通り斯界の權威者として類ひなき好評を博しつゝある。氏は岐阜縣人青木幸治郎氏の二男として明治十八年五月に誕生、同十九年に青木ひな子氏の養子となつて家督を相続したものである。慶大理財科を卒業後實業界にその驥足を伸ばしたものであるが、氏の英才はこの時局によく善處して絶えず業界をリードして行くかの觀がある。その年齢から云つても實業家として所謂あぶらの乗り切つた時期であり、手腕も十分に上に識見も更に加はり、人格は益々圓熟を加味してきてゐるから、典型的な大家業家として今後、多大な期待がもたれてゐることも、至極うなづけるわけである。氏は聰明にして瀟灑、斯界稀に見る君子的逸材なるが故に時局下に於ても善處してあやまることなく、よく國力の振興充實に努力して、彌が上にも信頼の度を高めつゝある。

明石製作所・社長

明石和衛氏

株式會社明石製作所の社長として、颯爽時流に掉さしてゐる明石和衛氏は機械工業界の中堅的存在として夙に聲名を馳せてゐる人物。同社長のほか屋井乾電池、山本商會各(株)監査役として、刮目すべき多くの成果を結んだものだ。明石製作所は事變以來、益々好調を加へて職場の新築、諸機械の大増設を成して只管國策の線に沿ひつゝある。これを主宰する氏、固より時局精神の確固たる人物手腕もあり、力柄もあり加へて豊富なる經驗と識見とがある。明治二十一年八月に明石言語氏の三男として生れた氏は生粋の江戸ツ子である。學校は東京帝大工科機械科、大正二年度の卒業生で、これまた生粋のエンヂニアだ。今や我が國は古今未曾有の興國運動の歴史的段階に入り、産業界はみな等しく報國の意氣に燃え立つてゐるが、この秋軍需工業界にこの人あるのは、なんと云つても大きい強味と云はなければならぬ。兎に角、氣宇瀟灑、小事に拘泥せず、しかも大きい布石の陣を見せつゝある氏の前途は洋々たるものだ。

彌榮商事・社長

淺井伊兵衛氏

氏は京都の人、先々代伊兵衛氏の六男で、いま業界に於て名譽高い淺井桑三郎、上阪伊三郎兩氏の弟に當る人だ。明治二十四年五月生れ、同四十四年に京都府多額納稅者たる兄、先代伊兵衛氏の養子となつたが、昭和七年に至り家督を相続して前名六三郎を改め、襲名したのである。現時は彌榮商事株式會社社長、及び株式會社淺井商店取締役として淺井家の家運を背負つて立ち、一路躍進の道を辿りつゝあるも、氏の辣腕を裏書するものとして定評あるところだ。また氏は、國粹主義者としても知られ、國を思ひ、愛する心は實に篤い。社務を執掌するに當つては精勵格闘、社員を督勵するにのぞんでは温情朗朗、これこそ社業を隆盛に繁榮に導く所以のものであらうか、氏の人爲のほどよく窺知出來得て床しく、高德の深さには全く敬服に價するものがある。多才の人、實力者たる氏が、京都財界の推進力として、また廣く地方業界の指導力として活躍してゐるは、實に頼もしくまた力強き限りである。

日産自動車・取締役

淺原源七氏

事業界に於ける驥足として名譽を馳せてゐる淺原源七氏である。その足跡も頗る多岐に亘り現在日産自動車、自動車工業、大阪鐵工所、奉天飛行機、日立電力、日産水産研究所等々各株式會社取締役を始め更に餘力を驅つて滿洲飛行機製造、滿洲重工業開發各株式會社理事等を兼て千兩役者の如き華々しい才腕を示しつゝある。氏は大阪府人尾宅休七氏の三男として明治二十四年九月に誕生、其後先代安太郎氏の養子となつて家督を相続したものである。大正四年東京帝大理學部化學科を卒業した俊才で、學究的肌合を多分に持つだけに、研鑽を積む熱意には驚くべきほどのものがあり、多年の努力も遂に報わられて今や理學博士の學位は燦としてその頭上に輝きつゝある。由來事業家として眞に手腕を發揮するのは五十の坂を過ぎてからと云はれてゐるが、事實今までの氏の事業的手腕を窺ても未だこれからだと云ふ感があり、この言葉を如實に裏書するものとして、十年餘の氏の飛躍こそ洵に知り知れぬものがあらう。

共立不動産・常務取締役

淺野保之氏

時局事業界の異常な躍進期に直面してゐる今日、その中に身を投じて活躍しつゝあるのが淺野保之氏である。氏の經營手腕は世の事業家には見られない卓抜な閃めきを持つてをり次々と新事業の開拓に縦横の智略を驅使しつゝあるところ、實に鋭敏なる頭腦の所有者たることをハッキリと認識させるほどのものがある。而して意欲の赴くところ實に奔放、現に息のかゝつてゐる事業だけですら十種に近きを數へてゐる。氏は東京府人淺野嘉吉氏の二男にして明治十九年一月に誕生した。大正元年東京外國語學校を卒業して三菱鑛山部に入り兼二浦製鐵所に勤務したが、同十一年紀州徳川家の朝鮮事業經營を擔當して業績をあげ、昭和九年には南青産業株式會社常務取締役に就任、更に同十年に至つて共立不動産株式會社常務取締役に擧げられたもので、同社のほかに光陽金山株式會社常務取締役、日本羽毛製品、全羅鑛業各株式會社監査役、平北雲田工業合資會社無限社員、鑛山商事淺野事務所々主として萬丈の氣を吐いてゐる。

日本舗道・社長

淺利三郎氏

氏は岩手縣の産、淺利杏坪氏の三男にして明治十五年十一月に誕生、同三十五年先代の令兄寛氏の養子となつて同三十六年に家督を相続した。明治四十二年東京帝大法學部獨法科を卒業後、直に文官高等試験に合格しそれより三重縣屬同縣試補、山形縣事務官同理事官、大阪府理事官、茨城、高知、新潟、北海道各警察部長、富山縣内務部長、香川縣知事、朝鮮總督府警務局長、栃木縣知事等に歴任したが、當時の偉功は從四位勳三等の位階がよく物語つてゐる。斯くして昭和六年十二月勇退するに及んで現在の如く日本舗道株式會社長並びに東洋セメント工業株式會社取締役として、華々しく實業界へと再出發したのであるが、流石に官界で鍛え上げただけのことはあつて、業界に於ける見識もあり、事情にも敏く殊に社會の表裏に對しては實に鋭い批判力を有し、洞察力また誤ることがない。日本舗道が矢繼早やに目覺しい發展ぶりを示してゐるのも、氏の經驗が着々と行はれつゝあるからで、以てその手腕は推して知るべしである。

赤阪鋼線製作所主

赤阪良太郎氏

近時關西實業界にめきめきと擡頭してきた赤阪良太郎氏は正に意志の人とも云ふべきであらうか。氏は明治二十八年三月に、大阪府人赤阪福松氏の長男として出生した。青雲の志を抱いて業界に身を投じ、東洋製鋼、大阪製鋼各勤務を経て刻苦精勵、志遂に成つて赤阪鋼線製作所を昭和二年に創立したのであつた。氏は實地から叩き上げた優秀なエンヂニアだが、そこには不屈不撓、實に鋼鐵の意志を以つて築き上げた生活が横はつてゐるのだ。事業の經營は天賦の才能如何によつて、伸びるだけは伸びるものだが、技術家となるには單に緻密な頭腦といふやうなものばかりでなく相當且深刻な勉強が絶對必須の條件だ。氏は獨學よく優秀な事業家となつて今日の大をなしたが、それも一は氏の有する技術の賜といつてよい。斯業に對する明敏な洞察力と經營力の素晴しさは、他に一寸比類を見ないところのものである。これから時局下産業界に活躍して、どん／＼進出する實力派の偉材はまさに赤阪氏であらう。

對馬沿岸商船・専務取締役

朝鍋 信一氏

北九州玄海灘の對馬島は、古來から半島及び大陸に對する連絡地として、貿易、軍事上の要港となつて居るが、同島の嚴原港は、かの日本海大海戦にはわが無敵海軍の策謀據點となつて歴史に不杯の名を止めたのであつた。わが朝鍋信一氏は同港を據點として、北九州海運界に活躍する青壯騎士であるが、流石に氏の血には古代日本、黎明期日本、元寇時代日本、明治時代日本と、三千年の傳統を有する對馬武士の正統が流れてゐるだけに、その生々たる意氣は斯界を呑むの概がある。氏は現在對馬沿岸商船専務取締役たる他、九州郵便常任監査役、九州商船監査役に任じてゐるが、何んと云つても嚴原港は豊岐、對馬と云ふ海産豊かな島々を擁し、且つ九州、半島、滿洲、北支の連絡要衝であるから、時局の海運景氣の潮流に乗つて、氏の關係會社は隆々たる業績を挙げつゝある。氏は明治二十六年二月長崎縣士族朝鍋政助氏の長男として誕生、大正元年家督を相續した。同三年長崎高商を卒業して海運界入りしたのである。

蘆田工業所・社長

蘆田 亨介氏

わが蘆田亨介氏は關西製作界の習俗として明星の如き光芒を放ちつゝある巨材であるが、氏は事業家としてよりも、むしろ學界の一權威として斯界に知られてゐる。氏は現在蘆田合名代表社員として家礎を固め、蘆田工業所社長並びに蘆田製作所取締役として製作界に打つて出でゐるが、人格高潔にして學識兼備はり、加ふるに經營の才能は他の追隨を許さぬ秀抜無比なるものがあるから、氏の事業は部下の絶對的信賴を得て全員打つて一丸となつた努力を續けて居り、従つて技術的にも優秀適確の製品を出し、賑々たる業績を示して業界を斷然壓倒しつゝある。氏は明治十六年四月兵庫縣人たる蘆田惣三郎の二男として誕生したが、同四十四年令兄健氏方から分家して一家を立てた。同四十三年東京帝大工料土木を卒業し、直ちに東北帝國大學教授となり、學界にその將來を矚目せられてゐたが、大正三年退官して實業界に身を投じた。氏の令弟英太郎氏は現在蘆田工業所取締役として、氏のおよき女房役となつてゐる。

東洋ファイバー・取締役

東 恭平氏

わが東恭平氏は帝都實業界の長老格として聲名噴々たる好紳士である。氏は現在東洋ファイバー、帝國堅紙各取締役に任じてゐるが、前者のファイバーは棉花の極度的なる國內消費制限に依つて、時代の寵兒として今をときめく股賑を極めて居り、後者の堅紙はこれまた薄鐵板其他の代用品として、從來の用途の他に新販路を開拓しつゝあるから、その盛況は驚異的なものがあり、十二分に將來性が待望されてゐる。氏はまた大當鐵業所監査役にも任じてゐて、鐵業界にも知られてゐる。氏は明治十六年十二月の誕生で、新潟縣士族横新治郎氏の令弟に當るが、滋賀縣人たる先代故帝國堅紙社長東虎二郎氏の養子となり、昭和十一年家督を相續した。先是明治四十四年東京高商を卒業して實業界入りしたが、流石に先代に見込まれて養子となつた位の人物であるから、見識才腕に秀抜なるものがある。氏は大正九年臺灣製糖東京出張所主任となつたが、現在も同出張所員として在任してゐる。時局多端の折柄切角氏の自重を祈る。

日本製糖所・社長

熱田 謹治氏

製糖事業が統制國策の重要産業であると共に、製糖事業も亦其の一部面を擔當して居ることは勿論のことである。日本製糖所社長としての熱田謹治氏は若くして既に風雲を望み、郷里成田中學卒業後逸早く朝鮮に渡り、奮闘努力、獨力を以て熱田商會を設立して其の運営に當り後又、朝鮮製粉會社を創設經營し、自ら陣頭に立つて三面六臂不眠不休の激闘をなし、其の業績頗る擧る。大正十四年には日本製糖合名會社を建設し極力其の發展に向つて力闘をつゞけること五年昭和四年資本を増額株式會社に改組し、之が社長として縦横の手腕を發揮し、愈々隆運の今日を招來した氏は千葉縣人、熱田聚玉氏の二男にして、明治十七年の出生、徒手空拳奮然として挺身、當時尙未開であつた朝鮮に進出し、遂に功を收めた。氏の不撓の意志氣魄眞に敬仰に價するものがある。同時に業界に於ける傑物として今後多くの期待を持たれてゐる。佐久間製菓、同製品販賣の監査役、飴工業組合に理事長として信望を擔つて居る。

朝鮮都市經營・取締役兼支配人

蘆 高 泰 三氏

朝鮮半島に於ける産業、文化の發達よりは、近時實に目覺ましきものがある。現時、朝鮮都市經營(株)取締役兼支配人、釜山支店長ある蘆高泰三氏は、五十一才の働き盛り、正に壯年氣鋭といふ人物である。近來頗る圓熟した統帥ぶりを示して益々意氣軒昂、時局性を盛つた俊英さもあつて、名聲いやがうへにも高まつてゐる。氏は奈良縣の人蘆高寅三氏の令息で明治二十三年の生れ、東京帝大法科英法科に學んだが、大正八年同校を卒業するや直に三井物産へ入社、營業部勤務となつた。大正十一年の四月には東洋拓殖へ轉じて才腕を認められ、大田支店、平壤支店次長を歴任、また東拓關係事業たる大連聖德會の業務にも従事して大いに業績を挙げ貢献したのであつた。昭和十一年には文炭礦(株)取締役に就任となり現時は同社の搖ぎなき礎石として光彩を放つてゐるも氏の苦闘史を飾るものかと思へば誠に喜ばしいことである。又、半島經濟界に就ては極めて明るく明敏俊秀、腕あり氣概ある有能の士だ。

蘆森製綱所・社長

蘆森 武兵衛氏

わが蘆森武兵衛氏は關西に於ける輕工業界一方の雄として、巨星の如き輝きを見せてゐる逸材である。氏は明治二十年九月大阪府人たる先代武兵衛氏の長男として誕生したが、昭和四年家督を相續すると共に前名武治を改めて襲名した。先是明治四十一年大阪高商を卒業し、祖業の綿綱、組紐製造業を營み乍ら、輕工業に乗り出したのである。現在氏は蘆森製綱所社長の椅子に就いて名采配を揮つてゐるが、同社の事業は専ら紡織用其他の輕工業機械に使用せられる傳導用木線綱、紡織用紡紗、及びテーブ、組紐等の製造で、その製品は他者の追隨を許さぬ優良品であり、また競争相手の同業者も割合に寡いから、同社の業績は隆々として向上一路を辿つてゐる。また氏は太洋フェルト、高橋製綱所各取締役に任じてゐるが、同社共原料毛其他の制限を受け乍ら、一方輸入品に對する制限が強化されてゐる今日であるから、國産として相當の成績を挙げつゝある。猶ほ氏は多年の功に依り昭和十二年紺綬褒章を下賜されてゐる。

天野商店・社長

天野 利三郎氏

いま關西事業界に赫々の名聲を轟かせてゐる天野利三郎氏は如何なる人物であらうか。著名なる氏を、こゝに採索してみるとしやう。氏は大阪府天野利兵衛氏の三男にして明治三十二年十月の生れ、昭和六年に家督を相續して前名三郎を改め襲名した人で、學校は關西學院高商部、大正十一年の卒業生である。現時は天野商店(株)社長、天野合名代表社員として銅地金及木炭材木商を營んで、陸軍、諸官衙に需品を供給し、傍ら不動産有價證券買賣業を兼ねて旭日昇天の偉容を示してゐる。またこのほか、日本化學機械製作所、舞子土地各(株)社長、日本郵船(株)監査役としても大いに腕をふるひ、嚴父利兵衛氏を輔けて天野家の躍進に拍車をかけてゐる。氏はまた若きスポーツマンでスポーツマンシップを堅持し、熱烈な日本主義者としても業界に異彩を放つてゐるが、今東亞の大陸に躍一躍大いに飛躍せんとする産業日本、舉國一致の時局下にあつて同志勃々逞ましい感激に燃えてゐる。「明日」を擔ふ颯爽の士は正に天野氏であらう。

日本塗料・常務取締役

雨宮 良孝氏

氏は、明治四十四年東京帝大工料應用化學科を卒業した秀才であつて、實業界に身を投じ各方面に驥足を伸したものであつたが、當時の應用化學方面の社會的レベルは至つて幼稚なもので、氏の該博な知識に對しても一般的に認識不十分は免れなかつた。氏は先づ此の方面の開拓に向つて努力を傾注し、奮闘し、世間の注意を喚起した。黎明日本が第一次世界大戰を契機として世界的存在を強化し浸々として文化の大進展を見るに至り、思想界にも事業界にも純日本主義的傾向が顯著となり輸入防遏の聲も高まり、化學工業の發展も亦愈隆昌となつたのである。氏の永年の獅子吼が實現される秋に遭遇し氏は會心の笑を洩らした事であらう。氏は夙に塗料の製造につき研鑽を積み此の方面に於ける權威者であり、現在日本塗料重役たる外、旭硝子、旭ラツカー製造所長として、その蘊蓄を擧げて生産擴充に餘念がない。時局下塗料は頗る難關に逢着して居る狀況之を打開するは氏の如き有材の士に待つ外はない。

綾部隆昌・社長

綾部 利右衛門氏

氏の先代利右衛門氏は、川越商業會議所會頭、第八十五銀行、川越貯蓄銀行各頭取、飯能銀行取締役會長等を勤め地方財界に貢献する所頗る多く、名望高く西埼玉實業界の巨頭であつた。氏は明治二十一年十月、その長男として出生し昭和七年家督を相續し前名恒之助を改めて襲名す。氏は夙に實業界に入り岳父開拓の地盤の上に立ち、活躍すること多年、剛毅精神、烈々たる闘志は其の才幹と相待ち斯界の認識を深め、先代利右衛門氏の後繼者たるの實績を示し地方財界の牛耳を握つて堂々たる躍進振りを示し、現在川越市商工會議所常議員に推舉せられ麻利、綾部隆昌各社長第八十五銀行、川越貯蓄銀行、武州瓦斯會社に各相談役として、長期的存在である。然もか春秋は氏の將來を待つこと豊であり、一段の飛躍を望むこと切實なり。今や圓熟練達の域に達し、其の信望高く長敬の的となつて居る。氏は園藝に興味深く自ら鋏を採り種を求めて丹誠し盆裁の如きも數多く、其の殆ど全部が氏の手によつて培養せられてゐる。

荒井組・社長

荒井惣太郎氏

土木建築請負業者として帝都の中心地に居を占め、斯業界に堂々と乗り出し華々しい活躍をして居る荒井組社長荒井惣太郎氏こそ實力主義、努力主義の代表として推賞を、べきであらう。氏は明治十六年、東京市荒井利兵衛氏の五男として生れ大正十四年兄又三郎方より分家して獨立したのであるが、夙に斯業に志し、市内一流處に實地見習として粒々の辛酸を嘗めたものである。其の飽くまで剛膽な氏の性格は水火も辭せざる勇氣に満ちた困難に堪える事など物の數ではなかつた。かくて各所各方面の試験を経て磨かれた氏の實力は非凡を極め烈々たる闘志を以て獨力業界に出現したのである。既に定評ある如く業界は猛者揃ひである。その真只中に健腕を揮ひ努力を續け天晴れる地位を築いた氏の並々ならぬ苦心と奮闘とは特記されねばならぬ。氏は單なる營利主義者でなく、契約上の義務履行に關しては最善を盡し缺損を相手方に要求する事など露程もないといふ義侠活潑の士であり其の信用の厚いことも故ありといふべし。

理研紡織・社長

荒木重義氏

氏は、明治二十八年一月、兵庫縣荒木卓三郎氏の長男として生れ、大正八年東京帝大船舶工學科を卒業した俊才である。永年官吏生活をしたにも拘らず實業界に於ける手腕力量は驚異的であり出藍の名を譲はれて居る。氏は最初通信省に入り管船局に勤務、神戸海軍部上海領事館付、東京海軍部に歴任したが大正十五年退官し、帝國海協會、關東廳海務局、中華民國政府海軍検査員等を勤務す、昭和八年理研ピストリング大阪出張所長に就任、次いで、本社營業部長に轉じたのであるが、昭和十二年、ピストリング取締役に擧げられ翌十三年十月、理研特殊鐵鋼に合併、理研重工業と改稱せられ氏も亦其の取締役に就任し、現に理研直營の殆ど全般に關係重役として重要な地位をなして居る。著實勤勉にして明徹鏡の如き氏の手腕が今日を招來したことは論ずる迄もない。精力全盛の氏が渾身の力を傾けて活躍し、重責に酬ゆる良心的企圖は、春秋豊かな氏の一段の將來性を約束されるのであらう。

國際汽船・常務取締役

荒木忠雄氏

今次の歐洲戰は第一次戰とは國際事情、經濟關係の趣きを異にしてゐるから、第一次戰當時の如く船成金を簇出させる宇頂天景氣を現出させるやうなところ迄には至らないが、それでもわが海運界は近來にない活況を呈してゐて、流石は海國日本の譽れを海外に輝せつゝある。荒木忠雄氏は前大戰前からわが海運界に在つて幾多の尊い經驗を積んで來た團將として、その名は斯明界に星の如き燦たる光輝を放つてゐる。氏は現在國際汽船常務取締役に就任し、同社の樞機に參劃してゐるが、その卓越せる識見、披群なる經營手腕は夙に定評ある通りで、同社は妙諦を極めた氏の采配下に賑々たる業績を擧げつゝある。氏は明治二十一年三月福岡縣の士族たる荒木純一郎氏の三男として出生した。同四十五年神戸高商を卒業して鈴木商店に入社したが、第一次歐洲戰前後に同社船舶部主任、帝國汽船常務取締役等を歴任して、大正十年國際汽船に轉じ、果進して現職に就いた。時局の前途愈々複雑多端の折柄、切角氏の自重を祈る。

東京電燈・社長

新井章治氏

本邦電燈電力界の王者東電は小林會長兼社長が後身に路を開く爲めの優遇に依つて、愈々待望の副社長新井章治氏の社長昇格が實現した。氏は東京電燈の生え抜きとして叩き上げて來た人傑であるが、小林社長が入社して伏魔殿とまで稱された同社の革新に乗り出すや、社長の總參謀として副社長の樞席に就き、今日の再建東電の爲めに萬全の努力を傾倒したもので、氏の社長就任に對しては何人も異議なしで同社將來のためにも誠に慶賀すべきことである。氏は東電社長の他、東京灣電氣代表取締役たり、また東電證券、王子電氣軌道各取締役等に任じてゐるが、之等の諸社が氏の名采配下に堅實な業績を擧げつゝあることは言ふまでもない。氏は明治十四年十二月埼玉縣人新井健吉氏の長男として生誕したが、同三十八年早大政經科を卒業後家督を相續した。夙に東電に入り、營業所長、取締役、常務取締役兼庶務部長等を経て、昭和十二年副社長に擧げられ、本年小林社長が優退すると共に其後を襲つたものである。

新家銀行・頭取

新家 正次氏

嘗て映畫の都で鳴らしてゐた蒲田區は、今や帝都西南方の工業重要地帯と化して了つたが、何んと云つても東京灣頭に位置して地の利を得てゐるだけに、その繁華振りは斷然他を壓して、新進工業都市として萬丈の氣を吐きつゝある。わが新家正次氏は令兄熊吉氏と相並んで、蒲田を據點として廣く實業界に颯爽と雄姿を活躍させてゐる逸材である。氏は明治二十四年十月石川縣人先代熊吉氏の二男として生誕したが、大正九年令兄熊吉氏方から分家して一家を成した。大正八年令兄が新家工業を設立するに當つて之に參劃し、現在同社事務取締役として社長熊吉氏のおきコンビたり、また新家銀行頭取として同行の主權を握つてゐる他、山中觀光土地取締役、淺野川電氣鐵道、大同工業各監査役として名采配を揮つてゐる。令兄熊吉氏は新家工業、大同工業、東京チェーン、山中觀光土地各社長として夙に聲名高きものがある。氏は當年とつて五十歳に達したが、正に實業家として脂の乗り切つた男盛り働き盛りの期である。

日本製罐・常務取締役

有賀松夫氏

わが輸出貿易として罐詰食品品は大きな役割を果しつゝあるが、その罐詰用の製罐業はメーカーの文化的事業の一部門として、近來頗る隆盛に趣きつゝあるところ、歐洲再戰の勃發大展開と來たので、このところ製罐界は一大活況を招來してゐる。勿論時局下の統制令に依つて國內向は強度の制限を受けてゐるが、輸出向の活況はこの打撃を緩和し餘りあるものがある。わが有賀松夫氏は製罐界に明星の如き光芒を放ちつゝある青壯實業家であるが、その闘志滿々たる雄將振りは斯界瞻目的となり、將來を待望せられてゐる。氏は現在日本製罐常務取締役に就任し北日本の水産罐詰界と、また滿洲製罐事務取締役に就任して新興滿洲國斯界に活躍してゐるが、當年とつて四十四歳の張り切つた英氣と、妙諦を極めた才腕とによつて、兩社共に賑々たる業績を擧げてゐる。氏は明治三十年四月長野縣人有賀重氏の三男として出生、昭和六年令兄篠夫氏方から分家した。大正九年水産講習所を卒業、現在函館商工會議所議員に推されてゐる。

日東セメント・常務取締役

井口重次氏

日東セメント株式會社常務取締役に就いて、業界に井口重次氏の存在は大きく光つてゐる。氏は京都府井口乙藏氏の四男で明治二十一年七月に誕生、大正五年に北海道帝大農學部を卒へ同七年に淺野セメント會社に入り技術部作業課工場長となつた變り種である。そして遂に同社の常務取締役に就任して大黒柱的存在を顯はるゝに至つたものである。氏は見るからに濃厚なる好紳士であつて頭腦は明晰、おのづから備る風格も氏の凡庸ならざるを證するに餘りあるものと云へるのである。氏はその境遇から云つて恵まれた寮圍氣に在るにもかゝらず、不撓不屈の推進力は安逸をむさぼることをこゝろよしとせず、國家的觀念のもとに致々として精進をつゞけつゝあることは、吾人の畏敬に堪へざるところであり今後に於ける氏の活躍こそは、吾人のもつとも期待するところなのである。年齒の點から云つてもその餘裕たるやまことに裊々たるものでかならずや業界に裨益するところのものも甚大なるものがあらう。

井田商店・代表社員

井田 榮造氏

氏は三重縣人別川由兵衛氏の二男であつて明治七年六月に誕生、その後先代一平氏の養子となつて同十一年に家督を相續したのである。夙に實業界の人となりその所信に向つて一路邁進、井田商店及び井田合名會社を主宰しつゝ、尙も驥足を驅つて幾つかの會社の重役をも兼てゐるのである。營々として撓みなき努力もさることながら、氏獨特の八面玲瓏ぶりは縦横に發揮されたるその智略と相俟つてトク／＼拍子に財界に躍り出したもので、齡六十を越してゐるとはいふものゝ全身にみながるエネルギーは今後更に檜舞臺に登場しつゝある人物としてふさはしい進展を見せることは、最早何人とも疑ひをはさまぬところである。氏も亦その心意氣に燃えつゝ、業務の刷新並びにその向上に對しては、いつに變らぬ努力を示してゐるのであつて將來も必らずや惠まれることであらう。幾多の事業を手懸にかけつゝ、その督勵に大童の氏とて、業成りし今日過去を振向けば自づからそこにはほゝ笑ましきものが現はれるであらう。

伏見酒造・代表取締役

井上 信太郎氏

現大阪木材界で指折り數へられる敏腕の人井上信太郎氏は、大阪の仁井上松太郎氏の二男として、明治二十一年四月に生ぶ聲を上げたのである。學歴はといへば、慶應大學理財科に學び、明治四十五年卒業した。氏は在學當時早くもその才抜んで、後の大成を約束されてゐたが、果せるかな事業界に身を投ずるや斷然他を制し、今日にみる確實無比なる地盤を築き上げたのであつた。その奮争史は大正七年に兄松次郎氏より分家したに初まり、木材商として著々と才腕の程を示し、自己の所信に向つて一路邁進した。現在では木材ばかりでなく酒造方面にも盛に活躍して頗る鼻息が荒いが、精神な氏の一面が窺ひ知られて頼もしき限りではある。曰く伏見酒造(株)代表取締役、大阪木材土地(株)専務取締役、井上松商店木材部(名)代表社員であり、また大阪木材協會理事として信望非常に篤い。卓抜なる才幹と併せ持つた見透しのきく商略とは何といつても氏の強味であり、これあつてこそ廣く各界から期待されるのであらう。

大阪魚・専務取締役

井上 德兵衛氏

華城大阪の海魚問屋の中で小徳といへば古い暖簾を誇る老舗であるが、當代德兵衛氏は本年四十一歳の青年實業家として斯界に重きをなしてゐる英才である。氏が小徳商店を繼承したのは大正四年のこと、未だ十六歳の昔ならば元服したばかりの若冠時であつたが、生來勝氣で麒麟兒の譽れ高かつた氏は、銳意家業に身心を打ち込み、祖業をして彌々繁榮せしめ、終に今日の大小徳の礎石を築き上げけのであつた。現在氏は大阪市の豪所をあづかる魚市場會社たる大阪魚専務取締役として、キビ／＼した名采配を揮つてゐるが、永年に亘つて斯界で鍛え上げて來た才腕は、明快なる頭腦の冴えと相俟つて賑々たる成果を擧げ、業界を驚嘆せしめてゐる。また氏は日本動産火災保險監査役として噴々たる聲名を馳せつゝある。氏は明治三十三年六月大阪府人先代德兵衛氏の長男として出生、大正四年家督相續と共に前名義三を改めて襲名した。元治元年生れの祖母エイト刀自、母堂すへ刀自共に健在で、氏の孝養は聞え渡つてゐる。

東洋鐵網製造・専務取締役

井上 正幹氏

帝都に於ける實業界の長老としてわが井上正幹氏の聲名は夙に知られてゐるところである。氏は元來が技術家だけにその明晰なる頭腦に加へて、經營手腕も永年の體験に依つて練達湛能の域に達して居るし、その上名家の出だけに人物は鷹様寛達の上であるから、諸人の敬慕の的となつてゐる人格者である。現在氏は東洋鐵網製造専務取締役並に日本モーター工業取締に任じてゐるが、兩社共に時局産業界の花形として隆々たる業績を擧げつゝある。氏の嚴父たる篤太郎翁は本邦實業界の元老格として、また政界にも令名高く、多數の會社の社長、重役と現任してゐるが、富士精創製の功に依り、藍綬褒章、紺綬褒章、同飾版を下賜されてゐる名士である。氏は翁の二男として明治十三年出生、同三十九年東大工科應用化學科を卒業し、富士瓦斯紡績、日本染料各技師を経て、大正十一年東洋木材材績取締役兼支配人並技師長たり、また東京電球取締役に任じてゐた。猶ほ大正八年には化學工業視察のため米國に出張してゐる。

東京無線電機・専務取締役

井上 守義氏

愛媛縣の生んだ英才井上守義氏は、明治十七年九月に井上周三氏の二男として生れたのである。大正五年に兄五郎氏より分家し、夙に業界にあつて名聲高く聞えた人である。現時は東京市蒲田區に在往、東京無線電機株式會社専務取締役及び、日本防水布株式會社取締役として疎腕ぶりを發揮、社内の良き指導者、社員よき模範者として尊敬の的たり、また慧眼のよき事業家としても専ら評判いやたかく、社員達はもとより數多き同業者の人々よりも崇められてゐる。氏の經營手腕を檢討するに、先づ第一の特長は氣略縦横、よく時流を見透しうまくチャンスをキャッチすることであらう。第二には、持前の緻密なる才能をして創らしめた計畫性の堅實さであつて、これは正に氏の經營陣の堅壘とも誇るべきものであらうか。斯様に類稀なる經營手腕あるが故今日の榮位を贏ち得たのであり、またこれある故に、春秋に富むしかも將來性を約束された大きな前途が暗示されてゐるものであらうと信じられる次第である。

小島鐵工場・社長

井上 米三郎氏

群馬縣下實業界の重鎮としてわが井上米三郎氏は赫々たる聲名を馳せつゝある巨豪である。氏は明治十八年二月群馬縣人小島彌平氏の三男として生誕したが、同縣人井上保三郎氏の養子となり家督を相續した。流石に先代に見込まれて長女ゲン女の女婿となつた人だけに、人物は豪快にして俊敏なること筆の如きところあり、またその半面には諧曲を嗜むといふ裕々たるところもある大人物で、全く端倪すべからざるものがある。現在氏は小島鐵工所社長並に井上工業専務取締役として、メーカー界の第一線に呼號しつゝあるが、兩社共に氏の名采配は遺憾なくその妙諦を發揮してゐるから、賑々たる業績を示して斯界美望の的となつてゐる。また氏は高崎板紙、高崎證券各監査役としても、噴々たる好評がある。氏の令弟小島喜六氏は小島電氣製鋼社長其他の重役として令名高き人である。本年とつて五十八歳の氏は人格も愈々圓熟境に達したが、ゲン令夫人との間には二男四女の子寶があり、幸福な家庭の慈父となつてゐる。

井上好三郎商店・代表取締役

井上好三郎氏

わが井上好三郎氏は關西實業界の著名として雷名轟き渡る巨豪である。氏の牙城は言ふまでもなく華城有數の商會社井上好三郎商店であるが、氏は代表取締役として同社を主宰し乍ら、尼崎製鋼所の大株主として同社の取締役に任じてゐる。尼崎製鋼所は昭和七年の設立であるが、時潮に乗つて十二年度の如きは利益率二十割餘、配當五割と云ふ驚異的な業績を示したが、今次大戦の勃發以來屑鐵の輸入が著しく窮屈となつた爲め、以前程の成績は見られないが、それでも前期は一期五分の配當をなして居り、また利益保留、消却年率も確實で、他社に比して繰越金も豊富であるから社礎は全く堅實である。氏は永年に渡つて實業界で鍛え上げて來た才腕があり、加ふるにその俊英なる見識を以つて堂々の陣を張つてゐる。氏は明治十四年六月滋賀縣人守田藤吉氏の二男として出生したが、同三十年大阪府人たる先代コウ女の入夫となり、同三十九年家督を相續した。時局多端の折柄切角氏の自重を祈る。

井上洋行・社長

井上 良一氏

若き事業家、敏腕の士として聞え高き井上良一氏は、現時株式會社井上洋行社長、井上商事株式會社代表取締役として活躍してゐる。氏の略歴をこゝに記すと、明治二十九年の五月に兵庫縣人田中菊太郎氏の長男として出生したのである。後に井上常次郎氏の三女壽枝子女史と縁組みをなし井上家の養子となつたが、養父常次郎氏の信任頗る篤く、これをもつてしても氏が、如何に人格者であるかが窺知出來得やうと思ふ。また業界に於ては「明日」を擔ふヤング・ゼネレーションとして期待全く大であり、氏、またよくこれに健闘をもつて應へてゐるのも敬服に價することだ。謹嚴實直なる養父の業を繼ぎ井上洋行の名社長として同社の運営をよくしてゐることは前にも述べた通りであるが、これと共に氏の溫容風雅なる物腰は、接する人をして等しく心服せしめ信望深いのも、この人の天賦の徳ともいふべきか。諧曲、讀書の趣味も好もしく、今後の飛躍ぶりが各方面から注目されてゐるも宜なるかなと頷かれることだ。

大阪合同・社長

井村健次郎氏

わが井村健次郎氏は大阪合同社長として関西實業界の重鎮たり、その聲を照らしてゐる巨豪である。氏はその明快にして豪腹なる典型的な實業家タイプ、閉眼を得ては花苑に出て園藝を樂しむといふ風雅味も豊かである。従つて氏は六十歳に達した今日でもなほ若人を凌ぐ健康を有してゐるから、事業に當る意氣もまた颯爽感を帯びてゐて、部下はもとより諸人の敬仰を一身に集めてゐる。現在氏は大阪合同社長たる他、日本クロス工業取締役並に新舞鶴棧橋相談役に任じてゐるが、日本クロス工業は海外輸出向けの織物を生産して居り、時局下に於ける外貨獲得の爲めには國家的に大きな貢獻をなしてゐる。氏は明治十四年一月兵庫縣人井村周吉氏の二男として出生したが、同二十四年令兄彌吉氏から分家して一家を成した。猶ほ氏は子女無きため令兄の二男格一氏及び長女文嬢を養子に迎へて、後継者としてゐる。

井本義亮氏

十四年度下半期は石炭配給統制が酷烈を極めた爲めセメント界は各社共に大打撃を受けたが、本年度は政府の協力もあつて石炭増算計畫が順調に進捗しつゝあり、殊にわがセメント製造は石炭の原産地たる宇部の大工業地帯を本據としてゐるだけに、一層石炭不安の點は淡らいだ譯けである。同社は本邦セメント界でも出色の大會社で渡邊社長以下お歴々が重役陣を形成してゐるが、中堅層もまた有爲の人材が集つてゐる。わが井上義亮氏はその中堅陣中の逸材として囑目せられてゐるが、現在氏は同社の東京出張所長として帝都課題の重職に任じてゐる。氏は明治二十四年三月の誕生で、山口縣人井本彌三郎氏の三男である。大正二年山口高商を卒業して、東洋紡績に入社したが、同十四年宇部セメント製造に轉じ、昭和十年現職に任ぜられた。斯界の前途はなほ樂觀を許さなから、産業發展のためにも亦軍事的にもセメントは必須であるから、切に氏の大成と自重を祈つて止まない。

大阪製作所・社長

伊丹直三氏

習慣は第二の天性と云ふが、この習慣づける力ほど偉いものはない、努力と云ひ勤勉といひはたから見るともないのである。といつて樂になるといふ意味ではない。習慣づけることに依つて困難を感じる機會が少くなるといふ意味である。氏は徳島縣の産、伊丹熊太郎氏の三男にして明治十六年二月に誕生し同三十九年に家督を相續した。而して茲に氏の事業的手腕を嚆とするは聊か駄足の感なしとしないが、株式会社大阪製作所を本城に颯爽時局事業界に呼號する氏の勢威、その卓腕は凡らく世評以上のものがあるのではなからうか。まことにローマは一朝にして成らずといふ譬の如く、氏が、今日典型的なメーカーマンとして躍然たる勢力を斯界に扶植しつゝあるのも、畢竟いつに變らぬ意氣と、熱と汗との賜物であることを想ふとき、その挽みなき不屈の精神力こそ實に氏をして今日の榮位に就かしめたと云ふべきである。

東邦産業・社長

伊東嘉祐氏

伊東氏は暫らく官界に在つた。しかし氏は自ら官界の職に適せざるを知つてか、やがて官界を去つて實業界の人となつた。斯くて自由奔放な事業界を馳驅するや、幾度か難關に遭遇したりと雖も、その努力は遂に實を結ぶに至つたものである。氏は北海道土族伊東勝三郎氏の長男にして明治二十四年十月に誕生した。大正七年日本大學専門部法科を卒業後農商務省に入つたがやがて之を辭して、小樽取引所に轉じ専務理事を経て支配人となり、次いで現在の東邦産業株式會社社長に納まつたものである。したがつて業界にも相當功績を残してゐるが、氏は少しも之を誇らうとはしない。謙遜家な氏のことだからだ。しかも時偶閃めかせる智力には何となく底知れぬやうな深みを想はせるものがあり、一度事に當るや巧みに急所を掴んでテキパキと處理して行く鮮やかな手腕に至つては、凡人のよく成し得るところではない。今や同社社長として勢威を示す一方、亦着實に經營を引締めで行くところに氏の特異なる存在がある。

機械製作業

伊藤音吉氏

仕事に興味を持つて働けるだけでも幸福である。伊藤氏の趣味と云へば機械研究である。したがつて仕事に倦むといふことを知らない倦むどころか精一杯の努力を捧げて厭はず、只管完遂の途へと精進する熱誠さへも生れてくる。氏は岩手縣の産、伊藤初吉氏の二男で明治二十年三月に誕生した。夙に斯業を志して明治三十六年に上京、天野工場、富士製紙、花岡鑛山等に勤務した上に大正十二年機械製作業を開始したもので、世の好評を博すと共に隆々たる業績を収めつゝあるのも、偏に積年の努力とその卓腕に依ることは云ふまでもない。資産を殖やし名聲を馳せれば、世間之を以て奮闘立志と稱するが、中には境遇に恵まれ或ひは好運の然らしむるところに依る人も少くない。然るに我が伊藤音吉氏のみは眞に奮闘立志の人である。その過去を顧みてもうなづけるが如く奮闘又奮闘を以て今回の地位を贏ち得たることは、何人も之を認めるに吝でなく、その經驗と實力より推しても今後一層の躍進を示すことは疑いを入れない。

岡谷商店・取締役

伊藤重義氏

もと／＼伊藤氏は鐵屋で鍛え上げた腕を持つて居る人物であり、斯業經營には特殊の眼識を具へた人物なのである。したがつて株式會社岡谷商店取締役はもとより、大阪鋼材株式會社常務取締役、大和製鋼、大阪鐵商俱樂部取締役としてもまことに適材適所を得たるが如き觀があり、單に手腕のみではなしにその經歷から言つても、氏の今日在るは最早約束づけられてゐたものであるとも云へるやうな氣がするのである。氏は愛知縣人伊藤延次郎氏の二男にして明治二十五年八月に誕生、昭和十年令兄延義氏より分家した。明治三十七年岡谷會社大阪鐵部に入り才腕を揮ふこと久しく、その後の發展に伴ない改組と共に同社取締役として帷幕に參じ、益々その陣營に強靱さを加へしめつゝ今日に至つたもので同社生え抜きの逸材として鍛え上げられて來ただけに、所謂コチ／＼なところは少しくもなく、云はゞ同社を手懸にかけて育てあげて來た點などから見ても不可欠的存在となつてゐる。

日本陶業・社長

伊藤祝逸氏

陶器と云へば名古屋を想ひ出す、その名古屋に在つて日本陶業株式會社の名古屋に在つてゐるのが伊藤祝逸氏である。氏は岐阜縣の産、伊藤平三郎氏の長男として明治十七年二月に誕生した。大垣中學校卒業後、直ちに三井物産名古屋支店に馳せ參じ大いに敏腕を揮つた。氏の優れたる手腕は上長に認められ漸次擡頭し及んだか、もと／＼稱氣満々たる氏のこと、古武士の野に在るが如くいつしか花咲く時節も到來せんものと、囑望せられつゝあつたが、果せるかな名古屋海運株式會社創立と共にその樞機に參劔、遂に取締役に擧げられるに至つた。しかし氏の進出は決して之のみにては止まらなかつた。快腕の赴くところ更に日本陶業の社長としても傑出して巨星の如き輝きを放つてゐる。爾來かゝる地位に立つてよく國家進運の線に沿ひつゝ、重責を果し、滿洲事變以後今次の支那事變の難局に當面しつゝも、些かの動搖も見せず餘裕綽々として、その使命達成に邁進し國家的にも重大なる役割を果しつゝある。

伊藤新商店・代表社員

伊藤新次郎氏

洋反物服地商を營む合名會社伊藤新商店代表社員伊藤新次郎氏と云へば、大阪府多額納税者としてその業運の旺盛なことは夙に定評のあるところである。氏は大阪府人伊藤九兵衛氏の叔父君にあたり明治十七年十月に出生、同二十八年亡兄新次郎氏の家督を相續すると共に、前名松次郎を改めて襲名に及んだものである。夙に祖業を繼ぎ洋反物服地商を營みつゝ、伊藤新商店代表社員として今日を迎へたものであるが、時局下に於ても順風満帆の好業績をつゞけつゝあり、文字通りの卓腕は今や關西業界に伊藤ありを廣く知らしめてゐる。時局下の産業界は戰時的重工業が全盛を極めて、平和産業の影を薄からしめてゐるが斯界のみは依然として活況を呈し、氏の如き餘裕裡のもとに確固不拔の礎を据へてゐる。之も一に氏の才腕の然らしむるところで、氏の存在こそは正しく業界の驕驍兒と呼ぶにふさはしく、流石に若冠の頃から斯業と共に生き、斯業と共に苦勞をつゞけて來たので一頭地を抜くのも寧ろ當然の事と云へやう。

伊藤金精舎主

曩に日本政馬貿易商會及び伊藤硫黃曹達製造場の重役として令名を馳せたり伊藤晴一氏こそ、現に伊藤金精舎主として醋酸製造業を営みつゝ、傍ら日本合成化学工業株式會社取締役を兼て威望をして益々加はらしめてゐるのである。氏の牙城伊藤金精舎こそは時局の花形として、世の注視の中に隆々たる飛躍を遂げつゝあり、時流に伴なつてその業績も甚だ顯著なるものがある。それといふのも經營陣に名パイロット伊藤晴一氏が控へ、業務の全般に強靱性を與へ、他者の到底追隨し得ざる名操従をなしてゐるからである。然しながら氏畢生の事業たる伊藤金精舎も、草創當時はまことに微々たる存在にしか過ぎなかつたが、氏の克苦精勵と優秀なる手腕とは經營に好成绩をもたらし、業務は日に月に伸長を遂げ今後如何に發展するかは速かに豫測しがたいものとなつてしまつた。氏は大阪府人伊藤辰次郎氏の長男として明治十八年十二月に出生、同二十二年に家督を相続した。意思強固にして物事に動ぜざることには夙に知られてゐる。

伊藤晴一氏

大日本麥酒・總務部會計課長

氏は千葉縣の産、伊藤安次郎氏の長男として明治十九年五月に出生し、大正五年東京帝國大學法科を卒業後、大日本麥酒株式會社に入り、現に總務部會計課長の任にありその才腕は益々冴えて、何人の追隨をも許さぬ域に達し、傍ら倉持商店、三信東洋軒各株式會社監査役等を兼て益々箔を付けてゐる。氏の素質が凡庸ならざる英才であり、事業經營に並々ならぬ卓抜な手腕を示しつゝあることはかね／＼氏を知る人々の噂するところであつたが、その果斷な勇氣と更にエネルギーシユな働きぶりを目のあたりにするにつけ、その卓腕を再認識せざるを得ないのである。氏は他會社の重役を兼任してゐるとは云へ、決して重役稼業といふものではない。その本質から言へば牙城大日本麥酒の世話役であり、整理役者とも云ふべき立場に置かれてゐるのだ。氏の整理業者としての功績も實録も十目十指のよく認めるところで、その手腕と明晰なる頭腦こそ、まことに見上げたものと云はなければならぬ。

伊藤誠一氏

大阪三品取引所・支配人

東京取引所と共に本邦に於ける双壁として大阪三品取引所は餘りにも有名である。商機商略に長けた大阪の大商人相手に圓熟自在な手腕を以て次々と擲いて行く鮮かさは儘かに傑物でなくては出来ぬ業である。氏は明治二十四年大阪飯田喜藏氏の長男として生れた五十歳になつたばかりの今が人生の華といふ處、夙に明星商業を卒業し大正三年同所に入り當に三十年に垂んとする云はゞ子嗣の取引所員であるわけ、其道にかけての玄人。辛酸を嘗め盡し苦闘もなし續けて來た強者である。天性の俊敏に一段の洗練を経て鋭鋒愈々鋭く炯眼倍々敏しとは恐らく氏の現在であらう。然し氏は一介の取引所支配人ではない。人間性の豊かな情操の密やさに至つては何人も追従を許さぬものがある。商務課長副支配人支配人と頓々拍子に榮進したのも氏の人情味の厚い點が信望の一素因となつたことは云ふ迄もない。論曲に浸り芝居に興味を持つことも氏の性格の一面が窺はれる。大阪三品取引所の至寶と言ふ讚辭は敢て過賞ではない。

飯田彌三郎氏

昭和商船・代表取締役

氏は現時昭和商船、東亞エナメル、川合農牧殖産各(株)代表取締役、日本砂鐵工業(株)取締役として業界に雄飛する驍將だ。富山縣飯井儀四郎氏の長男として明治十六年三月出生、同四十三年に先代祖父甚造氏の後を受けて家督を相続したのである。慶應義塾大學部理財科を明治三十九年に卒業、業界に身を投じて活躍し、曩に中越汽船の社長として名聲を轟はれたが、現時は前記諸會社の重役として拮据經營に當つてゐる。長軀颯爽たる氏の姿は、何の苦勞も無しに昇進し續けてきたやうに見受けられるが、仕事に對する熱意と研究心の旺盛なること尋常一様ではなく、これだけの活動的精力が何處に藏せられてゐるかと思議に思はれるほどだ。これこそ氏が今日迄に踏み越えてきた苦い生活經驗の賜であらう。しかも氏は信念の人、かつ熱の人だ、正に氏こそ時局型事業家の典型であると云つても、過言ではあるまい。時はいま東亞大陸建設の聖業に完璧を期するの秋、氏の如き逸材の力備に俟つ處甚大である。

後井壽夫氏

三井物産・横濱支店長

横濱生糸輸出業組合長に擧げられてゐる伊藤武男氏こそ、三井物産、生糸部長兼横濱支店長として嘖々たる令名を斯界に馳せてゐるのである。抑々伊藤家の祖は伊藤國舊松山藩主久松家に代々儒を以て仕へた家柄であり、十六代を経た先代鼎氏に至つて實業界に入り活躍したもので川越鐵道、森永製菓、萬歳生命保險等各會社の重役として押しも押されぬ貫祿を示した。氏はその長男として明治十八年八月に出生、大正十五年に家督を相続した。明治四十一年東京高等商業學校を卒業後、直ちに三井物産に入社しニューヨーク支店勤務を経て、横濱支店次長兼生糸部長となり次いで昭和十一年生糸部長兼横濱支店長に就任したものである。氏は積極的であり進取性豊かな手腕家である。しかも勇氣に加ふるに理智的閃めき鋭く、その永年に亘る實業生活に於て、氏の抱負經營は遺憾なく示されて來てゐる。流石に嚴格なる武家生活の傳統を承ける來てゐるだけに、高潔なる人格はもとより士魂商才の錚々として令名顯著である。

伊藤武男氏

大池ガレージ・専務取締役

大池ガレージ株式會社が賑々實績をあげて世の絶讃を博してゐるのも、偏に同社専務取締役たる伊藤萬藏氏の頭腦と手腕とによるものである。氏は愛知縣人先代萬藏氏の三男として明治二十三年二月に出生、大正十四年家督相続と共に前名光太郎を改めて雙名に及んだものである。夙に實業界に入り尾張電氣軌道株式會社重役としてその名を知られてゐたが、今や大池ガレージ株式會社専務取締役、名古屋重工業株式會社取締役として、中京財界の一異彩としての存在を明らかにしてゐる。氏は愛知縣人特有の剛腹にして堅忍不拔の精神力強き人で、その力を實際的商戰場裡に於て活用し、商道の妙諦を體得玉成したものであるから、絶體的に他者の追隨を許さぬ今日の牢固たる地位が出来上つたのである。氏は五十を越したばかりであるから尙未來があり、往くとして可ならざるところなき手腕の冴えも、日一日とその地盤を確立しつゝある。而もその意氣たるや軒昂として實に颯爽たるものがあり、今後の活躍こそ注目されてゐる。

伊藤萬藏氏

京華社・常務取締役兼大阪支店長

氏は京都府の人池田彌太郎氏の長男にして明治二十八年三月出生し、後家督を相続して池田家の統帥者となつた。夙に同志社大學經濟科を卒業して業界入りをなし、神戸中外貿易會社に入社して多大の功績を残した。即ち氏は、貿易振興、海外市場の獲得に全力を傾倒して盡瘁し敏腕をふるつて貢献したのであつた。だが昭和十一年には株式會社京華社の常務取締役に就任、傍ら同社大阪支店長も兼ねて八方無盡の活躍ぶりを示してゐる。内外の經濟事情に明るく、卓見遠識の俊才、業界の信望極めて篤く、京華社の柱石的存在として絶對の勢力を有してゐる。資性謹嚴にして智略と才腕とを兼ね具へ、烈々たる同志の裏に一掬の情味も宿す氏、社員達より慈父の如く敬はれるも故なしとは云へないわけのものだ。統制經濟下の吾が國事業界が、氏の如き熱情的人材の健腕に俟つところは今後益々大きい。愈々もつて建闘され、確固たる信念のもとに、大きく廣く雄飛せられて事業界に貢献されん事を祈る。

池田一藏氏

側島蠶具製造所・代表社員兼支配人

地方業界にあつて黙々と傍目もふらず、一意産業の發展に進歩に、全力を傾倒して邁進する人に石川久一氏がある氏を一言にして云へば、努力の人、熱の人であらうか。明治二十六年十二月に、三重縣の人石川久右衛門氏の長男として生れた氏は、家内工業的な日本蠶業の改良を叫んで立ち、新しい蠶具の製造に乗り出した。日夜寢食を忘れて研究に没頭し、終ひに明治四十四年、創業の運びとなつて側島蠶具製造所を設立したが、昭和七年に改組を行つて合資會社となし、同十二年七月に同社代表社員兼支配人の榮位に就任したのであつた。同社が今日の大成を見たのは全く主宰者たる氏の汗と脂の結晶の賜であつて、農民の味方として、また地方産業の開拓者として貢献したところ尠くない。熱と努力、これなくしては何事も成し遂げられぬと同時に、これなくして進歩も發展も得られぬわけであらう。この尊い努力と熱あつてこそ才人石川氏の確固たる地盤も築かれ、蠶具改良の大業も完う出来得たのである。

石川久一氏

煉光電機製作所・専務取締役

石川 志朗氏

新興の意気に燃ゆる株式会社煉光電機製作所は、今や時局下産業の重要モメントとして雄飛するに至つた。

當社の名舵手は専務取締役石川志朗氏。氏は明治二十四年二月に静岡縣人石川享三氏の四男として生れ、大正四年に工科學校を卒業、市電氣局技手として實社會に第一歩を印したのである。後、岩淵電氣工業に轉じて縦横に才腕を揮ひ、販賣課長に進んで大いに後才を買はれたが、昭和六年に至つて煉光電機製作所を創立し、現時は同社専務の大任にあつて、よく社員等を督勵、全責任を擔つて業績向上に邁進してゐる。また堅實一貫をモットーとしてゐる氏は、度量潤達な親分肌の人で、新しきモラルを持つ實業家として近代人の間に絶大な人氣がある。洋畫をはじめ藝術ジャンルのもを特に好み、教養また極めて深い。更に加へて時局認識も全く正確な知識人で、名聲高いも宜なるかなと背かれる。とまれ、いま盛況の同社を指導して如何に飛躍發展するか、今後の動向こそ期して俟つべきもの大であらう。

天然瓦斯化學工業・専務取締役

石川 鐵彌氏

隆々たる化學工業界に現れた慧星、天然瓦斯化學工業株式會社は幾多の逸材を擁してゐる。だが中に一際目

立つて燦然と輝く異彩に専務取締役石川鐵彌氏がある。氏は岡山の産で、大正五年に京大機械科を卒業し、實社會に優秀なるエンジニアとしてスタートした人で、それこそ生粋のエンジニアである。即ち福岡東洋製鐵、高田商會電機部、エシヤウエス商會等々の技師として活躍に活躍し、その腕に頭を卓抜なる閃きあるを大に買はれ、稀にみる俊才として名聲を轟はれたが、現時は前記天然瓦斯工業専務及び、大日鏡業(株)取締役の諸要職を兼務して技術面は勿論、經營面に於ても素晴らしい斬れ味をみせてゐる。全く才腕双絶とは氏の如き人物を評するものではなからうか、感嘆に絶えぬところのものだ。業務に當つては精勵恪勤如何なる難關をも切り抜ける信念の人であり、また清廉潔白にして國家觀念の旺盛な事業家である。化學工業界も久しい間の苦難を越えて國策事業の第一線に立つた現時一層の建闘を望む。

永平寺鐵道・社長

石川 芳次郎氏

京都財界の異彩、石川芳次郎氏の事業は今や全く素晴らしい發展を示してゐる。重役王の異名をとつた氏の關

係會社諸役は、永平寺鐵道(株)社長をはじめ、京都電燈(株)常務取締役、鴨川ニツケル、愛宕山鐵道、東亞電力興業、三國芦原電鐵各(株)取締役、南城電氣、福井電力、鞍馬電氣鐵道、大聖寺川水力電氣、比叡山鐵道、關西共同火力發電各株監査役等々で、文字通り縦横無盡の活躍を續けてゐる。氏は京都府の人、石川國三郎氏の長男で明治十四年十一月生れ、同四十二年に家督を相続した。京都帝大理工科電氣工學科を明治四十三年に卒業、業界入りをして颯爽と雄姿を現し、今日の覇業を完成させたのである。だがしかし、氏は單に財界、電力界だけの存在ではない。無慾恬淡にして信念堅固、千萬人と雖も我ゆかんの氣概をもつて意氣軒昂、日本各界各層を通じて、氏こそ眞の英雄的財界人の稱呼に價するものと云へよう。よく自愛、よく自重されて、今後の財界推進力として大いに建闘されんことを祈る。

三菱電機・長崎製作所長

石黒 九一氏

氏は、三井三菱と並び稱せられる三菱財閥のドル箱、三菱電機(株)長崎製作所長である。嚴父はかの赫々

たる名聲あつた故貴族院議員工學博士石黒五十二氏で、氏はその長男、明治二十四年五月に出生した。大正十一年に家督を相続して石黒家の總帥者となり、一門の名譽を擔つて活躍、磐石の堅實さを示してゐる。尙京都帝大理工科電氣工學科を大正四年に卒業してその道の優秀技術者となり業界にスタートしたが、現時は三菱コンツェルンの推進力的存在として、この老なる三菱電機に光彩を添へて居り、進歩的若手實業家である。手腕、才能素より卓拔、電機界に就ての卓識卓見は既に定評があり抱負は大きい。加ふるに非常に研究的な向學心に燃えてゐる、且つ清廉な人格者である。その仕事熱心なことは、會社に於ける氏が職工と一語に作業服を着て働いてゐる姿を見れば、容易に首肯出来るのである。時局認識も正確で、スケールも大きく、時局の波濤を眞ツ向から乗り切りつゝある。將來の大器。

日本工業藥品製造所・専務取締役

石川 延太郎氏

名譽高い日本工業藥品製造所に、その人ありと知られたる専務取締役石川延太郎氏がある。氏は大阪府人に

して明治十三年一月生れ、同三十七年に大阪高工機械科を卒業したのであつた。後、業界に身を投じて八幡製鐵、住友伸銅各會社及び大阪市役所水道課を、それら勤務、敏腕を揮つたのである。現時は日本工業藥品製造所に信賴の的となつてゐるが、氏が専務就任當時眞摯な活躍で同社の基礎に強固な地盤を興へたことはその實力の一端を示すもの、知識經驗共にひろく、今日までその識見と抱負によつて、事業發展に貢献したところ尠くない。由來實業家にもいろ／＼なタイプがあるものだが、眞摯誠實の人はとするとコツ／＼主義に傾き勝ち、また奔放な煉腕家と云はれる事業家には兎角誠實眞剣味がない。洵に皮肉なる現象だ。殊に營利事業といふものと離して、一個人としての誠實さを有つ人物となると、これは決してザラにはない。ところが氏はこの両面を備へる人であるから敬服するに足る。

金井鐵山・星野鐵業所長

石川 登氏

氏は明治十四年十二月に福岡縣土旅石川水連氏の二男として出生した。同四十一年に東大探礦冶金科を抜群

の成績で卒業し、専門的優秀技術をもつて鹿兒島山ヶ野金山に入つたが、後明治鐵業朝鮮昌城金山所長、大分縣成清鐵業、土肥金山各技師長を経て今日に至り、現時は金井鐵山(株)星野鐵業所長として今をときめく鐵業界に雄飛してゐる人物である。今や全く時局下産業界の基本的な部門として活躍する鐵業界は、愈最前線に立つものとして重大視されてゐるが、金井鐵山も勿論その一つで、斯界の明星として注視的となり、各方面から期待されてゐるのだ。石川氏は同社にあつてよく奮戦力争、名所長として信望極めて篤く、強健な意志と發揚たる霸氣は滿身に漲つて、同社を一路發展へ、進歩へ、そして躍進へ、躍進へとリードしつゝある。情誼に篤く操守堅固、精氣縱横にして闘志滿々たる氏こそ、吾が鐵業界に於ける新しいタイプと云つて過言ではあるまい。今後の活躍が期待して止まない。

常南電鐵・取締役

石田 重氏

明治二十四年七月石田梅吉氏の長男として出生した石田重氏は、郷里前橋中學を卒業し大正八年以來、機械

の製作販賣に従事し、傍ら常南電鐵株式會社取締役を勤め、内外電氣用品株式會社の監査役をも引受けてゐる。氏中學時代より機械とか製作とか建設的の事に趣味をもち好きこそ物の上手なれで好きな道を邁つて來た。そしてその道に精通し職業として立派に成功し、漸を追うて事業界目指して躍進し出した。才幹と手腕とは言ふまでもなく、これからの身上である眞價はこれからである。着々と堅實な歩みをつけて近き將來に一層大をなすことであらうことを信ずる。尙家庭はきみ子夫人を中心に長男重夫氏は慶大に在學(大正九年)二男重人(昭四年)三男重次(昭九年)の水入らずで平和なる生活をつゞけ常に微笑し風景を見せられるのは、一度、氏の門を訪へば誰しも感じる所である。氏は撞球を唯一の娯樂とし暇あれば同僚知友同好の士と覇を争ふて襲ひかゝる活社會への明日の活力を養ひつゝある。

日本製鋼所・常務取締役

石塚 榮藏氏

室蘭商會會議所議員、石塚榮藏氏は明治四十一年東京商工を卒業し現在、日本製鋼所常務取締役として、

非常時局下に、渾身の努力を捧げ、大車輪の活躍をつゞけて居る。この外、室蘭電燈、輪西鐵山の各取締役として八面六臂實に席の温まる暇もない有様である。氏は東京府出身で、嚴父徳次郎氏長男、明治十九年二月出生、母堂は、名門大久保立子爵の姉君で人爲高格、人をして悦服せしめる天稟を有し、然かも毅然として處断は水の流るゝ如く鮮かなものがあるといふ。三田の一角に居住し簡素な生活に甘んじ、家庭人としては優にやさしく一家は平和の園地である。母堂ミホ刀自(慶應三、生)今尙健在、令閨昭女史は、松本楓湖氏の五女(明治三二、生)で貞淑の間へがあり、亦銑後の女性としてよく活動してゐる。氏は、昭和二年前戸主小蘭の死跡を相続したといふことである。生れながらの麗質に修養と鍛練とを加へ今や圓熟の域に達し、業界に前途をかけられて居る。切に健在を祈つて止まない。

合名會社石橋商店・代表社員

石橋 慶藏氏

氏は、東京引拔鋼管製造所、石橋商店各株式會社の社長として業界の大

立物、此の外日本瓦斯管販賣、東京龍野製作所、鋼管機手販賣各社の重役をも勤めて居る。明治十六年十月、神奈川縣石塚覺次郎氏の嗣子として出生、同四十一年相續す。氏は嚴父覺次郎氏の剛直酒落の風格を享け、精力旺盛、何事に對して突進して止まぬ一面、酒々落々として物にこだはらない。夜を日に繼いで活躍に寧日ない有様である裡に、一刻の閑を得れば書畫を愛で骨董に嗜み、激烈な社會相から一時の慰藉を得るといつた風である。氏の面目もこゝに伺はれる。家庭はトウ子夫人、母堂コウ子夫人、養女玉惠さん（神奈川、高木操、二女）の小暮して頗る閑靜な日を送つて居られる。従つて附合以外には滅多に家を明けることがないことである。人の世は明日ありと思ふな仇樓で、人生五十年の試験を経て常に時代を易する明を辨得された同氏が斯界の長老として、後進を誘導し奉公の誠を致されんことを。

東京瓦斯副産・常務取締役

石橋 周也氏

氏は明治十九年茨城縣石橋安次郎の二男として生れ、明治四十三年慶大理財科を卒へ、大正十二年兄信之介

方より分家して獨立す。曩に磯部同族會社監査役、隅田川製鐵所常務取締役として手腕を揮ひ、現在は東京瓦斯副産株式會社常務取締役として其練達せる才幹を發揮して居る。天資質實にして事に當りて綿密周到その運営に危げなきことは同氏獨特の長所である。故に氏の經營に成るもの破局に類することとは絶體にあり得ない。堅實な發展過程を辿りつゝある瓦斯副産會社は實に氏の力によることとすべきであらうと思ふ。ゴルフと園藝とを趣味とし日曜日あたり近郊のゴルフ場に時々氏の姿が見受けられる。一方恭道にかけても素人の域を越えて同好戦を挑めば深更に及ぶこともあるといふ程、ウロの争ひに興味をもつと云はれる。家庭は令閨一方ひさ子さんを中心に、慶大在學の長男彌一郎君、長女昭子さん、二男二郎君と水入らずの極めて圓滿な安易な生活である。同氏今後の活躍を嚆望して筆を擱く。

石原産業海運・社長

石原 新三郎氏

國策線上に颯爽と躍り上つた時局の花形人物に石原新三郎氏が在る。夙に京都府農學校を卒業し石原産業海運會社に入るや銳意その向上に努力し業務の一大飛躍を圖ると共に、更に昭和九年組織を株式に改むるなど美事な發展ぶりを示すに至つた。斯くて同社の社長に納まるや、いよゝ快腕を伸べて更に神戸電機製作所、第一製鋼、樺太産業等各社長を兼て覇業達成に猛進するなど、その勇姿には何人も驚きの眼をみはつてゐる。而してその業績はと云へば何れも好調を辿り業務の擴張も最早必至と見られてゐる。かゝる好業績を展開しつゝあるのも一に社長たる氏の卓腕に負ふものであり、氏が如何に卓抜な經營者であるかを肯定させるものである。業界の人氣を聚めつゝあるのも、更に國策線上の重要人物として刮目されてゐるのも、終始一貫事業一途に精進した賜物と云はなければならぬ。氏は京都府人石原長太郎氏の三男で明治二十七年十二月に出生したのだが梅檀は双葉より香しとやら幼童時代既に群を抜てゐた。

石原清左右衛門商店・社長

石原 八治郎氏

石原家は中京きつての豪家として夙に知られてゐる。其祖は慶長年間より創まつて連綿と十八代に亘り、土地の有志、世話役などして重きを成して來た積善の名家である。氏は十八代目八治郎氏の二男として明治二十一年二月に出生、昭和十一年に家督相續をなした氏は常に時勢を鋭敏に感受してゐる。そこに氏の新しい經驗が生れ、そして出發するのである。滿々たる覇氣とほとばしる精力とは將に當るべからざる勢ひを示し、比類なき傑物としてその將來を刮目されつゝある。今や鐵工業並びに土木建築請負業者として錚々たる名を馳せると共に、株式會社石原清左右衛門商店社長としてもいよゝその名聲を喧傳しつゝある。如何に才能ありとしても徳望が伴はなければ遂に大成することは不可能である。人の身を立て功を成すは才能勝れて忍耐に富み且つ徳望を具へなければならぬといふことを氏の場合に於て明瞭に看取できるのである。氏が名古屋鐵工聯盟會理事長を兼ね多額納税者たる事も故なしとしない處である。

田中工業・社長

石原 彌助氏

眞に力の人として推稱するの石原彌助氏が在る。事に處して之を克服する人と克服される人とがある。一

は勝者となり他は敗者となるが、世人やもすれば之を運命の然らしむるところと云ふ。この言葉の當否は別として石原氏の如く自己の環境の開拓者は常に我等の師表たるものであることは間違ひない。生活は力によつて向上される。才幹も穎智も力によつて生きる。斯くて世に眞に力の人を要望されるのも當然のことといふべきで、眞に力の人として石原氏が社會の輿望に應へつゝあるのも、少しも奇とするには足らない。氏は東京府人石原近義氏の二男として明治十年五月に出生、昭和二年に令兄助熊氏方より分家したものである。夙に斯業を志して邁進するところがあつたが、英明俊秀、その才幹の發するところ業務は頗る進展して著るしき実績をあげ、今や田中工業株式會社社長として押しも押されぬ貫祿を示しつゝある斯界の重鎮として令名高く其隆昌を謳はれつゝあるのも力の人として精進したればこそである。

赤尾商會・取締役

石本 音彦氏

氏の事業據點とするは株式會社赤尾商會であるが、更にその卓腕を伸べて大丸興業株式會社取締役としても重きをなしてゐる。氏は長野縣の産、石本三十郎氏の長男として明治二十三年四月に出生、同二十九年に家督を相續した。大正四年東京帝大を卒業後同八年北米に留學した秀才で、同九年に赤尾商會ニューヨーク支店に入り、その非類なき敏腕を縦横に駆使した。氏は萬事に正直で徒らに術策を用ひるとか小才を利かすやうなことはあまり好まない。しかし仕事は好く出来るし、事務にも明るく見識も具つてゐるから赤尾商會に入つてからはメキ／＼と男を上げてきた業績も一新されたし、社内も頗る明朗化して確かに他者の追隨を許さぬ才幹の持主であることを裏書するに至つた。したがつて常務取締役に推されてからも圓滿なる人格は、部下全社員より文字通り慈父の如く尊崇され、隔意なき態度で談合してゐる有様などは、氏が如何に雅量に富んでゐるかよく窺はれると共に業務日に進展する所以ともうなづかれる。

特殊製鋼・社長

石原 米太郎氏

我國最近の機械工業の發達は極めて著るしく所謂舶來品の如きものを遙かに凌駕しつゝある。殊に製鋼技能

の進展に至つてはその重要さと、需要の多いのと相俟つて實に目醒しいものがある。特殊製鋼株式會社はこの國家的事業の第一線に在つて、よく記録的活躍を印しつゝ今や隆々たる勢威を示し、更に劃期的な發展が豫想されてゐる。同社社長として臨む石原米太郎氏は群馬縣人石原儀八氏の三男にして明治十五年九月に出生した。氏の精勵ぶりは業の模範となすべきほどのものがあり氏一流の膽と才とをもつて著々実績をあげつゝあるところなど、將に興亞の大業に邁進する巨材にふさわしき觀がある。氏の如くその事業の目標を國家的、社會的高所に置く國士的事業家を持つことは吾人の最も意を強ふするに足るものであり、國防強化が叫ばれてゐる今日、その才腕を期待するや切なるものがある。曩に互光商會代表社員としてその明敏は既に人に知らるゝところ、今後の健闘を切に祈てやまない。

石森製粉・代表社員

石森 安太郎氏

草より出で、草に入るはてしなき武藏野の一角に構へること幾久しく、文字通り中野の草分けと稱せられつゝあつた舊家に、明治十六年四月呱呱の聲をあげたのが石森安太郎氏である。其家は代々製粉等を營んでその名も近隣に響いてゐたほどで、吉野屋と云へば一流の堅實方針をもつて業容を漸次擴張、遂に今日の地位を築くに至つたもので、氏の父石森謙太郎氏の手腕力量と噴々たる世評の波とがその基礎となつたものと云はれてゐる。氏はその長男にあたり大正十年家督相續と共に父業を承繼、爾來不撓不屈の精神は卓越せる技術の妙と俟つて忽ち世評を倍加するに至り業容頗る進展、遂に合名會社と改めてその代表社員となるに及んだ。斯くの如く同社が盛況を招來したのも常に信用第一を楯とし内容の堅實を矛とし、更に誠意親切の一貫に加へて代表社員たる氏の手腕力量が之にふさはしいといふ、三拍子も四拍子も揃つて業務に専念したればこそで、氏獨特の偉大なる才腕は聲望を合せて並びなきところとなつてゐる。

新鴻運送解・社長

石山末松氏

新鴻に於ける味噌醬油商の代表的存
在として石山末松氏の巨委は大きく
光つてゐる。現に新鴻商工會議所常
議員であり、味噌醬油商組合長としてその信望は業界に冠たるものがあり、
更に餘威を驅つて新鴻運送解株式會社々長、臨港倉庫、新鴻問屋倉庫各株式
會社取締役等を兼て堂々事業界一方の勇將たるの貫禄を示しつゝある。氏は
新潟縣人黒川榮松氏の三男にして明治十三年十月に出生、其後同縣人石山治
四郎氏の養子となつて同四十二年に分家したもので學業を卒へるや直ちに實
業に従事、其後の苦闘努力に依つて驚異的な發展を辿り、遂に異色ある存在
として今や公私共に重要な役割を果しつゝある今日を迎へるに至つたもの
である。氏は實に偉大なる構力に富んだ人物で、角がとれてゐるだけに堅
苦しくなく、實業家の中にはザラにある大雅把などころもなく、政治家によ
くある大法螺も吹かず常に現實に即した環境に應じた臨機處置を、もつと
も巧みにこなし得るとの評が専ら高い。

東信電氣・常務取締役

石渡吉治氏

電氣事業界に於ける雄將たる石渡吉
治氏の盛名については、今更贅言を
要せざるほどのものがある。即ち東
信電氣株式會社常務取締役を筆頭に犀川電力、信濃水電、信州電氣、昭和電
工等々其他數會社の重役を兼て名實共に斯界の權威者たる貫禄を示しつゝあ
る。氏が單なる天降りの重役に非ざることは、氣息奄々たる會社でさへ氏が
一度乗出すや忽ちにして蘇生し、著々と更生の途を辿らしめると云ふが如
き、そこに氏一流の快腕が存分に揮はれるのである。氏は元横須賀市長とし
て令名を馳せた石渡坦豐氏の二男で明治二十二年八月に出生し昭和十二年三
月に家督を相続した。大正三年京都帝大法學部政治科を卒業後實業界に入
り、今日の如く華々しく活躍するに至つたもので、流石父君の英資をそのま
ゝ受けついでゐるだけに手腕は確かであるし、力量には富んでゐるし學識と
並び立つて識見も高邁であるから、新時代の實業家としては先づ申し分のな
い謂はゞ典型的專業家と云ふにふさはしい存在をなしてゐる。

日本動産火災保險・社長

泉仁三郎氏

大阪土着の商家にして代々海産物商
を營みつゝある泉仁三郎氏の令名は
既に近隣を歴してゐる。當家が大阪
屈指の老舗として時めいてゐるのも、初代より連綿と既に三百餘年を経過し
つゝある事實に鑑みてもうなづけることである。氏は先代仁三郎氏の長男に
して明治九年十月に出生、同三十七年家督相続と共に前名卯三郎を改めて襲
名に及んだのである。祖業を繼承すると共に海産物商を營んでゐたが、中央
市場創設と共に大阪海産物會社に併合、現在は同社取締役として重きをなす
一方驥足を伸ばして更に日本動産火災保險株式會社々長並に別府温泉土地株
式會社監査役を兼てその英才を發揮しつゝある。日本動産火災保險は斯界に
於ける最も有力なる會社で、内容、業績共に業界の白眉として常にその優秀
を誇りつゝある。したがつてその經營首腦陣も何れ劣らぬ強將揃ひで、その
優名にははかに判じ難きものがある。が石橋を叩いて渡るが如き泉氏の堅實
經營者こそ、まことに主宰者として此上なき適任者であらう。

大阪酸水素・社長

泉彌市氏

大阪事業界に廣く駒を進めてゐる泉
彌市氏のことである。その驥足至ら
ざるはなき様で現に大阪酸水素株式
會社々長、泉事業、吳羽紡績、硬化油販賣各株式會社取締役其他を合すれば
優に十指に餘る諸會社に采配を振つてゐるのである。したがつてその事業界
の經綸才能と、よつて來たところの經營の手腕力量は夙に定評のあるところ
で、近年殊にその手腕に冴えを示しつゝある。氏は大阪府人宮崎彌三郎氏の
令弟にあたり明治十五年四月に出生、其後先代清助氏の養子となつて明治四
十三年に家督を相続した。明治四十一年東京帝大法學部獨法科を卒業と共に
歐米各國に留學して更に研鑽を積み、歸期と共に實業界に入つたものだが、
充分に下地の出來てゐる上に併せて計畫的才能と組織的才能とを備へてゐる
ので、その據頭も目覺しく今や前記の如く諸會社のリーダー格として、世の
大實業家に伍して遜色なき羽振りを利かせつゝある。資性穩健にして人を遇
することに厚く、音楽、ゴルフ等に趣味を持つてゐる。

石渡製作所主

石渡由太郎氏

東京の月島に群立する鐵工業の中で
創業以來堅實無比を誇りつゝ、磐石
の如き基礎を有してゐるものに石渡
製作所が在る。その石渡製作所を主宰してゐるのが堅實な手腕家と評されて
ゐる石渡由太郎氏であり、徳望もあるところから内外の信用も極めて厚い。
氏はその草創當時より既に世の信用を浴びて營業をつゞけて來てゐるだけ
に、今日と雖も依然として好業績をあげつゝ、その地歩は微動だにしないの
である。したがつて氏が石渡製作所を創立營業を始めた當時の苦心を追想す
るならば、今日の賑々たる發展も寧ろ當然の報酬とも云へるのである。事ほ
ど左様にその經營には苦心し信用を得るのに努力して來たのであつて、之等
の苦難を突破したればこそ榮ある今日を迎へ得たのである。氏は神奈川県人
石渡彦五郎の五男として明治三十年五月に出生した。夙に正則英語學校を卒
業し鐵工業を營みつゝ、石渡製作所を主宰しつゝあつたが、大正十二年更に東
京火工製作所を創設、後株式に改組と共に其社長に就任した。

泉製作所・代表取締役

泉徳三郎氏

車輛船舶用品製造業者として文字通
り斯界の長老をもつて目されつゝあ
るのが、株式會社泉製作所代表取締
役たる泉徳三郎氏である。もと〱氏は過去五十餘年間を鐵工業一途に生き
て來たゞけに、手腕あり、達識あり、更に經驗豊富と云つたやうな業界のホ
ーブで、今までも幾多の特筆すべき大きな功績が残されてきたことは、語
らずして卓越せる氏の手腕を充分に誇示するものである。しかも徒手空拳を
もつてよく奮闘途に今日の大成を實現したることを想へば、將に立志傳中の
偉材としても推稱し得るもので、後輩の齊しく學ぶべき點多々あることは今更
喋々の言を挾む餘地もあるまい。氏は茨城縣土族泉孫次郎氏の令息にあたり
明治八年四月に出生した。幼少の頃より意思強固にして「精神一到何事不成
らざらん」の氣宇に燃えつゝ、明治二十二年鐵工業界入りをした。斯くて同卅
五年には泉製作所を創設、やがて組織變更と共に其代表取締役となつたもの
で、現在大阪、名古屋等に支店を置き愈々盛大を加へつゝある。

日本コロライジング・社長

泉量一氏

氏は佐賀縣土族泉復作氏の三男とし
て明治七年十一月に出生し同三十
一年に東京高等工業學校機械科を卒業
し、更に同四十年に米國ペンシルバニヤ大學工科を卒業した。斯くて歸期後
は實業界に入ると共に忽ち卓抜なる手腕を認められるところとなり、日本
機械製作所代表取締役、田中機械製作所取締役等を経て現在の日本コロライ
ジング株式會社々長並に臺灣鐵工所代表取締役として業界に巨歩を印し比
類なき經綸を行ひつゝある。日本コロライジングが信用絶大、斯界有數の盛
況にあるのも氏が常に信用第一を標とし、内容の堅實を矛として誠實一貫を
もつて築いたものであることは今更贅言を俟つまでもなく加ふるに天賦の商才
に加へて多年に亘る精勵は克く商道の妙諦を得るところとなつて、幾多の難
局を打開し遂に今日の如く飛躍に飛躍を重ねるに至つたもので、蓋し佐賀縣
人特有の剛腹にして堅忍不拔の精神力に富み、實際の商戰場裡に於て得た體
験は不知不識のうちにも氏を玉成せしむるところとなつたのである。

東神倉庫・門司支店長

磯村武氏

文化の進展に伴ふ貿易の振興に依
り、近來我國に於ける倉庫業の超然
たる勃興は、大いに歡ぶべき傾向と
云ふべく、而してその進歩發展は加速度的趨勢をもつて飛躍に飛躍を告げ、
今や歐米先進國を凌駕するの盛況を招來するに至つてゐる。我が磯村武氏は
慧眼よく斯業の將來あるを洞察し、夙に斯界に身を投じて營々努力、今や東
神倉庫株式會社門司支店長として隆昌股賑なる業運を贏ち得ると共に、斯界
の先覺者として燦然たる名聲を放ちつゝある。氏は兵庫縣の産にして明治二
十四年に出生、大正三年に長崎高等商業學校を卒業した。年少の頃より才氣
縱橫、而も長ずるに及んでいよく、鋭鋒を現はし大正七年東神倉庫に入ると
共に努力精勵の星霜は、著々と不動の地歩を築き上げ、今や牢固として揺ぐ
べくもないのである。かゝる點から見て磯村氏が東神倉庫の中堅人物たる條
件にあてはまる逸材たることはよく肯定し得るところであり、東神倉庫一本
槍で押し通して來た節操は見上げたものと云はなければならぬ。

磯野鑄造業所主

磯野七平氏

金物商を営みつゝ、鑄造業全般に亘てその優秀無比なる製造の重任を一手に担ぎ、多数の工員と共に粉骨砕身、獨創的技量を凝らす、磯野七平氏こそは全く熱火の魂の権化とも云ふべきであらう。本工場の發展史を物語るに氏の功勞なくして其を語ることは出来な

東北水産・社長

磯村利水氏

東亞實業界の耆宿として巨星の如き光芒を放ちつゝあるは、わが磯村利水氏である。氏は現在東北水産社長として水産日本の第一線に名采配を揮つてゐるが、もとより練達湛能の域に達した氏の事業に卒のあらう筈がなく、國策線に沿つて脈々たる業績を示してゐる。また氏は磯村産業、鹿野鑛業、石巻合同汽船取締役たる他、女川汽船

日鮮鑛業・専務取締役

市川準一氏

わが市川準一氏は關西實業界に在つて長老格たり、その圓滑、明快の人格と手腕に集望を得て明星の如き光輝を放ちつゝある逸材である。氏は現在日鮮鑛業専務取締役として同社全般に實權的名采配を揮つてゐるが、素より技術家出にして老練なる經營才能ある氏の統率下に、全社員は打つて一丸となつて働いてゐるから、同社の業績は堅實なる向上發展の一路を辿りつゝあり、斯界美望の的となつてゐる。また氏は笠戸船渠、浪花船渠の兩相談役にも任じてゐるが、歐洲第二次戦争は今やクライマックスに達して、海運界は追手に帆を揚げたる如くに爆發的好調を

野村信託・取締役東京支店長

市村勝久氏

野村信託は野村銀行に次ぐ關西の大財閥たる大野村の牙城となつて居り、野村元五郎氏以下お歴々が轉を並てゐる一大金融機關として知られてゐるが、わが市村勝久氏は同社取締役中の最年少者たる逸足で、東京支店長を兼任して帝都探題を仰せつかつてゐる。氏は元來が勝氣な性質の人物であるが、そのスポーツで鍛え上げた颯爽五月の男の子の象徴たるかの如き風貌は、發洩たる英氣を逞はらせて、接する者に翳りなき明朗感を與へるから、何人からも敬愛を受けてゐる。其の上に俊敏なる頭腦と卓越せる才能を有してゐるから、上長の受けも極めて可良で、今日の出世も當然の歸結であつた。氏は明治二十九年石川縣人たる市村久太郎氏の長男として出生したが、大正八年早大商科を卒業して直ちに野村銀行に入社し、爾來野村一本槍で押通し、漸次果進して新町、堀留各支店を経て、野村信託に轉じ、現職に就いたものである。猶ほ氏は一年志願兵として兵役に服したが、現在正八位陸軍主計少尉の官位を有してゐる。

日之出汽船・常務取締役

糸川三郎氏

氏は日之出汽船株式會社常務取締役で、東京府鈴木伊三郎氏の三男、明治二十三年生れ、後糸川末吉氏の養子となり、昭和十三年家督を承けたのである。夙に東洋汽船會社に入り刻苦奮闘の功は空しからず果進して同社桑港支店副長に擧げられ、茲に氏が多年培ひ來つた統率の才幹と運籌の力量とを發揮する秋が來たのである。氏今日の礎石は實に茲に發祥した。其の經營の實績は顯者なものがあつて、業界への一投石であつた。淺野物産は氏の卓越した手腕と風格とを見込んで船舶部主任として迎へ其の信頼は氏の獨壇上の感があつた。天下の財閥淺野の一部將として重きを成した氏は實業界にも其の名を成したのである。かくして氏は昭和六年日之出汽船會社取締役兼支配人として登場し、益々名聲を揚げ業界の一流人物として信望を加へ重きを成したのである。氏は海運業界生え抜きの生一本、此の方面では酸いも甘いも噛み盡した苦勞人、それだけに過去三十有餘年斯界に貢献した功績も偉大なものである。

蒲郡臨港線・社長

稻澤清起智氏

中京名古屋を中心とする交通網は最近異數の發展を遂げ、其の經營苦心並々ならぬものと聞くと今日蒲郡臨港線が毅然として悠々業蹟を擧げつつあるのは社長稻澤清起智氏の苦心の賜であると言ふも異論はあるまい。氏は私學派の偉才として長く官界にあつたのであるが後辭任して辯護士として起ち現在に及んで居る。即ち大正六年明大法科を卒業判事として勤務したのであるが、氏の豪邁果敢な天稟は自由人として活躍する道を選ばしめた。そして辯護士を開業したが霸氣冲天の氣魄は遂に實業界へ突進させた。俊敏穎悟の氏は實業者としての天分も豊かであり著々として成功を収めて地方業界に重きを成すに至つたのである。現在飛鳥組乾燥木材、辨天島埋立土地、横須賀埋立地、延喜莊土地、保溫工業、沖繩電氣、清水港土地等各會社重役に就任して樞機に參畫して活躍して居る。氏は福井縣稻澤清兵衛氏の二男で明治二十四年の出生、其の天賦の才幹と洗練された手腕とは實業界に於ける驚異的であり將來を期待せられて居る。

日本板硝子・常務取締役

稻井勳造氏

本邦に於ける硝子工業の發達は近々三十年間を出ない殊に板硝子に至つては極めて最近の事である。氏が日本板硝子常務取締役として舶來板硝子に遜色のない製品を目指して一意研究と指導とに邁進しつゝある功績は國策上の見地から見逃すことは出来ない。今日の時局は硝子工業界にも打撃を來し難關に沈面して居るのであるが、斯業界の一權威であり、國產硝子の一流會社を背負つて立つ氏が、獨自の經營と手腕とを以て之を打開し産業報國の實を擧げること期待するのである。氏は大正三年東京高商出身の逸材で始め關西の大財閥である住友に入り製鋼所商務部長副支配人として才腕を揮ひしが後住友合資東京販賣店支配人となり實業人として人格力量を完成し業界の認識を高めたのであつた。かくして現在前記社長として高邁な見識と堅固な確信とを以て業界の第一線に君臨し、東洋窒素工業の重役としても信頼されて居る。氏は廣島縣出身、明治二十二年生れであるから今が人生の最高潮時大いに爲すある日を待望する。

大阪アルミニウム製作所・専務取締役

稻田實之助氏

輕金屬工業が軍需的に重要な地位を占め、樽俎折衝寧日なき國際情勢の現在、各國競うて斯業の飛躍を試みつつある秋、本邦有數の存在として大阪アルミニウム製作所を總帥する稻田實之助氏の存在を見逃すことは出来まい。氏の炯眼は夙に將來すべき輕金屬工業を洞破し逸早く斯業の經營を畫したる長老といふべきである。氏の今日あるは形影相添ふ令弟實之助氏の眞摯な協力が興つて力ありといふべきであらう。即ち大正十年アルミニウム工業實地視察の爲め、歐米各國巡遊の旅を終へて歸朝した實之助氏の新知識は重大な示唆となり、其の經營を新たにし隆々として業蹟發展の一路を辿らしめ今や業界の翹者として重きを成したのである。氏は兼に大同アルミニウム製作所、二好アルミニウム製作所重役として實地にかけても第一線的存在である。明治十八年兵庫縣人稻田淺五郎氏の長男として生れ、明治四十年大阪高商を卒業した知能兼備の士で、多彩な人格は茶道、花道、書畫、將棋、園藝等々各方面に興味を持って居る。

横濱シルク・社長

稲田順一郎氏

氏は生絲業界に終始した不屈不撓の士で、我が生絲貿易界の貴重な存在の一人として敬意を拂はれて居る。桃源の夢を破つて湧然として渦巻を起した明治維新、開港の國策は必然海外通商の機を招來し當時の代表的貿易輸出品は、生糸と茶とであつて爾來我が國の生絲と茶とは世界市場に於て遠く他國の追従を許さない聲價を博し隆々發展し來つたのである。稲田順一郎氏は、大正二年神戸高商卒業後直ちに、横濱生糸社員となり、日本生糸副支配人商務長を歴任し其の間我が生糸貿易の礎石となつて始終一貫業界の爲めに奮闘し其の功績の半は氏に歸せねばなるまい。昭和十一年四月横濱シルク會社を創立して社長に就任し多年の經驗と研究とを傾けて孜孜として經營に歩を進め一大飛躍を策し正に海外生糸市場に於て氏の名を知らぬものはないといふも過言でなからう。

日本アクセプトランス商會・社長

稻原啓三郎氏

文明各國に於て激烈な競争の中心をなしてゐるものに飛行機製作と自動車製作とがある。兩者は平和工業として益々發展すべき最も有望な製作であると共に、重要な軍需の必需工業である點、列國の關心の的となるのである。今日國を擧げて製造能力を擴充強化する所以も亦此に存する。稻原氏の炯眼は夙に斯業に向つて注がれ、大倉高商卒業後は専ら自動車に關する研究に没頭し、幾多の苦杯を嘗めたのであるが屈せず、遂に自動車製作界の指導的地位を獲得し、現在、聖自動車製造、日本自動車各社常務取締役、日本自動車工業取締役、中央自動車、昭和自動車各社監査役として自動車製造界の重鎮をなして居る。氏は明敏、俊英に加ふるに實踐努力の人で、不斷の奮闘が今日の名を成さしめたのである。氏は埼玉縣稻原峯茂氏の三男にして明治二十二年十一月の出生、幼時より秀才を以て聞え將來を囑望された人物であり、衆目の期待に違はず財界の確たる存在となつたことは洵に郷黨の面目でもある。

廣島電氣・副社長

稻葉實氏

電氣事業界が比率盛況を繼續し殆ど其の止まる所を知らなかつた情態は、偶々支那事變の進行に従つて統制を餘儀なくされ、日本發送電會社の設立といふ異常なセンセーションを引き起した。然し之は將來愈本事業の發達を約束されたものであつて、準國家的事業としての烙印を押された譯である。兎に角一衝擊は何れの電氣會社にも襲來したがその中に在て敢然として所信斷行の意氣に燃え怯まず動せず自若たる氏の如きは他にあるまい。氏は明治四十一年京都帝大理工科電氣工學科卒業の秀才で、卒業後廣島電氣會社に入社進んで取締役に起用せられ其の練達せられた手腕と圓滿なる人格とは内外の信望を擔ひ副社長の榮冠を贏ち得たのである。實に同社に在ること三十有餘年同社今日の隆運は氏の不撓の格調といふも過言でない。氏は今や同社の獨裁的地位に在り山陽事業界の重鎮として然かも黙々として活躍して居る傍ら廣電證券、三原電燈、瀬戸内海横斷電力各會社重役として重要な一大存在をなしてゐる。

乾卯商店・代表取締役

乾卯兵衛氏

榮養劑ラクトーゲン本舖として一世に名を知られて居る乾卯兵衛氏は、大阪鈴木作十郎氏の長男として明治十三年出生、先代卯兵衛氏の養子となり、家督を相續し、前名國之助を改めて襲名した。藥品貿易を業とし大阪市東區道修町に營業所を設け、内地は固より大陸を舞臺として活動して居る。傍ら乾卯商店並に乾卯食品店を經營し、大阪育ちの勤勉以て粒々も苟くもしないといふ營業振りで業顯著であることは言ふまでもない。大阪實業界の巨頭株を占め同府多額納税者に列し藥品商業界の長者でもあり大立物でもある。氏の養弟福之助氏よく氏に協力し兩者相俟ちて愈々磐石の基礎の上に立つ、福之助氏の功業も亦偉大なものがあることは氏の感激措かざるものがあるであらう。時難は當に重要藥品染料等の移入絶無といふ姿である、窮すれば通ずといふ語の如く、我國独自の藥品染料の發見發明を企圖して止まざる今日、永年の經驗と卓越せる創造力とを持つ氏の兄弟に望む所は頗る大きい。

今井組・土木建築請負業

今井久吉氏

氏は京都府出身の成功者であり函館を根據とし今井組土木建築請負業の名を馳せて居る。氏は明治四十二年京都帝大工科土木工學科を卒業し、横濱水道局、米國貿易會社、ホンコンパニー建築部技師等を歴任したが、自立自營の志望抑へ難く、大正八年蹶然として土木建築請負業を創め奮闘の火蓋を切り勇躍事業界に突進し、隨所に果敢な活躍が開展され出藍の名を贏ち得た。造詣の深い上に長年の實地經驗を積んだ氏は池の中の者ではなかつた。堂々たる態勢を以て北海の野に成羆を遂げ、土木建築界の牛耳を握り、時局下に於て益々躍進を續け、國策推進上幾多の犠牲をも敢て顧みない。國士的存在として信頼と信望とを一身に擔つて居る有様である。明治十六年出生である氏は斯業界の現役として十二分の働きが出来る。希くば指導的立場に在つて後進扶掖の爲めにも格段の奮起を祈る次第である。

今井久吉氏は、北海道多額納税者にして現在函館商會議所常議員に推舉されたる財界有力な人物である。

片倉磐城製絲・代表取締役

今井五六氏

我國地方財閥の中樞片倉製絲の一翼となつて偉材の名を轟はれつゝある蠶絲界切つての巨頭であり貢獻者である今井五六氏の二男として生れた氏は、父祖の傳統を繼いで蠶絲界に颯爽として君臨して居る驍將である。明治二十六年に出生し大正六年早大商科を卒業し、直ちに斯業に携はり、實地の修練を積み手腕を磨き、將來への素地を練成して登場し傳統達成の使命に向つて奮進を續け、正に次代の片倉王國支配者の一人物として十分の貫録を示すに至つた。現に、昭和興業、美商會、日東紡績、長崎製糸、片倉製絲紡績、昭和絹靴下、片倉米穀肥料、東邦石油各社取締役、富國火災海上監査役、片倉合名出資社員等十數會社の重役に就任し、片倉財閥の中心勢力をなし更に驍足を中央に伸して豪壯な存在を示して居る。年齢漸く五十に垂んとする少壯の實業家、その將來は洋々たるものである。氏は釣魚を道樂とし繁盛な日常生活を醫し併せて明日の活動への英氣を養ふあたり英雄的風格を持つものと言へやう。

日本輸送機・常務取締役

今井捨吉氏

日本電池會社取締役今井捨吉氏は、京都府今井五衛氏の四男にして、明治十七年八月京都市に生れ、飽くなき十二年兄保次郎方より分家して獨立す。氏は夙に電氣業界に入り、飽くなき研究と倦まざる實力とを養ひ、時に一職工として技術の收得に努める等、全力を擧げて奮進し、不動の信念と確固たる實力とは日本電池會社に入社の機を得て業界の認識を喚起するに至る。氏の機まさる勤行は氏を驅つて同社營業課長に昇進せしめ、茲に第一線の人物として活躍する事になつた。氏の實地を基礎として鍛鍊を加へた手腕は業績發展の一契機を與へ衆目の認識を一層深め、遂に同社取締役に推されるに至つた。日本電池會社が益々盛業を持続しつゝあるは隠れたる氏の苦心が潜むことを牢記すべきであらう。氏は日電波工業、日本輸送機各社重役の要職に任じ、地方業界に重要地位を占め不休の活動をなして居る。濃厚篤實にして人を統ぶるに寛嚴宜しきを得、人に接するに懇懇で有徳の好紳士として推賞するに足る。

中央工業・取締役會長

今井文平氏

大倉財閥の一翼を擔ひ實業に鮮明な足跡を印しつゝ大童の活動なす今井文平氏は財界有数の逸足として出藍を誦はれて居る。氏は明治四十三年、東京帝大工科機械科卒業の俊才にして更に大學院に在學して蘊奥を極め、後大倉商會社に入り、同商事が本溪湖製鐵所設立に當ては全力を傾けて企畫經營の衝に當り、その實力手腕を餘す處なく發揮し、其偉材たる事を認められ、大正五年同社社務支店長として、流麗な外交手腕を揮つて米國商人を掌中の物とした手並は洵に業界の俊英である。大正九年歐洲を經由し具さに實業界の實情を視察して歸朝し、同一年大倉製鐵會社取締役に起用せられ、財界に花形的存在を示して居る。氏は中央工業取締役會長、北京麥酒、日本曹達、大倉鉄砲店の各重役に就任し、繁忙な日を送りつゝある。顧みて大倉商事に殉職の努力を捧ぐる三十年、同社の礎石となつて今日に至つた氏の功業の如何に偉大なりしかを憶ふ時、同社が氏に酬ゆべき何物を準備してあるであらうか。

今井商店・社長

今井雄七氏

氏は新潟縣今七武七氏の長子として、明治十一年四月出生、伯父今井督を相續す。夙に慶應義塾に學び明治三十年福澤門下の俊英として卒業し、今井合名會社に入り天稟の英才を以て腕を縦横に揮ひ財界の麒麟兒として馳名を馳せた。其後同社を株式に改組し之が社長となり更に藤武良商店の社長を兼ね兼として斯界に棟梁の器を示して居る。令弟清七氏、同音七氏三者一體となり今井商店の繁榮を策して活躍する壯觀は實業界稀有の態様と稱すべきであらう。過去數度に亘る不況を堂々と突破し、愈々業礎確たる同商會の益々隆運の一途を辿つて居ることは亦故なしとしない。氏は更に今井醸造會社に常務取締役として令弟を兩翼に控へ運營の樞機を握り逞ましい活躍をなして居る。齡當に六十實業人として圓熟練達の域にあつて徳望厚きを加へて居る。氏が有終の大成を期すことを希求する。氏は諷曲を嗜む、月明の乙夜朗々と讀ひつゞけて行く三昧の境地は又格別であらう。

金城商工・社長

今岡正一氏

金城商工株式會社社長たる今岡正一氏は、金城鑛業所、後藤機械製造會社兩社長をも兼務し、指導的存在として出藍の名を成して居る氏は、大正初年、岐阜縣立大垣中學を卒業し舞鶴海軍工廠に入り、製圖見習を振出しに技術者として漸次昇進し、海軍技手として勤務中辭職し、日本工業會社、日本電力、岐阜電力各社機械部に技師として勤務し其の實力を認められ、後高山線鐵道工事主任技師として就任するに及び、氏の眞價は愈々發揮せられ、手腕才幹を兼ね備せる實力家として重要視せられるに至つた。斯くて同工を終了と共に中京實業界に乘出し、財界人として、第一步を踏み出し、今日の地位を獲得したのである。氏は岐阜縣吉村家の四男として明治二十七年出生したが、京都府中齊市今岡國造氏の婿養子となつた。氏の勤勉力行眞摯にして會て情容なき若さに矚目した國造氏の眼識は過たず、此の篤行の氏の成功に養父の満足の程も想察せられて慶祝に堪えない次第、春秋に富む氏の將來に期待するところ大である。

三井信託・常務取締役

色川俊二郎氏

わが色川俊二郎氏は大三井金融部門の錚々として聞え高き俊豪で、三井系在社に實に三十餘年の久しきに渡つてゐる。氏は現在三井信託常務取締役として會長兼常務松井和宗氏を輔けてゐるが、同社の四常務が、松井氏明治十五年生れ以下、氏が十六年、宇佐美力氏が十七年、島田盛雄氏が十八年生れになつてゐるのは、鳥渡何かの因縁がありさうで面白い。閑話休題、同社に於ける氏の識見、手腕は既に定評あるところだが、氏はまた三信建物取締役にも擧げられてゐる。氏は明治十六年九月茨城縣人色川三郎兵衛氏の二男として出生、同三十年分家した。同四十三年慶大理財科を卒業、三井銀行に入り、歐洲第一次戰中歐米に出張、滯在四ヶ年歸朝後三井信託創立と共に同社に移り證券部長、取締役を経て昭和十一年現職に擧げられた。猶ほ氏の令弟三男氏は厚生技師、工場監督官たり、令姉とく女史は貴族院議員伊澤多喜男氏の令夫人である。またシミ令夫人との間には五男五女の子實があり、家庭的にも寵まれてゐる。

大日本鹽業・常任監査役

岩井俊藏氏

大日本鹽業は本邦製鹽界の大宗を成してゐるが、近來は政府の鹽業政策たる近主遠従主義に沿つて近海鹽増産の爲めに力を注いでゐるが、勿論關係仔會社たる朝鮮、關東州、南樺太、南日本、(臺灣)滿洲、青島、華中等各鹽業の開發、擴業にも努め、外鹽の移輸入に大童になつてゐる。言ふまでもなく鹽は敢て食用のみならず、諸化學工業にとつて必須のものであり、時局の資材として大きな役割を演じてゐるのである。わが岩井俊藏氏は大正五年以來同社の樞機に参劔して、本邦鹽業界のために盡瘁しつゝある巨豪として斯界に聲名高き人物で、現在は同社常任監査役に任じてゐるが、その堅實なる手腕と明快なる頭腦は、大目付役としてまさに適任者であり、專賣局關係に於ても圓滑に事務が運ばれて、同社の盛運をして泰山の安きに置かせてゐる。氏は明治十八年五月福島縣人岩井半兵衛氏の三男として誕生し、同十三年慶應義塾理財科の卒業である。氏は本年とつて五十六歳、時局は愈々多岐多難なる秋、切に祈自重。

東京帽子・專務取締役

今村信吉氏

氏は曩に東京商業貿易會社を經營したる企業經營の才に長じたる敏腕なる俊足である。明治四十三年東京帝大法科を卒業と同時に三井銀行に入り爾來十年間刻苦精勵したのであるが、大正九年斷然意を決して辭職し、事業界に進出した。躍動的な業界は活潑な動きの連続であり断えざる闘争其の物であつた。氏は渦巻く高浪の中に採まれて天資の稟賦に愈々光彩を添へて遺憾なく其の才能を發揮し、商業貿易會社經營當時の活動ぶりは三嘆に價するものがあつた。氏は我が金融界經濟界を通ずる透徹せる洞察を根幹として事業的經驗抱負に獨自性を有し異色ある斯界の存在たるを失はない。東京帽子專務取締役たるの他、目蒲興業、第一ホテル、甲子園ホテル各取締役、小松製作所、江東樂天地、東京寶塚劇場各監査役として、帝都財界に確固たる地歩を獲得す。氏は長野縣の舊家今村清之助氏の四男で明治十七年の出生、令兄今村繁三氏、井上周氏は共に財界錚々たる覇者であり、氏を加へ鼎足をなし、其協力は強靱なるものがある。

三和工業・社長

入澤基二氏

わが入澤基二氏は帝都實業界一方の雄としてメーカー界に活躍しつゝある驍將として知られてゐる逸材であるが、また小石川區會議員に推されて政治的にも並々ならぬ手腕を見せ、その將來性を待望されてゐる。氏は明治大學在學時代から武道に秀でた練士であつたが、その飽くまで剛直に見える氣風の半面には豊かな情味を湛えてゐるから、接する者に畏敬と敬愛の念を起させてゐる。この點が氏をして事業家としても政治家としても、成功に着かせてゐるのである。現在氏は三和工業社長たる他、昭康製作所取締役任じてゐるが、人心獲得の妙諦を掴んでゐる上に事業經營の才腕は抜群であるから、時潮に乗つた兩社運は恰も追手に帆を揚げた船の如くに、向上躍進の一路を辿り、賑々たる業績を擧げつゝある。氏は明治二十三年新潟縣人佐藤治氏の二男として誕生したが、後に入澤家に入つて家系を嗣いだ。夙に明大を出て、祖業の金融業を營んでゐるが、つね令夫人との間には三男五女を寵まれた子福長者である。

國産電氣・社長

岩井豐治氏

關西實業界の長老格としてわが岩井豐治氏の名は雷の如くに轟き渡つてゐる。氏は現在合資會社岩井本店無限責任社員として自家の礎石を固め乍ら、廣く實業界に乗り出し、國産電氣社長として名采配を揮ふ他、白金莫大小製造所、木村徳兵衛商店、關西ベイント、日本橋梁、徳山曹達工業、中央毛絲紡績、大阪鐵板製造、大日本セルロイド、徳山鐵板、岩井商店、木徳製粉、東京輕合金製作所各監査役として、各般の事業に關係し寧日なき活躍を續けつゝある。氏は明治二十三年十一月東京府人木村徳兵衛氏の二男として誕生したが、大阪府人たる先代岩井文助氏の養子となり、大正元年家督を相續した。先是明治四十四年東京高商を卒業してゐる。氏の一族は實業界知名の士が多く、養弟雄二郎氏は岩井商店、徳山曹達、白金莫大小製造所、徳山鐵板、日本橋梁、中央毛絲紡績、大阪鐵板、關西ベイント各社長として關西實業界に、嚴父木村徳兵衛氏は關東實業界の重鎮として、また令弟球四郎氏は青壯派として聞え高きものがある。

日本レース・專務取締役

岩井盛次氏

わが日本は織物に於ては世界屈指の技術を有してゐるが、現在では嘗て舶來品として珍重されてゐたレースを海外に逆輸出する迄に至つて、輸出貿易の爲めに萬丈の氣を吐いてゐる。わが岩井盛次氏は本邦織物の本場京都に在つて、日本レース專務取締役として同社を主宰してゐる俊豪であるが、氏は先に日本産業協會より産業貿易上の功勞者として表彰せられし程、レース界の爲には多大の貢献を積んで來てゐる。非常時局下の今日、材料絲制限の爲めに内需向は極度に制限されてゐるが、外貨獲得の爲めに斯業は大いに奨励されて居り、また氏等の努力に依つて海外には大いに聲價を高めつゝあるから、レース等の前途は益々好調を續けるであらう。氏は明治四十四年三月京都府人岩井時次氏の長男として出生した。同四十二年京都第一商業を卒業し、岩井商店社長として綿製品雜貨製造業を經營してゐるが、大正十五年日本レースを創立しその專務の椅子に就いたものである。時節柄氏の自重と奮闘を祈つて止まない。

共同鑛業・代表取締役

岩川 與助氏

わが岩川與助氏は流石に薩摩軍人の出だけに、俊敏なること事の如き鋭氣に張り切つた活動家として畏敬されてゐる人材であるが、永年に亘つて實業界の辛酸を嘗め盡くして來てゐるから、人生の機微にも通じてゐる人情家である。現在氏は共同鑛業代表取締役、秋田硫黄鑛業事務取締役たり、また東洋産金取締役として鑛産界の第一線に在り、颯爽たる名采配振りを示してゐるが、各社とも氏の傘下に賑々たる業績を挙げつゝあり、業界注視の的となつてゐる。また日本鑛業汽船常任監査役、第一毛絲紡績監査役にも任じてゐるが、前者は船腹擴充によつて飛躍的向上過程にあり、後者は原料制限の折柄にも軍需作業があるから業礎は確固たるものがある。氏は明治十九年一月鹿兒島縣人として出生し、神戸ルモア英學校を卒業して浪速銀行に入り、大正五年對米貿易商を經營、和鐵合資代表社員、村田製鐵所、旭日生命、太平洋海上火災、蔭田商事各重役を歴任し、昭和三年には衆議院議員に推されて政界の経歴も有してゐる。

仲鋼共同販賣・常務取締役

岩佐 恭二郎氏

わが岩佐恭二郎氏は金屬工業界の長老格として赫々たる聲名を馳せつゝ、ある巨材であるが、流石に永年に亘つて大古川の仲鋼事業に携つて來た人だけに、その識見、手腕には凡百の追隨し能はざるものがある。氏は現在仲鋼共同販賣常務取締役並に日本故銅統制取締に任じてゐるが、刻下の戰時體制下に於ては銅材は極度の統制、制限を受けて居り、その上原料供給もまた非常に困難な状態に置かれてゐる秋であるから、氏の立場も苦しいに違ひないが、些かの愚痴、不平をこぼすことなく、ただまづしぐらに國策線に沿つて銅材の供給、需要の爲めに全力を傾けつゝある。氏の精進にはたゞ／＼頭が下がるのみである。氏は明治十八年二月島根縣人岩佐専五郎氏の二男として誕生した。同四十三年東京高商を卒業して古河合名に入り、倫敦出張所主任、日本仲鋼取締役兼支配人、古河電氣工業大阪仲鋼所長を経て、昭和十一年仲鋼共販に轉じて常務たり、同十三年日本故銅統制の設立と共に取締役に任じて現在に及んでゐる。

服部製作所・常務取締役

岩崎 大次郎氏

わが岩崎大次郎氏は帝都實業界の青壯派の錚々として、斯界に光彩陸離たる雄姿を翻へしてゐる逸材である。氏は現在服部製作所常務取締役に任じてゐるが、同社は帝都の城南蒲田の工場地區に時局産業の花形と謳はれつゝ、ある製作所で、氏の名采配下に賑々たる業績を示しつゝあり、また三島鑛業代表取締役、富樫金山取締役として鑛業、産金界に名を輝かしてゐる。昭和十三年昭和製鐵の創立に當つては之れに參畫して取締役に擧げられたが、同社の將來性は國策に沿つて頗る有望視されて居り、氏の一層の活躍が切に期待される。また氏は興國鋼線索道取締役に任じて噴々たる聲名がある。氏は明治二十六年四月の生誕で、神奈川縣人岩崎由次郎氏の三男であるが、同二十八年分家して一家を立て、ゐる。氏は幼年時より麒麟兒の譽れ高かつたが、長じて實業界に入るや、益々英邁の氣に充ち満ちて、行くとして可ならざるはなく、斯界躍目的となつて居り、四十八歳の男盛りの今後に於ける大成は期して俟つべきである。

東海製鋼・社長

岩崎 明三郎氏

愛知縣下實業界の明朗張切り男としてわが岩崎明三郎氏は、東海道筋を明るくしてゐる逸材である。誠に氏は屈託と云ふことを知らない朗かな性格で、その言行は常に衆に先じて光明的指導者となつてゐるから、何人からも氏は反感悪感を持たれるやうなことがない。氏は一年志願兵として兵役に服したが、大正九年陸軍少尉に任じられ、昭和五年には陸軍中尉に進んでゐる。氏は現在東海製鋼、大黒屋、旭土地各社長の椅子に就いてゐるが、萬事の指揮振りが軍隊式にハキ／＼して居り、しかもそれが高壓的でなく、明朗であり情味に満ちてゐるから、部下は悦んで氏の手足となつて働くことになり、従つて各社の事業は人の和を得且つ氏の識見、經營手腕は披群のものであるから、業績もまた隆々と揚がつてゐる。氏は明治二十九年二月愛知縣人岩崎茂三郎氏の三男として誕生したが、昭和六年家督を相續した。夙に愛知一中を卒業して實業界に入ったもので、本年とつて四十五歳、將來の大成が期待される。

大ニ洋紙・社長

岩崎 喜三郎氏

岩崎喜三郎氏は關西に於ける洋紙、紙器、紙布等各般に亘る紙界の元老格として、雷名轟き渡る巨豪である。氏は現在大ニ洋紙店、額田加工紙工業所、大ニ加工紙布各代表社員たる外、巴壁紙製造所、東邦印刷工場、リグナイト袋製造工業所各營業主として、三合名、三工場を自家壘籠中に收め、また大ニ洋紙、滿洲紙工の二社長として兩社に君臨し、且つ聯合紙器取締役に任じて、紙界の爲めに萬丈の氣を吐きつゝあるが、また一方大路織布貿易取締役、旭工業監査役として織布並に工業界にも驍足を伸ばし、且つ大阪紙器同業組合副組長にも擧げられてゐる。斯くの如く寧日なき活動裡に在る氏の精力の程は、たゞ／＼驚嘆に價する。しかも各社共に氏の妙諦を盡した名采配下に、賑々たる業績を示しつゝあるに於てをや。氏は明治十四年十一月大阪府人岩崎吉兵衛氏の長男として出生、同二十九年家督を相續した。夙に實業界に入り今日の大を成すに至つたが、先には日本製紙、中國製紙、馬關製紙各取締役に任じてゐた。

日本ゼニスパイプ・社長

岩崎 清一郎氏

岩崎清一郎氏は帝都實業界の花形として颯爽と第一線に活躍しつゝある逸材である。氏は慶大を出てなほアメリカに遊學した程の人物で、學徒としても十分押出せる資格がある上に、實業界の重鎮たる嚴父清七翁をバックに有してゐるから、青壯派の中では斷然光つた存在となつてゐる。現在氏は日本ゼニスパイプ社長たる他、豊國セメント、警城セメント各常務取締役、南洋貿易、岩崎清七商店、有隣生命保險、岩崎醬油、日本味噌、英自動車、東京廻米信用各取締役に任じて、卓拔無比の名采配を揮ひ、業界注目の的となつてゐる。氏は明治二十九年栃木縣人たる父翁清七氏の長男として出生したが、大正七年慶大法科を卒業し、後米國ハーバード大學に學び、歸朝後實業界入りしたが、東京米穀商品取引所取引員もやつてゐる。誠子令夫人は女子學習院出身の才艶で丹羽長徳子爵の長女である。また叔父龜次郎及び養弟爲三郎氏は共に栃木縣下知名の實業家である。氏は當年四十七歳、前途洋々として大成を期待されてゐる。

赤羽冶金・事務取締役

岩 瀨 悌氏

わが岩瀨悌氏は帝都實業界でも異色ある逸材である。異色といつても怪しいといふ意味ではない、五十一歳に達した今日でも若人の心を失はない、即ち世の多くの實業家達の如く老成者振らない、明朗健康な人物であると云ふことである。氏は赤羽冶金、東海貿易各事務取締役として、金屬工業及び貿易に活躍する他、西武鐵道取締役兼支配人に任じてゐるが、我々に氏が最も親しみを感ぜさせられるのは、氏自らがO.B.S.スポーツマンである上に、職業野球團の東京野球協會常務理事に任じてゐることである。また氏は敬虔なカトリック教徒であるが、決して嫌味たつぷりなアチラ趣味に感化されるやうなことがなく、純日本趣味の長唄哥澤を好み、また俳句をよくすることである。誠に氏の如き人物をこそ正しい意味で、近代日本紳士の範と云ふべきではなからうか。氏は明治二十二年七月東京府人岩瀨亮氏の三男として誕生、昭和八年令兄清氏から分家した。明治四十五年東京高商を卒業して實業界に入り、今日に至つてゐる。

東洋曹達工業・社長

岩瀨 德三郎氏

刻下の如き世界を擧げて大動亂渦中に在る秋に於ては曹達工業は特に重要性がある。蓋し戰時體制下に於ては重工業と相並んで化學工業は軍需の大宗を成し、諸化學工業にとつて曹達は必須のものであるからである。わが岩瀨德三郎氏は日本曹達、徳山曹達と共に本邦曹達工業界のトリオをなしてゐる東洋曹達工業社長として斯界の重鎮たる巨豪であるが、同社は自家用の大火力發電設備を有してゐるから、昨年来の乾天による電力飢饉にも被害少なく、隆々たる業績を示し、工業國策のために萬丈の氣を吐きつゝある。猶ほ同社は氏を初めとして氏の一族一門の岩瀨德郎、義郎、利子の諸氏が株主として持株の絶対過半数を握つてゐる。氏はまた同社の子會社たる東曹證券代表取締役たり、且つ徳山無盡共益社長にも任じて、金融界を牛耳つてゐる。氏は明治二十年八月千葉縣人岩瀨利右衛門氏の三男として誕生したが、大正四年分家した。學歴は大正三年の九大工科應用化學科卒業で、先には日本曹達工業事務に任じてゐた。

鐘淵紡績・長野工場長

宇野藤兵衛氏

宇野藤兵衛氏は、現時鐘紡長野工場長として敏腕を揮はれてゐる。大鐘紡は人も知る偉傑津田信吾氏の主宰する我が國重要産業の大事なモメントの一つである。だが、津田氏の希ふところは鐘紡の發展に留まるものではなく、廣く國家的見地よりみた紡績業の進展であり、また産業日本の伸張であることは、何人も忘れてはならぬことであらう。こゝに於てこそ當社の支柱、現長野工場長として活躍する宇野氏の存在も大なる意義を表すものであつて、氏の國家觀念、民族意識の強固さは既に定評あり、時局認識の正確さと事業に對して奔しり出る熱血とは社長津田氏の信頼を宛めてゐるものだ。遠眼遠識を大いに買はれ、今や大鐘紡の一翼を擔つて堂々と前進する氏の偉容を見よ。私慾なく金錢に恬淡にして常に職工の待遇改善や引退慰勞金の引上げ等に意を用ひるといふ風だから、長野工場の全従業員の信望たるや極めて篤い。最後に、氏は茨城の人宇野治郎兵衛氏の長男で明治二十二年生れ、慶大の出身である事を附記する。

桃中軒・社長

宇野秀吉氏

靈峯富士を望むこゝ靜岡の街に、その人ありと知られたる士族宇野秀吉氏がある。氏は沼津驛々辨で餘りに衆知のこと、今更云々を要としないであらう。扱、大阪府の人に河合親秀といふ人があつた。氏はこの人の四男として明治十八年十一月に出生したのであるが、先代の懇望により宇野家の養子となり、同四十一年に家督を相続したのである。早大専門部政治科に學び、明治四十四年に同校を優秀なる成績をもつて卒業、同時に事業家として實社會にスタートを切つたのであつた。業界にあつては自他共に許す躍進ぶりを發揮、久しく俊才の名を轟はれてゐたが、名取商會取締役に就任するや愈々人望篤く、全く業界の指導者として搖るぎなき地位を確保するに至つた。人格また勝れ、天稟の商才と併せて名實共に卓越せる才幹の所有者たる氏こそ、眞の事業家とも賞すべきか、今後の動向こそは業界こぞつて刮目すべきものがあらう。

山下汽船・九州支店長

鷗木健造氏

鷗木氏は大正六年度の東京高商專攻科の出身者で、現在山下汽船(株)九州支店長として活躍してゐる。山下汽船は云ふまでもなく、海運界の英雄山下龜三郎氏の主宰による優秀會社であるが、同社を始め海運業の凡てが、國家的に極めて重大な役割を持つてゐることは言を俟つまでもない問題である。今同社運航噸数は百十五隻八十七萬噸を數へ、その經營してゐる航路は數多の定期航路のほか不定期航路八十餘堂々斯界に臨んでゐるが、猶一層の航路擴張、新船建造をもつて時局下に一大飛躍を試みんとしてゐる。斯の如き同社に於て鷗木氏の素晴しき才腕は擧として光り輝き、目下押しも押されぬ一方の驍將として名聲を轟はれてゐる。顧みれば二十餘年、山下汽船生え抜きの人として本店勤務を振出しに横濱支店長等を歴任し、遂に九州支店長として榮位を擔ふに至つたのである。明朗潤達にして社員の信望篤く、これに號令して海運界に縦横の手腕を揮ふ氏に活躍を期待して止まない。時も時海運界活況の秋だ。

帝國製紙・取締役

上田信三郎氏

氏は今や帝國製紙株式會社の實權者として徐々に、しかも大なる改革を斷行しつゝある。大阪財界の立役者としての氏の役割は頗る大きく、統制經濟の確立の線に向つてその手腕は巧妙なる展開振りを示してゐるのだ。氏は明治九年一月に大阪府の人上田喜平氏の長男として出生したが、同四十四年に家督を相続し金融業を營んできた。その風貌一見茫洋たるが如く見えても大局を掴んで動ぜず、着々と地味に堅實に、事業家としての地盤の建設を成し遂げたのは、まこと偉なるかなと思はれる。直截簡明といはうか、所謂俊敏果敢なるタイプとは凡そ對蹠的な人物であるが、圓熟老巧さに於て無双であり、多難なる財界の轉換期に處して業界の進路を正しく指導して誤たなかつたのは、偏にそれ故でもあらう。黙々として倦まざる熱意を傾け、ひたすら業界に盡すこと多年、その功勞により昭和十二年十月、紺綬褒章を下賜せられたのである。この時局下にこの人あり、益々健邁邁進せられんことを希ふ次第である。

北海道酸素・専務取締役

上田良次氏

北海道酸素株式會社専務取締役として同社を牛耳りつゝある上田良次氏は、業務に精勵する傍ら土地の有志としても重きをなし、今日まで種々の公職に就いて篤行の士としても廣く知られてゐる。現に札幌商工會議所常議員として信望を厚うし令名を轟はれつゝあるのを見ても、氏の事業的手腕力量が如何に大きく期待されてゐるかをよく知ることができるといふものである。化學の日本、工業の日本も既に模倣時代を去つて堂々創造の力を以て擡頭しつゝある。かゝる秋にめざましき氏の進出も一臂の力を添へるものとして我等の期待は大きい。氏は兵庫縣人上田傳治郎氏の二男にして明治十三年十月に誕生、大正三年父君退隱の後を承けて家督を相続した。氏が北海道に於ける一勢力として今や赫々たる聲望を捷ち得てゐるといふのも、勿論同社の専務として經營はもとより、技術部門にも不斷の研究改良を怠らなかつた熱誠の賜物で、實に氏こそは商才、卓見兼備の名將とも云ふべきで北海道を開發した貢獻も洵に大きい。

大和製鋼所・社長

植松益市氏

重大時局に最も大なる役割を果しつゝある事業界に、一段と光彩を放つてその鮮やかな躍進ぶりを轟はれてゐる植松益市氏は、廣島縣人植松米造氏の二男にして明治三十五年九月生れである。現時は合名會社大和製鋼所の社長として、重工業界に一躍進出したが、軍需景氣の波を全面的に受けて益々社業は發展の一途を辿り、いまや正に盛況の極の感が深い。而して社長たる氏は八面六臂の活躍をなして征くところ可ならざるはなしである。氏のやうに業界に急激な擡頭を見せた人は、他に比類を見ざるどころだ。濃厚篤實にして情誼に厚く、まこと氏の如き人を人格者と云ふのであらうか、手腕、識見、共に卓抜なるは云ふまでもない。この國家的重大使命と、全國民の輿望とを双肩に擔ふ快男子植松氏が、今後如何なる方向に轉換するかは豫測し難いところだが、透徹した鋭い才能を閃かす氏が、必ずや吾々の期待に應へて堂々と飛躍し、覇業を大成し、業界の指導的地位に着くであらう事は間違ひのない事實だ。

大日本除蟲菊・副社長

上山英夫氏

醫學界の趨勢として所謂漢法藥の科學的研究が顯著になつて來たことは、注目すべき現象の一つとして擧げられる。現今醫學日本は世界を壓して堂々たる情況、茲に獨立的な皇漢醫法建設への聲が湧然として擡頭したことは洵に慶祝に堪へざる所である。大日本除蟲菊會社は本邦に於ける斯界の王座的存在であり指導的立場にある有力な會社である。上山氏はその副社長として、専心斯業の爲めに碎身の勞を辭せずして研鑽と指導とに努めてゐる。氏は和歌山縣の出身、明治三十二年の生れで、令兄は人も知る本邦貿易界の長老上山勘太郎氏で、除蟲菊會社社長をも勤め、英夫氏は其の女房役として活動して居る譯、氏は大正十三年京都帝大を卒業日本勸業銀行に入り検査役鑑定役大阪支店副支配人たりしも、昭和十三年六月退職して現職に就任したのである。至つて快活淡白であつて財界に稀な研究家で氏によつて創始された物も相當の數に上るといふ。時局に當つて優秀な國産の製出を官民共に希求するの秋、氏の奮起に待つ事大也。

内田證券・社長

内田賢二氏

統制經濟の強化は愈々自由經濟を歴史の彼方に押しやつてゆくか見えぬ。こゝろした社會狀態の中にあつて現や角くと批判されながらも投機市場は一日もその機能を停止せず、寧ろ活潑に動いてゐる。何と云はれやうと市場は健在却つて益々その機能の充足を要請されてゐるのだ。これは内田證券(株)社長内田賢二氏の如き常勝將軍が居るのを見て、その間の消息は自ら明であらう。氏はこの時局の趨勢に便乗して賣つて勝ち、買つて勝ち、斷然氣を吐く投機界の驍將だ。明治二十年六月生れ、愛知の産たる斯界の天才兒ともいふか、幼時より自ら進んで株式界に身を投じた人。現時名古屋株式取引所員でもあり頭腦明晰、行動機敏夙に相場道の達人と謳はれてゐる。加ふるに直截明朗、果斷決行、而も機略從横、がつしり大局をつかんで行くところ、斯界稀れにみる麒麟兒である。虚心坦懷、何等の策謀の野心もなく、しかも街はずためらはず、膽と腕とで押しつけてゆく氏の風格には全く大きい底知れぬものがある。

東京瓦斯電氣工業・常務取締役

内山 直氏

内山直氏が常務取締役の任にある東京瓦斯電氣工業株式會社は、その名聲の高きこと將に斯界を壓するかの觀があり、巨然たる偉容は颯爽として業界を風靡しつゝある。今や優秀なる製品は廣大なる販路網を擁して、業態いよく、殷盛を加へしめつゝあるが、しかし事をこゝに至らしめた内山氏の努力を思ふときそこに涙ぐまじき精進の跡があり、大きな功績のあつたことを見逃すわけにはいかない、今日同社が世界各國の工業界に對し少しも遜色を見せず、堂々工業日本の面目を發揮しつゝあるのも、内山氏の如き逸材があつたればこそで、工業界最近の躍進は正に躍進日本の姿其儘であると同時に、その躍進の態容は又同社の姿とも云へるのである。氏は長崎縣士族内山直己氏の長男にして明治二十二年二月に誕生、大正十二年に家督を相続した。大正三年東京帝大法科を卒業後十五銀行に入り、營業部長を経て昭和七年に東京瓦斯電氣に入社したもので、現在常務取締役たる傍ら諸會社の重役を兼てゐる。

内山商事・社長

内山 致 正氏

關西事業界の新進として現在内山商事株式會社、内山ビルブローカー商事株式會社を主宰しつゝある内山致正氏は、會計士としても名聲を馳せてゐた。關西財界と云へば名にし負ふ巨頭群立の地だけに、幾多錚々たる大財界人が覇を競ひつゝあるが、その關西に二城を築く英主たる内山氏は、未だ四十代の男盛りだけに、人生いよくこれからといふ逸物なのである。氏は東京府人内山正五氏の長男にして明治二十九年二月に誕生した。大正九年中央大學政治科を卒業後貿易等に從事し、同十一年には會計士を開業した。流石金融財政通として定評ある手腕を有してゐるだけに、實業界に人生のスタートをしてより今日に至るまで、些かの誤りもなく今や前記二社のほかに、合資會社三星商會代表社員、其他數會社の重役を兼て押しも押されぬ實績を示しつゝある。資性剛直を極むる中にも弾力性があり、何事に當つても異常の熱意をもつてグン／＼とものしていくところなど、氏の氏たる所以を躍如とせしめてゐる。

安全電機工業・社長

梅村 宗 吉氏

わが梅村宗吉氏は横濱メーカー界の長老格として巨星の如き光芒を放ちつゝある人物である。氏は現在安全電機工業社長として、時局股賑産業界のトップに活躍しつゝあるが、同社は獨特の製作技術をもつて斯界に鳴らしてゐる新興製作會社で、氏の老練なる采配下に隆々たる業績を挙げつゝあり、業界注目の的となつてゐる。また氏は原木組代表取締役としても噴々たる令名がある。氏は明治十九年二月茨城縣人たる大塚宗次郎氏の二男として誕生、同四十年同縣人梅村君江女の入夫となり、同四十一年家督を相続し、現在は神奈川縣に移籍してゐる。同四十二年東京法政大學を卒業して實業界に入り、今日の大成を遂げたものであるが、氏は温厚篤實の人格者として諸人の渴仰を一身に集めてゐる。現高江令夫人は前君江夫人の令妹であるが、夫人との間には八男一女の子寶があり、また慶應二年生れの養母キタ刀自は猶ほ健在されて居り、長男正氏は理學士で海軍燃料研究所に、次男實氏は農學士で東拓に勤務して居る。

旭電化工業・取締役兼技師

浦野 三 朗氏

京都帝大工學部に學び大正四年工業化學科を卒へた俊才浦野三郎氏は燃え立つ希望を以て旭電化工業會社に入リ、其の専攻せる知識を以て實際を體得し、茲に氏の實業界への地歩を得た。沈着明敏な氏の新鋭な活動は漸を追うて、認識を深めずには置かなかつた。營々致々として社業に精進し刻苦する一方、學究的な氏の性格は研究に對しても、後退を許さなかつた。そして京都帝大は氏に工學博士の學位を授けたのである。入社後二十有餘年撓まざる氏の精勵は社業に反映し其の業績も年と共に進展して氏有つての旭電化工業とまで言はれる重要な存在となつた。現在は同社に取締役兼技師として經營の實際を一握し健闘努力し、又同社研究所長として製品の改善上眞朝な態度を以て臨んで居る。浦野氏は其の性格から見て、豊富にして卓越せる識見を端的に實行する型の人でなく何處までも堅實第一主義で行くといふ方で然かも消極に惰しない妙味がある。キリストの信者として至誠一貫誠に業界稀な謹厚な紳士である。

梅田機械製作所・代表取締役

梅田 千代松氏

日支事變以來急速度を以つて向上一路を辿りつゝあつたわが重工業及び製作界は、歐洲再戦の勃發とその展開と共に依つて更に拍車され、今日の一大飛躍時代を現出するに至つた。勿論刻下の世界大勢は自由主義的資本主義を揚棄して全體主義的國家主義に進展しつゝあるから、國家統制力は諸物資の供給に極度の制限を加へてゐるから、重工業及び製作界も鉄鋼、銅鐵等の材料難の窮屈さはあるが、何んと云つて時局股賑産業界の花形として隆々たる發展向上を續けてゐる。わが梅田千代松氏は關西に於ける製鋼、製作界の重鎮として夙に聲名高き偉材であるが、現在氏は梅田製鋼所専務取締役並に梅田機械製作所代表取締役として、絶妙の經營手腕を發揮しつゝあり、兩社の業績はまさに旭日昇天の氣勢ひを示してゐて、斯界矚目の的となつてゐる。氏は明治二十五年一月三重縣人先代千代松氏の長男として誕生したが、同四十五年家督を相続し前名傳一を改めて襲名した。氏は本年とつて四十九歳、その大成が待望されてゐる。

梅鉢車輦・常務取締役

梅鉢 補 太 郎 氏

關西メーカー界に明星の如く輝く逸材にわが梅鉢補太郎氏がある。氏は現在梅鉢車輦常務取締役に任じてゐるが、同社長後藤國彦氏は東京の京成電軌に在るから、同社の實務萬端は全く氏の指揮下に遂行されてゐるが、流石に嚴父譲りの氏の經營的才腕は見事な采配振りをして、業界を矚目せしめてゐる。同社は鍛冶屋から叩き上げた立志傳の巨人たる嚴父安太郎翁の創業に關はり、汽車其他鐵道要具製作を爲した梅鉢鐵工所の後身で、昭和十一年株式改組と共に梅鉢車輦と改名したが、京成電軌の仔會社として同十三年後藤氏を社長に迎へ、氏は常務、令弟義尚氏は取締役兼營業部長、嚴父安太郎翁は後見として相談役に就任したのであつた。猶ほ氏は南海興業代表取締役としても聲名噴々たるものがある。氏は明治二十四年六月大阪府人梅鉢安太郎氏の長男として誕生し、關西學院を中退して實業界に入り、嚴父の梅鉢鐵工所に在つて腕を磨き、今日の大成をしたもので、芳子令夫人は堺市の名醫竹村清雄氏の令妹である。

千代田化學工業所・社長

浦野 誠 氏

千代田化學工業所が製藥界に寄與する所蓋し多大なものがある。我が國藝界、農産界が要する殺虫殺菌防腐等の藥劑は實に莫大である。一度之等藥劑の缺乏に遇はんかその生産上及びぼす影響の至大なるを思ふ時、浦野氏の偉大な存在を明確ならしめる。氏は長野縣の産、明治四十五年東京帝大醫學部藥學科を卒業し直ちに實業界入りをして、只管實地の試練を積み手腕を磨いて將來の基礎を築いて行つた。機は正に熟し大正十一年自ら中心となつて、千代田化學工業株式會社の發祥を見るに至つて、茲に多年の研鑽を自らの事業の上に傾注することが出来た。爾來不屈不撓不退轉の活躍を續け業界に於ける新人として矚目せられ、其の將來を約束せられる重要な地位に進んだのである。臨目も觸らず眞一文字に工業所の生々發展に心肝を砕いて居るあたり氏の眞摯な面目が髣髴として來るのを覺える。氏の鞏固な意志力は必ずや巖をも貫くであらう。由來藥劑の輸入に俟つもの多き本邦藥業の貧弱さより救ふべきは氏の一使命でもある。

梅岡本店・社長

梅岡 平 七 氏

わが梅岡平七氏は帝都鋼鐵商界の白眉たる梅岡本店社長として、斯界に覇を稱へつゝある巨豪である。梅岡家は舊幕時代から江戸に住する豪商として知られてゐたが、先代平七氏が初めて金物商を創業し今日の大梅岡の礎を基いたのであつた。氏は明治二十六年八月の誕生で、先代平七氏の二男たる分家梅岡正吉氏の養子であるが、大正六年先代の跡を承け家督を相続すると共に前名正太郎を改めて襲名した。祖業を繼いで鋼鐵商を營み、梅岡本店社長たる他、梅岡本店合資、梅岡殖産合資各代表社員として家礎を固め、また實業界に乗り出して、鐵業銀行取締役、特許製鐵、大日本工作機製造、東京鋼鐵各監査役に任じ、噴々たる聲名を馳せつゝあり、また東京府多額納稅者に列してゐる。重令夫人は梅岡殖産出資社員にして、政界の大長老澤澤博士の長女である。また氏の養伯父正吉氏は同業の鋼鐵商で、梅岡正吉商店長たり、従兄源太郎、同忠之助氏は何れも嚴父を輔けて、帝都實業界に名ある人達である。

日本徴兵保険・名古屋支部長

漆島 秀生氏

徴兵保険の歴史は、まだ新しいそれだけ又前途もある。今日我が徴兵保険界の双壁と稱せられる日本徴兵保険の最近の発展には目覚ましいものがあり第一徴兵保険を摩せんとして居る。漆島氏は實に其の第一線に活躍し著々業績を擧げ、金城下に燦として光を放つ斯界の麒麟児ともいふべきである。大正十三年の東京帝大法科の卒業で斯界の新人として囑望されて居る。氏は學志を出るや直ちに日本保險會社に入社し、實務の修練に従ひ東京支店員、大阪支部契約係長、福岡支部長と順調に發展し、昭和十年中京支部長の要職を擔ふこととなつた。氏は篤實温厚の中に果敢な一面を包藏し従つて機略もあり機智にも富むと言つた保險界打つて付けの性格を兼備して居る。明治三十四年宮崎縣出生の春秋に富む少壯氣鋭といふべき年輩で今や日本徴兵保險會社の重要な存在である。加ふるに驚くべき讀書家で内外各方面の書籍を涉獵し絶えず新知識の吸入に怠らず蓋し其手腕の非凡な淵源をなすことは争はれぬ事實であらう。

山下汽船・横濱支店長

雲野 午三氏

個人經營を以て日本郵船、大阪商船と覇を争ふ山下汽船會社の偉觀は今更贅言を要しない。大正七年東京高等商船學校を卒業した雲野午三氏は一代の快傑山下龜三郎の麾下に馳せ第一次世界大戰後の我が海運界の好調に掉してひた向に進んだ。山下汽船に入るやシャトル在勤を命ぜられ、次いで波蘭土・桑港・倫敦各支店詰となり、海外の事情に精通すると共に透徹明敏な頭腦と相俟つて、其の才幹手腕は著しく洗練せられ、信望を深めた。果せる哉社長山下氏の認識する所となり、昭和十一年八月拔擢せられて横濱支店長に起用せられるに至つた。入社以來約二十年、精勵刻苦の結晶である言ふまでもない。今や横濱海運界に於ける重鎮として多年磨練した手腕を縦に横に揮ひ愈々信望を高めて將來の大成を待望されて居る。豪放恬淡抱擁力もあり、横濱支店の張切つた空氣は氏の人格の反映と言つて過言ではない。山下名社長の下に、雲野名支店長を戴く店員は多幸であることを悦び、其の業績の隆々たるを更に悦ぶものである。

千代田生命保險・臺灣支部長

江森 立夫氏

戰時體制下にある吾が經濟界は舉國一致の態様を整備すると共に圓滑なる統制經濟政策遂行に萬全を期してゐる。經濟界の一翼生保事業に於ても同目的の完徹のために奮闘努力してゐるは云ふ迄もない。だがかゝる時局下にあつて生保界は一段の飛躍發展を示してゐるが、これも斯業の伸張性の現れでもあらうか、大いに刮目すべきであらう。吾が國五大生命の一、千代田生命の臺灣支部長江森氏は生保事業發展の功勞者として偉大なる勢力の持ち主であつて、同時に斯業經營の良き指導者でもある。氏は福岡縣人にして明治十九年の生れ、慶應理財科を四十四年に卒業するや直に大倉商事に入社したが昭和六年千代田生命に轉じ、本社會計課勤務、大阪支部次長、横濱支部長を経て十三年二月に臺北に渡り活躍を續けてゐるのだ。氏は全く同社の長老ともいふべく、社業發展の爲に粉骨砕心、献身的努力を續けてきた偉大なる生保界の闘士。時局下氏の今後益々の躍進と健闘とを、今こゝに衷心より祈る次第である。

日本窒素肥料・事務取締役

榎並直三郎氏

氏は阪神財界の巨星榎並充造氏の義兄で亦神港に雄飛する傑たる存在である。兵庫縣榎並直五郎氏の二男として明治十年の出生、東京帝大法科を卒業したのが明治三十八年氏は温厚篤實の士で爲す所凡て中庸を得取て策を弄せずとも行ふ所事誼に適ひ、従つて世人の尊信自ら集まるといつた人格者である。現在、日本窒素肥料、朝鮮肥料、日本窒素火藥、朝鮮窒素火藥等各會社重役として、事變下に於ける須要産業面に活躍し國策の推進に向つて運籌に至衷を捧げて居る。天資英邁に加へて螢雪の功を積み年と共に練達圓熟した手腕力量と高遠な理想とは、時局に對しても深い洞察を以て對處策の發見に努める等國士的風格を備へ財界の長老たる用意の裡に多大な寄與をなすつゝあるは特筆すべきであらう。力に矯らず、造詣を街はず著々實績を擧げて、鉄後の奉公に精進する殉情は氏でなくては出来ない事である。六十代ではあるが飽くまで健康で旺盛な活動力を持たるゝ氏の平素の心構へも窺はれて、自ら畏敬の感を深くする。

三井物産玉造船所
東京出張所支配人

江尻常三郎氏

三井物産は人物搖籃の温床とも云ふべく人材の輩出はまことに數知れぬほどの偉容を呈してゐる。江尻氏は元來三井物産生え抜きの人物であるだけに、三井物産のビジネスマンとしてその傘下に在ること既に三十餘年、致々たる努力と不撓の精勵ぶりは遂に氏をして今日の樞位に在らしめたもので、三井を背景に萬丈の氣を吐く氏の勇姿こそまことに懦夫をして起たしむるの概がある。氏は愛知縣の産、江尻玉五郎氏の三男にして明治二十一年に誕生した。夙に實業界を志し明治四十二年東京高等學校を卒業するや、直ちに三井の傘下に馳せ參じた。斯くて三井背景に活躍の勞を惜しまなかつた氏だけに、その永き物産生活には幾多の大きな功績を残して來てゐる。而もその功をよく認められたればこそ、今日玉造船所東京出張所支配人として今をときめくに至つたもので、業界の事情通たると共にその手腕力量も夙に定評のあるところで、著々と實績を収めつゝあることはもとより論を俟たないところである。

下野醬油・社長

江部 順治氏

我國醸造界の一頁を飾る人に江部順治氏の在ることを見通してはならぬ。氏は秋田縣の産、高堂兵右衛門氏の五男にして明治十六年一月に誕生、其後先代惣四郎氏の養子となつて明治四十四年に家督を相続した。明治三十九年東京高等工業學校應用化學科を卒業後、斯業に携はつたものであるがその熱意のほとばしるところ、技術の蘊奥を極め斯業發達のためには献身的努力を惜しまず、只管斯界のリーダーとして一貫して進んで來たのである。氏が今日下野醬油株式會社長並びに下野酒造株式會社事務取締役の任にあつて活躍しつゝあるのも、まことに適材適所の感深きものがあり、又氏ならではの斯業一筋道を忠實に歩んで來たその堅實性を再認識できるのである。しかし氏は慧星の如く昭和の新時代に忽然と現はれたのではない。やがて影を薄くして消えていく流れ星に非ずして、永久に輝く恒星なのである。未だ六十には間がある。一方の旗頭として斯界に重きを成しつゝも今後とてその潑瀾さは愈々發揮されやう。

大阪火藥銃砲・社長

小倉 眞三氏

氏は烈々たる闘志を抱く雄將である。氏の略歴をこゝに繕くと、明治二十二年の二月に、福井縣人小倉又五郎氏の三男として生れ、同四十四年に兄禮三氏方より分家をしたのである。夙に火藥商に従事してゐる事業的才腕を發揮してゐたが、大正六年同業者と共に大阪火藥銃砲株式會社を創立して常務取締役に就任、社務一切の指導の任に當つた。また現時は同社長として信望極めて篤く、傍ら本多機械製作所、興亞工業會社社長としても目覺しき活躍を續け、この劃期的時代に即應して隆々と成長前進してゐる。氏の亡父又五郎氏は舊小濱藩の藩士で謹嚴剛直の人格者として知られ、同縣松原村長を勤績し、選ばれて縣會議員となり縣政に貢獻した傑物であつたが、眞三氏もこの偉大なる嚴父の深甚なる薰陶を受けた人だけであつて資性温厚篤實、公平無私な實力派の俊秀第一人者たり。卓抜なる識見と、優秀なる材幹と、類稀なる敏腕とを併せ持つた氏こそ、重要な軍需工業の指導者として正に最適の逸材であると思はれる。

丸三鑛業・社長

小倉大四郎氏

關西實業界の錚々としてわが小倉大分縣生山幸太郎氏の四男として生誕したが、同三十一年大阪府人たる小倉逸平氏の養子となり、同四十二年家督を相続した。同年神戸高商を卒業したが、直ちに父業を繼承して丸三商會名代表社員となり、廣く實業界に乗り出し、現在は丸三鑛業社長並に丸三耐火煉瓦專務取締役として、鑛業界、實業界に活躍しつゝあるが、流石に先代に見込まれて養子となつた位だから、その氣宇は剛氣にして明朗、よく諸人を心服せしめる人徳あり、従つて部下の信頼も一しほであるから、氏の事業は人の和を得、加ふるにその經營的才腕は拔群なるものがあるから、何れも賑々たる業績を擧げて、業界美望の的となつてゐる。猶ほ氏は先に日和商會常務取締役、日吉會社監査役に任じてゐた。氏は本年とつて五十八歳、實業家として正に脂の乗り切つたところ、その家庭も六男一女の子寶あり、幸福に充ち満ちてゐる。

大和運輸・専務取締役

小倉康臣氏

小倉康臣氏は現時大和運輸、富士自動車、兩株式會社の専務取締役としてその社業建設に輝かしい成果を築きつゝある人である。氏は東京府先代小倉善兵衛氏の四男にして明治二十二年十一月に生れたが、後前名八三郎を改めて同三十年に兄善兵衛氏より分家したのである。業界に身を投じて既に久しく、俊材としてその敏腕ぶりを謳はれてゐたが、資性重厚篤實にして研究心の強きは、氏の指導下に集まる諸社員の定評あるところ、信望頗る篤い。従つて同社専務としての人氣は素晴しきものあり、氏の爲ならば一身を呈しても可なりとする社員も數多くありとか聞く、まこと一城の主としての大器的深さを兼備した逸物で、現事業界にあつて困難な運輸業、自動車業を切り廻すには最適な人材であらう。今までの氏は、その經營手腕の堅さ、地味さから、派手やかな名聲こそなかつたが、卓抜なる識見と不撓不屈なる努力とが、まづたくの強味として起用せられ、それ故に重責を擔ふ氏に期待するところ尤なる所以である。

大阪帝國大學教授

小津修造氏

大阪帝國大學教授として赫々の名譽ある醫學博士小津修造氏は有名すぎるほど有名である。氏は滋賀縣人小澤澤達氏の長男として明治十三年四月に生れたが、正四位勳二等といふ肩書を持つ貴公子である。東京帝國醫科大學を明治四十年に抜群の成績で卒業、後大學院に進み四十二年には帝大助手となつて研鑽相努めたが、同年大阪府立高等學院教授に就任した。また大正二年には當時醫學の先進國とされてゐた獨逸に留學し、二年を経て同四年に歸朝、同校の昇格と共に大阪醫科大學教授兼附屬病院第二内科醫長となり、六年には多年の刻苦勉勵遂に成つて醫學博士の學位を受けたのであつた。そして昭和六年には大阪帝國大學教授に就任して醫學部長に補されたのである。氏の半生は實に光輝に満ちて居り、我が國學界の權威者として全く尊敬に價する人格者である。この輝ける榮位を獲得した熱血を注いだ研究の成果にほかならぬが、それよりもつと大きな原因は氏の廣く且大きな人類愛の賜であらう。

磯村産業・専務取締役

小田村有芳氏

わが小田村有芳氏は帝都實業界の長老格として、その重厚篤實なる人格を敬仰されてゐる巨人である。現在氏は磯村産業専務取締役たる他、保土谷曹達、東洋曹達各監査役にも任じてゐるが、流石に氏は永く辨理士を業として来たゞけに計數に明るく、英邁なる才腕と相俟つて各社共に抜群の好業績を示しつゝある氏は明治十二年十二月山口縣人磯村應氏の五男として生誕したが、東京府士族たる先代希家氏に見込まれて養子となり、大正六年先代の後を承けて家督を相続した。先是學習院から一高を経て明治三十九年東大機械工學科を卒業して、辨理士となり實業界に乗り出し今日の大を成したものである。氏は眞鍋十蔵男の令弟であり、また令弟磯村利水氏は東北水産社長たる他幾多會社の重役として實業界に令名あり、また氏は樺取三郎男の令妹たる治子令夫人との間に、五男四女の子を寵まれてゐるが、各兒共に秀才揃ひでその家庭は美むばかりの幸福に満たされてゐる。時節柄氏の自重を切望して止まない。

日新鑛業・代表取締役

小幡睿治氏

氏は福井縣人士族小幡三九郎氏の長男にして明治十一年五月に誕生し同四十三年に家督を相続した。今や日新鑛業並びに北鮮鑛業株式會社代表取締役を始め日本マグネサイト化學工業利原鐵山株式會社専務取締役其他の重役を兼て斯界の重鎮と仰がるゝに至つたのも氏が凡器にあらざると共に、眞摯なる努力家であることを無言の裡に語るものであり、業界に於ける錚々たる人物として眞に堂々たる貫録を備へて今日に及んでゐる。もとより大成を期し斷乎たる決意のもとに郷關を出でて精進しつゝあつた氏のこと、「艱難汝を玉にす」の颯爽たる意氣は勿論學業の上にも或ひは事業經營の上にも、遺憾なく現はれて、螢雪の功は今日では搖ぎも見せぬ堅陣のほどを示し、時勢の波によつていよゝ好調を傳へられてゐる。氏は温厚篤實にしてその恬淡なることは財界人として異色ある存在をなしてゐるが、一方なか／＼剛毅で所謂負けずきらいなところがあつて、ねばりの強いことに於ては何人と雖も氏に對し一步を譲るものがあらう。

小原鐵工所・社長

小原敏一氏

成功といひ出世といふも小我の満足のためであつてはならない。世のため人の爲國のために財を得、位置を得たいと思つてこそ許されるのである。自分のための立身成功はこの世の不公平を來すばかりで、寧ろ害こそあれ益もないものである。氏の如く株式會社小原鐵工所社長といふ權位に在り、而も自己の社會に對する經綸を果すために役立てられてこそ、眞にその位にある人たり得るのである。氏は大阪府の産、小原秀太郎氏の二男として明治二十六年三月に誕生した。明治四十二年大阪高等工業學校専攻科を卒業後鐵工業に従事したが、常に烈々たる國家意識に立脚して活動をつけたといふ熱血漢で、その遠大なる計畫に勇往邁進する果敢な實踐力は、夙に大事業を達成するの器として期待せられつゝあつたのである。さればこそ昭和九年株式組織に變更と共にその社長となり、輝やける今日を迎ふるに至つたもので、げに斯界の王座を目指して奮迅目覺しき氏の絶妙なる採配こそは、將に驍將をもつて響ふべきであらう。

北辰電機製作所・常務取締役

尾形祐壽氏

東都電機業界に斷然異彩を放ち、従横に活躍しつゝあるのが株式會社北辰電機製作所である。しかも近代組織の下に合理的營業をつゞけつゝあるがため、業績も向隆の一途をたどつてゐる。しかし事業の經營には必ずや苦難が伴ふものである。その苦難を踏み越えて來た經營の逸材こそ實に同社常務取締役たる尾形祐壽氏である。元々商才に秀れた氏が永年の經驗を加味し、手腕を揮つてゐるので經營をあやまるなどいふことは毛頭ない、氏は山梨縣の産、尾形良行氏の長男として明治二十年七月に誕生、大正十五年に家督を相続した。明治三十九年横濱商業學校卒業後住友銀行に入り、同行四谷深川新橋兼内幸町各支店等を歴任、後之を辭して北辰電機に入つたものであるが、その格勳精勵ぶりは漸次上長の目に止つて果進を重ね、遂に常務の椅子にあげられたものである。内外の信望を一身にあつめてゐるくらいであるから社内の實情にも明るく、堅實經營主義者としての前途に幾多の光明を添へてゐる。

京北電機製作所・社長

尾關篤二氏

株式會社京北電機製作所社長として、帝都の一角にその偉容を誇りつゝあるのが尾關篤二氏である。流石に名實共に同社の指導者として立つてゐるだけに、その堅實主義は業界に於ても厚い信用をもたらし、その地歩も牢として抜くべからざるものがあり、社業をして大磐石の重きを成さしめてゐる。したがつて業績にも大いに見るべきものがあり、次いでの大飛躍を期待されてゐるのも、一にその才腕による健闘の賜物と云はねばならない。されば今後に於ける氏の圓熟せる手腕と蘊蓄を傾けての活躍こそ刮目して見るべきものがあり、斯業のために終始一貫その根深い堅實主義こそは、氏をして一層本格的な舞臺に立たしめるであらう。氏は廣島縣人尾關仙吉氏の長男として明治二十三年十一月に誕生、大正五年に家督を相続した。氏はたゞ營利のみを遂ふやうな人物ではなく、工場も大家族主義に立脚して従業員を厚遇し、業務多忙の合間々にもよく社員の上に氣遣ひしてゐると云はれ徳望厚いものがある。

大阪海産物・専務取締役

織田金吉氏

多年海産物卸商を営みつゝあつたゞけに、氏が大阪海産物株式會社専務取締役に在ることは、將に適材適所の感を添へてゐる。氏は大阪府人荻谷太郎兵衛氏の三男にして明治二十六年十一月に誕生同三十七年に先代富吉氏の養子となり、大正七年に家督を相続したものである。氏は早くより海産物界の雄飛に志を立てたが、刻苦奮闘よく闘ひ抜いて、斯業發達の端緒を拓いた。あらゆる辛苦に打ち克つて來た人だけに、實に圓熟味豊かに酒脱の妙味を加へ、しかも温厚篤實、何人に對しても温容をもつて接し、俠血にして同情心に富んだ人物である。氏の事業經營ぶりは、寧ろ地味にさへ見える堅實主義をもつてなされてゐるが、内には剛膽俊敏の氣宇を備へてゐる典型的な實業家である。更に鍊達な才腕に至つては既に業界の折紙附で、その優れたる智囊の牙へは、何れの事業に携はらしても成功を招來するとさへ云はれてゐる。以て氏の才腕のほどが明らかであり、今後の飛躍こそ見ものである。

大倉商事・専務取締役

大倉彦一 郎氏

大倉商事専務取締役として財閥大倉の一翼を擔ひ少壯の鋭氣満々たる大倉彦一 郎氏は時代の精鋭として財界に鮮かな足跡を印してゐる。氏は大倉の一門たる条馬氏の長嗣子として明治二十八年五月出生、夙に慶應大學に學び大正七年卒業と共に大倉組倫敦支店詰として勤務し其の間具さに海外の狀勢の實際を研究調査し滯英十年にして歸朝し現職に就任したのである。氏は大倉商事會社を母體としその直系傍係諸會社の要衝に當り、圓轉自在な腕の牙えを見せてゐる。氏を目して單なる名義を出す重役と斷ずるは當らざるもので、氏が自ら胸を陣頭に進めての堂々たる武者振りは明敏穎智そのものである。財閥大倉が一門に知識を養成し其の事業を擔當せしめ隆々たる今日を招來した事は頗る賢明な策である。時流の推移に順應し常に新らしき裝備を以て財界の先驅をなす大倉財閥こそ無限の榮えをなすであらう。漸次大成に向つて精進しつゝある大倉彦一 郎氏の前途は洵に洋々たるもので刮目して期待すべき逸材である。

廣島汽船・専務取締役

大島 孝 吉氏

いま時局下産業界にあつて實力派の人々を目されてゐる堅實な財界人も多數にあるが、その中で特に目立つて大きな存在を示してゐるのは廣島汽船株式會社専務取締役、大島孝吉氏であらう。氏は文字通り獨立獨歩今日の地位を築き上げた人で何らの強力な背景もない。明治十七年四月に出生した氏は、大阪府人大島幸七氏の長男である。夙に業界に身を投じて荊の道を歩み続け、俄然大阪岩井商店、太田興業各取締役を躍進し、更に現時廣島汽船専務として全員指導の任に當つて居り、傍ら海南産業(株)の取締役も兼ねて颯爽と前進してゐるのだ。元來が資本家でもなければ、さりとて親譲りの財産があつたわけでもなく、全く此の大成をなしたは不屈なる力と熱の賜であらう。その過程は悪戦苦闘、努力による結晶の文字につきる。また氏は寸暇を割いて植物栽培に自適し園藝を愉しんでゐるが、その反面政治通として知られ、社員のみならず接する人には必ず親しみを覺えさせる一徳がある。洵、逸材である。

大山貿易事務所・社長

大山 綱 國氏

重厚性を纏はれて偉大なる存在を示しつゝある大山氏は、南國特有の放膽なるところが有り、しかも大人物たるの風采は躍如たるものがある。氏の祖先は代々舊鹿兒島藩主島津家に仕へた名家で、先代に當る父君綱業氏の時に至つて北海道司獄官となり、後帝國鐵道廳書記に轉じ在職永きに亘つた。氏は明治二十年二月に誕生し同四十二年に家督を相続したもので、夙に大阪高等工業學校造船科を卒業し、直ちに川崎造船所に勤務した其後社命を受けて英國アームストロング造船所出張、つづさに造船術の奥儀を會得して歸朝、いよく技師として艦船建造工事を監督しつゝあつたが、大正四年再び農商務省海外實地練習生として米國に派遣せられ、ニューヨークに於て見學すること數年に及んだ。斯くて歸朝後は本邦造船所の聯盟を畫策するなど、斯界に貢獻しつゝあつたが大正八年遂に獨立して造船所を設けるほか、黒崎塗業株式會社を創立して其取締役に就任、株式會社大山貿易事務所社長と並び立つて大いに名聲を揚げてゐる。

京濱コークス・常務取締役

太田 亥 十二氏

京濱コークス株式會社が業界に於て斷然出色の存在をなしてゐるのも、之を引立てる同社常務取締役たる太田亥十二氏の堅實果敢、能く渾然と調和したる絶妙の手腕にほかならない。同社の絶體的搖ぎのない信用と地盤とは、とりもなほさず太田氏に對する絶體的信頼と云つても過言ではなく、その過去を顧みれば先輩の訓育を眷々服膺して譲らず、好調に乗る猪突を避け、必ず合理的堅實をもつて進み來たつたことがよく窺はれるのであるが、つて事の探斷に當つても慎重に慎重を期して、不測の損害を受けぬやう萬全の注意を拂ふが如き用意の周到振りを示し、只管業績の向上を計ると云つた寸法である。氏は石川縣の産、太田徳太郎氏の長男にして明治二十年十二月に誕生した。明治四十年慶應理材料を卒業後、早川千吉郎氏の秘書を務め、更に横濱の原富太郎商店勤務を経て株式會社巴里院取締役となり、次で京濱コークス常務を始め三星製藥、中野商店各株式會社取締役として令名を博するに至つたものである。

三井物産・大連支店長

大塚 俊 雄氏

三井物産(株)大連支店長大塚俊雄氏は物産生え抜きの人。氏が同社に入社したのは大正三年で、實に二十七年間を文字通り刻苦精勵、當社の興隆のために働いて來た。氏は明治二十三年二月に福井縣人大塚親俊氏の三男として生れ、大正三年に東京帝大法科を卒業し、爾來三井物産の人として活躍、將來大成すべき修業を積んだ。青島支店長を経て昭和十一年七月には京城支店長に轉じ、同十四年二月に大連支店長を命ぜられたのである。この英才大塚氏の活躍振りは、全く上下の信頼を集め名聲噴々たるものであるが、私慾なく終始一貫、三井物産のために、はたまた日本貿易のために、努力奮闘してゐるのだ。この二十數年間の歴史から見れば、氏が大三井物産の大連支店長たる榮位を獲ち得たのは何の不思議もない。寧ろ當然の歸結ともいふべきだ。またその辣腕にも拘らず、極めて温厚な人格者で、やがて天下の大三井の支柱たるべき人物として、各方面から期待されてゐる。尙一層の健闘と雄飛を切望する次第である。

富士通信機製造・専務取締役

大山 喜 四 郎氏

氏は山形縣大山利兵衛氏の六男にして明治十八年十一月に誕生、大正十五年に分家した。明治四十二年東京帝大工學部電氣科を卒業し同四十三年に逓信管理局技師に任命された。それより逓信技師、逓信局技師、臨時電信電話建設局技師、仙臺、名古屋、大阪等各逓信局工務課長を経て東京逓信局工務課長となつたが昭和十年に退官し、同年富士電機製造會社電話部長に就任し華々しく事業界へと再出發なすに及んだ。もとゝ逓信界に在つて赫々たる功績を擧げられつゝあつた氏のことはあり、其間に電信電話線路材料研究の爲、米、英を始め各國に留學し昭和四年更に電信電話事務視察のため歐米に出張するなど、氏の蘊蓄が斯界に於て如何に冠絶したるかをよく物語るものである。現に富士通信機製造株式會社専務取締役として同社の存亡を双肩に擔ひつゝあるほか、東北金屬工業株式會社取締役並びに東京電氣株式會社監査役等を兼ていよく濶淵たるものが有り、正四位勳三等の榮光は燦然としてその功績を輝へてゐる。

房州天然瓦斯・社長

太田 一 夫氏

機械工學に於ける新進として太田一夫氏の活躍こそは、まことに激測として斯界に清新の氣を注入するものである。氏は東京府人太田質平氏の長男として明治四十二年四月に誕生した。昭和七年日大工學部機械工學科を卒業したが、翌八年には早くも化工燃油研究所を創立して、先づ初陣の華々しさを展開させた。斯くて新興の銳氣はいよゝあがり、些かの隙もない經營ぶりは加速度的進展ぶりを示し、昭和十二年には遂に株式に改組する機運を招來し、専務取締役に就任すると共に更に餘力をもつて房州天然瓦斯株式會社社長、太田合名會社代表社員、埼玉精機製作所取締役等の任にあつて總てを督勵して積極政策の一本道を颯爽と歩みつゝある。學窓を出てより近々十年に滿ちして斯くも華々しき進展を示しつゝあるといふことは、氏の才幹が如何に卓越せるものであるかは語らずして察知し得るものであり、更に今後飛躍を期待せられるに至つては、將に事業界の新星と稱ふるに相應しき存在である。

大平洋炭礦・技師

太田 恭 平氏

氏は愛知縣人太田龜三郎氏の令息にあたり、明治十九年十一月に誕生した。夙に英國に留學シグラム・ユバシチー探礦科に學び、優秀なる成績をもつて之を修了するや直ちに歸國し、その蘊蓄をひたすら事業界へと傾けるのであつた。現に太平洋炭礦株式會社技師として精勤する一方、東邦探礦株式會社取締役兼支配人、茅沼炭礦株式會社専務取締役、鋼路埠頭倉庫株式會社常務取締役、木村商事株式會社支配人等を兼てその進出に驚異の眼をみはらせつゝある。而もそれに伴ふ關係人等は何れも好況を示し、事實上の指導者たる氏も巧みに之を統率し、その上經理方面にも遠眼を注ぎつゝある。したがつて氏の実に前記諸會社經營上の推進力として重き役割を果すものであり、經營の強靱性を加へる上に最早絶體不可缺のものとなつてゐる。氏が事業界に光りを増して來たのも、その據點は云ふまでもなく大平洋炭礦で、それを足場に驕足縱横、今や大陸にも呼號せんとしつゝある威風たるや將に颯爽たるものがある。

大福海上火災保険・専務取締役

太田 貞 巳氏

明治四十年慶應義塾政治科を卒業後、
保険界に入り、爾來烈々たる大望を抱く氏の精勵は、はたの眼を引くのに充分なるものがあり、最初の一日から既にその意気込みがちがつてゐたのである。しかも十年一日の如くあくまで研究的な修練と撓みなき經營上の努力とは、遂に大福海上火災保險株式會社をして獨歩の地位を守らしむるに至つたものである。我が保險界には各々その地位を擁する群雄が播居しつゝあるかの如き觀があり、何れが優り何れが劣るとはにかに判別し難きものがある。之等の業者が互に勢力の維持擴張を圖る建前から云つても、何れが指導的立場に置かれるやうになつても喜ばない傾向があるといふことは寧ろ當然な事と云はなければならぬ。氏は埼玉縣土族太田元章氏の長男で明治十五年三月に誕生、大正七年に家督を相続したもので、慶應を出ると東京海上火災保險會社に入り大阪支店に於て平生飢三郎會長の下に取締役兼支配人となり、昭和三年に大福に轉じ同十一年に専務に就任した逸材である。

ブリヂストンタイヤ・常務取締役

太田 茂 實氏

ガンバリイストとして音にきこえたブリヂストンタイヤ株式會社常務取締役太田茂實氏は、福岡縣の人武末富次郎氏の二男として明治十六年十一月に誕生、同四十四年に先代トモ子氏の入夫となつて家督を相続した。學業を卒へるや直ちに實業界に入り日本紡織機、昭和絹糸、太藏實業等各株式會社常務取締役を経て現在のブリヂストンタイヤ常務並びに東京交通株式會社取締役を兼ねるに至つたもので、氏の場合一朝にして事成つた所謂親の七光りを浴びた御曹子連とは、根本よりその立場を異にする。したがつて氏が牛耳るブリヂストンタイヤの進出には鮮やかなるものがあり、斯界に一步くと堅實な歩みを見せてゐる。今日我經濟界が統制經濟から更に計畫經濟へと、時代に伴なつてめまぐるしい變化をつゞける秋、往年の放漫經營に代る科學的經營の現はれとして同社の如きが、據頭しつゝあるといふことは實に近代的經濟體制の大きな反映であると云はなければならぬのである。

昭和エーテル・社長

太田 惣 七氏

醸造界の逸足として太田惣七氏の名を見逃がすわけにはいかない。曩に大日本醸造株式會社重役として令名を博してゐたが、今や驥足のおもむくところ昭和エーテル株式會社長並びに無水酒精、昭和酒造各株式會社取締役其他の重役を合すれば、何人と雖も業界隨一の評を否定することはできない。ことほどさやうに氏の手腕には既に定評が存し、その才腕の示される所常は社會の進展が著々と具現されつゝあるのだ。氏は岐阜縣の産、小野木助次郎氏の令弟にあたり明治十年二月に誕生、同三十二年に先代ひさ子氏の入夫となつて家督を相続し、前名泰次郎を改めたものである。眞摯な研究家である氏は、只舊來の營業法を墨守するをもつて安んぜず、常に研鑽之を怠ることなく種々新機軸を採り入れると共に誠實、改良を旨とした堅實な營業方針を標榜して只管社會の向上を計りつゝある偉材で、昭和エーテルが事業整備、内容の堅實を誇りつゝあるのも、偏に氏の卓腕とその人格の大きな反映であると云へる。

日本バイブ製造・常務取締役

太田 太 氏

氏は大分縣土族太田米多氏の二男として明治十一年四月に誕生した。明治三十三年東京高等工業學校機械科を卒業後、三井物産のビジネスマンとしてその傘下に在ること久しく、營々たる努力と不撓の精勵振りは氏をして克く今日の地位にあらしめ、現在時局メーカーに氣を吐く氏の姿こそまことにたのしみものがある。物産生活に入つた氏はニューヨーク支店詰として經營の第一線に奮闘し、或ひは本社機械部専事として幾多の大きな功績を残して來てゐる。斯くて其後日本電池株式會社取締役に進み、次で現在の日本バイブ製造株式會社常務取締役として時めくに至つたもので、業界の事情通たると共にその手腕力量も夙に定評のあるところである。常に眞摯なる態度をもつて事業に臨む氏は亦部下を愛することにも有名で、その手腕力量を認めるや躊躇なく引立るのも氏の長所ある性格の一端を物語るにふさはしい。氏の事業經營は總て體験を基礎としてゐるだけに、智能と實踐とが渾然融合を成してゐるのである。

日魯漁業・常務取締役

近江 政 太郎氏

歐洲大動亂の展開は將來世界の動向に一大轉回を演じつゝあるが、流石に頑迷惡辣の限りを盡したソ聯も漸く折れ出し、北洋漁業問題も根本的解決の曙光が見えて來たから、わが水産日本は國力の伸張と相俟つて愈々世界に覇を稱へる秋となつて來た。近江政太郎氏は本邦水産界の王者日魯漁業常務取締役として斯界に明星の如く輝く巨材であるが、同社の事業部長をも兼ねてゐて、その卓越せる識見手腕を遺憾なく發揮しつゝある。氏はまた大北漁業、函館冷蔵庫各取締役たり、且つ太平洋合同鐵道、北海製鐵各監査役に任じ、大日本漁撈、同志會長漁業勞務者相互救濟會副會長の名譽職にも就いてゐて、本邦水産界に貢献するところ甚大なるものがある。氏は明治二十五年四月北海道入近江正太郎氏の長男として出生したが、後ち家督を相続した。同四十三年函館商業を卒業して堤商會に入り、後ち日魯漁業に轉じ事業部地方部長を経て昭和十年取締役、十三年常務に就任した。猶ほ同八年には歐洲各國を歴遊視察して來た。

中國製紙 社長

岡崎 眞 一郎氏

中國實業界の重鎮としてわが岡崎眞一郎氏の令名は雷の如くに轟き渡つてゐる。氏は現在中國製紙社長たる他、岡崎共同、雜林鑛業各代表取締役たり、また片上鐵道取締役、岡山製紙監査役にも任じてゐるが、流石に實業界の巨人たりし先代の後繼者たるに應はしく、鷹揚寛達の風貌の中に犯すべからざる威嚴を持して居り、その事業經營の采配振りは端倪すべからざる妙諦を藏して、斯界を睥睨せしめてゐる。岡崎家は往昔より岡山上着の舊家と知られてゐたが、先代たる嚴父増太郎氏が岡山電燈社長其他の重役として實業界の重鎮たるや家名頼に揚つた。氏は明治二十三年九月先代の長男として誕生したが、昭和五年先代の跡を承けて家督を相続した。夙に實業界に在つて活躍してゐたが、嚴父長逝後は一族一門の總率として今日に至つてゐる。猶ほ梅花高女出の才艶たるツネ令夫人は兵庫の富豪にして製鹽業を以て知られる梶原繁太郎氏の長女であり、また令弟賢二郎、孝平兩氏並に伯父慶次郎氏は實業界知名の士である。

松尾鑛業・取締役營業部長

岡田 儀 一氏

氏は松尾鑛業株式會社取締役營業部長として我が工業界に資源提供の大きな役割を背負つて、健闘に日も足らぬ有様である。氏は愛知縣岡田種三郎氏の長男で、明治九年十月の生れ、令弟岡田宗平氏と轉を並べて堂々實業界に進出し今や松尾鑛業の實權を握るに至つた。氏の今日ある凡庸の到底及ばざる所であつて、氏の過去六十年の歴史を回顧する時其の血と汗とににじみ出る嘗膽臥薪の苦闘、堅忍不屈の惡戰、洵に筆舌の盡す能はざる程の人世史であると言ふべきで、眞に立志傳中の最たるものであらう。然かも清廉潔白の天稟は愈々操守を堅くし、人に接する温良恭謙、社員職工に臨むに愛憐の情を以てし、氏の内外に於ける信頼は洵に深く厚い。宜なる哉氏は兄弟の誼特に密なるものがあり、令弟宗平氏とは家庭上、事業上、社會上の一切の相談相手として互に其の意見を尊重し進言を汲み合ふあたり、友愛の美德外に溢れるものがあり、内を顧みる懸念なくひたすら自己の職分に奮進を續けられる譯である。

原合名會社 理事

岡田 源 吉氏

原合名會社理事として關東財界に名を馳せてゐる岡田源吉氏は、日本マカ製作所、朝鮮雲母、岡田商店各社長、三生製藥取締役、岩城ガラス監査役等各方面に關係し、當に古稀に垂んとする老軀を掲げ矍鑠として壯者を壓する頭健さと活動とを見せて居る。氏は實に我が貿易界の長老として貴重な存在の一人で其の練達せる人格手腕に至つては、後進の誘掖上生きた教訓として敬服する事ばかりである。氏は福井縣の出身で明治四年二月の生れ明治二十六年東京高商を卒業し海外研究生として歐米に留學し、各國の商事情を究め歸朝後原合名會社輸出部副支配人となり次いで支配人を経て理事となる。原合名會社の今日あるは氏の心血を傾けて盡した賜であると推賞するに憚らない。實に氏は同社の爲めに歐米に渡航し業界を視察すること數回、常に時代に對處した營業方針を建て我が輸出貿易界發展の先鋒として邁進した功績は貿易史上燦として光を放つて居る。幸に自愛を加へ國際經濟運行の上に一段の努力を望むで止まぬ。

大淀川水力電気・専務取締役

岡田光治氏

國策としての電力統制は、明日へのより大なる進展を約束されたものである。近代文明は總てが電化である。交通運輸、工場、家庭、耕耘、娯樂等一切の經營施設が電力を離れて存在し得ない現代相は更に更に電化に向つて推進せられるであらう。大淀川水力電気會社専務取締役岡田光治氏は斯界の一角に立ち時流に掉し泰然として徐ろに來るべき物を待期しつゝある。氏は東京帝大法科卒業後三井銀行に入り累進して横濱支店長となつたが、性來の豪放果敢な性格は、三十年來築き上げた地位を惜氣もなく振捨てたのが昭和五年、浪々五年間、昭和十年電気化學工業會社専務取締役として事業界に乗り出し鮮かな手腕を見せ堂々たる業累の一存在となつた。曩には臺灣電気工業、九州電力、黒部川電力の重役となり此の道の實際に通じて居る一面、明敏穎智な氏の頭腦から滾々として湧き出る運籌の妙諦、大淀川水力電気の澄冽たる生氣は氏の才腕の表徴として推賞を惜まない。其の業績の發展は更に今後待つべきであらう。

岡田汽船・社長

岡田庄作氏

岡田汽船株式會社社長岡田庄作氏は、合同汽船取締役、岡田海運監査役、岡田回漕店、境港合同運送、隠岐回漕店に各相談役として要務に就き、境町商工會議所會頭の公職にも携はり、北陸實業界の巨頭として盛名を馳せて居る。氏は鳥取縣境町に生れ、神戸商業學校に學び父祖の業たる海運業を繼承し營々として精勵せしが、時代洞察の眼識と機を握るに敏なる氏は遂に岡田汽船會社を創立しその社長として裏日本交通運輸に時代を畫し其の王座を占めるに至つた。氏は北陸の風雪に鍛へられた頑健な身體を持ち、不撓持久の精神力を持ち、積極進取の爲す所行ふ處成功しないものはない洵に氏の強靱な意志と烈々たる闘志の所産であらう。船既に遺歴を過ぎたりと雖鑿鑿として或は實業界に或は公共事業に精根を傾けて活動し信望愈々高まり巨大な存在として貫祿を示して居る。年來倍々圓熟の域に達し、社會公共の爲め盡瘁する氏の努力には頭が自然に下るのである。折角御自愛を祈念して止まぬ。

日本冶金・常務取締役

岡田傳次氏

日本冶金會社常務取締役岡田傳次氏は、京都府岡田銀太郎氏の長男にして明治二十三年二月の出生、幼時より英俊敏活で京都府立第一中學第三高校を経て大正三年京都帝大工科工藝化學科を卒業した秀才にして、直ちに實業界に入り、日本冶金會社に於て實務の各部面を修得し天來の明敏な頭腦と兩々相俟ち、其の手腕はめき／＼磨かれ累進して今や常務取締の要職を贏ち得た勤勉精勵の士である。言ふまでもなく恪勤二十有餘年は氏の半生であつて見れば、孜々として社業の興隆に寄與した功績の厚い報酬とは云ひ難いであらう。蓋し氏の一人一業主義的信念から大觀すれば或は超然たるものがあらうと言ふもの、著實眞摯敢て街はさる裡に極めて寛容さを持ち、人を觀るに透徹せる明を兼ね備へ棟梁の才器に豊かな氏は自ら先陣に立つて親切に指導し畏敬の的であり信頼の盾でもあるのだ。天の褒賞は自然に氏を業界の重鎮として推し出したのであつた。將來の多望を期待されつゝ、堅實な足跡を鮮かに印して居る。

新興毛織・常務取締役

岡田彦次郎氏

明治四十年滋賀縣立商業學校を卒業した氏は其後伊東忠合名會社に入り精勵力闘よく刻苦して茲に實業界進出への素地が造り上げられた。伊東忠商店といへば關西は愚か本邦切つての貿易界の王座を以て名を馳せて居る多士儔々の大會社であり其處で鍛へ上げた手腕力量は何れへ推し出して天晴なものであつた、後選ばれて推舉せられたのが丸紅商店取締役氏は茲に多年培ひ鍛へた才腕を遺憾なく發揮し貢獻する所が頗る多かつた。従つて丸紅商店の成績亦隆々と發展して行き、氏の名聲を高からしめ業界の俊才として漸く重きを成すに至つた。次いで新興毛織會社常務取締役に就任するに及び練達せる手腕は圓熟した人格と相俟つて愈々鮮かな活動となり、時局下の難關を克服して堂々所信を斷行して行くあたり他の追隨を許さない。尙東洋毛織紡績、東洋毛織工業の各取締役、新興産業會社の監査役の重職に在つて樞機を握り運籌に參畫して活躍し夫々業績を擧げて居る。氏に借すに春秋あり、眞に巨歩を進めるのは今後にある。

日新染布・社長

岡田壯四郎氏

平和産業の王座を占むるものは製紙と紡織であらうそれと表裏關係をなし形影相伴ふものは實に染物業で、特に織物が製品として誕生するには染物の門下を通過せねばならない。現時局下に於て染劑の供給難時代に直面し斯業者の苦心もさこそと察せられる。然し此時こそ將來を待望される秋といふべきで我が發見發明界に投げられた重大な示唆である。日新染布會社は本邦に於ける斯界の一流會社として知られ其の業績亦顯著にして躍進に躍進を重ね業界に稱を唱へて居る。同社今日の隆昌は實に終始一貫全生命を打ち込んで努力精勵した社長岡田壯四郎氏の偉業を明記すべきであらう。氏は栃木縣人にして東京日本橋の老舖木綿問屋岡田正次郎の養子となり同店當主正吉氏は氏の義弟で、大正八年分家獨立するまでは養家の業に精進し其の功決して尠くない。後日新染布會社創立と共に社長に就任茲に實業界に歩を進め該社長の外日本高振電氣興發社長、日清紡績取締、昭和入籍、東京アルカリ工業各監査役として堂々巨歩を印す。

岡田電氣商會・社長

岡田悌藏氏

電球電池製造販賣を業とし帝都に於ける有數な財界人としての岡田悌藏氏は、東京府先代悌藏氏の長男にして明治四十二年七月の出生で昭和五年家督相續と共に前名好武を改めて襲名した。曩に岡田商會を設立するや社長としてその運籌に當り新銳の才腕は業界を隆昌に導き少壯實業家として立派な折紙が付けられた文化進展と併行する電機事業の將來は益々多望であり且つ氏の前途も洋々たりである。意氣正に天を突くの概ある氏の槍舞臺は寧ろ今後に懸る。氏は前記社長たる他、岡田輕金屬會社代表取締役、滿洲乾電池、ナショナル乾電池の取締役として電池製作界の牛耳を握り、斯業界の王座目掛けて躍進して居る。世界の發明界に殘された一つは電池の極に銅又は亜鉛に代るべき何物かを發見することであり、電池をして強力な發電をなす方法を發見することであると聞く。果して然らば電池製造家が新たに着手すべき重大な使命が横はつて居るといへやう。そして又それが國家的世界的革命的事業ともいふべきだ。

帝國堅紙・常務取締役

岡田與吉氏

氏は江洲八幡の産、祖先幾代茲に住し大二松前屋と呼び近郷に名高き呉服商海産物の問屋であり傍ら各藩の御用達を勤め帯刀の家柄でもあつた。氏は先々代小八郎氏の五男として明治二十五年五月出生、後兄耕吉氏の後を承け相續した。明治四十二年八幡商業學校を卒業し家業に従事し實地の修練をなしたのであつたが、後選ばれて岡田商店取締役に就任し一躍米國桑港支社長を命ぜられ在米實に八ヶ年、其間常に外國市場の研究生産状態の調査等各方面の知識を吸入し歸朝後、帝國堅紙會社に入り常務取締の重職に就く。今更學歷を云々すべき時代ではないが、氏は中等教育出身者にして一躍在外支社長に推舉した岡田商會の離業もさる事乍ら、氏の英俊敏活其の天才的才腕力量は洵に非凡なるものがある歸國後の氏は中央業界の俊英として重きを成した。事變下製紙界の難關を突破しつゝ、懸命の努力を続ける氏の手腕は信頼して餘りありといへやう。氏は又東洋フアイバー取締役兼營業部長として顯著な業績を上げて居る。

鐘淵紡績・兼福岡支店長

岡庭繁氏

岡庭繁氏は明治三十九年東京高等商業を優秀な成績で卒へ、紡績王國鐘淵へ入社し茲に實務の修業を積ん紡へ入社し茲に實務の修業を積んだ。人材に満たされた同社に篤實勤勉只管に精勵した功空しからず累進して篤川、彦根に工場長として起用せられ、養ひ來つた滋養を傾け體得した限りの手腕を揮て最高幹部の認識を高め次いで別府種牧場長を命ぜられた。固より最善を盡して經營に當り業績頗る舉り將來を囑目せられるに至る。次いで九州佐賀の同社支店長兼福岡支店長に擧げられ、北九州に於ける同社の探題として不休の活躍に奔命して居る。氏の今日あるは忍苦不撓賑々たる熱血を包蔵し、貫かすんば止まぬ強き意志、厚い信念の結晶でなくては何であらう。今や北九州に於ける財界の一大勢力として偉容を保つは勿論中央に於ける一勢力の示現とも見られる。氏は精神にして果斷な一面趣味、情味の人として敬慕せられ、俳句論曲園藝とその趣味は多方面で就中俳句には妙を得常に同僚知友を驚嘆させるといふ。又その邸内に四季折々の花辨が芳香を放て居る。

岡本工業・常務取締役

岡野誠三郎氏

東臺の麓下谷の菓子舖岡本榮泉は、帝都に於ける個人製菓商として森永や明治製菓を向ふに廻し堂々斯界を風靡して居ることは餘りにも有名である。當主岡野誠三郎氏は埼玉縣竹田菊三郎氏の次男で明治十七年の出生、岡野家に養子となり、大正十二年先代はま氏の後を承けて製菓業を經營すること前記の如し。氏は曩には奥利根館の代表取締役として活躍した事もあり一片の商賣人として安瀾たるを許さぬ八面六臂の活動家であり錚々たる業界の存在を示して居る。數多くの店員使用人を指揮し經營萬端至れり盡せり、然かも自ら店頭に立つて愛嬌一杯決して主人顔をしてない所など凡庸の眞似られぬ性格の持主である。故ある哉業績隆々として榮え愈々大を成しつゝある。現在恐らく會社組織として一段の飛躍を見るのも近き將來であらう。豪放恬淡の中に機略縱横に動き人を見る明の敏きこと驚く程である。業界の雄として正に貫祿十分であり、俊敏な氏が捲土重來その勇姿を財界に現はす日を待望する。

日本家畜工業・常務取締役

岡本惣七氏

氏は江東小松川に於て牛肉卸賣商を經營し、帝都を中心とし神奈川、千葉、埼玉各地に販路を持ち、其の盛況は目覚ましいものである。支那事變の進行するに従ひ、支那を本據として居た業界は俄然供給關係に異變を誘發し鶏卵、牛肉の配給上の難關に直面させられた之を突破して圓滑な營業を續けて行く氏の手腕は凡庸の遠く及ばざる所で推賞止まざるものがある。氏は自己の營業の淵藪を培ふことを忘れなかつた。即ち日本家畜工業株式會社、日本家畜市場株式會社がそれである。氏は前者に専務取締役、後者に取締役として臨み其の牛耳を握つて運籌の方向を誤らしめぬ。かくて氏は東都に於ける斯業の覇を執り雄然と飛躍を續けて財界の一角に名を成して居るのである。本邦生活様式の轉換と共に氏の營業乃至關係事業が絶體的優位に進興し、確たる將來性を有する想定は誤りないものと信ずる。氏は廣島縣の出身で明治十五年の出生と聞く、長子既に立志の齡を過ぎ氏の片身となつて活動し家運の隆々たるは慶賀に堪へない。

岡本工業・常務取締役

岡本徳松氏

家を興し名を成すは孝の終なりとは漢書大學の一句、岡本徳松氏が刻苦自勵今日を築いた偉功は父祖に對する至孝の最大なるものである。氏は明治十一年奈良縣岡本半四郎氏の四男として生れ、豪邁精悍、熾烈な剛志の性情を持つて居た。夙に青雲を望んで朝氣満々として機會を待つこと久しく、明治三十二年、令兄松造氏と協力して自動車自動車製作業を創めた。當時に於て異數と云よりも寧ろ突飛な營業といふべきであつたが不撓不屈は幾度か直面した窮地を征服して著々成功を収め同四十三年には令弟直次郎氏を加へて、岡本兄弟合資會社を興し、大正八年には改組して株式となし、岡本自動車製作所と稱し、業界に其名を壇に上し、岡本の自動車は天下に冠たるものである。氏は斯界の長老であり指導的存在で、業界に貢献せる所は實に甚大なるものがあり功績は燦然として不朽に傳へられるであらう。氏は獨力奮闘の成功者で現在、旭機械會社の専務取締役をも兼ね金城業界に躍進の歩を運んで居る。

大日本鑛業・社長

荻野元太郎氏

氏は若冠二十歳にして古河財閥に入り、其關係事業に従事すること實に四十年、希望と剛志に燃えて刻苦精勵、努勉奮、同財閥に盡瘁した功績は没すべからざるものがある。其の間、早大を卒業し、歐米に渡ること數回、在支、又十年に及び、中外に亘つて其の事情に精通すること驚べき程で、抱負、經驗、實力に於て當に業界の偉材として畏敬せられて居る。古河合名會社に於ては大坂支店、上海支店に支店長として才腕を揮はれ、本店營業部長、古河商事取締役、古河電氣工業、日清汽船、日本電線、各重役の要路に當り穩健著實にして且つ果敢なる手腕を縱横に揮ひ古河王國の礎石的な一大存在をなし、財界に堂々と君臨し現在大日本鑛業社長として又日光自動車電車、日本飛行機各取締役、東亞興業監査役、古河電氣工業、芝浦自動車工業各相談役、東亞同文會、日本放送協會、同盟通信社各理事に就任し長老的存在といふも敢て不可なしといふべし。氏は明治七年岡山縣土族石川家に生れ後荻野家に入り先代晴光氏の後を承く。

三菱製紙・中山工場長

岡本達夫氏

王國三菱の製紙會社、中山工場長として同工場の經營の重衝に當つて、内外の好評裡に活動して居る岡本達夫氏は東京メタノール、江戸川工業各社監査役を兼務し、特に江戸川工業所には出資社員として其の經營の樞軸をなし經營上の重責をも擔つて居る。氏は愛知縣の出身で明治二十二年三月、岡本權兵衛氏の三男として出生、同四十五年伯父正陽の家督を承く。同年東京高商を卒業した秀才で實業界に入り三菱の傘下に馳せ、自奮自勵の功は酬ひられ第一線に活躍する地位を獲得し財界に進出したのである。氏は實踐躬行、實力主義の一路を以て一貫した人物で、堅實を第一とし、派手ではないが内容は充實した遺言で、三菱製紙の炯眼はよく氏の人物を識つて適所に配したのと言ふべきである。氏の性格に更に長養を加へ、業界に傑として其存在を顯はられる日も遠い將來の事ではないと確信する。五十の坂を出たばかり潤澤湛能の士であり前途洋々たりといふべきで、層一層の好調を希ふこと切なるものがある。

東洋南アルミ・常務取締役

岡本達三氏

岡本達三氏は、南洋アルミニウム工業常務取締役、東洋アルミ、三成、太平洋炭礦、釜石鑛山各社に取締役、或は監査役として、財界に出藍の名を示す、神戸高商出身の人材である。氏は明治四十一年學窓を出るや直ちに三井鑛山會社に入り、碎骨精勵大に努め申木野鑛業所長に簡拔せられて縱横の活躍をなし同所の面目を一新し次いで本社經理部長に昇進し更に躍進して監査役に選任せられ、實業家としての確固たる地歩を占めるに至つた。氏が斯界に一步を印してから多年、苦澁苦杯を嘗め幾多の困難を克服したかは想像に難くない。其の堅忍好闘の成果が今日の地位を築いたのである。警根錯雪を経れば春に遇はず、艱苦を突破し克服し得れば成功は期せられない。氏の強い意志力は實力手腕と並んで更に躍進して止まないであらう。氏は佐賀縣土族高洲康純氏の四男で明治十四年に出生、岡本リム女の養子となり、大正十五年相續す。令兄高洲謙一郎同鐵一郎兩氏亦財界錚々たる士である。

京都倉庫・社長

奥主一郎氏

京都實業界に於ける青壯派中の傑傑としてわが奥主一郎氏の名は輝やかしきものがある。氏は明治二十七年九月京都府人關繁三郎氏の長男として誕生したが、嚴父繁三郎氏は昔て政黨華かなり頃の衆議議員に擧げられること數回、議會の名議長として鳴らした巨人であつた。流石に氏は嚴父の血を承けてゐるだけに、鷹様寛達の風貌は見るからに諸人をして敬仰の念を抱かしむるものがあり、その識見才腕に到つては斷然凡百の追隨を許さぬ卓抜なるものがあるから、氏の關係事業は何れも隆々たる業績を示し、斯界をして眩惑たらしめてゐる。即ち氏は京都倉庫社長として名采配を揮ひ乍ら、京都瓦斯副社長に任じてゐるが、同社は有力な時局産業を包含すること薄き京都に在りながら、猶ほ資産内容、業績共に良好である。氏はまた京都の大デパート丸物取締役、大平火災海上各取締役、京都取引所、渡良瀬水電、愛宕鐵道、山城銀行、八幡銀行監査役としても聲名高く、帝國瓦斯協會常任理事の公職にも推されてゐる。

山岡内燃機・専務取締役

奥礎一氏

近代産業の飛躍的發展は全く内燃機と發動機の進歩發達の賜物だと云つても差支へないであらう。確かに十九世紀産業界は蒸氣機關に依つて發達したのであつたが、二十世紀も三十代の今日はその姿は僅かに機關其他に見られるだけである。蓋し蒸氣機關に比して内燃機及び發動機は場所をとること寡く且つ能率もグツと高いからである。わが奥礎一氏は關西メーカ界に明星の如く光芒を放ちつゝある逸材であるが、特に内燃機及び發動機部門に於て其名が響いてゐる。即ち氏は現在山岡内燃機専務取締役たり、また山岡發動機工作所並に東洋ラヂエーター製作品各取締役に任じてゐるが、山岡内燃機及び發動機工作所は斯界の優秀製品工場として錚々たる會社であり、また東洋ラヂエーターも賑々たる業績を擧げてゐる。氏は明治二十二年四月福岡縣人加藤芳三郎氏の二男として誕生大正六年同縣人奥淺次郎氏の養子となつたが、現在養父母共に健在である。氏は本年とつて五十二歳、製作界彌々多事多端の折柄切に新自重。

旭鐵工所・専務取締役

奥田嘉藏氏

わが奥田嘉藏氏は關西メーカー界の長老格として炳乎たる光芒を放ちつゝある巨材である。現在氏は旭鐵工所専務取締役として同社の全權を掌握し、また東洋チンローラ取締役任に任じてゐるが、元來が技術家であるだけに氏の事業經營振りは、整然たる科學的システムを採り、加ふるに人事に於ては人情味豊かな恩情主義に據つてゐるから、部下は名將の下の兵士の如く身命を賭して氏の名采配下に動いてゆき、この時局下に應はしき工場經營法は、斯界の好模範と謳はれて居り、従つてその業績は時潮に乗つて賑々たる向上發展の一路を辿りつゝある。氏は明治十八年九月大阪府人たる奥田喜三郎氏の三男として誕生したが、昭和五年令兄喜一郎氏方から分家して一家を立てた。先是東京高等工業を卒業して東洋製紙に入り、漸次果進して技師長に擧げられたが、大正六年同社を辭して旭鐵工所を創立し、その常務取締役となつたが、後ち現職に就いた。猶ほ先には日本金網監査役に任じてゐた。時局多端の折柄切角自重を祈る。

旭廣告・社長

奥野幾次郎氏

廣告は文化の華である。一國家さへが宣傳省を設けて國策遂行の爲めに大童になつてゐる今日、商品宣傳の爲めの廣告が華々しく新聞、雜誌紙上を賑はしてゐるのは當然のことである。亦現在の新聞、雜誌にとつて廣告は一大財源となつて居り、新聞なり雜誌なりの經營は廣告を度外視しては、到底成立し難いものである。わが奥野幾次郎氏は關西廣告界の元老格として斯界に雷の如く鳴り響いてゐる巨豪で氏が社長たる旭廣告は文字通り關西界にあつて、旭日昇天の氣勢を示してゐる。同社は新聞廣告代理業を専門としてゐるが、永年斯界にあつて鍛え上げて來た氏の才腕は、斷然同業者間に頭角を抜いて居り、また部下も氏の采配下に打つて一丸となつてゐるから、同社の業績は全くすばらしいものがある。氏は明治十一年一月の誕生で大阪府人奥野彌三松氏の令弟であるが、大正二年分家して一家を立てた。夙に廣告界に入つて今日の大を成したもので、令息信一氏は同社取締役として氏のよき女房役となつてゐる。

日本ゴールドレッヂ・代表取締役

奥村競氏

わが奥村競氏は當年とつて五十歳、實業家としてはまさに男盛り働き盛りの脂の乗り切つたところ、その精神無比の壯軀を第一線にクロイズアップして颯爽呼號する有様は、天晴れな勇將の面影をそらるに堪はせるものがある。氏は現在日本ゴールドレッヂ代表取締役たる他、日本計器製造、朝鮮砂金鑛業、佐賀電氣軌道各取締役に任じ、且つ東京製鐵監査役をも兼ねてゐるが、之等のメーカー、金鑛、電軌、製鐵の各事業は、何れも時局下に於て重要な地位を占めて居て、隆々たる業績を示してゐるが、中でも日本ゴールドレッヂは産金國策の爲めに政府當局が先頭に立つて、金の増産に大童になつてゐる今日であるから、その採金用として必須のメーカーたる同社は、毀産産業界の中でも一際目立つた業績を擧げ斯界美望の的となつてゐる。氏は岐阜縣人奥村松衛氏の長として明治二十四年九月誕生、同三十一年家督を相続した。夙に實業界に入つて今日の大を成したが、てい令夫人との間には三男三女の子を産まれてゐる。

滿洲重工業開發・理事

奥村慎次氏

友朋大滿洲國産業開發第一線上の精銳闘士としてわが奥村慎次氏は光彩陸離たるものがある。即ち氏は滿洲重工業開發理事兼東邊道開發常務として、鮎川總裁傘下の青壯派のピカ一たり、且つ昭和製鋼所、滿洲鑛山各理事、奉天飛行機、滿洲鉛鑛各取締役に任じてゐるが、その名刀を思はせる頭腦の牙えと俊敏筆の如き才腕とは、馬觸れば馬を切り人觸れば人を斷るの概を示してゐて、當年四十七歳の氏の今日の活躍振りから將來を推し計れば、如何なる大物になるか量り知れぬものがある。氏は明治二十七年六月神奈川縣人奥村藤七氏の三男として誕生した。大正九年東大法學部政治科を卒業して直ちに滿洲に入り、英才を發揮して忽ちにして同輩を擡んで、果進して參事に擧げられ、同社計畫部業務課長兼滿洲資源館長事務取扱、經濟調査會委員第二部主任を経て、昭和十一年には鐵道總局産業部次長を命ぜられ、同十二年大日産の滿洲進出と共に鮎川氏傘下に加つたもので、猶ほ先には滿洲電業取締役に任じてゐた。

宮田製作所・取締役兼福岡支店長

加藤作郎氏

氏は福岡縣人太田作造氏の三男として、明治十二年五月に出生した。後先代加藤甚三郎氏の養子となり明治三十五年に家督を相続したのである。福岡縣に於ける氏の勢力は實に大なるものがあり、また家主にして現時株式會社宮田製作所取締役兼福岡支店長の重責にある。宮田製作所も近年インフレーションの線上に躍り出し好轉を續けてゐるが、これも當社取締役たる加藤氏の盡力によるは尠くないところであらう。氏は常に意を社業の革新にこれ努め、日夜精勵、社運の隆盛に繁榮に全力を傾倒して業務に勵んでゐる有様は、謹嚴實直なる氏の全貌をよく現して、まことに敬服のほかはない。この不斷の努力と逞ましき事業慾があるが故に、現在は云ふまでもなく、遠き將來までも確固たる地盤が揺るぎなくされたのであつて、これなくてはなんぞ成功が望み得やうか。今や氏は、福岡縣下有数の富豪として、また多額納税者の一人としてその前途正に洋々たり、飛躍の時や來れりと八方に翼を張つて活躍を續けてゐる。

新潟鐵工所・技師

加藤重男氏

風雲急を告げる現時局下の事業界の花形は、なんといつても鐵工業であらう。鐵、鐵、鐵——。正に「鐵」こそ戦時經濟の原動力であり、重要産業の推進力であらう。株式會社新潟鐵工所も軍需景氣の波に乗り上げて、今を黄金時代と前進してゐるが、當社の優秀なるエンヂニアとして自他ともに許す逸物に、加藤重男氏がある。氏は東京府士族たる加藤重成氏の二男にして明治十九年四月の生れ、同四十一年に東京高工を卒業したが、後新潟鐵工所に入社、もつぱらエンヂニアとして活躍してゐた。だが、氏の卓抜なる事業的才腕の程は蔽ふべくもなく、間もなく同社浦田工場長代理兼内燃機關部主任として、持ち前の指導者としてのセンスを發揮するに至つた。また現時は、同工場長兼工作部長として全従業員の徳望を集めてゐるが、同社の重石としての氏の存在は大きく、社運の隆盛と共にその力は全面的に押し出されるに至つたのだ。新潟鐵工所の運命を左右するものは誰か。曰くそれは加藤氏であると應へたい處だ。

梓川電力・取締役

加藤農夫氏

わが加藤農夫氏は本邦電力界一方の雄として夙に名を轟々たるものがあるが、また氏は化學工業、電鐵界にも關係してゐてその重厚堅實なる經營手腕を以つて斯界に多大の信任を得てゐるが、これは用意周到なる氏の性格の然らしむるところで、氏は生來沈着にして剛毅の氣に富んでゐるから、事に處して動することなく、着々之れを處理してゆく明確さを有してゐる。現在氏は梓川電力取締役たる他、中部合同電力、中央電力、揖斐川電氣、日本化工、昭和化工、信貴生駒電鐵各監査役に任じてゐるが、之らの會社は大會社ではないが、何れも確固たる社礎の上に立つて、裕々たる業績を示してゐるのは、一つに氏の如き堅實主義の人材を主眼陣に有するからである。氏は明治十三年一月栃木縣人加藤昇一郎氏の二男として誕生したが、大正十四年令兄武雄氏方から分家して一家を立てた。先是明治四十一年京都帝大法科を卒業して實業界の人となつたもので、閑暇を得ては旅行を楽しみ自然に親しむと云ふ典雅な人物である。

東神土地・社長

加藤八郎右衛門氏

横濱財界の元老格として加藤八郎右衛門氏の聲名は雷の如く轟き渡つてゐる。氏は神奈川縣下の富豪先代八郎右衛門氏の四男として明治十三年七月出生したが、同三十八年家督相続と共に前名雄八を改めて襲名した。斯くて當時若冠二十六歳の氏は横濱實業界に打つて出たのであつたが、流石に先代の後繼者として幼時より麒麟兒の譽れ高かつた氏は、明治、大正、昭和と三代四十年間に亘る財界の荒浪を、屈せず憶せず征服して、今日の大を成したのであつた。現在氏は東神土地社長の椅子に就いてゐるが、同地方は京濱間の重要工業都市であるから同社の盛運は驚異すべきものがある。また氏は鶴八醬油代表取締役たる他、七十四商事、横濱興信銀行、横濱棧橋倉庫各取締役に任じてゐるが、歐洲再戦の大展開に依る謂ゆる演氣は、第一次戦争當時とまではゆかずとも、近來にない盛況を極めてゐるから、氏の運盛もこのところ大當りである。猶ほ氏の令息滋氏は東北大出の工博士で、石川島造船所の技師として聲名がある。

加藤武製作所・社長

加藤武左衛門氏

關西の業界に異数の存在を示す株式會社加藤武製作所は、時局の反映と社長たる加藤武左衛門氏の經營宜しきを得て、今や順調の波に乗りつゝある。同社の業務が極めて將來性に富むとは云へ、益々業容の發展をもたらし、更に株式組織にまで延長して愈々社容を整へ颯爽として業界にデビューするに至つたのも畢竟、氏の寧日なき努力と、その技術的指導の完璧を期した、謂はゞ鬼に金棒式の強みを發揮したればこそである。氏は大阪府人先代武左衛門氏の長男にして明治三十二年三月に誕生、昭和五年家督相続と共に前名倍一郎を改めて襲名に及んだものである。夙に祖業たる金屬製品業を營みつゝ、加藤製作所社長を兼て斯界にその名將ぶりを轟はれてゐるが、現に事業そのものの有望さと従業員一同の結束とは、やがては劃期的發展をもたらすものと噂とりつゝであり、加藤氏もこの噂を裏書せんものと鋭意業績の向上に最善の努力を傾注しつゝあるから、遠からず理想も實現さるゝものと期待される。

加藤春吉商店・専務取締役

加藤益一氏

氏は愛知縣人加藤春吉氏の長男として明治二十一年二月に誕生した。明治四十年中央商業學校を卒業後直ちに株式會社加藤春吉商店に入り、現に専務取締役の權位に在つて精勵しつゝある傍ら高藏合同運送株式會社社長を兼て名譽を一層に輝かせつゝある。成功不成功は目前の利害によつて決定されるものではない。世間を上手に立ち廻り狡猾な手段を弄しても、一時の利益は得られるかも知れない、位置を獲得することも至難とは云へまい。然し眞の成功とは個人の物質的充足ではない如何に正しく、如何に良心的に世を渡り社會國家の爲になつたかによつて定まるものである。氏はその境遇から云つて恵まれた所謂お坊ちゃん育ちなるにもかゝらず、不撓不屈の推進力は安逸を貪ることを快よしとせず、國家的觀念を基礎に致々として精進をつとめつゝあることは、吾人の畏敬に堪へざるところである。氏は見るからに温厚なる紳士であり、その風格と云ひその手腕といひ今後の活躍と相俟つて大いに期待される。

天満興業・社長

柏原政吉氏

市房鐵山主柏原政吉氏は業界に頭角を抜んで赫々の名譽を轟はれてゐる俊才だ。明治十八年十月生れ、熊本縣人柏原義平氏の三男である。明治四十二年に法政大學を卒業して炭坑事業に従事し、斯界の權威者として信望極めて篤いが、また斯業の研究も並々ならぬものがある。現時は天満興業、東京住宅各株社長として隆々たるものであるが、これも偏に持ち前の事業的才腕によるものであらう。實に覇氣に満ちた野心家で才氣煥發、剛快な傑物として廣く各界に人氣がある。夙に炭坑事業に着目して従事したり、鐵山を手に入れて雄飛したりする氏、素より凡庸の徒であるべき筈はなく、如何にスケールの大きい人物であるかは、これからしても察するに難くないだらう。だがしかし、現在の氏をもつてその覇業成れりとするは全く早計に失する。柏原氏に期待するは現在よりもむしろ今後であつて、如何なる方向に飛躍し發展するかは各方面等しく注視するところである。氏の前途、愈々多幸ならんことを祈つて止まない。

鮮魚・社長

片桐一郎氏

氏は新潟縣の人片桐寅吉氏の長男であつて明治二十九年三月の生れ、昭和八年に至つて家督を相続したのである。その才幹は慶應大學理財科に在學中すでに他を驚かすものがあつたと云はれてゐる。學を卒へて業界に身を投じてより多年、才腕をふるつて英名を馳せてゐるが、現在では鮮魚株式會社社長として只管社業の發展のため努力を續けてゐるのである。だが近時更に愛隣社(株)監査役の要職も兼ねてその任務益々重く、氏の双肩に懸る責任は亦愈々大なるものがある。しかしながら氏の如き常に高所大局に立ち事業に對して聊かも名利を求めない人にとつては、責務の重いは却つて自分のため、會社のため、ひいては本邦産業界のために望ましき事とさへしてゐるのである。由來傑れたる人物は決して私利に走らず私慾に驅らず、悠々所信を斷行して憚らない。氏の如き仕事熱心でしかも眞摯なる事業家が、高遠なる抱負、經綸を抱いて國策線上に活躍するは業界のため又邦家のため喜ばしい次第である。

王子製紙、坂本工場長

加藤量平氏

王子製紙の特色と云へばまづ人的構成に於て新進氣鋭の人物を網羅してゐることであつて事業は人物に依つて左右さるゝといふ眞理を如實に裏書してゐる。その帷幕に參するもの何れも多士儔々の有様であるが、中にも光芒一際目立つるに我が加藤量平氏が在る。氏は静岡縣の産、加藤重治氏の三男にして明治二十五年六月に誕生、昭和七年令兄耕藏氏方より分家した。大正八年京都帝大工學部化學科を卒業後富士製紙會社に入り、次いで王子製紙に入社して現在の坂本工場長となつたもので、その精勵振りは衆の範とすべきほどのものがあり、氏一流の膽と才とは巧みに従業員を統御して飛躍への段階へと導き、その抱負は無限の伸展をもたらすべく、今後の動向こそ刮目して見るべきものと云ひ得るのである。人も知る如く同社業務も今や時局の展開によつて益々發展の途上に在り、加ふるに需要激増による今後の業績の向隆も必至と看られてゐるから、いよいよ産業報國の一路へと邁進するであらう。

住友生命保險・東京支店長

加藤純一氏

住友生命保險株式會社東京支店長として据括經營の衝に當つてゐる加藤純一氏は、大分縣土族加納哲三郎氏の長男として明治二十七年五月に出生し昭和五年に家督を相続した。大正八年東京帝大法學部獨法科を卒業後住友本社に入り、總務部庶務課長を経て現職に及んだもので、同店今日の發展も實に氏の腕一本に依つて築き上げられたと云つても敢て過言ではなく、基礎の確立してゐるのを見て氏の手腕力量が充分窺はれるといふものである。如何にしても大成せんとするものは所謂成業の道をわきまへなければならぬ。曰く成功の信念、専心の努力、勇氣と忍耐、即ちこれである。従がつて自己の志望に就ては十分之なれば成功するといふ確信がなければならぬ。志のある所には限りなき道がついてゐる。天は自ら助くる者を助く、一滴の雫でさへも遂には岩を穿つ例に漏れず、氏の如く精神一到何事か成らざらんとて確信を抱いて進む場合には、必ずや成功の月桂冠が報はれるものである。

丸八製作所・社長

蟹井敏松氏

名古屋市中區南武平町に住する蟹井敏松氏は丸八製作所の創立者だ。同所は主として瓦斯コンロ製造を業とし、製品の優秀さに於て名古屋隨一といはれるほどで、また一面獨特な製造法によるを斯業の新機軸とも讃へられてゐると云ふ。當主敏松氏は愛知の人蟹井繁造氏の三男で明治二十四年二月生れ、昭和三年に至り兄繁太郎氏方より分家し獨立獨歩奮闘を續けて今日の成功を見たのであつた。日夜寢食を忘れて業務に精勵、堅實に一步一步地盤を築いた努力家だ。近時は瓦斯コンロのほか、精密機械部分品の製造にも着手し、時局の趨勢に便乗していま正に飛躍せんとしてゐるのだ。時流を見透す明敏なる頭腦と、常に斬新な創意性とがなくては、目まぐるしい現狀勢下に成功を遂げるは覺つかないことだ。氏はよくこの両面を堅持して堂々業界に前進してゐる。この努力の人心念の人が、業界の一角を切り崩して雄々しく起ち上り、巨大な足跡を印すやうになるのもさう遠い將來ではあるまい。

日本エナニウム工業所主

紙谷正次氏

人はどうすれば成功できるか、どうすれば満足した快い日が送れるか、多くの人はそのことについて苦慮してゐるやうである。安心と立命と満足と幸福とは決して空の星のやうに手の届かぬ遠いところにあるものではない。各人の傍にもつと端的に云へば影のやうに身近にあるものなのだ。然も多くの人はそれに氣づかない、徒に遠方のみを望んでもそれを希望してゐる。だが理想は足元から續いてゐるもので紙谷氏の如く一歩／＼を誤りなく進んでこそ、やがては成功の彼岸に達し得るのである。氏は富山縣人紙谷春男氏の二男として明治三十三年一月に誕生した。夙に塗料製造業を營みつゝ、現在日本エナニウム工業所主として、その地歩も確固不拔なるものがあり、常に指導的立場に在つて業界より異常なる崇敬を聚めつゝある。曩に北陽産業、日本タイプライター各株式會社重役としてその敏腕は既に知られてゐるほどで、今や四十を過ぐることも僅かではあり、日頃から綿密な思慮をめぐらす人物だけに今後が大いに期待される。

龜井商店・社長

龜井信次郎氏

生糸検査所を控える横濱は名にし負ふ絹織物輸出の名港を以て天下に鳴つてゐる。したがつて幾多業者が群立して覇を競ひつゝあり識見豊富な人物の輩出も枚擧げに遑ないほどであるが就中こゝに登場する龜井信次郎氏こそは將にその白眉と稱するも敢て過言ではあるまい。現に横濱商工會議所議員並びに日本絹業協會常務理事、日本ステープルファイバー協會理事として信望を擔ひつゝ、株式會社龜井商店社長横濱絹布商事、野澤屋輸出店各株式會社取締役其他の重役を兼て、文字通り業界に於ける逸足として隠然たる勢力を扶殖しつゝある。氏は京都府人龜井彌右衛門氏の二男で明治十五年十月に誕生、大正十四年令兄峯太郎氏より分家したものである。夙に横濱に在つて絹織物貿易商を営みつゝ快足縦横、眞にめざましき精神振りを以て遂に今日の偉容を築き上げたもので、その手腕また推し測られざるものがある。事實氏の力こそは横濱開發と斯業發展のために盡されたものであり、今日の盛名も洵に當然の感を深くする。

日本塗裝工業・社長

龜井正俊氏

我が塗裝工業も近來顯著な飛躍過程を辿つて來たものである。即ち技術的にもその能率に於てもその發展は凄まじく、將來に向つていよいよその人氣を高めんとしつゝある。就中日本塗裝工業株式會社の進境ぶりに至つては何人もその加速度的なるに一驚を喫しつゝある。即ち同社の主宰者であり業界に於ける驍將として、その名に恥ぢぬ健闘ぶりを示しつゝある同社取締役社長龜井正俊氏こそは、まことに同社のホープと讃えるにふさはしき存在であり、同社を今日まで導いて來た唯一無二の大黒柱なのである。氏は兵庫縣土族生駒八十彌氏の二男として明治三十五年四月に誕生、其後龜井慎平氏の養子となつて昭和五年に家督を相続した。大正十二京都帝大經濟學部を卒業後、藤製品製造業を営みつゝ、日本塗裝工業の經營にも參畫、大阪支店長として大いに敏腕を揮つたが、その明敏を買はれて今や名實共に同社を牛耳るに至つたもので、あくまで献身的努力家である氏は更に井の頭病院々長としても名を博してゐる。

内外織物・社長

龜井亮治郎氏

京都は名だゝる織物の産地である。その織物業界に浸潤たる手腕をもつて飛躍街道を奮進しつゝあるのが龜井亮治郎氏である。現に京都商工會議所議員であり、新西陣購買組合長、京都人絹輸出織物工業組合理事、西陣信用組合常任幹事等を兼て好評噴々たるものがある。氏は岐阜縣の産、松原富吉氏の二男にして明治二十三年十二月に誕生、其後龜井徳次郎氏の養子となつたもので、夙に父業を繼いで斯業に精勵、大正七年内外織物會社を創立すると共にその社長に就任し、常に烈々たる國家意識に立脚して活動を續けて居るといふことは周知の事實である。而してその遠大なる計畫に勇往邁進する果敢な實踐力は大事業を達成するの器としてはまことにふさはしきものがあり、斯業の將來性を看取しての努力と苦勞のあつたことも亦見逃してはならない。夙に織物業の將來性に着眼し斯業へのトップをきつて以來、今日に至るまでの粒々辛苦は遂に偉大な成果を収めたもので、注ぎ込まれた努力こそ畏敬に値するものがある。

龜田合資會社・代表社員

龜田候吉氏

龜田合資會社代表社員として颯爽事業界を馳驅しつゝある龜田候吉氏はまた大北産業株式會社監査役として今日業界に於ける敏腕家と目され搖ぎなき不動の地位を謳はるゝ氏も、往時を顧みればつぶさに辛酸をなめて來たものである。氏は東京府人龜田介治郎氏の長男に於たり明治十八年七月に誕生、大正九年に家督相続をした。夙に實業界に入り世評を裏切らぬ手腕を鍛え上げたわけのことはあつて、田林商店監査役時代既に異色ある存在を認められてゐた。したがつて現職に及んで隆々たる業績をあげつゝあるのも、劃期的前進ぶりを示して東都商業界の麒麟兒と謳はるゝに至つたのも、そこには營々たる氏の努力と汗によつて着々と築かれた、忍苦の跡を見逃してはならない。流石に明朗なタイプを備へてゐるだけに實業界に活動するやうになつてからもキビクしたところがあり、一寸他の眞似しがたい長所を持つてゐる。總てに適合する將來性は尙各方面より多大の關心を持たれてゐる。

東海堂・社長

川合晋氏

書籍販賣業を營む株式會社東海堂と云へば其名斯界に冠たるものである。氏は斯界の人材中に於ても博學多識、磨かれた知性と玲瓏たる人格の持主として知られてゐる。しかも抜くべき場合には斷乎秋水の切れ味を見せる力腕をも具へ、養る偉材の中に在つて一際光芒を放ちつゝある。流石に刻苦精勵して今日を築いた先代晋氏の後を承けるだけあつて、讀書家として知られてゐるのとはより、秀でた智性の人として將又高深圓滿なる人格者として、上下の信頼を博しつゝあるのも宜なる哉である。氏は先代晋氏の長男として明治三十一年九月に誕生、大正五年家督相続と共に前名一男を改め襲名に及んだものである。大正十一年慶應經濟學部を卒業後斯業に携はり現に東海堂社長として采配を振りつゝあるほか東京書籍、日本製紙各株式會社監査役の任にあつて、出版界多事なる秋を迎へていよいよ出藍のほまれを高くしてゐる。蓋し壯年時代の域に達した氏の今後こそは本格的事業家として大いに期待できやう。

東洋セメント工業・取締役

川上高帆氏

明治以來日進月歩の進歩を遂げた我がセメント界の發展に寄與した氏の足跡はまことに甚大で、特に關東大震災災がもたらした大きな教訓に基いて、是に對應する改善研究に全力を傾注した涙ぐましい努力に至つてはまことに畏敬するに値するものがある。氏は東京府人川上泉氏の二男にして明治二十二年三月に出生、同三十九年に家督を相続した。學序を経て斯業を志すや文字通り傍目もふらずに斯業の一本槍をもつて押し通して來た俊足で、淺野セメント株式會社東京支店長の頃に既に將來斯界に頭角を現はす英質たることを充分に示してゐたのであつた。斯くて其後の精勵いよいよ認められるところとなつて、今や東洋セメント工業取締役兼技師長として重きをなす傍ら、ハルビンセメント株式會社技術監督としても、多端を告げつゝある斯界に貢獻するところ實に甚大なるものがあり、氏の高邁なる人格と相俟つてその聲望はいよいよ業界を席捲しつゝあるかの觀を添へてゐる。氏の今後こそ大いに刮目できる。

川上同族・代表取締役

川上十郎氏

川上同族株式會社代表取締役を筆頭に新潟臨港株式會社事務取締役、七十五銀行、日本海倉庫各株式會社監査役を兼ねて名實共に長岡市事業界のリーダーと稱せられつゝあるのが川上十郎氏である。氏は新潟縣人先代川上佐太郎氏の三男にして明治二十八年二月に出生した。大正九年に東京帝大政治科を卒業と共に事業界に入り、先代佐太郎氏の全智をそのまゝ受けついで一門發展のために拵け盡した至誠一貫は、先代に優るとも劣らざる名器として是亦業界の刮目の的となつてゐる。しかしかゝる聲望を得るまでに拂はれた奮勵努力は並大抵のものではなく、卓抜なる技術才幹と稜々たる氣骨を温容の中に包んだ統領の器たる人格をもつて精進したればこそ、今日の成果を収め得たのであつて「玉磨かざれば光なし」を如實に反映したものと云ひ得るのである。斯くの如き成果を収め更に洋々たる前途を待望せらるゝ盛運を招來したのも、氏が常に營利一方の打算的なのを排し國家社會の福祉増進を旨とした報ひに依るものである。

石原産業海運・常務取締役

川上豊太郎氏

氏は熊本縣人川上茂一氏の二男にして明治二十三年十二月に誕生、大正三年長崎高等商業學校を卒業した逸材で、現に石原産業海運株式會社常務取締役として、その威望は將に業界を歴しつゝある。嘗て三菱商事、三菱製鐵各株式會社に勤務して精勵恪勤大正十二年石原産業海運會社に入るやシンガポール支店長、東京出張所主任等を經て監査役に選ばれて名を成し、昭和十四年四月遂に常務取締役に擧げられたもので、夙に實業界雄飛を志して以來、粒々辛苦の結果今日の如き榮位と不動の信用とを築き上げた偉材なのである。氏は謂所直情徑行の人とも云ふべくしたがつて正義感が極めて強く、かりそめにも曲つたことの大嫌ひな性格である。即ち一旦自己が正しいと確信したなら徹頭徹尾自己の誠意を披瀝して止まぬといふ、當代稀に見る硬骨の士である。財を殖やし名聲を馳せれば世間之をもつて奮闘立志と稱するが、中には時運に恵まれた人々も少くない、然し川上氏の如き其經歷から云つて眞に奮闘立志の人と云へる。

相互商事・社長

川喜田壯太郎氏

相互商事株式會社と云へば直ちに之と關聯して想ひ浮ぶのが川喜田壯太郎氏のことである。同社の盛名については今更賑々を要せざるほどのものがあり、同社社長として噴々たる好評を浴びつゝある川喜田氏こそは、事業界に於ける新進としてその才腕を各方面より矚目されつゝある。氏は三重縣の産川喜田久太夫氏の長男として明治三十七年八月に誕生した。昭和三年法政大學經濟學部卒業後日本銀行に入つたのを皮切りに、捷まざる精進は遂に昭和十一年に百五銀行取締役の椅子に就かした。もとく若冠にしてよく樞要の地位を獲得したる氏のこと、眞摯なる熱情は在學中既に歐米並びに支那、南洋諸島を視察して大いに研鑽の度を高めたものであつた。斯くてその才腕は遂に今日の偉容を築くに至り、今や相互商事社長を始めとして菱川合資會社代表社員、株式會社百五銀行取締役として實業界の先驅者にふさわしき存在を示すのみか、絶えずその尖端に立ち斯界向上のために貢献しつゝ萬丈の氣を吐いてゐる。

上海紙業公司・社長

河口明氏

本邦紙器界の重鎮たるわが河口明氏はその風翼を中支、滿洲にまで伸ばしてゐる巨豪である。即ち氏はわが紙器界の白眉たる聯合紙器筆頭取締役にしてゐるが、氏が同社へ入つたのは大正九年同社創立と同時に、爾來二十年餘も同社の爲めに闘ひ抜き、今日の盛大なる社運を招來せしめるに甚大なる貢獻を致してゐる。同社の製品は時局下に於ける鍼力其他金屬製の統制、制限酷しき折柄、これが代用品として國策的に重大なる役割を果しつゝあり、その業績は斯界に冠たるものがある。また氏は上海紙業公司社長として中支、滿洲紙工股份有限公司董事として日滿兩國の斯界を牛耳り、賑々たる成果を挙げつゝある。氏は明治十九年十一月廣島縣人河口熊吉氏の長男として誕生、同三十一年家督を相續した。學歷は同四十二年の專修大學出身で、夙に紙器界に在つて今日の大を成したのであつた。猶ほ氏はミツノ令夫人との間に三男二女の子實があり、その幸福な家庭を羨まれて居り、また氏の撞球、圍碁は相當の腕前であるといふ。

服部商店・取締役支配人

川崎音三氏

中京名古屋織物界の重鎮としてわが川崎音三氏は颯爽たる雄姿を斯界の第一線にクローズアップしてゐる。將である。氏は現在服部商店取締役兼支配人たる他、東海染工、松阪木綿各取締役任じてゐるが、服部商店は中京斯界の白眉としてその看板を誇りつゝある老舗で、氏は同社の生え抜きであり、且つ支配人としても經營の全般に亘る指揮采配を一任されてゐるが、當年とつて四十六歳の氏はその識見秀逸にしてまた手腕卓抜であり、加ふるに恩愛並び行ふ人徳者であるから部下の信頼も極めて、厚く全店打つて一丸となつた活動を續けつゝあり、隆々たる業績を擧げてゐる。また東海染工、松阪木綿の方は時局下の統制、制限下に外面的には窮屈の觀があるが、なんと云つても、輸出向は獎勵されて居り、内需も軍需景氣の今日ゆゑ相當の好成績である。氏は明治二十八年九月の出生で廣島縣人川崎和子女の叔父に當るが、後ち分家して一家を成した。猶ほ氏は現在日本ステール・ファイバー輸出組合理事に任じてゐる。

山下汽船・取締役兼海務部長

川崎玄二郎氏

わが川崎玄二郎氏は當年とつて六十七歳、齡古稀に近づいてゐるが、今猶ほ壯者を凌ぐ潑刺たる元氣を以つて本邦海運界の第一線に呼嘯してゐる巨豪である。氏は明治七年十二月愛媛縣人川崎儀平氏の三男として生誕したが、同四十三年分家して一家を立てた。夙に大志を抱いて實業界に身を投じ、海運界に在つて今日の大を成したのであるが、その経路は數奇と波瀾に充ちた長篇物語を成すべく、まさに氏こそは立志傳中の白眉と云ふべきであらう。氏は現在昭和興業代表取締役として絶妙の名采配を揮ひ乍ら、山下汽船、太平洋汽船、興運汽船、扶桑海運各取締役たり、また山下監査役をも兼ねてゐるが、これらの船、海運各社は、今や大展開された歐洲再戦の潮流に乗つて、追手に帆を揚げたる如き躍進發展を辿り、驚異的な業績を示しつゝある。殊に氏は山下汽船では、首席取締役兼海務部長として實務の指揮に任じて居り、その精力の程は端睨すべからざるものがある。猶ほ氏は先に滿洲海陸運送監査役に任じてゐた。

和歌山紡織・社長

川口義宏氏

わが川口義宏氏は和歌山紡織社長にしてまた大日本紡績聯合會評議員の公職にも就き、本邦紡織界の重鎮として明星の如き光輝を放つてゐる巨豪である。和歌山紡織は明治二十六年の創立で古い歴史を誇つてゐるが、氏の同社への入社は昭和五年で比較的新しいが、何んといつても氏は同社の大株主たり、且つその經營手腕は既に定評ある通り卓抜なものであるから、同社は彌々社礎を固めて不安なき業績を擧げつゝある。氏は元來は保險界の生え抜きで、現在も日本海上保險常務取締役兼總務部長として、關西保險界に鳴らしてゐるが、氏が同社に入つたのは明治四十年であるから、三十有餘年間を同社と共に來た譯である。氏は明治十二年四月和歌山縣人川口保左衛門氏の長男として誕生したが、昭和七年嚴父退隱の後を承けて家督を相續した。先是明治三十七年東京高商を卒業して實業界入りしたもので、遠く歐米に外遊すること再度に及んでゐる。猶ほ先には大阪商工商會取締役に任じてゐた。時節柄切に祈自重。

川崎商店・社長

川崎榮助氏

帝都實業界の長老格としてわが川崎榮助氏は宰として抜くべからざる地位にあり、その聲名は夙に雷の如くに轟き渡つてゐる。現在氏は祖業を繼いで川崎商店社長として家礎を固め、實業界に乗り出しては富士瓦斯紡績、富士電力、第二富士電力各取締役に任じてゐて、練達湛能の名手腕を講えられてゐる。富士瓦斯紡績は本邦五大紡績の第一で、謂ゆる富士絹を以つてよく人口に膾炙されて居り、昨年度は富士織維を合併したが、氏は合併前の富士織維取締役に任じてゐた。富士電力は富士瓦斯紡績の子會社であるが、近來は頗る好業績を示し、發展擴張を續けて居り、また昨年度の湯水難の被害も極めて輕微であつたし、電力供給區域も川崎、保ヶ谷、平塚、静岡と新進工場地帯だから、將來性は益々有望である。氏は明治十五年一月東京府人先代榮助氏の長男として誕生し、大正十年家督相續と共に前名芳次郎を改め襲名した。氏は本年五十九歳、孝令夫人との間には五男一女を寵まされて幸福な家庭のよき慈父である。

三菱倉庫・常任監査役

川崎恂一氏

わが川崎恂一氏は三菱倉庫常任監査役として本邦倉庫界の第一人者たる偉材で、その名は斯界はもとより廣く實業界に鳴り響いてゐる。同社は云ふまでもなく日本倉庫界の大寶で、日本郵船を背景として全國各重要港灣都市に支店を有して居るが、歐洲再戦の展開に依つて愈々盛況、繁忙を極めつゝある。氏は同社の生え抜きとして明治四十二年入社以來三十餘年に亘つて同社の爲めに盡瘁しつゝあるが、取締役兼支配人、建築課長、大阪支店長等を経て現職に任じたものである。また氏は共同運輸常任監査役（先には同社監査役であつた）たる他、上海三菱倉庫、三共海運各監査役に任じてゐて、わが海運、倉庫に貢獻すること甚大なるものがある。氏は明治二十年十一月兵庫縣人川崎源八郎氏の長男として誕生したが、嚴父は今日猶ほ健在である。同四十二年神戸高商を卒業して直ちに三菱倉庫に入り、現在に及んでゐるが、その頭腦明晰にして計數に明るきことは既に定評あり、資性濃厚典雅なるは好紳士として畏敬されてゐる。

三井鑛山・常務取締役

川島三郎氏

大三井は現在合名と物産との合同合併が進行中で、第二回の脱皮期にあるが、鑛山の方は現状の儘であるかどうか、まだ發表されてゐない。三井鑛山は主として石炭に主力を注いで居るが、最近のニュースが同社の石油合成に成功したことを報じたことは戦時體制下の邦家にとつて誠に慶賀すべきことである。わが川島三郎氏は本邦鑛業、工業界の一權威として令名高き巨材で、三井鑛山常務取締役として名采配を揮つてゐるが、氏の技術的識見、經營的才腕は既に定評あるところである。氏はまた釜石鑛山、北海道硫黃、北海道炭礦汽船、山川炭礦、山東鑛業、南洋アルミ鑛業、東洋アルミニウム、九州共同火力發電各取締役に任じてゐる。氏は明治十六年十一月福岡縣人川島德彦氏の長男として誕生同二十四年家督を相續した。同四十二年東大工科採鑛冶金科を卒業、直ちに三井鑛業に入り砂川、三池各鑛業所長を経て取締役兼鑛務部長となり、昭和十三年現職に擧げられた。先には太平洋炭礦取締役に任じてゐた。

扶桑鑛業・社長

川島辰之助氏

帝國實業界一方の雄として川島辰之助氏の聲名は輝やかしきものがあ
る。氏は堂々たる立志傳中の一人物として諸人の崇敬を受けてゐるが、まことに氏の因縁は尊ぶべき力行主義の精進史で、以後後身の範とすべきに足るものがある。現在の氏は家業の貿易商を經營し合資會社川島辰之助商店代表社員として家礎を固め、實業界に乗り出して扶桑鑛業社長の樞機を掌握して鑛業界に活躍する他、東陽物産並に高津商店各取締役にも任じてゐる。これら各社は、永年實業界に在つて實地的體験に依つて培はれた氏の俊敏の如き經驗と、その運用の妙諦を極めた經營的才腕とに依つて、賑々たる業績を示し、斯界美望の的となつてゐる。氏は明治十四年二月千葉縣人川島徳三郎氏の二男として出生したが、大正七年分家して一家を立てた。夙に神戸の貿易商として有名なる湯淺商店に入り漸次重用されて東京支店長に擧げられ、次で本店支配人たり、また東邦炭礦取締役に擧げられたが、大正六年獨立して貿易商を初め現在に至つてゐる。

日東鑛業汽船・専務取締役

川田小三郎氏

從四位勳三等海軍主計少將川田小三郎氏は單なる武將ではない、其の手腕と力量とは一流實業家の肩を摩して堂々たるものがある。現時局下にあつては、凡ての方面に強力な人物を要望してゐるが、氏の如きは其代表的な一人として時代の一光彩として多くを望まれてゐる。氏は香川縣の人、明治四十三年東京帝大法科を卒業更に同四十四年海軍經理學校を卒業し、文武兩道の蘊奥を極めた、重厚謹直明敏穎智の士で、海軍在勤二十有餘年其間大湊要港部主計長、海軍々需部第三課長、經理局第三課長、軍令部出仕等に歴任し昭和八年海軍主計少將に陞進同年十二月豫備役仰付られ、爾來實業界に進出し確固不動の信念を以て圓轉濶達な手腕を揮ひ八面玲瓏眞に驚異すべき才幹を發揮し海運界に一點時を投じた。武將として一路盡忠報國に精進した川田少將が、世界を擧げて非常時たる現時、日本鑛業汽船を總帥し滅私奉公の至誠を捧ぐる事は、獨り日本鑛業汽船の發展に止まらず國家の慶福より大きいものはない。

辰馬汽船・常任監査役

川野眞太郎氏

川野合資代表社員川野眞太郎氏は明治十七年五月生れ、香川縣川野宗太郎氏の養子にして同苗忠夫氏は其の養弟である。兄弟協力して川野合資會社を組織し、神港早頭高嶺大陸を望んで躍進して居る。氏は夙に東洋協會專門學校に學び業卒るや實業に従事すること多年營々として精進の一路を辿つたが、時代は浸々として進行し經營亦舊態を許さない情勢を誘致して來たので、斷然川野合資を創立し時流を汲んで新裝の體形を以て出現したのである。實地に就いて鍛へた手腕力量は毅然として獨自なものがあつて、斯界を闊歩して重要な存在をなして居る。時局は實業素朴にして實行力の強靱な實業家を希求して止まない。氏の如きは實に典型的な時代人として推賞を惜まないものである。氏は又辰馬汽船常任監査役の要職にあつて事實上の統帥者として堅實な運籌振りを示して居る。氏は釣魚を趣味とし閑暇を得れば近郊の沼澤に糸を垂れ銀鱗空間に躍る潑潑たる様を見ては會心の笑を洩して居る。又謡曲にも深き造詣を有つてゐる。

中島機械・専務取締役

川畑光志氏

官廳會社銀行工場等凡ゆる方面に向つて需要の魁をなすものに計算器とタイプライターがある。其の發達は最近十數年の事であるが、既に日常の什器化しつゝある。川畑光志氏は時代洞察の機微に徹した士で、嘗ては東京計器、パキニウムオイルコンパニーに勤務し、現在は日本タイプライター會社の常務取締役としてこの文明の利器の製作を指導監督して居る。又中島機械製作所専務取締役として精機工作上多大な貢献をなし、事變下の我が軍需工業界に萬丈の氣を吐いて居る。氏は薩南鹿兒島の産で、大正六年東京高工を卒業し三菱長崎造船所に入社したが性來の滿々たる闘志と緻密な氏の頭腦とは造船事業に見切をつけ、東京計器に轉向し更に日本タイプライターへと移行させた。そして現に中島機械に勤務し、精緻な頭腦を以て只管優良品製作に關する研究指導に餘念がない。壯も出來て居るし實力もあり手腕もあつて第一線に立つての活躍振りは業界の俊傑といふべきで體ては堂々旗鼓を鳴らす巨大な存在となるであらう。

辰馬商會・常務取締役

川端昇太郎氏

灘で名高い辰馬正宗の本舖辰馬商會の臺灣奉行として臺北の陣營に作戰を練り堂々たる奮闘を示して居る氏は、明治二十三年兵庫縣川端伊之助氏の長男として生れ幼にして英才を以て知られて居た。明治四十三年大阪商業を卒業し直ちに辰馬商會に入り實業界に一步を印したのであるが、氏は明敏に加ふるに剛毅であつて、難關に當つては勇氣百倍何處迄も之を突破して進む氣魄があり、多年の社員生活は氏の手腕を練成し才氣を培つた。果進を重ねて常務取締役として樞機を握り經驗を如實に顯現し隆々として業界に覇を争ふ活躍振りは目覺しいものがある。氏は又龜甲萬壽油販賣社長、臺灣オフセット印刷監査役、日本徴兵保險臺北支部長に就任し、寧日なき活動を續けてゐる。氏の熱烈眞摯な活躍は愈々氏の信望を高め往く所可ならざるは其の關係會社の業績亦可なるものがある。蓋し辰馬今日の興隆の蔭には氏が三十有餘年の苦節と操守が、其の底に流れて居ることを忘れてはならぬ。洋々たる氏の前途を祝福して止まぬ。

大連汽船・専務取締役

川村龍雄氏

正七位川村龍雄氏は、大連汽船會社専務取締役として現地に於て經營の重任に當り、事變下の運輸交通に獻身的奮闘を續けて居る。南滿關東地區に存在する業界の強豪である。氏は一方國際運輸會社取締役をも兼務し多端繁忙裡に不撓の健腕を發揮し、大陸の一角に意氣軒昂として堅實な歩を運んでゐる。氏は長野縣士族川村次郎氏の令弟で明治十四年一月出生し明治四十年京都帝大獨法科を卒業し、令兄次郎氏の開拓せる地盤に進入し、實業者としての修練を積み、手腕力量を鍛練したもので、大連汽船の運命の鍵を握り、運籌の機略縱横自在、當に業界の權威を成し重きを以て推されてゐる。氏は單なる事業的の所持者ではない義に上海在任時代に於ては上海商工會議所常議員に推され、外交的、政策的方面にも卓抜なる抱負と經驗とを持つて居る。大連汽船の次代主宰者として德望あることも才腕喚發一騎當千の氣魄ある氏を讃する當然の歸結といふべきである。高潔廉直な氏の存在を心から敬仰して止まない。

日本曹達・會津工場長

川村倧二氏

氏は青森縣川村保美氏の二男にして明治二十五年十一月の出生、秋田鑛業會社大寺製練所に入社し、専攻の知識を實施に使用し勤勉精勵十餘年、大いに將來を囑目されたが、昭和三年日本曹達會社に轉じ會津工場に工場長として實權を握り經營に全力を盡し其の業績愈々堅實に發展を持續してゐる。又日曹の關係會社其他各方面に重役を勤め、奥羽の關門に重要な地位を擁し鮮明な色彩を現はして居る。氏は東北人特有の粘り強さの代表的所持者で加ふるに明瞭で敏活な一面もあり、人觸りよい捌けた型の人で從て外交的な手腕も自然に備はつて居り、洗練を経た才腕を中央に揮ふのも遠い事ではないであらう事を信する。現在氏は、日曹鑛業取締役、日曹火藥、第一産業、葡萄鑛山各會社取締役、荒川電力監査役の要職にあるを見ても氏の業界に於ける信望の如何に厚いかを證明して餘りありといへやう。時局下斯業が國策的重大使命を持つことは喋々を要しないところである。

東亞煙草・取締役

川村桃吾氏

當家は舊幕臣の末裔にして先代應心氏は、東京控訴院判事を勤務し、兩谷と號し文人畫の大家として普く知られたる士である。桃吾氏は、其の養嗣子として、明治三十九年家督を繼ぐ。明治三年、井部銈太郎氏の長男として出生、同二十九年東京高商を卒業し、英才を謳はれた。夙に實業界に入り明治三十九年東亞煙草會社の人となり以來三十有五年、同社の柱石となつて活躍を續け今日に至る。其の上海支店長時代の活動は實に目覺ましいものであり、本店支配人としても非凡な手腕を揮つたのである。氏は信念の人であり實行の人である。一度計畫を樹てるや周密な検討を加へ、その背案に適ふを見れば斷乎實行に移して一步も退かずといふ、強烈な實行力の把持者で、氏の成功は其處に出發して居る。財界に活躍馳驅すること多年今や覇成つて貫祿を示し、東京毛布専務取締役の外、日本特殊毛織取締役、東洋煙草、滿洲東亞煙草、丸之内ホテル各社監査役を勤務し、練達圓満な手腕を見せて居る斯界有數の人物である。

日本化學工業・大阪支店長代理

木村謙太郎氏

時代の寵児、日本化學工業株式會社は、云ふまでもなく大川田中財閥の總帥たる田中翁の主宰せるものである。當社の大阪支店長代理として、いま八面六臂の活躍ぶりを示してゐる木村謙太郎氏は當社生え抜きの敏腕家で、また優秀な技術家としても有名である。氏は宮城縣の人木村一晁氏の長男で、明治二十五年七月に生れた。東京帝大農學部農藝化學科に學び、同校を大正七年に卒業するや、直ちに日本化學工業に入社したものであるが、當時同店は大日本人造肥料と稱してゐた。實地から叩き上げたゞけであつて、現在氏の右に出るものなしとまで云はれる程その道に卓見を有し、正に斯界のオーソリテイとも稱すべきであらうか。氏は同社大阪支店肥料販賣課長を経て昭和十二年五月、社名改稱と共に同支店代理に進んだが、縦横の才腕を發揮只管忠勤に勵んできたのであつた。願れば氏はエンヂニアとして斯業に携はること二十餘年、製品の向上に能率の増進に不撓なる努力を續けて輝ける半生の奮闘史を飾つたのである。

三井物産・神戸支店長代理

木村專一氏

神戸財界に於ける中堅の自眉と目されてゐるのが三井物産神戸支店長代理の木村專一氏である。その地歩たるや既に磐石の如く、更に根強く勢力を加へつゝあるところ將に智將をもつて鳴り、その手腕は既に定評があつて今更こゝに贅言を要せざるところである。氏は岐阜縣の産木村彌五八氏の長男として明治十八年八月に誕生昭和九年に家督を相続したものである。明治四十一年早大商學部を卒業後實業界の人となり、爾來順風に帆をはらむが如く、今や三井財閥一方の關將として、常に推進力的な役割を果しつゝ、重要ポストとして言外の重みを示しつゝある。英雄は時に世界地圖を變更することがある。日本民族の發展は今や東亞新秩序の建設に全力をもつて邁進しつゝある。盛んに發展して息まざるのが我が民族の優れたる所以であつて、國策の遂行に當つて協力を惜しまざるところに國民としての忠實性が存する。而してこの國策線上に沿つて三井を背景に活躍しつゝある人に木村氏の在ることを我等は聲高々と提唱したい。

大平製作所・社長

木村彌作氏

數多き製作所の中にあつて旭日昇天の勢ひを示しつゝあるのが木村彌作氏が社長として采配を揮ふ株式會社大平製作所である。氏が親しく采配を揮ふ事業は必らず異數の躍進的發展を遂げてゐる。曩に合資會社木村彌作商店を創立し其代表社員たるなど、その優れたる手腕のゆえは、何れの事業にも成功を招來させたことによつても試験済である。以て氏の非凡なる才幹は明らかであり、業界に重きを成してゐるのも、氏の人格が堅い信念の下に立ち、事業の目的貫徹に精勵して倦まぬ剛柔兼備の至誠のほとばしりがあればこそである。氏は愛知縣の産、先代彌作氏の長男として明治五年三月に誕生、同十六年家督相続と共に前名榮吉を改め襲名に及んだ。夙に鋼鐵機械商を營みつゝ現に大平製作所社長として一切を牛耳てゐるが、流石身親しく業務の苦汁を味はひ得る人物だけに、従業員に對する思ひやりも深く、勞資協調主義の典型的事業家として、廣く業界に異彩を放つてゐるのみかその信望亦あまねきものがある。

北海道製糖・取締役兼支配人

菊地武男氏

吾が糖業界の新人物で斯界のホープと目されてゐる氏は北海道製糖(株)の取締役兼支配人である。糖業界の近況はますます好調裡にあり、就中北海道製糖の飛躍發展は顯著なものである。當社が斯界の一角に立つて愈々急ピツチを上げ雄飛してゐるのは、これ取りも直さず當社運営の堅實さと、優秀なる人的要素とを立證するもので、隆々たる今日の勇姿は一に經營首腦者の奮闘努力の賜であるは多言を要さないことだ。特に取締役兼支配人たる菊地氏が齎した功績は絶大なるものがある。氏が當社に入つてより二十餘年、その間神戸工場を経て黙々と續けた努力は實に偉大。然ればこそかゝる現在の榮位を獲たのであつて、過去に於ける閱歴から押し當然すぎるほど當然な歸結なのである。氏は東京府人菊地則常氏の長男にして明治二十六年生れ、東京工高を大正四年に卒業した秀才である。目下、十勝鐵道(株)取締役の重責も兼ねて信望篤いが、人格識見共に卓抜な事業家でその前途は洋々として春秋に富んでゐる。

木村商事・代表社員

木村長四郎氏

凡そ理想と經驗無き實業家の取るに足らざるはいふまでもないが、木村氏はその理想と經驗を事業の上に表現するにあたり、最も實際的にして常に大地に即した緻密周到の用意を持つてゐる。かゝる點が人々の畏敬を聚める因を成し、やがては今日の盛大を招來する所以ともなつたもので、流石關西に勇名を馳せてゐるだけであつてその手腕にも鮮やかなところがある。氏は大阪府人木村常七氏の四男にして明治十九年十一月に誕生、大正元年に家督を相続した。現に木村商事合名會社代表社員、シャーリング工場株式會社社長、中國製鐵、泰絨布株式會社取締役の任にあつて氏自ら采配を振り、指導そのものがごとく氏の胸、腕に依つて鮮やかに進められつゝあるしたがつて時流に沿ふその經營方針は今や、世の大實業家に伍して少しも遜色がないばかりか、業績も至極順調で何等不安が伴はないのも、長年に亘る堅實無比なる營業方針の現はれとでも云ふべきで、そこに氏獨自の手腕がもたらされたのである。

木村鐵工所主

木村寅吉氏

業運隆々として噴々たる好評を浴びつゝあるのが、製鐵業を營みつゝ木村鐵工所を主宰してゐる木村寅吉氏その人である。大阪市此花區の木村鐵工所と云へば業務そのものが、主宰者そのものゝ不屈なる精神力を現はすが如くであり、一見地味のやうには見えるがねばりのある底力から刺り出されるやうな營業政策は次第に堅實味を増して行くのをもつてよく人々に知られてゐる。氏は奈良縣人木村幸吉氏の長男にして明治十二年四月に誕生大正十一年に獨立開業し、木村鐵工所を經營しつゝ今日に及んだもので、業務に最善の努力を惜しまぬ氏は亦、従業員に對して出來得る限りの温情を示してゐる。全員一致、協力の實を擧げてこそ顧客に最大の満足を得るものと自負しつゝある氏は、些細の過失は之をとがめず、明朗にして心からなる協力を求むべく、無言の裡に之を示唆しつゝあると聞いてゐる。したがつて一度木村鐵工所の祿を食む以上、浮腫にならざるが如きことはなく何れも懸命に精進しつゝあるといふ。

播陽商船・事務取締役

岸田種嘉氏

海運界にあつて多年、果敢なる開將の名稱を讃えられる岸田種嘉氏は、現時播陽商船(株)事務取締役の要職にある。氏は明治十九年一月に大阪府人岸田瑛臣氏の二男として生れ、同三十八年に家督を相続した。夙に大阪商船に入社したが、氏が海運界に印す第一歩で、日露戰役後に飛躍し、更に第一次歐洲大戰で大なる發展を遂げた大阪商船に於て大いに才腕を認められ東洋課次長に進み、當時の社長堀啓次郎氏及び前社長村田省藏氏の片腕となつて縦横に敏腕をふるひ、同社繁榮のために死力を盡したのであつた。だが昭和十年、播陽商船(株)に轉じて支配人となり、現時は同社事務取締役として大いに活躍し、押しも押されぬせぬ光輝ある存在となつたのである。播陽商船のため、またもつと大きく吾が日本海運界のため、日夜粉骨砕心、ひたすら献身的努力を盡して働いてゐる氏に大なる敬意を表したい。力備豊富で識見高邁なる逸物、播陽商船と共に生き、共に延び、共に大きく働くものは正に岸田氏であらう。

鶴見化學研究所・代表取締役

北村一男氏

由來事業經營に凡ゆる困難が伴ふは寧ろ定石とも云ふべきで、事業經營者が往々にして失敗を繰返し退陣を餘儀なくされるのも、困難に克つべく餘りに條件に恵まれなかつた爲にほかならない。北村一男氏が事業界に於ける優秀なる人物として夙に折紙をつけられ、今や株式會社鶴見化學研究所、大和セメント、熱海ゴルフ各株式會社代表取締役を始めとして日本アスパラカス株式會社取締役其他の重役を兼て絶讃惜く能はざるものがあるのも、その主宰者たり統率者たる氏の努力が大きく働きかけてゐることを銘記しなければならぬ。氏は新潟縣の産、北村儀平氏の長男にして明治三十年十月に誕生した。大正九年中央大學商科學業後日魯漁業株式會社に入り秘書役として令名を博してゐたが、其後次第に事業界へと進出、名古屋製材株式會社取締役、千原製材株式會社監査役等を経て遂に堂々と今日の如き人氣を獲るに至つたもので、其間永き年月を費してゐるだけにその功績も決して少くない。唯一の趣味はゴルフである。

進榮堂主

北村久五郎氏

氏の菓子商生活は實に久しきに亘つてゐる。その永い生涯を通じて氏は斯道發展のため、常に献身的な努力をつゞけて来た。今日氏が斯界に於て穩然たる勢力を占めつゝあるのも常に全機能を發揮して、勇奮精進して来た賜物で、その大乗的精神に至つては後輩の等しく學ぶべき點が多々ある。氏は滋賀縣人北村久五郎氏の長男で明治十二年三月に誕生、同十八年母堂もと子氏の家督を相続と共に、父君の名を襲名に及んだものである。夙に菓子商を営みつゝ進榮堂と稱して其名を近隣に響かしてゐた氏は身を持するに堅實第一主義をもつてし、絶えず斯道向隆のために全力を注いでゐた。したがつて漸次頭角を現はし實力も加はつて今や本業のほか森永製菓西販賣株式會社専務取締役、大阪三河屋菓子株式會社取締役として並ぶものなきその才腕は、俊毫競ふ中であつてよく社勢を擴張し比類なき實力は、その才腕と相俟つて堂々たる偉容を築きつゝある。洵に氏の如きは當代に於ける識見才腕兼備の人として推稱できる。

北村商店・代表取締役

北村省三氏

北村商店代表取締役、江東商會専務取締役、其他の重役を兼て氏が今日偉大なる勢力を把握しつゝあるのも效果的な經營方針の賜物である。氏の強味はなんと云つても經營の堅實性である。徒らに積極經營を圖らず亦功を焦らうともしない。その事業をして一歩々前進せしめ著々と効果を把握することにある。したがつて氏の引揚げて立つ北村商店の飛躍發展も實にめざましきものがあり、それにも増してその拮据經營に全力を傾注しつゝあるところなど、將に業界の自眉とも云ふべき存在である。氏は兵庫縣人棚池源松氏の二男にして明治二十二年二月に誕生。其後北村長三氏の養子となり大正六年に養弟傳次郎氏より分家した。夙に野望滿々として霸氣に富んだ氏は、日頃より精勵之を怠ることなく、ひたすらその手腕の洗練をはかりつゝ、將來に具へるところがあつた。斯くて今や事業界の逸材として勇名を馳せつゝあるのみか、業界制覇の表街道をめざしつゝ卓抜なる手腕を縦横に揮ひつゝある。

大八化學工業・代表取締役

北村芳朗氏

わが北村芳朗氏は關西實業界一方の雄として第一線に活躍しつゝある青壯實業家である。氏は現在合資會社北村商店無限責任社員として自家の礎を固め乍ら實業界に乗り出し、大八化學工業代表取締役たり、また大日本エーテル工業、東陽造酒各取締役、江東商會監査役に任じてゐるが、その俊英なる才幹は行くとして可ならざるはなく、各社共に氏の名手配下に賑々たる業績を挙げ、斯界を躍目せしめてゐる。氏は明治三十二年七月大阪府人北村省三氏の長男として出生したが、大正十四年分家して一家を立てた。先是同十年神戸高商を卒業して實業入りしたのであつた。氏の異父兄傳次郎氏は酒類藥品商にして大日本エーテル工業江東商會各取締役に任じて居り、養兄省三氏は北村合資代表社員にして江東商會専務取締役、大日本エーテル工業、東洋造酒各取締役に任じ、共に知名の實業家である。また豊子令夫人は神戸元町郵便局長高津仙介氏の長女で、夫人との間には三男の子寶がある。猶ほ氏はゴルフ、撞球の名手である。

吉比商店・社長

吉比爲之助氏

吉比爲之助氏は華城大阪を中心とする皮革界の第一人者として聲名高き巨豪である。即ち關西で吉比商店として本邦有数の會社であるが、氏は兩社の社長として斯界に冠たる名采配を揮ひ、皮革國策の爲めに貢獻するところも頗る甚大なるものがある。氏はまた夙業を伸ばして飛騨川温泉土地取締役並に日本重化學工業監査役に任じてゐるが、土地會社は金より物の時代であり、化學工業は時代の寵兒であるから兩社共に賑々たる業績を挙げつゝあり、斯界美望の的となつてゐる。氏は大阪府人たる先代爲之助(退隱後は舊名與平次にかはつてゐる)氏の長男として明治二十六年七月誕生したが、昭和十二年先代退隱により家督を相続し前名爲三を改めて襲名した。嚴父與平次氏は現在飛騨川温泉土地取締役たり、また從弟吉比藤二郎氏は皮革商として知名の士である。氏は閑令夫人との間に三女あり、長女田鶴子女の養子新六氏は東大出の秀才である。

大阪機械工業・専務取締役

北村千次郎氏

わが北村千次郎氏は關西メーカー界の重鎮として噴々たる聲名を馳せつゝある偉材である。時局下の物資統制は鉄、鋼、鐵材に殊に酷な様であるが、歐洲再戦も愈々絶頂に達した今日、諸機械類の需要は益々激増しつゝあり、業者は勿論のこと政府當局も原材料の補給に大重になつてこの難局切抜に當つてゐるから、何んとかして新しき活躍は拓かれるであらう。勿論資材難にも屈せず業界が毀産産業中の花形として盛況を誇つてゐることは言ふまでもない。氏は現在大阪機械工業専務取締役として同社の樞機を握り、また松本鑄造鐵工所常任監査役として計數に明るき頭腦の牙を見せつゝあるが、兩社の業績は頗る輝いてゐて、業界を躍目せしめてゐる。氏は明治十年一月京都府北村善兵衛氏の二男として出生したが大正十一年分家して一家を成した。夙に三越に入り、經理副部長兼庶務係長、營業部次長等を経て、京都支店長に擧げられたが、之を辭して現在に及んでゐる。猶ほ氏は五男四女の子福長者としても美望されてゐる。

和歌山木材倉庫・取締役

北村範次氏

由來和歌山縣の地は檜、杉其他の優良木材を産することに於て、木會と並び稱されてゐる木材の原産地であつてゐる逸材である。流石に家柄は良し、農大出の技術家と來てゐるから、四十一歳の今日既に縣下斯界の師表と仰がれるに至つてゐる。氏は現在和歌山木材倉庫取締役たる他、和歌山木材、北村酒造各監査役に任じてゐるが、近時輸入木材は概んど制限のため禁止状態にあるから、各社の躍進は目覺ましきものがあり、賑々たる業績を示しつゝある。氏は明治三十三年一月奈良縣下の名家たる北村宗四郎氏の三男として誕生したが、大正十五年分家して一家を成した。先是同十二年東京帝大農學部を卒業して、帝室林野局に勤務したが、同十四年退官して父業を承継し、北村製材所出資社員として木材問屋業を営みながら、實業界に乗り出したのであつた。猶ほ氏は和歌山縣多額納税者に列して居り、將來の大成を待望せられてゐる。

川北電氣・専務取締役

清田岩夫氏

電機工作界が最近異常的發展を遂げ殆ど停止する所がないといふ豪華さは躍進日本の象徴として眞に慶賀に堪えない。川北電氣が夙に電氣機械機具の各般に亘つて斯業界に貢獻したことは人のよく知るところ、且又川北製品が優秀を以て誇あることも知られて居る。其の専務取締役として此を統帥するのが清田岩夫氏その人である。氏は五十に満たぬ少壯實業家にして、第一化學工業専務取締役、日新電機常務取締役、中央電機製作所、日本通信工業、彦島増場、タイガー電氣各社の取締役に任じて居り、關西實業界の第一線に在り活躍してゐる俊傑である。氏は徳島縣清田虎助氏の長男で明治二十九年の生れ、大正九年東京帝大法科獨法科を卒業し直ちに日本銀行に入りしが性來の動的性格は氏を驅つて製作事業界に投ぜしめ爾來氏の活躍は素晴らしいものであり、精緻な頭腦と流麗な手腕とは業界の異彩である。春秋に富む氏が財界に覇を成すことも決して遠い將來の事ではあるまい。氏は讀書によつてより大なる明日を祈念して研鑽を怠らぬ。

清田商店・社長

清田房次郎氏

株式會社清田商店を根幹として、横濱清田商店社長、巢鴨驛合同運送社長、三四石炭取締役會會長、東北運輸取締役、東京石炭同業組合役員の要職を帯び悠然として財界に君臨する清田房次郎氏こそ帝都石炭業界運送業界に於ける重鎮である。統制國策は消費界運輸界にも波及し業者の自由を束縛し其の運營の上に妙からぬ節手となつた事は事實である。然し需給の調節と通運の合理化とは斯業者の良心の發露に依つて完成されなければならぬ。氏の卓見と蘊蓄とは定評ある所であり又其の才腕力量に於て非凡なものがあり、只管國策推進の桶となつて減私奉公の至衷を披瀝し聽て展開せらるべき機會を待望し徐ろに豫後の計を建てつゝあることを信するものである。氏は東京府先代房次郎氏の長男で明治二十四年七月生れ大正三年慶應大學理財科を卒業し、昭和十年先代の後を承け前名泰清を改めて房次郎を襲名し清田商店經營の局に當り、養弟清田勇氏と提携して清田王國建立に向つて不斷の精進を續けてゐる。

京城紡織・社長

金 李 洙 氏

京城紡織會社社長金李洙氏は、海東銀行取締役會長、昭和麒麟麥酒、朝鮮書籍印刷、中央商工、東京鐵道各取締役、朝鮮貯蓄銀行、朝鮮信託、朝鮮製鍊、朝鮮石油各監査役、三養合資代表社員に就任し、半島財界に一大制覇を遂げ萬丈の氣を吐いて居る。氏は明治二十九年、京城府金羅中の二男として生れ、大正十年京都帝大經濟學部を卒業した半島の産んだ俊足である。夙に實業界に入り大正十一年には既に京城紡織會社事務取締役に起用せられた財界稀に見る躍進を示して堂々たる巨歩を印し、昭和二年には海東銀行事務取締役に推され、其の力量手腕は驚くべき俊敏を持つて居た。前記の如く氏は半島に於ける代表的會社に牛耳を握り首都京城事業界の重鎮を以て任ぜらるゝ事は慶賀に堪えないと同時に、半島出身者として、虹の如き氣を吐いて居る。支那事變は現地と距離に於て近接し交通運輸に於て直接關係を有する事情の下に置かれてゐる半島業界、其の影響も決して尠くないことを想察する。之を克服して更に躍進を望む。

大日本煉炭・社長

久保田積藏氏

勳六等の肩書を持つ久保田積藏氏は現時大日本煉炭(株)社長、大同産業、大同生業工業、鹿路本岐炭礦各株取締役、大風公司(資)有限責任社員の諸重役を兼ねてゐる。當家の祖先は菅原道真公に致仕したといふ名譽ある家柄で、積藏氏は熊本縣の人久保田長重氏の令弟である。明治十六年二月の生れで東京帝大法科獨法科に學び、同十四年に卒業するや直ちに朝鮮銀行に入社、鎮南浦、吉林、哈爾濱各支店長、本店支配人、營業局長、滿洲業務部長兼庶務部長、大阪支店長、東京支店支配人等を歴任して名バンカーぶりを遺憾なく發揮したが、現在では事業界のホープとして時局下産業戦線に奮闘を續けてゐるのだ。氏の業界に於ける地位は今や確固不拔なるものであり、經濟界の指導者として、また業界の一翼を擔つて前進する颯爽の士としてその信賴は大きく、卓越せる經營手腕は内地は云ふに及ばず、鮮滿までも廣く遠く及んでゐるが、人格の高遠さと相俟つて愈々光彩を放つてゐる。

日産自動車・常務取締役

久保田篤次郎氏

日産自動車株式會社が他社に比して遜色なき進展振りを示してゐるのは偏に首腦部の采配宜敷きを得てゐるが爲にほかならない。殊に常務取締役たる久保田篤次郎氏の卓越せる經營手腕と、その智謀とは樞機を劃していさゝかも誤るところなく、同社が今日の好況を保ち、尙將來に飛躍せん備えのあることは、實に氏の挽みなき努力の賜物である。氏は大阪府人東山篤義氏の二男にして明治二十四年七月に誕生其後久保田權四郎氏の養子となつて昭和二年に分家した。明治四十五年大阪高等工業學校機械科を卒業後、ダット自動車製造、戸畑鑄物各株式會社重役を経て現職に及んだもので、過去三十年に跨る機械生活には文字通り有爲轉變、幾多の波瀾曲折は免れなかつたであらうが、よく之に堪へ得たのは曠野に導として咲く一輪の花にも譬へられ、風雨に曝され雪にもをぢず節操を全ふしたる忍苦を想ふ時、今日の氏の大成に一段の尊敬を拂はずにはゐられないのである。切に自愛を切望してやまない。

樺太製糖・常務取締役

久保田富三氏

茲に氏の關係する事業を挙げれば牙城たる樺太製糖を據點として、その足跡の事業界に及ぶところも廣く、將に巨歩を印して名ある人物である。即ち樺太製糖株式會社常務取締役を筆頭に、明治製糖、河西鐵道、明治農産工業各株式會社取締役として何れもその經營に全力を盡しつゝある。而してそのことごとくが順當なる効果を收めつゝあるのを見る時、こゝに的確なる氏の手腕を再認識することが出来るのである。人は環境に支配され易い、「朱に交はれば赤くなる」とはこの點を指したものであらう、しかし善い環境であつたならば寧ろ進んで之に育まれ個性の助長を資するに如くはない。機を見るに敏で熟慮斷行の果敢なる氏が夙に事業界に在つて儕輩を擢んじてゐたことは周知の事實で、同時に環境に恵まれたといふ點も與つて力ある。流石に事業界に打つてつけの人物だけであつて、その几帳面振りと謹嚴な態度とはよくその人と爲りを現はしてゐる。氏は東京府士族久保田信平氏の長男で明治十八年一月の誕生である。

久保田商店・代表取締役

久保田惣右衛門氏

曩に八王子商工會議所會頭に擧げられて令名を博した久保田惣右衛門氏は、まことに八王子を代表するにふさはしき事業家と云はなければならぬ。現に久保田商店、久保田織物工業、桑葉織物各株式會社代表取締役、安貞合資會社代表社員等の任にあり、今日まで一路織物業界にのみ進み來たつたその足跡は大きく、斯業に對する氏の遠眼は流石に他の追隨を許さぬ一日の長を持つてゐる。「金剛石も磨かずば光りなし」と云ふが、氏の如きはそれを裏書する好個の寶石である今日織物業界を背景に八王子實業界に明星の如き存在を示し、業績も逐年向上し自他共に許す斯界の重鎮たる羽振を利かせつゝある、その得意たるや想ふべしであるが、それも願みれば全身に漲る霸氣と不屈の精神力によつて一路到達した賜物なのである。氏は神奈川縣人久保田喜右衛門氏の長男として明治十二年六月に誕生、大正十五年家督相續と共に前名實太郎を改めたもので、資性極めて濃厚、人心收攬術にかけても一世に秀でたるものがある。

久保田鐵工所・事務取締役

久保田藤造氏

日本鑄鐵管合資會社代表社員であり株式會社久保田鐵工所事務取締役兼東京支店長である久保田藤造氏は、斯界一方の關將として廣く知られてゐる。今氏が畢生の事業として全力を注ぎつゝあるのは勿論久保田鐵工所であるが、同所は資本的にも或ひは經營方面に於ても殆んど氏が之を把握してゐる。氏が單なる机上論者でないといふことは、製作に當つては實際の指導に音かでなく、更に研鑽を積んで技術の向上に努めてゐる。かゝる努力の實りこそ期して持つべきものがあり、同社今日の隆昌も即ちその收穫なりと云ふべきである。氏は大阪府人久保田權四郎氏の二男にして明治三十年十一月に誕生し昭和二年に分家した。今日未曾有の此時局にあたり國防第一義の下に、財政經濟力の充實強化を必要とし其上に舉國一致の實が運用される。この秋之際氏の如き有爲なる人材を見出し得ることは、吾人の最も欣快とするところである。氏の齡未だ四十を過ぐること僅かであつてみれば其期待こそまことに大なるものがある。

ドリル製造業

久保田久夫氏

努力といふことは口では容易に云へるものゝさて實行といふ段取りになつてくると、さう簡單にいふものではない。久保田氏は前進の中途に横たはる障害をよく拂ひのけて來た。夙に父業を繼承して大正三年に獨立し、昭和九年に至つてドリル製造業を開始して以來このかたといふものは、文字通り努力の連續であり、苦闘に對する挑戦でもあつた。よく成功の近道とか金儲けの法とかいふことを聞くが等はことごとく眉唾ものと思へば間違ひはない。人生に近道があつたり法で金儲けができたりするものならば、それを望む者、誰あつて營々として額に汗するであらう、人生の正しい道は一筋である。この一筋を誤りなく歩んでこそ望みは達せられるのであつて、久保田氏の如く眞摯なる態度に挽きざる努力が伴なつたればこそ、大成の彼岸へと到達したのである。氏は靜岡縣の産、久保田磯松氏の三男で明治二十九年七月に誕生した。生れつき器用でなか〜才能にも長けてゐる唯一の趣味はドライブである。

東洋特殊合金製作所・社長

久保田弘氏

人は決して金力のみで地位を築き得るものではない。まして聲望を得るなどといふことは及びもつかないことである。氏が今日財力を擁しその地位業に抜んで居るのも決して物質のみの賜物ではない。氏の人格が無言の裡にも大なる力となつてゐるのである。即ちその徳望あまねきは取りも直さず氏の人格の裏書であると云へる。氏は大阪府人久保田平太氏の三男にして明治十九年九月に誕生し大正五年に分家した。夙にわかもと本舗に入り同社取締役兼支配人に進み、更に同仁藥房代表取締役を兼て精勵するところがあつたが、後に退社して東洋特殊合金製作所(株式會社)を設立し其社長に就任して今日に至つたもので、氏が事業界一方の將として廣く知られてゐるのも、畢竟定評ある手腕もさることながら、その人格が誘因をなしてゐることも否めないものである。産を築くことはもとより結構であるが、然し意慾を満たすと同時に人格的閃めきにも接したいものである。其點氏などは範を垂れるものと云つていい。

神戸汽船・専務取締役

倉賀野莊治氏

從七位倉賀野莊治氏は、陸軍砲兵中尉である。兵庫縣人高橋庄太郎氏の五男にして明治十九年二月生れ、同三十九年に姫路中學を卓抜な成績で卒業し、倉賀野家を嗣いで業界に颯爽として登場したのである。現時は神戸汽船(株)専務取締役、篠栗炭礦、梅屋酒類各(株)取締役、三星商會(資)代表社員の諸重役を兼ねて八面六臂の活躍ぶり、正に無敵を誇る荒鷲的存在である。剛毅大量、差別なく各方面の人物に會ひ語り、會ふ程の者をして必ず敬慕の念を抱かせる高徳もある。近時、氏の關係各社、みな等しく業績向上、躍進の一途を辿りつゝあるも氏の逞しい實力を示すものであらうか。兎に角熱心の人、力の人としての氏の存在は獨り業界のみならず各界に大きく光つてゐるのだ。不屈不撓、堅忍不拔の軍人精神と旺盛なる闘志とを持つ氏は業界に出で、より頑張り通し、遂に中堅實業家の幸として咲き誇つたのである。轉換期日本の業界に於て、氏が今後如何なる飛躍發展を示すかは、蓋しみものであらう。

黑板工業所主

黑板駿策氏

我が法學界の新人として黑板駿策氏の名は濺瀾として若鮎にも似て清新さを持つてゐる。學界と事業界!! 恰も車輪の如く兩端を相行く氏の存在はあまりにも大きく又あまりにも顯著なるものがある。勿論氏が今日まで歩み來つた過程には幾多の大きな功績が残されてゐるといふことは云ふまでもなく、それに伴ふ蘊蓄、手腕、經驗などの點に至つても到底世の人の及ぶべくもないところがある。氏は長崎縣の産、黑板傳作氏の二男にして明治三十九年一月に誕生、昭和八年に家督を相続した。昭和四年早大法科を卒業と共に事業界に入り現在黑板工業所主たるのほか、大村眞珠、月島機械各株式會社取締役を兼ね、更に早稲田大學法學部講師の任にあつて抱くなき精力を傾けつゝある。氏の如きは唯法の權威者たるのみならず、實業界の手腕家であり學界の指導者なのである。したがつてその貢獻するところ亦甚大なるものがあり、眞に學究的人物の典型とも云ふべく今やその存在は出で、益々輝かしきものがある。

盛岡精器製作所・専務取締役

黒田三郎氏

帝都の西南東京灣口を扼する蒲田の地は嘗ては町と羽田との間は荒蕪たる葦葎の茂り生ふ處であつたが、羽田空港が完成し大東京に偏入されてからは、松竹撮影所の大船移轉も、この十年間に急激なる大發展を遂げ、大小工場が林立して軒を並べる盛況を呈するに至つた。現在の蒲田地區は帝都の工場中心地帯と云つても差支へないであらう。わが黒田三郎氏はメーカー界一方の雄として蒲田地區に呼應しつゝある驍將で、その滿々たる闘志は向ふところ敵なしの概を示してゐる。蓋し氏は立志傳中の一頁を飾るに應はしき成功者で、その閱歷は血と汗にまみれた苦闘を以つて綴られてゐるのである。氏は明治二十四年十二月福岡縣人黒田仁太郎氏の三男として出生、昭和十年分家して一家を立てたが、夙に機械製作業を營み、現在では黒田挾範製作所代表社員たりまた盛岡精器専務取締役に任じてゐるが、兩社共に氏の尊き體験に依る名采配下に賑々たる業績を擧げ斯界美望の的となつてゐることは言ふまでもない。

千代田生命保險・福岡支部長

桑原利市氏

生命保險界に相當長い歴史を持ち、逸早く相互會社に改組し新陣容を以て庶民金融界に臨んだ千代田生命の偉容は愈々其信用を高め其保有契約高は二十億を突破せんとする盛況を呈し本邦五大生命會社として堂々の陣を布いて居る。この千代田生命の北九州探題として配せられたのが、桑原利市氏である。氏は千代田生命に入社して既に四十年、入社當初は單なる地方外交員であつたが、氏の持つて生れた不屈不撓其の成績の躍進振り目覺ましいものがあつたので累進して福岡支部長となり倍々烈々たる意氣を以て活躍して居る。氏の今日ある實に不撓精勵の結晶であり、千代田生命の貴重な存在であると共に北九州財界の一勢力である。氏は江州桑原嘉四郎氏の長男にして明治十年七月の出生で同二十五年家督を相続したが現在福岡に籍を移した。氏既に六十才なほ鏗鏘として活躍し倦む所を知らない。千代田生命に盡した功績は没す可からざるものがあると言ふも愚か。千代田生命の發展史の第一頁に特筆さるべきであらう。

南千住製作所・専務取締役

小島福次郎氏

歐洲第二大戰の一大展開は、日支事變の勃發以來股賑を識はれてゐる製作界を新たに拍車して、メーカーと云へばその大中小を問はず日に夜を次ぐ大繁忙、大盛況を呈してゐるが、わが小島福次郎氏が専務取締役たる南千住製作所は、永年に亘る氏の努力の甲斐あつて近來は頓に發展飛躍を遂げ、帝都城北工場街のピカ一的存在として赫々たる業績を示し、業界美望の的となつてゐる。氏は明治十五年十月栃木縣人たる小島貞治郎氏の三男として誕生したが、昭和二年令兄貞藏氏方から分家して一家を立てた。幼年時より機械に對する興味を有してゐた天才肌の氏は、明治三十八年東京高等工業機械科を卒業し、エンヂニヤとして身を立て、南千住製作所の設立に盡瘁し、終に同社今日の大をなさしめたもので、其間の氏の勞苦は並々ならぬものがあつた。猶ほ氏はその技術と手腕を買はれて、昭和十三年高崎板紙に入社し工務課長に任じてゐるが、同社近來の盛運は氏の現業に於ける精勵に負ふところまた大なるものがある。

帝國酸素・専務取締役

小高親氏

時局産業界の中堅として着實なる歩みをつゞけつゝ次第に盛名を博して來た帝國酸素株式會社も、今や非常時局に於ける生産擴充の一翼を果しつゝ、更に明日の飛躍に具へんものと、益々その陣營の強化を計りつゝある。これも偏に同社専務取締役として經營の運行に、或ひは技術部門の指導に熱意をもつてあたる小高親氏の存在があればこそで、その才腕の賜物であることは言を俟つまでもないところである。氏は埼玉縣の産、小高親根氏の五男にして明治二十二年六月に誕生し、大正五年令兄秀一郎氏方より分家した。明治四十五年東京高等商業學校を卒業後三菱造船所に入り、次いで大正六年住友會社に轉じ、同社神戸販賣店支配人を経て住友系なる帝國酸素の専務となつたもので、天降り式な重役とは根本的にそのスタートを異にしてゐる。即ち大正九年及び昭和十二年の二回に亘て歐米を巡遊しその蘊蓄に新たなるものを加へると共に、益々研鑽を怠らず現に「カルテル會計と分課元帖」の著書がある。

北海貯蓄銀行・専務取締役

小竹文次郎氏

北海貯蓄銀行であり、これを引提げて起つ専務取締役小竹文次郎氏の姿こそまことに壯と云はざるを得まい。氏は京都府人岡本金四郎氏の二男にして明治十五年十一月に誕生、其後先代トメ氏の養子となつて同四十二年に家督を相続した。明治三十八年早大専門部政治科を卒業後、地方産業の開發に努力しつゝある小竹氏を、一地方事業家と稱するには、聊か妥當を缺く嫌ひがある。その意圖の大きく秀れたる手腕から云つても、恐らく中央財界の何人にも伍してもひけはとらないであらう。それなればこそ札幌商工會議所議員として重きをなすばかりでなく先には札幌市會議員として市政に參與するなど、その功績に至つては實に甚大なるものがある。氏が如何に地方産業の開發に熱心であるかは、その地位、その勢力から云つても首肯するわけである。力量こそ測り知れざるものがある。

戸澤鑛山冶金研究所長

小玉美雄氏

氏は愛媛縣人小玉信吉氏の五男にして明治三十一年八月に誕生し大正八年に分家した。年少の頃から負けず嫌ひで何となく將來の遠大なるを想はせるものがあつたが、小學校を卒へる頃より漸次向學心は熾烈となり、やがて東京物理學校に學び、更に東京帝大化學教室に化學を専攻した。もとより小玉氏とてこれのみにて甘んずるの意思はなく、次いで大正十一年獨逸フリードリッヒ・ウイヘルム大學及びヘッセン・ルードウィグ大学に學んでいよ／＼博識の度を積めた。斯くて昭和四年昭和肥料會社を振り出しに同八年には日本電氣工業會社に轉じ、現に戸澤鑛山冶金研究所々長として令名を馳せつゝあるほか、日本火工、日本炭業、昭和火藥各株式會社取締役其他の重役を兼て異數の尊嚴を聚めつゝありその信望は更に内閣資源局中支派遣軍囑託として、聖戰の完遂に一翼の力を添へしめてゐる。その圓熟せる人格は事業家と云はんよりは寧ろ學者肌と言ひたいところで、讀書を趣味とし嘗ては東京獸醫學校講師の任にあつた。

大垣水産市場・専務取締役

小寺仁左衛門氏

「商人は常に國策に眼覺めたる戦士でなければならぬ」と。之を著書してゐるのが小寺仁左衛門氏である。氏の精神主義に鮮やかな勝利がもたらされたのも、率先してかゝる持論を實踐したればこそであつて、今日氏が大垣市會議員、大垣商工會議所常議員、大垣實業組合副會長、大垣海陸物産商組合長等の任にあつて聲望赫々たるのも決して故なしとせざるところである。氏は岐阜縣人先代仁左衛門氏の二男にして明治二十四年八月に誕生、同三十六年家督相続と共に前名仁三郎を改め襲名に及んだものである。大垣商業學校卒業後海産物商を営み、現に魚菜株式會社社長、大垣水産市場株式會社専務取締役、養老無盡株式會社取締役等を兼てその存在に燦たる光彩を放ち、常に新鮮なる時代的事業家として天下の輿望を聚めつゝ至誠奉公の實を擧げてゐる。曩に大垣市會議長に推されたのも氏のいつに變らぬ人氣の程を示したものであり、かゝる意味に於てもその至寶的存在を讃えなければならぬ。

小西安兵衛商店・常務取締役

小西長治郎氏

氏は東京府人森定吉氏の長男にして明治十九年八月に誕生、大正四年に小西安兵衛氏の養子となつて、同十五年に養兄喜兵衛氏より分家したものである。現に小西合名會社無責任社員並びに小西安兵衛商店(株式會社)常務取締役たるほか、大日本特許肥料株式會社専務取締役、末廣肥料株式會社監査役等の任にあつて文字通り肥料界の重鎮としての貫祿を保持してゐる。氏はその永き實業界生活中終始一貫、小西安兵衛商店を樞軸として努力して來てゐる。勿論それ以外の事業にも氏の敏腕は縦横に揮はれてゐて、その役割は小西商店の推進力的使命を果してゐるのである。即ち氏の經歷は小西安兵衛商店並びに小西合名會社の發展史であり、小西財閥發展史は氏の經歷そのものであると云つても過言ではあるまい。ことほどさやうにして小西財閥の智將的存在をなすと共に、肥料界の指導者として勢威並びなき貫祿を示しつゝある。かくの如く氏が該事業に關係してゐることは、氏の非凡なる手腕を語るに餘るものがある。

昭和石炭・名古屋支店長

小林雄一氏

昭和石炭株式會社名古屋支店長たる小林雄一氏は、同社の輝ける存在である。山口縣人にして明治二十一年生れ、下關商業を同三十八年に卒業してより業界に身を投じて活躍、昭和七年に現在職の昭和石炭に入社し大いにその才腕を買はれたのであつた。氏の半生は決して恵まれたものであるとは云へないが、その悪戦苦闘もこゝに實を結び今日の榮位を贏ち得たのであるから氏も本望とするところだらう。氏の前途、未だ洋々、これからが本舞臺、充分の活躍が期待されてゐる次第だが浮き沈みといふことは、獨り人の世のことのみではなく、總ゆるものに當徴められる實狀である。その好適例が石炭で、事變前までは停車場や港内で徒らに黒き山を築いてゐたが今事變勃發と同時に俄然活況を呈し、軍需工業は勿論のこと各産業部門に缺く可からざる絶對品となつた。この秋、當昭和石炭も大いに活躍し隆々と凱歌を擧げてゐるが、これもみな小林氏の如き逸材の大なる働きによるものであらう。

兼松商店・庶務部長

上瀧治夫氏

神戸の兼松商店と云へば其名既に財界に轟き渡つてゐる。その兼松商店に在つて庶務部長兼會計部長代理として、終日寸暇なき繁忙裡によくエネルギーを振りまき振りをつゞけつゝあるのが上瀧治夫氏である。流石に兼松商店の智將として永く同社と生活を共にして來てゐるだけに、益々重厚性を加へ今やその存在は缺くべからざるものとなつてゐる。氏は京都府人上瀧福太郎氏の二男として明治二十五年五月に誕生、大正八年に家督を相続した。現に兼松商店に在つて常に同社の推進力的使命の一端を果しつゝ、更に餘力をもつて日本浴巾、東北水貿易、奥東織維工業、兼松羊毛工業等各株式會社監査役を兼て比類なきその抱擁力を示しつゝある。信用こそは無限の財産である。信用より以上の大なる財産は無いと云つても敢て過言ではない。總ての人が信用と報恩の觀念を忘れなければ成功することも決して至難な業ではなく、上瀧氏にしてもこの精神あればこそよく今日の地位を築き得たものと云ひ得るのである。

麒麟麥酒・札幌支店長

小島常吉氏

麒麟麥酒株式會社札幌支店長小島常吉氏と云へば業界にあつて、その深厚なる學的素養、優秀なる實務的手腕、高潔なる人格の三拍子を揃へた斯道の權威者として、尊敬されつゝある人物である。氏は千葉縣人小島啓二郎氏の長男として明治二十二年一月に誕生、大正九年に家督を相続した。幼少の折からその明敏を顯はれ、その英才を愛されて來たが大正三年、東京高等商業學校を卒業後直ちに日本製粉會社に入り大いに敏腕を揮ふところがあつた。其後明治屋に移り更に麒麟麥酒會社に轉じたもので、幾若もなく斯界全般の智識並びに運営法に通曉するに至り、新進氣鋭の識徳兼備の雄將として業界に認められ、今や同社札幌支店長との樞席にあつてよく職能を全ふして業績をあげ、輿望に應へてゐる。歳も五十そこ／＼であり、張り切つた氣宇と、その非凡なる經營手腕を如何に發揮して行くかこのところ氏には絶大なる期待がかけられてゐる。氏亦十分に實力を備へてゐるから錦上更に華を滿載するであらう。

東北送電・社長

小林久治氏

氏は新潟縣の産、小林傳作氏の令弟同久平氏の叔父にあたり明治十二年一月に誕生、同二十一年に分家すると共に前名久次を改めたものである。明治三十五年京都帝國大學理工科電氣工學科を卒業後電氣事業界に關係し栗駒水力電氣、明治電氣、黒澤尻電力等各會社の重役としてその才腕を働かせ、種々献策するところあり、社業の向上發展に携みなき精進をつゞけて來たが、現在では東北送電、東北電燈、宮田又嶺山各株式會社社長の任にあるほか秋深電機株式會社相談役として眞に畏るべき好業績をあげてゐる。かくの如く縦横無盡の活躍ぶりを示す小林氏は、事業界まれに見る奮闘型の人物で、豪放磊落、加ふるに博識多才は夙に業界に鳴つてゐるところなのである。したがつて氏が社長として臨む會社は何れも整備された業容の大、且つ堅實味、將又絶大なる信用等に於て他會社を遙か脚下にして、あたかも雲にそびゆるが如き偉容を示しつゝあり、眞に氏の如き斯界に於ける長老の偉大なる存在を物語つてゐる。

東洋アルミ・常務取締役

甲田裕氏

元來三井には人材が多い。謂はゞ財界の鼻祖並び立つ権勢の地であり、群雄競つて覇を鳴らすの壯觀は蓋し他及びもつかぬ独自の勢威を示してゐる。就中三井鐵山にその人ありと知られてゐる甲田裕氏存在こそは、將に光芒を添へるものとして一際目立つてゐる。氏は東京府人甲田二一氏の長男にして明治二十年七月に誕生、同三十八年に祖父淺右衛門氏の後を承けて家督を相続したものである。大正二年東京帝國大學理學部化學科を卒業後三井の傘下に馳せ參じ、日本アルミニウム株式會社取締役兼高嶺工場長を経て、現在の東洋アルミ株式會社常務取締役として威令を行ふに至つたもので、三井鐵山株式會社社員であると共に一方東洋アルミの目付役として精進しつゝあるところなど、素より凡庸の徒たらざることは、卓抜な手腕力量を驅使して漸次財界に擡頭し、遂に今日の偉大なる地歩を擁するに至つたことも、氏の盡るを知らざる伸展力に見て既に明らかなるところであると云はねばならぬ。

王子製紙・豊原工場長

河内山光直氏

我が國製紙界の絶對的獨占者である王子製紙に在つて、直接従業員指導の任を擔當してゐるのが氏だ。氏は山口縣土族河内山忠治氏の令息で明治二十六年生れである。大正七年に東京高工應用化學科を卒業するや直ちに王子製紙に入つた同店生え抜きの手腕家で、豊原工場工務係長を経て昭和十二年に同工場長に躍進した。終始一貫技術方面の指導者として精進して來たのであるから、大王子製紙もかゝる人無しに該方面の發展は期し難い。氏は驚くべき熱心さで紙の原料、種類、その他の關係事項の一切を調査研究し、斯業に廣い分野を開拓したが、正に紙に關するエキスパートの名を取つかしめない英才である。機敏にして數理的な頭腦の持主で、充分腹も据つて居り度量廣潤の人物、能率増進に關する一見識は、經營係員に就て相當の貢獻を成して居り、信望も頗る大きい。眞摯なる研究心、絶え間なく動く研究眼、熱烈なる事業慾、事業家としてこれ以上大切なものがあらうか。これこそ廣く期待される所以のものだ。

ラジウム温泉院・代表社員

河野 義氏

温泉製造販賣業を営みつゝ、東京理學療法院を主宰し、ラジウム温泉本部と稱して合資会社ラジウム温泉院代表社員として噴々たる名聲のもとに、斯界に覇を唱へつゝあるのが河野義氏である。しかもその快腕は更に事業界へもよく驅使されて、今や丸善鑄造株式會社社長、東京製靴工業、日本鑛山開發各株式會社取締役等の任にあつて堂々斯界を闊歩するその雄姿たるや、將に千軍萬馬して實戦の野に修練の腕を鍛え上げた三軍の將にも比すべきものがある。氏は群馬縣の産、河野寅五郎氏の二男として明治三十年十月に誕生、大正九年に分家した。氏は單に事業界に於ける勇者たるのみに止まらず、常に心を社會公共事業にも用ひ、事業方面に於けると同様に盡しつゝある。即ち昭和七年八月には紺綬褒章を同十三年八月には同飾版を下賜せられるなど、その餘榮は氏の人の爲りを物語るにも充分なるものがある。したがつて業務上の熱意も流石に若手だけに燃ゆるが如きものがあり、今後も十分期待されてゐる。

宮製鋼所・社長

高妻 俊秀氏

わが高妻俊秀氏は宮製鋼所社長として帝都に於ける製鋼界の長老格たる巨豪であるが、流石に永年に亘つて製鋼、製鐵會社を歴任して來てゐるから斯道に於ては一見識を有して居り、同社今日の盛運は全く氏のこの経験の集積とその妙諦を得たる名采配の賜と云ふべきである。氏はまた東北毛織製作所取締役並に阿部鐵工所監査にも任じてゐて、メーカー界にも噴々たる名を馳せつゝあり、猶ほまた合資會社高妻商店代表社員として自家の礎を固めてゐる。氏は明治十五年十月宮崎縣人たる高妻安氏の三男として誕生したが、大正元年分家して一家を成した。先是明治四十二年東京高商を卒業して、東京瓦斯、日本特殊鋼、大日本電球淺野製鐵所等に勤務して大いに研鑽を積み、特殊製鋼、關東製鋼、日本建鐵工業各社の重役を歴任したが、現在は之らを辭して前記各社の重役に任じてゐる。氏は本年とつて五十九歳、實業界稀れにみる重厚謙嚴にして典雅なる人格は彌々圓熟境に入り、衆望は益々加はるばかりである。

日本鋼管・常務取締役

香田 五郎氏

關東實業界の長老格たるわが香田五郎の聲名は光芒燦たる巨星の如く斯界に輝き渡つてゐる。氏は現在日本鋼管常務取締役たるの他、昭和礦業、南洋鐵礦、新興炭礦、日本鑛業、鶴見鑛業、日本ドロマイト工業、日本コンクリートボール各取締役であり、また川崎鑛業、日本瓦斯管販賣、日滿鋼管、豐田炭礦、東邦金山、日本電氣冶金日本耐火材料各監査役に任じてゐるが、之ら鑛業、鑛業、コンクリート工業製作等の各般に亘る諸事業は、何れも當代産業界に於ける屈指の股肱産業であつて、各々時潮に乗つて好業績を擧げてゐる會社ばかりである。しかも氏が永年實業界に在つて鍛え上げて來た才腕は、何人の追隨をも許さぬ牙えを見せ、さながら快力亂麻を斷つるの概を以つて事業經營に當つてゐるから氏の進路が飛躍發展の一路にあることは當然の歸結と云ふべきであらう。氏は明治十五年一月佐賀縣人香田休益氏の四男として誕生したが、大正十年令兄橋橋氏方から分家した。先是明治四十一年早大商科を卒業した。

黒崎鑛業・常務取締役

高良 淳氏

近時に於ける重工業界の躍進は鋼、鐵材の供給源たる製鋼、製鐵界の發展に伴つて居り、従つて鋼爐に必須なる耐火煉瓦工業は頗る股賑を極めてゐる。わが高良淳氏は鑛業界の第一人者を以つて任ずる巨豪として夙に其名を知られてゐるが、氏は現在北九州に於ける斯界の白眉なる黒崎鑛業並に日本爐材製造各常務取締役たる他、關東の斯界の雄川崎鑛業、鶴見鑛業、昭和耐火材料各取締役として斯界に萬丈の氣を吐きつゝあり、また安川電氣製作所取締役、大山貿易事務所監査役として聲名噴々たるものがある。氏は明治十六年十一月鹿兒島の名家たる士族高良友益氏の三男として誕生したが、昭和十一年令甥武久氏方から分家して一家を成した。先是明治三十九年大阪高工鑛業科を卒業して實業界に身を投じ、今日の大を成したのであるが、流石に薩摩軍人の血を承けてゐるだけに俊英にして明快なる頭腦の所有者であり、しかも技術家として十分に腕を研いてゐるから、その事業經營の妙諦は當代無比なるものがある。

大泊倉庫・社長

越川 良造氏

わが越川良造氏が樺太に渡つたのは日露戰爭直後、即ち南樺太が露國より我が日本に割讓された當時であつたが、爾來三十有五年を樺太に在つて運輸事業を中心に、孜孜營々として實業界發展のために盡瘁して來たことは、今日の盛觀を誇る樺太産業の礎を築いたものとして、國家的見地からも感謝に絶えない。氏は現在大泊倉庫、本斗海陸運輸、内幌運輸、北洋モーター各社長たる他、樺太運輸代表取締役、中央運送事務取締役、樺太合同運輸取締役任じて、オール樺太の運輸界を牛耳りつゝあり、斯界の大御所として同業者の信望を一身に集めてゐる。また氏は樺太商工會議所副會頭として實業界の指導者たり、所得稅調査委員、樺太圖書館委員長の名譽職にも擧げられてゐる。氏は明治十六年八月福井縣人越川善造氏の長男として誕生、後ち家督を相続した。同三十九年樺太に渡つて實業界に入り、大正三年樺太運輸を創立し、爾來漸次事業を擴張して今日の大をなしたもので、猶ほ氏は樺太製菓監査役にも任じてゐる。

高砂企業・社長

駒井 久吉氏

高砂企業を母體とし、高砂工業、高砂暖房工事、高砂鐵工、高砂ゴム工業各會社を組織し高砂財閥を形成して財界の王座目指し突進躍進する壯觀は眞に驚異に値する。此の直系傍系を打つて一丸とし大旗を擣つて統帥の印綬を帯び、不休不眠の活躍を續けて居るのが駒井久吉氏である。氏は明治四十年京都帝大法科を卒業し、最初大阪商船に入り茲に實業界進出への素養を積み、十年の星霜は氏に澁潤たる手腕を練達させた。大正七年録を轉じて高砂工業の専務取締役に就任し、潤達果敢な才腕を揮ひ財界に認識せらるる所となり、今や高砂企業の宰相として又其の直系、傍系各會社の重役として雄飛し出籠の譽が高い。氏は人を見るに敏にして適材を適所に配する所到底他の追隨すべき筋でない。實に整然たる秩序を以て總員擧げて各々其職分に精進する高砂財閥の將來は洋々たるものがある。氏は奈良縣島田久平氏の三男として、明治十四年に生れ、先代覺三郎氏の養子となる。ゴルフも圍碁も巧者の域に達して居るといふ。

東洋鋼板・常任監査役

越山 信太郎氏

支那事變の進行するに従ひ工業界の使命は重要な地位に立つた事は勿論であるが就中東洋鋼板會社の如き特殊な工業は其の重大性が最も深い。同社の實際的經營の要衝にあるのが越山信太郎氏で其の實力は非凡である。氏は東京府越山權之助氏の長男にして明治七年五月の出生、幼少より剛毅果敢、若くして志を立て苦學力行し、一職工として奮闘した事もあり、鐵工業の實際に就ては殆ど各都府に亘つて知り盡して居ると言つて差支ない程で昭和九年日本製鐵會社に招かれて、其財務課長に就任同社の發展に寄與する所頗る多かつたのであるが、同十三年現會社東洋鋼板に轉じ常務監査役として登場し、長い間練磨を重ねた實際的知識並に經驗と、一面圓熟した人格から發露する情味豊かな手腕によつて、切り返して行くあたり、氏でなくては望まれぬ獨自な然かも積極的な經營は業界の一異彩である。尙且つ一人一業主義を以て専心社業の發展を策する點に於て他の追従を許さざるものがある。自愛健闘を祈る次第である。

東大阪土地・代表取締役

駒井 藤平氏

駒井藤平氏は奈良縣生駒郡の舊家先代藤平氏の長男にして明治十八年の生れ、大正二年岳父隱退の後を承けて前名藤雄を改めて襲名したものである。父祖傳來の酒造業を經營し地方に於ける財閥でもあり又政治家でもある。氏は現在奈良縣參事會員、奈良縣酒造組合長、奈良縣酒類販賣業組合聯合會長、奈良縣馬匹畜産組合長等各種の公職に就き、縣下公共の爲めに盡瘁する傍ら、東大阪土地代表取締役、信貴生駒電鐵、生駒ロープウェイ各取締役として財界の一翼を擔つて活躍して居るあたり氏の人格の全貌を窺ひ知ることが出来る。實に氏は矯らず術はず縁故もない人からの依頼も快く引受け、其の成功を見る迄は努力すると言ふ。以つて其の徳望の依て來る所であらう。尙又氏は政治經濟事業各方面に涉り相當の見識と抱負とを持つて居るのであるが、端的に發表することなく輿論の趨向を見て徐ろに自己の所信に合致せしめる手腕など感嘆の外はない。氏の今後の飛躍こそ更に刮目するものがあらう。

光正不動産・社長

駒澤文一氏

我が國最近の顯著な傾向として不動産土地建築を對照として創立せられたる投資事業の多くなつた事である。

保健衛生の上から見ても我國特有の家庭生活の上からいつても、田園氣分を持つ住宅地を選ぶ事は緊要不可欠からざるものである。かうした意味に於て郊外或は健康地の土地所有者が之を開放して、國民昇位の向上に資せんことを希求する。駒澤文一氏は、夙に茲に着眼し養兄辰明氏及義弟文藏氏と協力し光正不動産株式會社を創設し自ら社長となり貢獻する所尠くない。氏は其他、建材工業專務取締役、赤倉新温泉土地取締役、作品社々長の要職に携はり土地會社經營の雄として堂々財界に君臨して居る東京府多額納税者である。氏は東京駒澤傳吉氏の長男にして明治三十五年出生、大正十四年家督を承け同年明治大學を卒業した俊才であつて、春秋に富み前途は洋々たるものである。氏は有名なカメラマンであり、旅行趣味と相俟つて氏の生活を潤はせ鋭氣蓄藏の源泉ともなつて居る。將來を待望される新鋭少壯の士である。

京濱電氣鐵道・專務取締役

菰田成亮氏

氏は北九州福岡の産玄海の怒濤に鍛へられた熱血男兒、先考孝之氏の長子明治十五年十月の出生で明治四十四年家督を繼いだのであるが、氏の鬱勃たる雄心は止み難く夙に實業界に入り、各方面に活躍して名聲を馳せ、花月園其他數會社の重役に推され、兎角不振なりし花月園復活には渾身の知能の限りを盡して其基礎を確立する等卓越せる手腕は業界の等しく驚嘆する所であつた。由來九州には熱血兒が多い正義觀が強烈に動いて居て従つて堂々と闘つて最後まで屈しない氏も亦其の典型的存在である。氏は本邦最初の電軌私設會社たる京濱電氣鐵道の專務として帝都交通の鵬翼を擔ひ望月會長の女房役となつて懸念の精進を續け社業の發展に寄與して居る。滿々たる闘志は潑刺たる活躍となつて示現せられ財界に光彩陸離として其存在を語られるのも故なしとしない。氏は京濱湘南證券監査役、湘南電氣電車部長の重職を兼任し、「事業は人生」なりといふ信條を驍して奮闘してゐる氏の今後の飛躍こそ待望される。

大日本兵器・常務取締役

近藤昇次郎氏

事變下に於ける兵器製作の重要性は餘りにも明瞭である。大日本兵器會社が全能力を擧げて國家の要求に應じて居る事も喋々を要しない。近藤昇次郎氏は日本兵器經營の任に膺り人事の凡てを盡して國策の第一線に活躍し及ばざるを憂ふるといふ國士型の財界人である。氏は明治三十八年東京高商を卒業し浦賀船渠會社に入り取締役兼工場事務監督に起用せられたのであるが、入社當時の同社は悲境のどん底にあつて株の貰ひ手もないといふ有様、氏は隱忍持久よく之を乗切り大正三十四年の盛況に導いた苦心は並大抵ではなかつた。氏の手腕と卓見とを如實に證明するに足るものである。後日本兵器會社に轉じ常務取締役たる現在に及び横濱工作所、浦賀瓦斯製造各社監査役として業界に重きをなして居る。氏は大正十二年造船事業視察の爲め歐米各國巡遊の旅に出で、具さに造船界の事情及び實地の研究を遂げて歸朝した斯業の權威でもある。氏は愛知縣近藤權平氏の四男で明治十五年生れ尙前途は多望である。

保土谷曹達・常務取締役

近藤晋氏

曹達製造業が凡ゆる生産部門に與へる影響は莫大である。各般の化學工業に重要不可欠からざる役割を持つる影響は莫大である。各般の化學工業に重要不可欠からざる役割を持つる影響は莫大である。各般の化學工業に重要不可欠からざる役割を持つる影響は莫大である。

つことは普く人の知る所であらう。近藤晋氏は明治四十年早稻田大學商科を卒業して實業界に入り各方面に研鑽を積み、東洋曹達會社に入社後は専ら曹達製造に關する實地の研究に従ひ社業に寄與する所頗る多大であり、第二東洋曹達創設せらるるや本社兼務の重役として推舉せられ、爾後愈々社業に活躍したが、大正五年意を決して獨力保土谷曹達會社を興し常務取締役となり其の運営に當る。氏の積年の研究と、練磨された手腕とは業績をして倍々發展させ氏の出色ある存在を明かにしたのである。氏は濃厚にして研究心深く學者肌にも見えるが、一度起れば貫かす止まぬといふ闘志も旺盛であり清濁併せ呑む吐の据つた人物である。明治十七年東京黒川正治氏二男として生れ、絶家近藤家を再興して近藤の姓を名乗るに至つた。氏は現在東洋曹達常務取締役、化學鹽業、富山化學工業、晒粉販賣等各會社の重役を勤めてゐる。

近藤商會・專務取締役

近藤勝次郎氏

近藤商會が新開地臺灣に進出してから相當の歲月が流れた。荒唐無稽だつた邊鄙の地臺灣に活を入れた近藤商會は逐年發展を重ねて今日の隆昌を見るに至る。それは近藤勝次郎氏の經營宜しきに依るのである。氏は兵庫縣近藤義誠氏の長男明治十八年の出生である、後兵庫近藤喜惠門の養子となり明治四十四年家督を承け家業たる麥酒問屋並に洋食料品商を經營したのであるが、時流を汲んで株式に改組し近藤商會として出現したのが大正十年、氏は自ら專務取締役となり三軍に指揮して潑刺たる才腕を揮ひ活躍を續け成功の岸に凱歌を擧げ得た偉容は洵に三嘆して措かざる所である。氏は力の人でもある精神な半面には人情の機微に徹して居るといふ剛柔兩面を具有する財界稀に見る異彩の士である。故あるかな、麥酒販賣代表取締役、高砂麥酒取締役の外、公職として臺北市協議會、商會常務議員、商和會常務理事、臺灣總督府酒類賣捌人組合長に就任して令名を馳せ臺灣財界の巨頭として雄飛して居る。

株式會社伊勢屋・社長

近藤重三郎氏

三河財界の巨頭として又全愛知政治界の重鎮として令名隠れなき近藤重三郎氏は愛知縣實業界に於ける錚々の士中村慶藏氏同慶二郎氏を叔父とし又中村光藏氏を從弟とし同族轉を並べて財界に覇者たる偉觀を呈し自若として斯界を睥睨して居る。氏は明治十九年出生、先代重三郎氏の養子となり、明治四十三年家督を相續し前名藤一を改めて襲名す。大正二年東京帝大農科農藝化學科を卒業して家業たる酒類販賣に従事し、孔々として精勵を續け傍ら前記社長の外、東海製菓、岡崎證券、伊豆水力電氣、服部鑄造、狩野川電力、日本味噌等各種會社の重役に就任し又岡崎盲啞學校理事として育英の事に盡瘁する等活動廣汎に亘つて居る。尙岡崎商工會議所會頭に擧げられ徳望三州の野を壓する現在である。氏は曩に滿鮮及支那大陸を視察し又衆議院議員に選出せらるる等氏の信望の如何に大なるかを裏書すると言ふべきである。氏は人に接するに慇懃丁寧、人情に厚く氏の推挽により榮達した人士十指に餘るといふ眞に棟梁の器である。

大阪輕金屬工業・取締役社長

近藤忠四郎氏

氏は大阪府先代忠四郎氏の長男で明治二十四年一月出生、大正十一年家督を相續し前名保太郎を改めて襲名す。早大出身の秀才にして父業を繼承、伸銅業を經營し、近藤製銅所主任として其の全般に亘り采配を採り、時局の波に乗つて益々盛況を誘致し縱横に活躍して學日を許さざる有様である。尙又輕金屬工業方面にも手を染め大阪輕金屬工業會社は關西に於ける斯業の代表的存在として、軍需資材の一部を擔當し隆々たる盛業裡にある。氏は又小寺商事專務取締役、大阪愛馬會々長國際愛馬協會、日本乘馬協會に各理事として推舉せられ、多角形な財界の存在である。資性極めて明朗恬淡、物事に執着しないが才幹豊かに商機商略は大阪人特有の敏捷さを持ち、公私を明かにする點財界人として稀に見る所業界に一勢力を形成し堂々たる歩武を運んで更に大成を期して居る。氏の力量才能は將來を約束するに十分であり、春秋に富む前途は洵に洋々たるものがある。波瀾に富む財界の明日は果して何人が王座を占めるであらう。

東邦火災保險・取締役支配人

近藤成虎氏

金融機關として國家的に重大な役割を持つ保險業は最近益々盛況裡に發展を遂げて居る。生命保險と對偶關係にある火災保險亦其發展の隆々たるものあるは、洵に慶祝に堪えない限りである。東邦火災保險會社は火保界に於ける第一線的存在で、其の保有契約高に於ても依然として好調を續け居ることは同社支配人近藤成虎氏の奮闘の購といふべきである。氏は長崎縣近藤成保氏の長男にして明治十四年師走の出生である。明治三十七年日本法律學校を卒業して、直ちに東邦火災保險會社に入り、飽くなき苦闘を續け同社の生命線を守り今日に及んだもので、氏の奮闘の歴史は實に熾然たるものである。保險界には錚々の闘士が多い。其の中に立つて堂々の布陣を以て向上を續けて居る。我が東邦火災の殊勳者たる氏は業界の指導的存在である。氏は曩に大成火災海上保險會社支配人として、堅確なる手腕を揮つたこともあり、火保界の權威者として尊敬の中心となつて居る。自愛して國策推進の爲め一段の活躍を望む。

大林組・常務取締役

近藤 博文氏

本邦の建築業界に覇を成す大林組常務取締役たる、正六位近藤博文氏は知能實力を併せ備へたる斯業界の出色といふべき存在である。文化の進展は必然的に建築様式に變化を招來するは周知の事實である。今日業界を成瀬せんとするには、單に力と腕とでは得て望まれない。緻密にして明確な知能を必要とすることは言ふ迄もない。氏は明治二十一年兵庫縣近藤五郎氏の四男として生れ、大正三年京都帝大理工科木工學科を卒業し、大阪市港灣部長に就職し後大阪府土木課長に轉じ、次いで山口、三重各縣土木課長として令名を馳せたのであるが、斷然官界を去り實業界入りをした。氏は達識明敏の士で官界特有の形式的傾向は毫もなく至つて直裁簡明を主とし事に當つて知略縱横に動くといふ風で少壯實業者の代表的存在とも言ふべきである。氏は又内外木材工藝、プランチャード製作所各取締役、大林農場株式監査役等にも就任し、財界に重要地位を占め前途を囑望せられて居る。其の大を成す蓋し近き將來か。

日本重油・社長

近藤 光正氏

時局下に於けるガソリン一滴は、血の一滴に匹敵すると言はれ、原油資源に恵まれぬ本邦油業界は、非常な難局に沈溺して居ると稱すべきか。窮通會通の策は國家を擧げて講べき秋に遭遇し正に斯業者の奮起すべき絶體的事相にある。近藤光正氏は、小學校を卒るや日米油會社に入り、此の事業に従事すること三十有餘年、其の研究の深く、造詣の豊かなる第一人者として推賞すべき權威者である。其の明敏な腦裏に去來する方策は、果して如何なる現實を招來することであらう。國策ラインの上に重大な決意を以て臨み難關突破に向つて死闘を續けて居る。氏の國士的風格には深い敬意を表せざるを得ない。氏は明治三十年岡山縣近藤繁次郎氏の長男として出生し、明治四十四年日米油會社に入り刻苦勤勉其の業に盡瘁し、大正十五年同社東京支店長となり取締役を兼任し、現時常務取締役として經營の實權を握る傍前記兩會社社長として勤務し、東京重油特約店商業組合理事長の公職に在る、油業界の大立物である。

岸和田煉瓦綿業・社長

金納源十郎氏

氏は岸和田煉瓦綿業會社の外、五十銀行取締役、和泉銀行、岸和田紡織、高野山電氣鐵道、東洋麻糸紡織、關西不動産株式會社監査役として、紀陽金融界事業界の重鎮を以て目せられる能幹達士の士である。大大阪を中心とする近隣の事業は年を追うて隆昌を呈し、支那事變進行の波に乗つて益々活潑となつて空前の盛觀を示すに至つた。氏は此間に處して歸趨を誤らず著々その實績を収めつつあることは事業運籌の手腕が並々でないと共に、機を捕ふるに敏捷な事を物語るのである。氏は大阪出身の實業家で本場で鍛へた手腕は確かなものがある。明治十三年、先代源十郎氏の長男として生れ、大正十一年家督を相続するに及び前名源一を改めて襲名した人である。氏は人に接するに懇切丁寧で相手方に好感を與へ其間商機を擧むといふ敏活さが、今日の確固たる地位を産んだのであらう。氏は又風流韻事の道にも長け、茶道を嗜み、骨董を愛玩し、激烈な競争場裡から離脱して一時の清風を樂しむといふ氣高い一面も有つといふ。

京濱電力・常任監査役

佐々木久二氏

佐々木久二氏は帝都實業界にあつて代表的紳士の折紙を附與されてゐる人徳者で、明朗、豁達なスポーツマン型の容姿とその懇懇、篤實な言行は、何人にも好感を與へ諸人の敬愛を一身に集めてゐる人材である。氏は明治十一年二月福井縣人佐々木又左衛門氏の二男として誕生したが、昭和四年令兄繁太郎氏方から分家して一家を立てた。先是明治三十八年東京帝大法科獨法科を卒業して實業界入りしたが、先には東海紙料常務取締役に任じてゐた。大正十四年京濱電力に入つて現在同社の常任監査役に任じてゐるが、同社の事業が順調なる發展を續けて不安なき業績を擧げてゐるのも、名大目付役たる氏の力に負ふところ大である。また氏は日滿亞麻紡織監査役としても聲名高く、昭和三年には衆議院議員に當選してゐる。現今夫人清香女史は學習院女學部出身の才艶で、わが政界の師表尾崎行雄先生の長女である。令息康太郎氏は日滿亞麻社員として精勵しつゝあり將來を囑せられてゐる。また氏はゴルフの名手として名がある。

日本建機・社長

近藤 廉治氏

氏は故男爵近藤廉平氏の五男、現戸主滋彌氏の令弟である。大正三年東京高工機械科を卒業し直ちに渡米し専ら機械學の研究を積みて歸朝、令兄滋彌氏の關係會社に入り實務の修練をなし、實業家として修養を積む。氏は亡父の精神にして剛毅な氣質を多分に持ち名門の出身とも思へぬ活氣横溢、好んで難關に當つて之を打開する等才氣煥發の士である。横濱船渠、三建工業、小松製作所等に重役たりし時代の活躍は火を吐く慨があつたと聞く。現在は日本建機會社社長として、練達圓熟の才幹を揮ひ其の經營を主宰し、日本パーカライジング、甲子不動産、國際トキイ各社取締役、東京計器製作所監査役として其の樞機に參畫する等不眠不休活潑な躍動を續け、實業界に出色の存在を顯はれ文化人として尊敬せられて居る。氏は明治二十四年九月の出生で年齒漸く五十財界少壯の達識者であり且つ又實力者でもある。然して東西各國の事情に精通し國家的意識に燃ゆる財界稀に見る存在である。一層の自勵を望む。

青島製粉・専務取締役

金 慶吉氏

製粉・紡績・肥料は平和産業の三大部門をなす立國的産業といふべきで、その原料の調達操業の合法化配給の合理化とは渾然一體を成して、我が農村に強靱性と弾力性を與へなければならぬ。青島製粉が敢然として、此の理想實現に乗出し斯界の新秩序を建設せんとする企ては、同社専務取締役金慶吉氏の農村經濟に深き造詣を有する意志表示である。氏は米の主産地秋田縣の産、明治十一年金豐治氏の二男として呱呱の聲を擧げ、明治三十五年早大英語政治科を卒業した逸材である。氏は夙に農村研究に力を費し其の抱負も卓越して居た。卒業後横濱豆粕會社専務取締役、日本絹糸紡績、神中鐵道各社取締役として常に農村との接觸を保ち其の存在を顯はれたのである。現在青島製粉の外、日本通商、大阪鐵道會各取締役、國産肥料、増田屋各監査役として財界に確固たる地歩を占むるに至る。農村の死活は國家の死活と一體をなす。我が農村の實體を究めずして其の振興を説くもの比々たる今日、氏の如き存在は洵に心強い。

内外綿・専務取締役

佐々木國藏氏

佐々木國藏氏は在華日本紡績同業會委員長として大陸の紡績界にまで雷名を轟かせてゐる斯界の元老格で、内外綿専務取締役として同社を主宰しつゝある巨豪である。氏は明治八年十一月の誕生で大阪府人佐々木多助氏の令弟であるが、大正二年分家して一家を成した。先是明治二十九年大阪高商を卒業し、同三十年内外綿に入り、漸次果進して大正九年には同社取締に擧げられ現在は専務取締役の最高椅子に就いて同社の全權を掌握してゐる。言ふまでもなく内外綿は本邦有数の紡績會社であるが、殊に上海、青島、金州の大工場はわが日本紡績の爲め大陸に萬丈の氣を吐きつゝあり、日支事變の當初暴戾支那軍の爲めに灰燼に歸せられた青島工場も前年度から恢復したから、現在の盛況以上に將來性が期待されてゐる。また氏は青島電氣取締役としても噴々たる聲名がある。猶ほ氏は現在は大阪に歸つてゐるが、先には永年に亘つて大陸に駐在してゐて、上海日本商工會議所議員、青島商業會議所會頭の公職に推されてゐた。

仙臺味噌醬油・社長

佐々木重兵衛氏

仙臺味噌といへば東京人の間に最も悦ばれる味噌で、信州、三州、八丁味噌等々と數多く帝都に移入される中でも、需要額に於ては斷然頭角を抜いてゐる味噌である。白米が南京米に代つた今日でも、東京人は味噌醬油には贅澤を並べ立てゐるが、元來味噌と醬油は日本人の味覺から切り離せないもので、軍事情として乾燥粉末の味噌醬油が戦地に贈られてゐることが有力に之れを物語つてゐる。わが佐々木重兵衛氏はその本場にあつて仙臺味噌醬油社長たり、斯界を牛耳りつゝある青年實業家の花形である。氏は宮城縣人たる先代重兵衛氏の長男として明治三十一年九月出生したが、大正十年先代の後を承けて家督を相続すると共に前名豐次郎を改め襲名した。當家は佐々木重と稱して舊幕時代から味噌醬油等を營んで居り、仙臺では最古の老舗として知られ、つまり仙臺味噌の元祖である。氏は現在宮城縣多額納稅者に列して居り、東北實業界にその將來性を囑目せられてゐるが、先には東北實業銀行取締役に任じてゐた。

三菱鑛業・取締役兼山鑛山長
清津製煉所長
佐々木高之助氏

大三菱系株は近來に於ける花形株となつてゐるが、三菱鑛業は周知の如く三菱財閥の代表的會社であり、内容、業績の優秀は素よりその膨脹性は斯界の第一位にある。わが佐々木高之助氏は同社取締役に任じてゐるが、重役陣の中でも技術家としては最高權威を成してゐる逸材である。現に氏が同社發展の一大事業たる朝鮮茂山鐵鑛の開發、清津製煉所の設立に當つて、茂山鑛山長、清津製煉所長を兼任したことは如何に氏が同社にとつて重要な人材であるかを有力に物語つてゐるのではないか。猶ほ氏は美唄鐵道、雄別炭鑛鐵道、南樺太炭鑛鐵道各取締役にも任じてゐるが、もとより英才の士たる氏の采配下にある之ら各社は脈々たる業績を示しつゝある。氏は明治十九年十二月新潟縣人甲賀正作氏の二男として誕生したが、同十三年同縣人佐々木由太郎氏の養子となつた。同四十四年東大工科探鑛冶金科を卒業して直ちに三菱鑛業に入社、漸次果進して參事に任じ、美唄鑛業所長、製鐵部長等を歴任して現在に及んでゐる。

日本金屬熔解工業・社長

佐々木秀吉氏

佐々木秀吉氏の實力は、今や大阪事業界の一角を切り崩さんとしてゐる。氏は大阪府佐々木豊吉氏の四男にして明治十八年十一月に出生した。長ずるに及び實業家たらんと志し金物地金商を營み、堅實に歩み、基礎建設に没頭したのであつた。昭和六年に至り氏は實兄卯之松氏方より分家するに及び、獨力獨歩業界へと突進したのであつた。それ以來氏の才腕は益々油が乗つて、めき／＼躍進し、昭和十一年遂に日本金屬熔解工業所と改め合資會社までに飛躍させたのである。現時は同社社長として指導者の大任に當り、よく督勵の美を擧げてゐるが、近時同社の業績頗る向上し軍需景氣に肥りつゝあるも、偏に社長佐々木氏の奮戰故と思はれる。氏の性格は才氣煥發、斯業に於けるその手腕は並々ならぬものあり、今日までの社業の成果を一目しても如何に氏が逞しき實力の人であるかと窺知出來得やう。而して現大阪業界に氏の如き逸材のあるは洵に心強き極みであり、同氏今後の進出こそ廣く期待して止まぬ處のものだ。

日本電氣・常務取締役

佐島仁左氏

日本電氣會社常務取締役佐島仁左氏は安藤電氣、小穴製作所、東北金屬工業各會社取締役として財界の一角に地位する人材である。大正七年東京帝大法學部政治科を卒業した氏は第一次世界戰爭の餘波に躍る實業界に入り將來性に富む電氣事業に従事して熱心に實力を磨いた。最高學府に學理の蘊奥を極め俊敏穎悟を以て聞えた氏は忽ち業界の寵兒となり其の存在を認識せられるに至つた。日本電氣が發展に發展を重ねて隆々として斯界に巨姿を以て臨むは氏の洗練湛能な才腕に負ふ所が決して尠くないと信ずる。氏は明治二十六年群馬縣佐島江平氏の二男として出生した精神明快な男性的意氣烈々たる士。まだ五十に届かぬ精銳滿々たる闘志を包蔵して徐ろに財界の將來を靜觀しつゝ切々として與職に精勵して居る。人傑雲の如き實業界に毅然として調歩する様相は大實業家の風格を存し今後を約束さるべき人物である事は確かであらう。蓋し氏は功名利達に淡泊であり事業の發展に専念し營々として精進して居る。

佐相合名・代表社員

佐相義一郎氏

曩に縣下の多額納稅者として鉦々の名を馳せた佐相義一郎氏こそ現に佐相合名會社代表社員たるほか共同貿易細包株式會社長、神戸日々新聞社取締役等を兼て眺みなきその精進を物語りつゝある。氏は富山縣の産、谷義三郎氏の長男として明治十六年五月に誕生、其後神奈川縣人佐相力左衛門氏の養子となり大正三年に分家したのである。昔から事業は人に在りと云はれてゐるが、大抵の事業は人に依つて成功する。時勢に助けられて成功する事業もあるが、然し何といつても事業は人どの人でなくとも成功する事業も稀にはあるが、然し何といつても事業は人材が第一であるといふ事は、おそらく何人と雖も異論の無いところであらう。事業界に在ること實に三十餘年、練磨の中に鍛へ上げられた氏の人格並びにその手腕は最早關西に於て、押しも押されぬ大成の觀を示し、即ち「事業は人に在り」を其儘表現してゐるのである。斯くて扇港に駒を進めて駒を成し時局財界に奮迅しつゝあるところ、將に壯なりと云はざるを得ない。

汽車製造・常務取締役

佐々木和三郎氏

今事變發生と共に運輸方面の一大竜張に伴なつて、車輛拂底の聲は漸次旺となり、加ふるに大陸の進出と相俟つて同社の業績も頗る白熱化して來た。したがつて斯業は現在空前の活況を示しつゝあり、その活況の中核たる汽車製造株式會社が著しい業績を擧げつゝあるのも敢て奇とするには足らない。同社をしてかゝる好業績へと導いたのも、時運に依るとは云へ斯業一本槍で押して來た、氏の積年の蘊蓄と多年に亘て鍛え上げた手腕も充分之を認めなければならぬ。氏は東京府人佐々木勇之助氏の三男として明治二十三年四月に誕生し大正十三年に分家した。大正二年東京帝大法學部機械工學科を卒業後汽車製造會社に入り、爾來果進して現在同社常務取締役たるほか餘威を驅つて東京自動車製造株式會社代表取締役、日本鋼製建具株式會社取締役等の任にあり、銀行家として一世にその名を轟かした父君勇之助氏に伍して、あつばれ父子相傳の範を示しつゝある。資性謹嚴の二字に盡き園藝園藝を趣味としてゐる。

安田保善・業務部長

佐々木田三郎氏

氏は島根縣人錦織榮次郎氏の三男にして明治二十年十二月に誕生、其後同縣多額納稅者佐々木懋氏の養子となり大正三年に分家した。大正二年東京帝大法學部政治科を卒業後安田銀行に入り、同十三年銀行實務研究のために英米兩國に出張を命ぜられ、翌年歸朝と共に神戸、京都各支店長を経て大阪支店長となり更に安田保善社庶務部長より昭和十一年現在の業務部長に轉じたもので、これといふのも氏が凡器にあらざると共に、眞摯なる努力家であるといふことを無言の裡に語るものであり、併せて氏の才腕を上司が用ひるに吝ならざりしこととも云へるのである。氏こそはまことに優秀なる經營上の才腕家であり、そのたくましい意氣と膽力とは時局を背景に活躍するのに一層心強さを與へるものである。同社も今や最古參の人物である氏の螢雪の功を加へて、搖ぎも見せぬ堅陣のほどを示し、時勢の波に乗つていよ／＼好調を傳へられてゐる。氏は未だ五十を越すこと僅かであり今後の飛躍こそ一段と刮目される。

出雲鐵道・社長

佐竹次郎氏

現代は經濟上の自由主義の排撃が叫ばれ統制主義、全體主義の理念が高揚されつゝある。然し何故にかゝる難いことである。佐竹氏が多年實業界に在つて裕然たる勢力を扶植しつゝ、今やその指導的立場に擬せられるに至つたのも、徒らに地盤擁護に汲々せず、あくまで確固たる主義主張に生きて來た尊き信念に依るものである。即ち不斷の研究心に鞭打つて時代の進展に即應し、常に之をリードして行つたればこそで、そこに鮮やかなる積極政策を揮つた卓識が潜んでゐたといふものである。氏は山梨縣の産、佐竹作太郎氏の二男にして明治二十九年七月に誕生し大正十五年に家督を相續した。大正十年東京帝大法學部政治科を卒業後實業界の人となつて研磨努力、今や出雲鐵道株式會社長を筆頭に日本土地證券株式會社社長、日本殖産興業株式會社代表取締役其他十指に餘る諸會社の重役を兼て、あつばれ壯年時代の武者振りをよく發揮してゐる。

東洋電化工業・副社長

佐竹義文氏

今の實業家には勉學に冷淡な人が多し。讀書を實業家の勉むべき行事とすべきことを忘れ、雜誌も満足に手にしない、毎朝の新聞論説すらどうかと思はれる人もある。此中で佐竹氏は機會ある毎に書をひもとき、漢詩をよくし、現に「歐米を縱横に」といふ著書がある。まことに名は體を現はすと云ふが、氏の場合に於て始めてうなづける言葉となる。かゝる努力があればこそ氏の事業上に於ける智識や、力量がいよ／＼充實して今日の搖ぎなき地位を招來したのであつて、その進歩發達は寧ろ當然である。氏は東京府人佐竹萬三氏の長男で明治九年十一月に誕生し大正四年に家督を相續した。明治三十六年東京帝大法學部政治科を卒業後高等試験に合格、福井、岡山、山梨、鹿兒島、奈良、滋賀、福岡各縣事務官同警察部長同内務部長、鳥取、香川、和歌山、愛媛、熊本各縣知事に歴任、後官を辭し安田保善社參事、群馬水電會社事務に就任し更に東洋電化工業株式會社副社長並に多數の重役を兼て正四位勳三等の餘榮をして更に光輝あらしめてゐる。

佐渡島英祿商店・社長

佐渡島英祿氏

氏は大阪府人谷崎新五郎氏の六男として明治十七年十一月に誕生、其後同府佐渡島伊兵衛氏先々の養子となり大正三年に分家した。學序を経て大阪高等工業學校を卒業するや地金商を営みつゝ、現に株式會社佐渡島英祿商店社長、淀川製錫所取締役其他の重役を兼て卓抜なる手腕と、偉大なる融資力とをもつて關西財界制覇に臨みつゝある。氏は單なる事業家ではない。昭和三年五月紺綬褒章を拜受したのによつてもその全貌を窺知するに難くないのである。總て國家奉仕の觀念に出發する不言實行の實業家であり、又抱負識見の上から云つても規模極めて廣大にして而も大膽、且つ鞏固なる意思と堅き信念の持主である。氏は一見應揚としてゐるがその反面には凛とした強靱性を含み、事にあたつては細心にして實に周到なる用意を持つてゐる。したがつて營業成績も他を遙かに凌ぐものがあり、益々發展への道へと進みつゝある。かゝる現状にあるのも社長たる氏が自ら實務を督し統制の任を果す熱情を示せばこそである。

幸崎船渠・社長

佐藤英三氏

佐藤氏は信念の人である。従來の實業家は智略、手腕に長じてゐればそれで一人前とされてゐた。しかし現代のこれからの實業家は他を屈服させるだけの信念と理論を持たぬことには一人前として通用しないのである。氏は未だ四十代の働らき盛りである。したがつて全身にみなぎるエネルギーは今後こそ本格的に氏をして槍舞臺に立たしむべく、氏も亦その心意氣に燃えてゐるといふ。氏は靜岡縣人佐藤甚作氏の二男にして明治二十九年四月に誕生した。大正十年慶應理財科を卒業後愛知銀行に入り、堀留支店長を経て昭和十一年に幸崎船渠株式會社に入り同社社長に就任したもので、餘威を驅つて更に富士商事株式會社社長、金倉鐵業株式會社副社長其他の重役を兼てその經營に精進して行く態度には、おのづから搖ぎなき氏の確固たる信念が反映しつゝあるかの如くである。氏は未だ春秋に富む身の洋々たる前途は、その深謀と相俟つて必ず吾人の期待に背かぬものあらうし愈々堅實性が發揮される事も論を俟たない。

富國鑛業・社長

佐藤秀松氏

「艱難汝を玉にす」とは云ひ古されたる言葉であるが、眞理はあくまで眞理である。所謂成金氣質と云はるゝ輕佻浮薄、街氣暴慢さが見えることがあるが、營々刻苦あらゆる努力を積んで大成した人々には自ら首を垂るゝ、言ひ難き威厳を感じる。氏は長野縣素封家佐藤清治郎氏の二男に當り、明治八年二月に誕生し同三十八年分家したのである。現に鐵道材料社、富國鑛業株式會社社長を始め、西武鐵道、白山電力、東京野球協會、日本砂利株式會社等の取締役、大洋水産工業株式會社監査役の任にあり、其他公私財團、協會、組合等の理事評議員等に擧げられつゝあるのも、氏が如何に社會公共の念に厚く、國利民福の一路を邁進しつゝあるかを窺ふに足るべく、名家名門に育ち且つ社會事業に深く關聯を持ちつゝある一事をもつてしても、氏の床しき半面を想像するに難くなく、「積善の家に餘慶あり」とか氏が今日恵まれつゝあるのも、一面氏の才腕に依るとは云へ、平素の善行の反映と稱しても決して過言ではなからう。

康徳興業・代表取締役

佐野忠司氏

康徳興業(株)代表取締役、大阪屋商店(株)常務取締役、昭和特殊鋼鐵興社(各株)取締役等の諸重役を兼ねて業界に壓倒的勢力を有する佐野忠司氏は、内外の經濟事情に明るい洞察力の人である。明治三十八年四月に靜岡縣人佐野米吉氏の二男として生れ、學校は慶應義塾理財科出身、大正七年度の卒業生である。夙に業界に身を投じて巨大な足跡を印してゐるが、公平無私で清廉潔白、康徳興業の指導者たるに全く應はしい人格者、業界の信望は素より世間の評判も眞に好い高徳の人だ。時、恰も非常時局の今日に於て最も緊要且重大なる役割をもつ實業界が今後如何に處してゆくかは、一つに氏の如き經濟通の卓見の士に課せられた使命ではあるまいか。而も氏の稀に見る眞摯な生活態度、そして正確なる理論、端嚴なる人格は躍進日本の先進的メンバールとして一點の非の打ちどころもないのは心強き限りだ。赫々の名聲を荷つて大きく雄飛してゐる氏、業界の最前線に立つてどんな飛躍をするか期待して止まない。

土木建築請負業

佐藤榮太郎氏

前橋市の土木建築請負業者と云へば、直ちに聯想されるのが佐藤榮太郎氏その人である。それほど普遍的でありその名は業界を席捲しつゝあるかの觀がある。現に前橋市參事會員前橋商工會常議員等の任にあつて同地財界に於ける重鎮としての面目をいよ／＼發揮しつゝあるのみか、過ぐる昭和九年の陸軍特別大演習に際しては、閑院宮春仁王殿下御宿泊の榮を賜ふた光榮に至つては、群馬縣多額納税者としての貫禄と共に、とこしえに子孫に傳ふべき譽の數々と云はなければならぬ。氏は新潟縣の産、佐藤文治郎氏の長男として明治十七年四月に誕生、大正二年父君退隱の後を承けて家督を相續した。もと／＼氏は土木建築請負事業には長年に亘る經驗と、獨自の手腕を揮つてゐるだけに業務上の熱意も燃ゆるが如きものがあり、達成せざんば止まずの意氣はたしかに業界の逸足として推稱するに足るものがある。今や人格にもいよ／＼圓熟味を加へ而も身を持つること頗る謹嚴で衆に範たるものがある。

富士スレート・社長

佐藤憲造氏

富士スレート株式會社社長たる佐藤憲造氏こそ、スレートと共に生活しスレートと共に苦勞して來た人物である。氏は熊本縣の産、佐藤金平氏の長男として明治二十三年一月に誕生した。大正三年東京帝大工科を卒業と共に淺野スレート工場、厚島鐵工所技師長、同營業主任等に就いたが、内に一城の主たるべき雄志を抱き、深厚なる研究心に富み勃々たる事業慾に燃える氏は、遂に明朗闊達の才腕を揮つて富士スレートの社長に就任、斯業一方の雄たると共に著々と業績をあげつゝある。氏は資性濃厚篤實にして努力奮闘の人であり、その實力は商機を看るに敏なるのと合せていよ／＼隆盛ぶりを示し、今や斯界の重鎮として何人も許してゐる有様である。したがつてスレート界が氏に期待するところも多し、氏もまたスレート界のために献身的に奉公を期してゐるから、今後世界的情勢その他の諸狀勢を背景として氏の活躍こそは、期して待つべきものがあり、氏も大いに張りきつて待機してゐるわけである。

王子製紙・眞岡工場長

齋藤孝氏

製紙王國王子製紙は全國に三十有餘の工場を有してゐるが、流石に樺太の工場に於ける木材供給の第一流の本邦に於ける木材供給の第一流の工場だけに、豊原、大泊、落合、知取、眞岡、野田、泊居、惠須取の八大工場を擁してゐて、大王子のバルブ及び製紙の據點となつてゐる。昨來の木材輸入制限は極度に製紙界を脅かしてゐる時、樺太の各工場が全能力をあげて製紙國策に精進してゐることは、誠に心強きことである。大王子は藤原會長高島社長以下、人材雲集してゐることで有名であり、中堅層は殊に逸材が揃つてゐるが、わが齋藤孝氏はその中堅層の中でも特に優秀なる青年幹部としてその將來性を囑目されてゐるが、現在は眞岡工場長として切つて廻はしてゐる調將である。氏は明治二十九年四月東京府人齋藤孝次郎氏の長男として誕生し、昭和六年家督を相續した。先は大正十一年東京帝大工学部を卒業し、直ちに樺太工業に入り、昭和八年同社が王子に合併後も、引續き惠須取工場長代理兼第一工務係長を経て、同十四年現職に就いた。

特殊合金・代表取締役

齋藤恒一氏

わが齋藤恒一氏は時局下産業界の巨星として燦たる光芒を放ちつゝある偉材で、その關係事業は金屬工業、メーカー、紡績、保險の各般に亘つてゐるが、元來が技術家の出で氏の明晰なる頭腦及び冴えかへつた經營手腕は、何人の追隨をも許さぬものがあり、行くとし可ならざるはなき妙諦を發揮してゐる。即ち氏は特殊合金代表取締役たる他、大阪機械製作所、原口電機製作所、帝國精密工業各監査役に任じてゐるが、之等の會社は軍需的、國策的に大きな役割を果しつゝあり、氏の技術的手腕に負ふ所が多く、また東京紡績、第一機關保險各監査役にも任じて好評噴々たるものがある。氏は明治二十四年八月山口縣土族齋藤恒三氏の長男として誕生し、昭和十二年先代の跡を承けて家督を相續した。嚴父は工學博士にして東京紡績其他諸會社の社長、相談役として令名高かつた人である。先是氏は大正六年東大工科機械科を卒業し、嚴父を輔け乍ら事業界に乗り出したもので、本年とつて五十歳氏の前途は洋々たるものがある。

廣島證券商事・専務取締役

齋藤 正雄氏

わが齋藤正雄氏は廣島株界の闘將として勇名を馳せてゐる人材である。即ち氏は家業として問屋業を営み乍ら、廣島株式取引所取引員たり、廣島證券商事専務取締役、齋藤商店取締役として活躍してゐるが、本年四十七歳といふ年頃としても實業家として脂の乗りかけたところで、その堂々の陣を張つて斯界に呼號する雄姿は全く颯爽たるものがあり、天馬空をゆく概を示してゐる。氏はまた大阪毎日販賣所長にも任じてゐるが、言ふまでもなく大毎は大朝と並んで關西以西の新開界の双壁をなして居り、吳市は海軍鎮守府を本據に工業都として近來驚威的な發展を辿りつゝある新文化地帯であるから、新聞購讀者も他に比して極めて高率を示してゐるが、氏の販賣所長就任以來、大毎の購讀者数は斷然他社を引離して好成绩を擧げてゐる。氏は明治二十七年七月廣島縣人齋藤信次郎氏の二男として誕生したが、大正三年分家して一家を成した。夙に株式界に乗り出して今日の大を成し、現在廣島縣多額納稅者に列してゐる。

齋藤ツキスト
ドリル製作所・代表取締役

齋藤 又一氏

帝都製作界に於ける一方の雄として齋藤又一氏の存在は光彩陸離たるものがある。即ち氏は齋藤ツキストドリル製作所代表取締役として、特殊鋼ドリルの製作所に采配を揮つてゐるが、同所の製品は氏が永年に亘つて研鑽を積んだ技術的結晶とも云ふべき逸品で、その優秀なる切味と耐久力は到底他の追随を許さぬものがあり、斯界に噴々たる好評を拍してゐる。氏は明治二十七年二月三重縣人齋藤金治氏の五男として誕生したが、大正十一年分家して一家を成した。幼年時代から機械に對して深い執着を有してゐた氏は、大正五年名古屋高工機械科を卒業し、上京して東京瓦斯電氣工業に入り、現在同社の技師として現場の指揮に任じてゐるが、メーカーとしての研究心は彌々強く、多年の蘊蓄を傾けて特殊鋼ドリルを考案發明し、齋藤ツキストドリル製作所を創立して之れを主宰するに至つたのである。氏は當年とつて四十七歳、時局下の製作界はその將來に多くの成すべきものがあり、氏の如き逸材の重寶また大なりである。

大同電氣・取締役支配人
製鋼所・兼東京支店長

坂下 忠雄氏

株式會社大同電氣製鋼所取締役支配人兼東京支店長として活躍しつゝある坂下忠雄氏もたしかに有数の事業家として推稱できる。しかも元氣は益々旺盛をきわめ、いよ／＼事業報國に邁進しつゝあることは、眞にたのもしきかぎりといふべからぬ。現に氏に依つて經營づけられたものとして東邦金山株式會社(社長)三陸水電、東京特殊銀各株式會社(専務取締役)三泉工業株式會社(取締役)等があり何れも氏の指導的立場のもとに置かれてゐるものであり、而も寧日なき努力は次第にその基礎に堅實さを加はへしめつゝある。氏は岩手縣人坂下又十郎氏の二男にして明治二十二年十一月に誕生した。大正三年早大政經科、同大學研究科を各卒業したる後東京鋼材機械會社に入り、更に藤々商會を経て大正八年に大同電氣製鋼所に轉じたもので、同十年に取締役支配人兼東京支店長に累進したのである。明朗なる性格は社交方面にもよく知られ、現に電氣俱樂部、帝國鐵道協會等の公員に加はつてゐる。

東洋絹織・常任監査役

坂田 賞穂氏

今日東洋絹織株式會社と云へば、堅實なる營業方針のもとに着々とその歩みをつゞけつゝあることは、十指のよく認むるところである。同社の營業方針は一見してちみちみ如くに映するが、それだけに堅實性を多分に持つてゐるのである。派手／＼しいところを見せないだけに、投機性など微塵もないと云ふわけである。蓋し堅實を誇る重役陣の完璧など同社の向隆に大きな役割を果しつゝあるものと云へる。例へば氏の場合なども單なる名義重役に止まらず、率先して號令し以て意欲を満すといふ熱意に燃えてゐるのである。氏は和歌山縣土族坂田矢之吉氏の長男として明治十八年六月に誕生した。明治四十年東京高等商業學校を卒業後、三井物産に入り大阪、上海各支店詰を振り出しに本店會計課長代理を経て同社機械部勘定主任に進み、更に調査課長となつて昭和十三年五月東洋絹織の常任監査役に擧げられたもので、三井仕込みの的確な手腕は同社のほかに尙數會社の監査役としてみ臨んでゐる。

阪田商會・社長

坂田 成一氏

古來から日本人は手先きが器用なのである。頭腦の優秀なるのと併せて手先の器用なること、正に世界に冠たるものと誇稱するも決して過言ではないのである。古代美術の眼を奪ふが如き絢爛さ、典雅を極めたる彫刻美などに至つては、それを如實に物語るものであり、今日機械工業に於ける長足の進歩も、祖先の流れを汲む謂はゞ傳統的優秀性に依るものと云へるのである。本邦機械工業界の明星として斯界を潤歩する坂田成一氏の雄姿こそは、過去三十餘年に亘り眞正面から斯業と取つ組んで千軍萬馬、美事に陣容を築き上げた手腕の冴えに至つては、初年兵の到底及ぶべくもないところで、そこに三十餘年の歴史が、輝やきを見せるわけである。氏は廣島縣人阪田恒四郎氏の長男にして明治十五年十月に誕生し、大正九年に家督を相続した。明治三十四年大阪高等工業學校卒業後、機械商を營みつゝ次第に業界へと進出したもので、現に阪田商會、大阪燃焼工業、訪談工業各株式會社々長其他斯業關係の重役を兼て令名風に高い。

日産化學工業・常務取締役

坂田 愉三郎氏

氏は財界人と言はんよりは寧ろ有数の科學者と云つた方がふさはしい存在である。まじめ一方を押し通して來た氏のことだけに、積年の蘊蓄と多年業界に在つて洗練された手腕とは既に定評のあるところである。したがつて業界にも相當功績を残して來てゐるが、氏は之をすこしも誇らうとはしない、寡黙な氏のことであるからだ。しかし一度事にあたるや巧みにカンどころを捉かへて、テキパキと處理して行く鮮やかな手腕に至つては、凡人のよくなし得るところではない。しかも時々偶ひらめかせる智力は何となく底知れぬやうな深みを持つてをり、煙幕張つての態度にも謙讓の色が窺はれるとも云へるのである。氏は岡山縣人坂田雅夫氏の五男として明治十六年二月に出生、昭和四年に令兄快太郎氏方より分家した。明治四十年東京帝大工學部應用化學科を卒業した俊秀で、現に中越電氣工業、大阪アルカリ肥料各株式會社専務取締役を始め、日産化學工業株式會社常務取締役其他の重役を兼て勢威日々に掲りつゝある。

遠州織機・社長

阪本 久五郎氏

氏は奈良縣の産、阪本久四郎氏の三男にして明治十五年七月に出生し大正四年令兄伊蔵氏方より分家した。明治四十一年大阪高等工業學校機械科を卒業後、斯業の有望性に着目して業界に身を投じ、今や遠州織機株式會社々長として鮮やかな活躍を示しつゝある。斯業經營には縦横自在を極むる鍊達の士だけに、自ら第一線に立つての奮闘ぶりには既に定評の存するところである。したがつて社員間にもいづしかこの氣風が浸み込んで融合一致、よく社務に現業に精勵して協力の實をあげつゝある。或實業家が一人を使ふと思ふな、使はると思つて働け、と云つたことがある。蓋し人情の機微を穿つた名言である。叱り飛ばして能率を上げさせたなど、いふことは、既に前代の遺物である。世相が斯くも複雑化してくると、それに對應すべき指導方法があらゆる方面に向つて展開して行く、結局指導精神の合理化が、最後に成功といふ副産物をもたらして行くのである。氏の場合などもそれを如實に裏書してゐる。

臺中輕鐵・専務取締役

坂本 清氏

臺中市の坂本清氏と云へば資産家をもつて夙に知られてゐる。現在臺中輕鐵株式會社専務取締役を始め諸會社の重役を兼てエネルギーシユな働らきぶりを示しつゝあるが、氏の今日在るは父君の偉業に負ふところも尠くない。即ち父君素魯哉氏は海南製粉、打狗土地、臺灣果物、臺中輕鐵各株式會社々長たるほか數會社の重役を兼ね、又臺灣總督府評議員に擧げられるなど、その敏腕は同地一圓を風靡したものであつた。氏はその長男として明治三十二年八月に出生、昭和十三年八月に家督を相続した。大正十四年明大政治學部を卒業後、實業界の第一線へと立つたものであるが、今や微動だにせぬ強固なる地盤はいよ／＼堅實味を増して、先代に優るとも劣らぬ様相を呈しつゝある。氏は二代目だけに先代ほどの苦難に遭つたとは思はれないが、年少の頃より極めて朝氣に富み世の二代目とは聊か趣きを異にしてゐる。したがつて業務上の熱意も若手だけに燃ゆるが如きものがあり、達成せすんば止まずの意氣はまことに壯である。

神治商會・取締役社長

阪本治作氏

自動車及び附屬品販賣業を営みつゝ、業界に風風の如き羽搏きをなしたる。ある阪本治作氏は現在株式會社神治商會取締役社長として清新潑瀾たる手腕を揮ひつゝある。氏は福岡縣人先代治作氏の二男として明治二十三年二月に出生、同三十七年家督相続と共に前名秀治を改めて襲名に及んだ。慶應商工學校卒業後大正元年に機械工業用品商を創め、同九年に店名を神治商會と改稱し自動車用品販賣業を営むに至つたもので、其後の發展に伴ない昭和九年九月には株式會社に組織を變更し、同時に取締役社長として一切を切盛りし得る地位に立つたのである。氏の斯界に對する識見はすこぶる該博なるものがあり、業務の老成に伴なつて勢ひその信望も加はり、大正十四年小倉市商業會議所設立と共に同議員に擧げられ、昭和四年には同じく常議員に更に同六年には遂に副會頭に推され、文字通りその人氣を裏書するに至つた。スポーツを趣味としてゐるだけに剛毅な質の裡にも、一脈の明朗性を持つてゐる。

大阪海上火災保險・取締役

坂本茂氏

大阪海上火災保險株式會社取締役兼東京支店長の椅子に在る坂本茂氏の存在こそは、將に業界の白眉と云へやう。氏が我が保險界の世話役として終始一貫その衝に携はつて來たことはよく知られてゐるところで、その意圖するところは實に地位でなく名譽でもない。勿論營利的意圖の下に出發したものでない。唯我が火保界の成長發展のみを念頭として今日に至つてゐるのであつて、この點が火保界の推進力的役割を果す至寶級の人物と云へるのである。昭和十三年十二月船舶保險協同會常務理事に就任するや、業界の世話役としての立場からも富貴威武に屈せず、妥當公正なる論議に基いて營々たる努力をつゞけたことは、氏の高潔なる人格をよく物語るものである。氏は福岡縣の産、坂本小次郎氏の長男として明治十六年六月に出生、大正十五年に家督を相続した。現在大阪海上火災保險取締役のほか日本サルヴェーヂ株式會社取締役をも兼て、時局下業界の立役者としての偉大なる存在を示しつゝある。

彰化銀行・事務取締役

坂本信道氏

わが坂本信道氏は臺灣金融界の大立物たる巨材である。氏の在島は既に三十年餘に亘つてゐるが、金融界の生え抜きとして本島各種事業の後援に努めたもので、臺灣産業界が今日の一大盛觀を見るに至つたのは、氏の如き偉材が金融界に在つた賜物であると云つてもよいであらう。氏は現在本島中部の重要都市臺中に在つて彰化銀行事務取締役の最高椅子に就てゐるが、同行は彰化、南投、臺北、桃園、基隆、豐原、鹿港、員林、埔里、高雄、東勢、清水、臺南、板橋、北斗、嘉義、新竹に支店を、高雄、草屯出張所を有する大銀行で、氏の名采配下に隆々たる盛運を辿つてゐる。また氏は臺灣土地建物監査役に任じてゐる。氏は明治十八年十二月高知縣人坂本義樹氏の二男として生誕、昭和六年家督を相続した。先是明治四十二年早大政治科を卒業して臺灣銀行に入り、後臺灣商工銀行に轉じて常務取締役に擧げられたが、昭和十二年彰化銀行に再轉じて現職に就いた。猶ほ氏は臺中商工會議所顧問に推されてゐる。

王子製紙・販賣部第一、第二課長

相良周吉氏

王子製紙の少壯幹部として出籠を語られて居る相良周吉氏は製紙畑に育ち一生を斯業の爲めに捧げるであらう程製紙業には精通して居るが又斯業に關する識見も高く、經營の才幹も凡庸ならぬものがある。氏は埼玉縣相良干撰氏の二男として明治二十二年出生、大正三年東京帝大法科商業學科を卒業し、直ちに九州製紙會社に入社す。時恰も第一次世界大戰の眞只中であつて斯業界の躍進は凄じい有様であつた。氏は此の好況に掉して十分に實力を磨いた。そして同社取締役兼理事として樞機に參畫したのであつたが、大正十五年同社が樺太工業會社に合併せられるに及び氏も亦入りて取締役に擧用せられ、坂本、八代各工場長となり、巧な經營振りを示したが、昭和五年取締役を辭し理事兼販賣部長として視聽を高めた。次いで昭和八年同社が王子製紙に併合と共に入社し販賣部第一課長兼第二課長として才腕を振つて居る。氏は共同洋紙取締役、中井商店監査役の要職に在り、製紙界に貢献した功績は蓋し大なるものがある。

東山農事・取締役會長

坂本正治氏

多士濟々の三菱を足場に東都事業界の花形として、輝ける地歩を築き上げたのが坂本正治氏である。氏は高知縣土族坂本雅章氏の長男にして明治十年四月に出生した。明治三十五年商船學校を卒業日本郵船會社に入り、翌三十六年には米國に留學するほどの英質を發揮した。斯くて歸朝後は三菱合資會社に轉じ小樽、神戸、各支店長を経て漸次累進し遂に三菱商事、三菱製鐵各株式會社常務取締役に榮達する身となつた。斯くして其後の快腕はいよいよ存分に打揮はれて今や東山農事株式會社取締役會長を筆頭に、小岩井農牧株式會社事務取締役、其他數會社の重役を兼て文字通り事業界の第一線を驍進しつゝある。氏が今日の偉大なる覇業を成し遂げるまでには、撓ゆまざる不屈の努力が織り込まれてゐることを忘却してはならない。而してその營々たる努力も氏が第一線に立ち、廣く事業界に駒を進めるに至つて次第に綜合完成の域に達したもので、如何に卓抜なる氏の手腕が具現されつゝあるかをよく知ることが出来る。

坂本商店・代表社員

坂本虎吉氏

乾物、海産物、穀類賣買、麵類、罐詰製造販賣等を営みつゝ坂本商店を主宰しつゝあつた坂本虎吉氏も、永年の努力の甲斐あつて大正十三年合名會社に改組と共に今ではその代表社員として、下關の一角に堅實なる業容を誇りつゝある。流石に土地の長老だけに押しも押される貫祿を保持し常に指導的立場に在つて重みを示してゐる。現に下關鮮魚卸商業組合理事として隠然偉大なる勢力を扶植しつゝあるのみか、更に驥足を伸ばして下關水産販賣株式會社常任監査役、下關精密工業株式會社監査役等を兼て嚴父の訓陶そのまゝをよく具現しつゝある。氏は山口縣人坂本良吉氏の長男にして明治十一年九月に出生、同三十六年父君逝去の後を繼いで家督を相続すると共に同年坂本商店を創立して拮据經營、遂に今日では堂々たる一城の主として同地一圓に覇を鳴らすに至つたものである。氏はあらゆる事業に對して眞摯なる努力を惜しまぬ典型的事業家である。したがつて今後氏が如何なる鴻業を遂げるか刮目すべきものがある。

岡山商工會議所・會頭

榮谷藤十郎氏

山陽岡山は人物を産む。大政治家があり大實業家があり學者がある。西に中國山脈の嶺々として聳え餘脈延々として瀬戸の海に多少無數の島を點綴し風光の明媚を以て冠たる處、中部は三備の平野を形成して廣潤幾十里其の自然に育まれる心像こそ一生を運命づける機縁となるであらう。榮谷藤十郎氏はその岡山が産んだ山陽財界の巨星である。氏は榮谷藤十郎氏の四男で明治十九年生れ。五十歳の勳盛り令兄の夭折に遇ひ幼名萬次郎を改め先代藤十郎を襲名し家を繼だのが明治三十年大正二年京都帝大經濟學部を卒業して實業界に入り卓越した手腕と力量は縦横の活躍を擅にし業界の王座を贏ち得た。岡山實業界の本營たる商工會議所の會頭として君臨し令名四隣を歴する現在である。氏は中國合同電氣事務取締役として實際的活動をなす外播電氣、久米水力電氣、加茂水力電氣、湯原水電、鳥取電燈、日本電球、岡山電氣軌道、作陽水電等各社に取締役に就任潑瀾として活動を續けて居る。時局重大の秋自勵奮闘を祈る。

日獨貿易・社長

作田敏正氏

氏は千葉縣出身の少壯實業家であり俊才である。大正九年東京帝大法科經濟科を卒業した氏は歐洲大戰後の好調に躍る實業界目指して驍進して行つた。そして關西財閥の巨頭鴻池を選びその經營下にある鴻池銀行を振出しに同行大阪南支店長代理、同東京支店次長、三和銀行經理課次長、同中本支店長と累進し金融界の表裏にも精通し力量手腕の錚々たるありで將來を囑望されたのであるが、昭和十一年すつぱり足を洗ひ新しいスタートに立つたのである。氏の多年の研究と經驗とは氏に事業的活動の急務なことを示唆した、躍進日本は事業的發展によつて國富増進を企圖すべき斷乎たる決意を以て日獨貿易會社を創設し、之が社長となつて國際金融の眞表に立つて殆ど孤軍奮闘眞に不眠不休を續け財界の異彩として今日を招來した。氏は三和精機社長、高田商會、内田商店、科學機械製作所、各取締役、三光社監査役として第一線に花々しい活躍振りである。氏の理念によつて進行する紳士的躍動こそ國策に合致するものであらう。

安部幸商店・常務取締役

櫻井岩松氏

勢州人は商才に長けて居る、苦節十年粒々と辛苦を積んで獨立自營を最後の目標に一品、一錢たりとも忽にしないといふ節儉家が多い。櫻井岩松氏は正に其の三重縣の産、明治八年二月櫻井重助氏の二男として呱呱の聲を擧げた。夙に志を立て、安部幸商店入りをした素より將來の發展に資する爲めの忍苦は問題でなかつた。忠實勤勉どんな厭な事煩はしい事をも喜んで引受けた氏の魂の非凡さは何時までも池中の物ではなく累進を重ね、常務取締役として重役の班に列せられ苦節は茲に酬いられたのである。氏は今日同商店名古屋出張所主任として、圓熟した手腕を以て活動してゐる外鹽糖製品販賣所取締役に就任し、中京新業界に確たる歩を進めてゐる。實に、氏の堅忍持久と勤勉刻苦の結實として今日を招來したものである。氏は長嗣子未だ若冠で日本大學在學中と聞く、然し氏の頑健な軀體と澄澗たる元氣とは壯者の追従を許さないものがあり、實業家としての未來を持つて居る。自愛を祈る。

日本タイプライター・社長

櫻井兵五郎氏

氏は民政黨の領袖として衆議院に籍を置くこと大正四年以來連續八回、昭和六年第二次若槻内閣の下に商工參與官、岡田内閣に拓務政務次官として臺閣の顯職に列し、國政變遷の重衝に當り誇りの論議と潤達俊敏な手腕を揮つたことは未だ記憶に新たなるものがある。氏は一方財界の巨頭として悠然たる偉容を把持し、日本亞鉛會社長、中島製機、京都工作、朝比奈鐵工所、興亞鐵業各取締役會長として堂々斯界に君臨し、徐ろに時局の推移を凝視し、國策贊成に資して居る。氏は石川縣の出身で、明治十三年櫻井源次氏の長男として出生したが、明治二十五年伯父兵五郎氏の家督を繼ぎ前名乙清を改めて襲名した。明治四十四年早大政治經濟科を卒業した晩學の士であるが、既に當時政治財政に關する抱負見識は卓抜せるものがあり雑誌「地方行政」を主宰し、政治意識の振興を圖る等國士の風格を存し世論を指導したものである。大正二年、三十餘歳の若冠を以て石川縣議員に當選し、氏の政界生活の端を發したのである。

日本毛織・常務取締役

櫻井靖氏

日本毛織會社は斯界に於ける霸王的存在で、時局下に於て國策線上に活躍し隆々たる姿勢を以て進軍譜を奏てゐる蔭には、常務取締役たる櫻井靖氏の努力と奮闘とを忘れてはならぬ。榮枯盛衰は事業界をも支配する。大正初頭、關東大震災火災と幾度かの財界恐慌は同社をも襲つた。確實な基礎の上にあるとは言へ、其の打擊は深刻なものがあつたが、よく之を漕ぎ抜けた裏には、同社幹部の總動員的勤行が續けられた。氏は、明治四十三年大阪高工卒業以來三十年間、獻身的犠牲的努力を傾けて怠る所なく、一旦の緩急に處しては全生命を投げ出して苦闘を續け其功業は同社發展史に牢記すべきであらう。氏は明治二十一年生れの東京府士族櫻井光裕氏の三男であり大阪高工出身後直ちに同社に入り、加古川工場を振出しに岐阜工場工務課長、姫路工場支配人心得、名古屋工場を経て常務取締役に推され、昭和毛糸紡績取締役をも兼任して居る。石上三年の比喩の如く、忍耐と努力は氏の成功の結果し財界有數なる存在をなした。

日本ソリヂエット・代表取締役

櫻澤鶴吉氏

日本ソリヂエット會社代表取締役櫻井鶴吉氏は、現時洪城金山會社專務取締役、東海セメント、東洋商事各會社取締役として、帝都財界に嚴然たる存在をなす、力行實踐以て功業を遂げた異彩ある實業家である。氏は明治六年埼玉縣櫻澤鶴吉氏の長子として産聲を擧げ同十六年家督を繼いだ。性來剛毅の氣質で積極進取常に人を制して運命を開拓して行くといふ強靱な意志の持主で、夙に帝都に出で苦學して中外商報通信員となつたが、後片倉財閥に入り石原製絲所長を経て大正九年片倉製絲紡績理事となり、縦横に積極的活動をなし實力手腕を認められ、昭和二年監査役に、同七年取締役に起用せられたのであるが、同十年退職し、中央に進出し前記會社に重役を勤め夔々として活躍する旺盛な精力家たるには唯感嘆する外はない。婿養子富士雄氏は醫學博士であり東京帝大醫學部講師として名名ある俊才であり、氏の内外は凡て順風滿帆の境地にある。惡戰苦闘は最早や昔語りにならんとして居る。自愛を希ふこと切である。

昭和護謄・帝務取締役千住工場長

櫻田益次郎氏

昭和護謄會社は本邦ゴム業界の第一線の強力な會社である。最近益々擴張強化せられつゝあつた業界は、事變の影響による輸入制限に直面して、新たな經營を企畫すべき餘儀ない情勢にあるとは言へ、國策産業の重要な部門である文け、更生の一路を進んで居る。昭和ゴム會社常務取締役兼千住工場長櫻田益次郎氏は同社の經營の實權を握り、現時局下に處するに十善の努力と精進とを捧げ獻身的勤職的な活動を續けて居る人物である。氏は明治十四年宮城縣に生れた、刻苦精勵の士であつて夙に實業界に入り、永年汗と血を絞つて健闘して成功した立志の模範的存在である。氏の今日あるは、絶えざる勤行倦まざる研鑽の齎した所産であつて、實に貴い血の償ひである。現在を忠實に闘ふ事は其の連續である一年十年を忠實に闘ふ所以である。かくて現在に忠實なる氏はその連續の堆積を如實に結果したのである。氏は南國ゴム社長、二樹園合名出資社員として護謄業界の重鎮であり、又先覺者でもある。

東洋絹織・専務取締役

笹木梢氏

紡織界に毅然たる偉容を持し業績隆々として發展を續けて居る東洋絹織株式會社に専務取締役たる氏は又朝鮮レヨン會社代表取締役として出藍を謳はれてゐる知能共練の士である。氏は明治二十年岡山縣に生れ、明治四十五年東京帝大工學部機械科卒業の麒麟兒である。疾く實業界に入り各方面に實務の修練を積み、昭和三年東洋レヨン會社の人となり天稟の明敏性を發揮し、卓抜なる手腕を以て社業に盡瘁し同社取締役に推されるに至り、實業界への存在を確保したのである。東洋絹織會社が其の手腕才幹を買つて専務取締役に起用し、氏の經綸抱負に信頼を寄せた炯眼は同社最近の業績が如實に物語つて居る。氏は又朝鮮レヨン會社に代表取締役として樞機を司掌し經營を指導し、不休の活躍を續け飛躍の手を緩めない。氏の堂々たる躍進の裏には不動の信念と明徹鏡の如き頭智が働いて居る。かくて成功の第一歩を贏ち得た氏の今後の進境こそ刮目に價するものがある。斯界の新進者として重要な使命を持つて氏である。

元笠戸船渠・専務取締役

笹子謹氏

我が造船界は、明治末期の大不況時代を経て第一次世界大戰の影響に依る空前の劃期的躍進時代に遭遇して、名實共に海運日本の實力を震駭させたのである。其の發展の過程に於て幾多の斯界有能の士が膏血を流したであらうことは言ふまでもない。笹子謹氏は悠々自適して餘生を三昧の境地に送つて居るのであるが、曾ては造船界に覇を制し堂々として斯業界に重きを成し俊傑的な存在を示したのである。否造船界を縦斷する一大權威であつた。氏は明治十五年千葉縣に生れ、同三十七年大阪高工造船科を卒業した逸材で、大阪鐵工所に於ける氏の三十年間の獻身的奮闘と努力とは偉大を極めたと言ふべきである。昭和五年笠戸船渠を創立し独自の經營に精進し同會社の礎石を築いたのであるが後之を辭した。業界は氏の行衛に重大關心を拂つたのである。今や徐ろに閑地に餘生を樂しむ蓋し浩然の氣を養ひ捲土重來の志ありや期して待つは否か。

三榮洋行主

笹島房次郎氏

三榮洋行、三榮化學機械製作所に店主として臨む笹島房次郎氏は、從七位勳六等陸軍歩兵大尉である。氏は陸軍士官學校第二十五期卒業の英才にして歩兵大尉に陞進せしが、大正十一年豫備役仰付けられると共に、東郷ハガネ工場に入り實業界に一步を印した。努力と勤勉と鐵の如き堅き意志とは氏を實業家たらしめるに十分であつた。忽ち才幹を認められ昭和二年奉天支店長に推舉せられ大陸業界に誇々として氣を吐いたが、氏の自營獨立の意志は遂に獨立企業を實行に移し、三榮洋行三榮化學機械製作所を創設し、事務所を帝都に設置し雄々しくも自ら陣頭に立つて渾身の努力を傾け、大童の活躍を續け當に騎虎の勢を示し、滿洲の野を席捲せんの概を示して居る。従つて業績は有野に入り盛況に次ぐに盛況を以て英雄的存在の觀を呈す。其の營業の主科目は特殊鋼の販賣で、獨逸クルツプ會社滿洲總代理店である。小栗仲鐵取締役をも兼ね澄澗たる活動振は三嘆に値す。明治二十六年東京府出身者で前途は頗る多望である。

日窒硫黄鑛業・事務取締役

笹田直二郎氏

日窒硫黄鑛業株式会社は、日本窒素の關係会社で昭和九年の創業に係る新興会社である。同社事務取締役たる笹田氏は新進の手腕家であることは言ふまでもない。氏は明治二十四年岡山縣笹田三太郎氏の二男として生れ、大正三年秋田鑛業を卒業した逸材である。卒業後直ちに住友鑛山に入り高田商會に轉じ、日本窒素會社技師長となり、著々として財界に進出して確たる基礎を築いた。氏が新興會社日窒硫黄鑛業専務に拔擢されたのは、眞摯精勵の賜であつて、堅實にして周到な氏の天才的手腕は八面玲瓏とも謂ふべきものがある。氏は同社を本據として、日窒鑛業、日窒樺太炭業、東洋水銀鑛業、各關係會社の常務取締役を兼務し、日窒陣營の統率的存在をなし、各社何れも顯著な業績をあげて居る。氏が名譽謀として且つ又闊將して優秀なる實業家であることは以上の事實が證明して居る。従つて其の存在は業界の矚目の中心をなすことも所以ありと謂ふべく、春秋は氏の將來に多きを望む、奮起碎勵國策の盾とならむことを。

三菱鑛業・大阪製煉所長

笹部富藏氏

三菱鑛業會社大阪製煉所所長笹部富藏氏は、堺化學工業會社事務取締役を兼ね、關西に於ける實業界の一勢力をなし、將來の覇を指して全身的に活動して居る。氏が財閥三菱の傘下に馳せたのは大正二年今や三十年に垂んとし、其の健闘努力、勤勉精勵は多大の貢献をなしたる事は疑ふべくもない。三菱鑛業が今日愈々隆々たるものあるは、鑛業會社當路者の全面的統一的活動によつたことは勿論であるが、氏が永年に亘つて支配者として積んだ苦難は其の發展史に明記せらるべきである。氏は東京府の産で、明治二十四年呱呱の聲をあげ、幼にして既に英明、大正二年東京高商を卒へ、其の秀才を買はれて三菱入りをして終始一貫して着實篤行以て社業の發展に寄與して今日に至る。氏の大坂在任は相當長いことであり、氏自身としての地盤も不動なものがあつて飛躍を自由ならしめて居ることは洵に心強い限りである。氏の財界に覇をなし其の牛耳を握るは今後であり、實業家の生命はこれから先である。奮勵以待機すべし。

大阪堂島米穀取引所・理事長

實吉雅郎氏

實吉雅郎氏は大阪堂島米穀取引所理事長として本邦米穀取引界の一人者であるが、昨十四年帝都に日本米穀が創立せらるゝや參與理事に擧げられて愈々重味を加へるに至つた。なほ氏は廣く實業界に驥足を伸して、日本揮發油社長たる他、豊國火災保險、再製樟腦、八幡土地、泉州織物各取締役、中央毛糸織績、島貿易各監査役に任じて、卓拔なる名采配を揮つて居るが、當年四十八歳の將來が如何に大成されるかは全く矚目に價する。氏は明治二十六年六月故實吉安純子爵の三男として出生した。嚴父子爵は醫學博士、貴族院議員、海軍軍醫總監、勳一等功二級の敍勳者として明治維新以來の功臣たりし人、また現戸主たる長兄純郎子爵は醫學博士にして慈惠醫大教授、慈惠醫院院長として、次兄吉郎氏は滿洲國獸疫研究所長として共に令名あり、富令夫人は關西財界の偉材島徳三氏の長女である。氏は大正六年東大法科政治科を卒業、横濱正金銀行、島商店に勤務したが、先には神戸商工會議所議員に擧げられてゐた。

東海電極製造・常務取締役

寒川恒一郎氏

わが寒川恒一郎氏は帝都業界の新星として近來頗る鮮かなる光輝を放ちつゝある逸材である。氏は現在嚴父恒貞氏が社長たる東海電極常務取締役兼技術部長として、經營並に技術方面の實際指揮に當つてゐるが、同社は最近矢繼早な發展飛躍を續けて斯界を瞻目せしめつゝあるが、これは實に新進氣鋭の氏の力に負ふところが多い。氏はまた東海産業常務取締役たる他、東海鑛業、東京高級鑛物、四國水力、屋島登山鐵道取締役、東海乾電池、日蘭商事各監査役に任じてゐるが、全く氏は行くとし可ならざるは無き才能の士で、何れの會社も氏の名采配下に隆々たる業績を示しつゝある。嚴父は本邦實業界の大長老で明治三十八年香川縣人たる嚴父の長男として出生した。昭和四年東大工學部を卒業して古川電氣工業に入つたが、同十年東海電極に轉じ、大三工工場、名古屋工場技師長、本社技術部長を経て、昭和十三年現職に就いた。氏は當年三十六歳、將來の大成が待望される。

千代田生命保險・京城支部長

笹間博氏

生保界の發展は頗る著しきものがあるだけに各社愈々術數の妙を極め抗爭の激甚なことは凄慘を極めるといふべき情勢にある。従つて契約豫定額の割當制による勧誘手段を以て臨んで居る現在を直視すれば、下級従事員の痛々しい姿態さへ想起せられる。千代田生命が逸早く相互會社組織として大衆の支援を呼んだ事は賢明な方策といへよう。要するに金融界は信用第一である。信用は人によつて左右される。保險界に錚々たる人物揃ひであることも頷ける譯である。笹間博氏は靜岡縣笹間洗耳氏の二男、明治二十年生れで、同四十五年慶大理財科を卒業最初、日清汽船に入りしが昭和六年千代田生命保險に轉じ、名古屋横濱各支部長を経て昭和九年現職に就任した練達有能の士である。由來靜岡縣人は外交的手腕に豊かであり氏亦人情の機微を穿つに敏にして流麗な外交手腕は自ら人を惹き付けずには置かない底の天才的資格を持つて居る。半島に於ける氏の業績には刻期的なものがあることは氏の全貌を窺ひ知るものであらう。

笹村製綱所・社長

笹村竹藏氏

綱索製造業笹村竹藏氏は、阪神事業界の重鎮であつて笹村製綱所は海軍指定工場として磐石の業礎を持ち、事變下倍々發展飛躍の一路を歩み盛況財界を壓するものがあり、將來性も極めて深い。氏は和歌山縣辻由太郎氏の令弟にして明治九年の生れ、先代竹藏氏の養子となり、同三十五年家督を繼ぎ久治郎を改めて襲名した人である。當家先々代武兵衛氏は播磨の人で夙に大阪に來り播磨屋と稱へ棕桐製品商を營み臥薪嘗膽今日の礎を築き累代祖業を承けて營業を續けたが、偶々日露戰役直後時代の要求により各種ロープ製造業に轉じ爾後組織の改廢はあつたが今日に及んだものである。氏は穩健練達之士であつて徳望厚く義に大阪商工會議所議員、同西區會議員の公職に推され公共の爲めにも一臂の勞を惜まな人性格である。現に大阪府多額納税者に列し、東洋製煉紡績、寶船冷蔵各社取締役任に就任し名望高く、愈々健康であつて豐饒たる活動を續け壯者を凌ぐ感がある。阪神財界の長老として益々自愛を祈る次第である。

東京製作所・社長

皿谷廣次氏

帝都實業界の長老格としてわが皿谷廣次氏の名は輝やかしきものがある。氏は資性剛健にして力行型の奮闘的實業家であるが、その半面には漢詩和歌の嗜みある文人としての雅趣があり、謂ゆる文武兩道に通じてゐることは氏の脈管に東北武士の血が滾々と流れてゐるからである。氏は現在東京製作所社長たる他、日本パーカライジング取締役として帝都製作界に鳴らしてゐるが、兩社共に時局産業界の寵兒として賑々たる業績を示しつゝあり、また氏は日本人造織維監査役としても人絹界に錚々たる令名がある。氏は明治十七年一月山形縣の士族たる皿谷貞助氏の四男として出生したが、大正三年分家して一家を立てた。先是明治四十一年東京高商を卒業して實業界に身を投じ、鹽水港製糖常務取締役に擧げられたが、昭和三年之れを辭して商工業視察の爲め歐米を巡遊し、同五年東京製糖を創立して取締役社長となつたが、後辭して相談役となつた。猶ほキチ令夫人は山形縣下金融界の重鎮たる渡邊吉兵衛氏の令妹である。

昭和電極・社長

澤野市逸氏

眞に商業戦線上の勝者たらんと欲せば徒らに修學に歲月を費し、智識の追及にのみ汲々たらんよりは、宜しく身を實務の裡に投じて具さに商機の妙諦を會得し、旁商業上の修養に努むるに如くはない。即ち知識は理論にして商業は實際であるからだ。かゝるとき野澤市逸氏の過去半生に於ける奮闘史こそは、如上の原理を實證してあまりあるものであり、商業に志すものにとつて好個の調である云はなければならぬ。氏は大阪府の産、澤野爲之氏の長男として明治二十八年六月に出生、昭和十一年に家督を相續した。幼少時代から先代の薫陶を受けて磨いた商略に、新時代の専門的素養を加へていよゝゝ輝やきを増した才腕は、稀代の商傑として自他共に許した先代をも屢々驚嘆せしめ、一目置かせると云ふ風で専ら將來の大成を業界に稱讃されてゐたが、果せるかな今や昭和電極株式會社社長並に昭和證券株式會社代表取締役として各々よく實績をあげ、炯眼と力腕による鮮かな修練の手腕捌きを示してゐる。

山陽皮革・取締役

澤野定七氏

光彩きらめく時局の脚光下に目覚ましき飛躍を遂げつゝ、颯爽と關西財界に登場してゐるのが澤野定七氏である。その卓腕の及ぶところ山陽皮革、大同信託、トキワ商會各株式會社取締役たるほか他會社にまでその驥足を伸ばして、名實共に關西財界の重鎮として國家的偉勳を擧はれてゐるのは人のよく知るところである。しかも父君譲りの天稟の英質は近代的に磨かれていよゝかゞやきを増し、機略縱横、慧拔な商才と明朗調達にしてあくまで高雅な風格とは、典型的二世中の白眉と絶讃されてゐる。氏は兵庫縣人先代定七氏の長男にして明治八年十月に出生し同四十四年に家督相続と共に前名久吉を改め襲名に及んだのである。明治二十七年神戸商業學校卒業後實業界へと進み、現に神戸取引所監査役たるほかに前記諸會社の重役を兼て尙ほ紳士として餘力を見せるところなど、氏の今後の活躍が更に次々に廣く大きく伸びるは必然と觀られてゐる所以である。資性極めて濃厚にして園基ゴルフ等に趣味を持つてゐる。

澤山商事・代表取締役

澤山精八郎氏

長崎縣財界の重鎮として現に澤山商事株式會社代表取締役としてその牙城を守るほか、數會社の重役を兼て主要役割を遺憾なく遂行すると共に、皇國未曾有の非常躍進の秋にあたり長崎縣多額納税者として國家的にも貢獻するところ甚大、且つ長崎縣商會議所議員として鎮達の手腕と、玲瓏剔透すべき風格を讃えられつゝあるのが澤山精八郎氏である。氏は長崎縣士族先代精八郎氏の長男として明治十五年十一月に出生し昭和九年家督相続と共に、前名喜多路を改めて襲名に及んだのである。夙に慶應大學理財科を卒業して實業界に入り、今や斯界屈指の人物としてめざましい活躍をつづけ、同地一圓に並ぶものなき盛運を招来しつゝある。先代精八郎氏は島原水電會社、澤山汽船、澤山兄弟商會、瓊浦土地會社の各社長を勤めたるほか成北土地會社其他の重役を兼て精勵、その信望は長崎商會議所特別議員に選ばれたほどの偉材であり、且貴族院議員に互選さるなど其名望は夙に財界を席捲しつゝあつた。

仁尾鹽田・社長

鹽田忠左衛門氏

香川縣の豪農鹽田忠左衛門氏は、先代忠左衛門氏の三男にして明治十五年八月に生れた。大正十四年に家督を相続し前名賢二郎を改め襲名するや、父祖傳來の農業に従事ひたすら家運の隆昌に努めてきた。また氏は稀にみる謹嚴の士人格者として知られ、現時仁尾町長として人望を寬め、町民の尊敬の的となつてゐる。これを見ても、氏素より凡庸の徒たるべき謂れなく、その才は廣く事業界にも伸びて、仁尾鹽田(株)社長、讃岐起業(株)取締役、多度津銀行、讃岐信託、四國水力電氣、四國證券各(株)監査役の諸重役を一身に引き受けて、正に快刀亂麻を斷つが如くに四方八方の活躍振りをみせてゐる。町長にして諸重役、そしてまた豪農たる氏の堅牢無比なる地盤は揺がず、香川縣下第一の富豪として多額納税者の一人に列してゐるが、まったく氏の實力や無量大。「飛躍王」のニックネームも宜なるかなと思はれる。時局下地方財界の指導者として事業界の元老として今後尙も飛躍されん事を希ふや切である。

鹽野香料・代表取締役

鹽野吉兵衛氏

關西で鹽野香料の名を知らぬ者はあるまい。それほど同社は有名なのである。當社の創設者は鹽野吉兵衛氏。當主鹽野氏は、大阪の人先代吉兵衛氏の子息で明治二十二年の二月に生ぶ聲を擧げたのである。同四十五年に至つて家督相続をなし、前名米太郎を改め襲名したのであつた。そして現時同鹽野香料の代表取締役として香料藥種商の第一人者と謳はれてゐるが、その經營的センスは實に素晴らしいもので、年毎に増加する國民の需要に應へて増産計畫を樹立し、近來頗る業績を擧げてゐるから大したものだ。氏の緻密にして充實した頭の良さは何人も驚嘆せずにはゐられぬほどのもので、それをもつて經營面の強化に當るのであるから、壓倒的飛躍を遂げつゝあるのも當然なわけである。目下氏は大阪府多額納税者の一人で、斯の如く錚々たる名聲を贏ち得てゐるが、識見、經驗、實力に於て正に大阪財界の偉材たるべき大器たるに間違ひはない。それ故に、氏に期して俟つべき處また大なるものがある。

日滿鐵鋼・專務取締役

三溝又三氏

貿易界に工業界に將又軌道界に八面六臂の活躍をつづけて日滿財界に重きをなし、聲望四隣にあまねきは三溝又三氏である。氏は岐阜縣の産三溝惟一氏の令弟にあたり明治二十四年四月に出生、後に分家したものである。大正六年東京帝大佛法科を卒業して神戸鈴木商店に入社したが、やがて濹澤合名會社に轉じ二ヶ年間社務を帯びて歐米各國の視察を遂げた。斯くて大正九年滿鐵に入社すると共に販賣係となり、更に鉄鋼課長を経て參事に進み、日滿商事株式會社創立と共にその專務取締役となつたが、更に日滿鐵鋼株式會社創立と同時に迎へられて專務取締役に就任、日滿商事、南滿瓦斯、日本精蠟各會社の重役を兼て斯業の發展振興に貢獻しつゝある。氏が事業經營の各方面に非凡の才幹をあらはして、至實的存在を擧はれてゐるのも研究家として各種の改善に努力するのみでなく、常に盡忠報國の至誠に燃えて功に徹らず小成に甘んぜず、不撓不屈の精神力を最大限に發揮し更に高所を目指して精進を續けたればこそである。

日本徵兵保險・專務取締役

三宮西平氏

聖戰の目的完遂の爲に今や大陸に我皇軍を進められつゝあり、將兵の意氣は腰に帯びた三尺の秋水と共に、世界の隅々にまでも喧傳されてゐる。事變下の我國に於ては何れの方面もよく其旨を體して時艱の克服に力めてゐるが、就中日本徵兵保險株式會社に至つてはまことに時宜に適した好事業と云はざるを得ない。同社に光芒一際輝やく存在をなし識見高邁、手腕亦卓絶にして且つ情理を盡し温厚宜しきを得、大器の徳をあますところなく兼ね備へてゐるのが、同社專務取締役として古豪並び立つ帝都同業界に颯爽として、先驅者の歩みをつづけてゐる三宮西平氏である。氏は熊本縣人三宮次平氏の三男にして明治十八年四月に出生、昭和八年令兄林藏氏方より分家した。明治四十五年東京物理學校を卒業し大正五年に日本徵兵保險會社に入り、取締役兼理事を経て昭和十一年七月に專務取締役となつたもので、何等の閑族的背景も有らず文字通りの裸一貫から起つて遂に今日業界に其人ありと謳はるゝに至つたのである。

日本興業・社長

鹽原民二氏

氏を語るには同時に氏の最良の同志千代子夫人をも語らねばならぬ。當家は其祖藤原氏より出で野州鹽原に住せるに依り氏を鹽原と名乗つたのである。民二氏は夙に蠶業に志し高山社蠶業學校を卒業後製糸業を研究して斯界に雄飛したが、人絹の發達と時代の推移を早くも察して航空機事業に轉じ、現時日本興業、無滑走航空機各(株)社長、國際パラシュート(名)社長、日本航空精機(株)取締役として斯界の權威者たる偉容を示してゐる。傍ら夫人が畢生の事業となせる女子教育の事業を授けて京阪神其他に十學校を設け、また神戸市布引に二萬坪の大遊園地を設けて一般公衆に公開しその樂を廣く共にしてゐるといふ、誠に偉大なる人格者、夫人とともに市民の敬愛の的である。千代子女士は十校もの名譽校長である外有名な直角運針鹽原裁縫術の始祖で、その著書も多く、女子の裁縫界に及ぼした功績は著大である。文部省を始め各教育會等より幾多の功勞章を受けた事は餘りにも有名で、斯様な夫妻は正に我國の誇りでもあらう。

明電舎・社長

重宗雄三氏

氏のやりに口は果敢である。烈々たるスピリットに燃えてゐる。したがつて氏を目するに業界のムツソリーニとしてゐる。まことにそれはムツソリーニに比しても決して遜色あるものではない。國家的見地に立つて獅子奮迅する形様こそ實に勇壯の極みである。したがつて不撓不屈といふ言葉は重宗氏の境涯に於て始めて見出される。斯くの如き精神に終始したればこそ、今日株式會社明電舎社長として時めいてゐるのである。氏は東京府人重宗信之氏の二男として明治二十七年に出生、昭和三年に令甥芳水氏より分家した。人は誰でも國家に貢獻すると同時に自己の満足を希望するものである。かゝる見地から氏は従業員に對し極力優遇の途を講じてゐる。即ち事業そのものを單なる金儲けの道具とせず、他人のため社會のため延いては國家のための事業と考へるところに、新時代の事業家としての面目が躍如としてゐる。而も一度その抱懐する事業精神に觸れるに及んでは、益々畏敬の念を高からしめるものがある。

日本タンカー・専務取締役

六戸 嘉惠次氏

六戸氏は岡山縣の人、明治十六年四月六戸寛城氏の三男として出生し、昭和四年令兄卷次氏方より分家した。學業を早大政治経済科に學び俊才の譽れあり、明治三十九年に目出度卒業した。品性高潔、舉措端麗、しかも業務に忠實熱心なる氏は平社員時代より常に幹部の信任厚く、漸次頭角を現はすと共に確固として東洋精神の眞髓を把握するに至つたのである。今日全國民の精神生活上最も大切なことは、皇運扶翼の信念を徹底的に深めることである。自然的にはその心情や觀念は誰でも懐いてゐる。しかし一方人間には生まれながらの我執があつて、個人主義的な考へ方に煩はされる。であるから自己といふ個人が存在して、その自分が他の多くの人と協力して生活しつゝ國家を思ひ扶翼を思ふといふやうな意識がなかく、抜けない。かゝる時にこそ自己と皇國・皇運とが眞に一如一枚になりきり、報國の叫びを掲げつゝある氏の健在こそ最も欣ぶべく、日本タンカー株式會社専務取締役たるの面目躍如たるものがある。

中央金屬工業・社長

品川 良造氏

自分だけの慾望を満たさうとするやうなけちな「私産業」の時代は既に去つてゐる。「何かお國に役立たう」とする新經濟精神、新産業思想こそが、これからの指導原理である。要は昔流の考へ「儲かりさへすればいい」といふやうな營利一片の思想を根こそぎ改めぬ以上は、この刻下の危機を突破することはできない。それ等凡庸を超越し自己の事業を國家的に結びつけて、常に實踐躬行しつゝ、範を垂れてゐる人に我が品川良造氏が在る。氏は兵庫縣の産、小林政治同愛三兩氏の令弟にあたり、明治二十五年七月に出生、其後大正七年に品川や子氏の養子となり昭和五年に分家した。大正四年神戸高等商業學校を卒業した英才だが、大正十一年には商工業視察のために歐米を巡遊し、その海外視察に依つて得た新進知識が事業經營に甚大なる効果をもたらしたことは云ふまでもない。現に中央金屬工業株式會社社長、西島變壓器株式會社代表取締役、大阪變壓器株式會社専務取締役等の任にある。

臺灣紙業・取締役兼支配人

柴田 義一氏

南國臺灣實業界の旗頭と云へば柴田義一氏、氏の令名は近來頗る躍進の譜を奏する臺灣事業の隆盛と共に浮び上つた新興氣鋭の實業家である。夙に學序を経て實業界に投じたもので、世に云ふ學歴が人物を決定するのではなくして、人物が地位を決定する程、實力は現代社會組織の上に於いては幅を利かし物を云ふのである。氏が如何に實力があり手腕家であるかと云ふことは、左の列記する諸會社に徴しても明かに立證される。曰く臺灣紙業の取締役兼支配人、臺灣興業株式會社取締役業務部長、日本物産取締役、等である。氏は靜岡縣人にして柴田萬藏氏の長男として、明治十九年出生、性來英才の譽高くして、その識見豊富であることは朝野の名士も深く傾聴する所である。その風貌凛然として威嚴あり正確なる時局認識は、總て關係各會社に於いて偉大なる足跡を残すであらう。これは筆者の信じて疑はない所である。老いて愈々カクシヤクたる氏が、その胸中に滿々と溢れる經驗は、以つて東亞の斯界に扶翼する所大であらう。

大日本麥酒・取締役兼東京支店長

柴田 清氏

ビール界に斷然君臨する大日本麥酒株式會社は、柴田清氏の令名と共に益々隆盛の一途を見てゐる。氏は同社の取締役兼營業部長、東京支店長の顯職に在つて、縱横無盡の敏腕を揮つてゐる。同社が今日を得、尙將來洋々たる企畫の下に飛躍しつゝあるのは全く氏の英斷宜しきを得てゐるからだと云つて決して過言ではないと思ふ。氏は栃木縣出身にして、明治二十年出生、同四十五年東京帝國大學法科獨法科を卒業すると直ちに前記會社に入り、實務と學理の研究に深く修練を積み、それだけ其の識見、蘊蓄は斯界隨一の評を恣まゝにし、見聞廣くして同社中の師表に仰がれるに至つてゐる。氏の關係する會社は枚擧に遑がない。その代表的名を擧げると、先づ東京麥酒、麥酒共同販賣、精養軒、東洋軒、花月園、第一ホテル、八洲ホテル、高砂麥酒、國際觀光興業であるが何れも其の取締役となつて、氏獨特の妙腕で業務隆盛を企圖してゐる。筆者はこの偉材たる氏の今後の飛躍をのぞんで止まない。

住友電線製造所・取締役

篠塚 貞勝氏

氏は福島縣土族住吉貞之進氏の三男にして明治二十五年一月出生、同四十五年同縣土族篠塚エイ子氏の養子となつたのである。大正二年東京高等商業學校を卒業後、株式會社住友電線製造所に入り商務部長を経て取締役にあげられたもので、現に阪根金屬商工株式會社専務取締役をも兼てゐるが、斯界に於ける最高の信用に甘んずることなく、益々優良製品の創製に不斷の苦心をつむと共に、顧客本位の誠實第一主義の下に、精勵之に努めてゐるから、近時に於ける業績は驚くべき成果を収めつゝある。住友電線は大正九年十二月資本金一千万圓をもつて設立されたものであるが、その發端は明治三十年四月に住友伸銅所の事業の一部として電線の製造を創めたのに始まる。其後數次の増資を経て現在資本金三千萬圓(全額拂込済)業績、内容共に優秀であり餘裕綽々裡に好成績を持續してゐるから、最早増資は必須とみられてゐる。それに同社は既に全額拂込済なのであるから、實現の可能性に云々の餘地はないのである。

パークキネマ・營業主

柴田 清一郎氏

演藝が國民精神に及ぼす影響は甚大なもので教壇に於ける正面的薰陶の成果に優るとも劣らぬ強力さを以て人心に迫つて来る。近代文明は演藝を立體的藝術として推賞するに至つたのも宜なりといふべし。従つて其の内容には深い注意と嚴かな檢討が行はれねばならぬ事は勿論、業者の國民的良心が極めて重要な問題になるのである。柴田清一郎氏はパークキネマの營業主であると共に、ルナパーク演藝會社専務取締役として大阪演藝界の指導的地位にある人物で、單に營利的本能の赴く儘に施設經營をする凡俗と撰を異にし、國民教育の一擔當者たる責任を感じて斯業の運営に深甚な考慮を加へてゐる點は實に心強く感ぜられる。氏は大阪府柴田清治郎氏の長男で明治二十八年五月出生、昭和十年家督を承けた人である。夙に演藝興行界に入り、特殊な事情を有する斯界に於て幾多の試練を経て、確固とした信念を築き上げ、大衆の側面的指導の爲め腐心精進を續けて倦む所を知らずといふ。洵に業界の先驅者として推賞に値する。

神戸電機製造所・取締役

柴田 楠三氏

準戰時體制から純戰時體制に移つたビツチ振りであることは筆者が今更萬言を要するまでもないことと思ふ。從つて軍需關係會社の好調は全般的に目醒しい活動をつゞけてゐることも亦周知の事實である。この中にあつて、神戸電機製造所も、その恩恵を得て、俄然、斯界に名乗りを上げ新興電機會社として、折紙がつけられる様になつた。その今日あることは、全く、柴田楠三氏を推して他にないと思ふ。氏は實に同社にあつて、努力精進、その甲斐あつて、遂に取締役の重職を得たのである。氏は兵庫縣人にして直木政之介の二男にして明治十六年出生、同三十年先代保造氏の養子となつて大正十二年家名を襲ひ、明治卅八年東京高等商業學校を卒業すると迎へられて前記會社に入つた。尙氏の餘力は、神戸マカナイト製作所、トキワ、商會に及び前者は取締役で後者は監査役の樞職にあつて、時局益々多端の折年齡を超越した活動振りを示してゐる。

染料工業藥品商・柴田商店主

柴田 二郎氏

現下染料工業の發達は目醒しいものがある。我が柴田二郎氏の經營する柴田商店は實に、染料工業藥品商にして、その需要者の多きこと、日夜、殺到すると云ふ。同店の名は斯業と共に、斯界に定評があり、柴田二郎氏の令名も亦、自から高い。氏は東京の人であつて明治二十四年出生、學序を経て直ちに業界に投じたが、其の商店經營の手腕に於いては堂々他を壓するに足る實力を發揮した。何百の従業員を擁してよく情理を盡し、濃厚にして、識見あり、如何なる問題に對しても誇々の卓見を披瀝することを以つて又知られた人である。一時同店が不況に見舞はれたことがあつたが、氏の豊富なる體験と手腕とで、見る／＼もり返し、遂に今日の如き店運を挽回したが全く氏は力行の人である。氏は外に、日本染織、東硫化學工業會社に關係し、何れも取締役となつて社務に精進してゐる。而して氏は本邦染料界のホープとして氏の存在は益々この時局下に於いて大なるものがあると云つて筆者は敢て憚らないのである。

淺野スレート・専務取締役

柴田潤藏氏

九州男子は豪快だ、西郷さんがそうだ、東郷平八郎が、亦そうである。而もこの豪快の中に人情味たっぷりであることは、この二人の英傑を例に示して説明しなくても深山であると思ふ。こゝに述べる柴田潤藏氏も亦件の如き大人物である。その風格に接するならば誠に春の微風に當る如く快感を覚え、口を交へれば秋霜烈日の氣が伺はる傍ら、頼もしき信頼性を充分に與へずには置かないのである。氏は、長崎の人である、明治二十三年出生にして先代廣作氏の養子となりて大正十二年家督を相続した。學歴の點では、特記すべきものはないが、その明晰なる頭腦と、手腕は、遂に淺野スレート株式會社の専務取締役の椅子を占め、同社にあつて今尚、社運向上の爲に、獨特の英斷を下して、業績を隆々と上げてゐる。一方氏は大阪石綿工業株式會社に關係して、同社の取締役並支配人の重職に就いて繁忙を極めてゐる。氏の趣味は、運動と登山であるが、こゝにも九州男子の片鱗が見えることを見落すことは出来ない。

發動機製造・専務取締役

柴田貞一氏

現時發動機製造會社の専務取締役の重職に在る柴田貞一氏は、長崎縣出身の士族で明治十五年出生である。氏の卓拔なる才能は學生時代より群を抜き常に一、二を下らなかつたと云ふ程の秀才、この秀才の柴田貞一氏が同三十五年京都帝大法科を卒業するや前記製造會社に入つて、忽ち、その優秀性を發揮するや俄然上司に認められ、榮進の一途を辿つて遂に今日、前記重役の椅子に就いたのである。しかしこの蔭に如何に氏がその冴えの頭腦にたのみをしたとは云へ、そのたのみが全部であつたのでは決してなく、日頃の忠勤精勵が相俟つて今日をあらしめたことを見落してはならない。氏が、その頭腦と刻苦とが、鬼に金棒となつて、凱歌の曉を見たこと云ふことは筆者と共に讀者諸氏は参考とすべきであらう。尚、氏が關係してゐる諸種の會社を列挙すると、先づ、日本金具株式會社、滿洲車輛等であり何れも取締役となり、又、日本エアーブレーキ會社、ダイハツ商會にも關係し、前者は常任監査役で後者は監査役の要職に在る。

島田硝子製造所・代表取締役

島田三郎氏

關西事業界の新星、島田三郎氏——氏は明日の産業界を双肩に前進せんとする有望なる新星だ。明治二十六年七月、大阪府島田孫市氏の二男として生れ、夙に慶大理財科に學んだが、昭和二年に島田硝子製造所、高橋製帽所各株式會社取締役となり、現時島田食器硝子販賣(株)取締役、太平洋フェルト(株)監査役も兼任、若々と前進してゐる。明治の御代まで「ギヤマン」と珍らしが恐れられてゐた硝子製器が現在では何處の家庭にも必需品として備えられ、最近では諸外國にも見られる程の精巧なカットグラスまで國産で出来るやうになつた。何と云ふ時代の進歩、何と云ふ發展であらう。時は流れる、世界は進む。この一推進力となつて一生を終るは最大の快事ではなくてなんであらうか。氏の事業もまた然り。もつと先へ先へ伸び行くであらう。氏は數度に上る歐米の産業界視察で得た新智識で、製造行程の改良、合理化等々の敏腕を發揮実績を挙げ、素晴らしいリード振りを見せてゐる。趣味は讀書、業界中のインテリだ。

大連船渠鐵工・常務取締役

嶋田信吉氏

轉換期の日本財界は幾多の逸材を欲求してゐる。況んや大陸經營に進出した本邦産業界は過渡期に直而して益々その整備の必要に迫られてゐる。こゝに於て轉換期の時局に對處し産業界の念に燃える嶋田信吉氏こそ、今日の時代を擔ふ人物として推賞するに足るものがある。氏は鳥取縣の産、明治二十三年三月の出生にして、東京高商に學び大正三年に卒業、實社會にスタートしては波瀾重疊の堅學を美事突破、今日の榮位にゴールインした逸材である。先づその上陸第一歩は大連汽船株式會社入社でこれが大正七年、後當社總務部長として第一線の前衛部に立ち目覚ましき活躍を遂げられ、昭和十三年六月に大連船渠鐵工株式會社常務取締役に就任、絶大なる信用と共に愈々縱横に敏腕を揮ひ本邦事業界に擡頭したのである。又現時白河船渠株式會社の監査役も兼ね斯界になくてはならぬ存在となつてゐる。資性濃厚、稀れにみる仁俠の持ち主で今後の活躍が刮目に價する——とは各方面からの聲だ。

北海道電氣・社長

柴野仁吉郎氏

氏は新潟縣出身にして明治二十年出生、同三十九年柏崎中學校を卒業したのみの學歴であるが英才の譽れ高く、長ずるに及んで實業的の才能は意表の鋭鋒を表はし、本邦の實業界の一方の雄として、その令名を轟はれてゐる才物である。氏は文字通り刻苦力闘型の人であつて死して後己むの不屈の精神が今日をあらしめたのである。その關係會社の多いことに徴しても、その精神ある哉と肯定するに何等齟さかでない。即ち、小樽商工會議員、北海道電氣株式會社社長、板谷生命保險、樺太銀行、洞爺湖電鐵の取締役の重職に就き、尙十合吳服店の監査役であり、板谷商船の支配人となつて縱横無盡の活動をつゞけてゐる。論既に初老に入つたと云つても業界發展並に戦時下産業界の爲めに萬丈の氣焔を以つて、銳意懸命なる奮闘に寧日がない有様である。今後幾多の課題を提げて、吾人の待つべきもの決して尠なしとしない。この課題を、氏の定評ある手腕によつて、快刀亂麻の如く處理して行くことを深く期待する所である。

共同火災保險・取締役

柴山佳四郎氏

わが保險界の雄として、亦、保險事業の最も親しまれる庶民階級の花形保險會社は共同火災保險會社を置いて他にならぬと思ふ。同社が、逐年業績を挙げ、遂に今日の如き隆盛を見たのは、かゝつて、抱負經綸共に他に秀れた傑物の存在に外ならないその人物とは誰であらう、實に柴山佳四郎氏である。氏は大阪府の産、明治十六年出生にして同三十八年慶應理財科を卒業し渡米して後、自から雜貨商を營んで、傍ら新聞社の支配人などの閑歴を持つた人。大正九年共同火災保險會社に入ると、外遊して各地の事業界を視察し見聞を廣くし、かくて豐富なる新智識と學識を俄かに發揮し、その非凡なる英才を上司に認められて、外國文書課長から遂に昭和五年推されて同社の取締役の要職に就いた。尚、氏はその才力を驅つて共同ビルディングの常務取締役を兼務してゐる。氏の活躍は今日よりは寧ろ明日にあり、而かも輝かしい將來は筆者が云ふまでもなく、既に約束付けられたる事實として期待されてゐるところである。

大同機械・常務取締役

島田忠次氏

いま、吾が事業界の實力派の人々と目される中堅財界人は多數あるが、その中で特に目立つてその大きな存在を示してゐるのが、島田忠次氏である。氏は獨立獨歩今日の地位を築き上げただけであつて、關係事業にも氏の性格が、風貌が、ハッキリと織り込まれてゐる。氏はどちらかと云へば財界の若手組であるが、その手腕力量に於ては老成事業家の到底及ばざるところである。氏は明治二十年十月佐賀縣島田完吾氏の二男として出生、大正四年慶大理財科を卒業し、古河鑛業、島谷部製作所、調度課長、同支配人、大同製鋼所經理部長、工場長を経て昭和二年に取締役兼支配人となり、現時大同機械株式會社常務取締役、築地興業株式會社監査役として四方八方に才腕を揮つてゐる。力戰奮闘、遂に努力は勝ち確固たる建設の第一階段を終つた。そしてこれからは唯飛躍の一途あるのみである。氏は未だ錚々、前途なほ幾春秋、眞の意味の中堅實業家として、又事業經營の敏腕家として財界のホープたるをこゝに敢へて明言する。

帝國製鐵・社長

島田徳太郎氏

本邦鑛業界發達の甚大なる貢獻者としてまた斯業の權威者として異彩ある島田徳太郎氏は餘りにも有名である。おそらくわが鑛業界に島田氏ほど斯業に蘊蓄をもち、また學究的人物として實踐者として權威あるものはあるまい。理論に實際に、氏の蘊蓄は深く廣くそして大きい。氏は三重縣の人、明治二十年十二月出生、現時帝國製鐵島田商會各(株)社長、日本レール(株)代表取締役、鞍山鋼材、光洋精工東西製鋼、旭内燃機、葛製造所、九榮商事各(株)取締役、尼崎製鋼所(株)監査役、島田商會(名)代表社員と、その關係會社多數にのぼり、大阪財界に於ける巨星としてその勢力は物凄く、大阪商工會議所常議員に推され、また西區堀江青年團長として銃後の滅私奉公に獻身的努力を續けてゐると云ふ熱血の士だ。樞機を畫するに妙味あり、先天的の才腕はまことに良く斬れ、單なる實業家とは質を異にしてゐる。加ふるに人望あり人間味あり、全く蘊蓄成れる氏の手腕には絶対の信頼が懸けられ正に業界異數の逸材であらう。

乾海苔問屋業・美濃屋店主

島田由兵衛氏

氏は明治十二年十二月の出生、前名を榮次郎と稱したが、先代天津の養子となり改名、美濃屋乾海苔問屋業もまた先代に勝るとも劣らぬ信望家で、その経営に於ける堅實一貫主義と相俟つて世の信用絶大なものである。氏はまた東京灣乾海苔問屋組合聯合會の會長として斯業の指導的地位にあり、權威者として遺憾なき統帥振りを示してゐる。現今同業の状態も以前の如き好調は見られず、同組合聯合會もこれの對策に苦心、何とか斯業の好轉を期すべく對處してゐるが、しかし會長島田氏ある限りはこの難局打開もさして困難ではあるまい。尙現時氏は大師銀行監査役の要職にもあり、その才腕は業界に益々飛躍せんとしてゐる。識見豊富なるは既に定評あり、そしてまた果斷實行主義者としても知られ、將來性のある有望なる事業家としての要素を充分に兼ね備へ今後を大いに期待されてゐるが、このセンスを活用財界に躍進するも近き日であらう。

満洲鑛山・社長

島田利吉氏

久原鑛業出の敏腕事業家も仲々に數が多い。だが鑛業界の重鎮島田利吉氏はその中であつて最も刮目すべき存在であらう。氏は宮城縣土族島田幸三郎氏の二男で明治十七年一月に生れ、同四十二年に東京帝大工科冶金科を優秀な成績で卒業、業界人の第一歩を久原鑛業に印した。さてこれより氏の鑛業界に於ける目覚ましい活躍が始まつたわけである。悠々焦らず持ち前の英才を縦横にふるひ、もつて大いに業績を挙げ一躍斯界の大立物としての確固たる基礎をつくつた。現時氏は臺灣總督府評議員たるの他、満洲鑛山、満洲鉛鑛各(株)社長、臺灣化學工業(株)代表取締役、安奉鑛業(株)専務取締役、日本鑛業(株)常務取締役、滿洲重工業開發(株)理事と八面六臂の活躍振り、業界で氏の名譽を知らぬ者は誰一人としてゐない程その存在は輝いてゐる。資源開發の重大責務を双肩にして滿洲に臺灣に、全力を盡して産業戦線に活躍する氏の功績は實に偉大だ。才に智に徳に申し分のない氏こそ時局を擔ふ人物である。

日本理化學工業・取締役支配人

島野亨二氏

島野亨二氏は近代工業の第一線に活躍してゐる日本理化學工業株式會社の取締役支配人である。吾が國工業界では近時科學應用に新地開拓をなし所謂理化學工業としてその振興をはかり、逐時隆盛となりつゝあつたが、今や全く陣容整ひ完璧なまでの成果をみるに至つたが、未だく、斯界の前途洋々、益々進展するものであることは疑ひもないことである。島野氏は斯様な斯界にあつて、よく研鑽、工業界の進歩に献身的努力を續け今日の大成長を遂げたが、氏は明治二十三年十一月生れの江戸子である。明治四十四年に長崎高商を卒業、大正十二年に見方より分家、現時に至つたもので、卓抜なる事業家的才腕は蔽ふべくもなく、今や日本鑛機株式會社取締役、日本アセチレン工業、森電機、滿洲理化學工業各株式會社監査役として活躍、進歩的事業家の名を恣にしてゐる。云ふまでもなく時局下産業界の使命は大きい、特に理化學工業は責務重大、かゝる時斯界に逸材島野氏あるは誠に喜ばしき限りである。

朝鮮興業・常務取締役

島原鐵三氏

半島——美はしの半島朝鮮の産業も近時著るしき進展振りを示してゐるが、こゝに朝鮮事業界發展の恩人、島原鐵三氏の略歴を述べやう。氏は福岡縣の産で明治十三年一月出生、大正十一年家督を相続した。夙に第一銀行に入りその才腕を認められ、本店副支配人、函館支店、京城支店各支配人を経て京都支店長に進んだが、昭和九年に同行を辭し現時は朝鮮興業會社常務取締役として半島の發展の爲に専念してゐる。ペンカーとしての氏の手腕もさることながら、實業界に於けるそれなまことに目覚ましきもの、朝鮮興業株式會社に於ける活躍振りは實に美事なものである。しかしながら氏は、自己の名利を得んが爲の手段、術策等は全然眼中にない。只管産業の勃興、文化の向上に留意して汝々營々と自己の所信に向つて邁進、他の事業家に見られる眞摯なる熱情がある。さればこそ、同社の發展あり、氏の今日ありで、各方面よりの徳望信用は絶大、社員達より親しまれ慕はれ崇敬の的となつてゐる。

小樽海運・社長

嶋谷俊郎氏

小樽海運株式會社と云へば北海道斯界の錚々たる存在である。この社長嶋谷俊郎氏は才子の名高き逸材で山口縣の産、明治二十二年五月生れである。氏は現時小樽海運の社長たるほか、從弟嶋谷武次氏の經營による嶋谷汽船株式會社の専務取締役及び嶋谷農事、函館定温倉庫各株式會社取締役として遺憾なくその秀技を示し燦然と輝いてゐる。近時吾が國の海運界は著しく發達し昔日の佛は全くなきまでに躍進したが、小樽海運も益々進展、確實なる將來性を約束されるに至つた。だがこれも社長嶋谷氏の經營手腕の業晴しさと名指導振りによるものにはかならない。長期に亘る奮闘遂ひに成り、今や氏の事業慾は一層熾烈となり八方に雄飛せんと待期してゐる。その全き事業經營手腕は今更改めて喋々すべき餘地もなく、氏の人格高邁なるは既に衆知のこと、氏こそ正に業界の逸材であり財界のホープであるは言を俟たない。時局下事業界に於て氏の如き才人の活躍が益々活潑とならんことをこゝに切望する次第である。

島津商店・代表取締役

島津和平治氏

大阪三品取引所の名取引員として、また島津商店の代表取締役として既に名聲ある島津和平治氏は高德の士として著名である。氏は愛知縣島津助一郎氏の長男として明治十四年四月に出生したが、長ずるに及び實業家たらんと欲し、斯界に身を投じ力闘した。屈するところなき努力あれば必ずや成功は贏ち得る——氏はこの信條を固く守つて世の荒浪と獨力奮戦、遂に今日の成果を修めたのであつた。現時日本製網、協同土地、帝國毛糸紡績各株式會社取締役、岩友商店、岩友倉庫各株式會社監査役と、正に業界の雄將的存在を示し今をときめく勢力家であるが、氏の經濟知識の豊富なることは云ふまでもなく、斯界に對する識見の確實なるは他に比類なく、三品取引所の東才と謳はれるも宜なるかなと思はれる。抱負に燃え、霸氣に満ち満ちた國將島津和平治氏——戰時經濟下にある吾が財界にとつて氏の存在は大きい。今後氏が如何に飛躍的展開をみせるかは未知數なるとは云へ各界等しく待望する處、一層の健闘を祈る。

廣島株式取引所・理事

島本幸助氏

全體的に觀て各株式取引所の當株は謂ゆる人氣株として取扱れ、利廻り的には採算を無視されてゐる傾きがあり、従つてその變動著しく信用が置けないが、ひとり廣島株式取引所だけは其の堅實な經營振りと比類なき高配繼續十三年度以前(二割五分)十四年度(二割二分)とに依つて、絶大の信用を拍してゐる。之れは一面中國地方の人氣の堅實さを物語るものであるが、また同取引所の主腦陣がガツチリしてゐて、謂はゆる相場師的な無理無法をやらなからで、同社の理事たるわが島本幸助氏の如きはこの點では全株界から表彰されて然るべき人材である。氏は明治二十三年十月廣島縣人たる先代幸助氏の二男として出生、昭和三年家督相続と共に前名圭一を改め襲名した。先代は廣島取引所理事、其他諸會社重役とし令名があつた。氏は明治四十二年廣島商業を卒業、島本商事代表社員として株式界に活躍し、昭和七年取引所理事に擧げられた。猶ほ氏は廣島義濟會理事會長たり、また廣島縣多額納稅者にも列してゐる。

清水土地植林・社長

清水榮次郎氏

わが清水榮次郎氏は關西實業界の元老格として嚮然たる勢力を扶植してゐる巨材で、その聲名は雷の如くに轟き渡つてゐる。氏は清水土地植林、日鮮土地、大二商會、別府大分電鐵、成南合同電氣の五社長たる他、朝鮮送電、山陽中央水電、中國合同電氣、杉村倉庫、日本ブライウード、日本製絲、山陽中央證券、日本化學産業の八社取締役、北鮮合同電氣、鳥取電燈、神戸土地興業、千代田木管の五社監査役に任じてゐるが、各社共に氏の圓熟湛能せる名采配下に隆々たる業績を挙げ、斯界美望の的となつてゐる。清水家の祖先是四國阿波國の出で、祖父榮藏氏の代に大阪に移住して砂糖商を營み、當家今日の基礎を築いたのである。嚴父榮藏氏に至つて對支貿易に従事し、傍ら清水銀行を經營しました肥料商、鑛業を兼營した。氏は先代の長男として明治三年四月出生し、同三十一年家督を相続した。先是二十四年慶應義塾を卒業し、家業を繼ぐと共に廣く實業界に乗り出したものである。氏の健康を祈つて止まない。

富士航空計器・社長

清水莊平氏

わが清水莊平氏は時局股販産業の寵兒として斯界羨望の的となつてゐる。富士航空計器、北辰電機製作所の兩社長として、今をときめく偉材である。富士航空計器は本邦三大製作会社の一たる古河系の牙城富士電機製造の仔會社中でも、最良の成績を擧げてゐる優良會社である。また北辰電機も斯界の花形として軍需的にも大きな貢献をなした。あるが、氏は同製作所の計畫部長、製作部長、研究部長の製作面の三部長を兼ねてゐて、技術者としても實地指導に當つてゐるが、本年四十八歳といふまさに張り切りの絶頂にある氏の精力は全工場を呑むの概をなし、脈々たる業績を示して斯界を驚嘆せしめてゐる。氏は明治二十六年十二月靜岡縣人清水米作氏の二男として出生したが、大正十年分家して一家を成した。大正二年東京物理學校を卒業したが事業界に身を投じ、メーカー界の重鎮として呼號するに至つたものである。猶ほ氏は津多惠令夫人との間に一男四女を寵まれて、その幸福な家庭を羨まれてゐる。

清水硝子製造所・社長

清水清三郎氏

時局下に於ける化學藥品の統制制限強化の爲め硝子工業界は可なり打撃を被つてゐるが、これは需要に對する供給不足で、一昔前の不況時代に比すれば業界としては決して不景氣の譯ではない。然し何んと言つても硝子工業は文化の華であり、實用的にも必須のものであるから、出來得る限り製造を擴大して貰ひたいものである。わが清水清三郎氏は清水硝子製造所社長として關西斯界の第一人者たる巨豪であるが、また大阪府硝子製造同業組合長、日本石油洋燈工業組合理事長、日本硝子組合聯合會副會長たる他、大阪硝子組合、日本硝子製造輸出組合各理事の公職にあり、本邦斯界の最高權威として貢獻するところ甚大なるものがある。氏は明治二十七年十二月大阪府人清水鏡太郎氏の長男として出生し、大正元年家督を相続した。夙に實業界に入り硝子工業界の爲めに盡心しつゝあるが、昭和三年には大阪府の囑託に依り南洋視察の途に就いた。猶ほ氏は浪華商業學校を設立し、其の理事として育英事業界にも令名がある。

清水商事・社長

清水孫四郎氏

北海道財界に堅陣を誇る清水財閥の重鎮長谷川富藏氏の兄、清水靜吉氏の甥である。明治十五年九月に出生、大正五年家督を相続して前名孫吉郎を改め襲名し、現時は清水商事、清水貿易日産清水自動車、清水鐵工場各(株)社長、小樽物産(株)取締役等の諸役を兼務して吾が國重要産業を指導し、益々快腕に拍車をかけてゐる。正に業界の巨石の名を恥づかしくない存在である。顧みれば實業家として業界にスタートしてより多年、いまこゝに氏の事業的才腕はまこと圓熟の境地に入り、而も高潔なる人格は内外の信望を集めて名譽頗る高い。吾が國の貿易振興に産業の開發に、たゆまざる奮闘を續けてこの難事業を克服し、いまや一路産業報國に邁進してゐるあたり、誠に非凡の財人と云ふべきである。時局下の財界は愈々もつて多事多端殊に氏が本據とする貿易業の如きは複雑なる状態にあるの秋、氏の才腕が如何に發揮されるか、大いに期待される。

横濱帆布・専務取締役

清水洵平氏

業界の寵兒清水洵平氏は、正に「時」の人の感がある。現時横濱帆布(株)専務取締役、三増不動産、松尾鐵業各(株)常務取締役、南信公司(株)取締役として斯界に君臨し、赫々の名譽を擧げてゐる。氏は明治二十年十一月に長野縣の人清水忠助氏の三男として出生、大正十三年に見澤氏方より分家したのである。また早大商科を明治四十三年に卒業し、爾來業界に没入して孤軍奮闘、間もなく増田貿易會社上海支店長に拔擢されて縦横の才をふるつたが、それからとはトン／＼拍子、これも實力のいたせる業か、氏の行く手敵無し之感、グ／＼と大きく伸びていまや巨財を擁する大事業者と躍進したのである。資性温雅にして情誼に厚く、純粹なる日本主義者として知られ、氏を敬愛する人、實に驚くべき數に上つてゐる。独自の建前による堅實なる經營手腕と、稀にみる充實した計畫性をもつて、今後益々大きく延び、育つてゆくであらうことは誰が何と云つても間違ひのない事實だ。こゝに敢て明言を憚らない。

日本産業護謄・社長

下河邊建二氏

麻紡織界に名ある下河邊行一氏の令弟にして、明治十一年十月大阪府同苗俊齊氏の二男として生る。明治三十年大阪高等商業を卒業し、直後實業界に入る。時恰も日清戦捷の後を受け事業界は人材を要求すること急であつた。氏は時流に掉し順潮に發展を續行し、社會の實情、實業界の事情に精通し、確固とした信念が樹立せられ、其の鋭鋒は展開され躍進が續けられた。明治四十年分家獨立の頃には實業界の花形として知られる地位にまで進んだ。爾來奮闘努力四周を歴して隆々たる一路を辿つた。今や目的の第一階段を経て第三の新段階に入つたといふべきである。堂々として旗幟勇しく進撃した氏が悠然として功を收めるのは今日以後にあると斷じて憚らない。長男孫一氏は方面造ひの畜産業に従事し二男三史氏父の業を扶けて修業中であると聞く。氏は日立製作所、大阪鐵工所、日立電力、日産自動車、日本水産、中央土木各株式會社取締役、日本鑛業、日産化學工業等の監査役に就任活動に日も足らぬ有様である。

下村汽船・専務取締役

下村健一氏

東洋加工綿會社々長下村健一氏は、大正十四年明治大學政治科を卒業した人で、海運事業にも蘊蓄が淺くない。その著書現代海運論を繙く時は氏の世界海運の動向に對する抱負が如何に遠大なものかが知られる。火の如き情熱を以て憂國の氣を吐くあたり全く大政治家の風格が見られる。將來或は其の機運が到來しないとは限らない。滋賀縣下村耕次郎氏の長男として明治三十四年二月出生、實に不惑の齡に達したばかりである氏の前途は洋々たるものがある。今日までの修練は飛躍の第一階梯に過ぎないその才幹と手腕とは年と共に圓熟し將來必ずや大成するものがあるであらう。現在前掲會社を主宰する外、日本電解製鐵、大洋海運各株式會社監査役として浪華の業界に確然たる歩みを續けて居る。氏は弟妹の友に厚く男女六人のよき兄として遺憾がない。令閨房子さんは大阪實業界の巨頭堀文平氏長女にして若い身を内助に捧げ、家庭の中軸をなして居られる。極東新建設の立役者として大陸に進出雄偉なる活躍は注目し値する。

下村合名・代表社員

下村忠兵衛氏

京都の呉服商として夙に名高い人物に下村忠兵衛氏が居る。現に下村株式會社々長であり、下村合名會社代表社員である。氏は生粹の京都兒で先代忠兵衛氏の二男として明治二十五年六月に出生し、同十四年に家督相続と共に前名忠藏を改め襲名に及んだ。先代忠兵衛氏が我が財界を歩む巨人の一人として、その名と共に斯界に貢獻するところも亦甚大なるものがあつたので、當主たる氏もよく遺跡をついで専心事業の經營に終始し、しかも新分野を開拓するところに氏独自の手腕がもたらされ、時流に沿ふその經營方針は今や世の大事業家に比して、少くも遜色を認めないのである。それといふのも氏自ら陣頭に立つて采配をふり、指導そのものがごとごとく氏の胸によつて割り出され、且鮮やかに行はれてゐればこそである。したがつて業績も至極順調で、何等不安が伴はないのも長年に亘る堅實無比なる營業方針の現はれとも云ふのであらう。

日清製粉・常務取締役

正田英三郎氏

日清製粉株式會社が今日の如く好成績をあげつゝあるのは、取も直さず同社首腦部の優秀さを物語るもので殊に同社取締役たる正田英三郎氏の手腕力量に負ふところが甚だ多いと云はねばならぬ。氏は群馬縣の産、正田貞一郎氏の三男として明治三十六年九月に出生し、大正十一年に分家した。昭和二年に東京商科大学を卒業し直ちに三菱商事會社に入り、更に日清製粉に轉じたもので昭和十一年十二月に常務取締役に就任したのである。もと正田氏は一ツ橋出だけに、經營上の才腕も大いに期待されてゐたわけであるが、今日の偉容を築き上げたところを見ればその手腕たるや、又推測られざるものがあるといふべきである。しかも若さといふ點から云つても今後いよ／＼華々しさが展開されるわけで、今後に期待されることも尠くない。氏はその境遇から云つて恵まれた所謂お坊つちあん育ちなるものにもかゝらず、不撓不屈の推進力は國家的觀念を基礎に、常に活潑な働らきを見せてゐるのである。

正田醬酒・社長

正田文右衛門氏

龜甲正醸造元であり正田醬酒株式會社社長として時めいてゐるのが、正田文右衛門氏その人である。抑々正田家は舊幕時代米文と稱して米穀商を営んでゐたが、曾祖父文七氏の時に至つて之を廢し、明治六年以降に醬油醸造業に従事、爾來龜甲正醸造元として次第に名を成すに至つたものである。氏は先代文右衛門氏の長男として明治二十三年十二月に出生、昭和十三年家督相續と共に前名敏一郎を改めて襲名に及んだものである。大正三年東京高等商業學校卒業後家業に従事しつゝ精勵之を怠ることなく、現に館林航器株式會社長並びに日本榮養食料株式會社監査役を兼て堂々と事業界を闊歩しつゝある。最高の商業道德は社會道德に一致するとは常に唱道せらるゝところのものである。然るに世の商業の多くは社會の利益を究めることなく、獨り自己の利を占めることに専念する傾向あるは遺憾至極である。かゝる時氏は其等凡庸の徒輩を超越して、眞に大乗的見地より精進しつゝあることは甚だ欣快に堪へない。

石川島造船所・取締役

庄司健吉氏

正五位勳三等海軍機關大佐といふ榮譽が物語るやうに、氏は海軍畑で鍛え上げた人である。東京府人庄司義基氏の長男として明治十八年十月に出生した。氏は同四十二年に海軍機關學校を卒業し直ちに海軍機關少尉に任官した。爾來果進して昭和三年十二月に大佐に陞り昭和四年に豫備役編入となつた。素よりこのまゝで朽ちるやうな氏ではない。勇躍して事業界へと再出發に及んだ。即ち株式會社石川島造船所取締役兼發動機部長として、蓋し適材適所と云ひ得るのである。もと々々斯道については米の飯と同様、永年に亘つて身に沁み込んでゐるから今更その手腕を喋々するの要はなく、技術部門に於けるその手腕は今後益々大きな期待がかけられることは必定である。そこに永年に亘つて鍛え上げた氏の手腕力量が物を云ふのであつて、同社の所謂花形的存在の意義を成するのである。そのみか身體のコントロールも近來頗る上乘ときてゐるから、一層の心強さが加はつてゐるわけである。切に自愛を祈つて筆を擱かう。

莊保商會・社長

莊保英三郎氏

夙に事業の大成を目指して精進して來た氏のことである。その引提げて起つ株式會社莊保商會の盛況も、氏の手腕に負ふところが多い。勿論明治三十六年に先代英三郎氏が獨立して金物商を創業し家名をあげたるに因を成すとは云へ、氏の飽くなき努力は到底之を没することはできない。氏は先代の長男で明治四十一年一月に出生、昭和十二年父君退隱の後を承けて家督を相續し同時に前名美三を改めて襲名に及んだ。明星商業學校卒業後直ちに祖業を繼ぎ地金、眞鍮商を営みつゝ銳意その發展を圖りつゝあつたが、昭和十三年遂に株式組織に改むると共にその社長となつて今日に及んだもので、足元からつゞいてゐる理想を一步／＼誤りなく運んだ氏の前途にこそまことに多事なるものがある。人はどうすれば成功できるか、如何にすれば満足した快い日が送れるか、そのことについて多くの人々が悩んでゐる中に、氏のみは之を超越し得ることは幸福であると共に、大阪府多額納税者の貫録を擔ふ重責をも見直さなければならぬ。

日本漁網船具・専務取締役

城山保太郎氏

わが海國日本はまた水産日本として世界に冠たる地位を占めて、その漁撈額を世界に誇りつゝある。これは日本人の大洋難海を怖れざる勇猛精神なる氣質にも依るが、それと共に優秀なる漁撈器具網と之れに伴ふ技術を有してゐるからである。わが城山保太郎氏は日本漁網船具専務取締役として同社の最高權威を掌握してゐるが、同社は本邦に於ける斯業界の第一流會社で、下關に本社を置き、函館、東京、戸畑に營業所を設けてゐる。氏は自らが商船學校出の技術家である上に、息女正子女の養子正三氏が水産講習所漁撈科出身の秀才で氏を輔けつゝあるから、同社の製品は適正優秀の聲譽を愈々高めて、他社の追隨を許さぬ盛業を誇りつゝある。氏は明治十六年五月和歌山縣人たる城山楠次郎氏の二男として出生したが、大正十年家督を相續した。先是明治四十年商船學校航海科を卒業したが、大正九年日本漁網船具に入り現職に就いたものである。氏は日本國體の經濟組織化の研究者として知られ、またゴルフの名手である。

松風工業・社長

松風嘉定氏

松風工業、滿洲松風工業、松風陶器各株式會社社長、松風陶器製造株式會社取締役、松風金屬研究所監査役等にあつて噴々たる名聲の下に、斷然事業界に覇を唱へつゝあるのが松風嘉定氏である。氏は京都府人先代嘉定氏の長男にして明治二十六年八月に出生、昭和二年家督相續と共に前名俊一を改めて襲名に及んだものである。氏が抑々今日在るのも先代の偉功に依るもので、其恵み大なるものであつたと云はなければならぬ。即ち夙に實業界に在つて活躍した先代こそ日本硬質陶器會社社長其他諸會社の重役を兼て、京都商業會議所議員に推されつゝあつた逸材で、大正十四年萬國労働會議に本邦資本家代表として瑞西に渡航したるなどその功績は枚擧に遑なしと云つた有様である。先代の偉功もさることながら之を守成し且進展の一路を辿らしめつゝある氏の事業的才腕をも見逃し得ないものがある。二代目が凡庸なるが爲あたら先代の偉名をも没し去る場合もある中に、氏の場合は更に光芒を添しめつゝある觀をなしてゐる。

昭和製氷公司長

徐乃庚氏

氏は臺南州徐杰夫氏の令弟にあたり明治二十七年十一月に出生した。總督府師範學校卒業後直ちに實業界に入り爾來各方面に活躍し、今や南部實業界の重鎮として昭和製氷社長長昭和製氷公司長のほかに數種の事業に關係し、推されて臺南州會議員、嘉義商工會議所顧問、ジャパン・ツーリスト・ビューロー相談役の任に在る。もと／＼向學心の人一倍強き氏のこと、加ふるに不撓不屈の精神力と卓抜なる智能とは忽ちにして偉業を遂げ、遂に輝やく今日を迎ふるに至つたもので、古い諺だが「天は自ら助くるものを助く」で蛟龍は遂に地中のものに非ず、苦闘もやがては報いられる秋が來て現在では臺南實業界に在つて錚々たる名を賣出しつゝある。今や宿志成つて事業界への乗り出しも達成されたる今日、氏の抱負艱難も着々と實行されつゝあるからその得意たるや想ふべしである。氏が次ぎ／＼に新事業への乗り出しも決して野心満々のみではなく、寧ろ國家的見地よりして開拓するのを常としてゐる。

白井松新藥部・代表社員

白井松之助氏

華城大阪に於ける藥品商界の元老格としてわが白井松之助氏の名は雷の如く轟き渡つてゐるが、氏はまた度量衡器其他のメーカーとしても搖ぎなき地盤を扶植してゐる巨材である。氏の先代松之助氏は播州明石の産であつたが、大阪に出て錦屋藥店に奉公し、勤勉よく努めること二十年の後、獨立して藥種商を営み、刻苦精勵して當家今日の基礎を築き上げた立志傳中の偉人であつた。氏は明治元年十二月先代の長男として生誕し幼年時より父業を扶けてゐたが、同三十九年嚴父の後を承けて家督を相續すると共に前名松次郎を改めて襲名した。かくて家業を繼承したが、氏は時代の趨向を見て會社組織に改め、合資會社白井松新藥部となし自らその代表社員となり、且つメーカー等にも手を伸ばして、白井度量衡器製作所を興してその社長たり、また國産研磨材料、白井松器機舖各監査役をも兼ねて、今日の大を成すに至つた。氏は當年七十三歳、古稀に入つて彌々豐饒たるものがあり、壯者を凌ぐ健康を羨やまれてゐる。

名古屋重工業・社長

白石勝彦氏

わが白石勝彦氏は中京名古屋實業界の重鎮として赫々聲名を馳せつゝある闘將である。本年四十七歳の青壯であるが、資性豪健にして何ごとにも屈せざる精神なる闘志は、行くところ爲す事に於て成功を齎らさざれば止まざるの氣魄をもつてゐる。現在氏は名古屋重工業社長として時局産業の寵兒たる斯界に鳴らしてゐる他、東陽倉庫副社長たり、また名古屋便宜運漕、太平洋製作所各取締役任じ、日清生命保險、名古屋觀光ホテル、名古屋鐵道、福壽火災保險、牧田電機各監査役を兼ねてゐるが、これら各般に互る諸會社はその何れもが氏の名榮配下に賑々たる好業績を擧げて斯界羨望の的となつてゐることは言ふまでもない。氏は明治二十七年九月愛知縣白石半助氏の三男として出生したが、同三十七年嚴父と共に名古屋實業界知名の士たる令兄房次郎氏方から分家し、大正五年嚴父の後を承けて家督を相續した。同七年早大商科を卒業して實業界入りしたが現在名古屋商工會議所常議員に推されてゐる。

白石商事・社長

白石恒二氏

關西實業界一方の雄としてわが白石恒二氏は夙に聞え高き巨豪である。氏は明治十九年三月廣島縣人白石喜平氏の長男として出生したが、後ち家督を相続した。明治四十三年東京工學院を卒業して實業界に身を投じたが、幼年時より天才肌をもつて知られてゐた氏は、また獨立獨行の志堅く、力行主義の旗を立て、奮闘すること三十有餘年、終に初志を貫徹して、現在の氏は白石藥業、白石鑛山、白石商事の三社長たり、また營養興業取締役會長、白石工業代表取締役として、何れの社に置いて最高權機を掌握し、斯界を睥睨せしめつゝあるが、各社とも氏の采配下に在つて、脈々たる業績を擧げて居る。氏は先に同業組合理事、化學工業協會、護謨協會各議員に擧げられ、また兵庫縣下大庄村の村會議員にも推されてゐたことがあり、昭和三年には化學工業視察のため歐米各國を巡遊して來てゐる。猶ほ氏はアサヨ令夫人との間には二男三女の子寶があり、五十五歳の今日尙讀書に勉めて居り、刀劍趣味は堂に入つたものである。

白山製陶・社長

白川一雄氏

氏は香川縣人白川友一氏の二男として明治三十一年三月出生す。嚴父友一郎氏は夙に滿洲に渡り彼地に於て實業に従事すること多年、在哈爾濱土地建物社長として大陸に事業經營をなし、大陸に於ける先驅者として知名の士である。一雄氏は大正十三年東京帝大法學部獨法科を卒業した秀才にして、嚴父の豪宕洒落の氣象を其儘受け、剛毅果斷であつて義侠心に富み他人の世話もよく見るといふ。況して現在關係會社の従業員は慈父の如く敬慕して居ると聞く。中京財界に於ける少壯實業家として將來性に富む人材として擡頭し來つた氏は白山製陶、名古屋合板に社長として臨み鮮かな手腕を示し、白川保善社專務取締役、鞍山鋼材、下津井鐵道各取締役として各方面の一端に活躍し、業績の著しいものあるは氏の手腕の凡俗を抜いてゐる證左である。氏は常に其の關係會社製品乃至經營に厚利な検討と研究を加へ、業績向上の必然性を發見する點等養成實業家の遠く及ばざる所、そこに又氏の面目躍如たるものがある。

白山殖産・社長

白山善五郎氏

氏の始祖は淡路國白山を發祥の地とし、寶曆八年炭屋五郎兵衛氏より分派し初代善五郎氏一家を創立し白山を名乗り大阪切つての素封家で、京都熊谷直之氏、秋田町田忠治氏、大阪平瀨愛雄氏は何れも姻戚の關係にある。氏は分家白山保三郎氏の長男にして明治十七年の出生、入りて本家に養子となり、大正八年家督を承け前名清太郎を改めて襲名した。白山保三郎氏は氏の實弟にして財界紳士の士である。氏は明治卅八年大阪高商を出で實業界の人となり、夙に關西財界に覇を成し縱横の飛躍を續け斯界に於ける重鎮として信望が厚い。現在大阪府多額納稅者にして白山殖産會社運營の主宰者たる外大江ビルヂング社長、大阪酸水素、木津川土地運河各取締役、阪堺電鐵相談役の重職を擔ひ斬然たる存在を示す氏は人格高潔廉直にして自らなる氣品を備へ、氏に接するものは皆畏敬の念に打たれるといふ。財界稀に見るの好紳士である。殖産興業は躍進日本の第一要務である東亞興隆の理想實現の爲め益々活躍せられんことを望む。

大同自動車・社長

朱榮貴氏

臺南事業界の巨頭として廣くその名を知られてゐる朱榮貴氏は、現に大同自動車合資會社社長たるのほか、自ら本東方文具店を經營して、その燃えるが如き熱情をもつて縱横に英才を驅使しつゝある。しかも事業と公職とを問はず常に誠心を披瀝して事にあたるところなど、氏が、嘉和建築組合理事、臺南州自動車協會評議員、嘉義貸切自動車組合理事として聲望を得てゐる所以のものなのである。氏は臺南州朱琴氏の長男にして明治三十二年二月に出生した。嘉義公學校を卒業後父君の好き股肱となつて商事に従事、常に推進力的な役割を果しつゝ來たもので、それはあたかも鳥の兩翼の如く、また車の兩輪の如くに相扶けて事業の達成に努力しつゝ來たのである。氏が今日かゝる諸種の要職に携はり同地産業上行政上に大きな地歩を示してゐることは、取りも直さず氏のかゝる手腕力量が如何に秀れてゐるかを如實に物語るものである。しかも氏は未だ齡ひ四十を越すに幾莫もない。その前途たるや將に洋々たるものである。

白城合名・代表社員

白城定一氏

四國の人は開放で意志の強きこと銅鐵の如しといふ。氏は其の典型的人物であることは、氏の閱歷が證明する。氏は若冠にして志を立てて東上し横濱石炭商會社員となり、凡ゆる困苦と闘ひ凡ゆる誘惑を克服し、汗と力唯一筋に勤勉刻苦し實業界へ躍進する素地を造り上げた。回顧すれば血の滲み出る死闘とも言へやう。凡庸を抜いた氏の人物を見抜いたのが一代の怪傑山下龜三郎氏であつた。爾後山下汽船取締役同常務取締役、山下合名會社理事と超スピードの躍進より更に尾ヶ崎築港、阪神築港の重役を勤め、遂に獨力白城合名會社を創立し其代表社員として今日に及んだ。氏は愛媛縣白城友次郎氏の令弟にして明治二十年四月生れであつて、今が人生の華働き盛りである。財界に大を成すは今後であると信ずる。既に昭和七年衆議院議員に當選四等に叙せられ政治的にも大なる存在である。大日本人造黒鉛、日滿鑛業各社長、日中鑛業代表取締役、滿洲鉛鑛常務取締の要職に在り、大陸活躍の機構を持つ氏の存在を慶祝する。

南滿洲瓦斯・專務取締役

白濱多次郎氏

南滿大連財界の巨頭として偉容を示す白濱多次郎氏は、明治四十一年神戸高商を卒業するや夙に抱懐せる大陸進出の要望成つて、南滿鐵道會社に入社、撫順炭鑛用度課長、本社商部購買課長、經理部用度、會計各課長に歴任し少壯幹部として其才腕を稱へられ多望な將來を期待せられたが果せるかな、今や南滿洲瓦斯會社專務取締役として推擧せられ、經營の凡ては氏の明敏な頭腦から割出される現在を招來し確然として健闘して居る。其の人格力量に至つては大連商工會議所議員として推擧せられた事によつても證明せられる。氏は明則瀟灑で國際的紳士として申分がない。諸外人雜居の大連市に在つて日本民族の爲め萬丈の氣を吐くあたり堂々たる外交官でもある。氏は鹿兒島縣白濱權右衛門氏の二男にして明治十八年生れ、其の圓熟した人格は在留邦人の信望特に深いものがあるといふ。今や滿支を通じて一元に結ばんとし、大陸經營漸く其の緒に就かんとする重大な秋、氏の如き達識具眼の士の在滿を心から欣ぶ。

大阪海上火災保險・社長

新庄清一氏

新庄清一氏は、大阪海上火災保險社長にして滿洲火災海上保險監査役を兼ね、曩に大日本聯合火災保險協會長に推擧せられた。本邦火保界に於ける長老であり權威である。氏は明治十年三月、先考久之氏の長嗣子として出生し、九州男子の面目躍如たるものがあり、其の意志は鐵よりも堅く貫かすは止まぬ氣性である。東京帝大法科英法科を卒業したのが明治三十七年、剛毅にして綿密な天稟は、學歴を加へて愈々光彩を添へるに至つた。學窓を出るや大阪商船に入り文書課長を経て取締役に昇進し汝々として倦むことなく一路社業發展に努力したが、後大阪火災海上保險會社に轉じ、當時火保界の兎角不振状態を漸次開拓して世人の認識を新たにして行つた。その奮闘の激しさは熱血進軍の概があり、業界の俊傑として謳はれた。かくして大阪火災海上保險が磐石の礎を築き隆々たる今日の發展を見るに至つたことは、氏の献身的精進によるものであり、深い抱負經綸を藏し、斯業界に王座を占め偉大な存在として畏敬せられて居る。

小樽市街自動車・代表取締役

新谷專太郎氏

氏は北海道小樽市新谷喜作氏の二男で、明治二十三年五月の出生なり。大正六年本家たる先代克己氏の歿後を承けた人である。小樽市交通の生命線、小樽市街自動車會社の經營の要衝に當つて居る外、樺太銀行、板谷商船、各社監査役に就任し一方小樽市會議員、小樽市商工會議所常議員の公職に推擧せられ、政治經濟の兩方面に活動し大きな存在を示してゐる。氏は明治四十四年東京高商卒業の逸材で、祖業である漁具商を營み、漁撈界に貢獻すること多年、北洋漁業今日の盛況を誘導した隠然たる功績は不朽であらう。氏は洵に穩健賢實であつて人情に通じ、氏の知遇によつて各方面に進出した人物は枚舉に暇ないといふことである。現に北海道多額納稅者の班に入り、内外から敬慕せられてゐる。積善の家之餘慶ありで、氏の長男篤太郎氏既に小樽高商を卒業し専ら家業に勤み、家礎愈々堅く益々發展を續けて居ることは慶祝に堪えない所、由來北海は日ソ折衝の要地將來はより重大な關門たらんとす。國家の爲め自勵を望む。

八千代電氣商會・社長

新樂顯理氏

電氣器機業が斷然たる將來性を有つことは改めて論ずる迄もない。社會各層を通じて電化的に進むで止まな

九州炭業・代表取締役

末松辰三郎氏

末松辰三郎氏はいま九州炭業株式會社の代表取締役として九州財界の一

三國電燈・専務取締役

菅野信躬氏

人には各々獨自な行き方がある。菅野氏の場合は比較的ちみに歩んで來た。しかしちみとは云へその仕事は

阪神工業・専務取締役

菅野保正氏

酒と云へば直ちに難を想ひ出させる。その難にあつて積年の信用を唯

菅原鑛業・社長

菅原誠氏

菅原氏なども常に「儲かること」などを考へてゐる時代ではない。と云つてゐる。今日、衣食住足りて生かされてゐたら極上と思ふべきである。

小西六・社長

杉浦六右衛門氏

本邦寫眞機械製造業者として、小西六株式會社社長杉浦六右衛門氏の地位こそ、今や牢固として抜くべから

黒鉛満徳・社長

杉林健治郎氏

者が紹介するまでもなく令名天下に治しと云ふ所である。杉林健治郎氏があることは、既に筆

古河電氣工業・専務取締役

杉本五十鈴氏

本邦に於ける電氣事業は文化の母にして、この種發展は戦時下益需要の聲が高い。この聲に應へて立つ人に

三井物産・三池支店長

杉山 明久氏

氏は三井物産に入社して累進、拔擢を受けて東京、倫敦、横濱各支店勤務を経て昭和十三年一月、三池支店長に就任し今日に至つた優秀。三井物産生え抜きの新進氣鋭の人物だ。明治二十五年生れ、舊越前藩井藩士杉山喜兵衛氏の長男である。大正四年に東京高商を卒業して直に三井物産に入社、よく三井物産の躍進に盡力して聲名を馳せて来たのである。何しろ三井物産と云へば全世界に網を張つて、一ヶ年數十億圓に達する大貿易を行ひ、吾が日本のために萬丈の氣を吐いてゐる巨大會社だ。一時はその儲け振りに非難を受けて社長安川雄之助氏の辭職など、所謂轉向策が講じられたが國家の盛衰を知らぬ盲目の非難に過ぎず、今では斯る考へ方は全く是正されてゐるやうだ。それはさておき當社の營業概要は物品販賣貿易、問屋代理業、製材業、造船海運業、各種事業への投資等の廣汎に亘り我が産業に貢獻甚大である。當社の實力派の中堅杉山氏、またよく辣腕を發揮して、當社の爲貿易界の爲大奮闘されんことを祈る。

清水組・大阪支店長

鈴木 一幸氏

清水釘吉氏社長清水組は、その創業を遠く文化年代に發し、開年實に百五十歳、その開終始吾が國建築界の爲に寄與貢獻してきたのであつた。今や清水組の名は全國普ねく知れ渡り建築界の霸王と謳はれ、その右に出づるものなき感がある。同社は多士儔々、代々優秀なる人材を輩出してゐるが、現大阪支店長鈴木一幸氏も博識多才敏腕家の名が高い。氏は明治二十九年二月生れ、大正四年に東京工學院建築科を卒業直ちに清水組に入社、新進建築家として華々しきスターを切つた。氏こそ全く清水組生え抜きの逸材で、靜岡出張所主任、大阪支店次長、京都支店長と歴勤、現時大阪支店長として同社の大黒柱と稱されてゐる。顧みれば同社にあつて二十有餘年、生を捧げて只管社業の隆盛のために盡したその功績たるや實に賞すべきものがある。同社が今日の榮位にあるも氏の如き才腕の士の不屈なる努力の賜であるに違ひない。氏はまた「美」に對する熱烈な追究心に燃え、繪畫音楽を好む等床しき詩情をもつてゐる。

大日本木材防腐・代表取締役

鈴木 惣一郎氏

近時、木材の需要は年毎に増加の一途を辿り、建築に、パルプ工業に、はたまた總ゆる日用品生活必需品に木材を應用した原料としないものは無いと云つてよい位だ。それほどに、吾々の生活にとつて木材は、缺くべからざる重要な役割を果すものである。だが、なんと云つても鋼材の使用制限を受けた今日、建築材としての需要が一番多いのではあるまいか。そこで次に問題になるのは木材の防腐であり耐火である。久しき間、この問題について研鑽を積んできた人に鈴木惣一郎氏がある。氏は現時材木商を營んで隆々たるものであるが、傍ら大日本木材防腐、材木、愛知化學工業各(株)代表取締役、愛知時計電機(株)取締役として活躍し、正に中實業界の大御所たる貴族を示してゐる。明治三十二年一月生れ、愛知の人鈴木惣兵衛氏の長男である。資性潤達にして向學心に篤く、木材に就ての卓見は既に定評あるところのもので、今後益々隆盛の一路を進む木材界にあつて、氏が如何に飛躍するか、目下注視的である。

帝國電氣・社長

鈴木 隆晴氏

帝都電氣製作界一方の雄としてわが鈴木隆晴氏は赫々たる聲名を馳せつつある巨豪である。氏は奮闘力行主義の典型的な人格者として業界の畏敬を一身に集めてゐるが、誠に氏の力戦振りは眞摯、正確を以つて遂行されるから、何れのところにおいても堅實なる歩武を辿つて著々業績を示してゐる。氏の關係事業は帝國電氣、東京精工機械、東京精工機向島工場、帝國無線電信電話、大阪精工機向島工場、大東電氣機械製造、石川製作所各取締役會長、關東電氣事務取締役、東光電氣取締役兼調査部長等の多數に亘つてゐるが、また在原洗足郵便局長にも任じてゐる。氏は明治十九年三月山梨縣人鈴木豊次郎氏の二男として出生したが、同四十二年分家して一家を成した。夙に實業界に入り今日の大成長したものであるが、猶ほ氏は西部郵便局長會々長、東京電球工業組合理事、日本電球工業組合常務理事、日本電球協會理事、電氣協會關東支部參與委員同海外輸出貿易促進委員會委員等の公職に擧げられてゐる。

日本建築紙工・社長

鈴木 窓吉氏

氏は日本建築紙工社長として當社を主宰する人。宮城縣在籍、明治二十五年生れで大正七年に慶大法科を卒業、南昌洋行に入り同社奉天支店長、株式會社山一商店支店長等を歴任し、現時日本建築紙工のほかに櫻葉株式會社の取締役も兼ねてゐる。日本建築紙工も創立當時は仲々思ふに任せぬ状態であつたが、氏が社長となつてより業績著しく擧がり、國策的にも極めて重大な役割を持つ會社として面目を一新した。顧みれば氏の今迄の奮闘並々ならず、同社をこゝに至らしめた同氏に最大の讃辭を呈したのである。今も尙社長として自ら産業戦線の陣頭に立ち力戦奮闘采配を揮つてゐる。即ち氏は同社の總指揮官であり總參謀長でもあるわけだ。氏の風貌から受ける感じは重厚にして圓滿無碍を思はせるが、事實は斯様に仲々精神な闘士だ。あの旺盛な活動力と私心なき忠實な努力なくして何うして同社が今日の覇を成し遂げられやう。事業は洵鈴木氏の生命だ。氏の烈々たる闘志ある限り同社の發展は止まないであらう。

明治製革・社長

鈴木 重成氏

明治製革株式會社長鈴木重成氏といへば我が國製革界の權威者だ。原料不足のため現時難路に行き當つてゐる斯界ではあるが、その中にあつて決刀亂麻を斷つが如き活躍振りを、堂々他を壓倒してゐる。氏は明治六年十二月生れ、同三十年に専修大學理財科を卒業實業界に入り、曩に東葛銀行、敷島醸造會社各取締役としてその名を轟はれただけあり、洗練された獨特の人心收攬術を以て只管能率の増進に努めてゐる。氏は今や戦時經濟下の氣運に際して才幹を遺憾なく發揮し、同社の經營に全力をもつて乗り出した。而してその經營振りは極めて組織的且つ科學的で少しも無駄のない堅實さを示してゐる。性格は極めて明朗、自己一生の望みを只一つ事業にかけて一路邁進、名實ともに斯界の權威者の一人として名聲を轟ち得たのも結局は氏の人物の偉大なるのに歸するものであらう。今後の動向が世人の注視的となつてゐるが、時局柄その人物、識見、貫録に期待するもの頗る大きい。一層自愛せられん事を希ふ。

島津製作所・常務取締役

鈴木 庸輔氏

京都島津製作所が科學日本建設の爲めに夙より貢獻したことは人の知るところ、同所が理化學器械製作を創始し優秀な製品を提供し進んで精機工作に迄發展した今日の情況は定に所以ありとする。鈴木庸輔氏は現在其の常務取締役として經營の要衝にある。氏は岐阜縣鈴木茂門の四男として明治二十年七月出生、大正十一年兄近三郎方より分家獨立した。氏が島津製作所に入つた當時は、同所が創業時代から活動時代に轉換の機で、その手腕の揮ひ甲斐があつた。かくて氏は現場から販賣に至るまで背負つて立ち大車輪に活動し製作界に於ける島津の名を高からしめ實に今日の盛況を誘發した殊勳者である。常務取締役として政所の地歩を占むる事は酬いて厚しとしない。尙ほ氏は日本石英工業會社取締役として重要な地位にあり、京阪神の間に伍して敢て人後に落ちることはない。世紀は當に汎亞細亞の時代を現出せんとして胎動頻なものがある。起ちて愈々健闘を續け、化學日本の爲めに貢獻を望む。

古河電氣工業・常務取締役

鈴木 元氏

氏の事業界進出の根源は古河電氣工業株式會社である。現在同社常務取締役たるほか驥足を驅つて滿洲電線株式會社社長、昭和電線電纜、日本故銅統制各株式會社取締役を兼て業界に大きな存在をなしてゐる。氏は東京府士族鈴木一政氏の長男にして明治十七年十二月に誕生し、大正十四年に家督を相続した。明治三十九年東京高等商業學校卒業後、古河電氣工業に入社したのだが、今や氏の實業界に於ける地歩も確固不拔のものがあり、最早牢固として揺ぐべくもない。氏の牙城はいふまでもなく終始一貫、その拮据經營に畢生の努力を捧げて来た古河電氣工業である。何せ一介の社員から叩きあげて今日の樞機に就いたのであるから、所謂二世實業家の如く父君の遺鉢をそのまゝ受けつぐ人物とは、自ら肌合を異にしてゐる。したがつて氏と雖も花咲かぬ我が身を嘆じたこともありかゝる苦闘期を経て来たればこそ、そこに氏独自の堅實性も生れたと云ひ得べく、更に天稟の智能に磨きがかつてきたと云へるのである。

三菱鑛業・取締役

鈴木春之助氏

三菱傘下の人材中鑛業方面を擔當して仔飼重役の貫祿を示し、卒直至誠の人柄をもつて信任厚きこと隨一と稱せられつゝあるのが、鈴木春之助氏である。氏は東京府人鈴木長吉氏の令弟にあたり明治二十四年一月に誕生した。明治四十五年東京高等商業學校を卒業後三菱合資會社に入り、更に三菱鑛業會社計部長に進み、昭和十三年五月取締役に選ばれたもので現に雄別炭鑛鐵道、三菱石炭油化工業、九州炭鑛汽船其他の重役を兼て盛名を馳せてゐる。氏は人も知る如く資性濃厚のうちにも剛毅なところが有り、生來の負けじ魂と頑張りズムとは幾多の逸話を傳へられて居る傑物である。事業の發展上有益と信じ眞に是なりと認めれば、卒直に所信を披瀝してはゞからぬといふ風で、自負心の強い點に於ては決して人後に落ちないほどのものがある。したがつて議論を闘はずやうなことがあつても、あくまで公正の立場から一切の私心をはさまないから、その後は颯風一過、まことに春風臨瀟然たる好さを示すのである。

福島電燈・専務取締役

鈴木文七氏

農業を營みつゝ斯界の耆宿として一代に鳴る鈴木文七氏は、又幾多會社の重役に推されて財界的にも雷名隠れもなき偉大な存在となつてゐる。氏は福島縣人先代文七氏の長男にして明治二十三年十一月に誕生、大正九年家督相続と共に前名泰七を改め襲名に及んだ。明治四十五年盛岡高等農林學校を卒業後、農業に従事しつゝ更に福島電燈株式會社専務取締役、上ノ山電氣、福島製作所各株式會社取締役、福島電氣鐵道株式會社監査役等を兼て同地方事業界の最高峰を堂々と闊歩しつゝある氏は幼少時代から天稟の英質を露はれ、必ずや他日大成を見るであらうとは夙に郷黨の面々によつて専ら取沙汰せられつゝあつたほどで、深奥を極めた學殖と守つて堅い百戰錬磨の經營的才腕とが渾然一體となつた名采配は同地方に於て、恐らく氏の右に出する者はあるまいと看做されてゐる。氏が今日業界の君子と稱されつゝあるのも、決して多額納稅者なるが故ではなく何れも嚴父の薫陶宜しきを得たものと云ひ得やう。

山吉證券・社長

鈴木由郎氏

わが鈴木由郎氏は帝都の株街兜町の長老格として燦たる光芒を放ちつゝある巨星であるが、また廣く實業にも驥足を伸ばして噴々たる聲名を馳せてゐる。即ち氏は株式界に在つては、東京株式取引所一般短期實物國債取引員にして山吉證券社長たり、また東株代行監査役に任じて、第一流所に列して居り、また實業界に乗り出しては、鈴木同族、東洋計器電機各社長たる他、昭和寫眞工業、中屋三間印刷各取締役任じてゐるが、メーカーは時局産業の寵兒であり、また寫眞工業、印刷業は共に文化産業として近來頗る盛業を謳はれてゐる。氏の卓抜なる識見、優秀なる才腕は既に定評があるところで喋々を要すまい。氏は明治十四年十月静岡縣人鈴木松藏氏の四男として生誕したが、先代銀十郎の養子となり、大正五年先代の後を承けて家督を相続した。夙に實業界に入り、大正六年東株取引員の免許を受け、今日の大成をなしたもので、東京府多額納稅者に列してゐる。猶ほ令兄鈴木正平氏は帝都印刷界の元老として知られてゐる。

山二商事・社長

鈴木義多郎氏

帝都實業界一方の雄として令名噴々たる人物にわが鈴木義多郎氏があら。氏は流石に東大出身の技術家だけに、頭腦明晰なることに於て斷然他の追隨を許さぬものがあり、且つその事業經營の才腕も秀抜であるから、氏が社長たる山二商事は整然として發展向上の一路を辿り、業界羨望の的となつてゐる。また氏は武州瓦斯取締役として瓦斯にも活躍してゐるが、同社の業績も隆々たる盛況裡に在つて關東瓦斯界の花形と謳はれてゐる。氏は明治廿二年十月東京府人鈴木安次郎氏の長男として出生したが、後ち嚴父の後を承けて家督を相続した。大正三年東京帝大工科土木工學科を卒業して實業界に身を投じたが、先には東京電燈技師として、澁谷急行電氣鐵道各取締役として鳴らしてゐたし、また東京電燈技師としても知られてゐた。氏は當年五十二歳、資性濃厚篤實なる人格者として諸人の渴仰を享けてゐるが、少しく引込み思案過ぎるところがある。時局は今や一大轉換期に際してゐる秋、此の如き有爲の士の奮起が切望される。

鈴木工業所主

鈴木防人氏

鐵工業を營みつゝ鈴木工業所を主宰するほか東洋ドラム鑛工業、三鷹精機製造、日本蠶毛工業、東京織維工業株式會社取締役社長として斷然工業界に光芒を放ちつゝある鈴木防人氏である。その面目はいよ／＼出で輝やかしきものがあり、その記録の偉大さは最早完成期に入つたかの觀を示してゐる。したがつて事業經營の手腕力量に於いても確かに世評を裏切らぬものがあり、その驥足たるや正に縱橫、業界にも大きな足跡を残して來てゐることは云ふまでもない。事ほど左様にして氏の事業經營に於ける快腕には既に定評の存するところであるが、それにも増して計畫的才能と組織的手腕の冠絶してゐる點は、世の人物の速く及ぶところでない。現在の鈴木工業所の株式改組にあつても、殆んど氏が獨りでやつて退けたものであり、かゝる手腕の冴えも今までに一再ならずであつた。その熱情、その眞摯、その努力は敢て事業方面のみではなく、現に鈴木育英會理事長として後進の指導にも絶え間なく注がれてゐる。

東京地方鹽業・社長

鈴木茂兵衛氏

氏は事業的才腕の非凡さを讓はるゝのみならず、その人と爲り典雅玲瓏抱擁力の大きい將たるの器を稱讃せられて人望亦厚いものがある。氏は東京府人先代茂兵衛氏の令弟にあたり明治十六年二月に誕生し、同四十四年家督相続と共に前名増四郎を改め襲名に及んだものである。現に絹川屋と稱し肥料食鹽油商を營みつゝ東京地方鹽業株式會社社長、株式會社東運組代表取締役、其他の重役を兼て颯爽として練達の大號令を行ひつゝある。しかもそのことごとくが順當なる効果を收めつゝあるのを見る時、こゝに的確なる氏の手腕を再認識することができるのである。絹川屋にしても今や斯界に於ける屈指のものとして、その人氣は依然として湧くが如く他店をリードしつゝある。東京地方鹽業會社にしても亦夫々好調を傳へられ、その股盛ぶりを裏書しつゝあるほど、流石にその快腕を矚驚するに足るものがある。曩に朝日海陸運輸株式會社長並びに東京商工會議所議員であつたことは人のよく知るところである。

特殊製鋼・常務取締役

鈴木和志理氏

時局産業界の華たる重工業界に於て製鋼事業は最大最重の使命を有してゐるがその中でも特殊製鋼は最も目覺しき躍進を續けてゐて、斯界注目の的となつてゐる。同社は昭和四年の創立であるが、この十年間殊に日支戰の擴大に續いて歐洲再戰展開の今日に至る間に於ける同社の發展飛躍は、實に驚異に値するものがある。同社は蒲田六郷に第一工場を有してゐるが、昨年度は川崎大師河原に最新設備の第二工場を完成し、今や第三工場の建設が計畫されてゐるのである。わが鈴木和志理氏は同社常務取締役として卓越せる名采配を揮つてゐる偉材であるが、帝大出の技術家として川崎工場建設委員長を兼ね、第二工場建設の指揮に當つたのであつた。氏は明治十四年三月東京府人鈴木清一郎氏の二男として生誕したが、大正八年家督を相続した。學歴は明治三十九年東大機械科卒業で大正十二年には製鋼事業視察のため歐米を巡遊して來た。氏は眞摯な基督教徒で、模範的な好紳士として諸人渴仰の的となつてゐる。

三井物産・取締役兼業務部長

住井辰男氏

大三井の中樞機關たる三井物産は合名と合同が企劃されて目下進捗中であるが、同社は井上會長以下當代を背負つて起つお歴々が雲の如く集つてゐる中に、わが住井辰男氏は取締役兼業務部長として一際鮮かな存在を示してゐる偉材である。氏が同社に入つたのは明治三十年であるから、在任實に四十有餘年に亘る同社の生え抜きである。氏は同社香港、大阪各支店勤務から漸次果進して、香港支店長次長、京城支店長を経て、昭和十一年取締役に擧げられて重役陣に列し、今日に及んでゐるが、此間の氏の閱歷は正に物産發展史と伴つて來てゐて、氏の同社に對する功績を遺憾なく物語つてゐる。氏はまた現在、大洋興業社長として名采配を揮つて居り、且つ大正海上火災監査役にも任じて噴々たる聲名がある。氏は明治十四年一月三重縣人住井貞之助氏の二男として出生したが、大正七年分家して一家を立てた。猶ほ先には朝鮮無煙炭、東洋製絲各重役に任じてゐた。時局は愈々多事多端に亘る秋、切に氏の自重を祈る。

日本ビビ電線・社長

住吉勇三郎氏

關連日本の現在は腕の人力の人意志
の人を要求して居る。線の太い吐の
出来た人でなくては大事業の遂行は
覺束ないのみか、指導的立場にも立ち得ない。此の意味に於て氏の如きは時
代の希求する典型的存在であらう。氏は神奈川県住吉七五郎氏の二男として
明治二十三年一月呱呱の聲をあげた。性來の負け厭ひは既に小學校時代から
鋒を現はし、年長者に先んじて宰領振りを發揮し長ずるに及んで不羈獨立の
精神愈々助長せられ、氏が實社會に於ける凡ゆる辛酸を克服し凡ゆる苦難を
突破して突き進んだのも不動の信念と強靱な意志の發現に外ならぬ。斯くて
氏は實業界に漸進的に乗出し、今や日本ビビ電線に社長として財界の一角
に確たる歩を運んでゐる。又日本冶金日本織條各社に常務取締役となり、非
常時日本の第一線に活動し不休の有様、旺盛な精力と烈々たる闘志は更に一
段の飛躍を遂げ氏に有終の結果を齎すであらう事を信する。春秋は氏を待つ
に洋々たる前途を以て迎へて居る。大成を望むや切なるものがある。

ノーブルバンド工業・専務取締役

關 高次郎氏

氏は群馬縣人關源之助氏の二男にし
て明治十八年六月に出生し、昭和五
年令兄準藏氏方より分家した。明治
四十年東京高等商業學校卒業後直ちに横濱正金銀行に入り、南貢、マニラ、
漢口、カルカッタ等各支店の支配人を経て同行検査役となつたが、その天馬
空を征くが如き快腕は曾て離離を來たすとか、經營を誤るとか云ふことが一
度もなかつただけに、今やノーブルバンド工業株式會社専務取締役として
も、或ひは日本醫療器製造、陸奥鑛業各株式會社取締役其他の重役を兼るに
至つても、洗練されたる手腕はいよ／＼事業經營にあぶらが乗つてきたかの
觀を呈してゐる。元々豪腹で人物も大きいし、スケールも宏量に出来てゐる
から、片手間に會社の一つや二つは經營全部を引受けても、悠々之をやつて
のけるぐらゐの自信はたつぷりだし、事實今日の地位こそは三十餘年間に亘
る財界生活に於ける精勵努力の應報であると云へる。氏こそは確かにノーブ
ルバンド工業を背負て起つ實力派の逸物なのである。

關口汽船・代表取締役

關 口 進 次 氏

關口汽船株式會社代表取締役たる關
口進次氏こそ新事業の創始者の型的
人物であり、その滿々たる覇氣と經
綸の妙は正に當るべからざる勢ひを示してゐる。氏は常に時勢を鋭敏に感受
してゐる。そこに氏の新しい經綸が生れそして出發するのである。氏は未だ
若く四十歳の人物としては比類なき傑物で、その前途たるや正に洋々、大い
に刮目して見るべきものがある。目先の利く氏は機會の熟する毎に新しい
分野に向つて鉄を入れた。即ち關口汽船株式會社であり、關口合資會
社代表社員としても亦神戸汽船株式會社監査役としても、何れも征くところ
可ならざるはなき有様である。氏は愛知縣の産、關口高次氏の二男にして明
治二十八年九月に誕生し大正十一年に分家した。大正七年山口高等商業學校
を卒業後實業界に躍り出したものだが、流石に腕のある人物は實行も好く、
まして今日の如き多端を極める時代には氏の如き手腕家を待望する聲も大き
く、凡らく時局下事業界のハリキリ男として打てつけの人である。

藤倉工業・専務取締役

關 口 善 吉 氏

藤倉工業株式會社専務取締役を始め
藤倉電線、藤倉化學工業等々其他の
重役をも兼て文字通電機工業界の權
威として、恥しからぬ貫祿を具へてゐるのが關口善吉氏である。氏の行き方
は發明と事業を並行化し、獨力獨創から編み出した科學的の事業を、今日堂々
たるものにした點に特徴がある。而も事業の着眼點が常に進歩的で而も國策
的であることにも注目されつゝある。もと／＼同氏は科學者でもなければ、
特別の學力を持つた人でもない。即ち書籍も教室もない實際の體験から粒々
辛苦、それをやがて企業に移植して遂に今日の輝やく日を迎へたもので、氏
こそまことに化學工業によつて成功せる事業家であると云へる。氏は栃木縣
人藤倉孫四郎氏の二男にして明治二十年一月に誕生し同四十五年に令兄亭藏
氏方より分家した。工業日本の樞頭は模倣時代を既に去つてゐる。即ち創造
であり發明の力に依つて東亞に君臨しつゝある。氏の携はる事業こそ之を裏
書するに足るものであり、我等の大いに意を強うするところである。

三菱電機・神戸製作所副社長

關 義 長 氏

關氏は今日まで三十年に垂んとする
星霜を電機製作専門で飯を食つて來
た所謂三菱電機株式會社生え抜きの
人物で、夙に三菱電機に關ありと業界にその名を轟はれてゐた。云ふまでも
なく電機製作の進歩發達は軍事上、或ひは産業上に、科學に大きな貢獻をも
たらしその進展は焦眉の急として、各業者共々營々たる不斷の努力を傾注し
つゝある。その電機製作界の王座に大きく光り、謂はゞ業界の荒鷲的存在と
して畏敬さるゝ三菱電機に在つて、技術の優秀と事業經營に對する卓越をも
つて鳴つてゐるのが關氏である。氏は東京府人關義臣氏の令息として明治二
十五年六月に誕生し、大正七年令兄義壽氏方より分家した。大正四年東京帝
大工學部電氣科を卒業後三菱電機に入り、神戸製作所工作課長を経て昭和十
二年同製作所副社長を命ぜられたもので、自ら斯業を志したわけであつて黙々と
その所信に向つて邁進しつゝ、着々と成果を収めながらも誇り顔せぬところ
に氏らしい面目が躍如としてゐる。

王子製紙・千住工場長

關 岡 豐 治 氏

氏は東京府士族關岡尚志氏の三男と
して明治十四年十一月に誕生し同二
十六年に家督を相続した。明治三十
五年東京高等工業學校機械科を卒業と共に富士製紙株式會社に入り新興業界
の最前線にあつて萬丈の氣を吐いた。斯くて大正二年製紙事業觀察のため
歐米各國に出張し、大いに研鑽の度を高めたものであつた。而して歸朝後は
同社技師として各工場に勤務し、大正十一年に遂に千住工場長として時局業
界に巨姿を顯へすに至つたが、何んと云つても卓見あり經驗に富む氏のこ
と、新興會社を引提げて新分野の開拓といふ至難なわざをやつて退ける手腕
にも充分なづけるものがあり、その抱負經綸こそ測り知れざるものがある。
もと／＼幼少の頃より秀才のほまれ高く、業界に入つてからも持ち前の
敏腕は絶えず精進をリードしてゐた。斯くて昭和八年王子製紙株式會社に合
併と共に入社し引續き千住工場長として、精勵格勵し以て業績の發展に努力
しつゝある。蓋し王子製紙の逸材たる所以であらう。

千葉合同銀行・専務取締役

關 澄 龍 尾 氏

今や吾人は曠古未有の時局に際し
あらゆる人生問題の解決に行詰つて
ゐると謂はねばならぬ。政治に經濟
に外交に厚生に極力統制を實行しての難局を突破せねばならぬ。是れ現實五
分々の問題なれば、あくまで現實相對を以て克服せねばならぬことはいふ
までもない。されば各部門の衆智を集め上下一致、粉骨碎身の覺悟を以て之
に當れば、やがては杞憂と化す日も實現されるであらう。「一人一業」の家
憲を奉じ傍目もふらず、専心銀行の業務に従ひ、遂に今日の黄金時代を現出
した人に株式會社千葉合同銀行専務取締役たる關澄龍尾氏がある。氏は東京
府人關澄慶之助氏の四男として明治二十年十二月に誕生した。夙に帝國商業
銀行に入り貸付課長となつたが、後に川崎銀行に入り支店長となり、次いで
總武銀行に轉じて支配人に就任したが、同行の千葉合同銀行に併合改稱と共に
其取締役に選ばれた。斯くて其後の精進に伴つて次第に聲望も加はり、
遂に専務となり、業務及び營業各部長を兼任しつゝ今日に及んでゐる。

中井商店・取締役

關 根 國 之 助 氏

京都に今賣出しの實業家は關根國之
助氏である。株式會社中井商店取締
役兼京都支店長として一方には信望
絶大なるものがあり、しかも氣宇宏大、その生涯は一貫して奮闘努力のそれ
に彩られてゐる。國運の隆昌が一に國民の至誠にかゝはることは云ふまでも
ない。今回の日支事變に於ても日本帝國の使命が、東亞の新秩序建設にある
以上は前途尙遠、國民擧つて協力、須からく一大勇猛心をもつて邁進する
必要がある。その意味に於て氏の如き活動家が鋭後在つて専心奉公の實を
あげつゝあることは、心強いかぎりであり我等の最も欣快となすところであ
らう。氏は茨城縣の産關根加十氏の二男にして明治二十二年六月に誕生、大正
五年父君隱退の後を承けて家督を相続した。資性剛毅果斷、實業界に打つて
出てもあらゆる難關を打開して、先考の餘光と共によく有終の美を收め
てゐる。剛毅の半面に拘すべき情味を有し、廣潤なる度量をもつて人を抱擁
するため、求めずして聲望が加はりつゝある。

東京計器・事務取締役

相馬 閏 二氏

時流に乗って好況を招来し、飛躍ま
た飛躍を重ねつゝ優秀なる製品をも
つて鳴り、遂に磐石の如き基礎を築
きあげたものに東京計器株式会社がある。昨今唱へらるゝところの統制は、
窮極するところ即ち合理的経営の一語に盡きる。故に既に合理的経営をなし
つゝあるものに於ては、統制にも何等痛痒を感じないのである。その適例を
同社に観ることが出来、同時に脚光を浴びて登場すべき人物が、事務取締役
たる相馬閏二氏なのである。氏はあくまで初志貫徹に邁進する強力な意思の
所有者で、今日の大成を顧りみれば克く忍苦の幾春秋を経て来たことがよく
窺はれる。氏は新潟縣の産、相馬一郎氏の三男にして明治十六年七月に誕生
し大正十二年に分家した。東京帝大工学部電氣科を卒業後斯界に入り、今や
東京計器専務たると共に東京航空計器株式会社取締役をも兼て、斯界に於け
る古豪と稱するにふさわしき存在を示しつゝあり、その意義ある奮闘生活は
今日の業界に大きく反映しつゝあることを認めなければならぬ。

安田銀行・副頭取

園 部 潜 氏

一銀行員から出發して今日大安田銀
行の副頭取として才腕を揮ひつゝあ
るといふことは尋常一様のものでは
なく、之を成し遂げたことは氏の綿密なる頭腦を現はし、計畫的才能の閃め
きあることを物語るのである。氏は三重縣人園部吉氏の三男にして明治
十五年十二月に誕生し大正十年に分家した。明治三十七年東京高等商業學校
を卒業後日本銀行に入り、大正五年にはその英才を見込まれて米國に派遣せ
られ、滿三ヶ年に直つゞさば銀行業務を研究視察した。斯くて歸朝後は檢
査役並びに調査役を経て松江支店長に就任したが、大正十二年安田保善社に
轉じて調査部長となり、安田銀行大合同に際しては同行常務監査役を兼任、
更に理財部長兼銀行部長として要務を掌り、大正十五年には遂に安田銀行常
務取締役に擧げられ、更に今回副頭取の権席に上るに至つた。同行が日々盛
況を加へつゝあるのもその裏には氏の如き活潑なる行動が拍車をかけたこと
は勿論で、在社既に三十餘年遂に同行の至寶的存在をなしたものである。

日昭ライト工業・社長

田中久之助氏

田中久之助氏は京都府田中清光氏の
四男として明治十一年七月に出生し
た。大正八年分家して、現に株式會
社田中久之助商店代表取締役たるの外、日昭ライト工業(株)社長、丸正商店
(株)取締役會長、島瀬商店(株)代表取締役、三和興業、菊屋百貨店各(株)
取締役等の諸重役を兼ね、京都市有数の諸會社はみな氏の傘下にあると云つ
てもよいだらう。しかも關係各社の事業は時流に投ぜざるはなしであるか
ら、その盛大さは推して知るべしであり、「田中コンツェルン」と稱しても
あながち過言ではあるまいと思はれる。氏はよくこの數多の事業を堅忍不拔
の意志と獨特の事業的才腕を揮つて完成させたのであつた。時局下に於ける
各産業部門は財界の動きを敏速に感受するもので、その首腦者の良否は事業
に決定的な影響を與へるものだ。この非常時にあつて、氏は組織的な緻密な
頭腦と、不斷の研究を以つて熟慮斷行し、その積極的營業方針は正に快刀亂
麻を斷つる概がある。而して氏の輝ける前途を祝福し深く期待しやう。

金井鑛山・事務取締役

田 中 清 氏

現下産業界の寵兒、金井鑛山の名は
その事務取締役である田中清氏の敏
腕と共に、世に高く買はれてゐる。
氏は明治十七年七月、香川縣の人田中千代次郎氏の長男として出生、大正十
三年に至り家督を相続するや、生來の英鋒はめき／＼と現れ、年と共に加は
るその進出振りの目覺しさは驚くべきものがある。現に上記の金井鑛山事務
取締役のほか、日本製粉、第二日東製粉、新興化學工業、東村島炭礦等の監
査役として重きをなしてゐる。だが何れの店も近時一段と好況に恵まれ、就
中金井鑛山の如きその最たるものであらうか、五社を隻肩にして氏の今後の
飛躍こそ充分期待されるのであらう。實務は極めて熱心、且つ犀利なる
頭腦は經驗を経るに従つて益々その力量を發揮し、未だ壯年の逞しさをもつ
て活躍し一流財人として決してヒケは取らない。氏の風貌には大器的な深さ
と厚みがあり、業界の先頭に立つて非常時財界を押し進めるに全く相應はし
き逸物であらう。

理研鍛造・社長

染谷關太郎氏

氏は東京府人染谷直克氏の長男とし
て明治十六年十一月に誕生し、同三
十年に家督を相続した。現に理研鍛
造並びに染谷商事各株式會社々長のほか、井口鐵工所取締役をも兼ね東京市
會議員としても名を馳せてゐる。氏が主宰しつゝある理研鍛造株式會社は
昭和十三年資本金五百萬圓を以て創設されたもので、日本三大鍛造工場の一
に數へられ創立以來引續き餘裕ある一割配當を行つてゐる。鍛工品は航空機
自動車、兵器、内燃機關其他諸機械部分品として極めて將來性に富み、その
製品は特に優秀なるため特殊方面よりの需要多く、在來の蒲田工場のみでは
到底應じ得ず、二年來着々擴張計畫を進めて來た。即ち既に前橋工場の第一
期擴充計畫は完了し全操業を行つてゐる。更に第二期として鍛造第二工場、
燒入工場、仕上工場、熱處理工場等を増設、大型鍛造機械及び特殊火造機械
をも新設し尙第三期計畫として自動車部分品工場建設に進むべく、その前途
の益々多望なるを想はせるものがあり業界刮目的になつてゐる。

久保田鐵工所・取締役兼尼崎工場長

田 中 勘 七 氏

鐵工所といへば、人々は直ぐに軍需
品と結びつけてその殷盛さを想像す
るに違ひない。田中勘七氏が取締役
であり且尼ヶ崎工場長たる久保田鐵工場もその最も大なる證左たるの存在と
して、然りといふ答を與へるものである。氏は明治二十五年の三月、熊本縣
人田中菊松氏の長男として出生し、早くより、鐵工業が將來國家の産業部門
にあつて重要な責務を負ふべきを豫知し、志を斯界に樹て、明治專門學校
冶金科を卒業するや久保田鐵工所に入り、その卓見をもつて一意同社の事業
に没頭し、今日に見る同社の隆盛に多大なる貢獻をなしたのだ。他の會社の
取締役等と云へば、多く重役室に陣取つて僅々二三時間位在社して、葉巻の
煙を吹きめくら判を捺すのが關の山であるが、氏はいまなほ、朝から晩まで
工場の響音の中に拮据架配を揮つてゐる。人材出でよ、逸材現れよ、と時局
下事業界は聲を枯らして叫んでゐるが、この秋、氏の如き英才が地方業界に
殊に軍需部門にあることは限りなく喜ばしく期待して止まない。

臺灣鑛業・事務取締役

田 中 榮 氏

我が國の南端、臺灣實業界に於ける
驍將として令名ある田中榮氏は、明
治十九年十月、山口縣土族田中榮吉
氏の長男として出生した。明治三十九年に下關商業を卓抜なる成績で卒業
し、同年臺灣銀行に入つたが、大正十二年に至り當時財界に於ける一方の雄
であつた鈴木系の帝國炭業會社に轉任し、同社解散の止むなきに至るまで常
務取締役として重きをなした力闘を續けたのであつた。また氏は曩に雲南商會
海山炭礦等各會社の取締役であり、現時は日本金屬(株)監査役も兼ねてゐ
るが、斯様に氏は常に南方實業界に雄飛して名聲を轟はれてゐるのである。
現に專務の重責にある臺灣鑛業株式會社は時局下の花形會社であり、同社の
前途春秋に富んでゐるは今更多言を要さぬところのものだ。そして特に云ひ
添へたいのは、最近頻りと叫ばれてきた所謂「南進論」なるものは、氏にと
つて既に十數年も前から實行されてゐることであつて、時局下この慧眼の氏
の健在を祈るものは、獨り筆者のみではあるまい。

西鮮中央鐵道・取締役

田 中 三 郎 氏

京城商工會議員として名聲を廣く馳
せてゐる田中三郎氏は、遠く京城の
地にあつて西鮮中央鐵道、朝鮮書籍
印刷、朝鮮火災海上保險各(株)取締役、朝鮮工作、龍山工作、平安鐵道各
(株)監査役、朝鮮取引所(株)監事の諸要職を兼ねて朝鮮實業界に君臨し
てゐる。氏は群馬縣利根川富治郎氏の二男で明治二十二年四月に出生し、先代
田中テサト女史の入夫となつて家督を相続した。大正六年に中央大學法科を
卒業するや東京火災保險に入社、外國部、船舶部、海上部次席等を経て、後
家業たる時計貴金屬、寫眞機、蓄音機、ラヂオ商を繼承し、傍ら前記會社の
諸重役として奮戦を續けた。柔道五段といふ氏の威風は堂々と朝鮮事業界を
聘視し、あたりにななきが如き突進ぶりである。趣味はゴルフと讀書。これ
にても、氏が日本精神に燃えた近代人であるか窺ひ知られるであらう。と
まれ、時局下の朝鮮實業界に於けるダーク、ホースである田中氏の、今後の
飛躍こそ期して俟つべきであらう。健在、健闘のほどを祈る。

こじま屋電機製作所主

田中三郎氏

現京都市副議長として市政に参畫し、堂々自己の所信を披瀝して京都市民のため、ひいては日本全國民のために献身的働きをなしてゐる田中三郎氏は、また京都商工會議所常議員にも擧げられてゐる徳望家である。氏は明治十九年六月に京都府田中良之助氏の三男として生れたが、同四十二年にやす夫人の入夫となつて家督を相続し、田中家の繁榮に盡してきた。氏は夙に東京高商を卒業してより業界に身を投じ、現時はこじま屋電機製作所主として家業の指導に當り今日に見る大成をいたしたのである。顧みれば現在まで、あらゆる犠牲を拂ひ、仁侠を盡して、而して時の運を獲た氏こそ眞の努力家である。苦勞に苦勞を重ねてきた人だけあつて情誼に厚く、操守堅固な事業家で、霸氣あり卓見あつて、ひたすら産業報國に邁進する勇姿には颯爽たるものがある。闊志滿々、精氣縱横、時局精神も全く健全で、これこそ國民の信望を集める所以のものだらう。産業日本の代表的人物として今後益々大きく活躍するに違ひない。

日本金網・事務取締役

田中治之助氏

田中治之助氏の今日の存在は、日本が生んだ實業家として随かに異彩の存在なりといはねばならぬ。氏は東京の人先代武兵衛氏の五男にして明治二十一年七月に生れたが、大正十四年に兄武兵衛氏の養子となつたのである。學校は東京帝大法科、大正二年に同校を卒業するや直ちに田中銀行に入つて各支店に勤務、將來の名バンカーとして囑望されてゐたが、同六年に日本金網株式會社が設立せられるやその懇望によつて入社、事務取締役に就任した。爾來氏は拮据同社經營の大任に當りよく奮闘して拮据なき基礎を建設し、實に大きな役割を果してきたのである。また現時は日高電燈、幌滿川水力電氣各(株) 監査役、田中土地建物(資) 出資社員として各關係會社に重きをなしてゐるが、その經營手腕の素晴しさは他に比類を見ない處のものだ。これも氏が全力を傾けて獲得した金融經營の才が基礎となつて現れたものであらうか。戦時經濟下の事業經營には尙一層、氏の手腕、力量に俟つところが多いことであらう。

日産化學工業・常務取締役

田中壽一氏

近來隆々として進歩發展の道程を辿りつゝある吾が化學工業は、重大時局の招來と共に益々その使命は重くなつてきた。化學工業の發達は單に個人の福利増進のみに止まらず、軍事的國策的にも、斯業が影響するところ全く大である云ふまでもない事だ。現に一國の文化はその國の化學工業の水準によつて決する、とまで云はれてゐるが正に然り、本邦に於ける斯業も事變を契機として全面的に猛活動を開始し先進諸國に勝るとも劣らぬ程に躍進した。田中壽一氏が指揮する日産化學工業も目覺しき躍進を遂げ今やその名聲は廣く業界に轟いてゐる。常務田中氏はこの他東洋窒素工業、臺灣工業、日本フェルト、中越電氣工業、昌徳鑛業各取締役、新興炭礦、丸島土地、上毛電力、東硫化學工業、日本硫曹各監査役の諸重職にあり、更に大日本人造肥料の取締役兼工務部長も兼ねてゐるといふ工業界の巨星である。明治二十七年生れで東京高商の出身、氏が工業界の覇權を握つて吾が財界に突撃する日も近いことであらう。

大同海運・社長

田中正之輔氏

大同海運株式會社々長田中正之輔氏こそ只管海運界發展のために献身的努力を捧げて來た人である。同社は昭和五年十二月の創立に係り現在資本金百五十萬圓(金額拂込済)本社を神戸市神戸區浪花町に置いてゐる。その業務は云ふまでもなく海運業を目的としてゐるが、營業方針が眞に合理的に進められてゐるので、あたかも軌道を進むやうな確かさ、順調さを示しつゝある。即ち常備船四十萬噸を運航する有力なオペレーターで、自社船は僅かに三隻、備船主義を遵奉するのが特色で、一昨年來資本金とほぼ同額の百二十三十萬圓の利益を擧げてゐる。これといふのも社長たる氏が些末をも忽せに附せず、周密なる検討を経て後に計畫し且つ動いてゐればこそである。氏は兵庫縣人田中幸次郎氏の長男として明治二十二年十二月に誕生した。夙に斯業を志し、山下汽船、昭和興業各株式會社の重役を経て今や大同海運の社長並びに昭和タンカー、高千穂商船各株式會社取締役を兼て聲望噴々たるものがある。

田中商店・社長

田中治郎左衛門氏

生粹の江戸つ子で、日本橋の織物大問屋「田端屋」の名を知らぬ者は恐らくあるまい。同店はそれほど大きく、それほど名聲が高いのである。現當主の田中治郎左衛門氏は稀代の英傑として知られてゐる。當家の歴史を尋ねると、日本橋は大傳馬町に木棉問屋を営んで田端屋と稱してゐたのであつた。寛永年間以來の老舗で舊藩主藤堂家の御金御用を勤め、長老鑑に譲られし舊家である。いまの治郎左衛門氏は先代治郎左衛門氏の二男で明治二十六年十一月生れ、昭和十一年に先代退隱の後を受けて家督を相続し前名齋を改めて襲名したのである。氏は東京帝大法學部英法科を大正八年に卒業するや祖業を繼承して大いに揮ひ、現時は株式會社田中商店、田端屋商店と稱して兩社の業務督勵に専心してゐるが、昭和三年には歐米各國を巡遊視察して歸朝、今や斯業に新分野を開拓して飛躍せんとしてゐる。尙、嚴父のよき訓陶と、賢母のよき教訓と、そして夫人のよき内助とによつて益々大きく伸びるであらう事は疑なしである。

大正製藥所・取締役

田中繁次郎氏

本邦の製藥界は醫學藥學の進歩と共に著しい發展を遂げた。田中繁次郎氏が取締役に任じられた大正製藥も、三共、玉置等の向ふを張つて堂々製藥界に萬丈の氣焔を吐いてゐる。大正製藥の製造に係る藥品は多々あるが、就中代表的存在であり萬人周知のものには「ネオネオギー」がある。しかし同社は吾國の人口増加と正比例して隆盛を辿り斯界の覇者を目指して益々躍進しつゝあるのだ。こゝにあつて田中氏の使命は愈々重い。氏は富山縣人石原金次郎の二男で明治十五年二月生れ明治三十七八年の戦役に出征して大なる功を立て勳八等を購つたが、除隊後は滿洲に留まつて貿易並に建築請負業に従事、大正十二年に歸朝した。現時は大正製藥の他大日本化學工業(株) 取締役、上野汽船(資) 出資社員も兼ねて意氣軒昂、また曩には東亞商事、長春銀行を始め數多優秀會社の重役も兼務してゐる。だが近來氏が主力を注ぐは何と云つても大正製藥であらう同社が今日降々と躍進出来るは偏に氏の抱まざる努力奮闘の賜であらう。

平塚江陽銀行・事務取締役

田中庄七氏

平塚江陽銀行事務取締役其他の重役を兼て同地きつての名望家と謳はれてゐる田中庄七氏は、神奈川縣人先代庄七氏の長男として明治二十二年四月に誕生、大正七年家督相続と共に前名莊三を改め襲名に及んだものである。氏は趣味として論曲を樂しみ、しかも暇あれば讀書をなし常に新智識の吸収に努めてゐる。元來が頭腦明晰なるに加へてかゝる研鑽の數々は、精勵格勤奮むことを知らざる熱意と共に、次第に財界へと擡頭するに及んだもので、今や同地財界の重大推進力となつてその將來を大いに刮目されてゐる。上古以來謂ゆる「ことあげせぬ」といふことが、我が國柄の一特色とされてゐる。これは何につけ物事の本筋をわきまへて、理窟や虚飾の末に拘はらないといふ意味で、國民性としてもすこぶる力強いことである。氏が公私共に高潔に終始し聲望頓に加はると雖もすこしも之を誇らず、あくまで理智のひらめきに追隨するあたり、その信念は人生の理法に對する深い達觀がなくは生れてくるものではない。

田中汽船鑛業・社長

田中省吾氏

嘗て山口縣濃郡々長を勤め、亦警視廳警視として警防の第一線に走つてゐた氏も、今や功なり名顯はれて資力も増進、現に田中汽船鑛業株式會社並びに日華製機株式會社々長、朝日火災海上保險株式會社事務取締役其他の重役を兼て、財界への勢力も次第に根強くなつて來た。時局は本邦財界にも相當の變革をもたらした。したがつて時局産業株として華々しく登場してくるものが多數に上つてゐる。しかしその多數の中にもおのづから玉石の區別はあり、眞に有望株であるか否やは充分に検討を必要とするのである。しかし此場合に於ても氏の田中汽船鑛業のそれは、最も堅實にして最も將來性に富むものと云ふも決して過言ではないのである。氏は鹿兒島縣人廣瀬嘉吉氏の二男で明治十五年六月に誕生、其後先代省三氏の養子となり大正十四年家督相続と共に前名嘉八を改めて襲名に及んだ。明治四十二年東京帝大法學部政治科を卒業後、一時官界に在つたが、その後實業界に轉じて今日の榮ある地位を築いたものである。

田中商店・専務取締役

田中新七氏

蠶糸貿易商の田中新七氏と云へば横濱に於ける屈指の實業家としてよく知られてゐる。現に合名會社田中商店代表社員であり、株式會社田中商店専務取締役たるほか數會社の重役をも兼て、事業と云ひ資産といひよく傑出したところを見せてゐる。かゝる田中商店の發展も之をつぶさに検討してみれば、先代の手腕もさることながらその裏面にあつて之を扶けた人々の力を見逃すわけにはいかない。總て事の成就するのは決して一人の力ではない。茲に才氣煥發なる氏の英姿が、クローズアップされて來るのである。氏は京都府人田中兵七氏の長男にして同新一郎氏の令兄にあたり、明治九年八月に誕生、其後先代新七氏の養子となつたもので、大正十一年家督相続と共に前名國太郎を改めて襲名を及んだものである。今や京濱實業界にその聲望隆々たるものがあるが、是氏が長年の拮据經營に次第に箔がつき、昔が生え貫禄が増したにも依るが、一面には氏の人格が敬虔其物であるだけに、絶對の信を掛けられた事にも起因しやう。

山東鑛業・取締役會長

田中清次郎氏

多年三井の傘下に在り、海外支店の第一線に立つて勇躍した田中清次郎氏が、秋來たつて今や山東鑛業株式會社取締役會長として、躍進日本の面目を一身に背負ふが如き意氣込みのものと、あつばれた事業經營振りを示しつゝあることは、正に一世の壯觀と云はざるを得ない。氏は山口縣土族田中一介氏の長男にして明治五年五月に誕生した。明治二十八年東京帝大法學部英法科を卒業後三井物産に入り本店勤務を振り出しに香港、ロンドン、上海等各支店請を歴任、次いで明治三十九年香港支店長となつたが、同年十一月には滿鐵理事に轉出した。而して同四十二年には運輸課長となつたが、同四十三年三月には之を辭し、昭和十四年には再び返り咲いて滿鐵顧問となり、同年四月には調査部長事務取扱を囑託された。斯くて其後の進展に伴ない遂に現今の如く山東鑛業會長及び小野田セメント製造株式會社取締役として、時局事業界に確固不拔の勢力を扶植するに至つたものである。旅行讀書等を趣味とし元氣發洩たるものがある。

四國水力電氣・社長

田中隆氏

氏は香川縣の産、田中傳治氏の長男にして明治二十一年一月に誕生し、大正十年九月に家督を相續した。明治三十七年香川縣立丸龜中學校を卒業後第一高等學校に學び、之を了るや官界を志して香川縣知事官房主事となつたが、後に之を辭して實業界に轉じ四國水産電氣株式會社に入つた。流石に將來名を成すだけあつて入社當時より意氣込みも違ひ、諸輩を凌駕する清新瀟灑さを持つてゐた。斯くて同社營業課長、次いで支配人と目覺しき進出を遂げ、やがて常務取締役就任して經營の樞機に執掌するところとなつたが、更に昭和八年勇躍して代表取締役専務の椅子に就き傍ら諸會社の重役を兼て、同地に於ける明星的存在をなしてゐる。同社は明治三十一年九月の創立に係り現在資本金二千二百九十九萬五千圓(内込額一千五百八十四萬五千圓)本社を香川縣仲多度津町に置いてゐる。業態から云つても電燈、電力、電鐵、瓦斯等の諸部門は引續き順調を示し、好配も依然として据置といふ有望ぶりである。

大阪鐵板製造・東京工場支配人

田中辰三氏

腕のある人物が賣行きが好いのも、腕のある人物が賣行きが好いのも、今日の多端を極める時代の要求にかならない。したがつて氏の如き手腕家を寸時も遊ばせて置かないのも、時局事業界の躍進ぶりをよく物語てゐる。氏は人と爲り濃厚誠實、しかも旺盛なる研究心を有し、喜んで人の話を傾聴する。それがため斯業の知識何れもよく氏の頭腦に吸収され、啓發されることも尠くない。これといふのも「瓜の蔓になすびはならぬ」の譬へをそのまゝ、父君の英質を受けついでたことにもよる。抑々氏の父君田中常徳氏は舊山城國淀藩の臣にして後に麒麟麥酒會社其他の重役を兼て一世に鳴つた英邁の資で、氏はその長男として明治二十五年三月に誕生し大正十二年に家督を相續した。大正五年に慶大理財科を卒業し直ちに貿易商岩井商店に入り次第に中樞社員として活躍するに至つたが、今やその傍系會社たる大阪鐵板製造株式會社東京工場支配人たるのほか、東洋金屬工業株式會社専務取締役並に日本亞鉛鐵板工業組合理事長等の任にあつてよく期待に應へつゝある。

帝國木材工業・専務取締役

田中誠吉氏

如何に大層高樓と雖も土臺が堅實でなければその偉容を誇ることはできぬ。氏が今日帝國木材工業株式會社専務取締役として、磐石の如き地盤を有するに至つたのも、國家社會を思ふ烈々たる氣魄をもつて後進を指導し、殆んど獨力をもつて勇往邁進したればこそで、人生の行路風雲渦巻き荆棘途を塞ぐの多き時、之を乗り切つた英邁剛毅こそ眞に懦夫をして起たしむるの概がある。氏は福岡縣の産、田中秀實氏の長男として明治十六年十月に誕生し大正十一年令兄收吉氏より分家した夙に久原鑛業會社に入り日立鑛山林業係長、本社調度課副長、青木林業出張所々長等に歴任し現職に就任したもので、傍ら日本産業護謄株式會社常務取締役をも兼て今やその聲望隆々たるものがある。往くとして可ならざるなき英才もそれに磨きをかけなければ普通の才子に終るは必定である。氏が今日の榮達も英才に加ふるに剛毅、精進、而もあらゆる誘惑を排して人生意義に依つて動いたなればこそで、その意氣たるや壯と云はなければならぬ。

田中車輛・代表社員

田中太介氏

田中車輛合名會社代表社員の田中太介氏と云へば、大阪府多額納稅者としてその名は夙に近隣に響いてゐる。したがつて同社經營上の實權者として業界を縦横に切つて廻すのみか、斯界に於ける一方の旗頭として稱を鳴らしつゝあるといふことは自他共に之をよく認めるところである。生若し書生が技手の技師のと威張つたところで斯業の研鑽に精根を傾けた氏に對しては齒の立つものではなく、それに長年の離伏に磨きがかかり胸中に滿々たる霸氣が藏されてゐるに於ては、氏に對し一步を譲らざるを得ないのも寧ろ當然のことと云ひ得やう。研鑽の功に依り氏が斯界のオーソリチーと仰がれつゝあるのも、業界の長老として多大の尊敬を集めつゝあるのも、周密なる計畫を樹てると共に大膽に之を執行し、しかも總ては悉く射落したのにはかならない。氏は兵庫縣人先代太介氏の二男にして明治九年八月に誕生、同三十七年家督相続と共に襲名に及んだもので、車輛製造業を営みつゝ今日の偉容を築いたものである。

東洋鐵鋼・社長

田邊幸次郎氏

東洋鐵鋼株式會社々長田邊幸次郎氏は關西財界の長老であるが、いつに變らぬ元氣をもつて専心實業報國に精進しつゝあり、その事業的良心と圓熟せる人格とは財界の指標として諸人の敬仰するところとなつてゐる。氏は富山縣人田邊清三郎氏の二男として明治十三年三月に誕生、同三十八年に令兄健太郎氏より分家した。早大政治經濟科の出身であるが、學志を出てから事業界に飛び込み從横に活躍、次第にその才腕を買はれて擡頭し、遂に今日の地位を築き上げるに至つたもので、その敏腕は剃刀の異名を得るほどの刃を見せたものである。東洋鐵鋼は現在資本金二百二十五萬圓(拂込額百二十五萬圓)で、創立は大正九年五月、製品は特殊合金の壓搾加工及び棒類、各種高壓鋼、兵器部分品、軍配印鐵、及び捺染用銅ローラー等である。このため業績は頗る良好で餘裕含みの高配を示してゐる。而も佳友金屬を大株主に持ち、明田重義氏を重役陣に迎へてゐるから、今後の發展のため絶大の強味となつてゐる。

大北運輸・社長

田邊貞造氏

大北運輸株式會社々長たる田邊貞造氏は、北海道運輸界に於ける長老として、矍鑠たる巨姿を示しながら活動をつけてゐる。氏の運輸界に於ける生活は幾十星霜に亘つてゐるだけにその地歩も大きく、新業經營の手腕には他の追隨を許さぬものがある。曩に北日本汽船株式會社専務取締役、日本海汽船、北陸汽船各株式會社取締役等を兼て動かし難き世評をつくりあげた如く、氏こそは時局下業界のホープ的存在に等しいのである。氏は三重縣の産、小西幸助氏の四男として明治十七年二月に誕生、同四十三年に田邊貞吉氏の養子となつて大正十五年に分家したのである。明治三十九年東京高等商業學校を卒業後斯界の人となり、現に大北運輸株式會社々長、北日本汽船株式會社監查役等の任にあり、小樽を中心に北日本一圓に支店を布き遺憾なき業績を誇りつゝある。今や業界のバイロット、北日本の運輸王として威名まことに熾爽たるものがあるが、蓋し牙城大北運輸に據つて時局業界を牛耳る氏の抱負こそ畏敬に値する。

有明商事・社長

田畑守吉氏

熊本縣出身にして斷然實業界に雄飛し、その活動振りと共に令名が高いのは何と云つても田畑守吉氏であらふ。氏は田畑壽七氏の二男にして明治二十一年出生、同四十年分家し熊本中學を卒へて青雲の志を招いて大牟田市に出で、亡兄理吉氏の經營する所の運送人夫請負業有明組に入り、兄弟共に相携へ相扶つて、協力奮心し、その令兄履するや、全責任を双肩に負ふて奮勵努力し、遂に今日の如き隆盛を見るに至つた。氏は、性來、剛膽不屈であつて、その信望厚く、輩下の面倒をもよく見た。氏がその不撓の精神を以つて常に邁進することは、熊本市民の最も知る所で、氏が亦大牟田市會議員の一翼に連つてゐることは怪しむに足らぬであらう。氏が關係する事業を挙げると、先づ大牟田商工會議所（會頭）有明商事（社長）仁德洋行、有明工業、荒尾魚市場（各取締役）北支煙草、大牟田製米、滿洲煙草、高森鑛山、朝日木材防衛會社（各監査役）松尾百貨店、肥州窯業、大牟田運送（相談役）の他海運並石油業等である。

田林商店・専務取締役

田林喜三郎氏

若くして實業界に立たんとする士は多い、しかし、その多き多情多感の士は、殆ど失敗し没落の憂目に逢ふものである。即ち世に實業家として出世せんとすることは米一依の中の異色ある一粒を選るよりもつと至難であると云ふことになるのだ。そただけ實業界は競争が激烈で、努力と根氣を要する人生の大舞臺だ。この大舞臺にあつて夙より實業方面に大望を抱いてデビューし、天晴れ男の名を擧げたのに田林喜三郎氏が居る。氏は和歌山縣出身にして明治十一年呱呱の聲を上げ、獨學奮勵、苦難を克服して邁進するところがあつた爾來實力とその卓抜なる才腕は非凡なる才物として敬意せられ、招せられて大北産業會社に入るや忽ち業績を擧げ、今日の如き社運の發展の一端の契機ともなつた程である。而して遂に氏は同社の社長に就き、専ら業務に精勵してゐる。氏の益々健闘されんことを望むや切である。

日本精米製粉・社長

田村享氏

海外の實業界に精通し、實際的に亦手腕ある才人を現代に求むるならば筆者は先づ、田村享氏を擧げるに當りかねない。氏は大阪の産、明治三十四年出生の青年實業家として、既に大平火災海上保險株式會社の取締役の重席にあり、社内の人氣を一身に宛めて業務向上に粉砕身してゐる實業界稀代の偉材である。大正十二年神戸商大を卒業し、田村商會を築いて貿易商を営み、傍ら日本精米製粉、日加信託會社の社長となつて多忙の日を送つてゐる。因みに氏の先代新吉氏は、夙に加奈陀晚香坡港市に於て日加貿易業を開始し、神戸に本店を東京、大阪、横濱及晚香坡に支店を設立し歐米及支那貿易に従事し、兵庫縣切つての多額納税者となり、神戸實業界に隠然たる勢力を有するに至り、同市商工會議所會頭、衆議院議員等に擧げられ、大正八年ワシントンに於ける國際労働會議に資本家代表顧問として出席し、同十五年ロンドンで萬國議院商會會議に参列した程の國家的重要な人物であつた。この父を得て氏は宜なる哉である。

田村工業・社長

田村秀太郎氏

氏は廣島縣士族、田村久次郎の二男として明治十二年十二月に出生されたとである。そして大正七年に分家して現在左記の諸會社の社長或は重役として益々圓滑なる手腕と經驗に物云はせて八面六臂に活躍されてゐるのである。即ち、田村工業株式會社社長、三篠商事、日本石粉、旭土地建物、協和證券、廣島瓦斯電軌株式會社取締役等勢の重要ポストに就き、卓越せる手腕と明敏な頭腦、更に臨機應變の決斷力とを適宜に抱藏せる氏こそ、立志傳中の人として擧げえらる可きである。財界殊に實業界に乗り出さう位の人は確に努力家でもあり、忍耐強い人でもある。家族も子澤山で仲々の子福者で、皆共に氏の後繼者として充分の逸材を持たれてゐる。趣味としては圍碁位のものであるが、之も仲々して素人の域を脱してゐる。實業界の第一線に立つて活躍してゐる人々が兎角此の處物故される方が多いのであるが、氏に於ては國家聖戰と偉業建設の秋に當り愈々其の手腕と力量を發揮して中國の地盤に飛躍される事を望む。

東殖鐵業・社長

田淵勳氏

氏は廣島縣田淵左衛門氏の四男にして明治二十一年出生、同四十四年長崎高商を卒業するや直ちに東洋拓殖會社に入つて孜孜格勵し同社書記同參事、大連、京城各支店金融係長、京城支店副支配人、大連支店長を経て本店金融部付係主任、同貸付係長を關し朝鮮業務部金融主任、同金融部長等に歴任して事業家に對する好個の金融機關の重要ポストにあつてよく金融界の圓滑を計つた。尙監査課長、理事、朝鮮駐在理事等に就任を見たが、昭和十年勇退して東殖鐵業會社の社長となり又、朝鮮無煙炭株式會社の取締役、朝鮮米穀倉庫、朝鮮送電の各事業界に脚足を伸ばして各々その重役の椅子を占めて、八面六臂の活躍をつとめてゐる。氏既に六十代に垂んとしてゐるが、その元氣瀟灑たることは定に驚異に値する位である。この戦時下氏の實業界に於ける存在は、將にピカ一でありその前進、尙、多くの期待を持つものは敢て筆者のみではあるまい。因みに氏は正八位、陸軍主計少尉であることを附記して置く。

千代田信託・常務取締役

田村藤四郎氏

福島縣の生んだ異彩ある實業家として田村藤四郎氏を筆頭に擧げる事が出来る。氏は士族坂藤太郎氏の弟、同八郎氏の令兄にして明治十二年出生、先代猪鬼の養子となり同三十八年家督を繼いだ。同三十七年東京帝大法科政治學科を卒業するや直ちに三菱會社に入りその手腕力備を認められ、招せられて筑波高速電線、大成化學工業の各監査役となり、亦その業務發展に盡瘁し、その業績甚だ見るべきもの多く氏の存在は益々重視せられる所となつた。尙、氏はこの他に、千代田信託會社東洋製糖會社に籍を置いてゐる。前者は常務取締役で後者は専務取締役の要職である。曩に、氏は臺灣鐵工所取締役、大日本製糖會社の監査役であつたが勇退して前記諸會社の重役として縱橫無盡の手腕を揮つてゐる。性來氏は温厚篤實の人であつて、人に接するに和氣に満ち、一舉にして信望を得る程の人徳があることはこゝで贅言を要するまでもない。氏の趣味は盆栽、詠曲にして古典的奥床しさのあることは性格の歸する所であらふ。

日曹鐵業・惠須取鐵業所長

田副正之氏

田副正之氏は日曹鐵業（株）惠須取鐵業所長として遠き樺太の地に、萬丈の氣を吐く勇將である。氏は熊本縣の人田副壽三郎氏の二男として明治二十六年に出生し、大正七年に熊本高工機械科を卒業するや直ちに三井鑛山に入社、田川鑛業所工作課勤務として活躍、後東邦炭礦會社彌生鑛業所、昭和鑛業會社、親幌内鑛業所、茅沼炭礦會社茅沼鑛業所各機械主任を経て昭和十二年四月に日曹鐵業に轉じ、同十四年四月に同社惠須取鐵業所所長となつた斯界の權威者である。大正七年より今日に至るまでの二十二年間の長き日、生粹のエンヂニアとして只管技術面の指導に當り、研究に研究を積んで今や逸材多しと云はれる日曹内に於ても屈指の優秀技術者の榮を擔つてゐる。この榮位もみな偏に氏の豊富なる經驗と撓まざる研究心によつて築き上げられた努力の結晶であらう。私利私慾なく公共のためには献身的努力を勵んで惜しまぬ氣風のほどは、工場内全體を向上せしめて入望極めて篤い。今後尙一層の健闘を祈る次第である。

東北振興アルミニウム・常務取締役

多田耕象氏

氏は高知縣士族多田牧の二男として明治十四年三月に出生し、同二十四年家督を相續された。同三十七年即ち日露戦役の最中に京都帝大工科大学電氣科を卒業されたのである。技術者としての天稟を有すると共に又一方に於て經營的な手腕を有して居る。此の事は氏が曩に飯山電氣鐵道監査役、東京電燈會社理事、發電計畫課長等の履を歴有してをるを見てもうなづかれる。そして現在は東北振興アルミニウム株式會社常務取締役、日滿アルミニウム株式會社取締役を兼ねて居られる。技術者としての緻密な頭腦と一面大なる包容性と鋭敏な洞察力をもてる經營家として、企業家として電氣關係方面、更に化學方面に貢献せられて居る。生産擴充の重要性が一段と重要視され緊急な要務とされてゐる秋に、氏の如く技術家と經營家との兩性格を十二分に發揮して居られる事は、我が國化學界に取りてもまことに力強い限りである。

大阪製鋼・代表取締役

高石義雄氏

「完全なる平和は完全なる國防によつてなされる」とは有名な軍事専門家の言葉である。まことに變轉極まりなき現代の世相を觀る時至言であると思はざるを得ない。この秋鐵工業の位置は國家的に見て最高位にあると云ふべきであらうか。斯界の一翼を成すものに大阪製鋼(株)がある。その代表取締役として當社を設立し今日の股盛に導いた大功勞者高石義雄氏は、大阪府高石半四郎氏の長男で明治二十九年二月生れ、鳳鳴義塾を卒業し楠製作所に入つたが、今後の世界を動かす力は鐵工業であると斯業に着目し、大正十一年に創業製鋼界にデビューした。果せるかな氏の豫測は實現、軍需景氣の波に乗つて昭和十一年業務擴張を行ひ株式會社に改組躍進したのである。尙現時平尾鐵工所、坂本商事各(株)取締役も兼ねて隆々たるものだが、これもみな氏の「鐵」の意志によつて幾多の難關を突破今日の榮譽を獲ち得たものであらう。現時總ゆる部門に逸材を求むる時、この鐵の人高石氏の存在は正に業界のダークホースであらう。

鐘淵實業・取締役

高木隆吉氏

鐘淵實業取締役たる氏は、同社の他鐘淵紡績(株)參與經理部長、尼崎製鐵、日本合成化學工業各(株)監査役として業界に邁進する氏は、明治十九年に先代久兵衛氏の長男として生れた。當家は名古屋築城以來の舊家で廻米問屋業を營み、苗字帯刀免許の家柄である。氏は早大商科を卒業後米國費府ペンシルヴァニア大學に於て工場經營學を専攻し、マスター・オブ・アーツとなり歐洲諸國を視察して歸朝三井合名に入社した。大正六年に三井銀行に轉じ、翌年外務省より巴里講和會議經濟部會の事務囑託を命ぜられ佛國に出張したが、その功により勳六等瑞寶章を賜つたのである。歸朝後は三井銀行にあつて紐育支店長、本部經理課長等々の重職を歴任大いに貢獻したが、昭和十三年十一月、鐘淵實業創立に際して其の取締役に就任の爲同行を退職したのである。才あり腕あり、而して洗練された社交術がある。我が實業界の大なる推進力として絶対に信頼の出来る偉材は正に氏であると云つても過言ではあるまい。

王子製紙・社長

高島菊次郎氏

高島菊次郎氏——云ふまでもなく紙業界の覇者王子製紙の社長だ。王子製紙の覇業は今更云々すべき餘地もなく、氏と共にその名は斯界の王者として播るべき存在である。氏は明治八年生れ、東京高商の出身、その信望極めて厚い温篤の士、地方産業の開發に盡した功績も尠くない。現時氏の關係會社は王子製紙を筆頭に東北振興バルブ、山陽バルブ工業、日本人絹バルブ、東洋製紙、日本加工製紙、日露木材、八代製紙、王子製林、樺太酒精工業、共同洋紙、王子證券、北鮮製紙化學工業、日滿バルブ製造、共榮起業、北海水力電氣等々、社長として總帥の任にある會社だけでも十幾つ、その他重責にある代表的關社を數へると五十に近いと云ふ、文字通り重役王である。だが氏は益々眞剣に産業の振興に努力、國策の最前線に雄飛してゐる。社内整備に、待遇改善に、業績向上に内容充實に、氏が業界に垂れた範は實に大きく、業界に戰慄を感ぜしむる態の躍進振りにはたゞ刮目の他はない。洵に典型的驍將である。

發動機製造・社長

高洲清二氏

工學博士高洲清二氏は官界出の英才正四位勳三等といふ肩書の持ち主、氏は山口縣土族高洲正輔氏の長男にして明治六年六月出生、同二十四年に家督を相続、同三十年に東京帝大工科機械工學科を抜群の成績で卒業、日本鐵道に入社、鐵道作業局、帝國鐵道廳技師、京都鐵道管理局工作課長等を経て大正七年に工作局心得に進み、偉大なる足跡を残したが、後官を退き實業界に身を投じて一躍名聲を博し、現時發動機製造株式會社社長、日本エヤブレイキ株式會社相談役と業界に異彩を放つてゐる。明敏なる氏は自ら事業の精髓とも云ふべきものを體得、大膽卒直に事業の核心を掴んで進んで行く。人生自ら道あり、事業自ら核心ありこの道から逃れない限り氏の如く積極進取にこそ赴くべきであらう。今や當社は旭日昇天の勢ひ、技術家としての氏の指導よろしきを得て素晴しき成功ぶりである。氏に接する程の者、等しく氏の眞摯、清新を語るのもその人爲の高遠さを如實に表してゐるものと思はれる。

中部合同電氣・社長

高桑確一氏

我が國電氣界の白眉は中部合同電氣株式會社だ。勿論業界には危大な會社も數多くあるが、確固たる歴史を有し又その營業狀態の優秀さに於て斯界屈指を誇り得る。社長は高桑確一氏は石川縣人高桑戦二郎氏の長男として明治十一年八月に生れ、同三十六年に東京帝大工科を卒業した秀才。それより實業界に身を投じ縦横に馳け廻つたが、素より凡庸の徒であるべき筈はない。現時中部合同電氣社長として君臨してゐる他東亞電力與業(株)代表取締役、高野山電氣鐵道、東邦電力、東亞電氣與業、信實生駒電鐵各(株)取締役、四國電力、海部水力電氣、徳島水力電氣、奈良急行自動車、新潟電力、東大阪電氣鐵道各(株)監査役とこゝにビツクアツクした關係會社だけで十指に餘るといふ豪華振り、正に財界の雄だ。氏は長期に亙る經驗によりその力量の及ぶところ甚だ廣汎多岐、それだけにまた識見豊富で卓抜なる手腕を有してゐるのである。情味もあり廣潤なる度量もあつて堂々業界に覇を競ひつゝある。

那須アルミニウム・常務取締役

高桑豐治氏

氏は吾が國輕金屬界の英俊である。現時那須アルミニウム株式會社の常務取締役として颯爽と時運に掉さしてゐる氏は、正に潮流に乗つた感がある。同社は昨今時局の影響を殆ど全面的に受けて愈々好調、生産擴張、諸機械の増設と只管國策の線に沿ひつゝある氏はこの實力者だ。明治十九年十二月生れ、夙に關西大學に學び、四十一年三井物産に勤務、専心努力健闘を續けてきたが、昭和二年那須アルミニウム會社に轉じ、現時は常務として第一線に活躍してゐる。那須アルミニウムは大會社に比すればいろ／＼な點で不利にあり、隨つて經營の苦心は一方ならぬものがあるが、氏はその困難をよく克服し一途發展を目指して突進してゐるあたり、健かに非凡の才人と云ふべきである。同社も今やインフレの好調に乗り洋々たる前途を約束されるに至つたが、これこそ氏の同社に於ける大きな功績であり本領發揮の賜でもあるのだ。手腕あり經驗豊富、加ふるに情誼ある眞摯な實業家として全く敬慕に價する。

朝日工業社・出資社員

高須茂氏

西宮市在住の逸材、高須茂氏は現時朝日工業社、富岡光學器械製作所各合資會社の出資社員である。氏は佐賀縣土族高須一郎氏の二男にして明治十五年十月出生、同三十三年に家督を相続、同年大阪高工船用機關部を卒業し業界入りをした人で穩健重厚にして仕事第一主義を奉じ、従つて業界にあつても内部では隠然たる勢力は有しながらも、事業經營の表面には餘り立たなかつたので聲名は決して派手ではない。然しその手腕力量は定評あり、且つ機を見るに敏な財人として知る人ぞ知る實力的な巨頭である。氏を出資社員と仰ぐ朝日工業社は近時從來の面目を刷新、停滯的な氣運を一掃して整然たる統一と融和をみるに至り、その業績日毎に向上してゐるが、それも氏の人格の反映であらう。資性明朗潤達その風手からしても非常に人に懐しまれ親しまれる人物で、徳望勝れ、各界から絶對的信賴を受け、正に八面玲瓏とも稱すべく、今後の飛躍が期待されてゐる。時局下氏の如き實力家の健在を祈る。

高田アルミニウム製作所・社長

高田市松氏

氏は一言にして評すれば信念の人だ。石川縣人高田清三郎氏の長男として明治十三年五月に出生、同三十一年に家督を相続、アルミニウム鑄造業を營み、株式會社高田アルミニウム製作所の社長である。財閥を背景にする數多き斯業大會社を相手に腕一本で奮起する氏には、生産に、經營に一方ならぬ苦心がある。だがよくぞ難關にうちから押しも押されもしない今日の「高田アルミニウム」に仕上げた氏の手腕は全くあつたばれなものである。文字通りの裸一貫から起ち上つて刻苦辛酸三十年、遂に酬ひられて優秀會社高田アルミニウムを完成ならしめた高田氏、素より凡物ではない。時勢を洞見し人物を簡拔する事にかけては追隨をゆるさぬ閃きがあり、その不屈不撓の闘志は忙中尙憂と燃えあがるの感がある。實に機を得るものは苦難に耐え苦難を忍ぶ一貫精神で眞摯誠實の努力に如くものはない。氏こそ正に精勵格闘、如何なる難關をも切り抜ける信念の人であり、亦清庸潔白にして國家觀念の堅實なる事業家である。

日本輸出莫大小・社長

高田 克治氏

氏は輸出貿易の第一線に活躍する壯年氣鋭の事業家だ。實力もあり朝氣もあり、加ふるに斯業に對する卓見もあつた。だが今や何と云つても氏の時局認識の正確さがものを云ふ時代だ。一秒間に何回轉もするやうな世界の歩みには、充實した計畫性と相俟つて、時流を見透した機敏なる經營方法が最も必要となつてきてゐる。氏は日本輸出莫大小株式會社社長として、尾崎商店、味吉屋土地株式會社専務として業績を挙げ、はたまた尾崎商店、江州莫大小各株式會社取締役として人望を集める等、特異な色彩を發揮してゐる。氏は岡山の人高田雄一氏の長男で明治二十三年生れ、同二十八年に父退隱の後を承けて相續業界に入つたが、物凄く商略と燭眼をもつて事業界に二躍進出、産業戦士として吾が國輸出貿易に寄與してゐる。名利に恬淡で土地の信望極めて篤く、中國財界の巨物として刮目されてゐる才人であるが、銛後の護り愈々固かるべきの秋、これ等地方の巨人の存在に俟つ處は甚だ大きい。

高田病院長

高田 源八氏

科學者にして政治家、そしてまた實業家たるの人、高田源八氏の功績は偉大、正に時局を擔ふ人物である。氏は埼玉縣の産で明治十六年九月生れ、千葉醫專を同三十九年に卒業、同四十一年に高田源三郎氏の養子となり分家した。現時産婦人科高田病院を經營自ら院長として醫學の道に進んでゐるほか、浦和産婆學校長、浦和醫師會長、埼玉縣醫師會常任理事の公職にあり縣下の徳望を一身に受けてゐる。又事業界に於ても氏の才腕は素晴しく浦和合同タクシー、常磐市場(株)各社長、浦和劇場、關東瓦斯各(株)取締役、浦和信用組合理事として絶大な勢力あり、加ふるに埼玉縣會議員、埼玉縣地方都市計畫委員、浦和稅務署所得稅調査員と正に八面六臂の活躍振りを示してゐる。この素描をもつても解る如く氏の名聲は赫々、稀にみる高德の士で資性濃厚、堅固なる國民思想に燃えた愛國の人。今や氏の勢ひは天にも昇らんばかりであるが、東亞建設の重任にある日本の爲に愈々自愛されん事を切望する。

東滿洲人絹バルブ・常務理事

高梨 耕幣氏

新興産業界の花形たる人絹バルブ界にあつてわが高梨耕幣氏は夙に開え高き逸材であるが、現在東滿洲人絹バルブ常務理事として、同社の向上發展の爲めに多年の蘊蓄を傾けてゐる。流石に氏は永年製紙バルブ界に在つて技術的にも經營的にも研鑽を積んで来た人だけに、その事業に對する經驗は他者の追隨を許さぬものがあり、テキパキと事を處理してゆくところは正に快刀亂麻を斷つのが概がある。氏は明治十五年五月靜岡縣人高梨直吉氏の六男として生誕したが、大正九年分家して一家を立てた。先是明治四十年東京帝大工科土木科を卒業して、直ちに鐵道廳、神戸管理局に入り鐵道技師に任じてゐたが、大正六年之れを辭して樺太工業に入り、理事に擧げられ且つ泊居工場長を兼務したが、同十三年には惠須取工場長をも兼ね、更に同十五年には同社取締役となり、昭和二年山林炭礦部長、同五年理事兼山林課長たり、同八年王子製紙との合併に際し參事に擧げられたが、同十二年東滿洲人絹バルブに入つて現職に就任した。

高野精密工業・社長

高野 馬次郎氏

中京名古屋は由來精密工業の盛んな所であつて、高野馬次郎氏は夙に開え高き逸材であるが、現在高野精密工業を主宰してゐるが、同社の製品たる時計貴金屬品は技術的にも適確度に於ても模範的な優秀品であるから、國內の需要者間には素より、遠く海外に於ても噴々たる好評を博してゐる。これも全く氏の高邁なる人格と多年の經驗による優秀なる技術の所産と云ふべく、國策たる外貨獲得の爲めにも將來に於ける同社の猶ほ一層の發展飛躍が希はれる次第である。氏は先代小太郎氏の長男として明治十五年出生したが大正十年先代の後を承けて家督を相續した。氏が今日の如く精密工業界に大をなすまでには幾多の辛苦と努力が拂はれてゐて、一篇の立志傳が綴り成されるであらう。猶ほ氏はハマ令夫人との間に二男四女の子寶があり、長男小一郎氏は高野精密工業取締役として氏のよき女房役となつてゐる。

にんべん・店主

高津 伊兵衛氏

東京で「にんべん」と云へば直ちに「にんべん」の名は賣り込んでゐるが、それも道理なことだ。「にんべん」は舊幕時代文化年間から、お江戸日本橋に伊勢屋と稱して饅頭問屋を營んでゐる老舗であり、「にんべん」は通稱である。「にんべん」はまた日本橋から銀座界隈にかけての地所持、家作持ちとして知られてゐるが、決して店、地代を食らなないことで、店子、借地人から感謝されてゐる奇特な富豪である。當代の店主高津伊兵衛氏は慶應義塾出身の逸材で、齡も至つて若く當年三十六歳の青年實業家であるが、流石に生粹の江戸ッ兒だけにすつきりした現代的な知識人で、高津株式會社、高津商店の社長として采配を揮ひ乍ら、品川白煉瓦取締役にも任じてゐるが、その才腕はなかく、確りしたもので、將來の大成が囑目されてゐる。氏は明治三十八年八月先代伊兵衛氏の長男として誕生したが、同四十年家督相續と共に前名義和を改め襲名した。氏の趣味は謡曲、音楽、園藝等である。

川崎土地建物・社長

高塚 大助氏

近來に於ける川崎市は關東一圓の新興工業地帯の中心を成してゐて、東京、横濱兩港は一系列の防波堤をもつて一大河帯をなし、陸面は省線、京濱線、臨海線、東横線其他の私鐵、バスを以つて運輸網を張りめぐらし、東京、横濱間を完全に連絡される樑たる觀を呈してゐる。従つて海岸地帯は立錫の餘地なき程に大中小工場立ち並ぶ現況であるから、目下は鶴見川上流の郡部にまで工場地帯を擴大しつゝある盛況である。この際この秋、わが高塚大助氏は川崎土地建物社長として今をときめく聲名を馳せつゝある巨材であるが、また川崎自動車社長として交通機關界の重鎮たり、且つ八州電機社長としてもメーカー界に鳴らしつゝある。氏は明治二十六年五月先代大助氏の長男として生誕し、昭和七年家督相續と共に前名龍介を改めて襲名した。氏は資性豪健にして偉丈夫たり、夙に實業界に在つてその英才を讃えられてゐるが、また現在川崎市會議員に推されて市政の爲に盡瘁して、市民の信賴厚く敬愛を一身に集めてゐる。

大連船渠鐵工・常務取締役

高橋 孝一氏

新興滿洲國の表玄関大連の製作界に花形として活躍しつゝある人材にわが高橋孝一氏がある。氏は現在大連船渠鐵工常務取締役に任じてゐるが、性來奮闘的な勝氣に強い氏のキビクした采配振りは、よく社内の氣運を引締めてゐるから、同社の業務は時局下に應はしい緊張をもつて遂行され、隆々たる業績を挙げ、斯界注目目的となつてゐる。氏は明治二十年十二月山形縣人高橋盛藏氏の長男として誕生したが、幼時より神童の名あり郷黨人より敬愛せられてゐたが、長ずるに及んで愈々その實が現はれた。大正二年東京商船學校を卒業して、暫く海運界に在つたが、同十二年に至り大陸に風志を行ふべく渡滿し、滿洲船渠に入つて技師となり、昭和五年設計係主任に進んだが、翌六年同社が大連汽船に合併せられるや船渠工場主任に任ぜられ、次で翌七年には大連工場係主任を兼ね同十年工場課長兼大連工場長に累進したが、後大連船渠鐵工の設立と共に工作課長となり、昭和十三年現職に就任したものである。

大阪電球・取締役

高橋 杲太郎氏

正三位勳五等の肩書を持つ高橋杲太郎氏は山形縣人高橋六左衛門氏の長男であつて、明治九年九月に出生した。烈々たる日本精神に燃えた愛國の士で、夙に一年志願兵より累進して陸軍砲兵大尉に任じ、赫々の功勞ある勇將であるが、業界にあつても正に一方の雄たり、地方財界の中心的存在である。氏の業界に於ける足跡を拾つてみると、大阪電球に入社したのが名聲を獲得した第一歩、こゝで天賦の才腕は見事に成長して同社支配人となり、更に事務部長兼營業部長に躍進して一躍有名となり、現時は同社取締役として縦横に快腕をふるひ、信望絶大である。また傍ら東京電氣(株)専務取締役、聯合紙器(株)監査役等々を兼務して業績發展に盡瘁し、曩には歐米各國を漫遊して識見實に富豊、獨自のスタイルをもつ文化人である。ゴルフ、將棋に長じ、家族連れのビクニツクを趣む等、明朗にして健康な一面がよく現れてゐる。今や氏は第一段階の基礎建設を終り、第二の飛躍を待機して業界を注視してゐる。

滿洲生命保險・理事長

高橋 康 順氏

前半生を官界に送り今日新聞地滿洲國實業界に乗出し一躍業界の巨頭として名噴々たる氏は、明治二十四年秋田縣高橋兵藏氏の長男として出生、幼時より穎悟俊秀大正五年東京帝大法科を卒業した。其の在學中大正三年既に文官高等試験をパスした秀才である。同六年臨時産業調査事務官となり同八年歐米各國に出張、歸朝後商務事務官として支那及西比利亞に出張す。爾來鑛山監督局書記官、特許局事務官、抗告審判官、商工書記官兼産業合理局事務官、鑛山局鑛政課長、商務局商政課長、大臣官房文書課長、東京鑛山監督局長、特許局審判部長に歴任し昭和七年滿洲國に聘せられ、實業部總務司長兼中央觀象臺長、特許發明局長に任官したが同十一年退官して實業界に進出した。前記の外朝鮮鴨綠江水力電氣を始めて多數社の重役を勤務し毅然たる現在である。氏の明敏な頭腦は往々所觸るる所風靡せざるなしといつてよい。其の讀書によつて豊富な蘊蓄が溢えられ、其の旅行趣味は見聞を擴め氏の活躍を一層自由にするであらう。

「高橋組」土木建築請負業

高橋 柳 平氏

大正十三年飄然として現地に來り慧星の如く土木建築請負を開業し、孤軍奮闘、短日月の間に斯業界の巨人となつた氏は、吳海軍工廠に於て多年腕を鍛へた軍であつた。愛媛縣の人高橋好藏氏の長男で明治二十二年三月出生、夙に吳海軍工廠製圖見習工としてスタートし、後技術部に勤務し其の間嘗て勤勞の勤勉振りを發揮し土木建築の實地に精通し、雄々しくも獨力經營の志を立て工廠を辭して未開の境地に突入したものである。腕に覚えはあり、活動盛りの年輩ではあり、圖志滿々として、其意氣鋭きこと矢の如く、偶々發展の緒に就いたばかりの新横濱の鶴見事業は見事に金の射當て今日の隆運に恵まれた。氏の得意は想像するに餘りあり。氏は若い頃より園藝と建築とに興味を持ち、吳在任時代にも狭い庭に花卉を丹誠して楽しみ、同僚知己の建築の設計者となり監督者となつて重寶がれた事も多々あるといふ。好きこそ物の上手なれ氏の業は氏の性格とびたりと合つて寸毫の隙もない。其處に氏の天地がある。

瀧富商店・社長

瀧 富太郎氏

氏は滋賀縣の人、瀧利平次氏の長男にして明治十八年六月に出生した。同二十八年に家督を相続して事業界に身を投じ、瀧富商店社長、瀧富(名)代表社員として活躍を續けてゐるが氏一代にして巨萬の富を築き上げたのは知る人がみな等しく驚嘆するところのものである。自己の所信に向つて斷乎邁進し、また日夜刻苦精勵エネルギッシュな健闘を續ける氏の右に出るものもなく、近時益々意氣軒昂、時局下の業界に躍進につぐ躍進ぶりをみせてゐるのも全く逞ましき限りである。事業家にもいろ／＼なタイプがあるが、瀧氏のやうな熱情的な傑物は正に實力型とでもいふのであらうか、その卓越せる識見はよく時流を透徹してぐん々業績を向上させてゐる。氏のこの勇猛なる奮戦ぶりをみては大「瀧富」の廣く大きな名聲も宜なるかなと首肯される。底力ある辣腕の人、瀧富太郎氏一颯爽と業界に飛躍する氏の偉大なる雄姿を見よ。業界の一翼を擔ふ指導者の一人として洵に力強く頼もしいではないか。

オリエンタルホテル・代表取締役

瀧川 英一氏

氏は山口縣人瀧川辨三氏の長男にして明治十六年十一月に誕生し大正十四年に家督を相続した。先代辨三氏は夙に神戸に出で燐寸製造業を創めて名を成した有力家で嘗ての貴族院議員であつた。流石に血筋のほどは争はず氏も好き調陶を受けて立上り、今やオリエンタルホテル株式會社代表取締役、瀧川合資會社代表社員、山陽皮革、神戸瓦斯各株式會社取締役等の任にあつて父君に優るとも劣らぬほどの偉大な存在を示しつゝある。學業を卒へると同時に實務に勵精し品格を保持して將來への備へに怠りなかつただけに、前記の如く事業界の雄將として廣く知られるに至つたもので、國策型の人物としては申し分がない。金儲け！もより結構である。しかし意欲を満たすと同時に氏の如く人格的なひらめきにも接したいものである。修養といひ反省といひ求むべくして求め難いものには相違なからうが、氏にはその憂ひが無い。即ち瀧川中學校常務理事、村野實業財團理事の任に在るのもつて其反面がよく首肯されるからである。

師定商店主

高松 定一氏

中京に於ける肥料商の師定商店の名を知らぬものはない。その師定商店を主宰しつゝ大日本特許肥料株式會社監査役を兼ね、更に名古屋商工會議所會頭の任にあつて威望煥然たるところ、まことに多額納稅者の貫祿にふさわしき存在と云はねばならぬ。氏は愛知縣人先代定一氏の二男として明治二十二年十一月に誕生、大正八年家督相続と共に前名齡吉を改め襲名に及んだ。大正四年東京帝大法學部經濟科を卒業後直ちに實務に就いたものだが、流石に土地の生え抜きではあるし大屋臺を背負つて立つだけに頗る覇氣に富み、所謂お坊ちゃん式のそれとは全然趣きを異にしてゐる。従て業務上の熱意も進るほどのものがあり、達成せずんば止まずの意氣はたしかに中京に於ける實業家中の逸足として推稱するに足るものがある。一面氏には非常にさつぱりとしたところがある。しかも正直で親切といふ特徴を持つてゐる。一見すると如何にも温厚なる紳士であるかのやうに映するが其奥に剛毅の腑のあることを見逃し得ない。

大日本製帽・社長

高柳 直兵衛氏

大事業の蔭には大人物の存在が無くてはならない。事業の達成は時流に支配されること勿論であるが、それより以上に事業其物に適切なる人物を得るか否か、成功の重大なる分岐點となる。現在綿糸人絹毛糸商を営みつゝ合名會社高柳商店代表社員、合資會社高柳保財會無限責任社員並びに大日本製帽株式會社社長として其等の經營を一手に引受け、從横に卓腕を揮ひつゝある高柳直兵衛氏こそは、蓋し適材適所の感があり、氏によつて育まれつゝある未來の事業家達が國策線に沿て活躍してゐる事も決して故なしとせざるところである。斯くの如く事業界一方の將として廣く知られてゐるのも、畢竟定評ある手腕もさることながら、その人格が誘因をなしてゐる事實も亦否めないものである。現に東京糸間屋組合長の任にあり湧くが如き信望を擔ひつゝあるのを見ても充分頌するわけである。氏は東京府人森照吉氏の二男で明治十三年十二月に誕生し同三十五年先代直兵衛氏の家督を相続と共に前名辰三郎を改め今日に及んでゐる。

瀧川鐵工所主

瀧川 正一氏

もと／＼氏は鐵工事業には永年に亘る經驗と獨自の手腕を持つてゐる人物なのである。氏は自己の長所をいゝ方面に導いて來た、いや育てあげて來たとしても云ふのか技術はもとより經營方面にかけても石橋式の堅實主義を標榜してゐるのである。單に手腕のみではなしに、その經歷から云つても氏の今日在るは既に約束づけられてゐたものであるとも云へるやうな氣がするのである。愛知縣の産、瀧川庄吉氏の長男として明治十八年十月に誕生した。大正二年瀧川鐵工所を創立すると共に本格的に斯界へとデビューし、専ら氣罐製作に力を注ぎつゝ今日を迎へたもので、現に名古屋鐵工同業組合長の任にあつて名實共に斯界のリーダー格をもつて精進しつゝある。氏は非常に思慮が深い。あれやこれやと思ひを巡らせつゝ終日多忙裡に其日／＼を送る。仁侠に富んでゐるから忙がしいなにかにも他人の世話や、他人の事件で走り廻ることが多い。それが爲みす／＼損をするやうなことがあつても敢て意に介しない美德を持つてゐる。

青島燐寸・社長

瀧川 清一氏

時流に乗つて最近著るしく業容展開し、好成績をあげつゝあるものに青島燐寸株式會社がある。同社の業容は極めて將來性に富むものであり、恰も獨壇上を往くが如き觀があるのも業界に於ける選り抜き人物を拉して重役陣を形成してゐるのと、如何なる手段を盡しても目的の貫徹を圖るべく、萬一その主張が容れられぬ場合には、進んで勇退するも可なりと溢るゝ熱意をもつて名采配を振りつゝある社長瀧川清一氏の卓腕とに依るものである。實に瀧川氏は信念の人であり實行力に富んだ人物である。氏は兵庫縣人瀧川儀作氏の長男にして明治三十三年三月に誕生した。神戸高等商業學校卒業後日本綿花會社に入りボンベイ支店勤務を経て今日の樞位に立つたもので、流石關西財界に隠れなき父君の薫陶宜しきを得てゐるだけに總てにそつが無ければかりか、元來が縮りやだけに少しも危な氣といふものがない。したがつて大ざつばなところは微塵も無く、隅々まで眼が届くといふ周到振りである。

山崎染工・社長

瀧口寅之助氏

茲に氏の關係する事業を挙げれば、城たる山崎染工株式會社を據點として、山口貿易株式會社專務取締役、東京電氣時計株式會社取締役等その足跡至らざるはなく、將に巨歩を印して名ある人物である。氏は山形縣及川家の出で明治二十年十一月に誕生、同二十四年明大卒業後事業界を志し、次第に認められて今や押しも押されぬ貫録を示すに至つたものだが、これといふのも氏が凡器にあらざると共に、眞摯なる努力家であることを無言の裡に語るものであり、併せて時運に恵まれたとも云へるのである。事業經營にしても往々夫人が十年一日の如く同じ經營方針を堅持して業績を伸ばすといふ、極めて朝氣に乏しい人物も居るが、かへつて氏の如き素人の立場から携はつて實力を發揮し、而も膽が据はつてゐるの非常に効果を収めたといふ場合もある。何せ同社の飛躍過程を辿るときそれに伴ふ氏の精力的な働らきぶりを逸してはならない。

三和興業・代表取締役

瀧野徳右衛門氏

關西財界は名にし負ふ巨頭群立の地だけに幾多錚々たる大財界人が覇を競ひつゝあるが、その關西の一角、京都に於て夙に一城を築く英主としてあまねく知られ、現に京都府多額納税者として時めいてゐるのみか、三和興業株式會社代表取締役として令名をほしまゝにしてゐるのが瀧野徳右衛門氏である。氏は京都府人瀧野又右衛門氏の二男にして明治十七年十二月に誕生した。學業を卒へると共に縮緬商利商店に勤務したが、もとよりそこいづまでも留まるはずもなく、やがて獨立して有價證券現物賣買業を営みつゝ、遂に今日の盛大を招來したもので現に京都取引所取引員としての盛名は、流石一城を擔ひ立つ大器たるの感が深い。氏は眼から鼻に抜けるやうな才人である。夙に實業界を志したげに異常の熱と意氣とを持つてゐる。したがつて學業を卒へて斯界に身を投ずるや、持前の精悍さをもつてグン／＼と頭角を現はして來た。性剛直のうちにもなかく弾力性があり何事に當つてもヘコタレぬ處に氏の面目がある。

淡汽船・社長

竹内三一氏

今やわが海運界にとつての競争相手は米のみとなつた。歐洲再戰の展開につれて英、佛は完全に獨に叩きのめされつゝあり、最早彼等が立直ること到底不可能事、太平洋上に偉張りくさつたのは往時の夢物語りとなる期が近づいてゐる。歐洲戰の終期近しと海運界には警戒氣味もあるが、斯界は平和來の後こそ層一層の飛躍を期待してゐる。今回は第一次戰當時と異り世界の經濟狀態が一新される秋であるからだ。わが竹内三一氏は淡汽船、播淡聯絡汽船各社長たる他、阿攝商船、神戸海運各取締役として、扇港神戸を中心とする内海航路に輝々たる光輝を放ちつゝある巨材である。氏は最高學府を出た知識人だけに、現勢及び將來性に對して遠觀を有してゐるから、一時的な船成金などに憧れることなく、専心海運國策の爲に盡瘁しつゝある。氏は明治十五年二月富山縣人竹内下問氏の三男として出生、大正九年分家した。先是明治四十四年東大獨法科を卒業大阪商船に入り、天津、香港、大阪支店長等に任じてゐた。

田中計器製作所・常務取締役

竹内正氏

正五位勳四等功三級竹内正氏は、明治十三年十一月、福井縣竹内文吉氏の二男として出生、梓川電力技術部長として出藍の譽を擔ふ小壯實業家、工學士竹内孝氏は氏の令弟である。氏は宿望であつた海軍に入り、日露役には青年將校として參戰し赫々たる武功を樹て果進して海軍大佐に補せられたが、豫備役に編入せらるると共に實業界に入り、現時田中計器製作所常務取締役として衆望を擔つて活動し、財界の一異彩として視聽を蒐めて居る。由來我が財界は強烈な實力ある人物を要求すること久しく殊に時局の進行推移につれて益々切實を加へた今日、氏の如き人物が業界擔當の衝に立ち難局打開に向つて精進せられる事は國家の爲に洵に欣幸の限りである。氏は一塊の武辯でなく經營の手腕力量、良心から發露する技巧は到底養成實業家の及ばざる所である。製品は製作者の魂の發表であらねばならぬ。氏の至衷至誠によつて薰化されつゝある田中計器従業員が生産する魂の製品こそ、名實充足したものと云ふべきである。

臺北州自動車運輸・專務取締役

竹内虎雄氏

交通運輸界に一時代を劃したものは自動車の發達で、躍進的將來性を持つ代表的な事業でもあらう。文明は人爲的最善に限度をつけぬ。竹内氏が時代通觀の賢明なる一異彩であることは言ふも愚の至りである。氏は明治四十年專修大學理財科を卒へ神戸鈴木商店に入り臺灣支店長となり、財界一角の存在を示した。爾來臺灣鐵工所監査役、卓爾興業專務取締役となり、氏の業界に於ける地位は順風滿帆の形で成長し今や臺灣財界の重鎮として光つて居る。昭和十三年臺北州自動車運輸會社創立と共に專務取締役として就任し、事變下の交通運輸に獻身的な活動をなしつつある。氏は高知縣竹内虎也氏の二男で明治十七年出生、懇篤温厚の中にも機略を藏し大局を見ること敏であつて其の手腕は確かである。本據を大阪に置いて居る關係上内地の各般の事情にも特に詳しく、内地と常に一脈の連繫を保持し事業上裨益する所も亦多い。讀書に親しみ乗馬を趣味とする。氏の男性的で研究的な性格が窺れる。切に健闘を望む。

東邦電力・專務取締役

竹岡陽一氏

我が國電力界に王座を占め一代の怪傑松永社長の麾下に在て敢然として才腕を揮つて居る東邦電力專務取締役竹岡陽一氏は、大分縣中津の産、豪宕明敏にして機略縱横に動くと言つた人物其の大世帯を一絲紊れず切り廻して行く所は、氏でなくては出来ぬ事である。其所に氏の偉大性があり棟梁の才器を窺はれる。氏は東九州に於ける名望家、現大分市長竹岡吉太郎氏の令弟で、明治九年生れ、明治三十五年東京專門學校邦語政治科を卒業し、九州電燈に入社したのが財界への第一歩、かくて同社が名古屋電燈と併合して關西電燈となり、更に擴充發展して東邦電力となるに及んで、氏も亦異次昇進して、電力界の重鎮に推進していつた。蓋し東邦電力の今日あるは幾多の波瀾曲折に遭遇せる時、營々致々として社業に盡瘁し來つた氏の潜在力も與つて多である。不羈にして明智然かも練達湛能の氏が次代社長として衆望を擔つて居るのも決して故なしとなしい。氏は尙教會社に重役として君臨し業界の大立物でもあり長老でもある。

唐澤鐵工所・社長

竹尾年助氏

本邦製鐵界の重鎮としての竹尾年助氏は明治二十七年東京高工機械科卒業の秀才で、直ちに渡米しスチール・インスチテュート・オブ・テクノロジーを卒業し爾後在米七年に及び、其間専心機械工作術を修業して歸國、明治三十九年、唐澤鐵工所の設立經營に任じ、其の専攻練磨した知能を傾けて同社の發展を策し、後數回に互つて歐米各國の業態を視察研究し同社の經營の資に供し、隆々たる今日の盛況を招來した事は全く氏の功績である。氏は女房役として林政吉の潑瀾たる手腕の所持者を擁し其基礎は磐石である。氏は愛知縣竹尾彦九郎氏の長男で明治六年の生れ、齡當に古稀に達するの速くないが健康愈々勝れ、運營の奇才縱横に湧くといふ壯者を凌ぐ力の持主である。明朗型の老紳士として財界に堂々と巨大な存在を示して居る。令弟竹尾秋助氏は西島製作所社長として關西財界に名を成して居ることは、實に當代の偉觀であると言ふを憚らない。時局は斯業の發展を希求すること急なるものがある。自愛報國を祈る。

盛岡電燈・常務取締役

竹川久仁氏

支那事變の進行につれ、我が實業界に投げかけられた影響は非常に大きい。統制經濟機構は益々強化され、學國一致新事態に對應すべき重大時局に際し、財界の負擔は愈々注目の的となりつつある。身を挺して敢て危急存亡の眞只中に飛び込んで勇躍國策推進の矛となり柄となる亦男子の面目でなくて何であらう。我が竹川久仁氏こそ其の先驅をなす人物として、東西の財界を馳驅して嘗て寧日を持たぬ熱烈な活躍をしてゐる。氏は栃木縣竹川友之輔氏の長男として明治十三年に出生、明治三十六年明治大學を卒業し、直ちに實業界に入り各方面に奮闘の歴史を展開し、忍苦力行の結晶は氏を實業界第一線の人物として鍛へ上げ、今や花巻温泉鐵道、東洋自動車工業、大井川鐵道、篠原機械工作所、大東産業各取締役、明石製作所監査役等の要職に就き、其の樞機を握り不撓の活動を續け寧日なき有様である。精悍にして剛膽な氏、實力を唯一の武器と信ずる氏、業界異色の存在であり、又それ丈信頼を置ける人物である。

京都ステーションホテル・社長

竹上藤次郎氏

其の人格の高邁なる其の徳望の如何に厚きかを知る事が出来やう。氏は京都竹上藤造氏の二男として明治二十年一月出生し、大正十五年家督を継ぐ。夙に日本大學及び立命館大學に學んだが後實業に入り、竹上商店として生絲問屋を經營し、自ら陣頭に立つて、其向上發展を策し、業績顯著なものがある。傍ら京都ステーションホテルを主宰し、滿洲皮革専務取締役、内外出版印刷、相互運輸倉庫、日本レース、京都會館各取締役の要職にあつて、練達せる才腕を發揮し京都財界に翳翼を張つて居る。氏は、又前記の如く京都府政界の巨頭でもあり長老でもあり、名實共に充實した實業界の一異彩である。氏は又熱烈な信仰を持つと共にそれに依つて基礎付けられた信念の士である。よく世情を理解し、人情を解し、時勢を識り、大局を認識し當代財界人中屈指の人物として推賞して憚らない。

京都商工會議所副會頭竹上藤次郎氏は、曩に京都府會議長、同市選出衆議院議員たりし事實を以てするも、

其の人格の高邁なる其の徳望の如何に厚きかを知る事が出来やう。氏は京都竹上藤造氏の二男として明治二十年一月出生し、大正十五年家督を継ぐ。夙に日本大學及び立命館大學に學んだが後實業に入り、竹上商店として生絲問屋を經營し、自ら陣頭に立つて、其向上發展を策し、業績顯著なものがある。傍ら京都ステーションホテルを主宰し、滿洲皮革専務取締役、内外出版印刷、相互運輸倉庫、日本レース、京都會館各取締役の要職にあつて、練達せる才腕を發揮し京都財界に翳翼を張つて居る。氏は、又前記の如く京都府政界の巨頭でもあり長老でもあり、名實共に充實した實業界の一異彩である。氏は又熱烈な信仰を持つと共にそれに依つて基礎付けられた信念の士である。よく世情を理解し、人情を解し、時勢を識り、大局を認識し當代財界人中屈指の人物として推賞して憚らない。

三井生命保險・福岡支店長

竹中健一氏

財閥三井が生保業界に手を染めたのは極めて新しい事實である。各財閥が既に其の陣營を張つて戦端を開いた後に立ち上つた。三井生保は腕利きの闘士を揃へねばならなかつた。抱負識見、實力、經驗に於て優秀であり且つ闘志の烈々たる人物を物色し、其選に入つたのが氏である。かくて今や同社九州の守りとして、文字通り不休の活動を續け、業績頗る顯著であると聞く。氏は三井物産子飼の秀才であり今後の飛躍を約束する人物である。即ち氏は大正五年拓殖大學を卒業後直ちに三井物産に入り、若松、大阪各支店に勤務し次いで、和歌山出張所長に昇進し、茲に第一線に活躍する重要人物となつたのであるが、昭和十一年三月、生保會社に轉じ、本店業務課勤務、大阪支店長代理を経て今日に至つたものである。氏は兵庫竹中爲三郎氏の三男で、明治二十七年の出生、前途は洋々として氏を待つ、氏の手腕力量は長く池中のものでない、捲土重來、中央財界に覇を成すべきを確信するのである。

發動機製造・専務取締役

竹下辰四郎氏

精機製作界の華かさは今や其絶頂に達せんとするかに見え、各々独自の技術を誇る中に在つて、發動機製造株式會社は斷然頭角を現はして他の追従を許さない。故ある哉、専務取締役竹下辰四郎氏の粉骨碎身、全生命を打ち込んで指導監督の責を全うしつゝあるからである。氏は又日本ブレーキ會社取締役として獨特の技術を發揮して頗る好評を博して居る。氏は事業の人技術の人として、異彩を持つ實業界の存在で、仕事即趣味なりとは氏を如實に物語る言葉であらう。氏は明治十四年二月の出生にして東京府竹下秀氏の叔父であり、明治三十三年大阪高工機械科を卒業し直ちに製作界に入り、生來の技巧趣味は常に職工と寢食を共にし、懸命に研究を積み、機械に關する技術の實際を體得し、如何に精密な機械なりとも一見して其の凡てを會得するといふ域にまで達し得た。氏の如きは實に驚異的存在であり、斯業發達に寄與した功績は多大であらう。時局は國産優秀の製出を希求するの秋、更に一段の奮起を企願する。

精機製作界の華かさは今や其絶頂に達せんとするかに見え、各々独自の技術を誇る中に在つて、發動機製造株式會社は斷然頭角を現はして他の追従を許さない。故ある哉、専務取締役竹下辰四郎氏の粉骨碎身、全生命を打ち込んで指導監督の責を全うしつゝあるからである。氏は又日本ブレーキ會社取締役として獨特の技術を發揮して頗る好評を博して居る。氏は事業の人技術の人として、異彩を持つ實業界の存在で、仕事即趣味なりとは氏を如實に物語る言葉であらう。氏は明治十四年二月の出生にして東京府竹下秀氏の叔父であり、明治三十三年大阪高工機械科を卒業し直ちに製作界に入り、生來の技巧趣味は常に職工と寢食を共にし、懸命に研究を積み、機械に關する技術の實際を體得し、如何に精密な機械なりとも一見して其の凡てを會得するといふ域にまで達し得た。氏の如きは實に驚異的存在であり、斯業發達に寄與した功績は多大であらう。時局は國産優秀の製出を希求するの秋、更に一段の奮起を企願する。

日本陶磁器工業組合聯合會理事竹久

竹久豐市氏

日本陶磁器工業組合聯合會理事竹久豐市氏は、日本陶磁器共販會社専務取締役、山陽燐寸會社監査役として中京實業界に君臨し業界の指導的逸材である。氏は財界の長老瀧川儀作氏の知遇を受け同氏の經營に係る各種の事業に參與し、その懐刀として敏腕を揮ふ事十有餘年、氏の實業界に於ける存在を鮮明にしたのであるが、昭和十一年五月現任日本陶磁器に轉じ更に前記各社の重役を兼務して普遍的活躍にも足らぬ状況である。氏の今日の地位獲得は、瀧川傘下に於ける刻苦勤勉と奮闘努力によつて鍛へられた人格の發現であつて、精練熟達の境地に進んだ氏の手腕は洵に感嘆に價する。氏は岡山縣人であるが、先考瀧川儀作氏の明治二十五年二月出生、大正三年明治大學法科を卒業した職人であり、蘊奥を極めた知能と半世の經驗とは氏に社會的實力を與へ財界に出藍の名を成したのである。氏は瀧川氏關係當時より主として陶磁器業に盡瘁し、組織ある斯業界建設の功勞者であり、其の發展の父として仰がれてゐる。

竹馬商店・専務取締役

竹馬清作氏

氏は富山縣人吉田圓兵衛氏の二男として明治三十二年三月に誕生、大正十五年に竹馬集三郎氏の養子となつたのである。富山と云へば賣藥を想ひ、賣藥と云へばあの紺の香も清々しい、熱と忍苦の權化とも思はるゝ行商隊を想ひ出す、まことに富山人のそれは血の滲むやうな奮闘と共に如何に隱忍自重にして、意思の鞏固なるかよく窺えるのである。氏の氣質がそれをよく裏書してゐる。市井の噂する通り勤勉努力、働らいても少しも倦まないとはいふ典型ぶりをよく發揮してゐる。したがつて實直なること、陰日向なく汝々として店務に勵むことは云ふまでもなく、しかも才氣煥發なるところいよゝ上下の信頼を博する所以なのである。大正九年に神戸商科大学を卒業した俊秀で、現に株式會社竹馬商店専務取締役兼經理部長、人事部長の樞位にあるほか岡山製織株式會社監査役の任にあり、しかも温厚なる君子人であるところから、業界の信望も次第に高まり神戸商工會議所議員としても令名を博してゐる。

氏は富山縣人吉田圓兵衛氏の二男として明治三十二年三月に誕生、大正十五年に竹馬集三郎氏の養子となつたのである。富山と云へば賣藥を想ひ、賣藥と云へばあの紺の香も清々しい、熱と忍苦の權化とも思はるゝ行商隊を想ひ出す、まことに富山人のそれは血の滲むやうな奮闘と共に如何に隱忍自重にして、意思の鞏固なるかよく窺えるのである。氏の氣質がそれをよく裏書してゐる。市井の噂する通り勤勉努力、働らいても少しも倦まないとはいふ典型ぶりをよく發揮してゐる。したがつて實直なること、陰日向なく汝々として店務に勵むことは云ふまでもなく、しかも才氣煥發なるところいよゝ上下の信頼を博する所以なのである。大正九年に神戸商科大学を卒業した俊秀で、現に株式會社竹馬商店専務取締役兼經理部長、人事部長の樞位にあるほか岡山製織株式會社監査役の任にあり、しかも温厚なる君子人であるところから、業界の信望も次第に高まり神戸商工會議所議員としても令名を博してゐる。

品川製作所・社長

武鶴次郎氏

帝都製作界に雄姿を以て君臨する品川製作所社長武鶴次郎氏は、日曹人網バルブ、京濱電機、東洋電機製造大山鋼索鐵道、伊勢原自動車、陽榮製作、報國砂金各社取締役、又、日曹業、日本曹達、日本水素工業、妙高企業、九州曹達各社監査役等十數會社の重役に就任し、繁盛其のもので、氏の如何に精力家であり手腕家であるかは廣汎な活動面を以ても領かれる。事業は人によつて生れ、人によつて發展を遂げるのであるが、氏の事業慾の旺盛振りは一驚を喫すると共に、經營の天賦は更に三嘆に價する。汎種關係事業を簡明に處理して毫も破綻を生じない明敏顯知は俊傑的存在といふべきである。氏は宮城縣桑島龜治郎氏の令弟、明治二十二年生れで、大正四年東京帝大法科を卒業し、同六年武和三郎氏の養子となる。先代和三郎氏亦實業界錚々たる士にして、東洋電機製造、日本曹達東京瓦斯各社重役として聞え、其の後継者としての氏が更に一段の發展を遂げた事は道義的にも美しい輝かしい事實であり更に一段の活躍を待つ。

帝都製作界に雄姿を以て君臨する品川製作所社長武鶴次郎氏は、日曹人網バルブ、京濱電機、東洋電機製造大山鋼索鐵道、伊勢原自動車、陽榮製作、報國砂金各社取締役、又、日曹業、日本曹達、日本水素工業、妙高企業、九州曹達各社監査役等十數會社の重役に就任し、繁盛其のもので、氏の如何に精力家であり手腕家であるかは廣汎な活動面を以ても領かれる。事業は人によつて生れ、人によつて發展を遂げるのであるが、氏の事業慾の旺盛振りは一驚を喫すると共に、經營の天賦は更に三嘆に價する。汎種關係事業を簡明に處理して毫も破綻を生じない明敏顯知は俊傑的存在といふべきである。氏は宮城縣桑島龜治郎氏の令弟、明治二十二年生れで、大正四年東京帝大法科を卒業し、同六年武和三郎氏の養子となる。先代和三郎氏亦實業界錚々たる士にして、東洋電機製造、日本曹達東京瓦斯各社重役として聞え、其の後継者としての氏が更に一段の發展を遂げた事は道義的にも美しい輝かしい事實であり更に一段の活躍を待つ。

東京輕合金製作所・社長

竹村第一氏

氏は東京市竹村慶也氏の二男であつて、明治十一年七月出生、第一高校を経て東京帝大工科に學び、明治三十八年機械科を卒業した英才であり夫人ちせ女史は、財界の巨頭、三井合名常務理事、南條金雄氏の令妹にして令名を譲はれてゐる。氏は學窓を卒業や、野戰鐵道提理部員となり軍屬生活をしたが、後實業界に轉向し、日本製粉會社に入り果進して常務取締役に擧げられ、財界の第一線に進出して其の手腕を磨いたのである。其間米國に渡り彼地に於ける事業界經濟界の情勢を具さに研究して歸朝し、後現任東京輕合金製作所の懇請により社長に就任し蘊蓄ある運籌ぶりを示し實績を擧げてゐる。氏は飽くまで一人一業主義を標榜し知能の分散を極度に排撃し、其の忠實な實踐者として、財界稀に見る存在である。此意味に於て氏は國家人社會人として亦偉大さを持つて居る。犧牲的純情を以て一貫し、一路自己の職責に向つて精進する有徳の實業家。必ず隣あり、宜なる哉廉直嚴正なる義兄南條氏と俟て双璧の感がある。

氏は東京市竹村慶也氏の二男であつて、明治十一年七月出生、第一高校を経て東京帝大工科に學び、明治三十八年機械科を卒業した英才であり夫人ちせ女史は、財界の巨頭、三井合名常務理事、南條金雄氏の令妹にして令名を譲はれてゐる。氏は學窓を卒業や、野戰鐵道提理部員となり軍屬生活をしたが、後實業界に轉向し、日本製粉會社に入り果進して常務取締役に擧げられ、財界の第一線に進出して其の手腕を磨いたのである。其間米國に渡り彼地に於ける事業界經濟界の情勢を具さに研究して歸朝し、後現任東京輕合金製作所の懇請により社長に就任し蘊蓄ある運籌ぶりを示し實績を擧げてゐる。氏は飽くまで一人一業主義を標榜し知能の分散を極度に排撃し、其の忠實な實踐者として、財界稀に見る存在である。此意味に於て氏は國家人社會人として亦偉大さを持つて居る。犧牲的純情を以て一貫し、一路自己の職責に向つて精進する有徳の實業家。必ず隣あり、宜なる哉廉直嚴正なる義兄南條氏と俟て双璧の感がある。

滿蒙毛織・常務取締役

武石惟友氏

滿鐵を始祖とし、邦人の大陸進出が最近特に著しくなり、經營事業も劃期的進展を見せてゐる事は、國運興隆の實體を表はすものとして洵に慶賀に堪えない。滿蒙毛織會社は、滿洲に於ける機械界の雄であつて、大陸に貢獻する所も極めて多い。武石惟友氏は滿蒙毛織會社常務取締役として、大陸財界に俊材を譲はれてゐる有爲の存在である。新潟縣武石惟英氏の二男として出生した氏は、小千谷中學を經拓殖大學に學び、大正三年同大學を卒業直ちに東洋拓殖會社に入社、俊敏なる氏は群を抜いて京城支店次長に推され後奉天大連各支店に次長として一線に活躍し將來を約束されたのであるが、昭和九年六月其の才幹を買はれて滿蒙毛織會社に入社、常務取締として社業に盡瘁し、不撓の連日を送迎して同社の發展向上を策して居る。事理に明るく、時代を知るに敏感な氏の活動は常に先驅者的存在を示し出色の名を譲はれ、豪宕洒落な性格は霸者的風格を備へ堂々たる威容を保つてゐる。馳て來るべき日滿支提携の指導者として多望。

滿鐵を始祖とし、邦人の大陸進出が最近特に著しくなり、經營事業も劃期的進展を見せてゐる事は、國運興隆の實體を表はすものとして洵に慶賀に堪えない。滿蒙毛織會社は、滿洲に於ける機械界の雄であつて、大陸に貢獻する所も極めて多い。武石惟友氏は滿蒙毛織會社常務取締役として、大陸財界に俊材を譲はれてゐる有爲の存在である。新潟縣武石惟英氏の二男として出生した氏は、小千谷中學を經拓殖大學に學び、大正三年同大學を卒業直ちに東洋拓殖會社に入社、俊敏なる氏は群を抜いて京城支店次長に推され後奉天大連各支店に次長として一線に活躍し將來を約束されたのであるが、昭和九年六月其の才幹を買はれて滿蒙毛織會社に入社、常務取締として社業に盡瘁し、不撓の連日を送迎して同社の發展向上を策して居る。事理に明るく、時代を知るに敏感な氏の活動は常に先驅者的存在を示し出色の名を譲はれ、豪宕洒落な性格は霸者的風格を備へ堂々たる威容を保つてゐる。馳て來るべき日滿支提携の指導者として多望。

四國水力電気・會長

武田 謙氏

香川縣多度津町豪農武田謙氏は香川縣多額納税者にして、其の姻族たる同町武田茂祐、武田亮太郎等を並べ高きこと言ふまでもない。氏は明治二十二年二月先考定治郎の長男として出生、大正元年家督を相続し祖業を繼いで農を營む。純情素朴の士であつて地方公共の爲に盡瘁する所が頗る多い。現在多度津銀行頭取、四國水力會長の外、讃岐貯蓄銀行を始め十指を數ふる會社に重役として就任し、事業界、金融界の牛耳を握り、堂々として財界に君臨して居る。母堂モト刀自（元治元・一〇生）尙健在であつて、之に仕ふるに至哀を盡し孝養至らざるなしと聞く。従つて氏の四男一女亦風を望んで孝順な事は定評であり、令室末さんを中心として一家團圓の美をなし、家門の繁榮愈々確固たる事を想察せられる。時局は財界に望むこと多く、時流は社會構成に改組を加へんとしてゐる。國家的指導的地位に有る氏の責務に一層の重大性が加はつたのである。

山文商店・社長

武田 次七氏

武田次七氏は株式會社山文商店社長並びに共同電気株式會社社長として兩主宰の要位にある人物である。氏の閨歴に就ては判明を缺いで居るが其の出生地は靜岡縣沼津市近郷で、明治十四年一月武田次郎吉氏の二男として生れ、明治四十年兄美代吉方より分家獨立したのである。夙に青雲を望んで帝都に出で凡ゆる艱苦と缺乏とを忍び苦學し、知能の啓發に精進し各方面に實地の修練を積み人物を磨いた。素より敏捷にして機略湧くといつた氏の天稟は愈々練られて實力ある手腕家になつた。山文商店に勤務すること多年、氏の才幹は久しく池中のものでなく、果進して取締役に推され、今や社長の印綬を帯びて、堂々たる財界の存在となり、東京府多額納税者に列し名實共に財界の領袖と十二分の貫録を備へて居る。婿養子篤幸氏は慶大出身者であつて現に山文商店取締役として、父子相並んで要路に立ち、活躍の擴充強化を策して、専心努力して居る有様で斯界の信望は愈々厚い。當代立志傳中の人であるといふべし。

東洋紙料・取締役

武田 正己氏

帝都に覇を制する大倉財閥は、正に三井、三菱に劣らざるものがある。武田正己氏は大倉財閥の一翼として東洋紙料會社取締役の要樞を擔ひ、不斷の活躍を示し、大倉商事、大倉火災海上保險を始め大倉直系傍系會社に重役として臨むこと十數社、業界に於ける偉大な存在として雄飛して居る。氏は福井縣土族武田正雄氏の長嗣子で明治二十二年の出生、五十過ぎたばかりの働き盛りである。明治四十四年東京高商卒業の後英であつて學窓を出づるや直に大倉の傘下に赴き、實に三十年間粒々の辛酸を積み營々致々として、與へられた任務に精進した至廉至直の士である。穩健篤實であつて、自ら責むるに嚴に、人を容るゝに寛恕なる棟梁の器材である。氏の三十年間の献身的至情は、幾多の現實として記録された事と信ずる。春秋豊かな偉材、氏の前途は洋々として無限である。

臺灣製糖・取締役

武智 勝氏

臺灣製糖會社は、明治三十三年武智直道氏の創立に係り、本邦製糖界の業した俊逸の材である。學窓を出るや直ちに臺灣製糖會社に入社、實務に従ひ、明敏にして事に精しき氏は調査役に簡拔せられ、昭和十四年七月取締役にして起用せられた。嚴父直道氏營々四十年の苦闘によつて興隆發展した同社に献身的努力を以て臨み、社長たる嚴父直道氏の最もよき相談相手として奮闘する事は洵に社業躍進の爲めに喜ぶべきことで、衆望の中心となつて居た。氏の將來は洋々として限りないといふべし。父子相傳へて同一軌道を邁進する事は現代に於ては容易にあり得ない。氏が先人開拓の業績を繼ぎ更に一層の飛躍を企圖することは孝道の至上といふものだ。財界に輝かしき存在として發展せんこと火をみるより明かである。

日本橋梁・専務取締役技師長

武田 富吉氏

日本橋梁株式會社専務取締役武田富吉氏は、愛知縣伊東廉氏の令弟で明治十五年三月出生し、同四十四年同縣武田誠一氏の婿養子となる。夙に東大に入學し明治四十一年工學部土木科を卒業し、實業界に入り土木建築の實地に從ひ、絶えざる研鑽を積み俊材を蘊はれた。今や新業界に於ける指導的地位を獲得し地方業界に俊敏の名を博し、専門に研究した橋梁學に至つては一大權威として畏敬せられて居る。日本橋梁會社は地方業界に在つて覇を稱へられ、隆々たる盛況を堅持し基礎當に磐石であることは、氏の運営の手腕の卓抜なるを語る一證左でなければならぬ。明敏な頭腦を以て常に研究に倦まず、時流を見ること敏感な氏であるから、八面六臂の活躍振りを示し健闘して至らざるなしと言つても決して過言ではない。東京帝大出身の養弟滿作氏、よく氏の一翼として活動し、其の活躍面の擴大強化に努力する等業界羨望の的となつて居る。時代は實際家たる經營者を希求して居る。氏の如き存在を心から喜ぶものである。

山田松坂自動車・専務取締役

武田 正夫氏

昭和代辨會社長武田正夫氏は、山田松坂自動車専務取締役、豊川電気常務取締役、豊橋電気、豊橋電気軌道各取締役に東三河の財界に覇者の歩みを續けて居る逸材である。大正六年早稲田大學商科を卒業するや、世界第一次大戦後の好調に躍つて居る海運界に入り、日本郵船會社に第一步を印した。かくて中央實業界に於て實務を見習ひ才幹を磨き、財界上下の事情にも通じ、手腕力備が練られたのであつたが、偶々郷黨に於て迎へる所となり、前記會社の要路に立ち練成された手腕を遺憾なく發揮し、事業經營の東才と稱せられて居る。氏は愛知縣武田賢治氏の長子で明治二十六年二月出生、五十の坂に達しない業界の少壯派で、確固たる人生觀の上に立ち、積極的進取的合理的活動によつて闊つて行く獨自な戦法を有し、虚にして行き實にして歸るといふ事は常に事業の上のみ止まらず、自己修養の座右銘として信奉する點愈々氏を玉成して更に高度の發展を遂げしめるであらう。好漢須らく自奮して將來を待機されんことを。

日本カーバイド工業・専務取締役

只見 晟氏

緣日や夜店の燈火代用として重寶がられるカーバイドは、銅、鐵其他金屬の熔接用熱源として廣く使用されてゐるが、之れはまた電解に依る中空素還元には必須なもので、肥料工業にとつては最も重要な役割を有つものである。わが只見晟氏は日本カーバイド工業専務取締役として斯界に闊歩しつゝある逸材であるが、同社は斯業界では本邦有数の會社で、氏の指揮采配宜しきを得て隆々たる業績を擧げてゐる。氏はまた東洋窒素工業支配人にも任じてゐるが、同社は肥料工業界の第一線に立つ花形會社で、刻下の一大問題たる米、麥其他農産物増産のためには、肥料の増産が第一義的に緊急を要する秋、銳意國策線に沿つて操業のピツチを上げ盛業を擧はれてゐる。また氏は富山電気ビル監査役も兼ねてゐる。氏は明治二十八年五月埼玉縣人只見秀質氏の三男として出生、大正十一年分家した。同九年東大法學部を卒業して實業界入りしたもので、先には三菱合資社員であつた。令兄徹氏は長崎高商校長として學界に知られてゐる。

日本染工・常務取締役

唯井 六次郎氏

關西染色業界の長老としてわが唯井六次郎氏は赫々たる聲名を馳せつゝある巨豪である。即ち氏は現在日本染工常務取締役たる他、京都染染、日本人絹染色聯合各監査役に任じてゐるが、斯業に對しては氏は永年の經驗を有して居り、且つ天稟とも云ふべき商機をみるに敏なる才能を遺憾なく發揮して經營に當つてゐるから、各社共に隆々たる業績を示して發展向上の一路を辿り、業界羨望の的となつてゐる。また氏は千代田光學精工取締役として精密製作界にも活躍してゐるが、同社もまた時局産業の寵兒として好成绩を擧げつゝある。氏は明治十九年十二月奈良縣人坂部久三郎氏の三男として出生したが、大正二年兵庫縣人たる唯井甚右衛門氏の長女あいの入夫となり家督を相続した。夙に實業界に入つて今日の大を成したものであるが、資性温厚篤實にして人情味に厚き氏は、業界の信任も厚く諸人諷仰の的となつて居り、またあいな夫人との間には二男六女を寵まれ、子福長者としてもその幸福な境涯を羨望されてゐる。

辰馬悦藏商店・社長

辰馬悦藏氏

酒は灘が日本一、酒の王者は白鷹。これはもう酒仙ならずとも、凡そ日本人ならば誰でも知つてゐること、異儀なきこと。この名題の銘酒白鷹の醸造元は言ふまでもなく西宮の辰馬悦藏商店。同店の社長は辰馬悦藏氏。氏は先代悦藏氏の長男として明治二十五年十二月生誕、大正六年家督を相続すると共に前名寛爾を改めて襲名した。同七年京大文科を卒業して、祖業の酒造業を継承したが、昭和四年業務を株式組織に改めて社長の椅子に就いた。夙に廣く實業界に風雲を伸ばして、福祿土地社長たる他、夙川土地取締役、神戸ベルベット石鹼、尼崎瓦斯、辰馬海上火災保険、大日本麥酒、大日本紡績各監査役等に任じて、雷名を轟かしてゐる。また兵庫縣多額納税者たり、多年の功勞に依り先に紺綬褒章を賜り昭和十一年には同飾版を下賜せられるの光榮に浴してゐる。氏の一族一門は富豪、名家揃ひであるが、令弟喬男氏、叔父吉左衛門氏、淺尾豊一氏、養叔父録造氏は實業家として、叔父録藏氏は名士として著名である。

辰馬本家酒造・社長

辰馬吉男氏

日本酒の本場は言ふまでもなく灘であるが、その灘の酒の中でも、「白鷹」は「白鷹」と相並んで全國に聲價高き銘酒である。その醸造元は名題の辰馬本家酒造會社で、社長は關西實業界の青年派の花形辰馬吉男氏である。氏と「白鷹」の辰馬悦藏氏は従弟仲である。氏は辰馬本家酒造の他に辰馬合資社長、夙川土地社長たり、また辰馬汽船、辰馬海上火災保險各取締役任に、關西實業界の新星として光彩陸離たる輝きを見せてゐる。氏の嚴父吉左衛門氏は關西實業界の大御所として夙に令名高く、元貴族院議員にして勳三等に叙せられ、育英事業家として紺綬褒章及び同飾版四箇を下賜されてゐる偉人で、現在も猶ほ鑿鑿として活躍を續けてゐる。氏は兵庫縣人たる嚴父の長男として明治三十九年二月生誕、昭和二年關西學院高等部文科を卒業して、實業界に入り嚴父を補佐してゐるが、現在は前記各社の社長、重役として第一線に乗り出した。當年三十五歳の氏の前途は實に洋々たるものがあり、その大成が待望されてゐる。

立石商店・社長

立石良雄氏

わが立石良雄氏は釜山實業界の元老として半島に輝く一大巨星である。即ち氏は現在釜山商工會議所會頭に推されてゐるが、釜山は言ふまでもなく朝鮮の關門として内地と半島を繋ぐ重要港灣都市であり、且つ友朋滿洲國と本邦との連關に於ても大きな役割を果しつゝあり、この地の實業界の最高指導者たることは、その名譽と共にまた大なる責任があるのである。氏は永年に亘つて同地に在り立石本店に據つて諸油業を營み乍ら、實業界に確固たる地盤を築き上げたもので、現在氏は立石商店、京城モーター、日の丸運輸、立石汽船各社長たる他、釜山自動車取締役、朝鮮重工業監査役に任じてゐるが、各社共に氏の練達湛能なる名采配下に隆々たる盛業を誇つてゐる。氏は明治十六年八月福岡縣人立石孫六氏の四男として誕生。夙に赤間實業補習學校を卒業し、昭和六年令兄仙六氏方から分家した。トモ令夫人との間には一男六女の子實に麗まれてゐるが、令息信一氏は大阪商大出身で、立石商店常務として氏を補けてゐる。

日本アンツカ・社長

立上省一氏

わが立上省一氏は關西實業界一方の雄として活躍しつゝある逸材であるが、その俊敏率の如き頭腦と才腕とは遙かに凡俗のレベルを超越してゐて、何人の追隨をも許さぬものがあり、その鬼才を畏れられてゐる。氏は現在日本アンツカ社長として名采配を揮ふほか、大阪モーター事務取締役、豐國自動車取締役に任じてゐるが、各社共に隆々たる業績を示し、斯界羨望の的となつてゐる。氏は明治二十七年十月大阪府人立上覺三郎氏の長男として出生した。夙に堺中學を卒業して實業界に身を投じ、綿商に従事し乍ら、福島紡績、泉州殖産各重役、大濱土地事務を経て來てゐる。氏は天才肌の人物でその明朗性は何人にも好感を以て迎へられてゐるが、またOBスポーツマンとしてテニス界に鳴らしてゐる。ニキ令夫人は岸和田高女出の才艶で、夫人との間には一男二女の子實があるが、また氏の三弟四妹は何れも秀才揃ひで、令弟秀二氏は文藝春秋社高級社員として、武三氏は滿洲日報記者として、各々操縦界に令名がある。

朝鮮米穀倉庫・事務取締役

立川六郎氏

わが立川六郎氏は明治時代より朝鮮に在つて、日鮮融和の爲めにも盡瘁するところ多大なるものがあり、今日は實業界の長老として赫々たる聲名を馳せてゐるが、初めは税關吏として官途に就いてゐた偉材である。氏は勳八等の帶動者で、現在は朝鮮米穀倉庫事務取締役として、倉庫業界の大立物となつてゐる他、福祿商事、平壤炭加、大池廻漕店各取締役たり、また平安鐵道、松田清商店監査をも兼ねてゐるが、識見才腕共に練達湛能の域に達してゐるから、その關係事業は何れも隆々たる業績を示して斯界羨望の的となつてゐる。氏は明治九年八月長崎縣人立川官平氏の令息として生誕したが、大正元年分家して一家を成した。夙に長崎中學を卒業して半島に渡り、官途に就いて漸時果進、平壤、新義州等の税關支署長となつたが、大正九年退官して鎮南浦倉庫に入り事務取締役となり、鎮南浦府協議員、同商工會議所常務員に擧げられ、また西鮮日報社長となり、昭和五年朝鮮米穀倉庫創立と共に現職に就いたのであつた。

伊達水産・社長

伊達翁記氏

わが伊達翁記氏は北海道水産界の重鎮として雷の如き聲名を轟かせつゝ、ある巨豪である。本邦水産界に於て北海道は最高の地位を占めて居り、刻下の戦時體制下に於ける食料品問題にとつて水産物の増産は一大課題となつてゐる折柄、氏の如き偉材が北海道漁獲界を牛耳つてゐることは誠に心強き限りである。氏は現在伊達水産社長として名采配を揮ふ他、札幌卸賣市場常務取締役として北海道中央都市札幌の臺所會社を控へて居り、また札幌商工會議所副會頭に推されて、全道實業界の指導役に當つてゐる。氏は明治十一年八月北海道人岩田増右衛門氏の二男として誕生したが、北海道土族先代翁記氏の養子となり、同四十一年家督を相続すると共に前名を改めて襲名した。夙に水産業を營み今日の大を成したもので、北海道多額納税者に列してゐる。猶ほタカ令夫人との間に二男三女の子實があり、令息秀廣、壽夫兩氏は共に慶大政治科出身の秀才で、秀廣氏は共保生命保險、壽夫氏は日本窒素肥料社員として將來を囑目されてゐる。

東邦輸送機・社長

谷民藏氏

關西に於ける製作界の重鎮としてわが谷民藏氏の聲名は夙に聞え高きものがある。氏は濃厚篤實なる君子人であるから、外面的に虚勢を張る様なことがなく、極く地味に歩を進めて來たが、その堅實主義は斯界に絶對的な信任を得て居り、且つ人徳者として諸人渴仰の的となつてゐるから、氏の事業關係は確固不動の地盤を築き上げてゐる。現在氏は東邦輸送機社長たる他、滿洲松尾鐵工廠、島田製作所、松尾鐵骨橋梁各取締役任に任じてゐるが、之等各社の内容並に事業經營振りを研討してみると、時局産業の花形として外貌に於ては股賑を誇り乍らも、内容的には兎角危氣多き製作會社が多い中に在つて、絶對的な信用が置ける要素を具備して居り、氏の人格のよさが遺憾なく反映されてゐる。誠に「事業は人格也」との金言は、至言して背かれる次第である。氏は明治九年十月大阪府人たる谷民造氏の二男として生誕したが、大正十三年令兄和吉氏方から分家した。夙に工學院建築科を卒業して製作界に入り、今日に及んでゐる。

日東コンクリート・常務取締役

谷徳義氏

一業に終始して覇を遠き將來に求めんと努力することは甚だ結構なことである。しかしながら時には變通自在、時代を達観して機を轉ずるのも亦商略の一方法である。夙に海運業を經營して好評噴々、資本の老成を誇らずと雖も堅實一路によつて、穩然たる聲價を斯界に扶植しつゝあつた谷徳義氏は、正にこの後者の好典型と稱される人物である。氏は香川縣の産谷男三氏の長男として明治二十七年四月に誕生した。高松中學校を卒業後海運業を經營しつゝあつたが、其後船具金物商に轉向斯業に精勵しつゝ日東コンクリート、大阪大理石各株式會社常務取締役に、合資會社日東コーンメーター製作所代表取締役、其他の重役を兼てあらゆる分野に亘つて營々たる努力が注ぎ込まれてゐる。したがつて氏の關西財界に於ける勢力も年を遠ふて加はりつゝあり、高潔なるその人格と相俟つて信望はいよゝ重なりつゝある。しかも四十代の働らき盛りであつてみれば今後の活躍も充分期待し得るわけである。切に自重を祈るものである。

丸物株式會社・常務取締役

谷 政一 郎氏

京都事業界に於ける白眉と目されつゝあるのは谷政二郎氏である。その地歩たるや既に磐石の如く更にその勢力を根強く加へつゝある。現に丸物株式會社常務取締役兼總支配人、合名會社物産館代表社員、其他の重役を兼て常に同地事業界に於ける推進力的な役割を果しつゝある。谷氏は金儲けといふよりは寧ろ事業育成そのものを樂しむと云つた風がある。したがつて氏の關係する諸事業にはことごとく、氏の精気が吹込まれてゐる。丸物然り、物産館また左様であり、關西自動車株式會社もその例にもれない。したがつて谷氏の滿々たる覇氣のおもむくところ常に社業の好轉を伴はずにはをかかない。氏は京都府人、中林捨治郎氏の二男として明治二十六年四月に誕生したが、後に谷家に迎へられて同三十六年に家督を相續した。夙に實業界を志し前記諸會社の智將としてその大黒柱的存在には既に定評があり、今更こゝに贅言を要せざるところである。未だ春秋に富む身の前途たるや洋々、その飛躍こそ期待できる。

帝國自動車工業・社長

谷口贊三郎氏

氏は香川縣人宮川佐平氏の四男にして明治二十四年十二月の誕生であるが、其後大正六年に至つて谷口七五三八氏の養子となつて昭和五年に家督を相續したものである。大正十一年に京都帝大經濟學部を卒業して十五銀行に勤務したが、もとゞ／＼社員ぐらゐで満足するやうな谷口氏でもなければ、又、卓抜なる手腕を發揮する機會とでもなく、長夜の數と俱に空しく世相を傍觀しつゝあつたのだが、時機到來して昭和六年東京瓦斯電氣工業株式會社に轉じた。斯くて同社に精勵すること二年途に取締役兼支配人の樞席に就いたが、昭和十三年十月更に招かれて帝國自動車工業株式會社社長に就任した。曩に東京火藥工業、協同國產自動車各株式會社の重役を兼て令名あつたに、谷口氏の新分野開拓の手腕、力量は實に業界隨一の評があり、氏の才腕が示されるところ常に同社の進出があり、力の人として同社を牛耳つてゐるのである。かくて同社も谷口氏存在を得て業績一變し茲に顯著な發展を見るに至つたものである。

土木建築請負業

谷 萬 吉氏

北海道土木建築界のホープとして業界に覇を唱へつゝあるのは、北海道多額納稅者として今を時めく谷萬吉氏である。今やその業績も益々進展して一年を通じての請負高に至つては斷然他の追隨を許さざるものがあり、幾多の經驗と優秀なる技術とは常に斯界に範を示してゐる。人の幸福には色々あるもので、樂々と親の遺産を繼ぎ格別苦勞もせずに、のんびりとして居る人もある。これも一つの幸福であるかも知れない。しかし眞の幸福といふものは苦樂の段階を経て、始めて味はれるものでなければならぬ。昔の微々たりし谷氏が明治二十三年志を抱いて北海道に渡り、農業に従事しつゝ同三十五年浦河町に於て土木建築業を初めたのをきつかけに、現在では堂々たる地位に進出、更に偉力を驅つて日高自動車株式會社社長、日高運送株式會社取締役其他の重役を兼任、花形的存在なると思ひ合すれば快心の至りであると共に感激も蓋し無量なものがあらう。曩に日高廳振兩國土木請負業組合長に推され現に浦河町會議員である。

明治海運・専務取締役

谷口茂雄氏

關西實業界に巨歩を印しつゝ公職をも兼て精勵、實業報國に邁進する氏の姿こそはまことに颯爽たるものがある。氏は兵庫縣の産、谷口信太郎氏の二男として明治十三年一月に誕生、同三十九年に令兄武一郎氏より分家したものである。十年一日の如しといふ言葉があるが、その言葉の如くに歩んで來たのが谷口氏であつて、畢竟その隱忍努力が立派に實を結んだわけである。現に明治海運株式會社専務取締役、株式會社神戸海運俱樂部取締役其他の重役を兼るほか、海軍審議會委員、日本船主協會理事、船舶改善協會管理委員等の任にあつて斯界に牢固たる地歩を築きあげると共に、その手腕のおもむくところ實に八面六臂、あらゆる諸事業にたずさはつて英才に至らざるはなき有様である。時局の招來と共に經濟界の波動は各方面に多少の影響を與へてゐるものゝ、氏の場合は寧ろ時流に掉して一路霸業達成に邁進しつゝあるのである。しかも分別は上乘、手腕も更に鍊磨され、人格も年と共に圓滿を加へつゝある。

大阪窯業セメント・専務取締役

谷口徳政氏

大阪窯業セメント株式會社並に大阪窯業株式會社専務取締役として威令を行ふ谷口徳政氏は、我國化學界の錚々たる技術者として廣く知られてゐる。技術方面はもとより經營部門を指導する才能にも富み、兩社の重要ポストに在るのはまことに適材適所の觀がある。氏は兵庫縣土族谷口政堅氏の長男にして明治十二年七月に誕生した。明治三十七年東京帝大應用化學科を卒業後、一時滿洲軍通譯となつたがやがて東亞セメント株式會社に入り間もなく工務部長に進み、次第にセメント界に通曉する身となつた。而して優秀なる技術家であると共に一面時局の認識に鋭敏なる氏は、時局の重大と共に國策の事業が一躍急激な發展を示すと看取るや、氏はこの機會を巧みに捉へて善處し、遂に前記の如き要職を帯びつゝセメント製造業改善委員會委員に選ばれるなど、事業家としての天分はもとより圓滿なる人格も充分窺えるといふものである。斯界の長老だけにその地歩も既に牢固として揺ぐべくもなく氏も亦更に精進をつゞけてゐる。

兼松商店・常務取締役

谷口三樹三郎氏

株式會社兼松商店は大正七年三月の設立に依り現在資本金七百萬圓(全額拂込済)本社を神戸市林田區御崎町に置いてゐる。濠洲羊毛の輸入は大部分を同社が占めてをり、羊毛以外の濠洲向雜貨貿易に於ても斷然他を壓してゐる。云はゞ濠洲貿易の開拓者でありその利益も毎期二割以上を加算し餘裕裡に一割割當をつゞけてゐる。谷口氏は兼松商店譜代の臣であり、大正五年同店に入つてからこのかた苦樂を共にしてゐる謂はゞ切つても切れぬ間柄に置かれてゐるのである。何しろ斯業にかけては人後に落ちぬ蘊蓄を持つてゐる氏のことではあり、かへて加へて永年斯業に従事してゐたに、合理的な經營法には萬遺漏のあらうはずがない。氏は愛媛縣人谷口信太郎氏の二男で明治二十五年一月に誕生し昭和二年に家督を相續した。大正四年に神戸商業學校を卒業し同五年に兼松商店に入り、同十年より昭和五年まで濠洲、シドニー、メルボルン等の各支店勤務を経て常務取締役となつたもので海外通として一見識を備へてゐる。

太陽電線・社長

谷口直之氏

大阪電氣事業界にあつて一城を築きつゝ其名を馳せてゐる人に谷口直之氏が居る。氏はもとゞ／＼醫學を志しあつたが刀圭界にその名を高めんものと精進しつゝあつたが、大正四年令兄の計に遭て素志を覆がへし、遺業たる谷口電線製作所を繼承し大正十年太陽電線株式會社を創立して専務取締役となつたもので、其の後の發展に伴ない現在では社長として號令しつゝあるほかに、大阪商工會議所常議員、電氣同業組合評議員議長、中央電氣協會並びに大阪工業會、大阪實業協會等の役員を兼ね、名實共に斯界のリーダー格として今や押しも押されぬ貫祿を示しつゝある。氏は奈良縣の産、谷口藤三郎氏の二男として明治十六年十二月に誕生したが、幼少の頃より俊才は既に群童を壓して早くも大器の質たることを想はせてゐたが、衆目の一致するところすこしも違はず、今や亡き令兄の跡を襲つてその事業をして更に光輝あらしめたのは、一に氏の才腕に負ふところ甚大であり、熱誠の貫徹を見たる今日その面目躍如たるものがある。

三菱商事・常務取締役

谷田友治氏

「三井三菱」といふ言葉があるが、それは三井を指すのでもない。兩者共に三菱を指すのでもない。兩者共に日本財閥を代表する存在ををり、兩々相並行して日本實業界を構成する双壁なのである。所謂三菱財閥に包含される事業網には實に百二十餘の諸會社が存在してゐるが、就中直系會社の優なるものに三菱商事株式會社がある。流石にその堅陣は微動だにせず能く大三菱の貫祿を保ちつゝあり、配役にもまことに其人を得てゐる。中にも一際目立つのが常務取締役たる谷田友治氏の存在である。氏は兵庫縣人谷田彦三郎氏の長男として明治十八年十一月に誕生、同三十九年に家督を相續したものである。明治三十五年神戸商業學校を卒業と共に三菱合資會社に入り、大正十一年に三菱商事會社金庫部長にあげられ、次で同社常務取締役兼金庫部長となり同十一年には三菱合資會社理事となり、同十二年改組と共に參與監察員を命ぜられ今日に及んだもので、三菱地所株式會社取締役其他三菱諸會社の重役を多數兼て令名愈々高い。

貝島炭礦・取締役

玉井磨輔氏

氏は山口縣士族玉井鼎氏の三男にして明治十九年八月に誕生した。明治四十二年關西大學を卒業後實業界に入り木津川製作所、東亞電機、貝島石灰工場、大辻岩屋炭礦、貝島木材防腐、貝島乾餾等諸會社の重役を経て現在の如く貝島炭礦株式會社取締役並に貝島合名會社理事其他の重役を兼て總帥貝島太市氏の好き股となつて合名なだゝるものがある。同社は現在資本金二千七百萬圓、本社を下關市唐戸町に置く我國屈指の石炭會社である。同社創業の濫觴は遠く明治初年の頃、現會長貝島太市の先代太助翁が福岡縣下に於て幾多の炭坑開發を行つたのに始まり、爾來時勢の進展と共に隆々たる發展をなし、明治三十一年には遂に株式組織となつて同社を創立したもので、其間多くの有力な炭礦の買収合併等を行つて資本を増加し現在の如く日本有数の優良會社となつたのである。勿論貝島氏の卓腕もさることながらその脊後にあつて努力を積んだ氏の功績をも到底見逃すわけにはいかないのである。

玉置綿布染工・社長

玉置吉之丞氏

和歌山縣に於ける綿ネル捺染及起毛工業の權威はと問へば、何人も異口同音に玉置吉之丞氏と答へるのであらう。ことほどさやうに玉置氏の令名は夙に知られてゐるところなのである。財界生活既に三十年に垂んとし手腕は益々練磨される一方、人格も更に洗練されるに至り、今や和歌山財界に颯爽としてその巨姿をひるがへしつゝある氏は和歌山縣の産吉田萬右衛門氏の三男として明治十九年八月に誕生其後玉置家に迎へられて同四十二年に養兄文吾氏方より分家したのである。夙にカナダに遊學し次で米國南加大學に政治經濟學を修めて歸朝後、綿ネル捺染及起毛工業に従事、その後の加速度的發展に伴ない遂に輝やく今日を迎へたもので、現に玉置綿布染工株式會社長並に内海紡績株式會社常務取締役たるほか、綿織物と和歌山縣同業組合副組長、和歌山縣會議員同參事會會員、御代正酒造會社重役等に擧げられ、年と俱に加はる信望は昭和七年衆議院議員に推され同十一年には再選さるゝ事によつても充分うなづける。

南海倉庫・常務取締役

垂井清之助氏

質商を營みつゝ垂井合名會社代表社員並に南海倉庫株式會社常務取締役其他の重役を兼てゐる垂井清之助氏こそ、實に和歌山財界にとつては大きな存在となつてゐる。現に和歌山商工會議所常議員であり縣下多額納稅者の列に加はつて威風將に堂々たるものがある。努めて倦まざる者に幸ありと云ふが、精勵格勤者々として牢固不動の地位を斯界に占め、錚々たる名を轟かせる氏の今日を顧みれば正にその至言たるを知るであらう。氏は和歌山縣の産、垂井清右衛門氏の二男として明治十九年二月に誕生、大正十年に分家したので夙に家業に従事しつゝ實地に就きて研鑽精進の年月を積み、更にその驥足を伸ばしつゝ事業界にその名を輝かせるに至つたもので、公事たるを私事たるを問はず唯誠實勤勉をもつて一貫し、常に眞摯なる實踐的態度を失はざればこそ、齊家治産而して又公人としてよく社會の福祉増進に盡瘁貢獻し、その功勞を誦はれるに至つたものである。資性濃厚にして玲瓏たる人格は一層家名に光彩を添へてゐる。

昭和電線電纜・専務取締役

丹下堯男氏

深奥の學識あり高潔なる人格を有し加ふるに經營の手腕卓越せる人を求めるとき、まづ第一にその指を屈すべき人に昭和電線電纜株式會社専務取締役丹下堯男氏がある。氏は岩手縣人丹下謙吉氏の長男にして明治二十一年七月に誕生した。大正三年東京高等商業學校を卒業すると直ぐその足で古河電氣工業株式會社に入り、爾來熱誠をもつて奉仕、致々として精進を累ね仙臺出張所主任、作業課長代理、販賣、文書、業務各課長、更に販賣部長等を歴任し業績上昇の一途を進むる盛況を招來するに至つた。商工業が平時に於ける戦ひなりとはよく云つたもので、戦争が生命を賭すところに勝利がある如く、商業も亦渾身の努力を傾注するところに繁榮が伴ふのである。氏の如く目的に向つて常に勇往邁進萬難に屈せず全精神努力を傾注したればこそ、輝やく繁榮の日を迎へ得たのであつて、氏が如何に秀れた事業家でありその經營に卓抜な手腕力量をもつてゐるかは、同社の發展に見るもよく首肯し得るのである。

哈爾濱セメント・専務取締役

玉置萊次郎氏

曩に日本整毛工業株式會社取締役として好評を浴びた玉置萊次郎氏は現在哈爾濱セメント株式會社専務取締役、三機工業株式會社監査役としてセメント事業に或ひは工業方面に豪邁識の手腕を揮ひつゝある。氏は岐阜縣の産、玉置義行氏の二男として明治十四年八月に誕生、同三十七年に從兄勝五郎氏方より分家したものである。明治三十八年東京高等商業學校を卒業と共に三井物産會社に入り、大阪支店、大連支店、棉花部參事、天津、ニューヨークカナダ各支店長及び大阪支店長代理を経て昭和十年七月小樽支店長兼木材部長となり、更に其後の精進に依つて遂にセメント界にその人ありと知らるゝに至つたもので、氏自身も亦烈々たる國家意識に立脚して、文字通り席あたゝまるいとまなきほどの奮闘をつゞけて、今や氏自身大號令を發しつゝ、最高の實權を握つてゐるのである。したがつて業界に於ける潛勢力にも測り知れざるほどの偉大なるものがあり、進取的なその足取は壮志を抱く者に大きな示唆を與へてゐる。

玉塚不動産事業・社長

玉塚締伍氏

玉塚締伍氏は山口縣士族藤本範亮氏の三男にして明治二十六年三月に生れた。昭和三年に當家祖先の玉塚姓を稱して別に一家を創立した。夙に日本大學專問部經濟科及同校高等專攻科を卒業して業界に身を投じ、大正十二年には富士土地企業社を創立したのであつた。次で昭和五年に玉塚不動産事業社を起して不動産事業を經營、傍ら玉塚不動産經濟研究所を起して不動産の研究を續けてゐる向學の士である。氏の著書に「不動産金融原論」「不動産金融の仕方」「家主讀本」「土地家屋擔保の話」「貸家投資の研究」等あり、多年研鑽の成果として素晴らしい反響を起したものであつた。これをして氏の頭腦が如何に緻密なるかは窺知出來得やうが、廣く世間の信望も篤く、將來益々伸びるであらう大器である。趣味は旅行と寫眞、濃厚篤實にして近代的スタイルを有する氏の一面がうかゞはれる次第だ。現統制經濟下にある經濟界に於て氏の如き人材あるは洵に力強く、今後尙一層の研究を積まれんことを希望する。

東洋キヤリア工業・専務取締役

丹吳竹次氏

汎く斯界に人物の種々相を點檢すれば機略をもつて鳴るものあり、膽斗の如きを誇るものあり、或ひは又倫を絶する奮闘力をもつて誦はれるものもある。然りと雖も丹吳氏の如く温厚の資にして周密の質、しかも一片稜々の氣骨を藏して正義を往々に敢て水火をも恐れず、且つ高邁卓抜なる識見手腕を有する渾然玉の如き人格者に至つては、到底底に多く求むべからざるところである。氏は新潟縣の産丹吳長松氏の令弟にあたり明治二十一年九月に誕生、同四十五年東京高等商業學校を卒業した俊秀で、三井物産本店機械部勤務を経て大正十四年三機工業會社に轉じ鋼材部長となり、更に取締役にあげられ同社運籌の上に卓抜なる手腕を發揮してゐたが、今やその快腕はいよ／＼伸びて東洋キヤリア工業株式會社専務取締役を兼て廣く業界を馳驅するに至り、遂に今日のかゞやかしき成果を把握するに及んだのである。したがつて業界に於ける氏の偉大なる存在は誰しも否定し得ないところで斯界の立役者たるを矚せしめてゐる。

生盛藥劑・社長

丹澤善利氏

生盛藥劑株式會社、昭和製鐵、常磐合同炭礦各株式會社々長のほかに多數の重役を兼て今では押しも押さされぬ實績を備へてゐる丹澤善利氏も、其過去を尋ねればそこには血の滲むやうな努力苦闘が秘められてゐるのである。抑々當家は元甲州市川大門町の里正であつたが、時運に恵まれず微祿に及んだが先代善利氏の時に若冠の身をかへりみず、單身京都に出で奉公し、詳さに商機を把握するに力めた。斯くして充分に修養を積み自信を得るに至つたので、歸郷の上甲州鐵澤町に藥種商を營んだ。之ぞ生盛藥劑の元祖とも云ふべきで、その後同製鐵所を東京に移し業勢益々隆盛となり、遂に今日の基礎を築く因をなしたのである。氏は先代の二男にして明治二十四年二月に誕生、同四十一年家督相続と共に前名豊春を改め襲名に及んだものである。錦城中學卒業後祖業を繼承して能く精勵、祖先の名を一層に擧げると共に事業界にも錚々たる名を馳せて、その功績もけつしてすくなくないのである。

東京動産火災保険・社長

反町茂作氏

ある人に東京動産火災保険並びに東神火災保険株式會社々長の反町茂作氏が在る。氏は新潟縣の産、反町茂平氏の長男として明治二十一年十月に誕生し昭和八年に家督を相続した。明治四十四年早大商科を卒業し、大正二年に反町新作商店に勤務したが、同六年に至つて東京動産火災保險會社の創立に參畫してその専務取締役となり、同九年更に東神火災保險會社を創立するなど、斯界の興隆に貢献すること尠からず、今や兩社の社長として押しも押されぬ實績の下に大いに期待がかけられてゐる。氏は一社員から叩き上げて今日の榮進を遂げた人だけに、謹嚴寡黙裡にも親しみ深い情味があり、社員への督勵にも妙を得てゐる。それといふのも氏が人情の機微に通じ、こまかいところまで思いやりがとゞくせいである。寸暇を割いて讀書に親しむほか美術の造詣深く、東洋古陶磁器の研究及びその蒐集に力を入れてゐる。

動産火災保險事業の改善及び協定統制に盡力すること尠からず、名實共に斯界の權威をもつて畏敬されつゝ

日本拓殖・専務取締役

張園氏

源家の關係會社に勤むる傍ら驥足を廣く事業界に伸して、あらゆる業務に携はるほか、郷土關係の幾多の公職に推されるなどして、家名を大いに昂るに至つた。即ち大永興業、靛泉製氷、日本醬油、長春商店等の重役にあげられ、昭和六年以來臺北市會議員、宮前區長等の榮職にあつて自治に盡すなど、八面六臂の活躍をほし、氏の全貌を髣髴さすに充分なるものがある。現に日本拓殖株式會社専務取締役並に大永興業株式會社常務取締役として、その威令のおもむくところ山野の嶮をも征服するが如き觀があり、その規模陣容はいよゝゝ強靱を加へつゝある。氏はあくまで初志貫徹に邁進する強力な意思の所有者である。かうした信念の人は時に公共方面を忘却しがちであるが氏は然らず、喜んで自治公共に盡し諸種の公職を引受けてゐる。一方趣味にも廣くゴルフ、乗馬、寫眞、麻雀等を樂しんでゐる。

丸榮商事・社長

千葉金三郎氏

工の栗本勇之助氏、或は久保田權四郎氏、稻畑勝太郎氏等々であるが、その群雄割據の中にあつて斷然擢んで、雄飛を續けてゐる人に千葉金三郎氏が在る。氏は千葉金三郎商店代表社員として鐵商を營み、傍ら丸榮商事社長、尼崎製鋼所取締役、大阪製鐵監査役として八面六臂の活躍ぶりを見せてゐるのだ。明治十四年二月に、氏は京都の人千葉金治郎氏の長男として出生し、大正四年に家督を相続したが、幼より實業界に志を樹て、建闘し、自立しては獨力獨行遂に今日の軍需景氣時代に大いに才腕を揮つて、大阪財界に名を成すに至つたのである。氏は常に粗衣粗食に甘んじてひたすら産業報國の誠を盡し、これが近頃「大千葉金」と云はれる千葉氏であらうかと驚くばかりである。全く金錢に恬淡にして情誼に篤く、報國の一念に燃えて黙々と働き續けてゐる氏の日常生活には、たゞ々々敬服のほかはない。

關西鐵鋼界は、こゝ數年來の軍需景氣で急進出した實業家が相當に多い。中山製鋼の中山悦治氏、栗本鐵

中清自動車・社長

張清泉氏

幸福にも色々段階があるが、成功にも色々段階がある。財閥の庇護を受け好運に恵まれた財界人も尠なくない中に、氏の如く艱難によつて玉にせられた適例もある。氏は裸一貫主義の剛氣を持ち徒らに他に頼ることを排撃する。氏は近代立志傳中の白眉であり、しかもその生涯がごとく努力奮闘に彩色されてゐることは、國家非常時の折柄以て國民の龜鑑として仰ぐに足るものがある。氏は臺中州の出身で明治二十一年八月に誕生した。夙に實業界を志したゆゑ精進、遂に獨立して堂々と材木商を営むやうになつた。爾來よく斯業に勤みつゝ更に餘力を纏つて自動車業に進み、昭和七年には中清自動車會社を創設してその社長にあげられるなど、よく行路開拓の實をあげ、更に東洋商會を主宰して自動車代理店及び部分品商を營み、平和自動車會社監査役を兼ねるなど、盡くことなき意慾を縱横に發揮し、多數同業を牽着たらしめてゐる。かくして功成り名顯はれて資力も増進、その勢力は次第に加はるのみである。

義順商事・専務取締役

陳金木氏

長、臺灣勸業信用組合理事等の重職を兼て、彌が上にも令名を高めつゝある。氏は臺北州の出身で明治三十二年九月に誕生した。大正五年新高銀行に入り同十二年、同行景尾出張所々長を拜命したが、後に之を辭して遂に獨立、陳義順商行と稱して肥料雜穀等の輸入商を營んだが、其後の順調なる發展に伴つて昭和六年、之を株式組織に改めて其専務取締役に就任したもので、よく祖訓を遵守して地方産業の開發に意を用ひ、地方開發の人的資材養成のための秀才教育、並びに自方自治體の整備改善等のための社會事業施設、就中組合の圓滑なる運営と實際効果の顯揚に努力した功績は大きく、熱誠溢る采配は地方一般から絶讃を受け、大いに名望を高めてゐる。斯の如く緩みなき氏の熱意、努力、德行はひとり郷土一圓の誇りたるのみにとどまらず、延いては邦家の福祉増進のために祝福せざるを得ないのである。

義順商事株式會社専務取締役として臺北市に颯爽呼號しつゝある陳金木氏は、又臺灣肥料移入同業組合副會

オリエンタルメタル製造所主

津村芳三氏

立者だ。明治十七年十一月生れ、和歌山縣人津村仁兵衛氏の三男で、夙に神戸中學を卒業して鐵道局に入つたが、後大阪商船に轉じた。大阪商船は人も知る海運界の寵兒で日本郵船に對峙して堂々の陣を布いてゐるが、氏はこゝで大いに活躍將來事業家として獨立出來得る確信を得た。そして燃料商を營んで堅實に基礎建設に邁進したが、昭和二年に至り前記のオリエンタルメタル製造所を設立して建築屋根材料を營業、全責任を負ひつゝ獅子奮迅の健闘振を見せてゐる。まことに類稀なる努力健闘の人で自己の信念に生きる信仰家、クリスチャンである。何らの財閥的背景もなく獨力獨行苦難の道を踏破して今日を得た氏の努力と信念の強さには全く敬服せざるを得ない。この強き信念もて烈しく吹き捲くる世の怒濤を越えて事業家として業界に雄飛せられんことを祈るは、ひとり筆者のみではあるまい。

尼崎市稻川新田に營業所を持つて鐵横に快腕をふるつてゐる津村芳三氏は、オリエンタルメタル製造所の創

旗山拓殖・専務取締役

陳光燦氏

格勤の人であり、ひとたび接すればあたかも春風駘蕩の如き感を催すのである。現に高雄市商工會長、澎湖廳民會長、旗山拓殖株式會社専務取締役等の任にあつて、實業界に於ける巨頭の一人として力強い歩みをつゞけてゐる。氏は澎湖廳の人にして明治十七年八月に誕生した。高雄第一公學校第一回の卒業生にして、後更に漢文書房に於て修學し、勇躍實業界に投じたものである。氏の實業界進出の據點はいふまでもなく旗山拓殖であるが、單に事業に驥足を伸ばすのみならず、前記の公職をも兼ていよゝゝその信望を高めてゐる。今や氏は人格にいよゝゝ圓滿味を加へてきたが、内に身を持つことは極めて堅く、名實共に業に範たるものがある。而も卓抜なる手腕を有して臺灣財界の立役者としては、押しも押されぬ地位について居り、將來同地財界に益々重みを増して行くことは何人もよく之を認めてゐる。

臺灣財界に於ける屈指の人物として陳光燦氏をあげることは何人も躊躇しまい。氏は資性謹嚴にして精勵

東洋通信機・社長

津守英五郎氏

人津守小三郎氏の五男にして明治二十四年五月生れ、大正十年に分家して獨立事業界に雄飛したのである。また氏は明治四十五年東京高工電機科を優秀な成績で卒業した生粋のエンジニアだが、その技術の優秀さは氏を知る程の者をして舌を捲かせると云ふ。夙に東洋無線電信電話、明治電機各會社の代表取締役に就任して技術面の指導及び經營面の強化に専心傾倒したが、昭和十三年に至つて兩社を合併東洋通信機株式會社を創設して同社々長に擧げられ、絶大なる信望を擔つて業界に雄姿を現した。東洋通信機創立後、日未だ淺しと雖も早くも業界に飛躍して堅陣を誇るは、社長たる氏の並々ならぬ手腕を示すものでなくてはならぬであらう。氏の前途、當社と共に春秋に富むはこゝに敢て明言を憚らない。時局下重大責務を帯びた通信機業を堅持する氏が愈々大きく伸びんことを只管期待して止まないところだ。

素晴らしい事業的才腕を有する事業家として今堂々無敵を誇つてゐる人に津守英五郎氏がある。氏は和歌山縣

中島製作所・取締役兼放出工場長

津田 湊氏

氏は鳥取縣の人津田鐵松氏の長男として明治二十年二月に出生した。同四十二年に熊本高工機械科を卒業して實社會にスタートし、大藏省、專賣局、大阪地方專賣局技手等を経て株式會社中島製作所に入社したが、これが大正六年であつた。中島製作所の雷名は、赫々の信望と共に津々浦々にまで響き渡つてゐるが、云ふまでもなく中島製作所は、航空機、自動車並に諸機器具の製作を以て主要業務とする會社であるが、今次支那事變以來、歐洲再戦に依る時代の急激に影響せられ、一躍製作界の寵兒として雄飛するに至つた。然して社礎の磐石の固きを加へ、更に人的要素の強靱性を擁してゐる。津田湊氏は當社にあつて卓抜なエンジニアとして活躍、上下の信頼極めて篤かつた故、同社改組と共に放出工場長に就任、更に昭和八年、拔擢されて取締役の要職に任ずるにあたり愈々當社の輝ける存在となつたのである。願れば氏の奮闘努力史は随分と目撃しき健闘の歴史であつた。だが活躍はこれからだ、奮起を望む。

朝鮮鑛業開發・事務取締役

都野 正一氏

朝鮮鑛業開發會社は朝鮮に於ける優秀な會社であり、其の業績に於ても亦第一線的存在を示し將來益々發展すべき地歩を有してゐる。都野正一氏は同社事務取締役として同社の經營一切の責に任じ、大正十一年以來業界を襲つた幾多の波瀾曲折を突破し堂々たる偉容を以て君臨する同社の礎石を築いた傑物である。氏は明治十五年山口縣都野豐之助氏の長男として生れ、同四十三年東京帝大探鑛冶金科を卒業した逸材である。學窓を卒業するや堀鑛業會社に入り技師長となつたが、後日本窒素肥料に鑛業課長として就任し社業に貢献する所多かつた。大正十一年現職に轉じ茲に自己の天職を見出し碎身粉骨を辭せずして社運興隆に向つて奮闘すること二十年、功業は遂に實を結んで同社は磐石の基礎の上に置かれるに至つた。洵に氏の飽くなき精進によるものと信ずる。宜なる哉朝鮮業界に重鎮的な存在として信望を擡はれ今後の活躍を期待せられてゐる。鑛業資源に乏しき本邦に於てその開發は刻下の急務であるだけ氏に信頼する事も深い。

塚本商店・社長

塚本 定右衛門氏

滋賀縣切つての多額納税者にして、正八位、陸軍歩兵少尉の塚本定右衛門氏は先代定右衛門高才に長し一行商より身を起し、一代にして巨萬の富を得たる立志傳中の人物であつて、氏は先代定右衛門の長男として明治二十年出生した。資性英邁にして驕らず、高ぶらず、好個の典型的紳士として、又、學識と識見共に秀れ、現代に對する理解力の深さは、氏の關係する塚本商店を通じて餘りにも明白である。氏のモットーとする所は正直一本槍と云ふことである。この信念を以つて世に處すれば如何なる難事も恐れる所なく、亦支障し挫折するものではないと云ふ。實にこの信念こそ、榮達出世の唯一の道であると道破してゐることは我々深く傾聴に價する所であらふ。氏がこの精神を以つて業務に忠勤してゐることは同商店が今日の隆盛を見て明白である。斯くて氏の顯智は益々發揮され、今後の活躍が期待されるは勿論、人格亦洗練され、多額納税者としての貫祿と共に愈々光輝を加へるである。

塚本電氣製作所・社長

塚本 爲太郎氏

學者にして實業家、世にその名を擧げるならば枚擧に遑がない。しかし實業家ならんために學者的研究を積み、そのエネルギーの全くを、斯道に傾ける人物は亦尠ない。その中にあつて、斷然指を屈するに價ひする青年實業家が一人居る。それは餘人ではなく實に、塚本爲太郎氏その人である。氏は滋賀縣人にして明治三十四年出生、身は若冠にして福宮興業株式會社の取締役である。その學歴を瞥見するならば、慶大を卒業するやロンドンに遊び、ロンドン大學を卒て、更にロンドンポリテクニク・ハイスクール・オブ・コンマースを卒業した程の異色ある人物である。氏が海外に於ける事業知識にマスターしてゐることは前記經歷から云つても當然のことであり、その卓抜なる頭腦を通して時代を見るに敏であることは何と云つても鬼に金棒である。氏が、その豊富なる學識と手腕を以つて關係する會社を擧げると、第一に、塚本電氣製作所、塚本商店であり前者は社長、後者は取締役である。尙、福宮興業の重役でもある。

越中島木村倉庫・社長

塚越 兵三郎氏

氏は東京府土族、塚越鈴彦氏の二男同卯太郎氏の弟にして明治十六年二月に出生されたのであるが、大正八年分れて一家を創立された。明治三十九年早稻田大學政經科を卒業してより、豊富なる學識と明敏な頭腦は益々冴へ、其處に江戸ツ子として慎重な決斷力を持つて世に處し、歩一歩／＼氏の印する足跡は偉大なるものである。即ち越中島木村倉庫株式會社社長、小池證券株式會社常任監査役、帝國製麻株式會社監査役、小池株式會社理事等の各重役を兼ねて居られるを見てうなづけるのである。其の關係されて居られる處を見ても、それが一聯の系統のものにあらずして、木材に金融に、製麻に、と之凡人にしてなす能はず、まことにもつて氏の多角的な經營手腕と、豊富なる才能の然らしめる處であり、趣味の點に於ても讀書家として定評があり、讀み込んだる智識が血となり肉となつて、氏の今日の人格をあらしめたる所以であらう。亦宗教も浄土宗を信仰せられ、厚き信仰家として、無愁恬淡、篤實の士である。

東洋棉花・事務取締役

塚田 公田氏

越後人は物固く實直であるから人に信用を篤くするのである。と之世評であり、それが眞たるのか全く越後方面からは人材が多く輩出せられて居る。氏も新潟縣人として早くより業界にスタートして粒々今日の榮を爲したのである。氏は塚田新治郎氏の長男にして明治十八年九月に出生し、大正十四年に家督を相続してゐる。明治四十年に東京高商を卒業して直ちに實業界にデビューし、あの歐洲大戰の好景氣時代に又其の後の不景氣時代を兩極端の社會の荒波を浴び乍らも、一向に屈する事なく、卓越せる頭腦と、深刻に味へる經驗は一段と氏の手腕に活をつけたものである。即ち、東洋棉花株式會社事務取締役、東洋絹織物、南北綿業、内海紡織等の各取締役、中央紡織、上海紡織の監査役を兼ねて居れる。我が國貿易の第一線にトランクする重要産業に、又國策の重要な將來性を有する前記諸會社の然も重要なポストにあつて、日夜東奔西走事業を通じて國家に奉公される氏は誠に産業界財界の偉材である。

大泉鑛業・社長

塚本 長三郎氏

塚本長三郎商店社長として業務第一線に活躍する氏は、茨城縣の生んだ異彩ある人物であつて、凡そ商賣は誠意の問題であると云ふ商法格言をものして、同店內にその主義を提供し、實行せしめた堅實無二の事業家である。氏は明治二十年出生、學歴としては特に記すべき程のものはないが、天來の正直一方の性格は氏の信用を商界に高め、人望を一身に蒐めて今日の如き隆々たる商店を見ることが出来た。而して氏は、世情に明るく、人情の機微をよく明解し、苦勞人だけに、仁徳のあることは筆者がこゝで記すまでもない。氏がこの仁徳と、誠意に依つて、商界に雄飛した關係會社を擧げるならば先づ、大日本製袋、大泉鑛業會社であり、その兩社長の榮職にありつゝいて南海汽船、南海炭礦、東海セメントの各取締役、竹平間製陶の代表社員であり、東京煉瓦タイル商組合の組合長、セメント陶管煉瓦所の經營に碎身し、その多角事業に亘つて、従事してゐることはまことに驚異に價するものがある。

東洋バルブ・社長

塚協 敬二郎氏

東洋バルブ會社長塚協敬二郎氏は曩に東洋モスリン會社取締役として同社の衰勢挽回を策し其の嚆矢によつて社運に新生面を開いた手腕家である。現在大同興業代表取締役、日本毛織相談役を兼務し、織維工業界に幅を利かせてゐる人物である。明治十七年二月兵庫縣塚脇門藏氏の三男として生れ、明治四十一年神戸高商を卒業した英才で學校を出づると共に實業界に入り、青年時代の覇氣に任せ各方面に驥足を伸ばし風雲を望んで誇々の氣を吐いた。氏の豪宕明快なるよく談じよく語り仕事にかけても即決斷行實にきび／＼して男性的な典型、然し精緻な情味が内から溢れ、親しみ易くはあるが馴れ難い處に氏の棟梁の面目がある。苦勞人でなければ他人の苦勞は解らぬ。事業家でなくては事業の眞隨に徹することは出来ない。氏が織維業に自らの生活を見出したのも多年の事業的經驗の所産と言へやう。今や斯業は世界を壓倒する發展振りであつて國際金融上重大な關係にある。働き盛りの五十代、洋々たる前途を持つ氏奮闘を望む。

丸辰海運・常務取締役

辻 清氏

非常時日本を背負ふ一翼として近來めき／＼その發展振りを海内に示して海運界に意氣あるべし、の觀を深くした我が海運經營の一方の雄丸辰海運株式會社は既に定評があり、この會社の常務取締役の顯職に在て睥みを利かせてゐるのに辻清氏がある。氏は熊本縣出身にして明治二十二年十月呱呱の聲を擧げ、大正三年長崎高等商業學校を卒業するや直ちに縣下の電氣會社に入社し、忠勤精勵にしてその業務に非凡なる才能を傾け、同社に貢献する所多く、數年後惜しまれつゝも同社を辭して昭和四年丸辰海運株式會社を設立して自前記重役の椅子に就き、實質的に業務の第一線に立つて幾多の従業員を指導する一方、社務を總覽して業績發展に腐心してゐる。又、聘せられて小野汽船株式會社の常務取締役となつて、海運經濟に獨特の手腕を發揮してゐる。氏は性來温厚篤實の人であつて、人に接するに常に謙虛を忘れないので有名である。趣味は登山旅行であつて、登山のエキスパート振りも亦定評がある。

日本高周波重工業・東京支社支配人

土橋 國利氏

氏の深き學殖、旺盛なる研究心、優れた人格は實業界に於ける白眉とされてゐる。加ふるにその才腕は往くとして可ならざる所はなく、大なる足跡を印し、悉く成功を収めてゐる。氏は北海道人にして明治十八年五月に誕生、北海道帝大農科を卒業後岩佐商會に入り同社専務取締役として、こゝで時計の刻むに歩調を合せた正確な仕事に従事し、正確、堅實な氣風を發揮した。斯くて日本高周波重工業株式會社に轉じ、こゝで致々として努力すると共に東京支社支配人として本領發揮、斯界の偉材として隆々たる聲望を加へると共に、土橋國利氏の令名は次第に喧傳するに至つた。しかも入社以來よく後進の指導に努力し、人材の養成に力めた爲、氏を圍繞するものごとく新進氣鋭の人材であると稱せられてゐる。これといふのも氏の身の上に箔が付き、苦が生えたことにも依るが、一面氏の人格が敬虔そのものであり、輕率行動なく絶體の信頼がかけられたことにも起因するものであると云はねばならぬ。

パイロット萬年筆・専務取締役

土屋 賢吾氏

氏は靜岡縣人和田二三郎氏の五男として明治二十一年七月に誕生、大正二年に土屋善右衛門氏の養子となつたものである。現在はパイロット萬年筆株式會社の經營に携はつてゐるが、人も知る如くパイロット萬年筆は斯界に於ける白眉とも云ふべく、その聲價は全國に冠たるものがある。而して同社が今日在るのも經營首腦陣に氏の如き逸材があつたればこそで、蓋し氏の役割こそ他の追随をゆるさぬ大きなものがある。現在同社の實際業務は氏が殆んど一手に切つてまはしてゐる。しかも氏の經營下に業績はすこぶる好調で、その進出ぶりにも實にあさやかなるものがある。同社が今や業界の花形的存在にふさわしい業容の充實ぶり、顯著なる業績とによつて斯界に好評を博してゐるのも、其間に於ける氏の努力の賜物であり、精勵の成果とも云ふべきで實に稀有に値するものがある。資性温厚篤實で八面玲瓏の常識家である氏は未だ五十を越すこと僅かであり、いよいよこれからといふ感を深めるものである。

大隈鐵工所・常務取締役

土屋 富五郎氏

諸機械及び紡績機械製作に没頭すること三十年、遂に優良なる國産品を完成し輸入を防過せる功に依り、昭和四年日本産業協會總裁伏見宮殿下より表彰せられたる榮譽の人こそ、大隈鐵工所常務取締役たる土屋富五郎氏である。氏は靜岡縣の産、土屋松五郎氏の長男として明治八年四月に誕生し、同四十年に家督を相續した。明治三十七年京都帝大理工科卒業後機械製作に従事、豊田式織機株式會社取締役を経て現に株式會社大隈鐵工所常務取締役たるほか、久保田精器株式會社取締役久保田製作所監査役等を兼ね、協調會常議員、愛知縣工場會相談役等の任にあつて令名彌が上にも高まりつゝある。氏が徒らに私利にのみ走らず絶えず國家觀念を基調としてゐることは、昭和九年七月國防獻品として四〇センチメートル飛行機研究用風洞、(その價格一萬圓)を獻納し、所澤飛行學校少年航空兵養成用に供したのを見ても領けることであり、昭和十三年七月に至て紺綬褒章を下賜せらるゝの餘榮に接したのも故なしとせざるところである。

松江住宅・代表取締役

土谷 連之助氏

地方實業界の重鎮として土谷連之助氏の英姿は大きく輝いてゐる。隆々たるその勢威の及ぶところ實業界の傍ら貢獻なすところ實に甚大なるものがある。是に依つても氏の偉大なる人格、識見のほどが、充分窺えると共に、燦として輝やく偉大なる努力を想像せしむるにあらぬのである。氏は島根縣人土屋彦三郎氏の二男として明治二十二年十月に誕生。其後先代連之助氏の養子となり大正二年家督相續と共に前名琳一を改めて襲名に及んだ。夙に綿糸、毛織物商を營みつゝ直接國稅五千五百四十四圓を納めて島根縣多額納稅者に列し、更に松江住宅株式會社代表取締役、松江鑛泉、松江片倉製糸各株式會社取締役其他の重役を兼るほか、島根縣會副議長松江市會議員、先には民政黨島根縣支部顧問等の任にあり。その手腕力量に於て將た又識見人格に於て聲望頗に高きことは云ふまでもなく、各種事業が陸續と持込まれ氏の助を仰ぐものが多い。

鈴木三榮・常務理事

土屋 計左右氏

支那古書畫に興味を有してゐる土屋計左右氏は、亦有名な支那經濟通としてよく知られてゐる。即ち鈴木三榮株式會社常務理事、第一ホテル株式會社副社長、東朝鮮鑛業、東日館各株式會社取締役其他の重役たる傍ら支那經濟研究所を起し、同志と共に事業下の支那幣制及び金融の研究に従事しつゝあるのを見ても、その氣宇が充分窺えるといふものである。氏は故業議院議員土屋大次郎氏の三男にして明治三十一年三月に誕生、大正十一年に分家した。明治四十五年東京高等商業學校專攻部を卒業後三井銀行に入り、同行上海支店開設と共に赴任、其次席を経て支店長に推され、前後十五ヶ年間勤務に及んだ。斯くて一旦東京の本店にかへり外國營業部長となつたが間もなく之を辭し、鈴木三榮の常務理事に納まつたもので、學殖蘊奥をきわめるところ事業界のみならず、聘せられて明治大學教授、戸澤鑛山冶金研究所相談役、支那經濟研究所々長としても限りなき精魂をこめて至誠奉公の實をあげてゐる。

會陽汽船・社長

筒井 清松氏

業界好轉の波に乗つた會陽汽船株式會社の進展こそ實にすばらしいものがある。同社は昭和八年九月の創立に係り現在資本金二百萬圓(全額拂込済)本社を神戸市神戶區明石町に置き、社長には斯界の雄と謳はるゝ筒井清松氏を戴いてゐる。同社所有船は五隻(四萬噸餘)内二隻は一萬噸級で他は中型船である。全部山下、中村、大同、海運の三社(ヘヤーター)に出してゐる。業績は勿論興隆の一路を辿り、好配を持續しつゝあることは云ふまでもない。氏は福島縣人星龍吉氏の三男にして明治二十二年一月に誕生、大正十二年先代トラ子氏の養子となり、昭和六年トラ子氏隱退の後を承けて家督相續した。大正四年東京帝大法學部英法科を卒業後三菱合資會社に入り、同七年には内外海運會社を創立して常務取締役に就任、次いで會陽汽船の代表取締役たるほか、扶桑海運株式會社取締役を兼て今日に及んでゐるが、働らきさかりの點から言へば寧ろ過去よりは、今後に刮目すべきものが多々あると云へる。

野村銀行・東京支店長

堤 一之氏

關西財界の一大勢力たる株式會社野村銀行の支柱として、東京支店に君臨しつゝある堤一之氏は、確かに異彩ある人物としての感を深めてゐる。五十を越すこと僅かでありながらも、重役の椅子にも馴れてゐる點から云つて、これからがいよいよ働らきさかりとでもいふところである。もとより財政乃至金融の事情にも明るく、その切り廻しの手腕力量に對しても、夙に定評のあるところから見て、或ひは想像以上の卓見を有つてゐるかも知れないのである。したがつて東京支店長として經營の實際に當つても、流石に好成績をあげつゝあることは云ふべきであらう。氏は福島縣人増田圓集氏の二男にして明治二十一年十月に誕生、其後サダ子氏の養子となり明治四十四年家督相續と共に改名に及んだものである。明治四十三年長崎高等商業學校卒業後實業界に入り、今や野村銀行取締役兼東京支店長として好評を博してゐる。

東海自動車・専務取締役

堤 和 雄氏

氏は福岡縣の産、堤猷久氏の四男として明治二十一年四月に誕生した。明治四十三年大阪高等工業學校機械科を卒業後、大倉商事株式會社に入り機械主任となり、更に大倉組を経て現在の如く東海自動車並に高速機關工業各株式會社専務取締役、立川飛行機株式會社常務取締役其他の重役として威名を天下に擧ぐるに至つたもので、斯業經營に永い經驗を有つてゐるだけに、同社の推移に大きな役割を持つてゐることは改めて云ふまでもない。氏は近世實業界に於ける快男子である。勇往果敢で、何か考へつくと一刻の猶豫もなく速断進行したいといふ覇氣と、一方理想に對する操守をこぶる堅く、透徹した理論の根據がなければ輕々しく行動しないのである。この速断進行性と、理念尊重主義との二つが氏の事業的行動の上に、いつも相並んで登場してきてゐる。この二つを巧みに統御しこの二つが表裏相関するところに氏の自在性が躍如としてゐるのである。時局下雄快なる氏の健闘をまつこと切なるものがある。

函館定温倉庫・専務取締役

堤 清治郎氏

氏は北海道に於ける漁業開發の恩人としてその名も高い堤清七氏の四男として、同清六氏の令弟に當り明治二十七年七月に誕生した。氏の今日に於ける地歩を探れば函館定温倉庫株式會社専務取締役を始め、日魯漁業株式會社常務取締役、北海道製罐倉庫、大北漁業各株式會社取締役、函館水産販賣株式會社其他の重役を兼て文字通り我が水産界の立役者たることを示してゐる。しかも鮮やかなる活躍ぶりに至つては夙に業界の鬼才と謳はれ、敏腕家として讚稱的となつてゐるところで、覇氣滿々壯年時代に在る氏が今後如何なる手を打つか、一入業界の興味を呼んでゐる。三條中學校を卒業して大正三年に日魯漁業入りとなり、昭和十年には取締役に選ばれ函館出張所總務部長兼監理課長として大いに卓腕をふるつた。斯くて星の移りと共に昭和十三年には常務取締役に推されたのみか、前記諸會社にまでその快腕を伸して、あつぱれ青年實業家として萬丈の氣を吐いてゐる。趣味廣く尺八、義太夫、鈔蒐集等が擧げられる。

大日本コール天紡織・社長

寺田 淳 平氏

氏は酸いも甘いもよく噛みわけた物判の好い事業家である。しかも經營の凡張面さと眞摯なる態度に至つては夙に定評があり、且つ腰も相當低いし肌ざわりも感じが好い。さげた氣性で柔らかみを持つてゐるだけに人に會つてもよく談じ、亦よく聞くといふ長所を備へてゐる。氏は東京府人先代淳平氏の長男として明治二十五年六月に誕生、大正三年家督相続と共に前名壯一を改めて襲名に及んだ。先代淳平氏は人も知るコール天鬼足袋の製造販賣を創りて産を成したもので、氏が今日大日本コール天紡織株式會社社長、鬼足袋工業株式會社取締役會長、寺田合名會社代表社員として時めいてゐるのも、父君の果敢なる闘志に負ふところが甚だ多い。とは云へもより凡庸ならざる氏のこと、慶應理財科を卒へると共に勇躍して父君の遺業を繼ぎ、よく興隆の一路を辿らしめつゝあることは氏の英邁なることを語らずして何物があらう。然しより以上に期待されるのは所謂新しい型の財界人としての今後の動向である。

寶光鑛業・社長

戸 津 學氏

氏は寶光鑛業株式會社社長として、今をときめく金鑛事業界に聲名を馳せてゐる人物。温篤懇切にして、しかもその反面強き信念を堅持して居り、また事業的才腕には弾力性があつて、正に朝鮮鑛業界の輝ける存在である。云ふまでもなく鑛業界は事變勃發を契機に全く時局産業の先陣を承はるものとして、ひとり業界のみならず各方面から刮目されてゐるが、寶光鑛業もこの時運に乗つて颯爽と躍進途上にある優秀會社である。社長戸津學氏は宮城縣戸津定之丞氏の二男で明治十六年十月生れ、夙に東洋協會專門學校を卒業して業界入りとなり、韓國政府財政顧問、殖産銀行、成業社各専務取締役を経て昭和十年に朝鮮製練専務となり、續いて同十三年九月には現寶光鑛業社長に就任したのである。野心もあり、覇氣もあり人間的に徹底したところもあつて、その仕事熱心な努力ぶりを廣く買はれてゐるが、洵豪快な事業家としての面目が躍如と現れてゐる。朝鮮事業界の一翼を擔つて愈々雄飛せんとする氏こそ眞の偉材だ。

昭和礦業・常務取締役

鶴田 勝 三氏

氏は神奈川縣人吉田寅松氏の三男として明治十五年三月に生れた。そして先代鶴田カワ刀自の養子となつた工業を明治三十七年に、エール大學を同四十一年に卒業し、歸朝後は水力電氣の經營に當つて大成を見たのであつた。現に昭和礦業(株)常務取締役、關東水力電氣(株)取締役、武藤工務所長、工事畫報社長として奮戦し、業界にその潮腕を恐れられてゐる。氏はアメリカ仕込の近代的セントルマンで、洗練された社交術と、獨特の經營手腕とは事業家として全くの強みであらうか、重要諸會社を統率する指導者として眞に恰好の適材といはねばならぬ。加ふるに至誠謙讓の美德と抱擁力ある度量の廣さあり、近き日に必ずや吾が産業戦線の陣頭に立つて才能を揮ふであらう俊才である。内外の經濟事情にも明るく、商才は勿論のこと遠見もあり力量豊富で、社員には絶對的な信望がある。更にまた關係各方面の敬慕を受けてゐるのも好ましい限りだ。

貝島合名・理事

鶴田 爲 次郎氏

九州財界に於て聳え立つ群峯の間に玉座し、三井、三菱兩財閥の石炭事業に並び稱されるものは貝島炭礦であらう。云ふまでもなくこの貝島王國の今日を築いたのは先代太助翁で、大正五年卒然と七十一才の一生を終へたが、身を一介の鑛夫より起して刻苦精勵、遂に資本金五千萬圓の炭業財閥の基礎を定めた英傑である。太助翁の後を承けて今日貝島炭業を總攬してゐるのが貝島太市氏で、太市氏に見込まれて當家に聘せられ、氏の片腕として活躍してゐる逸材に鶴田爲次郎氏がある。氏は明治十三年の生れで帝大法科英法科の出身、初め三井銀行に入つて本店調査課長、法律課長を歴任したが、貝島家の懇望によつて昭和十年に同行を辭し、現時貝島(名)理事、貝島炭礦、貝島化學工業各(株)監査役、貝島一族會、貝島育英會各理事、司法省強制執行法改正調査委員會委員として快腕を振つてゐる。氏は貝島家一門の繁榮に盡したばかりでなく同家の社會事業、炭礦事業を通じて國家社會に貢献した功績は大きい。

東白濱温泉土地・社長

外山 捨 造氏

實業界に或ひは育英方面に八面六臂の活躍を続けつゝある外山捨造氏は、現に東白濱温泉土地株式會社並に香燒コークス株式會社社長、株式會社商業興信所取締役會長其他數會社の重役を兼ね、名實共に關西財界の長老として押しも押されぬ貫録を保持しつゝあり、今や多角經營に乗り出して社礎何れも磐石隆々たる實績を引提げて、時局財界に堂々と駒を進めつゝある偉容は、氏ならずしては行ひ得べくもない。しかし氏は些かも尊大ぶるところなく謙讓操持、餘力を捧げて育英にも盡し羽衣高等女學校々主として令名噴々たるものがある。而してその該博なる學識と女子教育の妙諦は氏獨特の物と云はれてゐるだけに、その指導精神には確かに偉大なるものが潜んでゐる。氏は大阪府人外山捨造氏の三男にして明治十六年三月に誕生し同三十七年に家督を相続した。明治四十一年京都帝大法科を卒業後實業界を志し、工業之日本社を創立して活躍した事もあり、今や内外の信望愈々加はり前記の如く不動の地歩を示しつゝある。

東洋葉煙草・常務取締役

外山 石 英氏

外山氏は唯の財界人ではない。事煙草に關する限り、我が經濟界でも一か二に數へあげられるほどの眼識を具へてゐる。今や功成り名遂げて東洋葉煙草株式會社常務取締役、協立煙草株式會社取締役等の重要ポストに在り、蘊蓄を傾けて煙草事業の經營に當つてゐるが、兩社共に氏の采配宜しきを得て、好業績を示し而も年を遂ふて堅實味を加へつゝある。氏は愛知縣士族外山錫氏の五男として明治九年七月に誕生、同十八年に令兄庄太郎氏方より分家したのである。明治三十三年東洋大學を卒業後專賣局に勤務したが、同四十二年には東亞煙草會社に入り各工場長を歴任、それより更に東洋煙草會社に轉じて今日を迎へたもので、煙草事業から氏の勢力を差引いたら後は恐らく空に等しいかも知れない。それほど根強い氏の力は斯界に巍然として輝いてゐるのである。氏の業界生活も既に四十餘年に亘りその功績も尠くない。氏こそは實に斯界の誇るべき第一人者であり、至寶的存在と云ひ得るのである。

北洋ソーセイジ・社長

外山平治氏

時局は幾多の事業家をして一躍股盛を來さしめるに至つたが、しかし眞に堅實なる地盤に立つて今後の波浪を乗切る人は、果して幾人あるであらう。その指を先づ第一に屈したいのが今北海道で鳴らしてゐる外山平治氏である。氏は新潟縣の産、先代平治氏の長男として明治十七年十二月に誕生し大正元年に家督を相続と共に、前名平造を改めて襲名に及んだものである。夙に織物卸問屋業に従事しつゝ、漸次事業界に雄飛し、日本ゴム工業會社、オニタビ本舗及び大洋生命保險會社等の代理店關係に在る他、北洋ソーセイジ株式會社取締役社長としても令名を馳せてゐる。而して重なる信望は大正八年推されて函館區會議員となり、北門俱樂部に屬したのを皮切りに廢區置市の際には最初の市會議員に選ばれ、爾來當選すること三回、大正十三年には函館商業會議所議員となり選を重ねること三回。現に函館商工會議所商業部長の任にあるほか新潟縣人會々長、函館實業振興會幹事長、函館織物卸商組合長其他十指に餘る公職を兼てゐる。

中外貿易・社長

土井宇太郎氏

氏は信念の人であり、寡黙直行の大家である。そして持ち前の純情一徹は率直に正を正とし、邪を邪としてゐる。したがつて氏は一度確信を抱けば如何なる障礙をも突破し、端的な非難等に耳を籍さず猛然とそれを強行する。もとゞ永い間貿易事業で叩き上げて來たし、かて加へて天分の才能に恵まれてゐるので、決して經營を誤まるやうなことはない。氏は大阪府人土井寅造氏の長男として明治二十四年二月に誕生、昭和二年に家督を相続した。長崎商業學校を卒業後株式會社社長在瀨貿易商店に勤務すること十五年、其間ニューヨーク、ロンドン各支店に駐すること前後三ヶ年、大正十四年株式會社中外貿易會社を獨立自營して今日に至つたもので、同社を主宰しつゝあるほか國産化學工業、昭和貿易公司各株式會社々長としても敏腕を揮ひつゝあることは、よく人の知るところである。而して氏の經營下にある諸事業はことごとく隆々たる飛躍をつゞけつゝあり、いよゝ強靱性を加へるのみである。

土井商店・社長

土井清次郎氏

毛織物問屋業を営みつゝ株式會社土井商店社長として時局業界に一勢力を築く土井清次郎氏は、相變らず精力的な卓腕をほし、まゝにしてゐる。もとゞ土井家は屈指の豪家で先代土井猶精氏既に實業界經綸の苦節を積んで今日の基礎を成したものである。氏は埼玉縣の産、建部庄八氏の二男にして明治十九年十一月に誕生、其後土井猶精氏の養子となつたもので、大正九年に養弟彦治郎氏より分家したものである。氏は未だ五十代といふ實業家としては極めて春秋に富んでゐる。したがつて氏に期待するところのものは寧ろ今後に多いのである。氏は是なりと信じ、正なりと確認したことに対して斷乎として邁進する意志の人である。自己の所信に従がつて目的貫徹のために勇往することの氣魄こそ、土井清次郎氏が今日の大を成せる素因だつたと云へるのであつて、氏が如何に凡俗の追随し得ざる才幹の持主であるかは、今後に於ける氏の飛躍ぶりと相俟つていよゝ明瞭に提示さるゝであらう。

北山索道・常務取締役

土井藤右衛門氏

土井家はまことに由緒ある家柄である。即ち當家は土井大炊頭利勝氏の後裔土井忠兵衛氏より分家したもので、先代土井藤右衛門氏が五代目に當てゐるのである。現當主たる氏は三重縣人木村誓太郎氏の七男であり、同敬義、同秀興氏の令弟にして明治二十五年一月に誕生、其後先代藤右衛門氏の養子となり明治四十三年家督相続と共に前名卓爾を改めて襲名に及んだものである。大正五年東京帝國大學法學部獨法科を卒業後實業界に入り、業務達成に努力して來たもので、株式會社東京煉炭製造所取締役、大塚林業、東北鐵道各株式會社監査役等を経て現在は北山索道、草津電鐵各株式會社常務取締役、佐藤機器、日化燃料各株式會社取締役等の任にあり、張りきつた手腕を揮ひつゝある。氏は人格者として敬仰されてゐるだけに、常に利己的營利主義を排し、地方民の利益を主眼とする共存共榮の隣保互助精神に立脚して、國家的見地より至誠一貫することに力を致してゐる。其故に他を潤すことの大なることは云ふまでもない。

土井商店・専務取締役

土井彦治郎氏

株式會社土井商店の専務取締役として、よく社威を張り、愈々業容を擴大せしめ、益々信用を扶殖しつゝあるのが我が土井彦治郎氏である。氏は東京府人土井猶精氏の長男であり同清次郎氏の養兄にあたり明治三十年十月に誕生、昭和五年に家督を相続した。父君猶精氏は夙に實業界に入り土井商店を經營して名を成したる人、氏亦よくその訓陶を享けて精勵格勤、衆に擧げざる才略を磨いたので、今や業界に冠絶した信用を博しつゝ押しも押されぬ貫祿のほどを誇示してゐる。土井商店といひ氏が代表社員として臨む土井合名會社といひ、何れも計數に明るく財政通として定評ある氏の統率經營のよろしきを得てゐるので、業績は舊時に幾倍する一大飛躍を遂げるに至つてゐる。氏は常に報國の信念に燃えてゐる人で、その堅實なやり口と積極的な事業肌とは、時局柄とは云ひながら正に驚嘆に價するものがある。したがつて春秋に富むなどの點から見ても、今後に尙多くの宿題が架せられつゝあることは云ふまでもない。

豆陽鑛業・専務取締役

土井彦太郎氏

時局事業界の白眉たる鑛業界に在つて群小を制歴し、堂々たる堅陣ぶりを示しつゝあつれば斯界の寵兒としての名を辱しめぬ人に我が土井彦太郎氏が在る。現に豆陽鑛業株式會社専務取締役兼技師長、日本精鑛株式會社常務取締役兼技師長並びに土井彦鑛業所々長等の任にあつて、その令名日々に高まりつゝある。氏は東京府人土井彦十郎氏の四男にして明治二十九年十二月に誕生、其後令兄彦一郎氏方より分家したものである。大正八年早稻田大學理工科採鑛冶金科を卒業後斯界に飛び込んで此方、鑛業を對手に相撲を取つて來たといふ典型的業界人なだけに經營に富むは勿論のこと、手腕あり卓見ありといふ、どこを押しても鑛物で凝り固まつたやうな人物である。されば其氏に依つて經營づけられてゐる前記事業が、何れも縦横に業界を征服して燦たる光芒を放つてゐるのも決して故なしとしないところである。而も氏は單に技術部門のみではなく計畫に於ても、抱負に於ても眞に逸材たるの感を深からしめるものがある。

東京地方鹽業・専務取締役

遠山清太郎氏

和歌山縣を播藍の地として他郷にあつて實業界に雄飛し一代の風雲兒として絶稱されるものは何と云つても遠山清太郎氏を外に置いては無いと云つて差支へあるまいと思ふ。氏は日清戰爭生々しき明治二十七年十月出生にして遠山市郎兵衛氏の養子となり、大正八年京都帝國大學法科を卒業するや直ちに富士瓦斯紡績に入り、忽ちその手腕力量の非凡なるを上司に認められる所となつて重役秘書となり、後、推されて帝國清酒株式會社の重役となり、その餘力を以つて、東京地方鹽業會社の取締役となり更に東京地方鹽業會社の専務となり、日本ビストンリング東京再製鹽業會社、兩總鹽業會社の取締役となりて、諸般の業務に縦横無盡の敏腕を揮ひその業績益々見るべものあると共に、現在前記諸會社の中樞拍車となり、氏の存在は定に重鎮たるべきものとして、その勢力の廣大なることは筆者の筆紙に盡す所ではない。而して氏は明則第一主義を奉じて業務を督勵してゐるなどは實に氏の風格を傳へて餘さない所である。

日本醸造工業・社長

梅野明二郎氏

世に學者は多い而も學者中の博士號を以つて鳴る農學權威者は又多い。その數恐らく數百を越えるであらうが、農學博士にして而も、實業界に明るき人物は尠ない。尙その少數の内實業界に明るきばかりではなくして實際に携はつてゐる人はもつと僅少であらふ。こゝに梅野明二郎氏が燦然と異彩を放つ所以である。氏は新潟縣出身にして明治十五年生れ、同四十二年東京帝國大學農科農藝化學科を卒業するや醸造學に興味を持ちこれが専攻を究めること數年、豊富なる學識と才能と相俟つて、忽ち實業的手腕を見出され、聘せられて日本醸造工業株式會社の社長に迎へられ、一方學位を贏ち得てゐる。尙萬歲醸造株式會社の取締役の樞席に就いて醸造界に獨特の手腕を揮ひ、遂に前記兩會社の今日の如き發展一途の曉を見るに至つた。氏は學者肌だけに、研究心厚く、時代に對する認識の正鵠を得、論理明哲、正に前記會社にあつては鬼に金棒とも云ふべき存在であると云つてよいだらう。趣味は造園、園藝を樂しむと云ふ。

朝鮮不動産・事務取締役

時岡昇平氏

最近朝鮮に於ける企業投資が内地の壘を凌ぐとしてゐる豪華振は朝鮮産業發展史上特筆すべき事であらう。朝鮮不動産株式會社も亦時代の要求によつて建設せられた有力な會社であり、其の事務取締役たる時岡昇平氏こそ時代人であり、財界錚々たる士である。氏は朝鮮紡織取締役兼東京出張所長をも勤務し、内鮮一如の産業報國に乘出してゐる財界出色の士であることを牢記せねばならぬ。氏は岡山縣時岡重順氏の長男で明治十九年四月出生、大正五年家督を繼ぐ。夙に法政大學を卒業し實業界に入る。人爲り穩健中庸で而かも才氣に富み、柔らかな中に斷乎たる意志の閃が窺はれる。實業人としての資質を具備した人格者で機會を攫む眼もあり人に屈しない膽力も据つて居て、圓熟した手腕により鮮かな活躍を示し、朝鮮財界の花形的存在である。道徳を離れた財力は罪惡の堆積なりといふ氏の持論から見ても單なる財界人ではない。其處に氏の偉さがある。古書畫、古陶器等の趣味から眺めても其の人格の全貌が窺はれて奥床しい。

日本窒素肥料・會計課長

時安一郎氏

氏は兵庫縣時安駒平氏の長男で明治二十一年の生れ、出色の名に背かぬ精勵努力の逸足である。明治四十四年神戸高商を卒業するや明治生命保險會社大阪支店に入り、腰掛バンカー式に算盤球を弾いたのであつたが、後日本窒素肥料會社に轉じ茲に自己の天地を見出し格闘奮勵、社業の爲め捨石の覺悟で献身的に努力し累進して現在同會計課長として才腕を發揮して居る。同社が肥料會社として本邦に於ける王座的存在であることは人も知る所、此の大會社の會計事務は非凡な手腕を以てしても容易な業ではない。氏は一糸不紊と整然と處理して餘裕ある有様、以て其の手腕の程も察せられる。氏は日窒鑛業、日窒炭業、日窒火藥販賣、日窒硫黃鑛業、日窒寶石鑛業、其他日窒系數會社に監査役として就任し宛然日本窒素會社の大藏大臣格である。其の信任の如何に厚いかも窺はれる厚利緻密は氏の性格であるが又自由奔放な一面を有し、明朗潤達な財界人の諸徳を具備する人材、年に共に伸び行く氏の前途こそ刮目に價する。

三井物産・大阪支店長代理

徳永五郎氏

その傘下に東洋棉花、東洋レーヨン、大正海上火災、日本製粉、東洋製糸、小野田セメント、基隆炭礦、東洋護謨化學工業等の大會社を始め、多數の群小會社を支配して最大を謳はれる三井物産は、吾國貿易界のために萬丈の氣を吐いてゐる。同社は多士濟々、人的要素に於ては他に比類を見ないとさへ云はれてゐるが、その中でも斷然群を抜いて光つてゐるのは大阪支店長代理徳永五郎氏であらう。氏は明治二十年六月生れ、東京府人平山活元氏の五男であるが、大正三年に徳永家を相続統帥者となつたのである。慶應大學理財科に學び同校を明治四十四年に卒業するや直ちに三井物産に入社したが、異彩ある才腕を認められて大阪支店出納掛主任に進み、更に現時は同社支店長代理として忠勤を勵んでゐるのだ。力働豊かで識見高邁なる氏、内外の信頼が頗るあるのも頼もしい限りだ。この古今未嘗有の時局の激浪に眞正面から取り組んで躍進に次ぐ躍進を示す大井井物産に於て、今後愈々氏の存在は大きく輝くであらう。

明正工業・社長

富岡通氏

明正工業株式會社社長富岡通氏は正に熱の人である。目的に向つては全精神を打ち込まねば承知の出来ない熱情——これこそ今日の富岡氏をあらしめた重大な要素であつたらう。氏は長野縣士族富岡靜記氏の三男で明治二十二年一月出生、同四十四年に慶應義塾理財科を卒業、大正八年先代靜記氏退隱に因り家督を相続したのである。電気工事設計請負並に照明器製造業を営み、業界の雄將として活躍してゐる。氏は新生の意氣に燃えて専心經營に没頭し、その熱情をもつて社業の發展に努力、その業績は近時異常な急テンポを以て躍進し、忽ちにして明正工業を非常時局下の花形的存在たらしめたのである。現時同社のほか、スタンダード運動用具、明正舎電氣部代表社員として健闘、疲れるを知らぬ奮闘を続けつゝ、遠大な計畫性と實行力を持ちつゝ、人に接するに圓轉滑脱、天性の社交家を思はせる氏、異彩ある風格を創り上げてゐる。今や自由經濟葬送曲の高鳴るの時、この中堅實業家に期待する處大なるものがあらう。

富國鑛業・社長

徳川泰敬氏

富國鑛業株式會社社長徳川泰敬氏は、東京府岩橋祐言氏の長男として明治三十二年呱呱の聲をあげ、大正十四年慶家徳川氏を再興し改姓した。曩に英國牛津大學に入り大正十二年法科を卒業した秀才である。爾來東京日々新聞政治部、整理部の部長を勤め、次いで大阪毎日新聞整理部副部長を経て東洋拓殖會社參事に轉じ、累進して秘書課長、總務部長、本店支配人として同社に貢献したが、昭和十年一月現職に轉じ富國鑛業會社主宰の要衝に當る。素より自由豪放な性格は長年新聞界に在つて養はれた社會の種々相を識り抜いた實學によつて練成せられ、其の器を益々大ならしめた。新進練達の才腕は愈々光彩を添へ之を同社の經營に發揚し、堂々たる飛躍を遂げ財界に出色の名を謳はれて居る。旭煉炭、朝鮮産金各取締役、東京冷蔵會社監査役として亦樞機に參畫し、聲望頗る高く將來の大成を囑目されてゐる。内外の書を繕き見聞の廣汎なる蘊蓄の深き蓋し當代實業界稀有の存在である。洋々たる前途を持つ氏の業界に頼る日を待望する。

日本金屬代表・取締役

徳末務氏

日本金屬會社と一口に言へば金屬工業に關する營利會社と斷定するであらう。然し同社の營業種目は機械器具から洋釘其他廣汎に亘つて居る。同社の發祥はさして古いとは記憶しないが、近代的態様を以て業界に君臨する有力な存在である。會社の創設もさる事ながら其の現實たる經營上の主宰者の人物が尺度とされることは社會的通念であらう。徳末務氏は強力な實力主義の遵奉者であると共に實踐躬行の士である。夙に事業界に入り多年に亘つて辛酸を嘗めた腕の隨かな度胸の据つた財界人である。時代の要求は机上論者の貧弱さに満腹し、實際家出身の強力な實踐家の出現を待つこと久しかつたので、氏の實業界に存在することを中心感ずる。一人一業主義を以て終始一貫して來た氏は、我が日本金屬會社に對しても全生命を打込んで社業の發展を策する外に餘念がない。同社の實績隆々たるは、氏の献身的努力の結晶であることを斷言して憚らない。事業は人にあることは氏によつて初めて眞實と言へる。

龍王金山・取締役社長

富澤清明氏

時正にゴールドラッシュ、産業時代の眞只中であつて今をときめく龍王金山の取締役社長富澤清明氏は明治十年の生れ、同三十六年に東京高商を卒業、同三十八年更に同校専攻部を卒へるや日本銀行に入つたが、大正六年に同行を辭し、同年古賀銀行設立と共に副支配人に聘せられ、營業部長、調査部長を経て常任監査役に昇格、多大なる功勞があつたが同行解散後は朝鮮ドレッツ鑛業取締役に就任した。朝鮮ドレッツは昭和九年七月の創立、歴史尙淺きにも拘らずその砂金採取量は飛躍的に増産しつゝあり、子會社東朝鮮鑛業と共に躍進の一途にあるが、同社の事業經營には天稟の才と練達せる手腕を謳はれる富澤氏が拮据没頭してゐるのだからそれも故ある哉だ。尙氏は現時龍王金山の總帥、傍ら山頭として火災保險代理業を営む等華々しく活躍してゐる。業界に入つて八商會主として火災保險代理業を営む等華々しく活躍してゐる。業界に入つて縦横の才腕を發揮活動すること多年、財界の一將として早くから定評があり、而も濃厚篤實な人格者として徳望を讃へられてゐるのだ。

三重珠那・常務取締役

富田孝造氏

富田孝造氏は名古屋實業界の重鎮として燦たる光芒を放ちつゝある人材であるが、流石に中京財界の元老たりし先代重助氏に見込まれて、次女たる女の女婿となつた人物だけに、資性重厚にして長者の風格あり、學問に於ても古典の研究家として名高き、また工藝、美術の通人として知られて居り、實業界に在つても凡器ならざる英才を發揮して諸人を敬服せしめてゐる。即ち氏は三重珠那常務取締役として名采配を揮ふ他、日東産業、養和會各取締役たり、また紅葉屋、神富殖産、神野新田土地、鈴木調味製造、便宜運送各監査に任じてゐるが、その明晰なる頭腦と英邁なる才腕とはよく部下の信頼を受けてゐるから、何れの事業に當つても賑々たる好成績を収めて、業界羨望の的となつてゐる。氏は明治二十七年一月の生誕で、愛知縣人淺野甚七氏の令弟に當るが、紅葉屋先代富田重助の養子となり、大正六年分家して一家を立てた。本家の當主たる養弟重助氏は慶大出の秀才で、青年實業家として赫々の聲名ある副將である。

入丸商店・代表取締役

富田三之助氏

富田三之助氏の聲名は帝都鐵商界に雷の如くに轟き渡つてゐる。即ち氏が代表取締役として主宰する入丸商店及び常務取締役たる東京丸鋼商會は、共に關東の代表的鐵鋼商として斷然業界をリードしてゐるが、時局下の材料不足の折柄、氏の健闘振はまことに目覚ましきものあり、文字通り光彩陸離たる觀がある。また氏は丸富特殊鋼社長、東京シャリンド取締役として製鋼、製作者にも乗り出してゐるが、この方面でも氏の卓抜なる才腕は見事な采配振りをなしてゐて、業界を睥睨せしめつゝある。氏は明治二十八年八月千葉縣人富田初太郎氏の二男として誕生したが、大正十一年分家して一家を成した。夙に實業界に入つて鐵商に従事したものである。當年四十六歳の氏は見るとからに張り切つた闘士で、「馬ふれば馬を切り、人ふれば人を切る」といふ概ある快男子で、リンクにあつてゴルフに興じてゐる時は一層この感が強い。氏はまた將棋も相當の腕前であるが、その半面には音楽を愛すると云ふ優美さがある。

王子製紙・常務兼工務部總務課長

富田治郎右衛門氏

製紙王國王子製紙の筆頭常務取締役兼工務部長兼總務課長として今をときめく人は富田治郎右衛門氏である。氏は本年五十五歳であるが、人材雲の如く集つた王子の重役陣では最年少者であるから、如何に氏が優れた人物であるか、伺はれる。言ふまでもなく、氏は明治四十年代から王子の生え抜きとして叩き上げて來たもので、識見、才腕共に堂々たる貴族が備はつてゐる。また氏は旭鐵工所、山陽バルブ工業、東北振興バルブ、樺太酒精工業、六合造紙廠各取締役に任じて噴々たる聲名を馳せてゐる。氏は明治十九年一月福井縣人、先代治郎右衛門氏の二男として誕生したが同二十九年家督を相續し襲名した。同四十三年東大工科機械科を卒業して直ちに王子製紙に入り、爾來苦小牧工務係員、同設計工務係長、本社工務課臨時建設部主任、同工務課長等を経て、昭和八年工務部長代理兼第一課となり、現在は重役陣に列して筆頭常務の樞席に就いたのである。時局下の製紙界は愈々多事多端なる秋、切に氏の自重を祈る。

大連船渠鐵工・常務取締役

富濱竹松氏

大連船渠鐵工株式會社常務取締役として活躍してゐる氏は、實に腕の人力の人として正に立志傳中の人である。今日の成功は氏の前半生の汗の結晶にして、其の奮闘の歴史は涙ぐましいものがある。明治十九年九月北陸の風雪荒れ島根縣に原政太郎氏の長男として生れ富濱才二郎氏の養子となつた。若くして機關の組立並に運轉に關する修業研鑽を積み機關の免許を受け、大正二年一等機關士として大連船渠株式會社に入社し間もなく機關長となり、次いで船舶監督課課長に擧用せられ昭和九年取締役に選任せられた。實に同社に盡す所二十有餘年その功績は多とすべきものがある。昭和十二年九月大連船渠鐵工會社に常務取締役として推選せられ、大連實業界の王座を占むるに至つた。氏の研究的性格は讀書を趣味する様になり、政治經濟文學と多方面に亘つて深き見識を持つはその書齋からの所産であらう。圍碁も相當の腕でありゴルフにかけても豪の者である。氏の熱意と器用とは茲にもその一面が窺はれる。

富安本家酒造・社長

富安重行氏

「花の露」醸造元として北九州に聞えて居る酒造業者としての同氏は福岡縣士族先代重行氏の二男にして、明治二十八年八月出生、明治四十五年家督を承け重行を改めて襲名す。大正十一年慶大政治科を卒業し家業に従事、専心精勵し傍ら地方公共事業に盡すこと多年、徳望信頼頗る厚く、遂に福岡縣會議員として選出せられた。現に富安本家酒造會社社長として令弟九州大學工學士彌之助氏及靖雄氏と協力最善を盡して經營して居る。尙富安合名會社代表社員、福岡縣醸造試驗所、筑前參宮鐵道、九州鐵道、大川鐵道各株式會社取締役、福岡縣産業組合聯合會理事等に就任し、實業界に雄飛すると共に、地方自治の爲め活躍し將來を囑望されてゐる。氏が業界の重鎮として又政治界の權威として見ゆる日の決して遠くないことを疑はない。人世は五十からでそれ迄は前哨戦である。氏の實力と人格とはよく四周を克服して王座に就くこと決し難事とするに足りぬ。前途の光明に向つて躍進を続けられんことを希ふや切。

富永鋼業・社長

富永恒太郎氏

滋賀縣富永機輔氏の長男にして明治九年一月出生、嚴父機輔氏明治初年の風雲を望んで神戸に出で鐵鋼商を創め當家今日の基礎を築いた。明治四十三年家督を承けて其の遺業を繼ぎ堅實な營業を續け、今日日本邦貿易商として屈指の地位にあり、神港斯業界の重鎮として紳商の賞讃を示してゐる。悠揚迫らざる裡にも潔乎として人を壓する威重があり、外人相手商賣、其處に亦如才のなからう苦も無い。現在前記富永鋼業株式會社社長として鋼鐵事業の經營を主宰し又、東亞製鋼株式會社の取締役として工業界にも一指を染め内外に活躍して一日の倦怠ないと言ふ。明治三十九年生れの長男良三氏は京都帝大工學部の出身で氏の片腕となつて活動してゐることは氏の積善の餘澤であるといへやう。國際關係頗る微妙である時局下、時に國際金融の閉塞せる今日、貿易業者の奮闘に俟つことが多し。極東經濟の一元化には前途幾多の難關を突破せねばならぬ。父子協力して蔽ひかゝる時局の波を越えて一路報國の爲め奮闘されたい。

東京プレス工業・社長

富永能雄氏

氏は由來機業界の一權威で多年其の道に携はり頭角を現はしたが、近時重工業の研究をも完成し其方面へも乗り出して居る。長崎縣士族富永末一郎氏の長男として、明治十九年十月出生、明治四十二年長崎高商卒業後京都川島織物所に入り倫敦に派遣せられ、組織物貿易に従事すること二年、大正五年日本工業藥品會社を創立其の代表社員として大いに努めたが、翌年渡邊商事會社の分身大阪美身洋行に入り後東京渡邊商事本店に轉じた。後同八年に南滿洲鐵道會社に入社、同十二年選ばれて再び歐米を視察し歸朝後用度課長職を歴任し、同社參事に擧用せられ用度事務所に任ぜられたが、昭和五年鞍山製鐵所長に就任、同八年昭和製鐵所の設立と共に常務取締役に推舉せらる。同十二年辭任、現に前記會社を主宰し時代の人として多方面に活躍してゐる尙、日本曹達會社事務取締役、日印通商、岸本商店、岸本鋼業各株式會社取締役、五洋商船株式會社監査役としてその樞軸をなす。諷曲に堪能で讀書は其の趣味の最たるものである。

大連東和汽船・取締役

友岡義徳氏

氏は愛媛縣友岡朋太郎氏の三男として、明治二十一年六月出生、同三十七年父朋太郎氏の後を承く。明治四十四年東亞同文書院商務科を卒業し大陸にその活腕を振ふこと多年、在留邦人の先達として盡す所も亦多とすべきものがあつた。氏は放膽にして亦體懃、一度驟起すれば鐵をも穿つといふ半面に、他人の世話もよくするといふ性格の持主で正に棟梁の器、その獨力奮闘の蔭には幾多の意識外の應援があつた。かくして氏は堂々たる實業人として發展を遂げて行つたのである。今や功成つて神港郊外に布陣し大連東和汽船株式會社取締役として光つて居る。内外運輸、中外海運各株式會社にも其の監査役として、牢固たる地位を獲得し少壯の意氣當る可からざるものがある。前途に春秋多く内に燃ゆるが如き闘志を藏する氏、東亞新秩序建設に直面して形影總てを詳知する氏が、再び大陸の野に逞ましい奮闘を展開して日滿支一體一元の理想を顯現せんことを切望すると共に自愛の上健在ならんことを祈る。

友野鐵工所・社長

友野直二氏

鐵工業は我が國策の白眉として重要な役割を擔つてゐる。その鐵工事業の花形として友野直二氏の存在は大きく光つて居り、めざましい活躍は刮目して見られてゐる。氏が現在携はりつゝある株式會社友野鐵工所は業界に於ける花形として重きをなし、斯業の進歩發達に對する貢獻はまことに甚大なるものがある。氏は東京府人友野金五郎氏の二男にして明治二十二年十二月に誕生し大正四年に分家した。夙に發動機製作業を營みつゝ、今や友野鐵工所社長として、常に技術部門と經營部門の兩面にあたり、その精力的な働らきぶりは遺憾なく業績の上にもたらされて、日に月に向上を示しつゝある。事業家としてのみでなく氏は亦東京府會議員並びに麻布區會議長としても令名を馳せてゐる。もとより眞摯なる政客として精進しつゝある氏のことであるから、輕舉妄動する輩とはおのづから品格を異にするものがある。「朱に交はれば赤くなる」と云ふが、氏こそは之に對し常に超然たる態度をもつて其名を恥しめないものである。

日本纖維化學工業・社長

伴田六郎氏

氏は東京府人伴田六之助氏の長男にして大澤幸次郎氏の令甥にあたり明治十九年五月に誕生し昭和三年に家督を相続した。東洋協會専門學校を卒業後高田商會に入りロンドン支店に勤務したが、大正三年歸朝後同社を退き伴田土地合資會社無限責任社員となり、更に同八年日本纖維化學工業株式會社を設立して専務取締役となり、やがて伴田土地合資會社代表社員たると共に日本纖維化學工業の社長ともなつて統率して行く財界の立役者で、その驥足を一層に延ばさんとする氏の巨姿はさながら荒鷲にも似て、その威風正に颯爽たるものがある。今や時局下にはさながら空前の膨脹ぶりを示しつゝある秋、その客觀狀勢の攻勢に伴なつて、氏の牙城日本纖維化學工業も賑々たる好業績をつぎつぎと上げてゐるが、しかし氏の興隆は氏の拮据經營の努力に負ふところ尠なしとしない。したがつて同社と氏は最早絶體不可缺の關係にあり、同社今日の好業績は實に氏に依つて擧げられてゐると云つてもすこしも過言ではないのである。

豊島商店・代表取締役

豊島久七氏

綿糸綿布人造絹糸商として名高い豊島久七氏は現に大阪商工會議所議員輸出綿糸布同業組合長、日本ステールファイバー輸出組合理事、大阪三品取引所取引員等を兼て名實共に同地財界を牛耳りつゝある。氏は愛知縣の産、先代久七氏の長男にして明治十五年七月に誕生、大正二年家督相続と共に前名民三郎を改めて襲名に及んだ。夙に家業たる綿糸綿布人造絹糸商に従事しつゝ、株式會社豊島商店代表取締役協同土地、山一商店、吳羽紡績、浪花紡績、東海紡績株式會社等々其他の重役をも兼てその勢威將に斯界を風靡しつゝあるかの觀がある。これといふのも氏が常に國家本位の事業經營を念願として徒らに目先の少利に迷はず、斷乎大企業家たるの所信に基いて各種事業に豪膽達識の手腕を揮つたればこそで、その實際的潛勢力の偉大さは測り知れざるものがある。曩に大阪市會議員として忠實に市政に參與したることなどは、今尙以て耳新しく其清新なる行動は後進に大きな示唆を與へるものとして推範できる。

鳥羽洋行・代表取締役

鳥羽實氏

わが鳥羽實氏は友邦滿洲國の玄關たる大連實業界の闖將として第一線上に活躍しつゝある逸材である。即ち氏は先代眞作氏の時代から大連に鳴らしてゐる鳥羽洋行代表取締役に名実共に輝いてゐるが、流石に先代に見込まれて養子となつた程の出来物であるから、四十六歳の青壯實業家とは想へぬ程の圓熟練達せる經營手腕を發揮して隆々たる業績を擧げ羨望の的となつてゐる。氏はまた驥足をメーカ界に伸ばして鳥羽鐵工所、滿洲農具製造各代表取締役に任じてゐるが、こゝに於ても氏の英才は遺憾なくその妙諦を現はし、兩社共に版賑を極めてゐる。氏は明治二十八年八月長野縣清水忠五郎氏の長男として誕生したが、大正二年同縣人鳥羽眞作氏の養子となつた。同年縣立大町中學を卒業し、翌三年大連に渡り、養父を扶けて鳥羽洋行の業務に従事し、青島に同社の支店開設せられるに共に支店長となり其の基礎を確立したが、大正八年歸連し同年養父の逝去に遇ひ遺業を繼承して今日に及んでゐる。

鳥居商店・社長

鳥居孝一郎氏

帝都に於ける藥種商界の花形として鳥居商店は信用厚き店であるが、わが鳥居孝一郎氏は同店社長として斯界に鳴らしつゝある逸材である。歐洲再戰勃發以來、世界の藥品王たる獨逸國との航路途絶えがちであり、且つ極度に輸入藥品の制限を受けて、輸入品は大打擊を被りつゝあるが、國産品は當局の獎勵もあつて大いに増産されつゝあるから、刻下の藥品不足も漸次解け合つてゆく見透しが着いて來た。氏は鳥居商店の他、大平商會取締役任じ、また東京藥種貿易組合組長の名譽職に推されて、藥種國策の爲めに大いに盡瘁しつゝある。氏は明治二十三年三月神奈川縣人鳥居徳兵衛氏の長男として誕生したが、大正十一年家督を相続した。夙に慶應義塾に學んだが、後ち米國に渡つて藥品其他の經濟事情を研究すること六年、大正九年歸朝し、祖業の藥種問屋鳥居商店を經營し乍ら現在に及んでゐる。令弟三郎氏は鳥居商店監査役として氏の事業を輔けつゝあり、また義兄清志氏は藥種商として斯界に聞え高き人物である。

住友鑛業・若松支店長

豊島虎太郎氏

識徳手腕兼備の豊島氏には打つてつけの舞臺が住友鑛業株式會社である。氏は住友財閥中の人材に於ても博學多識磨かれた知性と玲瓏たる人格の持主としてよく知られてゐる。しかも抜くべきところでは秋水の冴えた切れ味を見せる力腕をも兼備して、偉材むらがる中に在つて光芒一際輝くものがある。氏は廣島縣人豊島卯兵衛氏の長男にして明治二十三年八月に誕生した。大正三年東京高等商業學校を卒業後、三和銀行を振り出しに大正七年山下鑛業會社に轉じ本社副支配人心得兼商務係主任、神戸出張所長、西部鑛業所次長、若松出張所長、本社鑛山部副長、本社營業部副長等を歴任して大正十五年北海道鑛業會社に轉じ、更に昭和四年に至つて住友鑛業に入り今や若松支店長として清新な切れ味を見せつゝあることは人のよく知るところである。深慮に富む氏は又慈悲もあり人の頭と敬まはる素質を持つてゐるが、あまり剛毅に傾きすぎる點が無いでもなかつた。然し年と共に人格は洗練され重厚さを増して來た。

山一商店・代表取締役

豊島半七氏

氏は愛知縣の産、鈴木善七氏の二男にして明治三十三年十一月に誕生、大正十四年先代豊島半七氏の養子となり昭和十二年養父隱退の後を承けて、家督相続と共に前名孝三を改め襲名に及んだ。夙に人稱、ステール、綿糸商を營みつゝその發展に専心し、業務に精勵して今日の大を招來したもので、現に株式會社山一商店代表取締役東海紡績、東洋毛糸紡績各株式會社取締役其他の重役を兼るほか、一宮市商工會議所常議員、名古屋綿糸布取引所理事、愛知縣社會教育委員等の任にあつて事業方面に或ひは公職によく忠勤を勵みつゝある。未だ四十を越したばかりであるが、充分な經驗も積んでゐるし度胸も出來てゐるから、今後更に飛躍の階段へ登ることは必定である。況や洗練された紳士振りは業界隨一の君子として噴々たる好評を浴びてゐるし、果敢、剛腹、恬淡の三長所をもつて天下に聞えてゐるに於てをやである。したがつて先代に優るとも劣らざる手腕力量は夙に定評の存するところであり、これに喋々の要は無い。

山陽無煙炭礦・取締役兼大嶺礦業所長

中尾景治氏

明治十五年四月、中尾健吉氏の長男として生れた氏は同四十年に京都帝大電工科を卒業し、實業界に身を投じたのであつた。現時は山陽無煙炭礦(株)取締役兼大嶺礦業所長として實務統率の任に當つてゐるほか川北電氣、京都電機各株取締役の要職も兼務してゐる。氏は石炭に就ては學理的にも實際的にも精通してゐる斯界の權威者であるが、しかし無煙炭の販賣統制は難事の中で、これの需給調節と市價との統制とを計劃的に實行してゆくは容易なる業ではない。而もこの販賣統制なくしては炭界の發展は到底望み得ないといふ重大使命にあるが、氏はよくこの難事に當り着々と實績を擧げ、豫期以上の成果を収め山陽無煙炭礦の大黒柱となつてゐる。また全くの健闘努力家でもあり、頭もあり、加へて豊かな體験と情味とがある。この卓見仁俠の氏が颯爽たる事業姿態を以て更に大をなすだらうことは、最早疑ひない事實として各界から注目されてゐる處だ。正に氏こそ時局下に期待される事業家の一人であらう。

三機工業・常務取締役

中川松治郎氏

三井物産は人物播種盤の温床とも云ふべく、人材の輩出はまことに他を壓例するかの觀がある。中川氏の如きもその長き物産生活に幾多の大きな功績を残して來てゐる。しかもその功をよく認められて、時局メーカマンとして今を時めくに至つたもので、業界の事情通たると共にその手腕力量も夙に定評のあるところである。氏は大阪府士族中川利喜松氏の二男にして明治二十六年に誕生した。神戸高等商業學校卒業後三井物産に入社、營々たる努力と不撓の精勵ぶりはやがて氏をして今日の如く、爽颯と業界に呼號せしむるに至つたもので、三井物産を経て三機工業株式會社大阪支店長、東洋キヤリア工業株式會社支配人等に就任、更に現在の如く三機工業、東洋鋼材株式會社常務取締役、東洋キヤリア工業株式會社監査役等の任にあつて業界の立役者と呼稱されるゝに及んだものである。斯くの如く氏の力が如何に大きく効果的に發揮されて來たかといふことは、その過去を眺めるときに充分首肯されるのである。

北都組・代表社員

中木伊三郎氏

嘗て北海道運送組合長並びに全國運送組合副會長として鳴らした中木伊三郎氏こそ、現に合資會社北都組代表社員、北海道運送、室蘭運送株式會社取締役等の任にあつて、依然として斯界に萬丈の氣を吐いてゐる。しかも氏の快腕はこれのみには止まらず、更に小樽郊外自動車株式會社社長、北海道拓殖鐵道株式會社事務取締役其他の重役をも兼て、今や名實共に北海道事業界に於ける重鎮としての實績を示しつゝある。氏は石川縣の産、中木伊平氏の長男として明治十六年一月に誕生、同四十三年に家督を相続した。夙に運送業を志し大正元年小樽の西谷庄八氏經營の運送業北都組の事業を繼承して獨立してよりは、いよ／＼その手腕も巧んで漸次北海道運送業界のホープとして讃えらるゝに至つたもので、永年に亘る氏の苦闘努力によつて今やその基礎も確固不拔、業界に牢固たる地歩を擁して好業績をつゞけつゝある。ローマは一朝にして成らずの譬へで氏の大成の蔭には粒々たる辛苦のあつたことを見逃してはならない。

臺灣青果・取締役

中澤幾雄氏

青果業者の金城蕩池たる臺灣に在つて、斷然業界に異彩を放ち、縱横に業界を馳驅しつゝあるのが中澤幾雄氏である。氏は長野縣の産、中澤盛雄氏の二男にして明治十八年八月に誕生した。夙に斯業の將來性に着眼し明治四十一年雄圖を抱いて臺灣に渡り、大正三年青果物輸出商を營みつゝ只管斯業の發展に留意しつゝ大いに健闘を試みた。氏は先見の明があるだけに確かに常人の追隨を許さぬ非凡さを藏してゐる。しかも永年に亘て斯業一筋道を一歩／＼前進しつゝ今日の榮位に到達した意思の人である。したがつていさゝかの浮華輕薄のところもなくその態度たるやまことに眞摯そのものである。大正三年青果物輸出商をトツプに、同十三年臺灣青果株式會社創設と共に同社に入り、爾來精勵之を怠ることなく現に同社取締役支配人たる傍ら下關中央青果株式會社監査役を兼ねて、斯界のオーソリティーとしての名聲を博してゐるのも、一に商賣熱心主義に併せて堅實に本道を嚴守した爲にほかならないのである。

日滿製粉・社長

中澤正治氏

時局下國策産業の第一線にあつて、躍進に次ぐ躍進をつゞけつゝ萬丈の氣を吐いてゐるのが、中澤正治氏が主宰しつゝある日滿製粉株式會社である。同社が創業以來著々と生産擴充に邁進しつゝ、有数の有望會社として業界の注目の的となつてゐるのも、畢竟社長として經營運の術に當りつゝある氏の才腕の然らしむるところである。氏はねばならぬ。氏は新潟縣の産、中澤貞藏氏の長男として明治二十六年五月に誕生、昭和八年に家督を相続した。大正七年東京帝國大學法學部獨法科を卒業後日滿製粉株式會社に入り漸次累進、才氣煥發と卓越せる手腕によつて専務取締役に進んだが、重なる信望は遂に現在の如く同社社長として號令を發しつゝあるほか、東洋拓殖株式會社理事並びに滿洲製粉聯合會理事として活躍しつゝある。氏は資性快活、舉措行動極めて明朗、一面識を得ただけでその潑刺たる才氣煥發の手腕家ぶりを印象づけさせられる。而も輕薄さは微塵もなく人情の機微にも深く通じてゐる。

中島機械・社長

中島幾三郎氏

大阪に於ける印刷工業界の白眉として、中島機械株式會社の存在は唯一の花形として光彩を放つてゐる。その中島機械の社長の要位に据つて天下にその名を馳せると共に、經營一切を縱横に切り廻してゐるのが中島幾三郎氏である。抑々中島家は岐阜縣の用に於て、後代々大阪に住む先代幾三郎氏の時に至つて印刷工業に盡瘁した斯界の功勞者で、その辛苦を積んだところは立志傳中の人としても深く畏敬されてゐる。氏は其長男として明治十八年三月に誕生、大正十三年家督相続と共に前名種太郎を改めて襲名に及んだ。夙に大阪高等工業學校機械科を卒業後印刷機械製造業を營みつゝ、斯界を啓發するほか、更に大阪鐵工業會館（株式會社）取締役を兼て大阪府多額納稅者に列しその威名いよ／＼天下に冠たるの觀を興へてゐる。斯くの如く氏の携みなき精進は、眞に大阪商工會議所議員として令名を博したるのみに止まらず、昭和十一年九月には産業開發の功勞者として、綠綬褒章を賜はるの光榮に浴してゐる。

朝鮮鹽業・社長

中島市右衛門氏

中島家の祖先是農を以て業となし、代々市右衛門を襲名して元大阪府下西郡九條村に住してゐた。大地主としての威望は近隣を歴し、明治維新前までは庄屋を勤めてゐた名家であつた。氏は先代市右衛門氏の長男として明治二十六年四月に誕生、大正十三年家督相続と共に前名英一郎を改めて襲名に及んだものである。早稻田大學理工科を卒業後事業界に入り、現に朝鮮鹽業株式會社社長、中島製作所、東洋スレート各株式會社取締役として營々たる努力を傾注しつゝあるが、その献身的な精勵と卓抜なる經營手腕とは、何れもよく經營の上に効果的に具現され、極めて良成績を収めつゝ一路發展の軌道へと乗りつゝある。氏の最も強味とするところは手腕、卓見もさることながら、春秋に富むことである。明治二十六年生れといふから、本年四十七歳、實業家としてはいよ／＼これからといふところで、その前途こそ刮目して見るべきものがある。しかも大阪府多額納稅者に列してゐるに於てをやである。

中島製作所・社長

中島市二郎氏

氏は大阪府多額納稅者として錚々の名を馳せてゐる中島市右衛門氏の叔父君にあたり、そのよき智囊として時局事業界に巨姿を點する業界の長老である。したがつて手腕あり、識見ありと云つた氣鋭の人で一族の指導を圖ると共に、益々手腕を洗練し若々と抱負經綸を具現しつゝある。氏の牙城はいふまでもなく株式會社中島製作所で、同社を足場として縱横に驥足を伸ばし、現在中島製作所社長たるほか東洋スレート株式會社社長、朝鮮鹽業株式會社取締役等に列し、關西事業界に於ては押しも押されぬ鬱然たる勢力を扶植してゐる。氏は大阪府の産で明治十二年四月に誕生、同三十八年に分家した。明治三十五年東京高等工業學校機械科を卒業したといふ文字通り斯界の長老といふにふさわしき存在であり、關西で鍛え上げただけのことはあつて流石に肌合もしつかりとしてをり、強氣一方の事業界の驍將でありと云ひ得るのである。いよ／＼經驗を加味し、手腕も充分伸びてゐる今日、今後の多幸こそ華々しきものがあらう。

大阪瓦斯副産物販賣部・顧問

中島彦一氏

當代出世世鑑の第一頁を飾るべきは岐早縣出身中島彦一氏であらう。氏は明治十三年生れ實業界には打つ付けの年輩である。上記の如く大阪瓦斯會社の現役よりは退いたが副産物販賣部顧問として重きをなし、尙東洋木材防衛、帝國コークス、香燒コークス、各取締役に就任して財界に其の存在を明示して居る。若冠にして志を抱き下阪して入社したのが大阪瓦斯會社、全身に漲る意志の力を以て社業大事に専心精進し傍ら苦學を續け自己を磨くことを怠らなかつた。人材は永く睡伏すればする程その眞價が現はれる、氏の精勵精勵は遂に酬ひられ果進して總務部長となり、社長片岡氏の懐刀となつて縱横に活躍し、増資問題、外資運送問題等々幾多の事件に處して潜在的な努力を續け資本金九千萬圓の大會社を築き上げた隠れた奮闘は決して没すべきでない。氏は義侠肌で、自己の名利など問題にせず後進に道を開く爲め、あつさり現役を退いて悔ゆる所もない。但し同社は氏の功勞に報ゆるに顧問を以て遇す、亦所以なくんば非ず。

京都電燈・取締役兼福井支社長

中島昌夫氏

京都電燈會社取締役中島昌夫氏は其の開歴が示す如く立志苦闘の結果今日を招來した傑物である。氏は明治十四年福井縣に産れたが父縁に薄く、同二十六年家督を相続した。幼い乍らも家運發展の志強く切々たる勤勉を續け、明治四十一年京都電燈會社福井支社に入り、一心不亂に刻苦奮勉、只管社業に對して犠牲的の全力的精勵を續け敢て倦むことがなかつた。固より明敏な氏が碎身の苦を辭せずして健闘した成績は群を抜いて上層部の認識を高め、累進して、同支社長兼支配人と登用せられ更に昭和十三年同社取締役に推され今日に及ぶ。實に氏が福井支社三十五年の成業は偉大なものであつて氏あつての福井支社とまで言はれて居る。氏は又南越電氣、大聖寺川水電事務、三國蘆原電氣常務、福井電力、大正電氣、丸岡鐵道取締役として北陸電力界に重鎮として君臨してゐる。單身能く困苦缺乏に堪えて不屈不撓、強毅な意志によつて築いた今日の地位は氏の血の陪ひである。老練圓滿な財界の存在として畏敬の的である。

大連汽船・東京事務所長

中西家太郎氏

時變下に於ける軍需輸血路として重要な役割を掌るものに大連汽船会社がある。國家有事に際して當然だと云へば其れ迄だが、船腹不足の刻下、其全能力を捧げて奉公の至誠を盡すことは營利會社としては容易ならぬ犠牲と言はねばならぬ。大連汽船には社長を始め斯界の強豪が多い中に東京事務所長たる中西家太郎氏は同社の帝都探題たる重要な地位にある大量量手腕が傑出してゐる。氏は東京府中西友吉氏の長男で明治二十六年一月生れ、大正五年東京高商を卒業した秀才である。夙に汽船海運界に入り、大連汽船に入社したのが昭和六年、優秀な才腕は忽ち認められて本社營業課副課長に起用せられた。時恰も船質改善助成法や逓信省當局の船舶建造補助計畫等で海運界萬能の春を謳歌した時代で、氏は蘊蓄を傾けて献身的努力を社業に捧げ其の存在を重からしめた。昭和十一年東京事務所長の要位を獲得し現下國策進行の盾となつて活躍してゐる。剛毅果敢にして所信斷行の半面に情味溢る、和かきをもつ紳士である。

本芝機械工作所主

中西市藏氏

近代文明は國家意識の強靱性を要求すると共に物的資源を極度に擴充せんとして居る。従つて資源開發の凡ての機關を強化しなければならぬ。就中機械化文明が國家的武裝の先驅をなし、各國獨自の研鑽を積み其の性能の優秀さを競つて停止する所がない、我が中西市藏氏は夙に自動車業界に著目し優秀な純國産自動車の製出を完成し輸入防遏、國利増進を指標として本芝機械製作所を創設し自動車部品製作に乗り出し、獨特の研究を重ねて其の製品は既に定評ある所となつた。氏は壯烈な三多摩理の代表的な持主で、烈々たる闘志に燃え事業の爲めには死して悔なしといふ猛烈たる勢で、自ら工場に働き又新知識を求めて止まない勤勉振りを示してゐる。氏は東京府中西房吉氏の三男として明治二十二年出生、大正二年兄諭吉方より分家獨立した人で若い時からの負けず嫌ひ、意志の強靱なる鋼よりも堅い。この性格は事業上に直射して製品の優秀確實を以て聞えて居る。時局に直而して氏の如き實力健腕の士の存在を心から欣ぶものである。

昭和ルノ工業・社長

中野友作氏

新潟縣多額納税者にして日本海倉庫他十指に餘る大優秀會社を率ゐる業界の巨將たる中野忠太郎氏の名聲は實に著名だ。この傑物中野氏に見込まれて當家の養子となつたのが石田友作氏、つまり中野友作氏である。氏は明治三十五年六月生れ、新潟縣の人石田友藏氏の五男である。中野家に入つてからは當家繁榮の爲に盡瘁して止まない。また當家の先々代貫一氏は日本の石油王として吾が産業史上に大なる足跡を残した偉人だが、この人の遺訓たる日本主義を堅持して氏も實業界に飛躍、現時昭和ルノ工業株式社長、東洋工作所、廣瀬川電力各(株)取締役として活躍を續けてゐる。尙氏は曩に昭和土木建築會社社長でもあり、積極進取の方針をとつて目覚しく躍進、青年實業家の最たる人としての信譽を恥づかしめない。そして天賦の才幹はよく中野家の隆盛を齎して發展せしめ、嗣氣もあり野心もあり、明日の業界を擔ふヤング・レネーションの代表者として誠に申分のない人格者。新進財閥の當主として洋々たる將來がある。

日本化學工業・常務取締役

中野芳太郎氏

近時日本化學工業の進出には目覺しものがある。同社には誇るにたる名常務中野芳太郎氏がゐる。氏は中野米吉氏の長男で明治十九年生れ、同四十五年叔父方より分家、同年東京帝大工科應用化學科を卒業し日本化學工業に入社、一社員より叩き上げた斯界の權威者である。同社は輝ける歴史をもつ優良會社で、以前大日本人造肥料と稱したが近年改稱、愈々發展してゐるが、同社に於ける氏の手腕は並々ならず、當社最近の嶄新な施設、能率の増進、製品の向上等は實に氏の活躍によるところ大である。同社にあつて三十年、一社員より芝川工場長を経て常務に進んだ氏の功績は大きい。純技術的方面のみに留まらず、その緻密なる頭腦をもつて事業經營方面に於ても壓倒的な活躍を試みてゐる氏の偉大さ。尙この他に日本製鍊常務、東洋電氣工業取締役と各界に進出、エンヂニア出身實業家として萬丈の氣を吐いてゐるが、その業務に對しては刻苦精勵、熱烈果敢な仕事振りに全く敬服に價するものがある。

日本製鋼所・取締役

中野義雄氏

重工業界の雄日本製鋼所はいまや時局の要望に應へて奮迅の活躍をなしつゝある。當社の特色は何といつても我國民間の最大兵器會社であることだ。明治四十年創立三井直系の北海道炭礦汽船が大株主でその基礎絶對堅實なること云ふまでもないことである。氏は當社の取締役として經營を擔當し、その才幹は昔より定評のある人物である。明治二十五年の出生にして、大正六年に東大工科を卒業してより大學院に二ヶ年間研鑽を積み同社に入社、爾來社運の消長に運命を託してきた人で正に日本製鋼の至寶ともいふべき逸材である。大正八年に英米出張を命ぜられ、同十一年に歸朝、後室蘭工場勤務、日本製鋼常務、日本興業銀行參事を經て昭和十年八月に室蘭電燈、野村製作所各取締役、輪西鑛山常務、北海道炭礦汽船參事に就任その出世振眞に鮮かなものがある。現時日本製鋼所は時局の波頭に便乗して躍進につぐ躍進を續け、三井とツヅカース・アームストロングの連繫による大兵器會社として國防資材の擴充に餘念がない。

中棗商事・社長

中棗又左衛門氏

半田商工會議所顧問中棗又左衛門氏は愛知縣先代又左衛門氏の二男で明治二十一年十一月に出生、大正八年に家督を相續し前名幸造を改め襲名した。中棗家と云へば昔よりの舊家として知られ、現當主又左衛門氏は第三子と共にか只當家の繁榮の爲に力闘してゐる。氏は中棗餅店、中棗商事各(株)社長、中棗酒店(株)取締役會長、龜甲富中棗醬油店、半田運輸各(株)監査役として大活躍、曩に多大なる功勞により紺綬褒賞を賜り、昭和五年及十三年に同飾版を加賜せられた偉材である社内整備に、業績向上に氏の眞剣なる經營振りは大きく現はれ、昨今に於ける關係各社の内容充實は明らかにその才腕の程を示してゐる。夙に業界に入つて研磨を加へた氏の商才は、地方政界にも鍛鍊されて正に圓熟の境にあるかの感さへある、見識あり、手腕あり、人望あり、正に地方實業界の一雄將だ。中棗家の事業と信用を保守し發展させる人物としては誠に打つてつけの人格者、先代に似て意志極めて強固、當家は益々進展の一途にある。

大阪ビルディング・社長

中橋武一氏

巨星中橋武一氏を語るには先づ中橋家の傳統を語らねばならぬ。當家は英傑鬼才先代徳五郎氏より家名を揚科を卒業して判事司補となり、爾來特許局審判官、農商務省參事官等を歴任し大臣官房財務課長、鐵道局長等を経て明治三十一年官を辭して實業界に入り、大阪商船社長及日本窒素、南滿洲鐵道等の重役を兼ね雷名を轟かす。衆議院議員に當選すること六回、立憲政友會の長老として原内閣の文部大臣、田中内閣の商工大臣、犬養内閣の内務大臣に各親任せられた。現當主武一氏は明治二十三年出生、神戸高商の出身で遺業の躍進にスピードをかけ大阪ビル社長、大阪陶業取締役、大阪商船監査役と業界に飛躍父に劣らぬ手腕家として名聲を馳せてゐる。堅實主義をモットーに時流に即應して、飛躍する美事さ、その實行力に至つてはむしろ先代以上と云はれ、文字通り敏腕氣鋭の實業家として大いに期待されてゐる。

東亞燃料工業・常務取締役

中原延平氏

燃料報國の聲高き現時、燃料界にあつて斯界發展の爲にわき目もふらず奮闘を振つてきた中原延平氏は業界實力者中の第一人者であらう。氏は明治二十三年五月生れ、大正五年京大工科應用化學科を卒業し業界入をしたが、目下東亞燃料工業常務、小倉石油取締役兼製油部長、石油聯合監査役として敏腕を揮はれ、國策事業を双肩に眞摯な活躍で社業の強固な地盤を築いたことは氏の實力の一端を示すもの、知識經驗共に廣く資源開發に貢献した處尠くない。由來事業家にも種々なタイプのあつたのだが、眞摯誠實の人物は兎角積極的な一面を缺き勝ちなものだ。然し又奔放な棟梁家には稍もすれば眞摯誠實を缺く嫌ひがないとも云へない。全く皮肉な現像だ。ところが此處にあつて氏は誠實眞摯しかも積極進取の氣風を併せ持つた熱情の士で人間の情味も萬點に近い。高き矜持をもち眞剣に事業家の天職に盡してゐるのは敬服すべきこと、力量豊富、然も清廉に己を持して郷黨の榮望を負つてゐるのも好もしき限りだ。

林業商店・専務取締役

中部兼市氏

兵庫縣在籍の中部家ほど一門こぞつて業界に躍進してゐる家もさう多くはない。中部兼市氏は兵庫縣多額納税者中部幾次郎氏の長男として明治二十五年二月に出生、現時林業商店土佐捕鯨、林業鐵工造船各株式會社専務取締役、羅老島電氣、中部農事各株式會社取締役として活躍、目覚ましい進出振りを示し、地方財界の中堅として名聲が高い。嚴父幾次郎氏は既に著名な傑物で下關商工會議所會頭に於て數多の會社を主宰し、又弟謙吉氏も業界の新星として人望あり、養弟悅良氏、義吉氏、利三郎氏共に錚々たるもの、當家の前途はこのMEMBERをみたゞけで飛躍疑ひなしの感がある。氏はよく當家を統帥し、嚴父の片腕として専心業務に精勵、今や揺るぎなき堅實な基礎が築かれるに至つた。烈々たる氣魄と社交性、更に緻密速大なる計畫性と実行力、これ等二つは屢々人間性の中で對立するものであるが、氏の人爲好くこの對立二性を消化して異彩ある風格を創りあげてゐる。中部家の大黒柱として恰好、全く高德の士である。

三島製紙・社長

中村愛作氏

三島製紙社長中村愛作氏は明朗にして温雅な典型的紳士として、業界の信望と畏敬を受けてゐる逸材である。氏の母堂さん刀自は故福澤諭吉翁の令女、現慶應義塾社頭一太郎氏の令妹であるから、氏は即ち福澤翁の令孫に當つてゐる。氏は明治十七年十一月東京府人中村貞吉氏の長男として誕生し、同二十八年嚴父の後を受けて家督を相続した。同三十八年慶應義塾政治科を卒業したが、米國留學して廣く研鑽を積み同四十一年歸朝した。後三井銀行に入社した。漸次累進したが大正五年之れを辭し、現在は三島製紙社長として製紙報國のために専心盡瘁してゐる。氏は才學兼備の上に名門の出と云ふハンデを有つてゐるが些かも高ぶる様なことがなく、部下に對しても眞實味を以つて接すると云ふ人情に富んだ人である。氏はまた閑暇を得ては昔忘れぬスポーツに興ずるといふ長閑なオールドボーイイスでもあり、多都令夫人との間には二男五女の子寶があり明治元年生れの母堂もなほ健在で家庭は幸福に充ち満ちてゐる。

太平洋海上火災保險・専務取締役

中村準一氏

關西實業界の新星として光彩輝陸たる輝きを發する人に中村準一氏があらる。氏は當年とつて三十九歳の青年實業家であるが、流石に武家の血を受けてゐるだけに悠々迫らざる風貌の人格者で、頭腦は飽くまで明徹、事に處しては動することなく天才的な閃きを見せてゐるから、何人も氏を若冠扱ひするものなく畏敬の的となり、將來の大成が待望されてゐる。氏は現在太平洋海上火災保險専務取締役として社長たる嚴父準策翁を輔け、同社の實務萬端に名采配を揮ふ他、本錫工業取締役としても敏腕の聞えが高い。嚴父の準策翁は關西實業界の重鎮として夙に令名ある巨豪で太平洋海上火災保險、釜山鎮埋築各社長たる他、大同信託、大阪製鐵造機各取締役、興亞織維監査役に任じてゐるが、この親にこの子あることは純戦下の銃後にとつてまことに心強きことである。氏は明治三十五年五月兵庫縣人たる父翁の長男として誕生、昭和三年早大經濟學部を卒業した。猶ほ氏の考古學研究は餘技を脱した權威的なものがある。

株式會社中村組・社長

中村精七郎氏

布衣にして身を起し天下を握る豈豊太閣とのみ謂はんやで、明治五年五月北海道中村彌八郎氏の七男として生誕し、北海の激浪と風雪に鍛へられた氏は困苦と艱難とは物の數でなかつた。泰西の文化が明治初頭に波紋を畫いた眞只中に勇敢にも突進して行つた同氏は隨所に血みどろな奮闘を續けて寸分の惰容もなかつた。開港通商の國策は氏の天地を神戸に選ばしめ海運業に乗出させた。其の後の幾曲折幾變遷は愈々其の腕を磨き其の信念を強靱にし行くのみであつた。氏の今日の成功は誠に故ありと言ふべきであらう。中村汽船、山九運輸、比律賓木材輸出、滿鮮運輸、朝鮮商工各株式社長として、運輸業界の大立物である。尙青島早頭會社取締役を兼ねてゐる。凡ゆる人世の波濤を蹴つて戦ひ抜いた氏の熾烈な闘志は、亦人世の實相の總てを知り盡して悟り得た情操の中に溶け込んで圓滿な人格を形成し、老紳士として畏敬せられて居る。長男勇一氏（大生）、二男健治氏、三男公三氏父君を助けて愈々磐石である。

博進社・常務取締役

中村孝吉氏

博進社は本邦洋紙業界の白眉たり、其の創業は遠く明治三十年に遡る歴史を有する老舗である。わが中村孝吉氏は同社草創當時から在社する古武士で、現在常務取締役の樞席にあつて關西方面の指揮采配をやつてゐるが、氏の四十餘年に亘る功績は到底筆紙に盡し難き程大きなものがあり、本邦洋紙業史即ち氏の半生史と言つても差支へないであらう。氏はまた文進洋行取締役會長たる他、大進商店常務取締役、東京商會取締役、文運堂監査役等に任じてゐるが、素より練達湛能の氏の配下にある之等各社は、隆々たる業績を示しつゝある。氏は明治八年一月東京府人中村英三郎氏の長男として誕生したが、同二十八年令妹すま女の後を承けて家督を相続した。同三十二年洋紙店博進社創立と共に入社し、次で大阪支店長に擧げられ現時常務の椅子に就いた。氏は當年六十八歳だが老來彌々豐饒たるものあり、時局下のバルブ制限に依る洋紙不足の難局に當つて、よく洋紙國策のために盡瘁しつゝあることは感謝に耐へない。

中村醬油・専務取締役

中村秀平氏

氏は靜岡縣前貴族院議員中村圓一郎氏の長男にして明治三十年七月出生、大正七年大阪高等工業學校を卒業し家業たる醬油醸造及び製茶貿易に従事し、現在、中村製茶靜岡カフェイン工業所、清水瓦斯、藤枝合同運送各株式會社に取締役として就任。嚴父圓一郎氏縣内政界の元老にして貴族院に議員たること五回、又茶業王國たる本縣に其王座を占め實業界の長老であつた後を承け、堂々斯界に乗り出し重きをなして居る。醬油龜甲圓は夙に名あり。氏は温厚篤實な少壯紳士で時流に適合した經營をなし、其の業績隆々として發展し先代を凌ぐ盛況を呈するは誠に氏の着實亦堅實を物語るものであつて信望頗る加はつて居る。將來の活躍と大成とは期して待つべきものがある。氏は刀劍に興味を持ち其の所蔵する名刀古刀も多しと聞く、鑑識眼に至つては玄人も及ばぬものがありといふ。牧野原の茶園に新芽の香り高い頃、農林省の茶業試験所に颯爽と現はす氏に直面した誰でも、茶業日本を背負つて立つに十分な氏に信頼を措くであらう。

南國産業・専務取締役

中村第三氏

南國産業會社専務取締役、森永食品工業、臺灣製糖各株式會社取締役、スマトラ拓殖株式會社監査役として産業界に知名の氏は、御歌所寄人中村秋香氏の三男にして、明治十五年十月靜岡縣に生れ、成蹊學園の創始として有名なる春二氏の令弟であり、大正十三年實見秋一方より分家獨立した。曩に明治三十七年東京高商を優秀な成績を以て卒業するや實業界に入り實務を修練し、大正七年外遊して世界大戦後の産業の状況を視察して歸朝す。氏は茲に産業報國の素志を堅め、強い信念を以て馬を陣頭に進め斯業界に鮮かな手腕を振つた。現時は前記各株式會社の重役として樞機を司掌し、帝都業界に棲たる存在として許さるるに至つたのである。産業靜岡縣の代表的人物として郷黨の信望亦厚いといふ。物資の統制下にある現時局の難關を突破し、躍動する實力手腕を併せ持つ氏に信頼するものである。長男醫學士剛氏（大三、生）は、東大附屬病院補内科の助手として嚴父とは全く違つた方向に精進せられて居る。

大日本電化精練・代表取締役

中村貞作氏

同氏は新潟縣中村德次氏の長男にして明治十五年十月出生、同十九年家督を相続す。夙に早稻田大學に學び、第百三十九銀行に入り數年間勤務したが、轉じて常盤商會に入り實に二十年間營々として格闘し、其の發展の礎石となる。功業は空しからずして遂に専務取締役として起用せられ、其の運籌を掌領するに至り重鎮を以て任ずに至つた。氏は又電化精練會社代表取締役として工業界に進出し、日本物産株式會社取締役就任し堅實な歩みを續けて居る。寡言實行の性格であつて言行一致は氏の理念であるが、然かも上品な外交振りは多年の修練によるものと云へやう。長男眞一氏（明治四一、生）は早大英文科出身で現在學習院教授として奉職し、四人の令嬢既に成人し、母堂カツ女史の膝下に家業萬端の修養に怠りないとの事である。氏は暇あれば書に親しみ漢籍には特に造詣深く、漢詩の作成は驚くべき域に達して居る。尙和歌にも湛能であるといふ。氏の人格がそとろに惚ばれて髣髴たるものがある。

小松製作所・社長

中村 元 治氏

株式會社小松製作所社長中村元治氏。そは、まことに時局財界を双肩に擔つて起つにふさはしき存在である。その財界經綸の抱負と事業的才腕とは流石に傑出したものがあり、しかもその卓腕をあらゆる事業に對して効果的に發揮する氏のことである。その目算正當を得たり、その敏腕又時機を得たりと云ふべく、小松製作所の統領として覇を成してゐるのも決して故なしとしない。氏は宮城縣の産、村岡弘一郎氏の二男にして明治九年八月に誕生したが、其後先代忠吾氏の養子となつて明治四十一年に家督を相続した。明治三十五年東京高等商業學校を卒業後日本郵船會社に入り次いで猪苗代水力電氣會社調度課長に轉じ、同社の東京電燈會社と併合するや其總務部に屬して歐米各國を巡遊すること一ヶ年、此間凡る研鑽を積んで所謂あぶらの乗りきつた觀を呈しつゝあつたが、歸朝後はいよ／＼迎へられて小松製作所専務取締役就任したもので、爾來その精勤は力強い樞軸となつて遂に社長の榮冠を獲得し今日に及んだものである。

第一生命保險・京都支部長

中村 元 治氏

氏は現在第一生命保險株式會社京都支部長の要職に在り、名實共に斯界の指導的立場に置かれてゐるが、事實その事業的手腕には確かに一方の旗頭として立つべき力量が蓄められてゐる。氏は山梨縣人、中村周作氏の長男にして明治十三年六月に誕生、同二十九年に家督を相続した。山梨縣立中學校卒業後製糸業に従事したが、後に朝鮮に出で、山梨縣物産販賣に携はつた。斯くて大正二年第一生命保險會社に入ると共に朝鮮支部勤務となり、更に大連、前橋、神戸等各支部長を経て昭和十二年三月に現職に就任したもので、流石各支部の第一線に起つて親しく督勵、攻防禦に策を得て著々業容を整備擴充して、面目一新の輝やく實績をあげて來たゞけに、その識徳手腕兼備の名將振りは夙に業界矚目の的となつてゐるところである。しかしかゝる聲望を得るまでに拂はれた努力も並大抵のものではなく、その踏破した人生の幾山河は後進に深き示唆を與へ、良き處世の羅針たるを失はぬ奮闘努力の生きた好材料とも謂ふべきである。

櫻護謨・社長

中村 庸 一氏

齡ひ未だ四十代、事業界のハリキリ男として異彩を添えてゐるのが、我が中村庸一氏である。若くして實業界に身を投じ切磋琢磨させられたのであつたが、先輩の訓育は之を眷々服膺して謬らず、好調に乗つて首進することを避け、必ず合理的戦法をもつて着實を旨としてゐる。最高の商業道德は社會道德に一致するとは常に唱道せらるゝところのものである。然るに世の多くは社會の利害を究めることなく、獨り自己の利を占めることにのみ専念する傾向あるは遺憾至極である。我が中村氏はそれ等凡庸を超越し、事業は即ち社會ひいては國家を裨益するものであらねばならぬといふ建前から、常に之を實踐し躬行して其範を垂れてゐる。是ぞ氏が近代實業家のリーダーとして名譽を博しつゝある所以のもので、氏が社長として臨む櫻護謨株式會社、櫻金屬工業、青島地所建物、羽田調帶株式會社等何れも豫期以上の進展を示しつゝある。氏は千葉縣人、中村時中氏の長男で明治二十九年五月に誕生、専修大學の出身である。

東洋鋼板・常務取締役

中山 克 己氏

氏は高知縣の産、中山正己氏の長男にして明治十七年十二月に誕生し大正七年に家督を相続した。明治三十九年水産講習所を卒業後事業界に入り、今や東洋鋼板株式會社常務取締役、東洋製鐵株式會社取締役其他の重役を兼て時めいてゐるが、氏の重役は決して伴食ではなく又所謂重役稼業でもなく、一々微に入り細を穿つて經營の樞機を凝らし、何れも好況に赴かしてゐる。俗に「龜の甲より年の功」と云ふが、之ぞ空論を戒めて經驗の尙ぶべきを端的に訓したものである。世間にはとかく机上の空論が横行したがるものである。机上で作り上げたものだけに一應理窟に合つてゐるところが如何にも勿體らしくして、若年のうち之を信じたくなるものだが至極危険である。氏の如く歩一步と着實を旨とし明日の飛躍に備へてゐればこそ、その前進にわだかまりもなく、その努力はやがて業運の伸張となつて現はれ、年と共に隆々たる發展過程に入つたもので、今や時局メーカーの花形人物として光つてゐるのも宜なる哉である。

東洋紡績・取締役

中山 秀 一氏

本邦五大紡績中でも東洋紡績は鐘紡と相並んで斯界に於ける東亞の兩權となつてゐるが、同社は桑條バルプの工業化に成功し、纖維原料飢饉状態の今日、内地工場に於ける唯一の人造纖維用バルプを生産しつゝあることは、たゞに同社の強味ばかりではなく、バルプ國策のためにも大いに慶賀すべきことである。わが中山秀一氏は本邦紡績界の長老として夙に聞え高き巨豪であるが、現在氏は東洋紡績取締役として同社の重役陣に重きをなしてゐる。氏はまた同社の存社たる東洋染色取締役たり、且つ江南專務取締役としても名采配を揮ひ噴々たる聲名がある。氏は明治十三年二月東京府人中山半氏の長男として誕生し、後ち家督を相続した。明治廿八年東京高商を卒業して實業界入りしたが、圓滿なる人格者として諸人の渴仰の的となつてゐる好紳士で、先には昭和レヨン取締役兼支配人に任じてゐた。氏は當年六十一歳還歴に達したが猶ほ若人を凌ぐ元氣さでOBスポーツマンたり、また園藝は相當の腕前である。

南海鐵道・専務取締役

中山 隆 吉氏

關西私鐵界の重鎮として明星の如く光輝燦たる人材にわが正四位勳四等中山隆吉氏がある。氏は永らく鐵道省にあつて重席に就いてゐた巨材で、その卓越せる識見手腕を以つて國鐵に貢獻するところ多大なるものがあつたが、現在は南海鐵道専務取締役並に同社の姉妹會社たる高野山電氣鐵道常務取締役として、練達湛能の名采配を揮ひつゝある。南海鐵道は沿線に海水浴場其他數多の行樂地を有してゐる關係から、運輸に於て非常な活況を呈して居り、關西五大電鐵中でも首位を占める収益を擧げ、斯界羨望の的となつてゐるが、これといふも、寺田社長をよく補佐して、實務萬端の指揮に任する氏の功績に據るものである。高野山電鐵は氏が全權を掌握してゐて、これも隆々たる業績を擧げつゝある。氏は明治十七年十月石川縣人中山泉氏の長男として誕生し、大正五年家督を相続した。先是明治四十四年東大法科を卒業して鐵道院に入り、漸次果進して運輸局長、同監察官に任じたが、昭和七年退官して現職に就任した。

天理教管長

中山 正 善氏

天理教はわが神道界にあつて信徒七百萬を擁してゐる一大宗教團である。佛派の中には東西本願寺等老なる檀家數を有してゐるものはあるが、之には嚴密な意味では信徒とは云へないから、眞實の信徒數に置いては、天理教が本邦第一の宗派である。新興宗教は勢力が強大になつて來ると、大本教や人の道に於けるが如くいま／＼しき事件を起しがちであるが、わが天理教は教團主腦部に現管長中山正善氏の如き偉大なる人材が在つて、信徒の教導に當つてゐるから、搖るぎなき礎を据えて愈々盛運を辿り、神國日本の發展に貢獻しつゝある。言ふまでもなく天理教は大和國三昧田村の舊家に生れた教祖中山ミキ女の開く處で、創始は天保九年教祖四十一歳の時であつた。明治四十一年別派獨立を認可され先代新治郎氏が初代管長となつた。氏はその長男で明治三十八年四月出生、大正三年家督を相続し、同十四年第二二代管長に就任し、昭和四年東大文學部宗教學科を卒業、同八年には神道十三派を代表して世界宗教大會に出席した。

日清製菓・社長

永 井 要 造氏

大横濱市製菓界の重鎮としてわが永井要造氏の令名は、曉の星の如く燦々たる光芒を放つてゐる。氏は立志傳中に登載すべき逸材で、外面的には圓滿にして温雅なる好紳士であるが、内的には確とした信念を有する力行主義を貫徹して、今日の大を成したのである。現在氏は日清製菓、日清煉乳各社長たる他、横濱エスキプレス取締役、ABC製菓監査役として、横濱斯界を牛耳つて居るが、各社共に氏の妙諦を得た名采配下に隆々たる業績を擧げつゝあり、業界羨望の的となつてゐる。また氏は横濱市參事會員、横濱商工會議所議員、所得稅調査委員の公職に在り、大横濱實業界第一流の人物として諸人の信任と渴仰を一身に集めてゐる。氏は明治二十二年七月山梨縣人永井忠兵衛氏の長男として出生したが、萬延元年生れの嚴父は猶ほ健在である。夙に甲府商業を卒業し、菓子原料雜穀商を經營したが、大正十二年日清製菓を、昭和八年日清煉乳を創立し、各其の代表取締役となつたが、現在は各社長に任じて今日に至つてゐる。

武州銀行・頭取

永田甚之助氏

金融界の古豪として又長老として、帝都財界を中心として地方業界に驥足を伸ばして錚々たる偉容を示して居る永田甚之助氏は、明治十五年二月、東京永田清三郎氏の長男として生れ、同三十七年家督を承く。氏は第一高校を経て、同四十年三月東京帝大法科政治學科を卒業し、直ちに第一銀行に入る。氏は明敏な頭腦を以てよく業務に精勵し銀行業務の事務事情を體得し上層部の信任も厚く、深川支店長に拔擢せられ、次いで熊本支店長に推舉せられ、業態順に發展の域に入り將來を囑望されたが、武州銀行の懇望によつて同銀行副頭取兼業務部長に就任、昭和十二年一月頭取に擧げられた。練達温厚の士で世情に通じ其の經營は圓轉滑達洵に銀行家の典型といふべし。氏は又武州貯蓄銀行頭取としても出色の名が高い。事業方面に於ては、服部製作所、上毛電氣鐵道各取締役、武州瓦斯、東京地下鐵、東京運河土地各監査役の要職にあり、財界屈指の存在として重きをなす。寸暇を得て花茶の丹誠をするを無上の樂として居る。

東邦瓦斯・常務取締役

永瀧松之輔氏

北海道の産んだ實業界錚々たる士に永瀧松之輔氏がある。氏は最初日本瓦斯に在つて縦横に其才腕を發揮したのであるが後播磨瓦斯に轉じ兎角不振の同社挽回に腕を揮つて成功し名古屋瓦斯に現れ、茲でも卓抜なる手腕を揮ひ、次いで名古屋電燈に轉じ、大正八年歐米各地の電氣事業視察の途に上り翌九年歸朝、合併後に於ける大東邦電力名古屋支店長として出色を誦はれた。氏の清新な經營は其後岐阜電力常務取締役として推賞の的となつた。氏は往く所悉く可なりで、東邦電力の片身たる東邦瓦斯に現在その鋭鋒を發揮しつつ、徐ろに將來の飛躍に備へ、滿々たる圖志を以て業界を睥睨して居る。氏は北海道永瀧松太郎氏の二男で明治二十年生れ、膏の乗つた働き盛りである。明治四十四年慶大法科出身の俊才である。氏は現に、岐阜瓦斯、西部瓦斯各取締役、大垣瓦斯電氣監査役に就任し、中京財界の花形的存在として名聲噴々たりである。氏は閑暇を得れば旅行に出て浩然の氣を養つて活力素として居ると聞く。

東洋リノリウム・常務取締役

長井杏四郎氏

文化の進展は生活の向上を招來し、其の生活様式にも一轉機を盡すことは自然の數であり趨勢でもある。洋式建築が擡頭するに共に、其の資材を輸入に仰ぐものが頗る多量であつたが躍起した國産熱は澎湃として漲り、自給の一路を進行しつつあることは國家の欣喜に堪えない。東洋リノリウム會社常務取締役長井杏四郎氏は、明治三十一年東京高工機械科を卒業し、實業界に入つたが、奮然外國遊學を志し明治三十九年米國インデアナ州立、パデュー大學を卒業して歸朝す。氏は學憲時代より、興産企業に興味を持ち其の研究も熱心であつた。氏のかうした性格はリノリウム工業に手を染るに至つたもので國策に寄與する所甚大である。氏は又リノリウム會社取締役として其の要路に立ち、新興産業の先驅として萬丈の氣を吐いて居る。氏は新潟縣の人、長井格平氏の四男で明治十年出生、還歴を超えて若干なれども意氣尚ほ鋭く、矍鑠たる健體は旺盛な活動を包藏し、斯業界の指導的存在として光つて居る。

大信汽船・専務取締役

長尾景信氏

氏は大信汽船會社専務取締役たる他佐藤國汽船専務取締役をも兼務し、我が海運界に重要な存在をなしてゐる。四面環海の本邦に於て、海運事業の消長が直ちに國運の隆替に關係を持つことは餘りにも明白である。現下の我が海運界が列強に覇を成さんとして大童の活躍を續けてゐる勇猛振りは寔に吾人の意を強うするものである。時代は支那事變を契機として歐洲の動亂を誘發し、將來海運業の重要性は愈加重する。従つて之が經營統率の任に膺る優秀な人材を必要とすること言を俟たない。氏の如き練達湛能の士が存在することは國家の爲め此上もない仕合せである。氏は明治十七年山口縣長尾ツヨ女との男として生れ、明治二十二年に先代祖父會門氏の後を繼いだ人で、勤勉な精力家である。氏の勤勉は事態各般の上に反映し、氏の進路開拓の武器となり、力量手腕の練成となり、今日の燦たる地位を氏に與へたのである。特に氏の司掌する汽船會社は、對支通運に貴重な役割を持つ關係に立ち、氏の才腕に多大の望みを持つ。

大宮瓦斯・専務取締役

永野護氏

永野護氏は帝都に於ける少壯實業家として錚々たる存在である。財力は氏が慧星の如く業界に登場し然かも堅實にして堂々たる手腕と力量とを持つ一代の偉材であることを認識させられた。氏の活動面は廣汎であり、多様である。氏の關係會社を擧げるならば大同鐵業代表取締役、朝鮮砂金鑛業、岸本鑛業、東京石炭、山都鑛業、山叶商會、東京灣汽船、帝國人絹、岸本商店、日本ゴールドレツヂ、各取締役、南武鐵道、石城耐火煉瓦、日印通商各監査役等、十指に餘る要職に携り、尙且つ東京中央放送局監事、東京商工會議所議員の公職をも帯びる繁盛ぶりを示し、益々飛躍の一途を辿る氏の精力と健康とは眞に驚異といふより外はない。氏は五十の坂を越えたばかり斯界に覇者として君臨するも遠い將來ではあるまいと信ずる。氏は廣島縣の出身で明治二十三年九月、永野法城氏の長男として出生し、大正元年家督を繼ぎ、同四年東京帝大法科獨法科を卒業した秀才であつて卓抜なる抱負、經綸、實力の持主である。

株式會社三菱・専務取締役

永原伸雄氏

我が邦財界を壟斷して三井と覇を競ふ三菱會社に専務取締役たる、永原伸雄氏は、三菱の經營する各部門の要職を占め、三菱王國の牛耳を握る大人物である。三菱地所、同鐵業、同銀行、同電機、同信託、同海上保險に取締役或は監査役として樞機を把握し、當に三軍叱咤の總帥といふべきである。三菱が今日その直系傍系を打つて一丸とし秩序整然として運行される迄には、氏の献身的な奮闘と苦心とが潜んで居ることを忘れてはならぬ。氏は明治五年五月岡山縣上道郡の郷士玄吉氏の二男として生れ、大正十二年分家した。宗家は累代醫を業として今日に至る。氏は、明治二十五年東京高商主計科を卒業し、直ちに三菱會社に入社し幾何もなく其の穎智と俊才を認められ、果進して現在の地位を贏ち得た。多士儕々たる王國三菱の長老として、其の力量手腕の卓越せることは敢て言ふを要しない。財閥三菱の本營に鎮座し機構全面に亘つて統制の鍵を握るものは、蓋し氏を措いて他に求むることは容易ではあるまい。

大國汽船・社長

長坂清太郎氏

海運日本の輝かしい發展は我國船艇總噸數約四百萬噸を保有し、世界海運界に偉容を示してゐることは實に聖代の壯觀である。長坂清太郎氏は、大國、春和、三興各汽船會社に社長の印綬を帯び、海運界に縦横の才腕を振ひ、躍進日本の一翼を背負ふ出色の存在である。氏は愛媛縣人長坂清太郎氏の長男にして、明治十八年六月生れである。明治四十三年東京高商專攻科を卒業し、直ちに滿鐵に入社したが後大連汽船會社に轉じ常務取締役に就任し、大に手腕を發揮し社業に盡瘁すること多年、昭和七年樺太汽船會社の招聘により同社取締役に選任せられ、精練熟達な才腕を以て其經營に寄與したのである。寡言にして勤勉な氏は明敏緻密な腦力を有し事業の要諦を悉く悟りし、其の實力は驚くべきものがある。かくして氏は業界の一權威として存在性を確保し、蘊蓄豊かな經營法を見せて居る。今次歐洲渦亂の後に招來すべき海運界の轉機に對しても、卓抜な經綸抱負を認め、汝々として精進する腕の人力の人である氏に信賴する所が多い。

新潟鐵工所・専務取締役

長島吉次郎氏

新潟鐵工は、斯業界に於て屈指の會社であり時局の波に乗つて隆々たる躍進を續けて居る優秀な存在である。長島吉次郎氏は同社に専務取締役として實權を握り堂々として財界に君臨する偉傑である。多士儕々たる中に泰然として不動の態勢を以て漸次的歩調を續け、最後の榮冠を目指して悠揚迫らざる活動をなして居る點から見て、當代業界の大人物たることは疑ふべくもない。氏は山形縣の産、明治十六年生で圓熟の域に達し、性來の穎悟と粘り強さは凡ゆる難局を突破し、苦難を踏越えて今日の地位に推進されたのである。明治四十一年東京帝大法科佛法科を卒業と同時に新潟鐵工所に入り爾來三十餘年、同社の礎石となつて全力的精進を輸し社業進展に邁進した功績は特筆すべきであらう。監事となり經理販賣各課長となり、常務取締役となり、果進して専務取締役に起用せられ同社の中樞をなして居るのであるが、同社に盡した偉勳に對して決して過賞とは言へまい。温厚にして情誼に富む紳士で聲望従つて普遍である。

警械セメント・取締役兼湊工業所長 警械セメントは一代の偉傑岩崎清七

長瀬菊次郎氏

氏を社長として躍進を続けて居る有数の業界の存在である。昭和九年東長瀬菊次郎氏は同社の重要な一翼として東北奉天格として湊工業所長の現職に選任せられ、現地に在つて孜々として其の經營に至るを捧げて一途に社業の發展擴充を策してゐる。氏は明治十五年十二月長野縣長瀬恒次郎の長子として生れ、頭腦抜群を顯はれ、明治四十二年東京帝大工科船舶機械科を卒業し、造船事業其他機械工業に携はつたが、後警械セメント會社に入り、その手腕實力を認められて取締役に選ばれ、現在湊工業所長として簡拔せられたのである。氏は明徹な頭腦を以て飽く迄事理を究明し、成案一度決すれば強靱な意志で貫行するといふ底の性格を有し、能率の増進は氏の得意とする所で、氏の生命も亦茲に存する。財界の戦野にあつて堅實な作戦を試行して堂々たる決勝を贏ち得る周到綿密且つ勇敢なる氏の存在は驚して輝かしい。

神戸長瀬商會主

長瀬傳次郎氏

氏は兵庫縣多額納税者にして、雜貨商を営み神戸長瀬商會主として其の經營を主宰し、東洋卸會社取締役、長瀬商店、京洛土地監査役に就任し、財界に大きな存在として悠然と歩みを續けて居る。氏は京都府長瀬小兵衛氏の二男で明治十四年八月出生し、同四十五年家督を繼いだ人である。明治三十三年に農商務省海外練習生に採用せられ、佛國に渡り、リヨン高商に學び、滯佛十年同四十四年に歸朝した。氏の社會的地位は茲に築かれ、當時海外事情に精進せる新進の知識として其の名を顯せたのである。雜貨商を創めたのは歸朝後の事であつて、其の經營も暫新振りを示し、業績は隆々として發展して行つた。かくて氏は阪神財界に堂々たる地位を獲得し、重鎮的な存在として信望次第に厚く、聲名愈廣き今日を招來したのである。多年佛國に在つて洗練された人格は財界異數と稱せられ、外交手腕頗る流麗闊達であり、商機を攫むこと亦敏感、氏の成功は其處に胚胎したものといふべきである。

長瀬商店・社長

長瀬徳太郎氏

京都財閥長瀬誠造氏の同族であつて長瀬傳次郎、同安三、同六郎氏、何れも血縁關係を有し、長瀬商店は事實上同族會社と稱すべき性質を帯びて居る。氏は長瀬商店社長及京都機械會社社長として兩社經營の主體たる外、日新自動車、極東現像所、桑田商會各社の代表取締役、東洋卸取締役の要職を帯び、財界に堂々として臨み、同族悉く實業界に錚々たる名を馳せてゐる事は壯觀と言はずして何といふ。氏は大阪府芝本半兵衛氏の二男として明治十九年の生れ、京都府長瀬傳三郎氏の養子となり大正十年分家した。誠造氏は實に氏の物に當る。氏は明治三十七年大阪高商甲種科を卒業し直ちに外遊、英米佛に滯留すること滿十年、各國の情勢に通じ事業界に對する抱負も豊かに、經驗の卓抜なること他の追隨を許さざるものがある。至高至廉なる營利的漫漶の域を脱し、大所高所に立つて業界に紳士的活躍をなし、正に指導的高士的存在として畏敬せられる所となる。氏の如き有爲の士が財界に存在することは實業日本の名譽である。

花王石鹼長瀬商會・社長

長瀬富郎氏

花王石鹼本舖長瀬商會が、優良洗劑優良化粧品を製造し、我が領土は勿論、世界の市場に其の聲價を轟はれてゐることは工業日本の誇りであり、同商會の存在は世界的であるといへる。長瀬家は岐阜福岡村の舊家で代々酒造を業として居たが、先代富郎氏東京日本橋に分家し、明治二十年獨力業を興し、同二十三年花王石鹼の製造販賣を始めたのが今日の長瀬商會の起原である。氏は先代富郎氏の三男で明治卅八年の出生、令兄武郎、從兄篤郎、從弟六郎氏共に財界錚々たる器として知らる。明治四十四年家督を承け富郎を改めて襲名した。氏は京都同志社大學出身で、夙に濠洲南洋方面の業界を視察し、昭和三年歐米視察の途に上り翌年歸朝し、花王石鹼長瀬商會社長、大日本油脂會社取締役會長として實業界に登場した。業界に於ける少壯派として活躍する力量手腕は新進の鋭氣に充され、養成實業家と撰を異にし、其霸氣と闘志の熾烈さには一驚する。蓋し才幹横溢其の鋒を包んで待機するあたり將來の王者たる資格十分である。

長沼電業・社長

長沼鶴治氏

長沼電業社は、電気電話工事請負を主とし電機具の販賣を営み、廣島電機界の牛耳を握り、地方事業界の王座を占め發展を續けてゐる。長沼鶴治氏は同社長として才腕を揮ふ外、廣島臨港土地取締役、廣島株式取引所監役等の重役に就任し花形的存在を示し、鋭氣満々として活躍し其の意氣當るべからざるものがある。氏は明治二十九年七月廣島縣長沼健雄氏の三男として生れたが、同四十一年同縣士族長沼藏氏の養子となり昭和九年家督を相續した人である。曩に慶大理財科に學び大正十年卒業した逸足であり、財界に對する信用厚く、其の事業は益々盛況の一途を進む有様である。氏は純情高潔で義理に厚く、工事請負に當つては精緻な検討を加へ對者に疑念を抱かしめざるは勿論、工事時日の違算なき様部下を督勵する等至れり盡せりの感がある。従つて一般の信望高く、業界出色の名を誦はれることも所以なきに非ずである。四十代の若さ氏の生命は今日以後に懸つて居る。其の人格の完成と共に覇業も成就するであらう。

熊本縣多額納税者

長野忠次氏

勤四等長野忠次氏は熊本縣多額納税者にして曩に昭和七年貴族院議員に選出せられたる聲望厚き同縣政界財界の巨頭である。氏の父君清平氏は櫻井小楠に師事して實學を修め、明治初年舊藩主細井候に建白して管内十ヶ所に蠶業試験所を設置し、爾來數十年自ら蠶絲業の實地方面に盡瘁し其興隆を圖り、嗣子關吉氏亦志を繼ぎ熊本製紙會社を創設し父子相繼いで綠綬褒章下賜の恩命に浴す。氏は先考の四男として明治六年出生。同二十七年第五高校卒業後前人の志を繼ぎ斯業の發展に全力を注ぎ、熊本縣蠶種同業組合長、同乾繭組合聯合會長、蠶絲同業組合中央會評議員、全國蠶種業組合聯合會長、熊本市信用組合常務、同縣實業團體聯合會長等中央並に地方の公共的要職に推舉せられ、同縣名望家として畏敬せられて居る。矍鑠として彈力ある健康を提げて、社會公共の爲めに東奔西走休養の暇もない氏の活動には自ら低頭せざる得ない。氣品風格備はり、親しめども馴れずとは氏に接したものの實感である。蠶種製造業者として知らる。

城北組合製糸・社長

長野簡悟氏

熊本縣人は剛毅にして果斷性に富む。現時同縣出身名士の各方面に多む。事は教學に暇がない程である。由來熊本人は後進誘掖の爲めには自己を捨てて敢て顧みない義侠的愛郷心が殊に深い。俊才を教育して天下國家に名を成さしめて郷黨の名を譽ぐべしとの衷情が人物を輩出させる根源であらう。氏は熊本縣長野簡蔵氏の二男にして明治廿一年八月出生し長野周吉氏の養子となつた。幼少からスバルタ式の嚴格な教育を受けた氏は、如何なる困苦缺乏に當面しても自若として對處する不動の意志が培はれた。又愛憐扶掖の情も養はれた氏が、若冠にして製糸界に入り今日の地位を得た原動力は、此の硬教育が齎した成果である。堅忍不拔多年に亘つて續けられた黙々たる勤行は氏に熱と力と才とを與へた、熊本製糸界に於て覇を稱ふる城北組合製糸社長としての存在は地方財界要樞である。事業界に實際家を要求する聲が高い今日、實力ある氏が經營の衝にあるは洵に意を強うするものである。文質併有せる氏の如きは財界稀有の存在である。

熊本製絲・社長

長野友博氏

熊本製絲會社は、熊本縣製絲界の王座を占むる會社である。同社長、長野友博氏は前社長たる嚴父關吉の後を承け父子相傳へて其經營の主宰者となり、社運堅實に發展を遂げつつあるは洵に慶賀に堪えざる所である。氏は先考關吉氏の長男で明治廿三年の出生であり、大正八年家督を繼ぐ。曩に長崎高商に入り明治四十四年卒業後は父祖傳來の製絲業を營み前記社長の外、帝國蠶絲會社監査役、熊本電氣會社取締役、日本放送協會評議員を兼ね、熊本縣實業界の牛耳をとる。氏は、熊本市の素封家に人と爲り、悠々として迫らざる中に霸氣を湛え、事業經營並びに其の遂行に當つて處斷極めて鮮かであると聞く、環境の自然は氏を宰領の器たらしめたものであらう。直感力に富み時代洞察に敏であつて、關係會社の施設經營は常に時代に先驅する狀況は氏の凡庸の徒に非ざることが窺ひ知られやう。氏は又熊本商工會議所顧問に推され、昭和四年紺綬章飾版下賜の恩命に浴す以て徳望の高きを想察せられる。操守の堅き稀に見る士である。

神戸生魚市場・常務取締役

長濱芳治郎氏

扇港神戸を中心とする兵庫縣下海産物界の長老として、わが長濱芳治郎の名は明星の如くに燦々たる光輝を放つてゐる。即ち氏は臨濱魚類定市場並に攝陽商業各事務取締役たる他、神戸生魚常務取締役たり、また青木魚市場監査役をも兼ねてゐるが、流石に先代に見込まれて女婿となつた程の人物だけに、資性剛健にしてしかも人情味豊かで、且つ才識兼備つてゐるから、事業經營に當つてはその妙語を極めた名采配を揮ひ、部下を手足の如く動かしてゆき、斯界羨望の的たる好業績を擧げてゐる。猶ほ氏は長濱合名代表社員として長濱家の盛立役となつてゐる。養弟禮藏氏は本家を繼いで臨濱魚類定市場取締役、長濱代表社員たり、青年實業家として知られてゐる。氏は明治二十四年三月兵庫縣人口八左衛門氏の三男として誕したが、先代禮藏氏の養子となり、大正九年分家して一家を立てた。氏は當年四十九歳、愈々これからだといふところであるがまさ令夫人との間には四男三女があり羨しき家庭の慈父である。

朝鮮水産化工・社長

長久伊勢吉氏

資源の確保が國力の基礎をなす第一條件たる事は今次の支那事變が如實に示した國民への教訓である。凡ゆる物資の抽出に努め常に餘裕を存しておくことは、現代生産家、事業家の爲さねばならぬ重要な役目である。朝鮮水産化工會社長、長久伊勢吉氏は、帝國塗料、硬化油販賣各社取締役、旭石油監査役に就任し、生産並に配給面に躍動する、實業界有數なる存在である。殊に時局下喫緊の油脂に關係深い事業に携はつて居る關係上、國策報謝の任務は特に深い。氏は斯業界に於ける先驅者の存在であつて、業界に寄與貢獻した功績は頗る多い。明治十一年廣島縣長久佐右衛門氏の二男として生れた氏は、粒々の刻苦を積み獨力を以て能く今日の地位を贏ち得た奮闘の實力家である。曩には朝鮮油脂會社長合同油脂グリセリン會社の重役を兼務した知名の存在である。今や日大出身の長男忠氏が氏の下に常務として控え社業益々發展を續け報國の重責を果しつつあることは、財界への示範として敬意を表するものである。

神戸發動機製造所・事務取締役

難波良太郎氏

成功を望む者の必須條件は努力と忍耐の二語に盡くると云ふも敢て過言ではあるまい。即ち働くことをもつて家憲となし努力忍耐をもつて處世の信條となし、刻苦精勵孜孜として業務に従事したる氏が、遂に今日の如く大成を贏ち得たのも、まことに理の然らしむるところと云はなければならぬ。氏は兵庫縣の産、難波延治氏の長男にして明治十八年七月に誕生した。夙に聰明俊敏にして才氣群童を抽んじて煥發、長ずると共に自己の將來を實業界に求めて刻苦辛酸を累ねること幾星霜、現に株式會社神戸發動機製造所事務取締役として、斯業の眞諦を究めつゝ時流のおもむくところを能く洞察して、その經營方針をあやまらず着々として業務を張り、累年大を加へて今や斯界に於ける新進として各方面より注目されつゝある。資性敦厚にして篤實をきわめ、超凡の才幹と高直なる識見は玲瓏玉の如き人格と相俟つて、いよゝゝその信望を高めつゝある。國家多事の折柄、氏の如き有爲なる人材にこそ其健闘を希ふものである。

王子製紙・参事

西 濟氏

王子製紙株式會社に於て今を賣り出しのハリキリ男と云へば、同社参事として重要ポストにある西氏であらう。即ち時局下に驚異的膨脹を遂げつゝある同社の樞機に参劃するのみか、亦自ら十條工場長として一切を督勵しつゝある。氏は長野縣士族西美波氏の長男にして明治十七年七月に誕生、大正十年家督を相續した。明治三十九年東京高等工業學校機械科を卒業後、同年吳海軍工廠造船部に勤務したが、後に王子製紙に入社したもので、同社王子工場長代理兼十條工場長心得等を経て、大正十一年に十條工場長に昇任したもので、智的な多角性に富む氏は翌年歐米に出張して同十四年に歸朝したのを始めに、昭和四年再び歐米を歴遊するなど、多年の蘊蓄は經營に將又技術に秀れたる手腕の冴えを示し、實地指導にあたつても運營の妙を發揮するところ、正に製紙界の一人者たるの感が深い。従て十條工場も氏の就任以來、頓に業容活況を呈し顯著なる好業績をあげつゝある。以て氏の才腕のほどが押計られるといふものである。

八戸魚市場・社長

夏堀源三郎氏

わが夏堀源三郎氏は東北地方海産物商會の長老格として巨星の如き光芒を放ちつゝある偉材である。氏は現在八戸魚市場、八戸魚市場製氷部兩社長たる他、東北振興水産事務取締役に任じてゐるが、八戸港は東北屈指の良港として水産業にとつては地の利を占めて居り、且つ氏の斯界に於ける手腕は既に定評ある通り何人の追隨をも許さざる拔群のものであるから、各社共に隆々たる業績を擧げつゝあり、殊に東北振興水産は鮮魚及び水産加工品の輸出をもつて聞え高く、時局下に於ける輸出貿易國策のために貢獻するところ甚大なるものがある。氏は明治二十年四月青森縣人夏堀源吉氏の長男として出生したが、後ち家督を相續した。夙に八戸中學を卒業して水産加工製造を營み、鮮魚輸出業を創業し、昭和四年八戸港川魚市場組合長に就任したが、同七年之れを改組して八戸魚市場となし社長に就任して今日に及んでゐる。氏は當年五十四歳、キヨ令夫人との間には一男六女の子寶があり、その圓滿なる家庭を羨まれてゐる。

矢作水力・副社長

成瀬正忠氏

矢作水力株式會社副社長として聲價を益々昂揚すると共に、矢作工業、矢作製鐵等々其他數會社の重役を兼て經營の衝にあたりつゝある成瀬正忠氏のことであるから、その手腕力量が衆に秀れてゐるからといつて、之は敢て不思議となすには足りない。曩に津久茂商會、日本自動車、ボルネオ水産會社等の重役を兼てその快腕は存分に揮はれて來てゐるので、謂はゞその才腕驥足は既に檢定済みと云つた形である。然らば氏の氏たる所以が存在しその面目を物語るものは何かと云へば、一に先見遠識の名采配である。したがつて一度事業上の採否決断にあれば常に能く時運を射抜いたヒツトをかつ飛ばして、社の盛運に偉大なる寄與をなすと共に全く僑類に抽んで大器量を示すのである。氏は香川縣人成瀬岩太郎氏の五男として明治十四年に誕生し大正四年に分家したのである。明治三十八年慶應理財科を卒業と共に實業界に入り、今や都會文化の最尖端を往く指導者の役割を演じつゝあり、既に交詢社常議員である。

東京輸出電球・取締役

西井覺三郎氏

電球界に巨星の如く燦として輝やいてゐるのは我が西井覺三郎氏である。氏は東京府人西井廉藏氏の三男にして明治三十年四月に誕生し昭和九年に分家した。幼にして既に英才の名高く儕輩に擡げ出るところがあつたが、長ずるに従つていよゝゝ鋭鋒を現はすやうになつた。現に東京輸出電球株式會社取締役兼工務部長の任にあるほか、更に東京電氣株式會社代表取締役として斯界に押しも押されぬ貫録を保持してゐる。今や時局下に於ける事業界益々多事なるを想はせるの秋、氏の如く率先してその抱負する經綸を遺憾なく實施しつゝあるのみか、その至誠報國の精進ぶりに至つては、吾人の最も欣快とするところである。群雄割據して相競ぶ電球界にあつて遂次頭角をあらはして他を壓し、悠然として業界を睥睨しつゝあるのも、その陣容ならびに組織の強化を圖ると共に、業容を一新し好業績をあげ得せしめてゐる、氏の健闘にまつところが甚だ多いと云はねばならない。氏が同社の大黒柱と呼ばれつゝあるのも宜なる哉である。

滿洲曹達・社長

西川 盾 吉氏

大阪府西川新助氏の長男、麻生二郎氏の兄で、明治元年十二月出生、廿六年帝國大學工科應用化學を卒業翌年同大學工科助教になる。四十四年には九州帝大教授となり同年工學博士の學位を得、大正七年同大學工科大學長となり昭和四年辭したが名譽教授の名稱を授けられた。經歷が示す如く實業界よりも寧ろ學界に働く人であるが、大阪人の地味である粘り強さを持つた人で、アルカリ工業研究のため歐米に留學し、歸朝後は研究を忘れたが如くにして實業界に入り、しかも一躍滿洲曹達株式會社の社長並に日本化成工業株式會社の相談役といふ華やかな肩書を以て堂々と實業界に乗り出すに至るが、果せるかな氏の才腕はその鋭鋒を現し、隆々たる存在を示すに至つた。案ずるより産むが安いで大學教授の社長は堂々たるもので人事行政はいざ知らず會社の計畫、宣傳方面の技倆は素時らしいものである、趣味は少い方だが、會社内の評判はよく素人社長の域を脱した腕を見せて信頼を受けてゐる。

服部紙店・常務取締役

西澤榮藏氏

三重縣村林與三吉氏の弟にして明治十九年五月出生。先代西澤こよ氏の養子となり同四十四年家督を相続した。現在は服部紙店常務取締役として斯界に卓腕を揮つてゐる。氏が今日を築くまでは實に苦心努力の生活であつた。幼年時代から壯年時代に至る所謂青年時代の氏は全く努力奮闘の一語に盡きる實に苦難であつたが、勤勉と鋭氣を見込まれて土地の舊家西澤家に入つたのである。氏の性格は才氣煥發といはんよりは寧ろ飽くまで強氣強引にどしどしと物事を押し進めて行くといふやり方だ。勿論この強引の陰には時勢を知り大勢を透視する明敏なる知識が存在することいふまでもないのであつて、この達識と強氣が氏の今日を建設したのだと言つても強ち見當違ひではなからう。現在紙の原料難・平和産業の重視されない今日、紙業界の第一線の闘士として縦横に活躍してゐる事は人のよく知る如くであるが、今後わが文化興隆即国力充實の一線を明確に劃されんことを希求してやまない。

日本發動機・専務取締役

西谷藤太郎氏

吾が國の財界事業界も今時事變戦局の進展と共に一度は暗雲に閉ざされてゐたが、その第二段階に入るに連れ、漸く安定の曙光を見るに至つた。かゝる状況下に本邦事業界は多數の人材を擁して國家産業の推進力となり貢献しつゝあるが、これまた地方實業家の力に負ふ處全く大である。西谷藤太郎氏も地方事業界の俊才として、又日本發動機株式會社専務取締役として敏腕の聞え高き逸材である。氏は明治十八年十二月兵庫縣の人西谷多助氏の長男として出生、同四十三年に家督を相続、業界入りをした人である。氏は終始一貫實業報國の念に燃えた愛國の士で、今や當社の業績も隆々として一路發展の道程を辿つてゐる。勿論この社會の發展は同氏の事業的手腕とその高潔なる人格の反映にほかならぬは云ふまでもなき事であるが、それと同時に、實弟清太氏の協力によるところまた興つて大なるものがあらう。兄弟一致協力して實業報國の誠を盡す西谷家―業界中特殊な存在として輝き各方面から屬望されてゐる。

理研真空工業・常務取締役

西林幹助氏

理研真空工業の中にあつて殊に人望多大なるのは西林幹助氏でもあらうか。氏は先代包章氏の長男で明治十三年一月生れ、大正五年に家督を相続、嘗て三菱銀行に勤務、參事、本店營業部副長と躍進したが昭和十年一月に退職、現時理研真空工業常務取締役、白峰農園監査役と才幹を發揮業集めてゐる。理研真空工業は云ふまでもなく大河内正敏博士を總帥とする理研コンツエルの中樞とも云はれる事業であるが、俊秀逸材を蒐めた近代産業の先驅として著名、同社長は岡秀實氏、常務西林氏はよく社長を輔佐して縦横無盡の活躍振りを見せてゐる。氏の風貌無味無臭淡々として昇進し續けて来たやうに思はれるが、仕事に對する熱意と研究心の旺盛なること尋常一様ではない。當社の今日の發展も氏に負ふところ尠しとせず、社内設備も氏の献策によるもの多へいふの才腕に於ては斯の如き次第だがその忍耐力と剛志には如何にも多年業界に馳驅してきた豊富な生活經驗が如實に現れ、さこそと頷かれる。

大阪鐵工所・取締役兼因島工場長

西牧忠治氏

勞資一體、産業報國は現代日本のスローガンである。西牧氏はこのスローガンをいち早く掲げた財界人には稀しい存在だ。資本家と労働者とは由来相容れざるものとされてゐた。だが氏はこれを見事粉砕して大阪鐵工の今日の礎を築いた人物である。今日當社取締役兼因島工場長として軍需産業の華々しい舞臺にあるが、氏が大阪鐵工所に入社した當時は日本資本主義の末期的症狀が愈々露出し始めた頃であつた。だが氏はこゝにあつてよく労働者の立場をも理解し飽く迄勞資一體の建前をとつて同社を建設、我國五大鐵工の一と盛名を轟かせるまでに隆盛ならしめたのである。現時同社の外向島船渠常務取締役でもあり、全く財界稀にみるイデオロギーの所有者。新潟縣土族飯嶋興忠氏の三男で明治二十四年生れ、大正四年に先代信幸の養子となり同年帝大工科船舶機關科を卒業、大正九年機械學研究の爲に英國に留學したといふ篤學才拔のエンヂニアだ。社會政策に明るい論客として高名の士である。

寺内製作所・専務取締役

西野岩次郎氏

氏は明治二十七年十二月、京都府西野忠太郎氏の長男として生れた。氏の半生の歴史は苦難に満ちて居り、惡戰苦闘、全く文字通りの奮戦史である。而して氏の奮闘空しからず、現時株式會社寺内製作所の専務取締役として、その前途洋々たるものがある。進取的な覇氣を有ち、極めて理智的な人物で、事に當り細心緻密な頭腦を働かせ一々條理的解決をなす才子である。如何なる難事に直面しても三考四考、飽くまで科學的に分析究明するのが特性で、才能の練達正に圓熟の境地に入り、風貌威あつて猛からずその達見は今後益々事業上に發展を齎らさずには置かない。また氏は非常に清廉潔白私慾無き高德の士で、事業界全體の進展繁榮のためには一身一家を犠牲にしても盡すといふ熱情を有し、その眞摯なる日常生活は敬服に値する。加ふるに清濁併せ呑むの雅量、同僚後輩に對する情味あり、これ等のものは何れも波瀾曲折の業界多年の經驗から蘊藏された滋味とも云ふべきものであらうか。まこと傑物である。

西野商店・社長

西野幸作氏

非常時局の重大化に伴つてわが財界も重要な役割を課せられ、その使命を遂行しつゝあるが、最近の業界の傾向を見るに新進實業家の進出顯著なるものがある。中にも福井縣西野幸作氏は新進中の白眉とも云ふべき人物で、四十餘歳の壯年ながら非常時財界に馳驅しその活動振りは三嘆に價する。而も他の墨守的實業家と違つてその獨立獨歩主義の成功は吾人の鑑ともすべきもので、新進事業家の登場を促して歌まざるものがある。氏は明治二十五年の生れ、現時西野商店(株)社長福井染色、日出織物、丸大燃絲織物工場、福井精練加工各(株)取締役、西野製紙所、東洋セロファン、錦華紡績、錦華人絹、福武電氣鐵道各(株)監査役の重任を負ひ、これらも氏が如何に活躍家であり、また努力家であるか、窺知出來得やう。氏は又親孝行としての美談を有し、人格識見ともに卓抜なる近代紳士である。ともあれ、邦家愈々多事の秋、氏の如き優越せる人材を吾が業界にみることとは、斯界發展の爲に大いに慶賀すべきことである。

和歌山興業・取締役

西本健三氏

和歌山選出貴族院議員西本健次郎氏の長男として明治三十三年二月出生の氏は、夙に明治大學を卒業し、嚴父の經營せる土木建築請負業に従事し、正に棟梁の器量發揮し其の力量手腕は將來を期待された。氏は人爲り俊敏にして密達事を處するに果斷にして逡巡退嬰は大の禁物と言つた型の持主であるが、然かも人情の機微に透徹し愛憐同情の念に厚く部下の凡ては喜んで働いて居る。現在前記の重任に勤務する外、和歌山共榮株式會社取締役兼社長に就任し、業界を睥睨して徐ろに英氣を養ひ待機の姿勢にある。近き將來に於て必ずや爲す所あるを信ずると共に斯業界に覇を成し功を成す日のあることを疑はない。今や東亞の新經營を目前にして建築施設を要すること多く投資の急なるもの亦極めて多い。傳統の殼から脱けて大陸に新たなる經營をなすべき最善の機會に遭遇する秋、餘力を茲に輸さば事變處理に寄與することの多かるべきことを信ずるのである。春秋に富む氏に奮起を望んで止まないものがある。

西山商事・社長

西山音治氏

畜産貿易商として山陽に名を知られて居る同氏は、明治十七年二月、兵庫縣西山秋治氏の四男として生れ、兄團藏方より分家獨立す。夙に本邦牧畜業の不振を遺憾としその向上發展に資せんと志し、牧草種畜の研究に没頭し大に發見する所があつた。茲に奮然として立ち上つた氏は種畜の改善に着手し、遠く濠洲其他各國に良種を求め之を推奨し斯業者の啓發に努め其の革正を促した。今日我が國畜産業が水準線に達したことは實に氏の力に負ふ所多く敬意を捧げるに十分である。氏は不撓不屈の人、根氣強く押し切つて行く處に成功が見られた。現時は前記社長として社業を統轄する外櫻山土地建物株式會社専務取締役、内鮮移出入業者聯合會長として各方面に活躍し聲望共に高く、推されて下關市參事會員となり、市政整理の局にも當つてゐる。女婿正美氏(東京工藝出身)氏に協力して家業に精勵するあたり家庭は賑はしくも又圓滿であつて、彌榮の氣に満ち興隆の氣が満ちて居る。氏亦幸運なりと謂ふべしである。

日滿鋼材工業・常務取締役

日塔治郎氏

三井物産の智將として豫てより知られてゐた日塔治郎氏である。三井を背景に財界に雄飛し、よく三軍を叱咤令して天下にその名を喧傳された人々に混つて、光芒を添へしめつゝあるのも決して故なしとせざるところである。氏は山形縣の産、日塔與右衛門氏の二男にして明治二十二年八月に誕生した。明治四十五年神戸高等商業學校を卒業したが、向學の念もだし難く更に東京高等商業學校に學び、大正三年目出度く同校専攻科を卒業した。斯くて同年三井物産會社に入社して華々しくスタートを切つたが、大正六年渡米してサンフランシスコ、ニューヨーク各支店に勤務、同十三年歸朝と共に本店機械部に勤務、それより鐵道係、同陳列所主任、機械部總務課等を歴任し次第に聲望を馳せ得たものゝ、やがて之を辭して東洋キヤリヤ工業會社の事業に參畫し、同社の販賣部長として大いに卓腕を揮ふところがあつたが、昭和九年東洋鋼材株式會社の姉妹會社に當る日滿鋼材工業株式會社設立と共に其常務取締役に就任した。

東京野崎商店・社長

野崎一郎氏

(東京)野崎商店(株)社長、野崎同族會(株)副社長、大口製革(株)常務取締役、(横濱)野崎商店、前田商店各(株)取締役、中野屋(株)監査役として野崎のコンツエルの名を委にしてゐる野崎財閥の巨將野崎一郎氏は、東京、横濱を股にかける傑物である。明治二十五年十一月に神奈川縣士族貞利氏の長男として生れ、昭和六年に至つて家督を相続した。夙に第四高等學校に學んだ秀才で、貫祿あり、風格あり、眞の實業家としての典型的タイプであらうか、堂々と押し出しのきく人物、氏の叔父は業界の重鎮野崎末男氏あり、弟にいま錚々の土野崎二郎、平山金吾兩氏があつて、野崎家も最早搖ぎなき堅壘を固めたわけだ。何しろ氏は滿身に覇氣を漲らせて奮達自在の力を振つて「腕でこい、頭でこい」と縦横に暴れ廻り雄飛する業界の異彩であるから、當家が今日の大威をしたも當然のことであらう。時代は今や滔々として現状打破に向ひつゝある時、新しき次代の人として産業日本を代表するものといはねばならぬ。

野田屋・社長

野田友三氏

國策の線に沿ふ産業界の驚異的發展に伴つて、賑々たる擴大力を發揮しつゝあるのが株式會社野田屋である。しかもその組織は堅實、構成は完備してゐる關西きつての優良會社と目されてゐる。これといふのもその經營の衝にあたる人物が、社長野田友三氏といふ傑物を得てゐることに歸すべきであつて、隆々たる躍進ぶりは同社の歴史が有力に之を物論つてゐるところである。氏は大阪府人野田小七氏の四男にして同三郎、同六郎兩氏の令兄にあたり、明治二十一年二月に誕生し同二十八年に家督を相続した。慶大卒業後實業界の人となつたのが、嚴父の薰陶と英邁なる資性とはいふべく、磨きがかけて、業の手腕は既に定評の存するところである。氏の強味はなんと云つても新時代の空氣を吸つてゐることである。したがつてかゝる重大時局の今日に於ては、絶體不可缺の重要人物としてその手腕なり、卓見なり、經驗なりを異常に期待されてゐるのだ。そこに未來に對する氏の新しい發見が見出されるのである。

日本硅藻セメント・社長

野津孝次郎氏

氏は大阪府人伊藤彌助氏の二男にして明治七年十一月に誕生、其後野津ナヲ子氏の養子となつて家督を相続した。明治二十二年松江中學校を卒業後第三銀行松江、大阪各支店に勤務、更に安田保善社、正隆銀行支配人、大連取引所信託常務取締役等を経て、現在の如く日本硅藻セメント株式會社社長、星ヶ浦土地建物株式會社代表取締役、滿洲石鹼、日華證券信託、日滿興業、大連貯金等各株式會社取締役其他の重役を兼ねるに至つたもので、その優秀にして卓抜せる經營手腕は各方面に伸ばされて、支那大陸に遺憾なくその實力を發揮しつゝある。事業經營の權威者として早くより高名だつた氏は、經營に於て異常なる好成績をあげてゐることはもとより、巧みに適材を適所に配置して人的資源の合理化を企圖しつゝあることも、非常時下の邦家のためにもまことに悦ばしきことゝ云はねばならない。氏が單なる事業家でないといふことは、肯支那大陸の産業開發といふ重任を双肩に擔つて起つてゐる氣宇によつても領ける事である。

立川工作所・代表取締役

野澤三喜三氏

東京商工會議所特別議員にして野澤組の總帥たる、野澤源次郎氏を嚴父に裁く三喜三氏は、明治二十四年九月に出生した。氏もまた業界に身を投じて大活躍、北多摩郡立川町に住して株式會社立川工作所を主宰し、現時同社代表取締役として直接經營の衝に當り、粉骨砕心ひたすら生産力擴充に盡瘁してゐる。近時漸く叫ばれてきた勞資一體の策を、氏は以前より用ひて従業員の特遇改善に、能率増進に、そしてまた社業の向上に奮心してきたが、その卓見達識の程には全く敬服する。時局下に於ける工作所が、益々股賑を來すと共に氏は斷然積極的經營に乗り出し、群小會社を尻目に於て業態の刷新に専念し、一路躍進を辿つてゐるが、これも全力を傾注して精勵する氏の健闘の賜であらうと思はれる。かゝる氏の奮闘ぶりを見ては嚴父源次郎氏もさぞ心強いことであらう。濃厚明朗な密達寛容の人だが、流石事業に鍛鍊された才幹は藏ぶべくもなく明敏果斷の氣宇と相俟つて異色ある存在を示してゐる。

森々商店・社長

野田正一氏

氏の父君彦三氏は舊幕時代、代官手代を勤め且つ高島嘉右衛門氏に就き學校、鐵道及び瓦斯の經營に従つて名を成したる人、氏はその長男として明治八年九月に誕生した。學業を卒るや直ちに業界に身を投じたが、明治三十六年機熟すると見るや、敢然獨立自營を志して森々商店を創設した。而して本店を東京銀座に置き、出張所を大阪、札幌、小倉並びに横須賀等に配して諸機械販賣業を始めたが、其後業績は次第に好轉し、大正六年には遂に株式會社に改めて其社長に就任したのであつた。今や資本金四十萬圓、旋盤、ぼいるばんの専門製作工場、吾妻橋、月島、品川等四ヶ所を擁し、又一方歐米高級機械の直輸入を行ひ現に好配を示しつゝある。氏の卓越せる手腕は嚴父の薰陶に依ること勿論であるが、しかし氏としては其以上に多分の計畫的才能を有つてゐる。しかも稀にみる人格者として敬仰されつゝあることは、昭和八年東京機械金物商同業組合長に又同十三年に東京工作機械器具工業組合長に推されてゐるので肯ける。

滿洲疏安工業・業務取締役

野中巖氏

滿洲疏安工業株式會社常務取締役として、颯爽大陸の天地に呼號しつゝあるのが野中巖氏である。時も時事變下の大陸に在る氏の責務こそは重大で、大陸開發の全般に手腕を揮ひ、大陸經營といふ一大國策の線に沿つて奮勵する時局色を濃化した巨人なのである。氏は熊本縣の産、野中順之助氏の長男にして明治二十二年三月に誕生した。大正四年東京帝國大學法科を卒業後三菱に入り、神戸造船所庶務課長を経て滿洲化學工業會社に入り、出張所々長、本社審査、營業所々長等を経て現在の任務に及んだもので、滿洲疏安工業の經營一切を擔ひ以て運籌を期す時局の花形人物である。氏は重要問題に遭遇するやうなことがあつても、その都度粉骨砕身非凡の智識を傾けて、その時々々の情勢に應じて巧みに處理するだけの睿智を具有してゐる。したがつて豊富なる經驗と確實なる手腕とは次第に世に認められ、同社が今日斷然業界を壓倒して隆々たる好業績を誇りつゝあるのも、さこそとうなづかせられるものがある。

東京車輪製作所・社長

野長瀬忠男氏

氏は紀州の名家と謳はれた野長瀬六郎七郎氏の後裔にあたる野長瀬晋治郎氏の二男として明治十一年三月に誕生した。年少の頃より大志を抱き明治三十五年に米國に赴き同國工業學校に學んで鋼の焼入を研究、同四十二年歸朝と共に東京市向島に帝國機輪製作所を創設して多種スプリングの製造に従事した。而して其後の順調なる發展に伴つて昭和九年に大同製鋼會社と併合、推されて其常務取締役に就任し、更に同年別に自動車用車輪専門工場として蒲田に東京車輪製作所(株式會社)を設立して同社取締役社長に擧げられた。斯くして氏は各種スプリング鋼材及び自動車用車輪製造業として、自ら樞位に就いて經營一切を總攬するに至つたが、氏の積極政策は決して之のみに止まらず、現に石井鐵工所、三泉工業等各株式會社取締役としてもその微腕によく物を云はせてゐる。流石に業界の立役者であるだけに、終日席温まる暇なきほどの精勵をつゞけつゝあり、將に一方の理論を指導して立つに相應はしき存在をなしてゐる。

大日本雄辯會講談社・社長

野間 左衛氏

雑誌書籍出版業者として破格の成功を収めた人に、大日本雄辯會講談社の野間清治氏の在つたことは、あまねく人の知るところである。左衛氏は即ち野間清治氏の令夫人として清治氏没後、大日本雄辯會講談社を株式組織に変更して其社長に就任、自ら陣頭に立つて亡夫の遺業の發展擴張に専心努力しつゝある心武き人なのである。抑々當家は舊上總飯野藩士の家柄であり、先々代好雄氏は幕末の劍客森要藏氏の高弟にして其令嬢文子氏を娶たもの。先代清治氏はその長男で、群馬師範及び東京帝大臨時教員養成所に入り、卒業後は沖繩縣立中學校教諭、縣視學東大法科大學書記等を歴任したが明治四十三年遂に獨立して日本雄辯會を起し、雑誌「雄辯」の發行を皮切りに次で講談社を創立して「講談俱樂部」を發行、更に大日本雄辯會講談社と改稱して「少年俱樂部」「富士」「婦人俱樂部」「現代」「少女俱樂部」「幼年俱樂部」「キング」等を逐次刊行した。左衛氏は徳島縣人服部定吉氏の長女で明治十六年九月に清治氏に嫁した人である。

住友金屬工業・製鋼所長

野村 靜氏

東洋平和を亂す敵を根こそぎするために、正義なき地に正義を敷いて、その慶福を共にせんが爲に、またこの聖業を妨害せんとする諸外國の魔手を制御せんがために、我國は獨力をもつて且つ戦ひ且つ建設し、而して軍備に生産力にいよ／＼強大なる國力を養ひつゝある。かゝる國策に順應してめざましき活躍をつゞけつゝあるのが、名にし負ふ住友金屬工業製鋼所であり、その一翼としてホープ的存在を讃えられてゐるのが野村靜氏である。氏は島根縣士族野村繁太郎氏の長男として明治十九年一月に誕生同三十三年に家督を相続した。明治四十一年大阪高等工業學校機械科を卒業、住友製鋼所に入り副支配人兼製造部長に進んだが、昭和十年の合併により、改めて株式會社住友金屬工業製鋼所副所長兼工務部長に就任、次いで現在の如く同製鋼所所長兼工務部長となつたもので、傍ら國産電氣株式會社監査役を兼てゐる。氏は濃厚な性格で登山、詩歌等に趣味を持つてゐるが、日本の前途を思ふ熱情に至つては人後に落さる物がある。

新光機械製作所主

馬場 新氏

新光機械製作所を經營して今や正に業界に飛躍せんとしてゐる人に、新馬場新氏がある。氏は長崎縣の人馬場武藏氏の長男として明治二十四年三月に出生した。同十四年に福岡工業學校を卒業、爾來専心鐵工業に従事して敏腕を振ひ、獨力獨歩今日の大成長を致したが、一度び立てば何物をも征服せしむべしといつた重機熱の闘志を持ち、しかも平常は寡黙沈着にして淡々と水の如き風格を備へ、京橋區月島の工場街に朝から晩まで汗にまみれて執務する氏の奮闘には涙ぐましい努力がある。山椒は小粒でヒリ、と辛い。新光機械製作所小なりとは云へ馬場氏が困難な路を押し切つて歩みつゞけ、不屈不撓の熱意を以て建設した成果は現れ、いまや時局下國策線上に躍り出て大きな役割を果しつゝあるのだ。氏こそ眞摯誠實の資性と、確固たる時局精神に燃えてゐる實力派の秀才である。未曾有の革新時代に活躍し、前途する卓見の事業家としての氏の存在は、業界にとつても期して俟つべきものがあらう。

東亞企業・社長

橋本 嘉七氏

業界の權威者橋本嘉七氏を盟主とする東亞企業株式會社は、時局以來驚異的發展過程を辿り、今や時局工業の花形會社として世の噴々たる好評の中に在る。云ふまでもなく同社は軍需工業の一翼を成すものであり、その他種々の諸事業に其勢力を伸してゐるの、その將來こそ刮目して見るべきものがある。而して同社の業績達成に努力しつゝあるのが、同社々長の任にある橋本嘉七氏であり、名實共に一致した主宰者と云ふべきである。氏は福島縣の産、橋本清助氏の六男にして明治二十三年二月に誕生、昭和七年に分家した。大正二年久原鑛業會社に入り後久原商會社に轉じ、大戰初期よりウラジオストク、ボンベイ其他の出張所支配人として在外六年に及んでゐるし、大正十三年六月同社を辭して同年七月に東亞企業會社を創立してその代表社員となつてからも、航空事業視察のために歐米各國を遍歴したくらいであるから、内部の事情通であることは最早論ずるまでもない。極めて落付いた人物で魚釣を趣味としてゐる。

野村事務所・代表社員

野村 駿吉氏

氏は錦鶏間祇候野村龍太郎氏の二男として明治二十二年九月に誕生した。明治四十四年神戸高等商業學校卒業後三井物産ニューヨーク支店員、次いで三菱商會社シャトル支店長、並びに三菱石油會社常務取締役等に歴任した逸材だけに、事業界にも嚴然として偉大なる勢力を築いてゐる。したがつて經驗に富む手腕と、永年縦横に驅使して来た頭腦とは野村事務所（合資會社）を開設して石油輸入業を営むやうになつてからも、その努力はよく成果を収めて遂に今日の覇業を達成したのである。しかも旺盛なる意欲は野村事務所代表社員たるに止まらず、更に快腕を伸べて蓬萊タンカー株式會社社長、大阪製鋼、工業各株式會社取締役等を兼ね、いよ／＼精力無盡の概がある。氏の達識は業界に於て既に定評の存するところである。經驗にも富むところから云つても、いやしくも經營をあやまることは絶體にないし、洞察力も充分に具へてゐるから時流を喝破して、巧みに之に對應して行く機智を藏してゐるのである。

第一生命保險・大阪支部長

信岡 實太氏

氏は廣島縣の産、信岡友三郎氏の長男として明治十三年九月に誕生、同四十年に家督を相続した。明治三十九年農商務省に入るや、直ちに海外派遣を命ぜられ商工業の調査に従事、同四十二年に歸朝しやがて實業界に飛込んだものだが、大正三年第一生命保險相互會社に入るると共に爾來同社の業務に精勵、漸次擡頭して遂に現職の地位に及んだもの、以て氏の人徳力量の秀逸さのほどを遺憾なく物語つてゐるのである。したがつて同社大阪支部長に榮進するほどの出生振りを示した裏面には、筆紙に盡しがたき努力が拂はれてゐるのである。生保界といふところは昔から幾多のダークホースが伏在してゐて、生命保險會社の幹部には人格者は不向きである。と云はれるほどに陰謀術策の激しいところとなつてゐるのだが、我が信岡氏に至つてはすべて其等を超越し、あたかも窓から射込まれた光明の如き存在をなしてゐる。豪腹にして奇才縱横の氏が正々堂々と闘ふところ、まことに斯界のリーダーとして最適任者と云へる。

石川島造船所・取締役

橋本 辰吾氏

氏は岡山縣人橋本本太氏の長男として明治十五年一月に誕生、昭和四年に家督を相続した。明治三十七年大阪高等工業學校機械科を卒業した翌年石川島造船所に入り營業課長、豫算課長を経て營業部長に進み昭和九年に同社取締役選ばれたもので、同十四年には材料部長を兼任するに至つた。しかも同社を活動の本舞臺として次から次へと前進しつゝ發展を示し、現に奉天製作所、石川島芝浦タービン各株式會社取締役を兼ねていよ／＼鮮かなる手腕を揮ひつゝある。株式會社石川島造船所は明治二十二年一月の設立に係り現在資本金一千六百萬圓（拂込額一千二百萬圓）本社を京橋區佃島に置いてゐる。同社は機械製作と船體建造を併せて行ふものである。もと造船事業に主力を注いでゐたところ、先年の軍備縮少につゞいて關東大震災に遭ひ、經營方針を轉換した。主要製作品は何れも時局向きのものだけに最近の活躍はめざましく、時代の要求による生産擴充は一段の繁盛を加へつゝ、當分製作設備の強化に追はれるであらう。

長谷川商店・社長

長谷川 源太郎氏

孫は「己れを相り、人を相るは兵のはじめなり」と教へてゐるが、自分を知らぬことのできぬ者には、人を知ることのできない。人を知るのは人のためでない。自分のためである。然して他人を自分に吸収することである。長谷川氏が今日神戸商工會議所議員として信望を博し、阪外電氣製鋼株式會社社長、株式會社長谷川商店社長、康徳興業、長谷川商店綿花部各株式會社代表取締役等を兼て名聲噴々たるも、まことに此理を實踐したればこそである。氏は兵庫縣の産、長谷川辰太郎氏の長男であり、同爲藏、同竹次郎兩氏の養子にあたり明治十一年六月に誕生、同四十五年に家督を相続した。幼少から天稟の才を蘊はれてゐるが、父業を繼承して實業界に乗り出すや、その識見の高邁にして審達、その人格の典雅にして濃厚、しかも事にあたつて機略縱横、快刀亂麻の裁斷力等は忽ちにして父君勝りとの絶讃を受けて、諸事業はことごとく向上發展の一路を辿りつゝある。もつて氏の得意たるや想ふべしである。

長谷川商店・社長

長谷川爲藏氏

貿易業界に巨資を蓄積し、長谷川商店社長の態勢を示してゐる長谷川商店社長たる長谷川爲藏氏は當代の傑傑として推賞されるべき人物である。明治二十三年五月福井縣内田彌左衛門氏の二男坊として生れた氏は、神戸長谷川かつの養子となり大正八年養父源太郎方から分家獨立す。夙に實業界に入り幾多の辛酸を嘗め苦難に忍従して商賣の表裏に通じ俊敏な天稟は商機の骨を體得した。曩に長谷川商店大商事信託會社重役として大業の活躍をして社礎を築いた手際は業界の麒麟兒として謳はれた。氏は上記の他、國光製鐵業代表取締役、長谷川商店綿花部、太平興業各取締役、日本サルヴェージ相談役の重職に就き阪神財界に覇者的な存在として將來を矚目せられてゐる。調達明快な性格の中に情誼の拘すべき一面を有し、養父源太郎氏と形影相伴ひ提携特に緊密であり兄弟譽を並べて財界に雄飛する豪壯さは羨望の的となつて居る。孤立は獨立を意味しない。社會的共力の裡に獨自性を發揮する事が眞の獨立で氏の如きは其の典型である。

東京木材問屋同業組合・評議員

長谷川萬治氏

時局下、木材業は重要缺く可からざる産業部門の一であるは云ふまでもあるまい。建築に、バルブ工業に、生活必需品に、その他木材の利用は無限にある。吾々は木材によつて國を護ることが出来、木材によつて生活し得るといつても過言ではあるまい。鐵鋼等金屬建築材が使用出来なくなつた現今、その需要範圍は益々擴張され正に木材界の黄金時代を現出してゐる。この秋、深川木場で一二を競ふ木材問屋業の大物長谷川氏の勢力は全く偉大で、尙も旭日昇天の飛躍を姿にしてゐる。氏はまた東京木材問屋同業組合評議員、南洋材東京協會理事、東京南洋材原木組合理事の諸要職も兼ねて斯界の重鎮をなし、目下多額納税者にも列してゐる。明治二十四年の生れで神奈川の産、幼時青雲の志を抱いて上京し以來刻苦精勵遂に今日の大業を致したのであるが、世の荒波を踏み越えて波瀾重疊の業界の堅壘を突破した稀にみる立志傳中の偉人である。精神高邁にして赫々の名聲あり、各方面から敬慕せられるも尊き人格の故だらうか。

王子製紙・工務部第三課長

早房長徳氏

人生の正しい道は一筋である。この一筋を誤りなく進んでこそ望みは達せられるのであつて、いゝ加減な近道などを行かうとすると、其處には思はぬ障害物があつたり底なしの泥沼に陥つたりするのである。人生に近道があつたり簡単に金儲けができるものならば、それを望む者、誰あつて營々として額に汗を流し努力しやうぞ。王子製紙に入社以來穎智を以て著々と実績を挙げつゝ遂に今日の盛大を招來した早房長徳氏は、まことに努力の人であると云はねばならぬ。氏は静岡縣人早房長次氏の長男にして明治十七年七月に誕生し大正九年に家督を相続した。明治三十六年東京高等工業學校を卒業後王子製紙に入り同社大工場長、本社參事、能率課長を経て現在工務部第三課長となつたもので更に日本バルブ工業株式會社常務取締役、山陽バルブ株式會社取締役等を兼て名望噴々たるものがある。而も大正十四年及び昭和十年再度に亘る歐米への製紙業視察は氏をして一層の權威者たらしめてゐる。

片倉製絲紡績・取締役

林清夫氏

本邦製絲界の覇者たる大片倉は、牢として抜くべからざる地盤を扶殖してゐるが、たゞに製絲界のみならず人絹、保險、米穀、鑛業、製鍊其他にも廣く手を伸ばしてゐる。わが林清夫氏はこの片倉系の第一線に於ける代表的閣將として、製絲界を初めとして各種事業に關係し、噴々たる聲名を馳せつゝある巨豪である。即ち現在氏は片倉製絲紡績、日東紡績、松江片倉製絲、片倉江津製絲、岩手縣製絲、佐越製絲、日本紡績、岡谷乾繭委託、片倉生命保險、富國火災海上保險、川岸製鍊各取締役たり、また片倉殖産、片倉米穀肥料、日支肥料各監査役に任じ、且つ東邦石油代表取締役として名采配を揮つてゐるが、氏の人物と關係並にその識見、才腕は既に定評あるところで、何れの會社も斯界に冠たる業績を示してゐる。氏は明治十七年十二月長野縣人花岡覺吉氏の二男として誕生したが、同縣人林利三郎氏の養子となり大正六年分家した。猶ほ氏は養父の長女たるよしを令夫人との間に三男五女の子寶を寵まれてゐる。

濱口興業・代表取締役

濱口富三郎氏

本邦食料品界に於て「マルヤス」印の罐詰は各種類の食品を網羅してゐて、品質優良、價格適正を以て諸人の愛顧を受けてゐるが、わが濱口富三郎氏はマルヤスの當主として斯界に誇々たる雷名を馳せつゝある青年實業家である。現在氏は丸安濱口合名代表社員たり、また濱口興業代表取締役、臺灣鳳梨罐詰共同販賣取締役として、わが食料品罐詰界の第一線に颯爽たる雄姿を登場させてゐるが、其の製品は内地大陸方面はもとより、遠く海外にも輸出せられて、外貨獲得の國策の爲めに萬丈の氣を吐きつゝある。猶ほ氏は驥足を重工業界に伸ばして、川南工業東洋鋼鐵各取締役に任じてゐるが、この方面に於ても氏の比類なき才腕はその妙諦を遺憾なく發揮して、好評噴々たるものがある。氏は明治三十一年五月京都府人たる先代富三郎氏の長男として誕生したが、大正十年家督を相続すると共に前名富太郎を改めて襲名した。夙に京都第一商業を卒業して實業界に入つたが、當年四十二歳の氏の前途は洋々たるものがある。

桐花興業・社長

早瀬太郎三郎氏

大阪事業界の明星として過去三十餘年間に亘り、斯界を調歩する早瀬太郎三郎氏の雄姿こそ、まことに大阪府多額納税者としての貫録をよく現はしてゐる。氏は大阪府人先代太郎三郎氏の長男として明治十七年三月に誕生、同三十五年家督相続と共に前名爲次郎を改めて襲名に及んだものである。明治四十年早大商科を卒業後今木屋と稱して貸地業を營みつゝ餘威を顯つて擴く事業界に進出し、今や桐花興業株式會社社長を筆頭に大神中央土地、木津川土地運河各株式會社取締役其他の重役を兼ていゝ、精力的な働らきぶりを示しつゝある。氏の過去を知るものはやがて一城の主として起つ器量を早くから認めてゐた。事ほどさやうに氏の青年時代のエネルギーな働らきぶりと、氣負ひ起つ滿々の霸氣は人々を瞠目させたものであつた。財界生活が長いだけに事業に對する所謂革新空氣なるものも充分に吸つてゐる。したがつて經營を刷新し業績を新たにする事にかけても、相當の手腕を揮つてゐることは云ふまでもない。

林鐵工所・取締役

林重敏氏

今や大陸支那に於ける東亞新體制確立の爲めの聖戰は漸く時を越えて、蔣政權の没落も時間の問題となつて來たが、歐州第二戰は益々擴大して伊太利の獨逸側への參戰に續き、米國の英佛側への參加が云々される程に大舞臺を展開させてゐる秋、時局股販産業の花形たる製作界の中でも、殊に軍需品工場は、夜に日を繼いで事日なき活況を呈しつゝある。わが林重敏氏が取締役として全般の指揮采配に任じてゐる林鐵工所は、造機兵器部分品の指定工場として、××當局と直屬關係にあり、關西メーカー界に於ても特に目覚ましき生産能率を示して、驚異的業績を挙げつゝあり、斯界羨望の的となつてゐる。氏は徳島縣人秦壽助氏の三男として明治三十三年十月出生したが、後ち同縣人林普吉氏の養子となつた。大正十三年早大商科を卒業し家業を繼いだが、後ち造機兵器部分品製造業を創め合名組織を以て代表社員に任じたが、現在之を株式に改組した。氏は當年四十一歳、その豊かなる春秋は將來の大業を期待されてゐる。

兼松商店・専務取締役

林莊太郎氏

扇港神戸貿易界の白眉たる兼松商店専務取締役としてわが林莊太郎氏は斯界の重鎮たり、その雷名は内地はもとより遠く大陸から南北米にまで轟き渡つてゐる。同社は神戸に本店を置き、東京、大阪、名古屋、新京、天津に支店を大連、奉天、哈爾濱、青島、上海、紐育、沙市、アルゼンチンに出張所を設けてゐて、わが貿易國策のために萬丈の氣を吐きつゝある。氏は明治四十年同社に入社以來、今日に至るまで四十年近くを同社一本槍で押し進み、その抜群の見識、手腕に依つて漸次累進し、取締役兼總務兼會計部長を経て、現時は専務として最高の椅子に就いたのである。氏は明治十八年六月岡山縣人林廣三郎氏の長男として誕生し、大正三年家督を相続した。先是明治四十年東京高商を卒業して、直ちに兼松商店に入社した。現在氏は兼松羊毛、東邦金屬、日本絹油共販各取締役として名采配を揮つてゐるが、また日本綿絲布輸出組合聯合會並に日本ステープルファイバー輸出組合各理事としても聞え高きものがある。

松尾鑛業・常務取締役

林 知 義 氏

松尾鑛業株式會社常務取締役林知義氏は、人も知る如く財界に於ての變り種といつて差支へない。明治四十五年三月東京高等工電氣科に秀才を誦はれて卒業した氏は、當局の推挙する所となつて、旅順工科學堂助教となつて、教壇に在ること多年、大陸の工業界に寄與すること決して尠くなかつたが、飄然として實業界に轉向した。氏は一片の學究ではなかつた、才幹力量に於て抱負識見に於て他の追隨し得ざるものがあり、經營運行的手腕の卓抜なるものがあつた。松尾鑛業に常務取締役として献身的な努力を続け、業界異数の存在を以て認識を高めて居る。氏は又八戸運輸取締役の要職をも兼ね、旅順を中原に進める機を窺つて、徐ろに銳氣を養つて居る。氏は石川縣士族林正義の長男にして、明治二十四年七月の出生、昭和十三年嚴父退隱の後を承けて家督を相續し、現在居る横濱に占め子女の教養に努めて居る。氏は園藝を嗜み同好の誰彼となく相手を求めて楽しみ、他意ない有様、氏の一面を窺ひ得やう。

會陽乗合自動車・社長

林 平 藏 氏

林紡績合名會社代表社員林平藏氏は、福島縣若松市林平藏の孫で明治三十七年三月出生、昭和五年家督を相續し前名和一を改めて、平藏を襲名す。父天折の後叔父榮治氏の扶育を受けて成人せる氏は不羈獨立の精神強く、若くして既に將來の計畫を樹て、若々として其の實現に努力と研鑽とを重ねたのである。東北會陽の實業界に颯爽として、其の姿を點じたのは、未だ最近の事ではあるが、才幹煥發巨人の風格があり、經營の手腕亦可なるものがある。現時、會陽乗合自動車、新田製作所に社長として采配する外、新東山會社取締役兼購買部長、林紡績代表社員に就任し、少壯精銳の氣を吐き、毅然として財界に勇躍して居る。氏は業界進出後幾何も経ざるに既に堂々たる活躍をなす。將來大成すべき一偉材として驚異せられる所となつた。統制經濟は若い實業家たる氏に數々の教訓と經驗とを與へる絶好の試練臺である。大陸の金融經濟が完成せんとする近き將來は新進の闘士を要すること論を待たぬ。氏亦明日に備へよ。

日本精蠟・事務取締役

林 正 春 氏

山國長野には人傑が多い、山容水態總てが豪壯である信濃の自然は、信州人に不羈の氣魄を植えつけずにはおかない。林正春氏は幼少秀才を以て聞え、夙に東亞同文書院に學び、大陸進出の要望に沿ひ、明治四十三年南滿洲鐵道會社に入社し、幾何もなく其の手腕を認められて販賣部石炭課長に進み、更に庶務課長となつたが、大正六年滿鐵直營の撫順炭販賣會社常務取締役に榮進し、専ら内地への供給關係の要路に當り、名聲を博し斯界に於ける一勢力を構成したのであるが、後年之を辭し、本邦に於ての異色である日本精蠟會社に事務取締役として君臨し、只管基礎の確立を圖り業績に劃期的躍進を招來したことは、氏の手腕を物語る好箇の事實である。氏は長野縣林源吉氏の長男であつて明治二十一年一月出生、大正十一年家督を相續し、郷里に於ても敬畏の的となつて居る。氏は祖先崇敬の念厚く亦親族故舊に對する情誼に富み、毎年の展墓には必ず親族知己を訪ね交情洵に置はしいものがあるといふ。

林組製絲・常務取締役

林 將 英 氏

蠶業の覇を以て任ずる長野は、亦生絲製造の王座を占めて居る。株式會社林組製絲系は岡谷製絲界に雄飛する羈王的存在である。大正末期から昭和初頭にかけての財界不況恐慌時代を見事乗切つて隆々として發展を續けてゐる林組製絲こそ、林將英氏の存在を外にして論ずる譯には行かない。氏は長野縣の土地兒、即ち林源太郎氏の長男で、明治三十年の生れ、幼少より蠶の國に育ち、製絲の中に人となり、凡そ蠶に關する限り知らぬ事は先づないと言つて差支ない。製絲業が群少資本時代から大資本經營時代に移行しつゝある時に斯業界に乘出した氏は、次々と捲起る難關を突破して敢て人後に屈しなかつた氏の不屈不撓の活動は、林組をして今日あらしめる所以であり、其の功績は永遠に特筆せらるべきであらう。氏は春秋豊かにして前途は洵に多望であり、且つ洋々たるものがある。國際經濟の鍵を握つて、産業日本の偉容を示す斯業界の、今後益々發展せんことを念願する國民への負荷は決して輕いとは思はれぬ。

下關倉庫・事務取締役

林 米 吉 氏

關門財界に毅然たる存在を示し下關市商會議所議員の要職に就き、不動の基礎の上に立つて活動する林米吉氏は、現に下關倉庫會社事務取締役、下關瓦斯、長府土地、山陽電氣軌道各會社取締役、下關米取引所理事に推され、練達湛能なる手腕を遺憾なく發揮し名聲噴々として、業界の視聽を蒐めてゐる。氏は山口縣林清治郎氏の二男として明治十三年八月出生し後分家して獨立す。其の人となつては、其の膽氣を以て夙に實業界に乘出し各方面に於て苦闘隱忍すること幾年、茲に膽氣を練り才能を培ひ、凡ゆる經驗を積んだ成果が今日を招來したのである。氏が倦まざる奮闘の裡にあつて、培ひ來たものに、書畫骨董がある。書畫の鑑識には驚くべきものがあり従つて其の愛好も亦格別で、所藏する巨匠の繪畫名筆も頗る多いといふ。骨董に至つては更に眼識が深い。氏の豪放精神な一面にかうした風格を有して居ることは氏の人格の高邁なるを語るものであり、一層の奥床しさを覺える。

壽重工業・副社長

林 原 兼 賢 氏

重工業が軍需資材製作に従事して既に四箇年、東西轉を並べて發展の一路を進む偉觀は蓋し空前の事といふべきである。關西に於ける壽重工業會社が異常な發展を遂げ隆々たる繁榮を招來し、工業界に雄姿を示現したのは副社長林原兼賢氏の粒々の辛苦の結晶でなくて何であらう。氏は明治四十二年東京帝大法科獨法科を卒へ三井銀行へ入社、京都支店長を経て昭和十一年九月同行取締役に榮進し大阪支店長となつた。其間實に三十年、銀行に終始すべしと思はれたが、長年の地盤と地位とを一擲し、新たな發點に立つて進撃を創めたのである。然し氏の俊敏と明知とは、氏の捷まさる意志と待つて成功を贏ち得て、制覇目指して突進を續けて居る有様は當に時代的怪傑である。氏は尙壽織維工業副社長の要職をも兼ねてゐる。明治十六年島根縣士族林原省三氏の二男に生れ大正六年家督を承く、諳曲に湛能なばかりでなく、園藝も凄腕と聞く時は一家學つてハイキングすることも此上もない慰藉であらう。

林田商店・社長

林 田 七 郎 氏

林田商店社長林田七郎氏は、海運貿易業界の一權威である。氏は大正七年東京帝大法科を卒業し、直ちに、横濱財閥の頭目増田屋商店、神戸支店勤務を命ぜられたが、幾何もなく、三上會社に轉じ、其の才腕と力量とを認められ、累進して大正九年には同社取締役に擧用せられ、其の榮進振りは超スピードであつた。後貿易狀態觀察の爲め渡米し、詳細な研究調査を遂げて歸朝し、海運事業の將來性につき考慮を拂ひ、研究を積み、昭和六年林田海運會社を創立し、自ら社長として其の陣頭に立ち、不撓不屈の活躍をなし、業績に劃期的發展を加へた。氏は現に石原産業海運、南洋倉庫各事務取締役、日本海運取締役として海運業界に馳驅して健闘を續けて居る。氏は東京府岩田三平氏の令弟で明治二十六年六月出生、後年林田家を繼ぐことになつた。氏の趣味は多方面で、園藝好く、登山可、諳曲亦可なりと聞く。五十代に達せぬ氏、實業界には異数の存在であり、未來の大成に向つて精進奮闘を望むものである。

昭和製煉・常務取締役

原 源 六 氏

凡そ製品の工程要素として科學の洗禮を経ないものはない。殊に應用化學は饒近益々其の重要性が擴大され、物理工業即ち純粹工業と稱せられる部門にも應用化學の力を借らぬものはないのである。原源六氏が此の方面に一權威として存在することは、心強限りである。氏は東京府の産、明治二十五年六月出生、幼年の頃より精密な腦力を持つて居る關係から其の長所に向つて修業を積み、大正七年九州帝大應用化學科を卒業し、日本化學工業會社郡山工場、次いで東京工場に技術者として勤務し、其の實力を推賞せられ、又卓抜な才幹は同社經營の柱石として囑望されて居たのである。斯くて昭和十年昭和製煉常務取締役に就任、其蘊蓄を傾注して粉骨碎身營々として社業の進展に資して居る。神港の一角を彩る勤厚な實業家として尊敬を拂はれ、自己の職分に向つて勤行を續けて居る氏は、粟原鑛業所取締役として運營の要衝に當り精進の一路を辿つて止む所がない。時局下に於て氏の如き人物の存在する事は悦ばしい。

三重澱粉製造・社長

原 亨 平氏

氏は廣島縣友成敦太郎氏の三男として、明治十七年の出生であるが、大正十四年、長崎市原真一氏の養子となり分家す。氏は最初醫を志し、夙に日本醫校を卒業したのであるが、中道を變へて實業に進み、富田屋商店と稱して専ら、海産物を營業種目とし、孜孜として精勵、倦まざる努力は酬いられて、家業日々繁榮し、長崎財界に牢固たる地位を占むるに至つた。更に不撓の活躍を続け、現在に於ては、長崎市商工會議所議員の公職に推され、三重澱粉社長たる外、朝日澱粉製造事務取締役、長崎海陸運送取締役、原商事、長崎貿易組合倉庫各監査役として事業界の重鎮として登場し、多忙多端な活動に寧日もない姿である。氏は穩健篤實な中にも烈々たる熱血を包蔵し、一事一貫を主義とし遂に成功史傳中の一人となつた。其の間人知れぬ苦難の道を踏み、多難の道を歩いた事は言ふまでもあるまい。かうした試練の成果が今日の氏を造上げたのである。雖伏十年とは氏の歴史の何れかに當てはまる言葉であらう。

神陽汽船・社長

原 淳 一郎氏

動四等原淳一郎氏は、高知縣原虎次郎氏の長男にして明治二十七年十月の出生で、郷里土佐に於て淳朴な教育を受け後志を立てて帝都に上り明大に入學、大正八年同大學法科を卒業辯護士を開業した。素より明敏穎才を以て聞えた氏は辯護士一本槍では物足らぬ或る寂寞感をどうする事も出来なかつた。政界へ足を踏み出し、兵庫縣會議員に當選し、縣參事會員に選ばれ、一方神戸市會議員、同參事會員にも當選し、滿々たる野望を抱いて全力的活躍を続けて居る。他方事業界に進出し神陽汽船、南邦商業の兩社に社長たる外、高知電氣工業取締役、神戸製鋼所播磨造船各顧問として、實業界にも隱然たる一勢力を形成し、政、財兩面を股に掛けての活動は一驚せざるを得ない。由來吾々の生活戦線に花々しいものが二つある。其の一つは政治の活舞臺に躍ること他の一つは財界人として輝かしい偉勳を残す事である。男性的な魅力ある活動面ではある。氏の人格手腕は、今や圓熟し滅私奉公の至純な活躍を今後に約束する。

合名會社原組・代表社員

原 半次郎氏

政治、經濟、産業、教育、軍事等凡ての部門を一元的統一體として、日滿支新秩序建設の爲め聖戰四年に及ぶ、支那新政府樹立によつて其の實現は緒に就いた感がある。今後に於ける活動面は愈々擴大化されたのである。大陸進出が一部のあつたことは最早過去の歴史化した今日、國民擧げて認識を新にしなければならぬ。さは言へ原半次郎氏は夙に大陸に着眼し、滿洲の關門大連に旗を進め獅子吼して居る勇躍ぶりは先驅者として推賞するに十分である。氏は明治十四年兵庫縣原惣吉氏の二男として生れ、同縣立農學校を卒業し山葉洋行に入り、後福昌公司に轉じ、滿洲に於ける大勢を究め、大正十年意を決して活動面を土木建築に求め、其の請負業を創め原組と稱して活躍を開始し、文字通り不眠不休の精勵を以て奮闘した。勿論隆替は自然の數、能く難關を突破し業績をめきめきあげ組織を合名會社として業界にその存在を確立した。そして自ら陣頭に立つて輝かしい活動を続けて居る。氏の努力と苦闘を偲び敬意を表する。

國光紡績・社長

原 茂久雄氏

國光紡績會社社長たる原茂久雄氏は國光ロイド會社の社長を兼ね、阪神財界に雄姿を示し、堂々として覇者の歩みを続けて居る偉材である。氏は明治十九年長野縣原梅次郎氏の長男として生れ、昭和八年父隱退の後を承けて家督を繼ぐ。幼時より俊敏明知を以て聞えた。夙に慶應大學を卒業して長崎紡績會社に入社、累進して専務取締役となり經營の實權を握つて社業の進展に貢献頗る多かつたが、後國光紡績會社の招聘により同社長に就任し、其の關係會社國光ロイドの社長を兼務し、兩社の運営を主宰して居る。氏は本邦紡績界屈指の存在であつて、其の蘊蓄の豊かさや造詣の深さは斯界異數と稱せられ傑出した景仰の的となつてゐる。人爲り、明朗恬淡にして人を容るるに寛恕であり、責任感の強い點は敬服すべきである。氏の下にある誰しも其徳に懐き全力を擧げて其の持場に精進する情況で勞資の抗争など影もなく、平和の裡に社業益々盛に赴くといふことは氏の人格の非凡を表徴するものである。

金港堂・社長

原 安三郎氏

氏は徳島縣土族先考安三郎氏の長子で、明治十七年の出生であるから働き盛りの五十代、明治四十二年早大商科を卒業した俊材で、學志を出て直ちに金港堂書籍會社に入社したが、拔群の才幹は忽ち認められて遂に社長に推されるに至つた。氏は天才實業家であり、連続的に去來する複雑な幾多の事相を、瞬間的に處して誤がないといふ驚異的明敏性の所持者である。氏の偉大な全貌は其の關係範圍の廣汎なこゝによつて窺はれ、財界の勢力地位をもトする事が出来る。社長として主宰するものに日本火藥製造、朝鮮火藥製造、朝鮮紡績、山川製絲、中外鑛業、中外産業、熱海埋立、横濱埋立倉庫、朝鮮不動産、大同コンクリート、日本針布、帝國染料製造、維新化學工業、共和レザー、新進コンクリート工業、南滿コルク、三益社、中外精工の各會社、取締役たるものに室蘭貯庫、内外鑛業、日吉商會、營口紡績、彌榮商事、日本ビストン、關東紡績、滿洲製麻の各會社、監査役、相談役として就任するもの十數社に及んで居る。

原合名會社・副社長

原 良三郎氏

氏は一代の巨豪、横濱市原富太郎氏の長子として、明治二十九年七月出生した。先考富太郎氏は京濱に於ける政財界の巨星として、信望を一身に蒐めた高格の士であつた。氏は大正九年早稻田大學商科卒業の穎材であつて先人構築の基礎の上に立ち生絲貿易に従事し、原二世として信用厚く財界に覇を成して居る。現在原合名、南和公同各副社長たる外、帝國蠶絲倉庫、日本亞鉛鑛業、ホテルニユグランド、朝鮮農林各取締役、横濱帆布、増田製粉、横濱火災海上保險各監査役に就任し業界の樞軸をなし、魁偉の姿勢を以て堂々と活躍してゐる。氏は曩に歐米を漫遊し其に生絲貿易狀況其他事業界の情況を視察して歸朝し、國際金融上の見識、經濟界に對する抱負も豊かであり、終始一貫して貿易報國に邁進して國富増進に向つて精進する點燈として止まざるものである。氏は又現に横濱商工會議所議員の公職を帯び斯業發展の爲め孜孜として盡瘁し先代の遺徳の顯揚に努めて倦む所を知らずといふ有様で、將來に待望する所も大きい。

日鋼滿備・常務取締役

原 口 彦 藏 氏

わが原口彦藏氏は帝都實業界の香宿として噴々たる聲名を轟はれてゐる逸材である。氏は現在日鋼滿備常務取締役たり、また白石金鑛取締として鑛業界に重きを成してゐるが、滿備は鋼材用として製鋼界に必須なる原料であり、また産金は喋々する迄もなく外貨獲得のために政府が大量の獎勵をやつてゐる程であるから、兩社共に時局の浪に乗つて發展途上にあり、加へて氏の優秀なる名采配下にある兩社は共に隆々たる業績を擧げつゝあり、斯界羨望の的となつてゐる。氏は猶ほ山元オブライト取締役、日本エナメル、羽毛工業各監査役として、輕工業界にも敏腕を揮つて活躍しつゝある。氏は明治二十一年二月長崎縣原口寅次郎氏の長子として出生したが、昭和九年先代の後を承けて家督を相續した。先是明治四十二年長崎高商を卒業し、實業界に身を投じて今日に至つてゐるが、現在白石同族主事にも任じてゐる。氏は本年とつて五十二歳、今や實業家として脂の乗り切つた男盛り働き盛りである。時局柄切に祈自重。

播磨本店・社長

播 磨 幸 七 氏

播磨本店(株)社長、大阪石鹼(株)常任監査役、全國石鹼製造業聯合會常任理事、日本石鹼輸出組合理事、神戸石鹼化粧品業組合長の諸重職にあつて、堂々事業界を闊歩する播磨氏は明治十八年に生れた。先々代幸七氏は神戸市兵庫區西出町に住して世々船具商を營んでゐたが、先代幸七氏に至り明治十二年より辨寸製造業を始め、翌十三年には石鹼製造業を開始した。これが本邦に於ける辨寸、石鹼製造の嚆矢であつて爾來六十餘年を閉して今日の盛大を見るに至つたものである。洵に先代の先見の明には敬服に値するものがあり、その貢献は甚大なりと云ふべきであらう。現幸七氏は明治四十一年に慶應義塾を卒業するや遺業の一部を繼承して關西事業界に進出し、今や敏腕家の名聲を轟はれてゐるが、資性は潤達にして明朗そのもの、またその事業的才腕は恐るべし、關西事業界の大御所として押しも押されぬ播磨幸七氏を以て示してゐる。なほ氏は、曩に神戸商工會議所議員として活躍した人で、正に斯界の傑物であらう。

日本航空工業・専務取締役

坂東舜一氏

本社を大阪市東區北久太郎町に置く日本航空工業株式會社は、昭和十二年五月の創立に係り現在資本金六百萬圓（内拂込額三百七十五萬圓）その業務は云ふまでもなく航空機、航空品材、諸機械、材料部分品製造等を目的としてゐる。その重役陣はと見れば會長には寺田財閥の統領たる寺田甚吉氏を戴き、専務取締役に坂東舜一氏が据はり取締役に戸川不二男氏が居る。この名トリオだけに事業の將來性には充分期待が出来、何人とも斯業の進歩發達を疑ふものとなつてない有様である。特に大黒柱的存在と自他共に許されてゐる坂東氏に至つては、曩に川西航空機會社支配人として充分その敏腕を顯はれてゐるだけにすこしもあぶなげといふものがない。氏は兵庫縣の産、坂東常吉氏の長男として明治二十五年六月に誕生し大正十四年に家督を相続した。大正五年慶應理財科を卒業し川西航空機を経て日本航空工業に入つたもので同社専務たるほか、日本内燃機、不二越鋼材各株式會社取締役を兼て令名を馳せつゝある。

日比谷商店・社長

日比谷平左衛門氏

氏は今や本邦實業界に於て「花形」の名譽を恣にしてゐる英才だ。當家は先代平左衛門氏より興つた。先代は十三才の時郷里新潟を後に上京、棉花商松本屋の丁稚となつたが、認められて支配人になり、幾許もなくして同店を辭し、獨立獨歩日比谷棉花部を創始したのである。更に東京瓦斯紡績を興して専務となり、續いて富士紡績の事務を整理して衰運を挽回、遂に兩社を合併して益々活況を示した。また鐘紡社長にも推されて實業界の重鎮を謳はれ、大正四年には特旨によつて從五位に、同十年には正五位に叙せられた殊勳者である。現當主たる氏は先代の長男にして明治十四年生れ、慶大を卒へてより父業を繼ぎ本邦有数の棉絲棉花商として巨萬の富を擁してゐる。氏は現時日比谷商店、滿洲紡績各社長、富士瓦斯紡績、富士纖維工業各取締役會長、富士電力、北海道炭礦汽船、日華紡績各取締役等々の諸重役を兼務し東京府多額納税者に列してゐる。正に氏こそ吾が實業界の先進者指導者として光輝ある存在であらう。

京三製作所・常務取締役

樋口佐兵衛氏

株式會社京三製作所を語るには、現常務取締役樋口佐兵衛氏を置いては語ることが出来ない。氏は明治二十五年二月に、兵庫縣人樋口平太郎氏の長男として生れ、大正四年に家督を相続したのである。また大阪高工電氣科に學んで大正二年に優秀な成績をもつて卒業、後大阪電燈株式會社及芝浦製作所に勤務して大いに働いたが、京三製作所常務取締役となるや、氏は此處にその處を得て俄然銳鋒を現し、俊材ぶりを遺憾なく發揮するに至つたのである。だが素より専門的技術と卓抜の手腕を兼ねた氏は、嘗々苦心の結果は同社を年毎に發展躍進に導いて、つひに吾が國機械工業界に頭角を現すに至つたのである。氏こそ文字通り氣宇瀟灑、頭腦明晰なる人物で、情味あり、俠氣あるところは業界から多大の信望を蒐めてゐる所以であらう。而してその疲れるを知らぬ努力は、果然華を開いて軍擴インフレの波濤に乗り、唯一人の外人技師も持たずに獨歩國策的會社となつたのである。技術家らしく信念と沈黙に生きる偉材である。

關門汽船・社長

久野春之助氏

夙に實業界に入り僅か三十餘歳にして關門汽船株式會社社長となり、次いで山陽百貨店、大里製鹽所各株式會社社長、並びに共同火災保險、共同ビルディング各株式會社取締役其他の重役を兼ね、更に久野合資會社代表社員としても一世に秀でた手腕を發揮しつゝ、あるのが久野春之助氏である。氏は山口縣人久野勝藏氏の養子にして明治十四年八月に誕生、大正元年に家督を相続した。氏はたしかに山口縣下に於ける花形の事業家である。その存在は文字通り業界の長老であり、立役者たるべくその勢力とも云ふべきものは隠然として偉大なるものがある。縣下の多額納税者に列してゐることだけでもその側面がうかがはれ、その快腕を裏書するに充分なるものがあるわけだ。氏こそは將に同地方きつての代表的成功者と言ふべきであらう。氏は資性濃厚篤實の長者であるだけに一家一門の崇敬を受けることはもとより、業界に於ける評判も亦好く、何れの街を歩いてもその好評を耳にすることが出来る。唯一の趣味は讀書である。

臺灣拓殖、副社長

久宗 薫氏

氏は和歌山縣土族後藤榮藏氏の二男にして明治十二年十二月に誕生、同三十四年先代朝光氏の養子となつて同四十五年到家督を相続した。明治三十九年東京帝國大學法學部政治科を卒業後、臺灣銀行に入り理事に進んだが昭和六年に退職し、同十一年十一月臺灣拓殖株式會社に入り副社長の重任に就いた。氏は所謂「腹」の出來た人である。如何なる人に對してもすこしも尊大に構へることなく、常に圓滿なる態度をもつて一視同仁、何等障壁を設けず懇切に指導する故、部下よりも絶大な信頼を受けてゐる。したがつて社業隆盛に赴いたる裏面には、ひとえに氏の熱誠と倦まざる努力の賜物であると同時に、幾多の部下が之に和して粉骨獻身したる力、亦大なりと云はなければならぬ。氏も早や六十の聲をきいた。しかし實業家としてはすこしも老いを感じない時代である。某實業家が、「六十、七十は鼻垂れ小僧」と諷したのから云つても、未だん、これからがといふ感じが深い。況や元氣潑潑たる氏の場合に於てをやである。

平仙織布・代表取締役

平岡仙太郎氏

埼玉縣平岡専吉の長男にして明治二十七年十月出生、大正九年家督を相続す。レース製造業を營み傍ら前記各會社重役を兼ね埼玉縣會議員に推された。嘗て日本赤十字社に對し其事業資金として金一萬圓を寄附したる故を以て御紋章附花瓶を下賜せられた程の功勞者である。氏は人も知る通り氣骨稜々たる風格の持主で、金儲のみを考へてゐるありきたりの事業家とは趣を異にしてゐる。常に國家的使命を基調とし、之を遂行するといふ遺方である。決して氏は嘘を云はない人格者である國家奉仕といふ事業觀念を念頭において仕事を遂行する點では、斯界に入多しと云つても先づ氏を筆頭に置くことに筆者は躊躇しないのである。氏がかゝる人物であればこそ、國家的に表彰されるのだと云つても過言ではない筈だ。眞に獨力を以て今日の大を築いた氏は、總て我國産業界の生んだ愛國的實業家と稱せられるのも亦故あるかなである。時局は益々傑出せる人材を要求する秋、氏の功績こそ後世實業家の規範とするに足るものがある。

昭和三ノカー・専務取締役

平賀亨三氏

昭和三ノカー株式會社専務取締役たる平賀亨三氏は、大同海運會社監査役をも兼務し、春秋豊かな財界人として前途の活躍を約束さるべき逸材である。氏は東京帝大政治科卒業であるが、逸早く實業界に入り三菱造船所に第一歩を印した。後山下汽船會社に轉じ、船舶關係生活に大正四年以來二十年を捧げたが、氏の據點は茲にはなかつた。昭和五年大同海運に監査役として就任し、同十三年昭和三ノカー會社の懇請を納れて常務取締役に推され現に専務として經營の實權を掌握するに至つた。氏は、山形縣人であるが、東北人特有の粘り強さを持ち難關に對して不屈不撓、最後まで頑張り通す性格を有し、獨立直營の意志頗る堅い一面明朗恬淡で物にこだはらない。現在の氏の閱歷から見ても一斑を窺はれる。氏が知能の偏在者でない事は、工場に鉋を振ふことも度々であるに鑑みても領られる。財界に異彩を放つ氏の前途こそ洋々たるものがある。

平田紡績・社長

平田 佐矩氏

平田紡績、東洋スチール各（株）社長、三重織布、愛三工業、四日市築港各（株）取締役、三岐鐵道、大洋フェルト、桑野電機各（株）監査役の重役を兼ねる氏は、三重縣財界の元老として隠然たる勢力を有する人物だ。特に平田紡績に於ては多年に渉り莫大なる努力を傾けてきたが同社が今日の如き大發展を遂げたのも、實に氏の敏腕に俟つ處多い。明治二十八年九月生れ、夙に立教大學經濟科を卒業實業界入りをしたが、その非凡なる力量は多方面に及び英才の名を高からしめてゐる。氏の趣味は茶道、ハイキング、スキー、ゴルフ、俳句等で新しきモダンイズムの所有者。人爲は公平無私で清廉潔白、三重縣財界切つての人格者と云はれ、溫情的なるが故か部下の信望はもとより世間の徳望に大きい。時恰も非常時聖戰目的遂行の爲官民一致協力の旗下に立つの秋、重大なる役割を背負つて業界は今後如何に處してゆくか？これは一に氏の如き地方有力の士に課せられた大使命ではあるまいか。

朝日醸造・社長

平高寅太郎氏

氏は優秀なる朝日醸造株式會社を主宰する斯界の覇者だ。また同社のほか昭和酒類、東神興業各(株)代表取締役、太陽曹達、東洋製糖、大連取引所信託、南滿洲製糖各(株)監査役と要職を兼務、只管社業の發展に盡してゐるが、各社ともに今時局の反映を全面的に受けて活況を呈してゐる。然し會社業績の活況にも増して潑刺軒昂の概を示してゐるのは、誰でもない指導者たる氏、平高寅太郎氏だ。熱烈な日本主義者、國粹主義者として業界に異彩を放つてゐる氏は、いま東亞の大陸に躍一躍大いに伸びんとする産業日本國一致の聖戰を觀て、闘志勃々、若々しい純情の感激に燃えてゐる。氏は明治十二年八月生れ、齒切れの好い意氣昂つた談論風發、颯爽の勇姿、氏の事業はそのまま、氏の積極的姿態を具現し、氏の勇姿にはその儘氏の事業精神が映つてゐる。情實排撃、至誠奉公共存共榮の大旗を高く掲げて進んできた氏、明朗調達、仁俠の一面を併せ有し、時局を擔ふ産業戰士として一點の非の打ち處もない俊才である。

北海道理化學工業・専務取締役

平塚直治氏

北海道理化學工業専務取締役として時局下の産業界に重大なる貢獻をなしてゐる氏は農學博士である。明治六年十月、士族平塚直幹氏の長男として生れ、同二十九年札幌農學校農學科を卒業して後、青森、沖繩各縣立中學校に教諭として教鞭をとり、亦北海道農會幹事として農業改良の爲に力闘を續けてきたが、大正八年研鑽途に成り農學博士の學位を受けたと云ふ輝ける経歴の所有者である。現時札幌グランドホテル取締役も兼ねてゐるが、曩に北海道亞麻工業、大日本乳製品、帝國製麻各會社の重責に在り、札幌商業會議所特別議員顧問に擧げられた。氏は學者であると同時に優れた事業經營者である云ふまでもなく、その人格は社員一同から慈父の如く親まれてゐる。而も氏の持つ篤實穩健なる資性、妥當中正なる理論、端嚴なる人格は躍進日本の重要メムベリとしての要素を遺憾なく兼ね備へてゐるの感あり、正に業界の推進力たる氏に俟つ處大なるものがあらう。園藝讀書を好む氏の學者的面目も窺はれる。

度量衡器商

平山清三郎氏

今日度量衡器商の平山清三郎氏と云へば、堅實なる營業方針の下に遂年盛大に赴きつゝあることは、十指の指のよく認むるところである。氏の營業方針と云へば派手／＼しいところを見せないだけに、一見してちみちみ如くに映するが、それだけに堅實性を多分に持つてをり、投機性など微塵もないといふわけである。氏は秋田縣人平山永助氏の四男にして明治十五年八月に誕生、同四十一年に先代清三郎氏の養子となり、昭和四年に家督相続と共に前名五三郎を改め襲名に及んだ。今や度量衡器商としての盛名を天下に流布するに至つた才腕の持主だけに、その足跡はまことに世の龜鑑として推稱さるべき程のものがあつて、溢るゝが如き人氣は推されて能代商工會議所常議員、日本度量衡協會社同支部副支部長、能代信用組合副組合長等の任にあり、更に秋田縣多額納稅者の列に堂々と加はつて、全く今日の偉業を裏書しつゝあるかの觀を添へしめてゐる。氏の性格たるや謹嚴にしてその事業的活動は將に壯者を凌ぐの概がある。

大鮮醸造・専務取締役

平山與一氏

事業界に於ける氏の動向は絶えず國家本位であり、清廉潔白にして我が産業界に貢獻する炬火の如き燃度には何人と雖も敬服するところである。その風格に接するに威あつて猛からず、萬人に對して温容にして懇切眞摯なる態度には、少なからず湯仰の的となりつゝある。氏は長崎縣の産、平山鶴藏氏の二男にして明治二十六年三月に誕生し昭和二年に家督を相続した。夙に英才をもつて鳴り周囲の人々より將來の大成を囁目されてゐたが、果せるかな實業界雄飛を志して精勵、今や大鮮醸造株式會社専務取締役、帝國製糖、大日本酒類醸造各株式會社常務取締役其他醸造關係會社の重役を兼て、文字通り斯界のオーソリチーをもつて多大の畏敬を拂はれつゝある。商賣は第一に親切、次に勉強、而して宣傳といふ三つの歩調を合致すれば必ず成功するもので、事業に蹉跌した多くの人はこの中の何れかを等閑に附したものである。げに氏こそは多年に亘て此三鐵則を嚴守して業界に於ける鳳凰的存在をなしたものと云へる。

理研アルマイト工業・社長

平沼覺治郎氏

一世の覇業といはれる理研コンツェルンの中にあつて華々しき躍進を續けてゐる理研アルマイト工業に才人平沼覺治郎氏がある。氏は神奈川縣平沼專藏氏の孫、現戸主義太郎氏の弟で明治三十年十月に出生、現時理研のほか光商事、アルマイト文具工業、加藤精機製作所、アルマイト輕合金、大東電材工業、新生食料品各(株)社長、横須賀酸素(株)代表取締役、大東アルミニウム製作所、湖南瓦斯各(株)取締役、藤澤自動車(株)監査役とその才腕は縦横に伸び大勢力を有してゐるが、氏の財界雄將としての名聲は餘りにも高い。曩に縣下多額納稅者に列し、亦選手理立代表取締役、空中電氣鐵道、日本電化工業等各社の重役としても材幹を發揮斷然他を壓するの感が深い。氏自らは「平々凡々」と云ひ謙遜してゐるが、巨資を擁する理研アルマイト工業の切り盛りをする實質的社長、氏勿論凡庸の徒であるべきの謂がない。その識見豐富なるは比類なく、長い事業經歷の豊かな體驗に潤色されて潤達磊落な風格を型造つてゐる。

阪和電氣鐵道・専務取締役

平松憲夫氏

時局下に於て統制が益々強化され、電氣鐵道事業經營にも多少の難色が加はりつゝある今日と雖も、平松氏の如き強靱性の人物の存在することは、阪和電氣鐵道株式會社の前途に一脈の力強い光芒を添へるものである。氏は新潟縣人にして明治二十一年に呱呱の聲を揚げた。明治四十四年東京帝大法科を卒業後大阪商船會社に入り實業界への瀾踏みをした。素より眞摯なる平松氏のことではあり、いさゝかの齟齬を來たすこともなく漸次昇進して次第にその存在に輝きを増すやうになつた。斯くして氏の存在も大阪商船の中堅人物として次第に重きを加へるに至り、移り變る星霜と共にその快腕はいよ／＼牙をを示すに及んだが、大正十五年惜しまるゝうちに之を辭し阪和電氣鐵道に入社したもので、現に同社専務取締役の樞位に在ると共に更に餘力を以て信太山ゴルフ株式會社代表取締役、其他數會社の重役を兼てその手腕將に潑刺たるものがある。したがつて今後に大きな期待が懸けられつゝある事も云はずもなである。

弘中商工・社長

弘中良一氏

朝鮮に於ける製作界、鑛業界に明星の如き燦たる光芒を放ちつゝある偉材にわが弘中良一氏がある。氏は現在弘中商工、佐藤機械製作所各社長、並に東邦鑛業専務取締役に任じてゐるが、氏こそはまさしく在牛島者として一篇の立志傳を綴つた偉傑と云ふべきであらう。氏は明治二十二年八月静岡縣人大須賀氏の息として誕生し、後ち弘中家の養子となつた。夙に東京電氣學校を卒業したが、大志を立て、明治四十五年半島に渡り、獨力を以つて電氣機械製作修理工場を經營するに至り、後には弘中商店を興して電氣機械製作修理工場を經營するに至り、後にはは之が社長たり、また株式に改組して弘中商工となし現在は社長の椅子に就き、鳳翼を伸ばして製作、鑛業界に雄飛するに至つた。しかし斯くの如く今日の大成を爲す迄の氏の閉歴は、血と汗ににじんだ奮闘が續けられて來たものである。氏はまた先には慶應電氣専務、九龍浦電氣社長等に任じて噴々たる聲名があつた。氏は本年五十二歳、男盛り働き盛りの氏への待望は大きい。

廣海商事・社長

廣海二三郎氏

わが廣海二三郎氏は關西及び日本海運界に明星の如く燦たる光輝を放ちつゝある副將であるが、また正廣海商事は、海運業の錚々として北は石川縣を中心とする日本海、南は大阪を中心とする瀬戸内海に鳴り渡つてゐるが、氏はまた大阪商船、共同火災保險、大日本火災海上保險各監査役としても令名高きものがある。廣海家は石川縣の士族で、文化年間から海運業を營む舊家であるが、先代二三郎氏は大阪に出て廣海商事を興して業務を擴張し、また貴族院議員、農商工高等會議員等に擧げられ、且つ日露役の功に依り勳四等に、昭和の御大典の際には公共事業盡瘁の功に依り勳三等に叙せられた名士である。氏は先代の長男として明治二十七年四月誕生、昭和四年家督相続と共に前名四郎を改め襲名した。大正六年慶大理財科を卒業し祖業を繼いだが、現在石川縣多額納稅者に列して居り、先には紺綬褒章並に同飾版二個を賜はるの光榮に浴してゐる。

昭和精機工業・社長

廣澤耕作氏

わが廣澤耕作氏は關西實業界の長老格として赫々たる聲名を馳せつゝある巨豪である。氏は現在昭和精機工業社長として名采配を揮ひ、精密製作界に鳴らしてゐるが、また若手鑛業、大阪石膏各取締役たる他、勝浦索道、新興産業、東洋毛織工業、日本整毛工業各監査役に任じて、鑛業、索道、毛織界にも活躍してゐる。氏は明治九年九月大阪府士族廣澤好方氏の二男として誕生したが、同二十三年同府士族たる先代泰氏の養子となり、同三十九年養父退隱の後を承けて家督を相続した。流石に武家の出だけに、氏は日本主義に徹した典型的な愛國者であり、その高潔なる人格と情味厚き恩情主義とはよく部下を心服せしめてゐるから氏の關係事業はその何れもが、時局下といふ天の利、地の利に加へて人の和を得、隆々たる盛運を辿り、業界を羨望せざる業績を擧げつゝある。氏は本年とつて六十七歳、古稀に近づきつゝあるが、なほ壯者を凌ぐ健康體であり、好令夫人との間には四男一子の子寶もある幸福な家庭の慈父である。

廣澤製作所・社長

廣澤二郎氏

わが廣澤二郎氏は帝都製作界一方の雄として光彩陸難たる存在を示しつゝある逸材である。即ち氏は現在廣澤製作所社長として電機製造に専心しつゝあるが、氏が今日の大成をなす迄には文字通りに粉骨碎身の苦闘時代を経て來てゐる。正に一篇の成功立志傳が綴られてゐる。氏は福岡縣士族たる廣澤廣氏の二男として明治十七年十月誕生したが、同四十一年電機學校を卒業して、吉村商店、虎谷各製作所に勤務し乍ら、幼年時代から打込んでゐた發明考案に没頭し、あらゆる艱難を克服して、大正元年以來實用新案登録をとること三十有餘種に達してゐる。斯くの如き驚異的な發明考案をなすことは常人の出來得ることではなく、如何に氏の頭腦と技術が天才的なものであるかは到底推計することが不可能である。氏はこれらの發明を携けて現在廣澤製作所の経営に當つてゐるのであるから、同社の特異性とその業績は斯界を眩目せしめつゝある。氏は猶ほ新發明の精進を怠らないが閑暇を得ては書畫、盆栽を楽しんでゐる。

北海製糖・常務取締役

廣瀨徳次郎氏

本邦製糖界は臺灣製糖會社を以て嚆矢とするであらう。次いで明糖、日糖の創設を見るや果然其の覇を競ふに至り業界は頗る活況を呈したものだ。我が北海製糖は三大會社に後れること若干、年然し其の資材工程に於て撰を異にし、當に前者を凌ぐんとする意氣に燃えて居る。北海製糖の驍將としての廣瀨徳次郎氏はその人物、經綸、識見、抱負、實力等各方面に於て斯界の偉傑たることは定評のある所、明治三十九年京都帝大工科醸造化學科を卒へ、神戸製糖技師長となり、歐米及南洋に糖業視察をなし、歸朝後帝國製糖に轉じ、神戸工場技師長、常務取締役を経て、現北海製糖常務に就任し、其の蘊蓄と造詣とを傾けて精勵し、眞に斯界の權威であり重鎮である。北海製糖發展史に特筆さるべき幾多の功績は又本邦製糖史の一頁を飾るに十二分である。氏は兵庫縣の出身で明治十二年出生、藤井忠藏氏の二男であるが、廣瀨家の養子となり、其の家督を相続し廣瀨姓を名乗つた。氏は現に五指に餘る會社の重役でもある。

朝鮮郵船・事務取締役

廣瀨博氏

廣瀨博氏は朝鮮郵船の現地重役として同社が實權を掌中に收め、大重の活躍をなしてゐる。由來朝鮮郵船は裏日本と大陸とを結ぶ重要な役割を持つ外、支那港津との交通運輸を一握する重大性があるので、其の現地に重役たる人物の選擇は、嚴重を極めたのである。勿論本邦第一流の人物でなくてはならない、氏は其の選に當り些かの危険もなく濺瀾たる才腕を揮ひ、半島切つての鑛業者である。沈着眞摯の温厚な態度は親愛の情溢れるものがあれども一度起れば剛毅果斷、勇往邁進何物をも恐れない底の性格であり、剛柔併せ持つ申分のない、當代の俊傑である。氏は朝鮮電氣工業、朝鮮運送各取締役として、半島財界の覇者であり、又次代の社長として呼聲が高い。氏は宮崎縣重山寛藏氏の三男にして、明治十八年九月出生、後廣瀨長康氏の養子となり、明治四十一年早大商科を卒業した英才であり、直ちに朝鮮郵船に入社した同社生え抜きの重役である。同社が氏に酬いる所決して厚きに失するものではない。

高田電池・代表取締役

廣山信夫氏

高田電池株式會社代表取締役たる廣山信夫氏は、日本電解製造所事務取締役、日本スバルマイト、國産輕銀工業各取締役、日本拓業會社監査役等の要職に任じ、帝都實業界に出色の存在を顯はれてゐる。氏は明治二十五年大阪廣山孫七氏の二男として生れ大正六年分家獨立した奮闘家である。氏は二男といふ關係から若冠にして志を立て、將來の大成を望んで上京し各所に於て刻苦し、傍ら夜間勉學をなし知能の向上を心掛けたのであつた。氏の熱烈な向學慾と不屈不撓の精進とは遂に初志を貫徹し、前記の如く業界重要な地位を獲得し有爲の人材として矚目せられるに至つた。氏は叙知明晰な頭腦を持ち、六官の敏なること驚く程であり従つて透視力に秀でてゐるので、其の企畫した事は外的に減多にないといふ非凡さがある。その上烈々たる奮闘力を以て事に當つた成果が今日の基幹となつたことは疑ひもない。年齢未だ五十に届かず實業人として眞價を發揮するのは今後に在り、洋々たる前途は氏の活動の好舞臺である。

東京製線・取締役

深澤鏡吉氏

氏は明治十年十月に、山梨縣士族、深澤光行氏の長男として出生した。現時氏は業界に於て、東京製線、東海鉛管各(株)取締役として錚々たる存在であるが、母校東京帝大で學んだのは、なんと文科西洋史學科であつたといふから、氏を知るほどの人、みな等しく驚嘆するところである。事、志と違ふとも、堂々實業界に進出して赫々の名聲を轟はれ、果敢なる闘將として評價せられるとすれば、なんの悔ゆるところあらうぞ、この道に専心して邁進する氏の一面に、その強き人爲の程が窺はれる。常に學究的な眞摯な態度と温情主義とをもつて業務に望み全社員より敬慕の的となつてゐるも好ましい。不屈なる負けじ魂の裏に涙あり、情味豊かで度量豁達、更に高邁なる情操の持ち主で、現代文化人として申し分なく、今後如何に数多くの關係各社を運轉し、指導してゆくかゞ各界の注視を集めてゐる。これこそ次代の統率者たる氏の將來に、大きく期待されるところのものであらう。

昭和タンカー・社長

福井敬三氏

福井敬三氏は業界の慧星的存在であると云つても決して過言ではあるまい。その實力に、貫祿に、堂々群雄刺戟の業界にあつて他を壓倒して猛進する逞しさが漲つてゐる。現時氏は、昭和タンカー株式會社社長として、また出光商會支配人として活躍してゐるが、兩社ともに信用絶大な優秀會社で、その名譽噴々としてゐる。氏は明治十九年三月生れ、山口縣の産で士族である。神戸高商を同四十二年に卒業して業界に身を投じたのであるが、幾許もなくして突如慧星の如く、大優秀會社の統率者として業界の一角に巨大な雄姿を現したので。今やその地盤は牢固として抜くべからざるものとなり、洋々たる前途を約束されるに至つたがこの飛躍も決して偶然ではなかつたのだ。將來の大飛躍を期して虎視眈々、そのチャンスをねらつて奮闘苦闘、遂に今日の大成を窺ち得たのであつて、凡ゆる角度から明日への準備を整へて待機してゐたと云つてよからう。この壯大な進出に期して俟つべきもまた頗る大きい所以である。

朝鮮石油・取締役

福島英朔氏

氏は財界といふよりは寧ろ朝鮮の事情通として廣く知られてゐる。現に平壤商工會議所會頭、朝鮮商工會議所副會頭等の任に在るが、流石に半島通として自他共に許す人だけに、此方面の事情には實に微に入り細を穿つと云つた風で、他人の追隨をも許さぬ一日の長を持つてゐる。氏は群馬縣の産、福島彌曾次郎氏の三男にして明治十八年十一月に誕生、後に前名莊平を改む。鑛業を營みつゝ更に朝鮮石油株式會社取締役を兼ねるに至つたもので、朝鮮經濟事情に通曉した幾度か場を踏んで經驗を加味してゐるだけに、今後氏の手腕に依頼するところのもの蓋し甚大であらう。氏の半島經濟界に於ける該博ぶりには何人も一驚を喫せしめられる。もとゞ氏は學究的肌合ひを持ち、一方の理論を引提げて立つにふさわしい英邁の資であるが、殊に最近の事變と共に朝鮮、支那通の簇生を見るべき氏の存在こそは實に泥中の白蓮とも云ふべく、大きな光りを放つてゐるその勇姿こそはまことに頼もしき限りと云はねばならぬ。

明治製菓・常務取締役

福島四一 郎氏

人物の揃つてゐる明治製菓株式会社
に常務取締役兼製菓部長、又川崎工場長として敏腕を揮ひ、経営首脳陣に其人ありと名を高めてゐるのが福島四一 郎氏である。氏は新潟縣の産、福島伊八氏の四男として明治二十年八月に誕生、大正八年令兄伊八氏より分家した。明治四十四年東京高等工業學校應用化學科を卒業後、明治製菓に入社、爾來同社と共に歩みをつけて來た所謂明治製菓生え抜きの人物で、製菓工務部長を経て昭和二年に取締役に選ばれ、更に現在の職を兼ねるに至つたもので、今や確固不拔の地歩を擁しつゝ同社経営の上に強力な一翼を成してゐることは云ふまでもない。在社永きに亘つてゐるので幾多の功績も多く、時流に處しての経営ぶりにも實にあざやかなものがある。氏は未だ五十を過ぐるに幾若ならず、男盛りともいふべき時代であるから、未だ〳〵今後に刮目して見るべきものが多々ある。氏こそ其経歴から云つても妙手から推測しても、明日の明治製菓を擔ふホープたるを疑はない。

富國徴兵保険・取締役

福島茂 富氏

氏は東京府人須田宜氏の令弟にあたり明治二十一年十一月に誕生、大正十一年先代りやう子氏の養子となり大正十二年に家督を相続した。夙に日本麥酒醸造株式會社に入り經理課長兼庶務課長として縦横に手腕を駆使してゐたが、やがて富國徴兵保險相互會社に轉じて第一部長となり取締役にあげられた。氏は情誼に厚く資性温厚なれども事業に對しては、溢るゝが如き熱情を有し信用第一主義は精勵格闘と共に、遂年事業の發展を示すに至りその抱負は著々と實現しつゝある。即ち精養軒、日本洗染各株式會社社長、横山工業所取締役會會長、日本土地證券、日本精器、後樂園スタヂアム、朝鮮機械製作所等々其他十指にあまる諸會社の重役を兼て、盡きることなき精力を傾注しつゝ力強く推進力をなしてゐる。而も終始一貫、事業界に活躍してゐるので経験も豊富であり、諸種の事情にも通じてゐるから實務各範の指導統率に最も得意としてゐる。氏の快腕に抱擁さるゝ諸會社が好成績を示してゐるのも蓋し當然の事と云へよう。

福谷商店・専務取締役

福谷藤一 郎氏

愛知縣福谷藤七氏の二男、同榮七氏の甥にして明治三十一年九月日出生す、大正十一年東京帝國大學經濟學部を卒業す、現に福谷商店専務取締役にして其他會社の重役を兼ね利益なれば村正の名刀の様に切れのいゝ手腕を見せてゐる。氏は自ら陣頭に立つて早出晩退にも時を惜んで新知識の蘊蓄を養ひ、その博識なるには驚嘆すべきものがある。氏は學界の名門東京帝國大學經濟學部の學生時代よりその明敏をうたはれてゐたのである。氏の豪氣な性格と才腕と緻密な頭腦から溢れる種々の新機軸は、百發中の感を呈して圓滿に運行されて行くのである。氏は今や中京財界の大御所として君臨してゐるが、現在の地位を獲得するまでには幾多の困難も伴つたにも拘らず、それに坐折せずして勇往邁進した氏こそ現下非常時局の一翼を擔ふ人材として賞揚を惜しまざるものであると共に、東亞建設の段階に於いて一翼の戦士として、より一層の業界發展に腐心せられんことは、筆者のみの願望ではない。宜敷自重自愛以て奮起を希ふ次第である。

竹中工務店・常務取締役

福本常太 郎氏

氏は明治十五年十月に東京府士族福本權太郎氏の長男として生れ大正三年に家督を相続したのである。夙に株式會社竹中工務店に入社して辣腕を揮ひ、東京支店支配人を経て同社常務取締役に選ばれ、東京支店を統率して名聲噴々たるものがある。竹中工務店は帝都隨一を誇る建築界の權威だが近時大陸への進出が頗る目覚ましい。こゝにあつて常務たる福本氏、よく當社の業績發展に邁進してたゆまざる努力を續け、最早同社にとつてはなくてはならぬ中心的存在となつた。霸氣もあり、識見も豊かな氏の手腕力量は近來大に伸び、加ふるに素晴らしい牙えをみせて縦横無盡の奮戦ぶり、社業を固めるための大きい礎石となつてゐるのも力強い限りのものだ。體軀堂々、時局認識も確かなる錚々たる器である氏が、今や吾國建築界の先驅をつとめる竹中工務店の全責任を背負ひ、堂々大陸へ海外へ雄飛するであらうことは間違ひのない事實だ。而してこの健腕の士の今後を強く期待して止まぬ次第である。

福田又商店・社長

福田台三 氏

岐阜縣三輪徳助の三男にして明治十五年六月出生、大阪府福田又兵衛の養子となり、同四十年分家す。現時福田又商店代表取締役の外前記會社の重役として手腕を振つてゐる。氏が波瀾する五十年の人生を泳いで今日を築いたのは實に驚嘆すべきものであり、氏の意志の強き事業に對する眞摯なる態度を物語るものである。氏の今日の榮は時勢を達觀し而も敢然精神な迫力を以て、事業上の自信を押し通したのによつて云つても差支へがない。その頑丈な體軀鋼鐵の如く張切つた顔、一文字の口と澄徹した眼、ゴツ／＼した手に自らハンマーを握つて第一線に立ち采配を揮ふ風爽たる氏である。氏の風采、そは社長や取締役たるよりも一個の町工場の主人公と云つた方がピッタリと來る程精勵格闘の士であることは敢て萬言を要しない。氏の今後に於ける斯界の活躍こそは目醒しきものと斷じては決して早計ではないと思ふ。既に初老であると思つても、その熱意は壯者のそれを尤に凌ぐ程である。

西部電氣工業所・主

福田稔 氏

福岡縣福田心一郎の長男にして明治十七年十月出生す、同四十四年家督を相続す。同四十年東京高工電氣科を卒業し、現時西部電氣工業所と稱し、電氣機械修理業に萬全の企圖を遂げてゐる。氏と事業家、實業家といふよりも物事を學究的に究明する方の人である。現在氏が關係する全事業に對して緻密なる頭腦を有する事を以つて立證が出来る者には廣言したい。我利に彼にして他を顧るの暇なき輩の多き事業界にあつて、公共のために盡力を惜まぬのはこの一面學究的良心から由來するものである。現在氏が西部財界の重鎮として重視され、よくその成果をさめつゝあるのもかゝつてこの爲であると斷言して憚らない。其の嚴格な家庭に嚴格な薫陶を受けた氏はすでに幼少より天稟の氣質を有し、今日在るも亦自明の理である譯で、長ずるに及んでは學理を實踐に移し一層の光彩を添へて今日の地位を獲得し、前途洋々たる企畫を擁して、發展街道へ一路奮進してゐる偉材である。時局益々多端の秋、更に自愛奮闘を希ふも切。

藤井化學工業・代表社員

藤井榮三 郎氏

氏は東京府士族藤井長平氏の長男にして、慶應元年十一月に誕生し、明治十七年に家督を相続した。幼少の頃より天稟の夙きがあり、その智能は長ずるに及んで益々發揮されてきた。氏が今日まで幾多の艱苦に耐えてきたのもその眉宇に溢れてゐる負けじ魂の賜物である。氏は極めて信念の強い人である。性格が眞直で所謂正義派型の人であるから、常に明朗で居て、俯仰天地に恥ぢざる行動に終始してゐる。俊敏なる氏は自ら事業の精進ともいふべきものを體得してゐるのである。したがつて氏は大膽卒直に事業の核心を掴んで進んで行くのである。人生自ら道あり事業には必らず核心がある。人生街道を外れず、事業の核心を掴んで勇往邁進したところに、氏の大成が醸し出されたのである。氏は高邁なる人格と共に事業的良心を併有して居り、常に進取的に事に處して行く底の人である。多忙の身にも拘はらず絶えず研鑽を續けて斯業の發達に努力しつゝある熱意に對しても吾人は滿腔の敬意を表せざるを得ないのである。

日本光學工業・取締役

藤井光 藏氏

藤井光藏氏の文化的聲名は實に歴史的だ。氏は明治十二年の生れ、同十二年に東京帝國大學工學部應用化學科を卒業し、現時日本光學工業、東亞セメント各(株)取締役に及ぶ拔群なる成績で卒業し、現時日本光學工業、東亞セメント各(株)取締役に及ぶ浅野セメント取締役に兼研究所長、大同洋灰公司董事等として時局下産業界の最前線に勇躍してゐるが、氏はまた大阪帝國大學の講師でもある。氏の過去に於ける燦たる歴史を回顧する時、その國家的功績貢獻の偉大さには敬服せざるを得ない。曩の世界大戰の際には聯合軍に光學兵器供給といふ重大使命を帯びて歐洲に滞在し大いに功勞あつたが、その後歐米のセメント業視察の爲渡歐、大正十四年には再び高級セメント工業研究の爲獨逸に留學、昭和七年にも同目的の爲に米國を巡遊して、多大の貢獻をなしたが、氏こそ正に我國セメント工業のオーソリテイであると共に、斯業發展史の大恩人であらう。尙特殊セメント國際委員日本代表として萬丈の氣を吐き、萬國工業會議並大塚堤會議では論文を發表し斯界に大センセーションを捲き起した。

日本メリヤス・社長

藤井善助氏

氏は滋賀縣藤井周次氏の長男で明治六年生れ、同三十六年に家督を相続し前名善三郎を改名した。夙に京都市立商業を卒業して著々塾に學び、後實業界に身を投じたが、朝鮮支那歐米を巡歴したことあり洵高德の人として知られてゐる。又夙に村長に推され村民の爲に献身的努力を惜しまず働いたが、今此處に氏の爲を窺ひ得る一端として同氏主宰の公共事業の數々を挙げてみると、財團法人憲章社、藤井齊成會、郡立商業學校等あり、尙滋賀縣好善會副會長として免因事業に従ひ、國民のよき指導者として只管地方子弟の教養に努めてゐる。會て明治四十一年以來滋賀縣郡より推されて衆議院議員に當選すること三回、大正三四年事件の功に依り勳四等に叙せられ瑞寶章を賜つた。氏は亦事業界にも赫々たる名聲あり、現時、日本メリヤス、日本土地商事、永源寺自動車、八日市鐵道各(株)社長、日本ビロード、京都電燈、島津製作所、琵琶ホテル、關西不動産各(株)取締役等々數多會社の重役として注目的となつてゐる。

藤井商店・社長

藤井忠兵衛氏

神戸商工會議所議員藤井忠兵衛氏は神戸經濟界の中堅メムバーの第一人者である。藤井家は古くより神戸市に住し代々醬油醸造業を営む家柄である。先代忠兵衛氏は先見の明あり、明治二十六年に神戸取引所證券米穀取引員となり、有價證券現物問屋を兼營したが、之が當つてトク／＼と拍子打ち名聲を馳せるに至つた。氏は其の長男で明治二十五年生れ前名長之助を改名、夙に姫路中學校を卒業し父祖傳來の地に實業家として起ち上つたのである。神戸絹絲市場創立と共に絹絲問屋を經營、時流に乗つて活況を呈し頗る業績を挙げたが、昭和三年には絹絲取引所を設置、續いて同八年には株式會社藤井商店を創立、自ら社長に任じて専ら社務に精勵してゐる。氏の前進振りは實に目覺しき限りで、その辣腕は時流を見透す遠見と相俟つて俄然飛躍、現時熱河産金、丸登商店各(株)取締役、日本經濟新聞、柴田自動車、康徳興業各(株)監査役と文字通り八面六臂の活躍振りを示し、機略に富んだ眞の大家、前途を囑望されてゐる。

福山電氣・社長

藤井與一右衛門氏

福山市深津町の舊家藤井家は多田滿仲の後裔藤井藏右衛門廣長を初代としてゐる。三代廣政は農に歸し今を距る三百餘年前、福山藩創設に際して藩主の徵に因り深津村より福山に移り藩の特許を得て鐵及び鹽を專賣した。仍て町名を深津町と稱し屋號を鐵屋と名づけて代々農業製鹽業及酒造業を營んでゐる。現當主與一右衛門氏は先代の長男にして明治十九年六月に出生。同三十一年に家督を相続前名裕吉を改名した。同四十二年に早稻田大學商科を卒業し業界にスタートを切つたが、夙に廣島縣多額納稅者に列し昭興信の重役でもある。現時は福山電氣中國化學工業、帝國漁網各社長、日本木材工業代表取締役として俊才を發揮してゐるが、終始一貫の努力も堅實で押し通して來た人物だけにその徳望亦絶大である。穩健にして豊かな情味をたゞへ、堅實にして矯激に奔る事のない氏の人格は、接する者を一種の柔かさ包む。事業的にも人間的にも、大きく鍛えられ洗練された氏の今後こそ期待さるべきであらう。

日本クロス工業・常務取締役

藤永太一氏

沈勇剛膽に加へて學殖深く經營的手腕亦卓越せる藤永氏が、事業界に在つて潑瀾氣鋭の大號令を行ひつゝあるのも敢て奇とするには足らない。今や日本クロス工業株式會社常務取締役の執權臺に噴々の名聲を馳せて、類ひなき智將と仰がれつゝあるのも、顧みれば幾多の辛酸を嘗めて來た賜物である。その快腕は今や同社をして洋々たる發展が期待せられるの状態にまで成長させ、更に各部所共の擴張並びに増産に大車輪であるとともに、確固不拔の業容はいよ／＼磐石の堅さを増し、外廊の擴がる一方に導いたのも結局するところは、同社を存負つて起つ氏の健闘にほかならないのである。したがつて今後の同社を何處まで大きく育て上げるか、まことに刮目に値する大きな興味で、氏たるものおのづから勇奮を禁じ得ないものがあらう。氏は山口縣の産にして苗字帯刀を許された藤永喜一氏の長男として明治二十年十一月に誕生、大正九年に家督を相続した。夙に山口高等商業學校を卒業した俊秀である。

藤井商店・社長

藤井彦四郎氏

氏は吾が國に人稱を初めて紹介した功勞者である。滋賀縣の人藤井周次氏の二男で、同善助氏の實弟、明治九年九月に出生した。同十年に分家し前名磯松を改名す。藤井兄弟は嚴父周次氏の薫陶よろしきを得て何れ劣らぬ人格者揃ひ、彦四郎氏は現時大阪商工會議所議員にして藤井商店(株)社長、又共同毛絲紡績(株)代表取締役、五光商會、日本フェルム工業各(株)取締役を兼ね、業界のホープとして頗る名聲が高い。氏は始め絹商を營んでゐたが、新地開拓の意氣に燃え研究を積んだ結果、人造絹絲を初めて本邦に輸入、斯界に一大エボツクを劃したのである。大正七年に歐亞通商會社を興しその社長となつたが、後に藤井商店と改稱し引續きその社長として實權を握り社業の發展の爲に力闘を續けてゐる。敏腕の開え高く、多大の有望あり、夙に京都商工會議所議員であつた頃、商工省嘱託員として歐米各國を視察、吾が國産業界の爲に勤からぬ貢献をなした。資性潤達にして情味あり氏こそ正に頭と腕の實業家と云へる。

藤井満彦商店・代表社員

藤井満彦氏

本邦財界の人物を論ずるに夙に財界に巨委を轉じて機略縱横、高邁なる人格と秀拔異色ある手腕とを謳はれた藤井満彦氏を看過することは出来ない。氏は岐阜縣淺岡忠氏の六男にして明治十五年生れ、藤井家の養子となつた人で、幼少にして實業家たらんと志したが、その銳意研鑽機ゆまさる奮闘はよく今日の大成就を至し、確固たる地盤を築いた正に立志傳中の人物とも云ふべき偉材。氏は未だ働き盛り、人格手腕共に圓熟の境地に到達せる關西財界の長老にして大阪商工會議所常議員現時藤井満彦商店と稱して貿易商を營み、同社代表社員であるが、この外大同酸素取締役社長、大原造船鐵工所、神東興産各取締役、尾武商店、白濱温泉土地俱樂部各監査役等を兼ね、また關西漂白工場を經營大勢力を有してゐる。その良心的經營法は見事功を奏し、各會社共に賑々として成長發展を續け良好なる業績を挙げつゝあるが、これもみな氏の人格が事業に反映せるもので財界逸材多しと雖も氏こそ眞の異彩と云ふ可きであらう。

藤野鑛業・社長

藤野勝太郎氏

年齢未だ不惑に達せざるに事業界の新星として藤野勝太郎氏の雷名は單に地元の大坂のみに止まらず、俊秀新銳の鬼才は何處まで風翼を張ると明日の飛躍を待望せられつゝ業界舉げての注視を浴びてゐる。氏は大阪府人藤野龜之助氏の長男にして明治三十六年八月に誕生し大正九年に家督を相続した。大正十三年大阪高等商業學校卒業後直ちに商業研究の爲に渡米し翌年歸朝と共に實業界に入り、現に藤野鑛業株式會社社長を筆頭にトヨダ自動車工業株式會社取締役、豊田紡績、上海豊田紡織廠等々、其他の重役を兼ね青年實業家にふさわしき潑瀾たる意氣をもつて進撃また進撃しつゝ、今や確固不拔の一大鐵城を築き上げ斯界の古豪に肩を摩するの壯觀を展開せしめてゐる。こゝに於てか想ひ浮ぶのが氏の父君龜之助氏の面影である。嘗ては三井物産會社大阪支店長として名支店長振りを發揮し、大阪財界一方の雄將と謳はれたゞけに、その遺陶も卓越してゐたことは御曹子たる氏の榮達がよく物語つてくれる。

防石鐵道・社長

藤野七藏氏

廣島財界の重鎮であり有数の幾多會社に號令する優秀なる實業家として縣下は勿論、近縣一圓に盛名あまねき存在をなすは藤野七藏氏である。而も齡ひ五十の半ばであつてみれば實業家としては寧ろ今後こそ、本格的に圓熟練達の力量を發揮すべく、郷黨の面々が氏に期待するところいよ／＼大なるのも、まことに當然至極のこと、云はなければならぬ。氏は廣島縣人藤野勇八氏の四男にして明治十八年七月に誕生し大正二年に分家した。夙に實業界制覇を志して刻苦精勵、情事を凌ぐ手腕と事業經營運の才とはぐん／＼地方業界の最前線へと乗り出すに至り、今や防石鐵道株式會社社長を始めとして藤野製綿株式會社代表取締役、廣島瓦斯電軌、廣島乗合自動車各株式會社取締役、藤野合名會社代表社員等の任にあつて勢威をいよ／＼加へしめつゝあるほか、更に廣島商工會議所議員、廣島無線、及び日本無線等各工業組合理事長としても、絶妙なる采配と相俟つて隆々斯界に冠たる地歩を築きつゝある。

平和土地・社長

藤野平次郎氏

關西實業界に臨んで新進の名に背かず、活躍をほし、いよいよにして新界の目的となりつゝあるのが藤野平次郎氏である。事業經營の手腕力量に富むことは云はずもがな、更に朝氣満々の氏は時局事業界へも駒を進め大日本輕合金、高崎マダネシウム工業各株式會社々長並びに藤野鑛業株式會社専務取締役等を兼て凡ゆる部門に向つて猛然と突進を試みつゝある。氏は大阪府人藤野龜之助氏の二男にして明治三十八年十二月に誕生した。大正十五年大阪高等商業學校卒業後日本住宅會社に入り經理課長を経て、平和土地株式會社々長に就任したもので、今やその貫祿の偉大さが加はると共に、時局事業界の第一線にも起つて及んで、その抱負もいよいよ完成期に近づきつゝあるかの感を催さしめるのである。而も春秋に富む氏は今後一層事業界の各方面に馳騁して、縦横に智略を發揮することは必定で、それと共に益々輝やかしい成果を把握するに至ることも、氏の日常を知る者の何人も信じて疑はざるところであらう。

臺灣製糖・神戸製糖所長

藤卷定吉氏

氏は山梨縣の産、藤卷留吉氏の長男にして明治十六年二月に誕生し大正二年に家督を相続した。明治三十九年大阪高等工業學校機械科を卒業後内外紡績會社に入り、次いで同四十二年臺灣製糖株式會社に轉じたもので、工務部長を経て今や同社神戸製糖所々長の重任に在り、森永食品工業株式會社取締役を兼て賑々たる活氣を、業容の上を盛り上らせた非凡の才腕を顯はれつゝある。したがつて業界にも大きな功績を残して來てゐるが、氏はそれをすこしも誇らうとはしない。寡黙であり常に謙讓な態度を示しつゝある氏のことだからだ。氏の清廉潔白はやがて富貴にも威武にも屈せざる烈々たる氣魄を醸するに至り、それと共に秀でたその智略は同社に對して最早絶對不可缺の重要存在をなしてゐる。氏は常に時局を遠觀してゐる。時流には尖鋭メスの如き觀察力と批判力とを有つてゐる。而してその事業的卓見は今日まで機に遭ひ、折に觸れて世に問はれて來たが、かゝる現實に即した抱負こそ實に近代業界の指導者と云へる。

大阪金屬精練・社長

船岡林之助氏

教育は頭細胞を改組するものではない。個人の天稟の最高度の進展を目指して行ふ所のものである。醫學を聯繫してより教育の功率を上げんとする企圖は此に存する。船岡林之助氏は俊敏な天稟を持ち、夙に和歌山縣粉河中學を卒へ、拔群の成績を誇られ、更に上級學園を望んだのであるが、事情は氏に幸しなかつた。氏は慨然として起ち實業界に入り、數ある先輩の下に隱忍持久、勤勉能く努め、其間勉學にも動めた。かくして社會的實相を究め得た氏は、工業界へ進出し製作界へ乗出した。固より明敏な氏は何物にも理解が速かつた。修養と研鑽とを積んだ氏は何時の間にか業界の一存在として認識され、現今大阪金屬精練社長たる他、日本木管専務取締役、不動建築監査役として大阪財界の一角を占めて居る。氏は和歌山縣船岡常太郎氏の長男として明治二十年五月出生、文久二年出生の父常太郎氏尙健在にして其の孝養の厚きこと四隣の感嘆措かざるもありといふ。實に業界異數の存在である。

日本クローム工業・社長

船越作一郎氏

事業界が斯くも活潑な動きを見せ、津々浦々に至るまで大小無数の工場が創建され、躍進日本の偉容を示すことは、興亞の聖業完成への第一段階として洵に慶賀に堪えざる事である。然して我がクローム工業が歐米諸國に後ること多年、頗る寂寞の感があつたが最近十年間に擡頭し、疾風の勢ひでひた押しに押し進むて來た事は、科學日本、工業日本、技術日本を表現するに十分である。北陸に於ける日本クローム會社は、船越作一郎氏の主宰する所で、本邦に於ても有数の該工業會社として知られて居る。氏は新興のクローム工業經營の任を果す爲め、東西に傳手を求めて飽くなき研究をなし、精練の妙技を體得する迄には、全く寢食を忘れ嘗膽の苦を繰返した。日本クローム工業の今日の盛業は、凡てが氏の苦心の結晶である。氏は鳥取縣船越熊治郎氏の長男で明治十八年の出生、同四十二年家督を繼ぎ、現在鳥取縣多額納稅者に列し、郷里米子市は勿論近郷に信望の厚い濃厚な紳士であり、實業家として將來ある人物である。

龍運汽船・常務取締役

船越申二郎氏

凡そ海運業者は二つの重點に要約せられる、即ち一つは遠洋航海で世界を跨りかけて通商貿易に資するもので、最近此の方面の各國の大船建造主義的傾向は特に著しいものがある。今一つは近海航路を擔ふもので是亦近時優良船舶建造の勢ひにある。この二つは海運界の兩翼として其の一つを缺くことは出来ない。各々特殊な立場に立つて活動面を異にして居るからである。我が龍運汽船會社の職とする所は後者に屬し現下の如き非常時に際しては重大な職能が課せられて居る。常務船越氏は此の道にかけての重鎮として定評のある人物で、日産汽船、日本汽船にも取締役として運營の局に當つて居る。眞摯な勤勉な實力ある士である。氏の長い船上生活は刻苦奮闘の歴史であつた丈に、體験と信念とを得て業界に傑たる存在を示すに至つた。山口縣船越雄氏の四男として明治二十九年に生れ、後兵庫縣士族船越家に養子となつたが、斯業界に於ては稀に見る少壯者であり、眞の活躍期は之からである。前途の大成を待望する。

汽車製造・常務取締役

船越要之助氏

汽車製造株式會社常務取締役船越要之助氏は、永年準官僚生活をした人物とも思へぬ明達識識の士で、其の手腕力倆は宛轉自在なものが、阪神財界に花形的存在を示して居る。氏は明治三十九年東京帝大工科機械科を卒業し、直ちに滿鐵に入り其の人物を認められ、大正三年青島守備軍鐵道部に派遣を命ぜられ、精勵能く任務を完了し功によつて従五位勳五等に叙せられ滿鐵に居る事多年、其の功績も多し將來に望みを囁かれたが之を辭し汽車製造會社に轉じたのが昭和六年、同八年營業課長に昇任、次いで常務取締役に推され滿洲車輛會社取締役をも兼ねて居る實業界に異色ある士として尊敬を拂はれて居る。明治十三年の生れで愛媛縣船越健一郎氏の長男である。由來四國の人は、素朴の中に滋味を持つといふ。氏亦眞摯素朴であつて、才に矯らず知に銜はず、實踐躬行、徳を以て人を率ゆる底の士であるが、猛然起れば鬼神も及ばざる慨があるといふ。人を識るには先づ自己を識るより大なるはない。有徳の財界人である。

帝國鑛業開發・副社長

古市六三氏

正五位男爵古市六三氏は、明治四十八年、米、英、南米、南阿の鑛業を視察して歸朝したる鑛業界の權威として周知である。氏は夙に住友財閥の懇請により其の經營事業に参加し、住友別子鑛業所探鑛課長、住友合資技師長を経て住友炭鑛の常務取締役となり、昭和十二年六月、帝國鑛業開發會社社長として就任したのである。氏の始祖は姫路藩の藩士であり先考公威氏は大學南校を卒へ佛國に留學し、歸朝後東大教授或は高級官吏として國家の爲め盡瘁したる功績により男爵を授けられ、第一期貴族院議員及樞密顧問官の要職に在つて奉公の誠を致したる國士である。氏はその長子として明治十八年出生し、昭和九年相續襲爵した。氏は名門の出身にも拘らず、實業家としての實力才幹は堂々たるものがあり、現在住友財閥の鷹翼として阪神業界に出藍の名を顯はれてゐる。頽愴萎靡徒らに榮爵に甘へる貴族社會の儀表として推賞の辭を惜しまない。時局は人材を要望するの秋、健闘を切に祈る。

第一倉庫・専務取締役

古川藤三郎氏

第一倉庫會社専務取締役たる古川藤三郎氏は又古川製紙會社の専務として活躍する少壯有爲の實業家である。明治二十八年京都市古川源三郎氏の長嗣子として出生、第三高等學校を卒業した駿足として出色の名を顯はれ、京洛業界の將來を擔ふべき逸材である。父源三郎氏夙に實業界に進出現在は第一倉庫、古川製紙社長として業界に重きをなしてゐる。藤三郎氏は嚴父の開發せる地磐に據つて實際的方面を司掌して經營の陣を張り、南船北馬して社運の發展に活躍奮戦、顯著な業績を擧げてゐる。現下の製紙業は國策たる統制網の中にあつて、一面的に觀察すれば操業の自由が束縛された形であるが、業者登録によつて營業を確認せられ、産業構成組織の内に織込まれた點から見て絶對的な保證が與られたのであつて、事業繼續上何等懸念がないのは心強い限りである。氏が時局に直面し統制經濟機構の試練を経ることは、再び繰返さるゝ事のないであらう最もよい經驗であると言へる。將來の飛躍に大きな期待を持つものである。

東洋海運・社長

古川 脩三郎氏

東洋海運株式會社々長古川脩三郎氏は、明治三十八年東京高商卒業以來財閥の雄三井物産會社に入り、約四十年同社の礎石となつて奮闘し、現時同物産の取締役として第一線に活動し堂々として財界に君臨する偉丈夫である。氏は愛媛縣古川新作氏の實弟で明治十四年十月出生、明治三十八年東京高商卒業三井物産に入り、精勵よく社業發展に盡瘁し累進して船舶部長に任せられ、次いで取締役に選ばれたのであるが、氏が同物産に捧げたる殉職的犧牲的奮闘は大きな貢獻であつて、同社發展史を飾るに十分であらう。氏は曩に大正九年ゼノアに開催せられた國際聯盟海員労働會議に出席し歸途歐米各地を巡歴し、世界海運界の動向を視察して歸朝した。尙現時日本海運集會所會長代理に就任し、我が海運業の權威として許されて居る長老格の存在として熾たる地位にある。來るべき世界新秩序の建設に際せば、我が海運業に一轉機を招來すべきことは必然の數である。實力ある經營者指導者を要する事を俟たない自愛を切望する。

名古屋棧橋倉庫・社長

古島 安二氏

氏は明治十五年一月新潟縣山崎正八氏の二男として生れたが、後山崎理策氏の養子となり、同四十年家督を繼いだ人である。曩に明治三十八年早大専門部政治經濟科を卒業し、大藏省の官吏に就任したが、後名古屋銀行集會所書記となる。之が氏の實業界進出の導火線となり、矢作水力會社に推選せられ、累進して支配人となつたのである。新潟縣人特有の意志力で根限り働くといふ性格で實績は目立つて擧つて行つた。官吏生活をしたにも似ず恬淡率直であつて簡明を主義とする氏は常に明朗に活躍して成否の機会を巧に攫むで發展に資した。其の鮮かな手腕は實に追従を許さぬ獨自的なもので感嘆に價する。かくて氏は漸次に成功して名古屋棧橋倉庫に轉じ現に社長として采配してゐる外、矢作開墾、岐阜自動車各専務、伊豆水電、阿津川電力、新潟電力、田澤湖電力、長浦梅園土地各取締役、三信鐵道、矢作索道各監査役として地方財界の大きな存在をなしてゐる。氏は文學的趣味に生き其の造詣も亦深いといふ。

明石土地商工・社長

古谷 脩一氏

兵庫縣政財界のベテランとして颯爽たる勇姿を第一線上にクロームアツプしてゐるわが古谷脩一氏は、本年とつて四十五歳の青壯者であるが、流石に武士の血を承けてゐるだけに、その敏銳なる活動振りは斷然凡百を壓するの概あり、洋々たる將來の大成長は刮目すべきものがある。氏は現在明石市會議員に擧げられてゐるが、新時代の認識に徹した氏が、その偉大なる理想を發現すべく、中央に乗り出すことを切に期待して止まない。實業界に於ける氏は、明石土地商工社長として名采配を揮つてゐるが、また遠く驍手を半島に伸ばして、南朝鮮合同電氣社長たり、且つ朝鮮電力取締役、錦江ホテル代表者に任じて居り、先には大田電氣江景電氣、忠州電氣各社長として南朝鮮電力開發の爲めに盡瘁するところ多大なるものがあつた。氏は兵庫縣士族古谷虎雄氏の長男として明治二十九年十一月の誕生で、後ち家督を相續した。大正十三年早大商業部を卒業して實業界に入り、寧日なき奮闘を續け乍ら今日に及んでゐる。

興眞牛乳・社長

古谷 精一氏

消費都市として内地人口の一割餘、七百萬人と云ふ驚くべき頭數を描へてゐるだけに、わが大東京の牛乳需要高は老大な額を示してゐて、その供給は近郊、近縣は素より、遠く北海道邊りからも移入されて居り、その供給會社は數十百を數へる程あるが、眞に信用置けるものは恐らく十指を越へないであらう。その中でもわが興眞牛乳會社は斷然頭角を抜いた信用を拍してゐるが、これは同社が、優良無比なる牛乳と完全無缺なる最良の設備とを有してゐるからで、その上に古い暖簾が物を言つて帝都第一の配給額を獲得したものである。同社々長たる古谷精一氏は明治十二年四月の誕生で、千葉縣人古谷友二氏の令弟であるが、同四十年分家して一家を立てた。夙に興眞舎本店と稱して牛乳商を営んだが、人格高潔にして事業に精勵な氏は、着々として斯界に堅實な地盤を築き上げ、今日の大を成したのであつた。猶ほ氏は大東京ミルクブランド同業組合長として名あり、また東京商工會議所議員も擧げられてゐる。

古莊合名・社長

古莊 健次郎氏

古莊合名會社、古莊土地會社に社長たる古莊健次郎氏は、熊本縣多額納稅者である。古莊合資は主として吳服を取扱ひ京都に支店を有し大規模に營業する同族會社であると言へる。氏は先考健次郎氏の二男で明治二十三年の出生、大正十五年家督相續と同時に前名清七を改めて襲名した。而して先代は健二と改名し退隱後も吳服商を営み之亦同縣に於ける多額納稅者であり、曩に熊本市商工會議所特別議員に推された有徳の士で今尙健在である。健次郎氏は此の遺業を承け全力を注いで社長たる兩會社の發展に活躍する傍ら金貨莫大小、大平貿易代表取締役、日清生命、日曹人絹バルブ、大阿蘇觀光道、三星會社各取締役、熊本電氣監査役に就任し熊本財界に王座的存在を示し信望名譽共に高く、叔父古莊伊三郎氏と協力し隆々たる發展を遂げつゝあるは洵に偉觀を呈して居る。穩健篤行の士であつて、地方産業に寄與する所多く、亦地方公共の爲め努力を惜まない實業界紳々の存在であると共に、現代的文化人として推賞を惜まぬ。

北海道炭礦汽船・取締役

古谷 金一郎氏

北海道炭礦汽船は大三井系の大炭山で本邦斯界に覇を稱へてゐるが、わが古谷金一郎氏は同社取締役兼支店長事務取扱として北海道に在り、同社の現地事業の一切に名采配を揮つてゐる強豪であり、その輝かしき聲名は斯界のベテランとして夙に響き渡つてゐる。氏はまた同社を中心とする北海道に於ける諸事業に關聯し、夕張製作所社長たる他、車輓内炭礦、北海道炭業、北海道林業、室蘭電燈、夕張鐵道各取締役、天鹽鐵道監査役に任じてゐるが、之等の諸社は何れも大三井の息が掛つてゐるだけに、業礎は堅實無比であり、加へて氏の超凡の指導下にあるから隆々たる業績を示しつゝある。氏は明治十九年四月茨城縣人たる古谷與三郎氏の長男として生誕したが、大正四年先代の後を承けて家督を相續した。先是明治四十四年東大工科探鑛冶金科を卒業して、北海道炭礦汽船に入り、幌内、萬字、夕張各礦長、北海道支店次長、同支店長を歴任して昭和十二年現職に擧げられた。猶ほ氏は昭和十年には歐米を視察して來てゐる。

宇野鐵工所・専務取締役

古屋 了氏

わが古屋了氏は帝都製作界一方の雄として明星の如き燦たる光芒を發しつゝある逸材であるが、氏はまた技術家として卓越せる頭腦の所有者であり、その天才的技術的考案は幾多の特殊な發明を産み出して、メーカー界に貢獻するところ大なるものがある。氏は現在宇野鐵工所専務取締役として名采配を揮つてゐるが、同社は斯界でも特に優秀なる技術を有してゐて、その製品は絶對的信用を拍してゐるが、之れは全く氏の眞摯なる技術的指導宜しきを得てゐるからで、氏の如き有爲の士が斯界に在ることには、たゞに同社の強味ばかりではなく、東亞再建の理想を有つて躍進途上にある本邦産業にとつてもまた心強き限りである。氏は明治二十六年四月の誕生で熊本縣士族古屋三郎八氏の長男である。大正七年早大理工科を卒業して、東亞製作所設計課、荏原製作所工場長及び販賣課長等を歴勤し、昭和十一年現職に轉じた。猶ほ氏はカメ子令夫人との間に五男二女の子寶があり、その圓滿なる家庭は羨ましき幸福に充ち満ちてゐる。

大阪機械工作所・取締役兼支配人

星住 鹿次郎氏

大阪機械工作所を今日までに育成してきた氏は、多年業界にあつて名譽を擡はれた英才。同社の大成を築いた氏の功績は實に大きい。取締役兼支配人の大任にあつてよく社員、従業員を督勵、業績の向上に専念して名指導者と信頼されてゐるも高徳のなせるところであらうか、工業日本の代表的存在として知られてゐる敏腕の士である。氏は岡山縣人星住元吉氏の長男で明治二十年の生れ、同二十九年に伯父文吉氏より分家したのである。氏のモットーはなんであるか、それは明るい經營による生産力擴充である。明朗で、しかも健全な經營によつて優秀製品の増産を目指して奮進し、終に軍需インフレの波濤を全面的に受けて勇躍する成果を修め得たのであつた。この頭張りは、大きな資本といふ背景に據つてのみ成されるものであらうか。否寧ろ氏の強靱なる頭腦、屈伸性ある手腕、鋭い洞察力によつてこそ果されたものと見るべきであらう。理直曲直の明瞭な識見豊かな人物、氏の存在は一際光彩を放つてゐる。

生氣嶺鑛業・社長

星野準一郎氏

氏は明治十四年七月に新潟縣の八星野芳次郎氏の長男として出生し、同十四年に家督を相続した。東京高商を明治三十七年に卒業して鑛業界に入り、現時は生氣嶺鑛業(株)社長、直瀨鑛業(株)専務取締役として新界に聲名を馳せてゐるが、その手腕には鋭い斬れ味があり、経営にも運行にも確信に満ちた粘着力がある。それ故に氏の一擧も一投足は新界の注視の的となり信望極めて篤い。今後に於ける活躍こそ生氣嶺鑛業の鑛區の有望性と相俟つて、大いに期待されるものがある。だがしかし、今を全盛の極と誇る同社も、こゝに至るまでには幾多の波瀾重疊を経て来たこととは否めない事實だ。苦境にあつて、氏はよくそれに耐え、天稟の敏腕と獨特の經營法を以て難關を突破し、遂に今日の地位を築いたもので、その不屈不撓の精神こそ教はるゝもの尠くないのである。今や帝國の東亞政策は決定的躍進の途にあるとき、氏がその牢固たる陣容と確固たる精神をもつて新界を誘導啓發する處蓋し大なるものがあらう。

國策・パルプ工業・専務取締役

細川利壽氏

嘗ては官界の雄として鳴らした細川利壽氏も今では國策パルプ工業株式會社専務取締役理事として賑々たる業績をあげてゐる。氏は細川利文氏の長男にして明治二十三年十月に誕生した。大正四年東京帝國大學法學部政治科を卒業後、同七年高等試験行政科に合格した。それより農商務省山林局、特許局事務官兼農商務事務官、大阪大林區署林務課長、農林書記兼農林大臣秘書官、商務局經理課長、大臣官房文書課長等を歴任、昭和十一年には更に農林省畜産局長に榮轉、同十二年には農林省蠶絲局長に任ぜられたが、同十三年五月惜しまるゝうちに下野して國策パルプ工業に入社したもので、新業經營の智將として大いに期待されてゐる。大正十五年には歐米各國に出張して大いに收穫があつたし、同社經營一切を擔ふ氏が如何なる業的手腕を持つてゐるかは、察するに難くない。蓋しその卓見と手腕とはいよゝゝ其妙を發揮するであらう。嘗ての功績によつて賜はつた從三位勳三等の榮譽こそ氏の總てを物語てゐる。

王子製紙・龜戶工場長

細田 榮 雄氏

王子製紙株式會社には實に人物が多。文字通り多士儔々の壯觀を極めてゐるが、中にも同社花形人物として製紙界にその人ありと知られて居るのが細田榮雄氏である。現に龜戶工場長として隠然たる勢力を扶植し、以て同社經營上に強力な一翼を成してゐるのである。氏は長野縣士族細田重明氏の長男として明治十年十一月に誕生、同二十七年に家督を相続した。慶應義塾商業學校を卒業後直ちに王子製紙に入社して同社苦小牧工場庶務係長、同社理事を経て龜戶工場長となつたもので、昭和八年合併の後にも引續き同職に在つて王子製紙生え抜きの人物として偉力を示してゐる。その永き生活には勿論幾多の大きな功績が残されて来たことは云ふまでもないことで、今や同社を根柢として我が製紙界に颯爽呼號する氏の雄姿こそ、業界の長老と讃えるのにまことにふさはしき觀がする。學業を了へると共に斯業の一本鎗をもつて押進み、傍目もふらずに精進して今日を成した氏こそ眞に達眼の士と稱すべきであらう。

昭和スレート・社長

細 矢 尙氏

昭和スレート株式会社社長細矢尙氏は既に住友製鋼會社支配人、大島製鋼會社取締役、富士スレート會社専務取締役等を歴任して來てゐるので、その道にかけては相當の權威者であり、鬱然たる勢力を扶植してゐる。斯くの如く一城の主として、而も斯界の花形と云はれる昭和スレートを主宰して一勢力をなしてゐるのは、取りも直さず氏の事業的手腕を如實に物語るものであり、同社草創から經營の衝にあつて奮闘し、今日の社運の礎を据えるに盡した功勞こそ實に没すべからざるものがある。したがつて現在氏が同社長として君臨しつゝあることは當然の歸結と云ふべきで、昭和三年の創立以來經營の第一線に立つて製品の優秀化、生産能力の擴大を圖り、販路網の開拓に努力したればこそ、今日の大成を獲られたのである。氏は東京府士族細矢方正氏の長男として明治十七年四月に誕生した。明治四十年東京帝國大學工科を卒業後日本製鋼、美國ビツカース兩會社の勤務を経て昭和三年に現社を創立したものである。

東京製鋼・兵庫工場長

細 矢 資 滿氏

氏は東京府士族細矢資氏の二男にして、明治十八年十二月に誕生、大正十二年父君隱退の後を承けて家督を相続した。明治四十二年慶應大學理財科を卒業後、東京製鋼株式會社に入り大正五年に同社兵庫工場長に就任、今日を迎へたものである。氏は業務が多端になればなるほど、いよゝゝ鮮明な修練を積んだ手綱捌きを見て、流石に東京製鋼にその人ありとの世評に應へ得るだけのあつばれなる精進ぶりをしてゐる。これもみな氏の高潔なる人格と非凡なる才幹とを信頼せられてゐればこそで、その偉大さは常に私情を減して専心業務の發達に身を献げ、斯道の振興のために最善の効果をもたらすにある。氏は所謂重役型を破つて作業服に身を固めて工場内を巡視するが、従業員はこれを欣び迎へて氏の注言激勵を聴くといふ。この上下一致の踴躍たる氣分と活氣にあふれた寮圍氣に、科學の精粹たる近代化學機械が働いて、實に多き生産をなすことは、聞くに氏のゆかしき風格が察知される。

東京計器製作所・常務取締役

堀 越 郎氏

東京府士族堀正次郎氏の長男にして、明治十八年十月出生。同四十二年東京高等工業學校を卒業し東京計器製作所常務取締役の職にあつて大目付を承はつてゐる。氏は温厚篤實、清濁併せ呑む底の人物で人格も亦高潔、仕事熱心の人物だから、社員ともよく相和して隔りなく業績をあげてゐるのは何といつても偉とすべきであらう。「事業と人物」と言ふ事は好く使はれる言葉でこの二つは互に融合し密着したものでなくては成功は期しがたいものであるが氏の人物とその事業を見るやその間聊さかも問題はなく、當社の業績の日に日に顯著なるも尤もだと思はせるし、又當社もこの人を得て益々發展すべきことは火をるよりもつと明かなことである。氏が前記會社においてその業務を見ること峻烈にして、その従業員を招するに當つては和氣を持ち、その和したる空氣でその業績を擧げると云ふのが氏のモットーである。故にその成績は實に能率的に、順調なるよき成果を収めることが出来ること云ふも理の當然である。

北海道合同電氣・社長

堀 内 弟 助氏

北海道電力界の雄北海道合同電氣を主宰する氏は、長年斯界に縱横の才を揮ひ敏腕の定評ある人物。明治七年七月、山梨の人堀内政平氏の二男として生れ、同四十一年に山口高商を卒業、爾來電力界に身を投じたが、幼にして實業家を志したと云ふだけに甲州人特有の精悍さを以てダン／＼と頭角を現してきた。極めて性剛直にして一見短氣の如く見えるが、どうして仲々弾力性あり何事に當つても屈するところなき不撓の精神を堅持し、目から鼻に抜けるやうな才人、甲州人の甲州人たることを躍如とさせてゐる。氏は日本電氣、北海道電氣秋田事務所長を経て現時大日本電氣、東部證券各(株)取締役をも兼務してゐる。今日電力界は人材雲集の有様だが、氏はそれらの群雄に伍して孤軍奮闘北海道合同電氣の今日の堅壘を死守してゐるは賞するに足るだらう。顧みればこゝ一兩年、我國電力界は實に多事多端であつたが、氏はよく時流を見透し冷静にしかも批判的に處して微動だもしなかつた。甲州人の氣魂の程が窺はれて嬉しい。

帝國製紙・取締役兼東京出張所主任

堀 内 貞 造氏

從五位堀内貞造氏は官界出の異彩。堀内太橋氏の長男として明治十一年八月に出生、東京帝國大學工學科を同三十八年に卒業してより鐵道作業局員として官界に第一步を印し、續いて鐵道廳技師となり才を揮ひ名聲を恣にしたが、後官を退き一躍實業界に身を翻へして茂木合名會社理事、東京支店副支配人に就任、現時は辯理士として大活躍の傍ら鐵道用品事務所主及び帝國製紙株式會社取締役兼東京出張所主任として錚々たるものである。帝國製紙は一大國策會社として好況にあるが、大會社だけに人的要素に於てもスケールの大きい人物を欲求してゐることは争へない事實だ。茲に於て取締役堀内氏の大きな存在がはつきりと描き出され、又無くてはならぬ大黒柱として絶大な原動力となつてゐるも宜なるかなと思はれる。全く氏の運籌の妙は當を得たものと云ふべきで、當社も最早第一段階の發展は完成して、こゝに第二の突進過程に入つた。今後益々同社の推進力たる堀内氏の活躍に俟つところ大なるものがあらう。

石油聯合・専務取締役

堀江平重郎氏

石油聯合株式會社専務取締役堀江平重郎氏の名は、今日燃料國策線上に益々大きく浮び上つてくる。氏は元來硬骨廉潔を以て聞えた實業界の異色で明治二十一年八月生れ、同四十三年に慶大理財科を卒業、日本石油に入つたのが業界へのスタートであつたが、同社々長橋本三郎氏にその才腕を認められ、大阪、下關各支店長、販賣課長を経て昭和十一年に石油聯合に移り、現時同社専務として機略縱横腕を振つてゐる。石油聯合の社長は同じく日本石油社長橋本氏で、往年の日石が米國資本インスターナショナルを合併して黄金時代を劃してより後、幾度か苦境に陥つたその社運と共に身を賭して闘つてきた堀江氏一、氏が傑物橋本の片腕とならぬ筈はない。現時石油聯合も堂々たる偉容を示し石油界を潤歩してゐるが、これみな女房役堀江氏の隠然たる、しかも甚大なる力の至すところにほかならない。氏は同社の他自動車計器、アルコール輸送各取締役東亞燃料工業監査役をも兼務、責任感の強い逸材として知らる。

南滿洲鐵業・専務取締役

堀尾成章氏

滿洲國も今や建設の段階を終つてその政治に、經濟に、社會組織の整備に、發展の一路を辿つてゐる。が、茲に東亞政策の先頭に立つて濼濼と活躍を續けてゐる南滿洲鐵業株式會社の偉大な力がある。同社専務は堀尾成章氏。氏は長野縣土族堀尾成章氏の長男にして明治十八年六月生れ、夙に實業界入りをして當社専務となつたが、同社の經營に貫録、力量は既に定評あり、名聲高く信望頗る篤い。現時同社のほか日滿商工、本溪湖白雲石工業股份有限公司各株式會社取締役として愈々多才振りを發揮してゐるが、體軀頑健、霸氣あり、度量あり、時局精神旺盛で産業日本の代表的事業家として八方に懈らない。資性淡々として水の如く、所謂資本家的腹黒さは微塵もない、而して卓抜なる才能の程は底が知れぬとまで云はれてゐる。日、滿、支提携、東亞建設大業の秋に當つて、人材を廣く愨する吾が業界に氏あるは實に快しとするところ、南滿洲鐵業専務としての氏の存在は今後の大陸建設に於て光彩を放つに違ひない。

大阪機械製作所・相談役

本田菊太郎氏

關西に於ける重工業並に製作界の長老として、わが本田菊太郎氏は巨星の如く燦たる光芒を放つてゐる。即ち氏は、關西の代表的製造會社たる大阪機械製作所相談役に於て、且つ同社の大株主であるが、また廣く製作、重工業界に手を擴げて、大阪電氣、オIエム紡機製作所各社長たる他、東亞重工業、帝國精密工業各専務取締役、原口電氣製作所取締役に任じてゐる。時局下の諸産業中に於て、重工業並に製作會社が第一義諦に置かれてゐることは、非常時として當然のことであるが、刻下の世界大勢では平和來の豫測さへつかず、よしまだ戦亂が終止したとて、此度は到底軍備縮小などの愚は各國とも繰返す譯がないから、斯界の前途は愈々躍進を續けてゆくであらう。斯く觀すれば、氏の關係事業は現在の好業績に倍して將來の飛躍發展が待望されてくる。氏は明治二十三年大阪府人本田龜吉氏の長男として生誕した。夙に實業界に入つて今日に至つたが本年五十一歳の氏の今後の大成は畏るべきものがあるであらう。

本多商店・社長

本多敏明氏

わが本多敏明氏は帝都製作界に特異の存在を示す偉材にして斯界一方の長老格たり、その聲名は夙に雷の如くになり響いてゐる。即ち氏は本多商店社長として名采配を揮つてゐるが、同社は鑛山用並に船舶用安全ランプの製造販賣を専門としてゐる會社で、その製品の技術的に優秀なることに於て、斯界に絶對的信用を博してゐる。また氏は大日本鑛業精機社長に任ずる他、岐阜セメント取締役たり、且つ帝國塗料監査役をも兼ねてゐて、セメント工業、塗料工業界にも名がある。氏は明治六年五月柄木縣人谷中省三氏の三男として生誕したが、東京府人たる先代敏明氏の養子となり、同三十五年家督相續と共に前名正辭を改めて襲名した。學歴は宇都宮作進館の出身であるが、夙に鑛山並に船舶用安全ランプの製造販賣を創め、大正六年之れを株式に改組して本多商店社長の椅子に就いた。なほ氏は二男三女の子寶があり、長女忠恵女の養子庄作氏は東大工科造兵學科出身の逸材で、本多商店取締役として氏の事業を輔けてゐる。

滿洲ベイント・社長

本多兵一氏

わが本多兵一氏は拓殖大學の前身たる東洋協會殖民學校の出身で、夙に大陸にあつて活躍してゐた國士的な偉材として知られるが、友邦滿洲國が新興國家として今日の盛大なる發展途上に就くまでには、産業界には勿論のこと、政治的にも多大の貢獻を致して居り、滿洲實業界にとつては忘るゝことの出来ない長老格の恩人である。氏は現在滿洲ベイント社長として名采配を揮ふ他、日清製油専務取締役に任じて大連に在るが、日清製油は滿洲油房界の第一流會社として古い歴史を有して居り、時局下の工業界、食料品界に重要な役割を果しつゝあり、兩社共に氏の卓抜なる經營手腕によつて賑々たる業績を擧げてゐる。氏は明治十三年十二月愛知縣人本多桂次郎氏の長男として誕生したが、大正十年家督を相續した。先には星ヶ井土地建物、滿洲石鹼の重役に任じてゐた。氏は本年六十二歳、還歴に達したが彌々矍鑠たるものがあり、二男五女の子寶にも寵まれて居り、令息兵輔氏は東洋大學、賢輔氏は北海道帝大出の秀才である。

本多スピンドル・社長

本多文雄氏

關西實業界一方の鬪將としてわが本多文雄氏は近來頗る光彩陸離たる聲名を高くしつゝある。氏は當年四十五歳の青壯者であるが、在學當時より業を擧ぐり出て研究心強く、且つ勝氣一方便屈することを知らぬ闘志滿々たるものがあつたが、實業界入りしてからはメキメキ優秀なる技術家的才腕を發揮して、他の追隨を許さぬ境地を開拓してゆきつゝある氏が現在代表取締役として主宰する本多商事を據點として、時代の先端を行く各種事業を經營して、斯界に本多文雄の存在をクロスアツプし、時局下産業界のベテランとなつてゐる。即ち氏は本多スピンドル社長として名采配を揮ふ他、ダイヤモンド研究専務取締役たり、またリグナイト大阪燃料工業各取締役に任じてゐるが、之ら諸會社は何れも近代産業にとつて重要な役割を有し、現在の好業績を羨まれ乍らまた將來性を期待されてゐる。氏は明治三十年二月大分縣人本多文三郎氏の長男として生誕し、同四十四年家督を相續した。學歴は大阪高工機械科の出身である。

鶴山鐵業・社長

本間恒治氏

時局産業界の寵兒鶴山鐵業は、ひたすら好調の一路を前進してゐる。同社の社長は本間恒治氏。氏は山形縣人本間仲吉氏の四男として明治十九年二月に生れた。大正五年に京都帝大法科政治學科を卒業後更に大學院に進んで經濟學を専攻し、優秀なる成績をもつて學を卒へた。後、十五銀行に入行、縦横の才を揮つたが、間もなく英米獨各國に留學を命ぜられて金融業を研究し、歸朝してより後は同行大阪支店勤務を経て本店調査役に進み、更に丸之内支店長に躍進したのである。だがそれより共同證券會社に轉じて同社株式、社債各部長として活躍したが、現時は鶴山鐵業株式會社の社長として采配を振つてゐる。以上の簡單な素描をもつてしても推察出来る如く、氏は内外の經濟事情にとりわけ明るく、經濟學者としても既に定評あるところだ。だがしかし、なんといつても業界に於ける名聲の方が遙に大きく、今後の動向が各界より注目せられてゐる。寸暇に讀書、園藝を愉しむと聞くが風雅なる半面が窺はれて床しい。

日本可鍛鑄鐵所・社長

本間英麿氏

關西重工業、化學工業界に於てわが本間英麿氏は一權威を成してゐる逸材である。氏は凡百の實業型離れのした學者的な風貌の人格者であるが、勿論最高學府に近代教育を受けた紳士であるから、明朗なスポーツマンであり、そのゴルフの技術は相當の腕前である。斯くの如き氏に對しては、部下は深き親愛と信頼を捧げ、また實業界に於ては厚く畏敬されてゐるから、氏の事業は人の和を得て堅實な發展向上を辿つてゐる。即ち氏は日本可鍛鑄鐵所、日本化學工業所兩社長たり、また本鐵工所取締役、日本ワイクトリック監査に任じてゐるが、氏の名望と卓越せる識見、手腕は各社の基礎を固くし、賑々たる業績を示しつゝある。氏は明治二十一年十一月大阪府人老村爲三氏の三男として誕生したが、福岡縣人たる先代英一郎氏の養子となり、前名常二郎を改め昭和二年家督を相續した。大正二年東大工科電氣工學科を卒業し、鐵道省技術部に勤務したが、後ち退官して實業界に入り、先には神戸有馬電氣鐵道専務に任じてゐた。

日本製鋼所・廣島工場長

前川 清氏

日本製鋼所はいまや重工業界の雄として奮迅の活躍をなしつつある。氏は當社の廣島工場長として全責任を擔つて指導の任に當り、その才幹は古くから定評のある俊才である。明治廿二年三月に山口縣前川三喜藏氏の三男として生れ、大正三年に東京帝大工科を卒業したが、同七年に日本製鋼所に入社して茲に二十三年、その間廣島製作部長を経て、同工場長に進んだのである。我國民間の最大兵器會社といふ重大使命をもつた當社にあつて、氏は物凄い腕を揮つて業績を向上せしめたが、その甲斐あつて現時は時局の波頭に便乗して躍進につぐ躍進をつづけてゐるのである。實に氏こそ當社の至寶ともいふべき人材で、日本製鋼の前川として喧傳され斯界の權威と目されてゐる。當社の資本は云ふまでもなく三井とウヰツカース・アームストロングの連繫によるもので、民間に於て當社に匹敵するものは無く、社業の盛運は今更贅言を要さないが、時局下の最重要部門に貢献するところ計り知れないものがある。氏の健闘を祈る。

稻畑商店・専務取締役

前田 恒治 郎氏

京都に於ける財界人中、唯一の海外事情通を求めらるるならば、何人も前田恒治郎氏を推すことに躊躇しないであらう。即ち氏は明治四十年の歐米巡遊を皮切りに、大正二年にも再び彼の地を訪れ、支那に旅することも數回に及んでゐるのである。氏の渡船が單なる視察旅行でないことは、昭和四年佛國政府よりシュバリエ・ドラゴン・ド・ランナン勳章を贈與されたことによつて充分領ける。氏は京都府人前田嘉右衛門氏の長男として明治十二年一月に誕生。明治二十八年府立京都商業學校を卒業後直ちに京都高島屋飯田貿易店に入り、同三十三年東京支店開設に先立て同地に轉任し、爾來御用部、裝飾部等に勤務、大正五年に東京呉服店支配人に進んだが同年五月に之を辭して稻畑商店(株式會社)に轉じたもので、總支配人、取締役兼支配人等を経て現職に及んだもので、傍ら日本染料輸出株式會社監査役を兼ねてゐる。氏は圓滿なる人格者として知られ、所謂苦勞人らしき風貌は無言の裡に相手を心服せしめるものがある。

前田鐵工所・社長

前田 彌 市氏

株式會社前田鐵工所と云へば、時局景氣の中に掉す斯業の精華である。流石に多年諸機械製作業を営みつゝ、一方の旗頭として立つに足る逸材であるだけに、エネルギーな働らきぶりもとより、八面六臂の活動をつづけて同社運の推進力となつてゐる。氏は幼少の折から目から鼻へ抜けるが如き慧智の閃めきがあり、その負けじ魂はよく四隣の子童を壓倒したと云はれてゐる。少年時代に早くも機械工業に深い興味を持ち、遂には之をもつて身を立てるべく決意したのである。斯くて技術の習得に、或ひは實地の研鑽に大いに努力、やがて獨立經營といふ高所に向けられた理念が展開されて行つたのである。爾來今日に至るまで技術の進歩改善、工場設備の擴充等に専念すると共に、優秀品の廉價提供を目標に誠實一路遂に今日の大を招來したものである。氏は長野縣の産、前田彌平氏の長男として明治十二年六月に誕生、同十四年に家督を相續したもので、その精勵無比なる行動は郷黨にも稱讃を博してゐる。

光工社主

前田 與 右衛門 氏

氏は福岡縣の産、前田勇太郎氏の二男として明治二十年九月に誕生した。夙に英才をもつて鳴り周囲の人々より將來の大成長を囑目されてゐたが、學業を了ると共に工業界雄飛を志して精勵、精密プレス並加工業を営みつゝ、精進するところがあつたが、大正十年物理機械製作所を設立すると共にいよいよ軌道に乗り出して、今や業界に於けるその地歩も牢固として動かし難きものとなつてゐる。古言に「ローマは一朝にして成らず」と云はれてゐるが、氏の偉大なる今日の覇も實に且夕に達成されたものではない。そこには人知れぬ苦闘と努力が潜在してゐるのだ。現に光工社主として縱横に才腕を行使しつゝあるのも、確かに凡庸の器たる人物でないことをよく立證してゐるし、同社をして今日の隆々たる發展に導き、好業績を誇らせるに至らしたのも畢竟、リーダーたる氏の名采配に依るところ多々あるものと云はねばならぬ。資性濃厚にして讀書を好み足らざるを補はんとする心がけも聞くに床かしき限りである。

日本曹達・理事

前田 吉 景氏

東京プレス工業、丸三耐火煉瓦各株式會社取締役並びに日本曹達株式會社理事として堂々と經綸を行ひつゝあるのが前田吉景氏である。氏の柔にして剛の妙を得た指導方針は夙に定評の存するところ、その聲望は將に噴々たるものがある。しかも新時代を理解する氏は常に新機軸を試みた營業政策を進行して、その卓抜な手腕に物を云はせてゐる。氏は石川縣の産、前田吉之丞氏の六男として明治二十五年十月に誕生した。大正五年東京商工學校商業科を卒業後松村商店に入社したが、間もなく之を辭し、大正七年に日本曹達株式會社に入り年と共に躍進をつづけて來たもので、お國自慢の辛抱強さはその商才の妙と相俟つて、石川縣出身の事業家幾多ありと雖も鐵中の鏘をもつて自他共に許す大人物となつてゐる。氏は寡黙直行の利器である。そして持ち前の純情一徹は率直に正を正とし、邪を邪としてゐる。従つて氏は一度び是と信じたならば、端的な非難等に耳を籍さず猛然とそれを強行する。そこに氏の好きがあるのだ。

牧田製作所長

牧田 與 之 助 氏

世に成功者と言はれ、社會のために働いてきて人々の尊敬を受けるやうな人物は、決して邪道を超えて來たのではない。氏の如くそれ〴〵に苦しい體験を通して目的地にゴールインしたものである。父業を繼ぎ牧田製作所並びに牧田鍍金所長として業界に覇を唱へんとしつゝある氏も、顧みればそこに幾多の難關を超えたことに對し無量の感慨を催すであらう。無事に無難に、とは誰しも心がけることである。故に無事に、無難にと心がけるのが決して悪いとは云へない。たゞ無事を願ひ、事勿れ主義からは、新しい何物も生れぬといふことを考へなければならぬ。氏が常に大を望み烈々たる炬火を胸に燃やしつゝ、先代の上に出やうとする向上心があつたればこそ、今日活々とした甲斐ある生涯へと導かれたものであつて、須く大志をもち、その達成のために生きるだけでも重大な意義があると云はねばならない。氏は大阪府人牧田與吉氏の二男として明治二十年八月に誕生した。資性明朗で唯一の趣味はスポーツである。

大阪製線・社長

正 井 喜 兵 衛 氏

今日、大阪製線株式會社と云へば、堅實なる營業方針の下に著々とその歩みをつづけてゐることは、十指のよく認むるところである。同社の營業方針は一見してちみちみと映するが、それだけに堅實性を多分に持つてゐるのである。派手〴〵しいところを見せないだけに、投機性などみじんもないといふわけである。氏は大阪府人先代喜兵衛氏の二男にして明治二十六年一月に誕生、大正十四年家督を相續と共に前名廣治を改めて襲名に及んだものである。今や斯界に映ゆる大阪製線株式會社社長として押しも押されぬ實績を示しつゝあるが、氏の場合は單なる名義社長に止まらず、率先して號令しつゝ意慾をみたとすといふ熱意に燃えてゐるのである。従つて社員間にもいつしか、かゝる氣風が浸み込んで、融合一致、よく社務に精勵して協力の實をあげつゝある。これもみな氏の高潔なる人格と非凡なる才腕とを信頼せられてゐればこそで、己れの所信に向つて一路邁進、遂に今日の盛運を招來したものである。

箱根温泉供給・専務取締役

益 田 信 世 氏

東京府華族益田孝の二男、男爵益田太郎の弟同克信の叔父にして明治十八年八月出生し、同三十一年分家す夙にハーバート大學に學び、歸朝して三井物産會社に入り後退社し、現時肩記各會社の他、日本不動産取締役、豊田式織機、王子製紙、仙石原土地、日本徴兵保險、金城興業、各監査役である。濃厚な風貌の中にも毅然たるところあり、強靱なる意志の中にも細い情味をもたゝえた人物、朝夕に眺むる富士の靈氣は斯うした人物を時代に應じて輩出させた。氏の風格に何か人をして肅然たらしむるやうなところがあるのも、恐らくこうしたところから出てゐるのであらうとは推察に難くないのである。氏はさきに内國貯金銀行、益田農事外吾妻硫黄各銀行會社の重役たる顯職にあつて、その敏腕振りは、前記諸會社内を瞭著せしめてゐる程であり、年齢的に云つて既に初老に入つてゐるがその元氣旺盛なることは壯者以上であり、氏の業績は今後に期待すべきもの多々にありとして注目されてゐる。

廣島電氣・常務取締役

増井清兵衛氏

廣島縣増井清兵衛氏の二男にして明治二十八年一月出生、同四十四年修道中學を卒業し父業織物業を営み、傍ら廣島電氣常務取締役たる他に、廣島麻糸紡績取締役の重職にあつて寧日なき有様である。氏の成す事には少しの無理がなく、全く以て公平無私、只管社業の復興、業界発展のために盡瘁し、綿業日本の世界的飛躍のため誠心誠意、己が天職に邁進して来たのである。斯くして増井氏の希望は著々織物業の發展と共にすゝみ、遂に今日の偉大なる大成をなしとげたのである。氏は濃厚端嚴の紳士で数多い藝州財界人中特に目立つ斯界の偉材であるとは筆者が筆を改めて喋々するまでもないことである。氏が信念とする忠勤格闘は寔に氏自身を今日あらしめたものであり、この信念のモットー化を、氏が前記社内力説してゐるのも宜なる哉と云ふべきで、氏が、この精神を以つて戦時下日本の電氣事業に、如何に對應し業績を擧げるかは、吾人の最も興味を以て注目し、且つ期待するところである。

壽電機製作所・代表社員

増井尙寛氏

鳥取縣増井與八の二男にして明治十五年九月呱呱の聲を擧げ同三十九年早稻田大學政治科を卒業し、大阪商船、宇治川電氣各會社に勤務、大阪電機工業會社取締役支配人を經て、壽電機製作所設立と共に入社、現時同社代表社員である。生來英才の譽れ高く、實業家肌の氏は早大を卒業するや大阪商船會社に入社し、その當初より敏腕を揮ひ夙に業界に鳴らしたものである。一面氏は國史研究をもつて知られてゐる苦勞人である。靄氣縱横抱負遠大の人であるが決してそれに溺れない確たる信念の持主である。壽電氣設立と共に望まれて入社したのもその信念を見込まれたものであるが、氏の豊富なる經驗と學識は寧ろ今後に約束すべきで筆者も亦期待する内の一人である。氏が今日を築いた經歷の主なるものを擧げれば精神的鍛鍊と云へるだらう。氏の精神修養は寧ろ宗教に徹するの趣味があり、一たび氏と語れば滋味稠すべきものあると同時に、含蓄ある言葉には心服するに足るものがある。以て氏の人爲を知ることが出来よう。

山岡發動機工作所・常任監査役

増崎平次郎氏

福岡縣増崎嘉平氏の長男にして明治三十二年九月出生し、後家督を相続した。大正十二年山岡發動機製作所に入所し東京支店會計係、上海支店長、本店諸等に歴任して昭和十二年、株式に改組と共に監査役に選任せられた。氏は稟性明敏にして積極進取の氣風に満ちた最も近代的事業家にして未だ壯年の活氣稜々その精力驚くべき錚々たる若手にして抱負遠大且靄氣縱横、事業家としての手腕を持つ斯界の權威者である點に於いてその前途洵に洋々たるものがあることは萬人齊しく肯定する所である。凡そ人は運を七分と努力三分とを以つて出世の曉を見ると斷定するが、氏の如きは寧ろその逆で、人事を盡して天命を待つと云ふのが、氏を今日あらしめた最たる由緒のものであつて、氏自身も、この經驗の結果、運は三分で努力は七分であると喝破して、世の後進に呼びかけてゐる程である。斯くの如き氏の努力心を以つて、諸般の業務に當るのであるから、その業績の益々見るべきものあることは火を見るよりも明かなことである。

増田商事・事務取締役

増田龜吉氏

北海道宮本惣次郎氏の四男にして明治十八年三月出生、同四十五年増田久五郎氏の養子となる。現時増田商事會社取締役たる外諸會社の重役である。昭和十一年六月紺綬褒章を賜つた程功勞のある人物でもある。氏は養父久五郎氏を助けて事業界に進出しその柔い人觸りと豊富な知識を以て東北財界に名を馳せて手腕は益々洗練され、遂に今日の名を得るに至つたと云つても過言ではあるまい。然るに世は偶々此の實力を判別し得ずして氏が今日の榮位は先考久五郎氏の七光りであるとすものがあるが、氏の今日の名聲の隆には奮闘努力學び且つ行つた無數の苦心が認められてゐるのである。この苦心努力こそが今日氏の餘裕ある態度にあらはれて福徳圓滿なる人格となつたのである。玄關子の挨拶にも給仕の御辭儀にも微笑を湛へて應ずる程の洗練された人格は、決して資性や環境だけでは出来るものではないし、繁忙を極めても雅氣を失はぬ氏こそ、財界稀れにみる人徳の士であることは氏に接するもの、誰もが知る所である。

三菱商事・大連支店長

増田昇二氏

廣島縣増田唯一氏の三男にして明治二十五年二月出生す、昭和六年期敏雄方より分家す、夙に三菱商事會社に入り、雜貨部副長となり後大連支店長に就任し現在に至つてゐる。濃厚篤實識見豊富の人物で、亦時局認識も正確な人、意志強靱にして一度決したる所萬難を排して行くの慨あるが亦好く人の情味を理解し、社の内外の信望を一身に蒐めてゐるの感が深い。加ふるに氏は世評高く、日支事變にあたり、我國が東亞に延びんとするに當つて、銃後の國家を重要活動面にこの人ある事は何といつても欣幸の至りといはなければならぬ。氏が前記會社の大連に於ける首腦部にあつて寧ろ奮闘し、彌増しに三菱商事の業績赫々として擧げてゐることは筆者が改めて詳述するまでもない。氏が現下の非常時局にあつて前記會社を基礎に、財界の一方の旗頭となつて、社名は固より氏の手腕噴々たる日を今後に期して、益々健闘力奮されんことを切に祈つて、筆者は他日視見を改める機会を望みつゝ、擲筆したいと思ふ。

増田伸銅所・社長

増田政治氏

大阪府土族増田信之氏の二男にして明治十八年九月出生、同二十九年分家して、現時増田伸銅所の社長として業務を掌握してゐる。氏の事業は目標が高く國家的社會的なるものに置く國士的事業で、氏の撓まざる手腕によつて光輝を増したものである。今や非常時局下工業國策遂行の秋一片秋々の氏は、赤心以て益々當社に發展の偉觀を添へるだらうと推察することは十人十指誤りない所だらう。責任感正義感の強き人他に類をみないし、理非曲直のきはめて明らかな人として聞えがた。政府官僚方面の人との接觸も全く隙を見せない周到振りである。それでゐて、先哲の如く春風を以つて人に接し、己を律するに秋霜を以つて肅す人物である。凡そかくの如き型の人は、出世率が多いとされてゐる、天下の英雄西郷南洲が、その代表的であるが、氏も大器を藏して、その大器が遂年實を結んで着々と業界に巨歩を占めて行くこと云ふことは、筆者の信じて疑はない所であり又その曉もそう遠くはあらず。

増田製粉所・社長

増田増太郎氏

神奈川縣増田増藏氏の長男にして、中村房次郎の甥なり、明治十九年七月出生、増田製粉所社長の外、日米石油、日滿製粉各取締役、青島製粉監査役の樞職に就いてゐる資性圓滿にして無碍、寧ろ重厚にして、氣品ある風格を感じしめるが内には矢張りハマツ子の熱意を藏してゐる。會ふ程のものをして敬意の念を起させずにはゐない。交際が廣くして努力型で尙その上信望があつて、將器たるの素質満ちである。趣味といへば、讀書ならびに運動である。多忙を極める生活の寸暇を割いて知識の吸収に怠りない。一にも事業二にも事業三にも事業といつた様な氏の生活振りを眺めると、偉材將來どこまで伸びるのかと思はせるものがある。製粉界の切れ者として名をうたれてゐることは既に周知の事實である。氏がこの戦時下にあつて、一層斯界に驥足を伸ばして欲しいと云ふことは恐らく天下の聲であり、否、天來の叫びではないかと思ふ。氏の將來に備へて前記會社の今後の發展を切に望んで歎まない。

土佐電氣工業・取締役

増山忠次氏

財界の元老にして吾が業界の指導者たる増山氏の功績は絶大である。氏は山口縣土族で明治十四年生れ、同三十七年に京都帝大法學科を卒業して司法官試補となり神戸地方裁判所判事に補せられたが三十九年には退官して九十度の廻轉を見せ、大阪株式取引所に入り副支配人、支配人を經て常務理事たることに實に數年、大正九年には農商務省の囑託を受けて取引所視察の爲渡米、大なる貢獻をなした。また彼に大阪商業會議所議員、大阪、和歌山各高商の講師をも兼ねてゐたが現時は業界の重鎮として土佐電氣工業取締役、大阪堂島米穀取引所監査役として辣腕を振ひ、傍ら關西大學理事兼講師の職にもある。尙大阪乘馬俱樂部會長、帝國競馬協會參事、馬政調査委員、日本競馬會總務部長、日本乘馬協會、日本國際馬術協會各理事、京都競馬俱樂部常任理事等々の要職にもあり、斯界の最高權威者として吾國有數の存在である。事業的才腕はさるることながら卓見遠識の人として知られ、各方面より敬慕せられる高德の偉材だ。

松居庄七商店・社長

松居庄七氏

京都第一と謳はれる室町錦小路の松居庄七商店は半襟及び婦人服装品卸商を営んでゐる。現當主松居庄七氏は京都府先代庄七氏の長男にして明治二十年三月出生、昭和三年家督を相続して前名信太郎を改め襲名した。夙に京都第一商業を卒業し家業を繼いだるが、その才殊に優れ事業界に躍きん出て、現時松居商店社長を始め、中村呉服店社長、京都ホテル、日本新藥各取締役、京都商工監査役と八方に敏腕を發揮、京都府多額納税者に列してゐる。また兼に關西自動車、庫、中外紡織各會社の重役でもあり、財界に名譽赫々たるものがある。濃厚篤實にして商才頗るあり、機を見ること敏にして事に當るに果敢、氏こそ眞の實業家タイプと云つても過言ではあるまいと思はれる。また時局認識極めて大、國粹主義者として知られ、愛國の心厚き士である。趣味として謡曲を好むがディレツタントの域を脱しなく、堂に入ったものとして定評あるところ、氏の日本的な反面のほどが窺ひ知られて誠に奥床しい。

松尾精工所・主

松尾芳夫氏

今や躍進日本の製作界は前古未曾有の盛況時代を現出して、戦時體制下の産業の花形たる名を恣いまくりにしてゐる秋、中京名古屋斯界に明星の如き燦たる光芒を發しつゝある人材にわが松尾芳夫氏がある。氏は資性密達なる奮闘型の雄將で、その張り切つた闘志は如何なる難局に處しても堂々これを乗り切つて行く精神をもつてゐるから、氏の主宰する松尾精工所は、時潮の追風に眞帆を揚げた形で、たゞまっしぐらに躍進また躍進を續けてゐる。氏は明治三十一年一月廣島縣人たる松尾鐵三氏の二男として誕生したが、幼時より麒麟兒の名が高かつたが大正四年愛媛縣立今治中學を卒業して中京に出て、名古屋自動車に入社したが忽ちにしてその英才を認められ、衆を擧げて漸次累進、營業課長兼工務課長となつたが、獨立獨行の信念強固なる氏は昭和八年同社を辭して、自ら機械器具商を營み松尾精工所を創立したのであつた。氏は當年とつて四十三歳、幾多春秋に富むその將來の大成は期して俟つべきものがある。

三井鑛山・常務取締役

松田範房氏

今や時局下に業界が空前の膨脹振りを示してゐる秋、その容觀狀勢の攻勢に伴つて氏の牙城三井鑛山株式會社も賑々たる好業績をつけてゐるが、しかしかゝる好業績は氏の拮据經營の努力に負ふところ夥なしとしない。したがつて經營首腦陣の更迭が行はれても氏は僅かに固としてその地位に据えられてをり、氏の常務經營の衝にはいさゝかの異動も見せない。かゝるが故に同社と氏は絶對不可缺の關係にあり、同社今日の好業績も實に氏に依つてもたらされたこと云つても過言ではないのである。氏は兵庫縣人松田政治氏の長男にして明治十六年十月に誕生した。明治四十年京都帝大機械科を卒業して三井鑛山に入り、三池鑛業所を経て三池製作所々長兼鑛業所機械技師、鑛務二部長等を経て三井鑛山常務取締役に就任したもので、現に松島炭礦株式會社取締役會長を始め其他の重役を兼て、財界人中に在つても特に異彩を放つ大物たるの感が深く、流石に三井王國で鍛え上げただけのことはあると何人にも頷ける處である。

宇品造船所・副社長

松田泰行氏

氏は夙に造船界の白眉として令名がある。したがつて其方面に於ける地歩はまことに大きなものがあり、斯界に於ける隠然たる勢力は卓越せる手腕と相俟つて、宇品造船所副社長として貫祿にふさはしき存在をなしてゐる。氏は廣島縣の産、松田佐市氏の長男にして明治二十一年五月に誕生し、大正十年に前名市太郎を改めたものである。學業を卒へるや直ちに株式會社宇品造船所の人となつたが、もとより手腕あり達識ありといふ氏のことであるから、經驗を積むと共に漸次擡頭を重ねた。かゝる氏の精進ぶりは早くも衆目の注視を受けて、その未來は既に約束づけられてゐたものである。事ほどさやうに氏の天分は世評をそのまゝにスタクと伸びて、今日の覇業を達成するに至つたもので、造船界一本調子だけによく備つた造船家としての貫祿には侵し難い重厚性が加はつてゐる。蓋し敏腕家たると共に氏は堅實な事業家であつたのだ、されば氏の手腕の下されたとるころ常に經營を誤ることはなく著々と實績を收めつゝある。

日本製鋼所・常務取締役

松田義一氏

夙に斯業の將來性を看取したゞけあつて、斯業へ着手して以來今日に至るまでの粒々たる辛苦は、遂に偉大なる成果を收めたもので、注がれた努力もさることながら平凡な言葉で言へば、確かに氏に先見の明があつたとも云へるのである。したがつて氏は本邦に於ける斯業の先驅者であり、業界の重鎮として牢固たる勢力を確保しつゝあることは、自他共に之を好く認めてゐるところなのである。氏は東京府士族松田義明氏の二男にして明治二十年九月に誕生し大正十年に家督を相続した。明治四十一年東京商工學校を卒業して株式會社日本製鋼所に入り、同四十五年には英國安社に職工として技術の習得に赴いた。斯くて其後の携まさる精進は漸次擡頭の機運へと導き、今や同社常務取締役兼技師長として光りつゝあるのみか、更に株式會社野村製作所取締役を兼て鮮やかな采配振りを示しつゝある。これといふものも斯業發達の大願に燃えて、一職工として潛入するなどの苦心を重ね、學理と實際とを究めたればこそである。

東亞機械工業・社長

松田徳之進氏

東亞機械工業、横濱工業各株式會社々長並びに末廣紡績株式會社取締役として其名を京濱工業界に馳せてゐる人に我が松田徳之進氏が在る。氏は廣島縣の産、松田林吉氏の二男にして明治二十年十一月に誕生、後に松田兼助氏の養子となつたものである。夙に斯界を志し縣立工業學校卒業後海軍工廠、東京計器、東京瓦斯大森工場、東洋鐵工、關東紡績會社等を経て昭和二年紡績製作所を創立、同十二年株式に改組と共に其社長に就任したもので、小型優秀會社として戦時、平時双方に適合する將來性を持つてゐるだけに、各方面より多大の期待を向けられつゝある。したがつて同社の隆々たる業績も、劇期的前進ぶりを畢竟配者たる氏の意氣と汗とに依つて著々と築かれたものであり、更に前途の洋々さを想ふとき、こゝに卓越せる氏の手腕を再認識せざるを得ないのである。氏は只管事業完遂の目的を以て邁進する典型的實業家だけに、趣味と云つても之ぞと言つて取上げるほどのものはなく園藝ぐらいなものである。

大日本製糖・朝鮮工場長

松永進一氏

本邦糖業界の雄大日本製糖は近來益々内容を整備して、名實共に大目撃たる堂々たる社礎を据えた觀がある。勿論斯界は各社共に盛業を謳はれてゐるが、藤山社長以下人材を揃へてゐる同社は斷然頭角を抜いてゐて、本年度は昭和製糖を吸収したのであるが、今後の大發展は恐らく豫想以上であらう。同社はたゞに重役陣だけであら、中堅層が之れまた逸材揃ひであるから、斯うした好成绩を示しつゝあるのである。わが松永進一氏は同社の中堅層中でも特に光つた存在で、現在在朝鮮工場長として活躍してゐるが、上層の受けもよく、また部下からは絶對的信望を捧げられてゐるから、朝鮮工場は抜群の成績を擧げてゐる。氏は明治二十八年四月京都府人松永辰次郎氏の長男として出生し、大正十一年家督を相続した。大正十年慶大理財科を卒業して直ちに大目糖に入り、昭和八年庶務課長に進み、同十二年現職に就いたが、中堅層では最年少者であり、重役陣入りも時間の問題であるから、その大成が切に待望されてゐる。

東京芝浦電氣・副参事

松丸健氏

マツダ電球の名聲は其實質と共に正に世界的である。松丸氏は芝浦マツダ工業を代表する九州奉行として現地に奮闘の陣を張つて居る。即ちマツダ工業福岡出張所長、福岡マツダ販賣會社専務取締役として、九州財界に虹の如き氣を吐いて活躍の一端を露進し續けて居るのである。氏は明治二十七年東京外語を卒業後選信省に奉職したが、氏の豪宕明快な性格は官吏生活に慥たらす、斷然として實業界入りをした。東京電氣會社の人となつたのである。何しろ知能も秀で膽力もある氏は上層部から認識せられ、累進を重ねて同社副参事たる榮位を獲得し、六臂よく八面に當るといふ凄じい活動ぶりは帝都財界を席捲せんばかりの意氣を示した。今や九州に勢を張り、アンチマツダの名を擡にしてゐる。實に當代の俊傑と稱するも過言でない。氏は純粹の江戸っ子、明治十六年松丸資章氏の總領息子であつて、謡曲は三度の飯よりもといふ凝り方であると聞く。武士道的な純日本精神の信念に厚く國士の風格の躍如たる現代精神である。

嘉徳鑛業・常務取締役

松村 茂氏

人が時代を造り、時代が又人を造り、時代と人が事業を造つて行く輪の流は永遠である。興亞の聖戦は第四年、之を契機とし機縁として歐洲動亂の幕が切つて落された。所詮は人類生存の爲めには闘争の歴史が無限に繰返されるであらう。然かも覇者たる榮冠を擔ふ根本要素は經濟力であり、生産力である。就中文化向上の先驅をなすものは重工業であり之が資材を充すは一に鑛業に依存する外はない。由來我が鑛業資源が自給に遠い事は痛手である。茲に鑛業界に奮起を要望する所以が存する。業界屈指の我が松村茂氏は嘉徳鑛業常務取締役、明治鑛業取締役として九州財界の俊英で、斷えざる努力奮闘を續けて事業發展の礎石となつて居ることは敬服の至りである。知能と手腕とを兼備する頭領的存在で斯界への功績特に大なるものがある。希くは百尺竿頭に一歩を進め大陸埋藏の資源獲得に努め一段の活躍を望むこと切なり。氏は明治四十三年東京帝大工科探鑛冶金科卒業の俊足であり斯界の權威者である。

松村機械製作所・社長

松村萬三郎氏

東京市板橋區會議員松村萬三郎氏は孤軍奮闘今日の地位を獲得したる立志傳中の人物である。明治三十六年東京府、松村孫兵衛氏の三男として生れた。氏は家業たる機械製作に従事すること多年、其間勤勉刻苦家業の餘暇以つて各種の機械の研究に没頭し傍ら商店の經營、會社の機構運營の要諦に關する研究を積み、致々として斯業に精進したのであるが、時流を汲んで斷乎として營業法を改組して株式とし自ら社長として采配を振り、文字通り不眠不休の活動を續け今日の盛況を誘致し都北の一角に萬丈の氣を吐いて居る。氏は明敏豁達、烈々たる闘志を包藏し、東西に馳驅して其の手腕を揮ひ、英雄蜚集する實業界に堂々の陣を以て臨んで居る。氏は實業界稀に見る少壯者であるが、其の信望の厚きことは若冠にして區政參畫の區會議員として選出された一事を以てするも明かである。昭和十一年家督を相續し松村家の當主となる、人格貫録共に備はり、將來の覇を望んで益々活潑な動きを續けて居る。

松村組・社長

松村雄吉氏

氏は和歌山縣の出身で、明治三十四年六月和歌山縣田中魯一氏の二男として生れ、大阪市先代雄吉氏の養子となり、家督相續と共に前名勇を改め雄吉を襲名した。剛毅果斷は養父雄吉氏の感化によるものであらう。氏は奇才縱橫、鋭い神經の持主でもあつて、事に當つて、綿密周到少しの無駄もない。土木請負業を営み、松村組を統率し、阪神の土木建築界の雄として君臨して居る。氏は曩に海外を視察し、洋式建築に就き詳細な研究を遂げて歸朝し、養弟早大出身の雄二氏、同慶大出身の正雄氏を兩翼とし關西の斯業界を席捲して居ることは壯觀といふべきである。尙又夙に大陸に進出し、今次事變の勃發するや大車輪の活躍をなし國策推進の礎石をなして居ると聞く。新進の實力ある氏の將來性は洵に多望である。氏は亦養母チカ刀自(明一、生)に仕へて奉仕至らざるなく、養弟に對する細心の注意は業界稀に見る所であり、令閨千代子女史を家庭の中心とし和氣霽々として、常に春風駘蕩の感がある。

朝日電池・社長

松本龜太郎氏

松本龜太郎氏は阪神實業界の大立物であるばかりではない。幾多の公共事業に盡瘁し、其功を以て紺綬褒章並に飾版を賜り、又日本赤十字社特別會員有功章、大阪市有功章を贈られた人である。其の人格の程も推察せられる。現に大阪電氣同業組合副組長、日本ラヂオ商工組合相談役、大阪商工振興會參事、選信省乾電池規畫調査委員、大阪商工會議所議員等の公職に擧げられて居る。氏は京都府松本平助氏の二男で明治十八年十月の生れであつて大正十一年家督を繼ぐ。乾電池の製造業を營み其の母體をなす朝日電池會社を主宰し隆々たる發展を遂げ、朝日電池の名は全國津々浦々に及んで居る。氏は其他松下乾電池、南海興業會社取締役、大阪優良品協會理事、金銭貸借調停法調停委員等に就任し公私多端な繁激振りであり、廣汎な活動面に不休の活躍を續けて居る旺盛な精力には實に畏敬禁じ得ないものがある。道徳を離れた財力は墮落であるとは二宮尊徳の教である。氏の如きは財力を道徳の上に活かす崇高な人格者である。

明治鑛業・取締役會長

松本幹一郎氏

明治鑛業會社は其の生産額に於て資本に於て本邦有数の大會社である。其の取締役會長である松本幹一郎氏は財界に於ける一騎當千の俊傑である。氏の手腕力量は既に定評のある所で一度面接すれば大人物たる風格を感ぜられる。豪放洒落、淡々として水の如き開放しの性格であつて然かも人の心の底までも透視せねば止まぬといつた炯々たる眼光には威重其物が含まれて居る。眼は心の扉なりといふ基督の言は氏によつて眞實なるを發見する。氏は明治二十七年福岡縣土族先考健次郎氏の長男として生れ、大正七年神戸高商を卒業した秀才、安川松本合名會社神戸出張所主任、同社東京支店長に歴任し、當時剛直奮達を以て強豪の向ふを張り一歩も譲らなかつた奮闘振りは眞に火を吐く慨があつた。後明治鑛業に轉じ敏材は池中に在らず今日取締役會長の要位に就き財界に大きな存在を示して居る。尙、鶴見鑛業代表取締役、黒崎鑛業、昭和耐火材料各取締役、昭和石炭、嘉徳鑛業各監査役に就任し、將來ある實業家として多望なり。

明治鑛業會社は其の生産額に於て資本に於て本邦有数の大會社である。

其の取締役會長である松本幹一郎氏は

藤倉電線・社長

松本新太氏

大藤倉の總帥としてわが松本新太氏が登場したのは一昨年であるが、爾來氏は嚴父時代に數倍する勢力を伸張して帝都實業界のヒツトラー的存在となつて居る。即ち氏の現在に於ける關係事業を擧げてみると、藤倉電線、藤倉鑛業、朝日電池工業各社長、藤倉工業、藤倉化學工業各取締役會長、藤興商會、藤商會各代表取締役、藤倉合名、白河川農林各代表社員、凸版印刷、巴川製作所、昭和電機工業、東京セロファン紙、日本海底電線、滿洲電線、東洋精機、日本信託、三弘、東洋インキ、大島拓殖電氣各取締役、日本電信電話工事、津田電線、東京輕合金、日本故銅統制各監査役等で、この各般各種に亘る諸會社は何れも時局下に於て重要な役割を果しつゝあるのである。氏は明治二十六年一月東京府人松本留吉氏の長男として誕生、昭和十三年嚴父の跡を承けて家督を相續した。大正十年京大理學部を卒業後は、大藤倉の創立者たる嚴父の事業を輔けてゐた。本年四十九歳の氏の前途は洋々として刮目すべきものがある。

大藤倉の總帥としてわが松本新太氏が登場したのは一昨年であるが、爾來氏は嚴父時代に數倍する勢力を伸張して帝都實業界のヒツトラー的存在となつて居る。

即ち氏の現在に於ける關係事業を擧げてみると、藤倉電線、藤倉鑛業、朝日電池工業各社長、藤倉工業、藤倉化學工業各取締役會長、藤興商會、藤商會各代表取締役、藤倉合名、白河川農林各代表社員、凸版印刷、巴川製作所、昭和電機工業、東京セロファン紙、日本海底電線、滿洲電線、東洋精機、日本信託、三弘、東洋インキ、大島拓殖電氣各取締役、日本電信電話工事、津田電線、東京輕合金、日本故銅統制各監査役等で、この各般各種に亘る諸會社は何れも時局下に於て重要な役割を果しつゝあるのである。

日の丸商店主

松本菊次郎氏

北海に輝く日の丸商會の名を聞くや久しい。日章旗の嚮ふ處靡かぬ草木もなしといふ謂か。松本菊次郎氏は日の丸商店、日の丸農場の主宰者で北海道を本據とし樺太其他各地に肥料農具礦油度量衡器の大販賣網を張り、歐米諸國とも直取引を行ひ、其の勢力當る可からざるものがある。かくて氏は北海道開發に向つて力を注ぎ、日の丸農場を經營し模範的施設をなし、國力の培養に貢献しつゝあるは洵に稀特の至りである。氏は明治二十七年十月千葉縣藤崎家に生れたが、三重縣先代菊次郎氏の養子となり昭和四年家督を承け前名修三を改めて襲名した。曩に大正八年北海道帝大農學部畜産學科を卒業し後東京に出で、經濟界事業界を研究する事數年、再び北海道に歸り日の丸商店を創立し自ら總指揮を採つて財界に敏腕を揮ふ事となつた。氏は至つて明朗快活にして辭禮に巧で外交的手腕は天才的ともいふべく、向ふ所可ならざるはなく、今や磐石の基礎の上に堂々として業務に臨み、北海道に於ける惑星的存在をなしてゐる。

北海に輝く日の丸商會の名を聞くや久しい。日章旗の嚮ふ處靡かぬ草木もなしといふ謂か。

松本菊次郎氏は

神戸商船・社長

松本博邑氏

歐州再戦は佛國の降伏に依つて愈々英國だけがやつとけられる順番で、太陽没すること無く七ツの海を支配する大ブリテンも、今日となつては誠に影が淡くなつて來た。これで世界海運界には當分の間は歐洲各國は手が出せないのだから、この秋にこそわが海國日本は、太平洋上から米國の勢力を驅逐して、八紘一宇の理想的海洋新體制を完備しなければならぬ。わが松本博邑氏は本邦海運界の長老として赫々たる光芒を放ちつゝある巨豪である。現在は神戸商船社長たる他、太平洋船取締役たり、また浪花汽船、大同商船各監査役に任じ、關西斯界を牛耳つてゐるが、氏の識見、手腕は既に定評ある通りで、各社共に氏の名譽下に時潮に乗り、追手に眞帆を張つた形で隆々たる好業績を示してゐる。氏は明治十三年四月愛媛縣人三好隣邑氏の長男として誕生したが、先代ユキ女の養子となり、同三十九年家督を相續した。氏は本年還歴を迎へたが、人格は彌々圓熟境に入り、書道、俳句の趣味は益々高雅味を加へて來た。

歐州再戦は佛國の降伏に依つて愈々英國だけがやつとけられる順番で、太陽没すること無く七ツの海を支配する大ブリテンも、今日となつては誠に影が淡くなつて來た。

これで世界海運界には當分の間は歐洲各國は手が出せないのだから、この秋にこそわが海國日本は、太平洋上から米國の勢力を驅逐して、八紘一宇の理想的海洋新體制を完備しなければならぬ。

關東燃料・常務取締役

松山 勝雄氏

關東燃料株式會社常務取締役たるわが松山勝雄氏は、帝都燃料界の驍將として夙に聲名高き逸材である。昨年來本邦燃料界は石炭、木炭其の他供給不足の上に、賣惜み買溜め等の悪弊續出し、謂ゆる闇相場の横行盛んとなり、大都市々民は炭無しの寒い冬を越年させられたのであるが、本年は政府筋も大ぶ力奮を入れてゐるし、業者も市民も自肅して來たから、段々弊害を解消することと思はれる。とまれ燃料は工業界には素より一般家庭にとつて必要のものであるから、氏の如き斯界の權威者の善所が層一層翹望される。氏は明治二十五年四月の出生で、群馬縣人松山嘉三郎氏の長男である。夙に日本大學を卒業して大藏省に勤務してゐたが、大正七年淺野同族會社に轉じ、現在は同社及び鶴見臨港鐵道各囑託に任じてゐる。また氏は筒井商工株式會社監査役としても名を知られてゐる。氏は本年とつて四十九歳、愈々これからが本格的に大成に向ふ期で、人格、手腕、信用の三拍手揃つた氏の將來は洋々たるものがある。

京豐自動車工業・社長

三ツ木 秀治氏

名譽噴々たる京豐自動車工業(株)社長、三ツ木秀治氏は、從四位勳三等といふ肩書を持つ陸軍少將である。明治十二年の九月に新潟縣の人東海林正二郎氏の二男として生れ、同二十八年に三ツ木家の養子となり昭和四年に家督を相続したのであつた。夙に陸軍に入つて赫々の武功をたて、昭和五年に陸軍少將に累進、同年豫備役に仰せ付けられたのである。後、東京自動車工業(株)取締役に就任して實業界にも雄姿を現し、續いて昭和十三年十一月には自動部分品製造(株)専務取締役に推され、持ち前の辣腕振りを發揮して現在の榮位を築くに至つた。だが氏の事業的才腕はさることながら、愛國心は烈々と燃えて、業界の一翼を荷つて堂々前進する産業戰士の一人として、時局下事業界の第一線に雄々しく奮戦してゐるのだ。この愛國の士、努力の人、而して明敏なる頭腦と素晴らしい才腕とを兼ね備へた、氏が吾が實業界に巨大なる足跡を印して雄飛してゐるは全く心強い限りではあるまいか。今後の活躍を期待して止まない。

三谷伸銅・社長

三谷 與一 郎氏

氏は五十を過ぎて未だ間がない。實業家としては若手の方に屬する。と言つてこれは手腕云々の問題ではない。肉體的にも精神的にも將來性が残されてゐるといふ謂である。現に金物商を営みつゝ三谷伸銅株式會社社長、株式會社九二商店監査役等の任にあつて卓越せる經營手腕は噴々たる好評を浴びてゐるのである。したがつて手腕といひ、識見といひ、更に滿々の闘志と覇氣に至つては正に當るべからざる勢ひを示しつゝあり、時局下強力な統制下にある業界を奮ふにふさわしき存在と云ふべきである。氏の強味はなんと云つても譜代の俊才が揃つてゐることである。持駒が豊富にだけ關係事業の伸展力も期して俟つべきものがあり、しかも時局は彌が上にも氏の關係事業の進展に拍車をかけつゝある。氏は京都府人三谷與兵衛氏の長男、同子氏の令弟にあたり明治二十一年二月に誕生、大正六年家督を相続した。資性穩健篤實ではあるが、脈々たる覇氣は人後に落ちぬほどのものがあり、今後を大いに期待されてゐる。

東洋精機・社長

三好 廣氏

福井縣三好喜十郎氏の二男にして明治十六年九月出生、同三十八年家督を相続す、同三十六年東京高工電氣科を卒業し三井物産會社に入り、本店機械部副部長、紐育、倫敦各支店詰機械部副部長、大阪支店次長を歴任し、昭和十年十二月退職し、東洋精機會社常務取締役に選任せられ、現時同社長たり、さきに奉天造兵所のウシオ製作所各會社重役の顯職にあつて敏腕を振つてゐる。氏は性豪放にして人徳豊かなる士であり、多角的な事業家であるが故に財界の巨頭と接して知識、才能にみがきをかけた鍊達之士、東洋精機の社長に收まるや、快刀亂麻、忽ちにして社内の積弊を一掃し、根本的改革を斷行して社業の基礎を確立したものだ。その氏の英斷は社内外に定評あり、さすが豊富な學識と經驗に物を云はせた稀代の實業家として聲名噴々たるものである。齡既に五十を越えてゐるが、その現代に對する認識の正鵠なこと、亦深いことは、馳け出しの青年學者の到底及ぶ所ではないと云ふ。

東京石棉スレート工業・代表社員

三田 春吉氏

吾が國の事業界には立志傳中の人物が蓋し尠くない。しかしながら徹頭徹尾自力を以て大成した人物は稀有である。こゝにあつて三田春吉氏は獨立獨歩今日の成果を獲ち得た斯界の巨星であるのだ。氏は兵庫縣人三田龍藏氏の長男にして、明治十八年二月に出生した。幼にして實業界に志し、郷關を出て獨立獨歩スタートを切つたのであつた。現時は東京石棉スレート工業社(資)代表社員として堂々名譽を擧はれ、また同社第一、第二工場長をも兼ねて信望絶大であるが、今日の堅壘を築くまでには文字通りの努力奮闘史が繰り掛けられたのである。いま業界の隅々までも此の人ありとして三田氏の名は知られて居り、その豪勢さを如實に物語つてゐるが、然し氏は名利を得んが爲の手段、術策等は全然眼中にない。只管産業の勃興、福利民福に留意して刻苦精勵、澹々として産業報國に邁進し奮闘してゐるのだ。社員を遇するに實に優、全従業員から慈父の如く慕はれるも高遠なる人格の反映であらうと思はれる。

三谷商事・社長

三谷 彌平氏

福井市有数の事業家であり、福井縣多額納稅者として三谷彌平氏の令名は夙に同地一圓を風靡してゐる。氏は福井縣人先代彌平氏の二男として明治十九年十月に誕生大正二年家督相続と共に前名進次を改めて襲名に及んだ。石炭及びセメント商を営みつゝ嘗て福井無盡會社重役、或ひは又福井縣會議員などに選まれて、噴々たるその人望を裏書してゐたが、現在では三谷商事株式會社社長、敦賀セメント株式會社専務取締役に、三谷合名會社代表社員等の任に在り、飽くことなき精力的活動をつゞけつゝある。氏の如く事業一途に生きる事業的良心こそ眞に財界人の好典型とも云ふべきで、潜勢力の偉大なるも宜なるかなである。氏も今や人生の圓熟境に到達した。したがつて世の表裏にもよく通じ體験も相當に積んでゐる。資性濃厚の二字に盡き情味たつぶりなところがあつた。しかし正義觀念にはあくまで強かりそめにも非に屈するやうなことは斷じてない。謡曲に興味を持ち其技既に堂に入つてゐる。

電業社原動機製造所・常務取締役

三好 松吉氏

廣島縣三好周平氏の四男にして明治十八年十月出生、大正四年分家して現時前記各會社の重役として、首腦部切つての智將たる氏は、八面玲瓏の常識家であるとも極めて謹嚴な人である。従つて氏は自己に對して嚴格、人に對しては飽くまで春風駘蕩、謙讓そのものであることは、一度、氏に接した人の合言葉になつてゐる程だ、都會の若い青年男女が自然に對して無關心な事をいましてゐるが、自然の悠久なる愛の世界とその心を常に融け合はせ、平和靜謐の精神を以て事業にいそむ氏の如きは、洵に實業界の稀に見る存在と云ふべきであらう。凡そ人の上に立つもの、弊として、自己の優位の椅子を笠にして權柄付くで輩下を馴使することであるが、氏は人の階級は勿論地位を不問にして、對等に話し合ふ、實に襟度ある人物として上下に心服されてゐる。かゝる氏を擁して前記會社の前途は益々多幸と云ふべきであつて氏の異彩ある手腕は、今後に向多くを俟つべきであると筆者は叫んで擲筆したいと思ふ。

丸見屋商店・總支配人

三輪 善太郎氏

東京府三輪善兵衛氏の長男にして、明治二十二年十二月出生、昭和十四年五月家督を相続す、夙に早大商科を卒業し、現時丸見屋商店總支配人にして東京府多額納稅者に列す。肩書の外藥劑滋養品香粧品石鹼製造販賣業を営んだ。先代善兵衛商才霸氣ありてミツ石鹼の製造を始め幾多の新化粧品を賣出し、傍ら化學研究所を起し、製品を改良する等其嶄新なる廣告術と相俟つて丸見屋の屋號は全國に喧傳されるに到つた。善太郎氏も先考におとらず商才に長け、(これは商人根性といふ悪い意味ではない)先代に優るとも劣らぬ程の商才神智に近い。世の業界にあつて海千山千といふ人もあるが、氏の性は濃厚篤實で人徳豊かなる會ふ人は必ず親愛の情を思はず感ずるのである。而も氏は時代認識に一家言を成す程の明晰なる頭腦の持主であり、その物に對する冷徹なる判斷は意表に出て、誤またずと云はれる位である。その一面人情の機微をよく會得して後進の師表と仰がれその寛量なる人物振りは既に定評がある。

協立興業社・社長

三輪外次郎氏

氏は新潟縣三輪惣吉氏の二男にして明治二十三年七月出生し、大正十一年家督を相続した。現時協立興業、三宅島電氣、アルマイト應用商品各社長、日本水道、小笠原島電氣各取締役の重職に在る、氏は生え抜きの江戸っ子であり、財界實業界での苦勞の味は枯淡の域に達し、貫禄は充分、識見豊富で卓抜、洵に得難い傑物である事を感ぜしめるし、今日數種の會社の社長、取締役を兼務して實業界に活躍悠々想ひを遠大に馳せてゐる。關係會社は周知の如く、本邦に於ける有數の優良會社又は大會社であつて氏の實力の及ぶ所教育の響く所廣く且つ深大なるを思はざるを得ない。なる程氏は學歴にして特記すべきものなしと云つても、學必らず、實際社會學に非ず、又實際社會學必らず最高學府を條件とせず、要は人物如何であると云ふよりはもつと根本的にその人物の實力であり、能力であることは既に現代の常識になつてゐる筈である。氏も亦斯くの如く實力あり能力を具備した有數なる人物として推すに足るものがある。

帝國除虫・取締役副會長

御前慶造氏

和歌山縣御前利平次氏の四男にして明治二十九年三月出生。昭和四年先代喜八郎の養子となり同五年家督を相続したのである。夙に岡山醫大を卒業し同校研究部に勤務の後、帝國除虫會社に入社し、社長として迎へられて昭和十四年一月同社取締役副會長に選ばれて今日に至つてゐる。氏は未だ壯年であるが意に多才にして手腕を揮つて日尙淺しとしても、今後はその期待をかけて十分であらう。氏はどちらかといへば學者、技術家タイプの人物であつて寫眞を趣味に持つ程地味な人である。しかし會社そのものが地味であつて、氏の如き研究心旺盛しかも濃厚篤實の士を社長として迎へたことは會社の發展のため、ひいては農村の福利のため慶賀すべき事であることは今更萬言を要すまい。氏は人に接するに常に春風を以つてし、自己を律するに秋霜を以つてすることは有名で、氏が人徳豊かで、圓滿なる風貌を備へてゐることは蓋し右の點から來てゐると筆者は信じて疑はないのである。自愛健闘を祈つて止まない。

兼松商店・事務取締役

御前綱一氏

和歌山縣御前利平次氏の長男として氏は明治二十一年二月出生す、同四十二年東京高等商業學校を卒業し、前記商店に入り、シドニー支店、本店輸入部長、東京支店長を経て、大正十五年取締役となり、尙其他會社の重役たる外、實弟慶藏氏のつとむる帝國除虫株式會社の相談役で亦、兼松羊毛工業株式會社の監査役の要職に就いた。氏はこれ等多くの會社・部内に就て夫々の充分なる抱負と經驗、識見を持ち好く統率指導して誤らないのは蓋し實業界に最適の人物であらう、世上所謂重役稼業なるものあり、徒らに多岐且つ多様な諸會社に椅子を有して「不在」重役の醜態を曝露し只々それによつて營利のみ目指すもの多々ある中に、氏の如きは全く各部門に觸手を延ばしても夫々堂々たる經營上の指導と鞭撻を怠らない點は見上げるべき人物として推賞するに足るものがある。斯くの如き責任感の強き氏を有して業界發展に努めることは、氏の關係會社は固より、斯界の爲めに貢獻する所は尠くないであらう。

本野組・代表社員

水野甚次郎氏

貴族院議員、勳四等水野甚次郎氏の名聲は絶大だ。氏は廣島縣人先代甚次郎氏の長男で明治十四年三月に生れた。夙に東京物理學校に學んだ秀才で在學當時將來を期待されたが、學を卒へるや方向違ひの土木請負業を創め、合名會社水野組を經營、業界の巨將として信賴に應へその勢力實に大なるものがある。現時水野組を主宰する傍ら藝南軌道、廣島觀音地埋立各取締役も兼ねて八面六臂の活動振りを示してゐるが、吳商工會議所顧問として、縣下の多額納税者として財界に堂々たる勢力を堅持してゐる。氏はまた人格優れた高德の人で在郷軍人分會長、吳市會議員、同市會議長等の公職に擧げられ、昭和七年に貴族院議員に互選されたのは既に衆知のこと、同十二年五月には吳市名譽市長に推選された。斯の如く徳望家の氏が、吳市民はもとより全國民の信賴を一身に受けて慈父の如く敬慕せられるも、これみな氏の高邁なる人爲の政せる所以のもので正に氏の如きを地方政財界の指導者、國家的大人物と云ふべきであらう。

京都倉庫・事務取締役

水野猛男氏

新進氣鋭、正にこれから飛躍せんとしてゐる水野猛男氏は京都倉庫株式會社の事務取締役である。氏は岐阜縣の人、井上甚七郎氏の息同英一氏の義兄にして、明治二十七年一月に出生水野竹次郎氏の養子となり大正十三年に分家した。京都倉庫に於ける氏の奮闘ぶりは至極鮮やかなもので、實地から叩き上げた氏の手腕は卓抜なる威力を有し、飽くまでも實力的な人物である。柔軟性はないとは云へ硬骨の中に弾力性を有つ俊才で、體ては颯爽と財界の前面に活躍するであらう大器であることは、こゝに明言を憚らぬ次第である。氏の強引な指揮振りは全く雄々しき限り、情實も妥協もなく徹頭徹尾合理的經營でなければ氣がすまぬ力闘には、同社社員がみな傾倒してゐるも當然のこと、徳望篤く同社の輝ける存在として他を壓してゐる。才あり腕あり而して熱あり、加ふるに遠大なる抱負あり、よく一軍を率ひて前進する一將として非の打ち處なき氏の人格には、今後斯して俟つべきものがあらう。

南洋産業・事務取締役

水原謙一氏

南洋電力株式會社は帝國南方の生命線たる南洋に於ける電力界のヘゲモニーを握る覇者だ。正に南進政策の最前線に先驅する同社は、創業以來愈々好調、近來とりわけ活況を呈してゐる。事務取締役は水原謙一氏。氏は京都の産で明治二十八年の生れ、夙に敏腕の名聲あり、雲に内海運輸、日本石粉、岩白石灰工業各會社の重役にして現時南洋電力のほか南洋産業株式會社事務取締役、南洋電氣、南洋林産各株式會社取締役として活躍、産業確立のために斷乎として健闘してゐる。社業發展、南洋開發の爲には文字通り臥薪嘗膽、言語に絶する辛酸を嘗め盡し、あらゆる苦境と闘つてきたのだ。この氏の熱誠をもつては何者と雖もその前途を阻むことは出来得ず、遂に國策線上に頭角を現した。時局多端の折柄、才氣煥發明朗そのもの氏たりといへども、双肩に擔つた南進政策産業確立の使命は重い。氏が今後如何なる飛躍發展を遂げるか、その一舉手一投足こそ各界ともにこぞつて刮目すべきものがあらう。

三和鋼材・社長

溝口軍太夫氏

氏はいまや隆々たる躍進を示してゐる優秀會社三和鋼材の社長である。佐賀縣人溝口半平氏の長男にして明治八年五月生れ、昭和七年に父退隱の後を承けて家督を相続、鐵筋コンクリート株式會社代表取締役、東洋セメント工業株式會社監査役と指導振りを嗜し、利刃の斬れ味を示してゐる。素より明敏努力の士、營々として三和鋼材の社長につとめ、經營、營業と一人で切り廻し、只管全社員の督勵に意を用ひてきた。氏はその風貌に見る如く人間的に非常に温容であり且つ情味に篤く、内外の信望を一身に蒐めてゐるあたり所謂實業家タイプとは全く相違し、むしろさわりのない教育家を思はせるが、炯眼、明敏なる頭腦と卓越せる手腕力量のほどは、正に圓熟の境地だ。潤達の氣風好く他に敬慕の念を起させ、産業報國の意氣情夫をも起たしむといつた熱情に燃える氏こそ、業界に奮進する雄將としての貫祿を遺憾なく備へ持ち、光彩ある實力を以て尙も飛躍せんとしてゐるかの如くに見える。

大阪商事・事務取締役

溝口庄太郎氏

大阪實業界の一方の雄將溝口庄太郎氏は今をときめく大阪商事の事務取締役であり大阪株式取引所取引員である。氏は明治二十四年七月、京都の人溝口長兵衛氏の長男として生れ、大正十四年に家督を相続した。氏の實弟忠次郎氏は同じく業界に名聲高く、同社事務取締役としてよく事務庄太郎氏を輔佐、一致協力社務にあたつてゐる入社してより浮き沈みの波を漕ぎつて社運と共に生きてきた溝口氏の努力こそ同社にとつてまことに甚大で、今や氏の地位は押しも押されぬ輝ける存在を示してゐる。明晰にして透徹せる頭腦を持ち、加ふるに豪放果敢な快男子。この時局下、統制經濟のもとにある業界に於て、今後如何なる飛躍を見せるか、氏、天賦の才を揮ふに最もよきチャンスではあるまいか。人格高潔にして私慾なく、人を制するの妙を得て情味溢るゝばかり、勢力實に大であるが、「艱難汝を玉にす」とは正に名言、過去に於ける人生行路の半ばの苦難こそ氏をして磨き鍛え上げた試練の道にほかならない。

日本人絹バルブ・常務取締役

溝口新平氏

自由経済から統制経済へ、時局下事
業界は文字通り多事多端である。だ
がバルブ工業の目覚しき躍進振りは
正に時局産業の華とも云ふべきで、中でも日本人絹バルブの近來の活況は驚
嘆に價する。常務取締役は財界の中堅溝口新平氏、今茲に氏の素描を披歴し
やう。明治二十年に長崎縣溝口格一氏の二男として生れた。同四十二年に長
崎高商を卒業、直ちに日本生命保險に入社、同社金融方面に才をふるひ英才
の程を自他共に許すに至つたが、大正七年神戸鈴木商店に轉じたのである。
又同九年には歐米諸國視察の途にのぼり、翌十年には南洋印度アフリカ諸方
面を新販路開拓の爲に巡視、歸朝後太陽曹達取締役就任、續いて昭和元年
に氏自ら日露木材會社を創立、常務として采配を揮つた。更に同八年二月以
來、日本人絹バルブ常務、日本人造羊毛取締役に選任され、現在では山陽バ
ルブ工業、錦州バルブ各(株)常務をも兼ねて、正に旭日昇天の勢ひで國策線
上に奮闘を續けてゐる。人格また優れた高徳の逸材である。

富國製油・社長

皆川三郎氏

中國地方實業界に人材を求むるなら
ば先づ第一指が、富國製油社長たる
わが皆川三郎氏に向けられるであら
う。氏は人格高麗な典型的好紳士であるが、多年實業界にあつての戦さを開
ひ抜いて來てゐるから、斯様な風貌の内面にはガツチリした底力を蓄へてお
いて、何ものをも畏れず何ごとにも屈せぬ意志を以つて邁進して行く人である
それ故に氏の關係は何れも堅實な歩みを續け、裕々迫らざる業績を示して業
界を矚目せしめてゐる。即ち氏は富國製油社長たる他、山陽木材材防衛代表取
締役、日本商事取締役、日本銅鑛監査役、東亞、山陰木材材防衛各相談役に任
じてゐるが、製油、製作が時局下の重要産業であることは勿論であり、木材
防衛は木材の質を強めてその生命を長からしめるから、物資節約時代の今日
殊に重要視されてゐる。氏は明治十六年十月茨城縣人皆川眞徴氏の三男とし
て誕生、大正十四年令兄緩氏方から分家した。學歴は早大商科卒業で、四男
二女の子寶に寵まれた幸福な家庭の慈父である。

和歌山紡績・専務取締役

南俊一氏

南俊一氏はわが實業界有数の青壯闊
士として颯爽たる雄姿を第一線に描
出させてゐるが、また和歌山縣下切
つての富豪として令名噴々たるものがある。氏は和歌山紡績専務取締役の樞
席に在つて社長川口義宏氏を輔けてゐるが、明敏なる頭腦と卓抜なる經營手
腕を有する氏の采配振りはまことに光彩陸離たるもので、同社の業績は斷然
他を壓して業界羨望の的となつてゐる。なほ氏は同社の筆頭株主である。氏
はまた廣く驥手を伸ばして日華製紙専務取締役たる他、三池炭業、木津川船
渠、和歌浦土地、市岡土地取締役、有田鐵道監査役等に任じてゐるが、之等
各職の事業に於ても氏の手腕は遺憾なく妙諦を發揮し、賑々たる業績を示し
つゝある。氏は明治二十七年四月和歌山縣の名家たる土族南楠太郎氏の二男
として出生し、昭和十一年家督を相続した。大正六年東京高商を卒業して實
業界に乗り出したもので、先には關西石材社長に任じてゐた。本年四十七歳
の春秋豊かな氏の前途は洋々たるもので、その大成が期待される。

東京製鐵・専務取締役

南俊二氏

わが實業界の長老として南俊二氏は
赫々たる聲名あり、その快刀亂麻を
斷つ概ある經營手腕は業界の範とな
つてゐる。氏は東京製鐵専務取締役として社長岩崎清七氏を輔け、同社の
實務萬端の實權的采配を揮つてゐるが、同社製産の炭素・ニツケル・マンガ
ン・クロム鋼は最優秀品として時局下の軍需重工業界に譲はれ、その賑々
たる社運の隆盛は斯界羨望の的となつてゐる。また氏は同社の仔會社たる大
阪造船所社長たる他、大日本炭礦、北辰炭礦各社長、磐城セメント、富國セ
メント、富山セメント、帝國ニューヒューム鋼管、滿洲銅鉛鑛業、相模鐵道
各取締役任じてゐるが、之等各社は何れも時局産業の中樞をなす重要産業
で殊に造船は歐洲再戦の展開によつて頓に活況を呈し、採炭は政府當局の援
助獎勵に依つて増産され、セメント界も活潑になつて來たから、氏の關係事
業は萬々歳である。氏は明治十五年九月大阪府人南徹治郎氏の二男として出
生大正元年分家した。學歴は明治三十六年の大阪高商出身である。

大倉商事・會長

皆川多三郎氏

本邦事業界一方の覇者たる大倉組の
柱石としてわが皆川多三郎氏の名は
雷の如くに轟き渡つてゐるが、氏が
三十有餘年に渡つて大倉に盡して來たことは、取りもなほさずわが日本の實
業躍進に貢献したものである。氏は現在大倉組理事として重きをなしてゐる
他、大倉商事會長として比類なき名采配を揮つてゐるが、猶ほまた大倉系の
諸事業に關係して産業國策のために寧日なき活動を續けてゐる。即ち大倉紡
機製造、シヤーリング工場、川崎重工業、中央工業各取締役、川奈ホテル、
日本ダンロップ護謨各監査役に任じてゐるが、之等各社はその何れもが時局
産業の花形として隆々たる業績を示して居り、氏の偉大なる經營手腕に指揮
されてゐるのである。氏は明治十七年一月廣島縣人たる皆川多八氏の二男と
して誕生したが、同四十四年令兄多一氏方から分家して一家を成した。同四
十二年東京高商を卒業するや直ちに大倉商事に入り、爾來今日に至るまで三
十有餘年間を大倉一本槍で押し通して來たものである。

寶塚有馬自動車・社長

南喜三郎氏

關西實業界の驍將としてわが南喜三
郎氏は噴々たる聲名を恣いまいにし
てゐるが、また氏は慶應型の朗快
潤なOBスポーツマンで、殊にゴルフに長じ、狩獵は天狗をこどけといふ腕
前だから、社交界の花形として人氣の中心になつてゐる紳士である。氏は明
治二十年九月、和歌山縣人南喜兵衛氏の四男として誕生したが、大正四年令
兄榮治氏方から分家して一家を立てゝゐる。先是明治四十四年慶應義塾を卒
業して實業界に乗り出したが、頭腦明晰にして才腕にたけたる氏は行くとし
て可ならざるはなく、今日の大を成したもので、現在氏は寶塚有馬自動車社
長、寶塚土地建物事務取締役、寶塚ホテル、寶塚映畫、六甲登山架空索道各
取締役として、關西の歡樂境たる寶塚を中心とした交通機關、土地建物、映
畫界に覇を稱へてゐるが、また風雲を伸ばして、三池炭業、光永鑛山、日本
製網造機各常務取締役たる他、東洋セメント工業取締役に兼ねてゐて、時
局下股販産業の寵兒たる礦業、製作、セメント界に活躍してゐる。

大同貿易・専務取締役

宮崎彦一郎氏

神戸に於ける貿易界の指導的人物を
求めるならば、先づ第一に宮崎彦一
郎を推すに躊躇しない。現に大同貿
易株式會社専務取締役を始めとして日本纖維雜品貿易振興、日本輸出布製
品、大日本輸出タオル各株式會社取締役、大日本輸出莫大小、別珍コール天輪
出振興各株式會社監査役等を兼ねる他、更に日本護謨輸入組合理事、日本綿絲
輸出組合聯合會監事等の職にあり、流石に永年斯界を馳騁して來たゞけに、
その對外的手腕と事業的手腕とは相伴なつて確かに指導者として推稱するに
足るものがある。氏は滋賀縣人宮崎彦五郎氏の長男にして明治二十一年七月
に誕生、大正十年父君彦五郎氏の退隱により家督を相続した。明治四十三年
上海東亞同文書院を卒業後、伊藤忠商店に入り同社神戸支店支配人となり、
大正九年九月改組により大同貿易會社創立と共に其専務取締役に就任した。
氏は貿易事業に携はること既に三十餘年といふ古強者で、時局下に益々經驗
を加味して來た今日、その動きは常に刮目して見られてゐる。

大神中央土地・社長

宮崎彌作氏

大神中央土地株式會社社長並びに株
式會社宮崎商店代表取締役を始めと
して、其他幾多の重役を兼ねて名實共
に事業界の長老にふさわしき存在をなしてゐるのがわが宮崎彌作氏である。
斯の如き大成功を収め羨むばかりの盛運を招來したのも、氏が常に國家社會
の福祉増進に資する事をもつて事業運營の根幹目標となし、單なる營利一方
の打算的なるを排して、内外新知識の吸收とその蘊釀とに携まざる努力を捧
げて來た、所謂減私奉公に對する當然の報ひであるとされてゐる。氏は大阪
府人宮崎彌三郎氏の令弟にあたり明治八年二月に誕生し同二十八年に分家し
た。夙に實業界に入り堅實第一主義の經營方針によつて、全智をその發展の
ために捧げ盡して、遂に今日此の盛運を見るに至つたもので、その識徳手腕
兼備の名將振りは是亦業界刮目の的となつてゐる。大器は大任を與へらるゝ
ほど輝やかしい存在を示すもので、氏が日本珪瑯機器輸出組合理事長、大阪
金物同業組合長の職に在つて光りを増しつゝあるのを見ても領ける。

日本精工・取締役

宮司謙次氏

時局下股販産業界の花形たる日本精工の近時に於ける躍進は全く驚異的なものがある。同社は本邦ベアリング製作界の最優秀会社で、歐洲戦亂の爲めベアリングの輸入不可能なる今日わが航空機、自動車、車輛界に同社が齎しつゝある功績は誠に甚大なるものがあり、同社の膨脹發展は國策的にも全く當を得てゐる。わが宮司謙次氏は同社取締役として創立當時より活躍してゐる偉材であるが、また氏は日本オライト社長並に昭和新興工業代表取締役としても聲明高く、帝都製作界に赫々たる光芒を放つてゐる。氏は明治十七年三月靜岡縣人宮司八十七氏の長男として出生したが、昭和五年家督を相続した。先是明治四十二年東京高商を卒業したが、大正五年日本精工の創立と共に同社に入社し、同社今日の盛運の招來には與へて力があつた。氏は當年とつて五十七歳、温厚篤實なる人格は愈々圓熟味を加へて、諸人渴仰の的となつて居り、きる令夫人との間には一男四女の子寶を籠まれて、幸福な家庭は羨ましくばかりである。

宮下木材・社長

宮下治之介氏

神戸木材界の第一人者としてわが宮下治之介氏は巨星の如く輝きつゝある巨豪である。現在氏は宮下木材、宮下木材商業、神戸木材興業各社長たる他、三和木材、浪速製材各取締役として、關西斯界を牛耳つてゐるが、また葛野回漕店監査役、宮下工作所代表社員として運送製作界にも名がある。宮下家は三百年來神戸に居住する舊家として知られてゐるが、木材業は先代の創業するところ、今日の家礎を築き上げた。氏は先代治之介氏の長男として明治二十四年四月誕生したが、大正十一年家督相続と共に前名重太郎を改めて襲名した。夙に神戸商業を卒業して嚴父の遺業を繼ぎ、木材界に乗り出したが、時局下の好況に依つて氏の事業は愈々膨脹發展を遂げ、今日の大を成すに至つたものである。氏は圓滿なる人格者として一族一門を率ゐるが、業界からも敬仰の的となつて居り、令弟寅次郎氏は先に浪速製材、宮下木材の重役たり、また從兄惣左衛門氏は宮下木材監査役、宮下衝器製作所主として聲名がある。

明治商店・事務取締役

宮下武一郎氏

わが宮下武一郎氏は現在明治商店事務取締役として有鳴社長を輔け乍ら同社の實務萬端の指揮に任じてゐる巨豪である。同社は言ふまでもなく明治製糖の兄弟会社であり、亦明治製糖の親会社として本邦に於ける菓子、砂糖、牛乳界を牛耳つてゐるが、氏はまた同社の總務部長、砂糖部長をも兼ねてゐる。氏はまた明治製糖取締役に任じ、普通酒精元賣監査役をも兼ねてゐて、聲名噴々たるものがある。氏は明治十九年五月長野縣人宮下今朝太郎氏の長男として出生したが、大正四年祖父武平翁の後を受けて家督を相続し、前名武人として出生したが、大正四年松本商業を卒業し、大阪増田商店に入つたが、後ち明治商店に轉じ、その抜群の力量手腕を認められて漸次果進し、取締役を経て大正十二年常務取締役に擧げられ、現在は専務の樞席に就いたもので、明治商店が今日の盛運を招來したことは甚大なる貢獻を致してゐる。氏は本年とつて五十六歳、清水谷高女出身の才艶廣子令夫人との間には四男四女の子寶がある。

横濱帆布・常務取締役

宮代彰氏

時局下に於けるガソリンの統制・制限はタクシ界に大恐慌を與へ、終に乗物界には人力車が復活して、巷間の話題を賑はしてゐる今日であるが、この現象はまた海運界、漁業界に於ても見られる。即ち世界を擧げて戰亂の渦中にある現在では、鐵鋼材並に汽鐘、内燃機等の機械類、及び重油等の不足の爲め、小型運送船、漁船等の新造は多く帆船式を採用するものが多くなつて來た。従つてこのところ帆布並に船具會社は、頗る多忙を極めつゝある次第である。わが宮代彰氏は本邦に於ける帆布並に船具界の雄たる横濱帆布常務取締役に任じてゐて、斯界に赫々たる聲名を馳せてゐる驍將である。氏は明治二十七年二月神奈川縣人宮代七郎兵衛氏の四男として出生したが、大正十三年令兄周太郎氏方から分家して一家を立てた。夙に横濱帆布に入り、尾道工場を経て取締役に擧げられ現在は常務として名采配を揮つてゐるがまた日本金屬工業取締役にしても名がある。猶ほ氏は美由喜令夫人との間に四男一女の子寶がある。

中央化學・事務取締役

宮田專治氏

わが宮田專治氏は中京名古屋製劑及び工業藥品界のベテランとして巨星の如く輝く偉材である。氏は明治二十一年七月愛知縣人宮田千次郎氏の長男として誕生し、昭和十年家督を相続した夙に製劑師として中央斯界に名あり、また工業藥品商を兼業し、大正四年には西區大道町に中央化學株式會社を創立、其の事務取締役の樞席に就いたが、また日本模範製劑取締役に兼ねて居り、且つ名古屋實業製劑會副會長に擧げられて斯界のリーダー役に任じてゐる。猶ほ氏は昭和九年には財團法人製劑會を創立し、爾來その常任理事として社會教化事業に盡瘁しつゝある。斯くの如く氏は德行高き人格者であるから、衆望一身に集まつて内外の渴仰深く、従つて氏の事業は隆々たる盛運を辿つて一路向上を續けてゐる。氏はまた無聲と號して漢詩、書畫をよくする風雅の道の人であり、名著「武藏野の露」は好評噴々たるものがある。時局下愈々多事多端なる秋、銃後に氏の如き文化的人材が在ることは、邦家の爲め欣慶の至りである。

北川産業海運・事務取締役

宮田忠也氏

歐洲再戰の大展開は終に伊太利の獨逸側參戰に依つて佛蘭西の降伏となり、陽の沒すること無き七ツの海の大支配者と呼ばれた大英帝國の没落も今や時間の問題と見られる現狀となつた。これ世界の世界からは全歐諸國が敗退した形だから、目下のところではわが海運界の競争相手は、太平洋を差挟んで亞米利加のあるのみとなつた。従つてわが海運界は頗る大活況時代を現出してゐるが、本回は第一次戰時代と異つて、舊大國が没落して新興國が立上る世界經濟更新の時代であるから、海運界の盛況はむしろ平和來後と見るべきであらう。わが宮田忠也氏は關西海運界の雄として夙に令名高き逸材であるが、現在北川産業海運事務取締役にたり、また太平洋汽船取締役に名采配を揮ひ、その卓抜なる識見手腕をもつて斯界を睥睨せしめてゐる。氏は明治二十年東京府人宮田忠寛氏の二男として誕生、大正十年家督を相続した。學歴は東京高商卒業で夙に海運界に入つた。猶ほ氏はトミ令夫人との間に二男四女の子寶がある。

日本レヨン・事務取締役

宮野源一郎氏

日本レヨン會社は本邦に於ける人絹界の王座を占める大會社である。組織事業が驚異的發展をなし、世界市場を壓して居る豪壯さは實に壯觀其のものである。就中斷然頭角を表はして居るものに本社と東洋レヨンとがあり兩者肩を摩して堂々たる躍進を續けて居るが、其の蔭には事務取締役宮野源一郎氏の献身的努力と全知能を擧げて其經營に精進する決死の活躍があることは言ふまでもない。氏は其他新日本レヨン常務取締役、日本興化取締役に關連會社の樞機を握り、堂々として纖維業界に覇者の歩みを續ける様は當代の俊傑である。事業成功の根幹をなすはその人である。日本レヨンが新興産業の覇者として堂々たる飛躍を續けつつあるは全く適材を得たが爲めで、粉骨碎身の努力を傾け、献身的精進に不休の日夜を送りつゝある宮野氏の經營の手腕と徳とを牢記すべきである。氏は明治二十年五月、千葉縣宮野小太郎氏の三男に生れ、明治四十五年東京帝大工科學業の英才で、春秋豊かなる偉大な斯界の存在である。

昭和合成化學工業・常務取締役

宮野春之助氏

宮野春之助氏は日本電工會社購買部長として出色の名を示して居る。氏は明治二十五年八月、東京府宮野彌五右衛門の長男として生れ大正六年分家獨立す。大正二年工手學校應用化學科を卒業し、米澤高工助手、電氣化學工業會社技師を経て昭和四年、昭和肥料會社に入り工務課長を経て翌五年調査課長となり、精勵格勤、常に研究的態度を以て事に當り信望を加へた。同十一年鹿ノ瀬工場長に榮進し大に努める所ありしが、同十四年一月本社詰となり企畫部長に昇進した。昭和十四年六月日本電工と併合するや同社購買部長に就任し今日に至る。氏は眞剣にして熱血的性格を有し加ふるに學究的なるが故に實務方面に於ても整然と業務を捌いて行く洵に篤行の士である。力量手腕に於ても豊かであり囑目の中心となつてゐる。又資源局専門委員を囑託せられ、昭和十二年十一月昭和合成化學工業會社に取締役に任じ入社同十三年常務に昇進し、内外に信用厚く、「本邦並に世界に於ける硫酸及石灰素事情概況」外二篇の著書がある。

藤田組・常務取締役兼業務課長

宮原 清氏

關西に馳名を擧げられる藤田組に常務兼業務課長として堅實なる手腕を發揮し全員を號令する宮原清氏は、豊原伸銅所、宮原伸銅所、各取締役會長、神島化學工業、明星鑛業各代表取締役、神島人造肥料、樺太岩鑛業各專務取締役、梅田製鋼所、梅田機械製作所、關西硫酸販賣、片上鐵道、鐘淵實業各取締役として十指に餘る會社の要職に就き阪神業界に光彩陸離として重要な存在を示して居る。氏の事に當るや堅實第一主義に則り關係の事業會社悉く堅實な發展を遂げて居ることよつて知られる如く財界稀に見る著實眞摯の偉材であるといふべし。寸暇を見ては讀書に親しみ研鑽を事とし自己を磨き事業に資する點、他の追従を許さない明治三十八年慶應法科を卒業せる氏は、同四十年藤田組に入り、三十五年間獻身的至誠を傾けた其純情、藤田組今日の盛況の裡に氏の汗と血が彩られ織込まれて居ることを明記せねばならぬ。氏は長野縣の産、明治十五年生れ、練達滿能の士であつて財界の重鎮たるを失はない。

宮原機械・社長

宮原七三郎氏

宮原七三郎氏は長崎縣土族内海郡造氏の三男として、明治十一年三月出生、同四十二年先代宮原小五郎氏の養子となり、昭和五年養父退隱の後を承けて家督を相続す。夙に機械工業に關する實際研究を積み技術を修得した氏は宮原鐵工所を創立し、之が經營に當り、自ら職工服に身を堅めて、實に粒々の辛苦を重ね、其の奮闘活躍は涙ぐましいものがあつた。然し氏の鐵よりも堅い意志と不屈不撓の精神とは微動だもしなかつた。かくして忍苦の數年に又數年を重ね業績はめきめき、上昇の一路を進んだ。氏は時代の流れを汲み斷然改組を實行し株式會社として自ら社長となり、新裝せる經營に決死の努力を續け、西九州の一角に其の存在を示すに至つた。同社の今日ある社長宮原氏の軒昂なる意氣と血と汗と實力とによる奮闘の成果である。東都の大財閥三井は一代にして王座に就く。氏の基礎既に磐石の安きにあり今後の精進は愈々重要性を含むであらう。立志史傳中の氏の成功は情夫をして起たしめるものであることを信ずる。

大隈鐵工所・常務取締役

村岡嘉六氏

叱り飛ばして能率をあげさせたなどいふことは、既に前代の遺物である。或實業家が一人を使ふと思ふな使はるゝと思つて働け」と云つたことがある。蓋し人情の機微をうがつた名言である。世相が斯くも複雑化してくると、それに對應すべき指導方法がある方面に向つて、展開して行く。結局指導精神の合理化が最後に成功といふ副産物をもたらしてくれるのである。さう云つた意味のもとに、今日の大を成した氏の場合なども、所謂人的資源を有効に、適切に使用したものと云へるのである。氏は佐賀縣の産、村岡好太郎氏の長男として明治十七年六月に誕生した。夙に大隈鐵工所(株式會社)に入り、昭和十年に同所常務取締役に、同十一年更に株式會社大隈鐵工の取締役に就任したもので、大隈鐵工と氏との關係は最早きつてもはなせない絶體不可分の物となつてゐる。從て同社の大黒柱として重きをなし、その經營の推進力と呼稱され、業界のヒーローと唱へられつゝあるのも決して奇とするには足りないのである。

鶴見製鐵造船・常務取締役

村上 是助氏

古來から日本人は手先が器用なのである。頭腦の優秀なるのと併せて手先の器用なること正に世界に冠たるものと誇稱するも決して過言ではないのである。古代美術の眼を奪ふが如き絢爛さ典雅を極めたる彫刻美などに至つては、それを如實に物語るものであり、今日造船技術の長足なる進歩も、祖先の流れを汲む謂はゞ傳統的優秀性に依るものと云へるのである。本邦造船界の明星として斯界を測歩する村上是助氏の雄姿は、過去に於て修練の腕を鍛えあげて來たゞけあつて、その牙えは實戰の野に於ける三軍の將にも比すべきものがある。氏は福岡縣土族河崎十郎氏の三男として明治二十年八月に誕生、其後先代養父氏の養子となつて大正十二年に家督を相続した。明治四十四年東京高等商業學校を卒業後安田銀行に入り、人事庶務課長を経て昭和十一年十二月に考查課勤務となつたが、後に之を辭して鶴見製鐵造船株式會社に入り常務取締役の樞位に就くと共に、日本鑄造株式會社監査役を兼ねて今日に及んでゐる。

松屋百貨店・社長

宮村吉藏氏

九州デパートの王座を占め福岡を本據とし、大牟田に支店を有し、堂々たる偉容を以て泰然たる經營振りを發揮しつゝある松屋百貨店當主であり、社長である宮村吉藏こそ福岡が産んだ英傑である。氏は一徒弟より身を起し僅々三十年間に福岡大松屋を建設したのである。氏の嘗膽の苦闘は氏の歴史が物語つてゐる。氏は滋賀縣赤塚家の二男、明治十四年の出生であり先代いと女の養子となる。夙に實業界に雄飛せんと志に燃え、京都市松居博多織店に奉公したが俊英の才は忽ち認められ、十八歳にして同店博多の本店に販賣部長として拔擢せられた程の天稟的商才の持主だつた。明治四十四年獨力モスリン店松屋を創立したのが抑々今日の基礎である。大正八年合名組織に改め百貨店となし、同社代表社員に就任したのであるが、後更に株式に改組し自ら初代社長に就任して今日に至る其の間に於ける苦闘は今更論ずる迄もあるまい。昭和二年地方産業功勞者として紺綬褒章を賜はる。洵に當代の俊傑といふべきである。

松原鐵工所・社長

向 清氏

氏は我國鐵工業界の花形的存在たる松原鐵工所の社長である。明治十八年十一月に兵庫の人向彦太氏の三男として出生し、同四十一年に兄長七氏より分家、業界に單身乗り出したのであつた。松原鐵工所は云ふまでもなく、現下産業界の重要部門として躍進してゐる優秀會社であり、從つて軍需インフレ以來全く時局の波を全面的に受けて盛況を來してゐる。然しこの盛況の蔭には嘗々たる社長向氏の苦心と努力が秘められてゐるのであつて、一町工場から今日の霸業を完成させた氏の手腕も、素より相當以上のものだ。氏を目して當代の「あたり屋」と稱するものも居るが、顧みて氏自身、長年に渉る汗と脂の結晶と思ふならば不遜なるその稱呼に苦笑を禁じ得まい。實に氏が製品の改良と熟練工の養成に盡した努力は並々ならぬものであつた。今日でこそ優秀國産品の製造は業者の誰しもが目指すところであるが、その昔夙に機械工業の發展の爲の重大眼目たる此處に目を着けたのは流石と云はねばなるまい。洵偉材である。

馬來護謨公司・社長

村上 濱吉氏

靜岡縣鈴木幸吉氏の弟にして村上文策氏の義兄である。明治十八年二月出生し、村上多三郎氏の養子となり大正四年養父文策方より分家す、鑛業を營み傍ら多數會社の重役であり、又東京鋼作所代表社員でもある。氏は日夜職工服を着て油と塵埃にまみれつゝ男女工達に伍して刻苦精勵の限りをつくした程であり、この努力苦心は後日酬いられて社運隆々として發展、遂に今日我が新業界に覇を稱へるまでになつたものであることを筆者は特に牢記したい。事業家としての氏の特徴はその事業を飽くまで愛すること、人一倍の勤勉性にある。撓まざる努力と奮闘こそ氏の今日の大をなしたものである。氏は事業界稀にみる所の信念の士であり、且つ愛他主義の高潔の士である。又職工社員を優遇し、一丸となつて事業を行ふと云ふのが氏の特徴である。事業工場で見ると階級的相剋の實例は絶無と云ふよりは、この會社を以つて他の規範ともすべき和氣渾然たる一致振りを見せて、職場明朗化に努め益業務の活躍と發展に奮心してゐる。

第一生命保險・名古屋支部長

村上 日磨氏

第一生命保險會社は本邦生保界五大會社の一つで其の保有契約高は二十億を突破し斯界に覇を争ふ盛況振りに臨んでゐる。村上日磨氏は同社名古屋支部長として群雄相闘々中京業界に牙えた手腕を見せてゐる。氏は岡山縣人明治二十九年生れ、烈々たる闘志に燃え火の如き意氣を以て活躍力開、業績隆々として擧り沈滞せる同支部に明朗性を點じたあたり凡俗の徒でないことは言ふまでもない。大正九年東洋大學を卒業し直ちに第一生命に入り辛酸二十年、積極的で機略縱横に動く才腕は忽ち認められ、京城支部長に拔擢せられ鷄林八道を風靡するの概を示した。次いで靜岡支部長を命ぜられ、昭和十一年現職に就き今日に及ぶ。前記の如く始終一貫二十年變化なき財界に隱忍持久、粉骨の勞を辭せず只社業の爲めに碎身の苦も厭はず至誠を捧げて盡した功績は同社の發展史を飾るものであらう。氏の今日の地位は同社が氏に酬ゆるに最少限といふべきである。

山岡發動機製作所・事務取締役

村上 廣三氏

機械製作能率が近代國家の盛衰を支配することは、時局に處して國民の前に明確に表現された。特に動力の根源として發動機の役目は重要な地位にある。山岡發動機は其の機能に於て生産量に於て既に定評ある所で、事務取締役たる村上廣三氏の實地に基く研究と經驗とを同製作所に寄與した結果なりといふも過言ではない。氏は兵庫縣村上卯之松氏の三男として明治三十年六月出生、幼少より覇氣に富み常に同僚の首魁となつて責任を自己に歸した程剛毅であつた。然も驚くべき明哲な頭腦で小學校時代は群を抜いた優秀兒であつたといふ。長ずるに及び青雲の志抑へ難く實業界に身を投じ刻苦精勵、各所に於て辛酸を嘗め難行苦行は氏の若い日の日課として堪え忍んだ。蚊龍は遂に池中を出で、財界に確固たる地位を贏ち得た。氏は又別府興業、大分土地建物各取締役に就任實力を以て業界に臨んで居る。腕の人力の人を求めて止まぬ現代に氏の存在は力強い限りである。前途豊かな氏が業界に覇を成す日を鶴首するものである。

村瀬器械・代表社員

村瀬潤次郎氏

近來吾が國醫學の驚異的進歩に連れて醫療器械の製作、生産も大なる進展を遂げた。ごく最近まで、醫療器械の供給は諸外國よりの輸入にまたなければならなかつた業界ではあつたが現今では内地需要の大部分を純國産で充たすことが出来るやうになつた。これは實に國策的立場からいつても喜ばしき限りである。村瀬器械合資會社もこの純國産を目指した醫療器械卸商で、村瀬潤次郎氏の經營にかゝる優秀會社である。氏は愛知縣の人村瀬光太郎氏の二男にして明治十九年九月生れ大正三年に家督を相続、夙に愛知藥學校に學んだ逸材である。同社は創業以來漸次躍進し、今や隆盛の絶頂にあるが、これも偏に代表社員村瀬氏の緻密なる計劃性の成功と、献身的努力研究の賜であらう。斯界にあつては、幾年氏は只管醫療器械の改善に、生産増加に盡してきた。現時の如き斯業の發達のおかげには、村瀬氏の如き不撓不屈の士の汗と血の努力史が隠されてゐることを吾々は忘れてはならない。正に偉大なる人格者だ。

東洋オートチス・事務取締役

本川 一郎氏

エレベーターはオートチス。我國で東洋オートチスエレベーターの名を知らぬ者もあるまいと思はれる程、オートチスの勢力は大きく且つ廣い。本川一郎氏は當社事務取締役の要職にあり、獨特の專業的才腕で異色ある經營陣を敷いてゐるが、最早當社にとつて無くてはならぬ輝ける存在であるは多言を要さない次第である。茨城縣人本川源之助氏の長男で明治二十六年十二月生れ、大正十年に家督を相続して業界に華々しくデビューしたのだつた。稔々たる氣骨と玲瓏たる風貌、確固たる操志の人たる氏の聲望が業界に於て如何に大きいかは以つて知るべしであらう更に氏は物慾に恬淡、而も徹底した温情主義の人物。オートチスエレベーターには昔から勞資の對立なぞ絶無であると云つてよい位だ。それもその筈で、氏は一般職工と食事も共にして憚らず、巧まざる風格は自ら信服させるものがあり、且又勞働問題には常に深い理解と熱情とを示してゐるのだ。これからの飛躍こそ、各界みな等しく刮目すべきものがあらう。

東洋鋼材・常務取締役

本村 一郎氏

近代科學は常に新らしき、かつて世に無かつたものを造り上げることに成功してゐる。それはこれまでにあるものゝ上に、いろ／＼工夫して新らしいものを加へた結果である。決して突然に何も彼も新しい組立のもとにできたのではない。そこには研究があり進歩をかさねて歩一步と目的の段階を上つて行つたのである。氏がさきに七尾セメント株式會社支配人として令名を轟はれ、現在東洋鋼材株式會社常務取締役として輝いてゐるのも、かうした氏の捷ゆまざる努力の結晶にほかならないのである。即ち技術部門の指導に於いても或ひは經營部門の擔當にも常に變らぬ眞摯なる態度を示しつゝあり、同社隆昌の因を成す物と云へば、明に氏の双手によつて形成されたと云つても決して過言ではないのである。氏は長崎縣土族本村繁太郎氏の長男として明治二十四年十月に誕生、昭和三年に家督を相続した。氏の前途たるや熱と光りと正義をもつて君臨する太陽の使徒が、若々として世界に實行の事象を顯揚しあるのに等しい。

村田ゴム・社長

村田竹次郎氏

わが村田竹次郎氏は關西に於ける製造工業界の宿將として夙に聞え高き巨材であるが、その高潔なる人格は業界はもとより諸人崇敬の的となつてゐる。氏は奈良縣の産で明治十九年十一月誕生したが、新島讓先生創立の同志社出身だけに、宗教的にも大なる解脱を遂げてゐるから、關西實業界に在つては特異の地位を占めて居り、その餘技たる俳句の如きは正に堂に入つたもので、凡百の實業家達の追隨し能はざる境地を示してゐる。現在氏は村田ゴム社長として名采配を揮ふ他、日本レース事務取締役、東洋絹靴下取締役に任じてゐるが、これら氏の關係會社の製品は市場に於て絶對的の信用を博して居り、また輸出品としても同業者の羨望の的たる程の聲價を示しつゝある。猶ほ氏は先には昭和映畫取締役に任じてわが文化事業に盡瘁したこともある。氏は櫻井高女出身の才艶フサエ令夫人との間に二男三女の子實に寵まれてゐるが、子弟の教育には氏の全力が捧げられ、その何れも秀才の譽れ高く、美しき家庭を成してゐる。

望月商店・社長

望月 政春氏

氏は時局認識に鋭い士魂商才の人物だと云はれる。水泳に鍛道に、相當以上の腕前を持つてゐるからといふ簡單な理由では決してない。現横濱商工會所議員として、また横濱米穀問屋組合長として縦横の才を揮ふその頭と腕は、確に有り觸れた事業家とは異ふのだ。氏が今組合長をやつてゐる横濱米穀問屋組合にしてからが、氏の提唱による問屋業者の統制組織であつて、戦時經濟下に於ける米穀の出廻り調節卸賣の合理化等の目的の爲に全力を傾けて奔走活躍してゐるのだ。更に氏は望月商店(株)社長として自ら米穀商を營み、傍ら横濱米穀委託倉庫(株)取締役等も兼ねて颯爽と雄飛してゐるが、大眼目とする處只管國策に沿うて富國の礎を築く事にあるのだから、天晴英才の國將ともいふべきであらう。明治十三年生れ、觀劇が趣味といふから、氏の文化人たる半面が窺ひ得られやう。曩に市會議員に擧げられた名望家で堂々財界の元老たる貫録を示してゐる。而してこの國土的財人の活躍舞臺は尙洋々と限りない。

岡崎工業・事務取締役

守屋 千里氏

氏は東京府人守屋三郎氏の二男にして明治十八年六月に誕生、大正五年令兄信吾氏より分家した。明治十三年東京商業學校卒業後日米商店(現岡崎工業株式會社)に入つたのが今日をつくる因を成したので、打てば響くといつたやうな氏の反響性は重責をあたへられると同時に、メキ／＼と軌道に乗つたるが如き感があつた。即ち大正八年同店の組織變更と共に取締役にあげられ、次いで事務取締役に推されるなどその快腕を裏書するに充分なるものがある。株式會社日米商店がかくの如く業容の進展を示しつゝあることは取りも直さず同社首腦部の優秀さを物語るので、それには一に事務たり又同社の實權者でもある守屋千里氏の手腕力量に負ふところが甚だ多いと云はねばならない。今や時局工業股盛の波に乗つて一段と活況を呈し、受託殺到に伴ふ對策として著々と増産計畫が進められ、社名の變更と共に生産、販賣機構の充實擴張が實現せられ今後愈々劇期的飛躍が試みられるものと、一般からも期待されてゐる。

東西電球證券・社長

森 松藏氏

氏は岡山縣人森留五郎氏の三男にして明治二十一年四月に出生した。同四十二年、兄兼吉氏方より分家し現時に至つてゐる。夙に業界に頭角を現し、一角を切り崩して確固たる地盤を建設、一軍の將として正に油の乗つた感がある。現在、東西電球證券株式會社社長として辣腕家の名を恣にし、また日本電球(株)事務取締役、姫路共榮、ナニワ電球工業、高岡瓦斯、東西電球各(株)取締役に兼關、更に日本電球工業組合副理事長として信望頗る篤い。業界に入りて多年、叩かれ鍛えられ磨き上げられた人だけあつて事に當つて快刀亂麻を斷つ如き勇猛果敢なる行動に、業界逸材多しと雖も氏に優るはあまの思はれる。事業的才腕は斯の如し、その風貌また一風格を成して、必ずや飛躍的名譽を博する大器として面目を備へてゐる。時、今や吾國未曾有の非常時局に際し銃後の護り愈々重かるべし、統制下の業界の動向こそ洵に刮目すべきで、こゝにあつて氏の活躍また大いに期して待つべきものがあると信じてゐる。

ベニヤ板製造・社長

森安三郎氏

安三郎氏の経営するベニヤ板製造株式會社は生産能率増進のために、多年種々な方法を研究してきたが、社長森氏の指導よろしきを得て遂時増産の一途を通り、現時その製品の優秀さと俟つて兵庫縣下屈指の大會社となつた。氏は兵庫縣森辰之介氏の弟で慶應元年五月出生、大正七年に分家してベニヤ板製造業を営んでゐるが、このほか各種薄板の製造も行ひ、株式會社森薄板製造所社長として自ら社員督勵の任に當つてゐる。氏は七十六歳の高齡とはいへ豊饒として若きを凌ぐ活躍ぶり、老いて益々明朗、毎日社務に精勵采配を揮つてゐる。風貌柔和温厚なる中にも毅然たるところあり、事業に鍛えられた強靱なる意志のかけに情愛細やかな人間味ある人物で、腕一本で兩社を築き上げ切り廻してきた手腕には全く敬服する次第である。兵庫縣多額納税者に列しその資力測り知れぬとさへ云はれてゐる。

ベニヤ板の需要は近來著しく廣範圍にわたり、従つてその生産も激増擴張されねばならなくなつてゐる。森

日本造藍・代表取締役

森六郎氏

徳島縣多額納税者森太郎氏は仙石鹿太郎氏の二男で明治二十四年十一月出生、大正三年に先代六郎氏の養子となつたが昭和六年に家督を相続、前名茂之を改め襲名したのである。夙に敏腕家として業界に知られてゐるが、現時日本造藍(株)代表取締役、森六郎商店(株)専務取締役、日本製糖(株)監査役の諸重役を兼務、肥料、藍、染料並びに醬油醸造業を営んで居り、また朝鮮に大農場を經營して合名會社森農場を創設、同社代表社員として全従業員の指導に當つてゐる。氏は業界に身を投じて多年、激しい生活経験から獲得した事業的手腕は異彩を放ち、各方面にも亘つてゐる。機を掴んだら徹底的にやる。と云ふのが氏の日常のモットーで努力にみち／＼た豪傑である。尙、森家一族は氏の薫陶よろしきを得てか名士多く、こぞつて業界に頭角を現してゐるのも力強い。だが、この一家の繁榮も、社業の隆盛も氏の長年の努力の賜ではあるまいか。まこと努力こそは事業家の第一のものである。

蒲田倉庫・社長

森安之助氏

倉庫業の發達はまことに目覚ましいものがある。東京は蒲田に所在する蒲田倉庫株式會社も御多聞に洩れず頗る活況を呈し、躍進につぐ躍進と素晴らしい前進ぶりだ。當社の社長は森安之助氏。氏は明治十四年四月に森孫右衛門氏の二男として生れたが、夙に業界入りをなし多才のほどを發揮した。現時蒲田に於ける氏の勢力は非常に大で、人望もまた篤い。蒲田新地株式會社も蒲田倉庫と同じく氏を社長に仰ぐものであるが、このほか鶴見合同運送、蒲田合同運送各(株)取締役と運送方面にも手腕は伸び名譽を馳せてゐる。氏を見るに、独自の經營手腕を有した實力派の果敢なる闘將で、必ずや近き日に於て業界幾多の人材を凌駕、一方の雄として名を成す器なりと思はれる。何事と雖もその人の人格を反映せざるはなしと聞くが、氏の事業を見る時、成程とこの言を肯定せざるを得ない。經營に、商略に、恐るべき事業家としてのセンスが遺憾なく窺ひ知られ正に氏の面目躍如としてゐる。今後の飛躍こそ期待すべきであらう。

蒲田倉庫株式會社も御多聞に洩れず頗る活況を呈し、躍進と素晴らしい前進ぶりだ。當社の社長は森安之助氏。

森村同族・取締役

森村勇氏

森村組の元勳として功績のあつた先代豊氏は故男爵森村市左衛門氏の令弟に當る。兄君の好き股肱となつて森村組を興し拮据經營の衝に當りつゝ、令名を高めたことはあまねく人の知るところである。氏は其三男にして明治三十年五月に誕生した。大正七年高千穂高等商業學校を卒業後、更に海外に渡航し、米國ハーバード大學に三ヶ年、英國に二ヶ年留學し同十一年に晴の歸朝をした。それより富士瓦斯紡績會社に勤務し、次いで森村銀行重役を経て現在の如く森村同族、日本特殊陶業株式會社取締役となつたもので、其傍ら日東磁器株式會社長、其他の重役を兼てその奮闘ぶりに於て斷然他を抜き、營々倦むことなき精進を続けつゝある。氏は頭腦明敏なることに加へて温厚寡黙の紳士をもつてあまねく知られ、高邁なる人格は比類なき實力と共に、業界の異彩として長敬されつゝある人物である。今や氏の事業は益々飛躍して今や國策振興の線に並行して進みつゝあるところ、其底力こそ洵に圖り知れざる程のものがある。

森村組の元勳として功績のあつた先代豊氏は故男爵森村市左衛門氏の令弟に當る。

利根運河・社長

森村堯太氏

群馬縣財界に森村堯太氏の勢力は大きく働きかけてゐる。その勢力の及ぶところ利根運河株式會社長を始め群馬大同銀行常務取締役、上毛貯蓄銀行、森村土地各株式會社取締役等として、今や同地財界の指導的立場に在つて、時局財界の發展に苦心し貢献しつゝあるが、その眞摯なる態度は出で、愈々光彩を加へつゝある。氏は群馬縣人先代堯太氏の長男にして明治廿年二月に誕生、大正十二年家督相続と共に前名良策を改めて襲名に及んだ。明治四十五年慶應理財科を卒業後、安田銀行の前身たる明治商業銀行に入り、更に群馬中央銀行常務取締役、森堯會社代表社員等を経て前記諸會社を牛耳るに至つたもので、現に群馬縣多額納税者の列に加はる一方前橋商工會議所常議員、前橋稅務署所得調査員等の職にあつて同地發展の推進力、又は世話役として今やその存在は缺くべからざる重要な人物となつてゐる。而して公私を通じてその貢献するところも甚だ多く、今日まで残して來た氏の功績にも顯著なるものがある。

群馬縣財界に森村堯太氏の勢力は大きく働きかけてゐる。その勢力の及ぶところ利根運河株式會社長を始め

帝國生命保險・臺北支店長

森谷庄之輔氏

本邦に於ける五大生保の雄として斯界に泰山の如く聳える帝國生命保險は、人材雲の如く集つてゐる。その重役陣形を固めてゐるが、また中堅陣列も一騎當千の逸材揃ひで、斷然他社を引離し「帝國」の冠文字を附するに耻ぢざる成績を挙げつゝある。その中堅層中に於てもわが森谷庄之輔氏は、披群の才腕を示しつゝある闘士として認められてゐるが、今や四十五歳の張り切つた男盛りで、將來の大成は期して俟つべき同社切つてのホープである。現在氏は同社臺北支店長としてわが日本南方の寶庫臺灣の探題を承せつゝあるが、氏の就任以來臺灣に於ける同社の成績は愈々盛大に趣きつゝある。氏は明治二十九年十一月奈良縣人森谷庄太郎氏の三男として誕生した。大正十三年東大經濟學部を卒業し、直ちに東洋生命保險に入り秘書役となり、爾來同社長崎、名古屋、廣島各支店長を歴任し、昭和十年帝國生命と合併と同時に廣島支店次席となり、名古屋支店次席を経て現職と擧げられた。氏の趣味は圍碁、ゴルフである。

本邦に於ける五大生保の雄として斯界に泰山の如く聳える帝國生命保險は、人材雲の如く集つてゐる。

東滿洲人絹バルブ・副社長

森本喜太郎氏

森本喜太郎氏は關西財界に大きな勢力を扶植しつゝある實業家である。現在副社長として携はりつゝある東滿洲人絹バルブ株式會社も、或は専務取締役の責に在る六麓莊株式會社も其他尾崎城内土地、今里土地、武庫川住宅地各株式會社等何れも氏の精氣が吹込まれて、その飛躍發展は實にめざましいものがある。氏は徒らに積極經營を圖らず又功をあせらうともしない。その事業をして一歩々々前進せしめ着々と功果を把握することにある。したがつてその功果的な經營方針は單に東滿洲人絹バルブ會社のみではなく、諸會社の經營上にもよく具現されてゐる氏は兵庫縣人清水與兵衛氏の四男として明治十三年十月に誕生、同四十一年に先代傳枝氏の入夫となつて家督を相続したものである。夙に實業界に投じ大軌土地、城東電氣鐵道各株式會社長として令名を博すほか、諸會社の重役を兼て勢威いよ／＼加はるの觀があつたが、今や前記諸會社に驕足を伸ばしつゝ老練な手腕に物云はせて益々その牙えを示しつゝある。

森本喜太郎氏は關西財界に大きな勢力を扶植しつゝある實業家である。現在副社長として携はりつゝある東

尾呂志水力・社長

師尾誠治氏

氏は東京府師尾彦次郎氏の二男として、明治二十一年六月出生し、大正七年分家獨立す。之より先大正四年東京高商専門部を卒業して、實業界に入り、當時勃興せる水力電氣會社に勤務し、具さに斯業の實地を研究會得し後福井電力、南信電力、白峯電氣各社に勤務し各々重役に累進したが之を辭し、現時尾呂志水力會社長に就任、電力統制下にあつて飽くなき敏腕を發揮して居る。氏の斯業に關する實力は永き經驗を通じて豊富であり、經營の才氣亦十善である。電氣界に於ける重要な存在を示し前途を囑目せらるる人物といふべし。大同電力、木曾發電、南海水力各取締役として其の要衝に當り、該博にして堅實なる知能を以て機宜の經營に參畫し名望が厚い。更に又北海電化工業會社の重役にも就き多忙繁激な日を送り活躍を緩めない。適性就職は時代の要求、之を滿たすに氏の如きは眞に當を得たといふべきであらう。男性的氣魄に富む氏の將來は洵に多望である。氏は乘馬を趣味とするを聞く颯爽として疾驅する是人生か。

氏は東京府師尾彦次郎氏の二男として、明治二十一年六月出生し、大正七年分家獨立す。之より先大正四年

諸戸タオル・社長

諸戸 精文氏

統制経済下に於ける繊維業界、就中綿織業界に於ける打撃は相當深刻なものがあり洵に同情に價する。蓋し今日の苦澁は將來への重大な示唆であり試練でもある。實に製造、販賣、需要の各層に亘つて問題であるだけに、其の対策は眞剣でなければならぬ。諸戸精文氏は祖業たるタオル商會を主宰經營し傍ら日本タオル工業組合聯合會理事、四日市築港取締役に推され名望を擔ふ。當家は桑名累代の舊家で四十一世の清六氏は衰頹せる家運挽回に成功、四十二世清太氏父の遺業を繼ぎ農林殖産の道に精進し、傍ら諸戸清太商會を創立し、高級タオルの製造をなし業礎を築き、又推されて、桑名米穀取引所理事長、桑名商工會々長に擧げらる。精文氏はその長男にして、明治四十五年二月出生し、昭和六年に家督を繼ぎ、同十年名古屋高商を卒業し、祖業を繼承して今日に至る。氏は齡若冠新進氣鋭の士であるが、既に威重を備へ信望の厚きものがある。桑名將來の財界を擔ふものは氏を措いて誰に求むべきであらう。

安川電機製作所・専務取締役

安川 泰一氏

萬事石橋を叩いて渡るといふ賢實主義者であり、温厚篤實な人格者として安川泰一氏の名はよく知られてゐる。氏が専務取締役として采配をふりつゝある安川電機製作所(株式會社)は、時局産業に便乗する花形會社でありその需要は増大する一方であるが、この股盛に對し、氏は徒らに時流に乗つて粗製濫造することを避け、眞に優秀なる製品を提供すべく、眞剣なる努力を傾注しつゝある。これに依つても氏が常に國家奉仕の念を貫くべく、孜々として努力してゐるといふことが充分窺へる。氏は佐賀縣の産、安川謙介氏の長男として明治二十七年十二月に誕生、大正十四年に家督を相続した。大正六年明治專門學校機械工學科を卒業後安川川鐵工所に勤務したが、同十五年安川電機製作所に入り設計課長、技術部長等を経て遂に専務取締役に一切を把握するに至つたもので、同社の信用もさることながら、着實な勤務ぶりによる氏の信用も絶大なるものがある。氏の今後こそ益々出で、輝やかさきものがある。

安川電機製作所・取締役

安川 寛氏

安川松本各合名會社出資社員として安川寛氏の令名こそあつても業界を席捲しつゝあるかの觀がある。氏の先代清三郎氏は九州實業界の雄として鳴らした人物で、安川電機、明治鑛業、平山鑛業各株式會社々長たるほか數會社の重役を兼て福岡縣多額納稅者に列し、昭和二年には紺綬褒章を下賜せられたる徐榮の人である。氏はその長男にして明治三十六年一月に誕生、昭和十一年二月に家督を相続した。昭和二年東京帝國大學工學部機械科を卒業勇躍して事業界へと乗り込んだが、その卓腕は忽ちにして前記諸會社を善導する立場となつたもので、三十代の若さに似ずその手腕力量は既に定評の存するところである。しかもその熱意のほとばしるところ航空研究所囑託としても重きを成し、その功績は昭和十二年に紺綬褒章を、同十三年八月には同飾版を下賜せらるゝの光榮を擔てゐる。ゴルフを唯一の趣味としてゐる。

セルロイド工業・社長

柳澤 恒吉氏

氏は岐阜縣安藝桑吉氏の二男として明治十八年出生し同縣柳澤幸吉氏の婿養子となる。少年時代神童と謳はれた程の明敏な頭腦の持主で膽力もあり實業人として申分がない。若くして大に爲す有らんとする野望を抱いて東京に出で、明治四十二年セルロイド工業所を創立した。當時のセルロイド工業界は眞に微々たる有様であつたが氏の信念は將來斯業の興隆を豫測して動かなかつた。果せる歳年を経て發展し大小幾多の工場が設立せられる盛況を呈し今日の進歩を見るに至つた。氏は工業所創設以來三十有餘年、幾多の迂餘曲折を忍び工場を龜戸に設置し株式組織とする等、不斷の努力を傾倒して今日の隆運の基礎を築いた。現に其の社長となり經營を主宰する他、三響株式會社々長を兼務し財界一角の存在を示してゐる。家業として小間物及セルロイド雜貨輸出販賣を営み、國際金融に貢献し國策線上に活躍する今日の成功は、氏の明敏な理性と不動確固たる信念から産み出された成果である。今後更に一段の奮闘を望むこと切である。

三菱商事・常務取締役

柳瀬 篤次郎氏

三菱商事會社は大財閥三菱コンツエルの重要部門であることは周知の事である。其の常務取締役たる柳瀬氏の器量も推定せられる。明治十七年九月愛媛縣柳瀬儀三郎氏の長男として生れた氏は、年少にして既に明敏を以て譔はれ、同四十年一ツ橋の秀才として卒業、直ちに三菱商事入りをした。時は日露戰役の後を承け事業界の第一次發展時代で同社も大車輪の進展活躍時代、目まぐるしい繁忙振りであつた。氏はこの試練臺に上つて根氣の續く限り奮闘した、固より明哲な頭と烈々たる氣魄とは積極的活動となつて其の才幹を注目せられるに至り門司、名古屋、大阪支店と次々に勤務し手腕を練つた。大阪支店副長となつたのが大正七年次いで棉業部、業務部、雜貨部各部長を経て大阪支店長となり更に會計部長に榮進し間もなく常務取締役に起用せられた。昇進の速かなること同社異數と言はれるだけ氏の人物の偉大さがある譯である。現に北洋商會代表取締役の外數社の重役を兼務しながら二十餘年同社に盡した功績は不滅である。

鋼路海運・社長

柳田 鐵三氏

鋼路海運會社々長柳田鐵三氏は根室會社専務取締役、根室日報社、共同倉庫各取締役として廣汎な活動面に躍る北洋財界の重鎮である。曩には根室銀行取締役として金融界に活動したのであるが同行が安田銀行に併合せられるに及び協議役に擧げらる。氏は又牧畜業の振興に盡瘁し畜産功勞者として農商務大臣の表彰を受けた程で、先年北海道牛馬百萬頭計畫樹立に際して其調査委員となる。帝國馬匹協會及び日本交通協會特別會員に推され、氏自らも牧畜業を經營し畜産界に於ても指導的地位を占め殖産興業上偉大な貢獻者として信望と畏敬とを集めてゐる。氏の活動は洵に出で、は國策振興の魁となり入ては殖産指導の任に膺るといふ、寧日を持たぬ緊張其物といへる。明治十九年北海道加藤恒五郎氏の弟として生れた氏は、東京柳田フサ氏の養子となり明治四十年早大法科を卒業して郷里北海道に本據し、財界の巨頭として君臨し今後の活躍を待望されてゐる。

安治川亞鉛鐵工・社長

柳田 久治郎氏

安治川亞鉛鐵工會社社長柳田久治郎氏は竹田合名會社出資社員、舞子土地取締役に、日本染工監査役に就任し地方實業界に輝々たる名聲を博して居る俊足である。氏は明治十三年三月兵庫縣柳田久五郎氏の二男として出生、同三十七年東京高商を卒業して實業に入り阪神業界を馳驅すること多年、實務と手腕の修練に努め、力量才幹年と共に練成せられ竹田合名出資社員として、同社の樞軸となつて活躍する鮮かさには他の追従を引き離して行つた。安治川亞鉛鐵工が其の手腕を買つて社長に据え兎角沈滞せる社運の挽回を策したのであつた。當時種々な臆測や批評もあつたが氏は世評を尻目にかけて堂々所信を實行し起死回生に成功し、時局の波に乗つて國策會社として隆々たる今日を招來した傑物、出藍の譽を負つて業界に君臨してゐる無敵の存在である。氏は信念の人であり良心の人である。再考三思良心の命する所に従つて邁進する勇敢さは宗教的の信念によるものであらう。敬神崇祖の念に厚きこと氏を知る限りの人が讚嘆してゐる。

高砂暖房工事・専務取締役兼技師長

柳町 政之助氏

氏は茨城縣柳町文次郎氏の長男にして、明治二十五年六月の出生で昭和五年家督を相続した。夙に實業界を望んで上京し時は一職工となつて苦學した勤勉苦闘の士である。後高砂商會の傘下に馳せ格勳精勵黙々として一途に實力を培ひ社業に精進し其の人物を認められるに至つた。英敏な素質に加へて多年實地の試練を重ねた氏は茲に活躍の天地が開け、全能力を傾けて奮闘努力才幹を遺憾なく揮ふ事が出来た。今や高砂暖房工事専務取締役兼技師長として事實上同社の全權を手中に收め拮据なき基礎の上に活躍を續けて居る。又高砂鐵工取締役に兼ね高砂財閥機構の重要な存在である。由來茨城縣人は剛毅果斷にして所信實行に忠實な士が多い政界、財界、官界を通じて偉大な人物を出して居るが、氏も亦豪宕不羈の性格を有し信する者の爲めには身を殺して悔なしといふ果敢な精神を持つてゐる。然し苦勞人だけに思ひやりが深く同社内外の信望極めて厚い春秋豊かにして洋々たる前途と其の活躍こそ刮目すべきである。

日本アルミニウム専務取締役
ユイム製造

敷重雄氏

アルミニウム工業が平和工業として重要な地位を占めてゐる以上に軍需工業として肝要な役割を持つことは、今次支那事變を契機として世人の認識を新たにした。日本アルミニウム製造會社は新業界有数の存在で遂に隆昌に終始し數回に亘つて増資を敢てし益々大を爲して來たのであるが、其の蔭には専務取締役たる敷重雄氏の並々ならぬ苦心があつたことは言ふまでもない。時局に沈湎して、アルミニウム礦石資源に乏しい新業界の打撃は相當深刻なものであるに違ひない。然し同社は軍需會社として國策線上を進行する事故經營上の苦心も尠くない。日堂々たる發展振りを見せてゐる。尙心強いことは新業界が平素の國民生活上に重要な事業で將來性に富む點にある。氏は京都敷重貞氏の二男で明治十六年に生れ、同四十二年敷清右衛門氏の養子となり同四十五年家督を承く。體健圓滿な人格で上下の隔てなく誰にも親まれる美質を有し、讀書を好み園藝にこそしむと言つた和やかさに氏の人格の全貌が想定せられる。

王子製紙・知取工場

山内幾馬氏

藤原銀次郎氏を宰相とする王子製紙は俊傑集の豪壯の姿を以て業界の王座に地位してゐる。山内幾馬氏は人材多き中から選ばれて樺太知取工場長及樺太分社工務部理事として現地奉行をする丈あつて、寸毫の隙もない實力あるしつかりした逸材である。氏は福島縣山内熊三郎氏の婿養子で、明治卅九年高前高工を卒業直ちに鐵道院に奉職し北海道鐵道管理局勤務同四十四年辭し、北海道炭礦汽船に技師となり、大正二年富士製紙に轉じ同十四年知取工場建設に參畫して手腕を發揮し其の完成と共に同工場長に擧げらる。昭和八年同社が王子製紙に併合後も依然其職にあつて今日及び尙南樺鐵道専務、樺太鑛業、樺太鐵道各常務、日本人絹バルブ取締役として樺太實業界に重鎮的な存在をなして居る。至つて豪放洒落な性格であるが精緻明哲な頭腦を持ち其の手腕は非凡である。社長藤原氏の姻戚は氏に多くの期待を持ち樺太に於ける同社の全權を任せてある。觀點からも其の傑物であることが頷かれる。五十代の氏前途多望である。

旭電氣・常務取締役

山岸正之助氏

旭電氣株式會社常務取締役山岸正之助氏は明治十年一月に山岸常八氏の長男として生れた。夙に中井銀行に入り在勤實に十數年、營々として社業に精勵、堅實に一步々々自己の地盤を築き腕を磨いてきたが、後株式仲買深田商店に轉じ同社の支柱として重きをなしたが大正元年同店が廢業し深田銀行となるや入りて同行代表社員となり指導的地位を確保したのである。現時、旭電氣に於ても氏の厚望また大なるものがあり、着實な方法論に依つて擴張發展につとめる氏の手腕には全員みな等しく傾倒してゐる。頭腦明晰にして卓越せる識見あり、氏の性質からして事業手腕は決して派手なものではないが、地味な中にも確固たる堅實性があり、實力ある事業家である。顧みれば三十餘年、中井銀行、深田銀行に残した巨大な足跡は實に賞讃すべきものがある。この不屈不撓なる努力あつてこそ氏の今日の事業あり、信望あり、榮譽あり、非常時局下の業界を支へる實力的逸材の一人として氏こそ該史の一頁を飾るに應はしい。

荏原製作所・専務取締役

山岸靖一氏

時局産業の生命を把握する機械工業は、最前線に活躍する突撃隊である。この一軍の驍將山岸靖一氏は、現時荏原製作所、宇野鐵工所各(株)専務取締役として超然たる存在に益々光輝を添へてゐる。當家は代々新潟に住して農耕を業とする豪農であるが、養父辰五郎氏に至り分家したもので、氏は同縣山岸甚蔵氏の四男にして明治十九年生れ。大正四年に伯父辰五郎氏の養子となり、昭和十年に家督を相續した東京帝大工科機械科の出身、夙に業界に身を投じたものである。氏は自身優秀なるエンジニアだけあつて、その指導ぶりも微に入り細を穿つたもの、近時荏原製作所の名聲が愈々高まつてゆくのも氏の健闘に負ふところ大なりと云はれてゐる。過ぐる大正十五年、氏は機械工業の實況視察の爲に歐米各國を巡遊し貢献甚大であつた。氏の事業に對する燃ゆるが如き心意氣は到底今日の青年の及ぶべくもなく、確信に満ちたその經營は時局認識の正確さと相俟つて愈々出で、勇猛邁進、新界の荒鷲の聲を恣にしてゐる。

第一徵兵保險・札幌支店長

山内寛治氏

第一徵兵保險は新界最古歴史といつても、明治四十二年の創業であり、太田新吉氏を社長に推し擡たる偉容を以て財界に君臨してゐる。然し新界の巨星太田清藏氏相談役として帷幕に參畫することは何といつても心強い。氏は多年前社長たる太田清藏氏の麾下にあつて其の薫化を受けた精練漢能の士で、烈々たる闘志も十分にあり、力量手腕は北海道探題として不足のない逸足である。氏は宮城縣人にして明治二十七年出生今が盛りの四十代正に活躍時代と言へる。夙に中央大學政経科を卒業、大正十一年第一徵兵保險會社に入り爾來東京支店內務助役、本店領收係長、精算課長として格動し、次いで京城支店長に昇進し不毛開拓に成功し、昭和十四年一月札幌支店長を命ぜられた。氏が未開地開拓の重任を帯びる所以のものに氏の傑出せる手腕を信頼する同社の恩賞によるものといへやう。中央の重責に就くことも決して遠いことではないであらう。時局當に事業擴張の好期一段の奮闘をなして最後の榮冠を得らるゝ日を待つ。

帝國コークス・社長

山岸慶之助氏

時の人、山岸慶之助氏は、日本庭球界のナムパーワンと云はれる山岸成二二郎兄弟の父君である。二郎氏がデ杯争奪戦で目覚ましい活躍をしたのは未だ記憶に新なことであらう。それはさておき、こゝに氏の開歴を紹介する。氏は明治十二年に北川久兵衛氏の三男として生れ、後山岸家の養子となり同十二年に家督を相續した。三十二年に東京高商を卒業、直ちに三菱合資に入社、社會人として榮えあるスタートを切つたが、後三菱商事が創立せらるゝや同社に轉じ各支店長を経て大正十年に常務の榮位を贏ち得たのである。尙こゝを辭して現時帝國コークス社長、麥酒共同販賣取締役、昭和麒麟麥酒、麒麟麥酒各監査役と産業界の花形として第一線に活躍してゐるが、正に時の人の感を深うするものがある。又曩に一年志願兵として日露戦役に出征、陸軍二等主計に任ぜられたのを見ても氏の人の如何なるかは解り得ることであらう。從七位勳六等山岸慶之助氏は全く良き父であると共に良き業界の指導者でもある。

横河橋梁製作所・常務監査役

山北與三郎氏

業界に一段と光彩を放つてその鮮やかな活躍ぶりを謳はれてゐる山北與三郎氏は岐阜縣の産。明治七年三月であると共に、わが業界人材多しと雖もその力量に於て正に異彩と云ふべき人物である。氏が抑々業界に印した第一歩は東京不動産で、また三井銀行等にも勤務したことあり、豊富な事業經驗によつて今日を成した才腕家である。現時、横河橋梁製作所(株)常務監査役、横河電機製作所、不二サツシユ製作所、東亞鐵工所各(株)監査役と幾多會社の重役として經營に參畫しその非凡なる才幹は好く事業の伸張を齎してゐるが、その信用また絶大なるものがある。今や、支那事變も長期戦第三段階に入り、益々舉國一致態勢を強固ならしむる秋にあたり、當面の政策として生産力擴充の必要が緊迫してゐることは云ふまでもないことである。而してかゝるが故に國策線上に活躍する前記各社の指導的地位にある山北氏の一層の健闘を希ふ次第だ。

東京鐵工所・監査役

山口勝藏氏

戦時經濟下の事業界をめぐけて軍需インフンの波は物凄い勢で押し寄せてきた。今やこの波に乗つて勇躍活動してゐる山口勝藏氏は、この秋愈々重大視されてゐる貿易界の重鎮である。機械貿易商——氏に課せられた使命は重い。氏は東京府先代勝藏氏の二男で明治十七年十一月生れ。同四十三年に家督を相續して前名森光を改め襲名したのであるが、天賦の才は業界によく伸び、専ら鬼才として謳はれてゐる。現時東京鐵工所(株)監査役の重責にもあり、雄々しくも鋭後産業戦士の心意氣を示してゐる。氏の性格は多彩であるが内に一貫した強靱な識見があり努力健闘、時局産業界に雄飛する腕の冴えは正に確固たるものだ。だが、氏が業界に於ける今日の地位を獲ち得たのは單なる運でも、また時代の波でもない。常に蘊蓄を傾けた才能、先天的手腕力量と、それに挽みなき努力とである。苟も波瀾重疊を極める業界にあつて名を成し事を大成せしめんとするには豊富な識見が必要だ。氏は實に此條件に當れる偉材である。

昭和木材防衛・社長

山口吉左衛門氏

鹿兒島の生んだ傑物、山口吉左衛門氏は山口覺兵衛氏の長男として明治十五年一月に生れたのである。同十二年に家督を相続し砂磔穀物問屋業を営んで上々の好成績を挙げているが傍ら昭和木材防衛(株)社長、鹿兒島木材(株)取締役と業界の雄將としての賞祿を示してゐる。また現時鹿兒島縣多額納税者に列し、鹿兒島商工會議所副會長として大いに腕をふるつてゐる。覇氣満々の士、一見柔和な半面非常に強靱性に富み、一度事業經營の衝に當れば徹底的にこれを大成させんとする積極性は、幼時より氏を育んできた故郷のこの雄壯な環境が生んだ賜である。蓋し業界鹿兒島縣人多しと雖も人格手腕共に名聲高きは、氏をおいてはあまるまいと思はれる。その人爲は濃厚篤實の一語に盡きやうか。鹿兒島縣人特有の人懐しい人情味に篤く、而して雄魂、毫も飾るところがない。そしてまた自然の風物をこの上なく愛する詩的な心は、氏の風格を躍如たらしめてゐると云へよう。正に業界の異彩とて讃へられるも宜なるかなである。

長岡銀行・常務取締役

山口健造氏

福徳圓滿の地方財人と云へば、先づ長岡銀行の常務取締役山口健造氏を第一に推したい。氏は圓滿な常識人として知られてゐるばかりではなく、經濟事情に精通した新潟縣下屈指の有力者としてまた名聲を轟はれてゐるのだ。氏は新潟の人山口萬吉氏の二男にして明治十三年二月に出生、同四十三年甥萬吉氏より分家、石油商を営んでゐるが、傍ら長岡銀行(株)常務、長岡貯蓄銀行、北越製紙、北越パルプ北越水力電氣各(株)監査役の諸役を兼務多方面に亘つて大勢力を有し、又縣下多額納税者に列してゐる。殊に金融界に於ける氏の名聲は絶大なものがあり、ソロバンに明けソロバンに暮れる斯界に氏の如き圓滿の人は寔に稀しい存在である。氏の温容なる人格は、會ふほどの者をして忽ち十年の知己の如き親しみと好感を與へる。この點八面玲瓏の常識家とも云へやうが、その反面胃し難い敬虔さがある。これは氏の確固たる信念によるものであらうか融通無碍な常識と徹底せる信念とはよく氏の風格を形成し眞に美しい。

大崎電氣・社長

山口吾一氏

山口吾一氏は時局下益々太りつゝ、あの大崎電氣の社長である。大崎電氣と云へば地方電力界の尖端を切り華々しい役割を演じてゐる優秀會社だが、氏はその全責任を負つて縦横に活躍してゐるのである。氏は廣島縣士族山口啓次郎氏の二男にして明治八年八月の生れ、夙に業界に身を投じグン／＼と頭角を現した。現時大崎電氣のほか山口瓦斯(株)代表取締役、廣島瓦斯電機(株)常務取締役、協和證券、廣島乗合自動車各(株)取締役、日の出醬油(株)監査役と八方にその才腕を發揮してゐる。また兼に中國護謨工業、藝備倉庫各會社の重役でもあり、濃厚誠實、豊かな經驗抱負を有して因循的姑息さは微塵も見られない。特に定評あるは氏の正確な時局認識で、正に地方財界一方の智叟である。而してその日常生活は華やかな財界人とは思はれぬ謹嚴さを持ち、胸中深く抱いた社會教化の理想は斯界に遺憾なく反映して、徳望絶大である。明治八年生れ決して若い方ではないが何か清新さを感じさせるのは氏の一徳であらう。

大洋商會・代表取締役

山口佐助氏

轉換期の日本事業界の増城の中に敢然と立ち健闘してゐるのは山口佐助氏であらう。大洋商會(株)代表取締役、大洋自動車、大同工業、日本ダンロップ護謨、永峰セルロイド工業、丸石商會、伴傳兵衛商店、丸石染料各(株)取締役の諸重役を兼務してゐるが、過渡期に直面した業界に於てこの時局に對處し、斯界の驥足として偉大なる存在を示してゐる氏こそ、今日の時局を推進する人物として推賞するに足るものがある。氏は栃木縣の出身、明治九年三月、山口政平氏の二男として生れたが、大正七年に分家し夙に業界に進出して波瀾重疊の斯界を征服、今日の榮位を獲た異數の俊英である。凡そ財界に氏の如き異色ある人材は少い。氏の手腕力量の如何に卓越せるかは業界に於ける現在までの經歷が何よりも雄辯に物語つてゐる。それと共に是非とも一言附言したいことは、少くとも變轉極まりなき業界にあつて斯くの如き名をなすに、唯凡々として獲ち得られるものではないと云ふことだ。今後の活躍を大いに希求する。

太陽商社・社長

山口定亮氏

大阪財界に一躍進出し名聲限りなき新進の勇將山口定亮氏。氏の經歷を挙げてみると、明治二十九年二月に大阪府山口龜吉氏の長男として生れた。大正九年に前名芳太郎を改め昭和六年に家督を相続、學歷は關西大學を大正六年に優秀なる成績で卒業した秀才家業たる鐵線製造に従事、大正八年大阪千日前土地會社大阪劇場を設立並にその常務となつたが、續いて同十年、生駒電鐵專務、信貴生駒電鐵取締役となり昭和三年に至つて信貴山急行電鐵會社を創立し、その專務取締役となつた。同八年頃より重工業方面にも志して現職の傍ら大同鐵工所社長となり、鐵工業方面に縦横の腕をふるひつゝあり、現時は太陽商社、山口産業、旭産業各(株)社長、葛製作所(株)專務取締役、六郷製作所(株)取締役、旭内燃機(株)監査役、交野無盡(株)相談役の諸重役も兼ね、日本大學顧問である。これをもつても氏が如何に卓抜の手腕家であるかは窺知出來得やうが、抱負といひ、識見といひ申分なく正に明日の業界を擔ふ逸材である。

丸菱工業・專務取締役

山口三郎治氏

氏は長野縣の産。山口家は長野縣下有名な家柄であるが、氏は先代三郎治氏の二男として明治十九年二月に出生した。同三十九年に前名誠治郎を改め襲名の上家督を相続したのである。學歷は明治三十八年長野縣立長野中學校の出身、大正六年に上京して實業界にスタートしてより氏の事業的手腕は俄然八方に伸び、現時は丸菱工業(株)專務取締役、鶴見機器製作所(株)常務取締役、三立製作所、三田電機製作所各(株)顧問として颯爽たるものである。今や家業の温泉旅館は長男正登氏が經營の衝に當り、山口家は全く磐石の堅きをなしてゐる。氏こそ本邦工業界發展の偉大なる礎石で、現に氏の關係せる事業をみてもそれを充分首肯出來得るのである。「事業は人格の反映なり」と云ふ言葉を氏の事業に當て箴めるならば、氏の人格も髣髴としてその大成せる事業に浮び上つてくるわけ、如何に偉大なる人、非凡なる才幹の士であるかは容易に背かれる。

東出鐵工所・社長

山口次郎氏

その才卓抜を誦はれ、兵庫財界にその人ありと知られた山口次郎氏は、現時東出鐵工所(株)社長、加西合同行(株)副頭取、佐見川水力電氣、濃飛電力各(株)取締役、神戸銀行、大阪築業セメント各(株)監査役として雄飛してゐる。氏は兵庫縣河合八太郎氏の二男にして、明治二十年四月の生れ、同四十五年山口大藏氏の養子となつたが、大正十年養祖父傳十郎氏退隱の後を承けて家督を相続した。曩に三十八銀行の常務監査役で、金融界に於ける氏の勢力は大きく、その手腕力量は押して知るべしである。今や邦家は一大難局に直面してゐる。而してわが財界の使命は一層重大なものがある。この使命遂行の爲には、幾多錚々卓抜の逸材の必要は論を俟つまでもあまらまい。識見豊富、人格高潔にして經濟事情に通じた地方財界の權威者たる山口氏の存在の大きな理由も、實にこのところにあるわけで、地方財界の指導者となつて、業界現狀に善處し、經濟國策貫徹のために活躍する氏の今後こそ大に期して待つべきものがあらう。

大八機械製作所・取締役

山口繁氏

目から鼻にぬける人、一を聞いて十を知る人とは、山口繁氏のやうな人であることを云ふ言葉でもあらうか。氏は三重縣人山口吉五郎氏の長男にして明治二十八年四月に生れ、昭和五年に至つて家督を相続した。夙に釜山商業學校を卒業して朝鮮銀行に第一歩を印したが、間もなく同行東京支店證券部長に進み、次に山一證券名古屋支店長同取締役兼公債部長に躍進、昭和十一年名古屋株式取引所員山口商店を開業して今日に至る傍ら、現時大八機械製作所(株)取締役、昭和製粉(株)監査役の重責にあり、健闘を續けてゐる。覇氣満々、機敏なるは筆の如く、文字通り機略縱横の英才で、烈々たる闘志は他を壓して向ふところ敵無し之感がある。今や自由經濟から統制經濟への移行時代、こゝにあつて投機市場はその變遷極まりない。だが氏はこの歴史的轉換期に泰然と構へて揺ぎなく、緻密にして秩序整然たる頭腦を使つて一大奮闘、一度び時至れば正に名刀の斬れ味を示してゐる。何はともあれ、敏腕なる氏の今後の動きが注目される。

三菱電機・神戸製作所長

山口末三郎氏

山口末三郎氏は三菱財閥のドル箱三菱電機株式會社の神戸製作所長である。氏は京都府の八木口伊之助氏の三男にして明治廿四年三月の生れ、大正八年に兄清次郎氏方より分家した。學校は京都帝大工科電氣科の出身で、大正三年の卒業生である。後直ちに三菱電機に入社し、こゝで累進を重ね神戸製作所設計課長に拔擢されたが、現時同製作所長として徳望頗る大である。入社してより今日に至るまで三十年になん／＼とする長年月に亘り、拮据同社發展のために奮戦力闘してきた努力苦心の程は氏に大なる讃辭を呈したい。氏こそ正に現三菱財閥の實力派の代表的人物で、手腕、才能素より卓抜、謹直にして誠實なる財人として専らの評判、まこと清廉なる人格者である。業に當るや氏特有の積極的方針を以て拔群の働きをなし、關西に於ける三菱勢力扶植に一大功績を樹てたのは同社等しく認むるところのものだ。私利私慾なく、黙々として自己の所信に邁進するあたり三菱切つての異彩とも云ふべきか、實に偉材である。

日下部汽船・東京支店長

山腰直一氏

日下部汽船株式會社の東京支店長で名リダーと敬はれる山腰直一氏は日下部汽船きつてのインテリとして有名である。全く氏の話題の豊富さ、新しさは素晴らしいもので、またリファインされた社交術は、會ふほどの者をして、魅了せしめずには置かぬものがあるといふから物凄。氏は明治三十年四月に徳島縣土族山腰宅藏氏の長男として生れ、大正十一年に英國のバルモア學院を拔群の成績で卒業した秀才である。歸朝後日下部汽船に入社、近代的な手腕を大いに買はれてダンガン昇格、神戸支店長、輸出主任、營業主任等を経て、現時は東京支店長として専ら社員に當つてゐる。八面六臂の活躍ぶりは名譽を博し、將來大飛躍を遂げる實業家として各界から期待されてゐるが、同社にとつても氏は正に「ホープ」であり「新星」でもあるわけだ。圍碁、將棋、寫眞、撞球、乗馬、庭球等を趣味とし、その道も仲々玄人である。とまれ、この多端なる業界にあつて、若さと熱とで前進する氏に大いに期待しやう。

三菱鑛業・常務取締役

山下元美氏

三菱を背景に活躍の勞を惜しまなかつた山下元美氏も、時局の展開と俱にいよいよ鑛業部門を指導するに至り、著々とその實績を収めつゝある。三菱は人物搖籃の温床とも云ふべく、人材の輩出はまことに數へ上げるといふまでもないほどである。山下氏の如きもその三十餘年の永き三菱生活には、幾多の大きな功績を残して來てゐる。而もその功をよく認められて今や三菱鑛業株式會社常務取締役として時めくに至つたもので、業界の事情通たると共にその手腕力量も夙に定評のあるところである。氏は京都府土族山下元貴氏の二男として明治十六年一月に誕生した。明治四十一年京都帝大工學部採鑛冶金科を卒業後、三菱鑛業會社に入り後に參事となり生野鑛山所長を経て現職に及んだもので、更に餘威を用ひて日本化成工業、東京鋼材株式會社取締役其他にも重役を兼ねて、燃ゆる如き事業慾に富む覇氣満々の闊將であることをよく現はしてゐる。それと共に氏の地位は最早牢固として動かし難いものとなつてゐる。

三井物産・機械部東京支部長

山城伊太郎氏

氏は東京府人山城伊三郎氏の長男にして明治二十二年九月に誕生した。大正三年京都帝大機械科を卒業後三井物産に入り大阪、ニューヨーク、ロンドン各支店詰よりハンバーク、大阪各支店機械部主任を経て現在の同社機械部東京支部長として號令するに至つたもので、今を時めく三井と雖も一人の力を以てしては如何とも爲し難く、氏の如くそれに歩調を合せて努力する忠實なる人々があつたればこそ、斯くまで大を爲せるものにして、そこに履ふことのできなない氏の功績を見出すことができるのである。氏は天才肌で頭腦緻密、凡て高等數學から割り出して合理的に運ばねば氣の濟まぬといふ性格である。而して氏の今日の大成を顧みれば、克く忍苦の幾春秋を克服して苦闘、以て今日を築き上げたのである。氏はあくまで初志貫徹に邁進する強力な意思の所有者である。辛棒強く根氣よく黙々として精進したればこそ、斯くも業務の隆盛を招いたもので十年一日の如く營々奉公の至誠を盡してゐるのである。

三井物産・臺灣支店長

山下樵曹氏

山下氏は元來、三井物産生え抜きの人物であるだけに、三井物産のビジネスマンとしてその傘下に在ること既に三十年に垂んとし、營々たる努力と不撓の精勵ぶりは氏をしてよく今日の地位にあらしめ、現在支店の第一線に起つて氣を吐く氏の姿こそまことに頼もしきものがある。氏は廣島縣人山下攝之助氏の二男にして明治二十三年一月に誕生した。大正二年東京高等商業學校を卒業するや、定石通り直ちに三井の幕下に馳せ參じた。斯くて物産生活に入った氏は殆んど支店詰として經營の第一線に奮闘して來たもので、先づ臺北支店長を振り出しにシンガポール、スマラン、蘭領各出張所々長、次いで漢口支店長、大阪支店次長等を歴任して現在の臺灣並びに高雄支店長として納まるに至つたもので、更に基隆炭礦、日本拓殖各株式會社取締役其他の重役を兼るほか、臺灣商會議所議員、臺灣移出米穀商組合、臺灣肥料輸出移入商同業組合、臺灣炭商組合等各組合長の任に在つて名實共に指導的立場に置かれてゐる。

高千穂製作所・社長

山下長氏

東都事業界は名にし負ふ巨頭群立の地だけに幾多錚々たる事業人が覇を競ひつゝあるが、その東都に夙に一城を築く英主、株式會社高千穂製作所社長たる山下長氏の名もまた噴々たるものがある。氏は鹿兒島縣土族山下清涼氏の長男にして明治二十二年五月に誕生した。大正三年東京帝大法科を卒業後常盤商會勤務を経て、大正八年高千穂製作所を創立したもので、爾來二十年間社長として今日を迎へた氏の卓越せる手腕力量は確かに世評を裏切らぬものがある。而も未だ五十歳の働らき盛りであつてみれば、人生いよいよこれからといふ感が一入深い。二十年間といふ永の年月、新業一本鎗で押し進みいさ、かも他の有利な事業を顧みなかつたところに氏の氏たる所以が存在し、その面目を躍如とせしめてゐる。氏は幼少の頃より實業界を志したゞけあつて、異常の熱と意氣とを持つてゐる性剛直の中にもなかく、弾力性を現はし、何事にあつてもすこしも焦らず、ちつくりと餘裕を見せるところに氏の面目がある。

吾妻電燈・社長

山田彰氏

舊福井藩主松平家の爲替係を勤め酒造業、海運業を営み苗字帯刀を許された山田慎氏の四男にあたる。氏は明治十四年一月に誕生し同三十七年に分家した。明治四十年東京帝大工學部應用化學科を卒業後、直ちに日本硫黃會社に技師として就任し、爾來精勵して同社専務取締役となつたが、やがて之を辭し現在の吾妻電燈株式會社社長に就任したもので、流石に將來名を成すだけであつて事業的手腕は夙に諸輩を凌駕して實にめざましきものがあつた。氏の事業生活も早や三十餘年にもなる其間に於ける氏の縱橫を極める快腕はことごとく手懸けて來た事業を前進せしめ、發展せしめて來たのだ。ことほどさやうにその卓腕は事業の上の遺憾なく具現されて來たのである。したがつて氏は常に時勢を鋭敏に感受してゐる。そこに氏の新しい經驗がうまれ、そして出發するのである。所謂新事業の創始者の人物とも云ふべきで、其型によく鑄込まれてゐる氏を見出す時、滿々たる覇氣をよく窺ふことができる。

山田機械製作所・社長

山田清志氏

帝都の城東區は古くより大島町を中心として工場街として知られてゐるが、近時の軍需工業の勃興に伴つて愈々同地區は盛況を呈し、今日では蒲田地區と共に帝都工業地帯の双壁を成すに至つてゐる。わが山田清志氏は夙に大島町に於て鐵工業を営んでゐたが現在は株式會社山田機械製作所社長として同社を主宰しつゝある斯界の驍將である。氏は明治二十六年二月福井縣人山田安之助の長男として誕生したが少年時代から東京に出て製作界に入り、文字通りに粉骨碎身の精勵を働んで今日の大を成すに至つたもので、氏の四十八年の閱歴はまさに一篇の立志傳を綴るものである。斯くの如く氏は力行主義を貫いて來ただけに、資性剛毅にして何ものにも屈せぬ堅志の人材であるが、また人情に厚いから部下から親の如き恩慕を享け、同社の業績は斯界羨望の的となつてゐる。猶ほ慶應二年生れの氏の嚴父安之助翁、明治五年生れの母堂ハツ刀自は共に健全であり氏の至り盡せる老養振りは界限の模範と仰がれてゐる。

日本水産・相談役

山田啓之助氏

大船川義介氏を總率とする大日産系は人材雲の如く集つてゐて、本邦事業界に一大偉觀を呈してゐるが、その中でも新進氣鋭の士として傑出せる人物にわが山田啓之助氏がある。氏は當年とつて四十四歳の青壯者であるが、流石に實業界の成功者たる先代啓助氏の後嗣たるだけに、超凡の識見手腕の所有者で、その活躍振りは誠に目覚しきものがある。氏は現在大日産の中樞事業たる滿洲工業開發監査、日本水産相談役として噴々たる聲名があるが、また三星取締役、玉水酒造監査役としても重きをなしてゐる。氏は明治三十年三月京都府人山田啓助氏の長男として誕生し、同四十五年家督を相續した。先代たる嚴父は滋賀縣の産であるが幼年時から京都に出て藥舖に奉行し乍ら零細を積んで資金となし、凍氷の販賣から身を起し、終に製氷界に覇を稱へるに至つた巨材であつた。氏は富貴令夫人との間に五男を寵まれてゐる子福者と知られて居り、先には父業を承けて龍紋氷室社長、大日本製氷副社長に任じてゐた。

滿洲重工業開發・常務理事

山田敬亮氏

滿洲重工業開發の使命は、日滿協同體産業の中樞を握つてゐるだけに實に大きい。而して同社總裁山田敬亮氏の名は日本的、東洋的、否な世界的に鳴り響いてゐる。だが山田氏が世界的人物になつたのは、わが山田敬亮氏が明治四十一年戸畑鑛物創立以來、形に影の沿ふ如くよき女房役として着いてゐることを忘れてはならない。現在も氏は滿洲重工業開發常務理事として依然女房役を勤めてゐる他、日産火災海上保險、滿洲鑛業各取締役、共立企業、日本鑛業、日本産業護謨、日産自動車大阪鐵工所、日立製作所、中央土木、日立電力、日産化學工業、日本水産、日本油脂各監査役として日産系の重鎮たり、また東京藤田組理事にも任じてゐる。氏は山口縣人故城周彦の令弟で明治十四年九月出生、同縣士族先代小太郎氏の養子となり四十二年家督を相續した。三十七年東京專門學校法律科を卒業、四十一年戸畑鑛物創立に參劃し大正六年同社常務となり、爾後東洋製鐵、日本硫黃、東亞電機、不二塗料等各社取締役を経て來た。

横濱工作所・社長

山田眞吉氏

大横濱實業界の元老格としてわが山田眞吉氏の令名は雷の如く鳴り響いてゐる。氏は現在横濱工作所社長として名采配を揮ふ他、大東塗料取締役たり、また東洋酸素機械、藤澤ゴルフ各監査役に任じてゐるが、氏の事業界に於ける經驗と手腕は既に斯界に定評あるところで、今更ら喋々を要しない。氏は本年とつて六十九歳、古稀に近い身である老來愈々矍鑠たるものがあり、クラブを振つてゴルフに興じ、ピツケルを擔いで登山を試み、また田園生活を樂しむなど、その壯者を凌ぐ健康には全く驚かされる。氏は明治五年尾州徳川家の世臣山田精一氏の四男として誕生し、同藩士山田度尙氏の養子となり同十年家督を相續した。同三十五年東大工科機械工學科を卒業、横濱船渠に入り、漸次累進して専務取締役となつたが、横濱工作所を創立して自らその社長となり今日に及んでゐる。氏は人格高潔、明朗なる好紳士として衆望を集めてゐるが、コト令夫人との間には二男四女の子寶を寵まれた幸福な家庭の慈父である。

大阪合同・専務取締役

山田留次郎氏

近江商人の名は歴史の示す處、現在東西各地の財界の巨星中江州出身者を以て最とする。山田留次郎氏亦然り、立志傳中の偉材である。氏は明治十五年四月、滋賀縣山田善八氏の二男として生れ、同四十三年分家獨立したのであるが、其の今日に至る氏の歴史を展開して襍史を撰せしめる清涼劑とする。氏は少壯時代京都市早田染料店に奉公し商賈に關する一切を會得し、明治四十五年獨立して、山留染料店を開設し爾來經營十數年、氏の明敏な先見は見事的中し、朝日の昇るが如く繁榮した。勿論其の間には茨の道も歩いたであらう。夜の目も合さぬ人知れぬ苦勞もあつたに違ひない。然し烈々たる闘志と不屈の精神とは幾度か嬰ひかゝる難關を突破した。大正十一年には大阪合同會社を創立しその専務取締役となつて今日の成果を見るに至つた。功成り名を遂げた氏は、日本クロス工業、ナフトール染料等各社の取締役として浪蕪業財界に覇者の歩みを續けて居る。産業功勞者として昭和十一年五月紺綬褒章下賜の恩命に浴す。

山田商店・社長

山田弘隆氏

山田商店社長山田弘隆氏は、佐久間製品販賣、興國精機各社代表取締役佐久間製菓會社専務取締役、日東製箱監査役等の要職にありて、各方面に活動し、活躍部面が廣汎に亘るが故に殆ど不休の毎日を送迎する狀況である。従つて見聞の廣き事、各方面の知識の豊富なる事は恐らく他の追従を許さぬものがある。氏は少壯時代青雲の志抑へ難く、明治三十九年朝鮮に渡り、清津に店舖を開き銃砲火藥金物類販賣の營業を創め、苦心奮闘の結果、産を成し山田商店今日の基礎を確立し、今や株式組織とし自ら之が社長となつて堅實な經營振りを示して居る。錦衣故山に歸るとは氏の如きを指すもので慶祝の限りである。氏は茨城縣龜卦川政隆氏の息、明治十一年の出生にして、後母の生家、山田弘意氏の養子となり、昭和三年養姉キク女の後を承け家督を繼ぐ。氏は豪宕精悍の性格で難事に直面するも屈することなく、初志の貫徹に向つて猛進するといふ不屈の精神が今日を招來したのである。只管自愛して一段の奮起を望む次第である。

山田商店社長山田弘隆氏は、佐久間製品販賣、興國精機各社代表取締役

佐久間製菓會社専務取締役、日東製箱監査役等の要職にありて、各方面に活動し、活躍部面が廣汎に亘るが故に

大成製作所・社長

山田平三氏

時局の波に乗つて躍動する工作界の隆昌は實に目覺しい勢である。日滿支を一體とする經濟活動が完成したに於ける、我が斯業界は更に雄大な發展を豫想することは當然の歸結と言へやう。山田平三氏は多年鑿岩機並に其部分品製作業を營み、比較的類例の少い營業支けに各地からの注文殺倒し、業態益々隆昌の一途を進み、愈々大を成したのである。其の間氏の苦闘には並々ならぬものがあつた。類例の少い支けに、其の機械の改善には特殊な研究を費し不眠の幾日かを送つたこともあるといふ。此の斷えざる精進あつたればこそ今日の成功に達したのである。現在、大成製作所社長として實業界に進出して來た氏の前途は刮目に價するものがある。氏は愛知縣山田平十郎氏の三男で、昭和二年分家獨立し、自主自營によつて躍進を續けつゝ今日に至る。明治二十六年の生れで實業人としての生命は今後にある。業界の將來は洋々として居る、中京財界に一大飛躍を遂げられることを待望して止まない。

時局の波に乗つて躍動する工作界の隆昌は實に目覺しい勢である。日滿支を一體とする經濟活動が完成した

に於ける、我が斯業界は更に雄大な發展を豫想することは當然の歸結と言へやう

重工業と對稱的關係に立つ輕金屬工業が、平和工業としては勿論軍需工業として一層貴重な役割を持つこと

山田康太郎氏

重工業と對稱的關係に立つ輕金屬工業が、平和工業としては勿論軍需工業として一層貴重な役割を持つことは、周知の事と思ふ。支那事變の進行に伴ひ、輕金屬工業の擴大と發展とは驚くべき勢にある。日本輕金屬會社は斯界に於ける歴史も古く内容も充實した優良屈指の會社である。氏は同社に常務取締役として臨み經營の樞機を握り、國策線上に立つて奮闘を續け、業績の劃期的繁榮を見るに至つた事は氏の卓抜な手腕によるものである。氏は又三十年の長きに亘り、京濱電力の爲めに献身的殉職的努力を傾倒し、同會社の重鎮として貴重な存在である。現に同社取締役技師長として實權を握り、京濱業界に才腕を馳せて居る。氏は鳥取縣人、明治十七年の出生、父繁藏氏の後を承け家督を相續し現在東京牛込に居住し子女の教育に任じて居る。明治四十三年東京帝大工科電氣科を卒業し、直ちに京濱電力會社に入り今日に及ぶ。濃厚實直向に圓滿な人格者であり、財界に於ける信用頗る厚い好箇の紳士である。

日本輕金屬・常務取締役

山田康太郎氏

重工業と對稱的關係に立つ輕金屬工業が、平和工業としては勿論軍需工業として一層貴重な役割を持つことは、周知の事と思ふ。支那事變の進行に伴ひ、輕金屬工業の擴大と發展とは驚くべき勢にある。日本輕金屬會社は斯界に於ける歴史も古く内容も充實した優良屈指の會社である。氏は同社に常務取締役として臨み經營の樞機を握り、國策線上に立つて奮闘を續け、業績の劃期的繁榮を見るに至つた事は氏の卓抜な手腕によるものである。氏は又三十年の長きに亘り、京濱電力の爲めに献身的殉職的努力を傾倒し、同會社の重鎮として貴重な存在である。現に同社取締役技師長として實權を握り、京濱業界に才腕を馳せて居る。氏は鳥取縣人、明治十七年の出生、父繁藏氏の後を承け家督を相續し現在東京牛込に居住し子女の教育に任じて居る。明治四十三年東京帝大工科電氣科を卒業し、直ちに京濱電力會社に入り今日に及ぶ。濃厚實直向に圓滿な人格者であり、財界に於ける信用頗る厚い好箇の紳士である。

川崎鶴見臨港バス・社長

山田胖氏

氏は福岡縣土族山田正修氏の七男にして明治十九年七月の出生なり。幼少より嚴父正修氏の嚴格な家庭教育を受け、秀才を以て聞えた。明治四十五年東京帝大工科を卒業し逡信省の屬官となつたが、氏の熾烈な雄志は一官吏に甘んぜず實業界入りをなし、東京アルミナ會社に其の一步を印し後日本電力株式會社に轉じ格勵精勵す。此の間實業家としての修養を積み、昭和二年鶴見臨港鐵道會社理事に就任、財界の第一線に立ち、その蘊蓄と經驗とを傾けて腕を縦横に揮ひ、現に常務取締役としてその運籌に當り、又川崎鶴見臨港バスの主宰者として堅實な經營振を示して京濱實業界に重要な存在をなして居る。氏が過去に於て順潮な發展を遂げて今日あらしめた所以は、一に氏の手腕力量に信賴の厚い爲めであり、その人格の清廉高潔に由來するのである。今や財界の中堅をなし錚々たる存在を以て將來を約束されて居る。氏の今後に於ける活動こそ大成への進撃で、練達湛能な手腕は中原に名を成すに十分なものである。

氏は福岡縣土族山田正修氏の七男にして明治十九年七月の出生なり。幼少より嚴父正修氏の嚴格な家庭教育を受け、秀才を以て聞えた

明治四十五年東京帝大工科を卒業し逡信省の屬官となつたが、氏の熾烈な雄志は一官吏に甘んぜず實業界入りをなし、東京アルミナ會社に其の一步を印し後日本電力株式會社に轉じ格勵精勵す

山中吉郎兵衛商店・代表社員

山中吉兵衛氏

大阪市第一位を占むる書畫骨董商、春築堂の名は餘りにも有名である。一度同店に足を止めたならば、古今東西に亘る新古の美術品が一大美術館の觀をなして陳列されてゐる。當山中吉郎兵衛氏は、先代吉郎兵衛氏の二男で明治二十六年二月出生、大正六年家督を相續前名龍太郎を改めて襲名し、其の遺業を繼承したのである。養兄松治郎氏京都に於て亦美術品商を營み、京阪相呼應して益々盛況を極め本邦に於ける斯業の王座に在るといふべきである。山中吉郎兵衛商店、山中商會の出資者であり經營者であつて、異色を帯びた財界の存在として名譽噴々として顧客の出入多く發展の一途を進んでゐる。由來我が國美術の發展は遠く源を奈良平安時代に發し、支那朝鮮の古美術に更に獨特の氣品を添え、東洋美術の粹と稱せられ、實に貴重な文獻として歐米の驚異的であることは先刻承知の事である。氏が營利的職業的見地から止揚して、日本美術界に寄與した功績は相當大きなことを想ひ深い感謝を捧げるものである。

臺灣商工銀行・事務取締役

山中佐太郎氏

臺灣商工銀行事務取締役山中佐太郎氏は、臺北金融界に於ける霸者的の存在であり、斯業界に堂々として君臨する俊材である。氏は明治十六年七月滋賀縣山中幾太郎氏の長子として生れ同三十三年滋賀縣立商業學校を卒業し、直ちに三十四銀行に入り専心社業に勵んだ結果、其の力量手腕は加速的に進境を見るに至り、累進して同行神戸支店次長に擧げられ、幹部級となつて大に活躍した。次いで兵庫、徳島縣池田各支店長に榮進、昭和四年臺北支店長兼臺灣諸店の監督となつて臺灣金融界に名を馳せたのであつたが、同八年三和銀行に合併せられし後も引續き三和銀行臺北支店長として勤務した。越えて同十年十月辭任し、臺灣商工銀行の招聘により同行事務取締役に就任し洗練至達の手腕を揮ひ、同行の發展を策し運營に精進して居る。何しろ約四十年間の銀行家として、其の經驗と實力とは驚くべきものがあり、業界の至寶的な存在として嫌たる地步を占めて居る試練を経なければ兎角上りに墮し易い氏の如きは實に貴重である。

高島屋飯田・取締役

山中政三郎氏

氏は高島屋飯田取締役たる外國華工業社長、富岡光學機械事務取締役、日東工業取締役に就き、財界に確たる地位を占める所の逸材である。明治十四年五月兵庫縣高島仁左衛門氏の嫡子として生れた氏は、同縣山中與三治郎氏の養子となり、明治三十年家督を相續し、同年高島屋飯田會社に入社した。若冠十七歳の氏は社員の言ふが儘に易々と精勵したのである。而し明敏な氏は稀風沐雨に堪え天稟の才質はめき／＼と伸展し、上層部の認める所となり累進して參事に推され、才を發揮した。次いで本店支配人に昇格し、一段の奮闘を遂げ數次の功績を擧げ、高島屋飯田の取締役に推挙を受け、今や同社の樞軸となつて經營に參畫し其の蘊蓄する凡てを傾けて活躍して居る。入店以來四十有五年隱然たる功績は蓋しはかり知れないことを信ずる。着實篤行の士であり實地で鍛へた手腕は信頼するに足ること勿論である。時の勢に依つて岸をかへる者のある中に營々として倦まず、氏の如きは稀有の實在である。

港町シャリーング工場・社長

山根蕃氏

大阪山根蕃商店代表取締役、港町シャリーング工場社長たる山根蕃氏は、鐵地金商として日本外地は更なり、歐米各地とも直取引を行ひ廣汎な範圍に亘つ營業し、財界不況の時代を克服しつゝ今日の隆昌を見るに至つた。現時局は洋の東西共に、非常時下に在つて斯業者の最も恐れ難關に直面させられ、之を突破する爲には、凡ゆる犠牲を忍び、凡ゆる困難を克服しなければならぬ。氏は青年時代から斯業に従事し、業界の機微に通じ加ふるに不屈不撓幾多の難局を打開して來た一騎當千の殊勳に輝く閱歷を持つ勇猛果敢な士である以上、其對策上の成案は胸中深く秘められてある事と信するが故に、現下の事情に即し最善な經營を繼續し、業界を指導して誤りなからしめる事と思ふ。氏は大阪山根蕃太郎の長男として明治二十一年一月出生、同三十一年家督を相續した苦勞人であつて花も實もある有徳の人物、阪神に於ける屈指の鐵商として財界に重要な地位を占めて居る。英雄的な氏が今後に於ける活躍こそ刮目すべきであらう。

大東塗料・事務取締役

山中銚雄氏

阿部次郎博士は不一致の要求といふ論文を書いた事を記憶する。東洋塗料會社事務取締役山中銚雄氏は其の前半生を船員生活と船舶關係の生活に委ねて來た人物である。現在の塗料關係の業務とは凡そ其縁が遠いものと考へられる。然し仔細に觀察した時に、船舶の外面殊に水準線下に要する塗料に就いては、各角度から視て今後の研究に俟たねばならない課題が残されてゐる。氏は愛知縣人山中季直氏の三男で明治十一年十二月出生、夙に商船に入社、累進して機關長となり技師となつて現業者生活を續けた丈に、此の方面に於ては一權威として許された。大正十二年船舶海務監督となつて、斯業の爲めに大きな貢獻をなしたのであるが、大正六年現在の大東塗料に入り事務取締役に就任、純實業家として乗出したのである。豪宕恬淡な氣魄を持ち且つ周密な頭腦を持つ氏は、財界人としての素質を多分に備へ、堂々として一戰を辭せざる驅氣に燃え阪神業界を睥睨し出色の存在を示して居る。

山中商店・取締役社長

山中直一氏

山中氏は關西實業界の重鎮であつて山中商店を母體する直系會社の總統として、堂々たる態勢を以て財界に君臨する少壯氣鋭の逸材である。氏は明治三十一年一月大阪府立直直七氏の長嗣子として出生、昭和十二年三月家督を繼ぐ。夙に大阪府立兩宮中學を卒へ神戸高木商業に入り同校卒業後更に東京商大專攻科に進み大正十年卒業、爾來祖業を繼承して山中商店經營に専心し今や劃期的興隆を見るに至つた。山中化學工業、三國製鍊所、ニデカ販賣各取締役に就き、中井鐵道、軌道機械製作所各取締役に就き、日本錫工業取締役に就き、中山製鍊所代表社員等廣汎な部門に亘つて要衝を占め、其の經營指導監督に當り統轄の手腕は非凡である。尙其の識見抱負共に卓抜であり剛毅果敢にして烈々たる闘志の威する等、頭領の器量十分に備へて居る。阪神財界は偉大な實業家の巢窟の觀がある。此の間に伍して堂々として一糸亂れざる手腕を發揮しつゝある氏は業界に於ける俊傑といふべく、將來更に大成すべき有爲な存在である。

大日本製糖・大里工場長

山之城寛平氏

事變下に於ける生産力擴充強化は喫緊事たる言を俟たざる所であるが、日常生活に須要な物資の圓滑なる配給を前提としなければ成立しない。然して日常生活必需品としての砂糖は重要な地位にある。大日本製糖が我が國民生活上に寄與した功績は偉大なものであり、又現在及將來を通じて同社が更に大なる貢獻をするであらう事は言ふ迄もない。同社大里工場長たる山之城寛平氏は、内地に於ける同社現地幹部として重要な地位に立つ人物である。氏は明治三十九年以來日糖に生活すること約四十年、營々として社業發達に盡瘁した功勞は没すべからざるものである。氏は明治十四年の出生、東京高工を卒業したのが明治三十九年、其の間幾度かの上層部更迭を餘所に、自己の職務に向つて只管邁進した忠實な氏の人物には頭が下る。單なる名利の奴隷となつて、上役の顔色のみ見る小才子と揆を異にし責任感の強い業界出色の存在である、五十代は實業家の生命線、よく之を乗り越えて堂々と覇者の地步を占むる氏の將來を期待する。

南島水産・社長

山本磐彦氏

從七位陸軍歩兵中尉として軍籍を有するわが山本磐彦氏は、京濱實業界の驍將として赫々たる聲名を馳せつゝある巨豪である。氏は現在南島水産社長として水産界に大を成してゐるが京濱間では東京灣汽船取締役兼支配人並に大島觀光事業常務取締役に就いてゐるが、一般的には知られてゐるだらう。御神火と大島節とは人口に膾炙してゐるし、大概の人間は一度位は椿と櫻の大島を訪れてゐるのだから。氏はまた日本土地證察、下田船渠、藤井回漕店各取締役に就き、今更ら喋々を要するが、氏の事業に對する識見手腕は既に定評あるところで、今更ら喋々を要すまい。氏は明治廿一年八月長野縣舊眞田藩士山本眞基氏の男として誕生した。同四十五年青山學院英文科専門部を卒業し、直ちに報知新聞社に入り同社記者、青山、明治學院教諭を経て、根津系の各社に關係してゐた。氏は本年五十三歳、人格、學識には申分なしで、愈々これから本格的な實績を増してゆくところである。氏の趣味は乗馬、和歌、刀劍にあると謂ふ。

山本製作所・専務取締役

山本 兼氏

帝都の西南蒲田區は今や大工場地帯と化して、昔日の葦の茂り生ふ荒蕪地から一新されて了つた。何んと云つても同地區は東京灣頭を扼し、京濱間を繋ぐ絶好の場所に在るから、今日の大繁榮を招來したことは當然のことであつた。同地區の大小工場は製作界の各般に亘つた重工業を網羅してゐるが、時局下の影響によつて軍需工場が極めて多い。わが山本兼氏が専務取締役として主宰する山本製作所は、同地區の同業間でも断然異彩を放つてゐて、隆々たる業績を示しつゝある。それと云ふのも氏は當年四十一歳の早大理工科出身の青年技術家で、滿々たる簡志に張り切つて事業の萬端に采配を揮ひ、且つ明朗果斷の資性の上に豊かな人情味を有してゐて、従業員の絶對的信望を集め、全工場打つて一丸となつて國策線に沿つてゐるからである。氏は明治三十四年四月の誕生で岡山縣人山本淺次郎の四男であるが、昭和八年分家して一家を成した。同社は昭和十一年業務組織を株式に改め氏自ら専務の椅子に就いたのである。

山東汽船・代表取締役

山本 堯雄氏

歐洲大動亂は伊太利の蹶起、佛蘭西の降伏によつて、愈々これからは老國英吉利のみが打倒の目標とされることになつて來たが、きのふまで大ブリテンと號し、七ツの海の支配者と威張つてゐた英の姿は、哀れといふよりあさましき限りのものとなるであらう。今やわが海國日本の相手は亞米利加のみである。しかも我れは、緊蹙一番、傲慢無禮の米をして、太平洋上から驅逐すべきではないか。斯かる秋、本邦海運界の雄たるわが山本堯雄氏が大陸への關門たる下關に在つて、山東汽船代表取締役として、半島、滿洲、北支航路に活躍しつゝあることは、新東亞建設の爲めに誠に心強き限りである。氏は山口縣人石津吉郎氏の二男として明治二十一年五月の誕生であるが、大正二年同縣人山本竹次郎氏に見込まれて養子となり、後ち家督を相続した。山本家は新盛舎と稱して海運業を營み、斯界に知られた家柄である。氏は當年五十三歳、清子令夫人との間には二男三女の子寶があり、慶應二年生れの養母ユキ刀自も健在である。

住友鑛業・別子鑛業所製鍊部長

山本 武一氏

氏は和歌山縣人川端松太郎氏の二男として明治廿二年二月に誕生、同四十五年山本仙之助氏の養子となつて昭和十一年に家督を相続したものである。明治四十三年大阪高等工業學校探鍊冶金科を卒業後、千原鑛山に勤務し主任技術者として俊才のほまれ高かつたが、大正三年住友鑛業株式會社別子鑛業所に轉じ、精勵するところがあつた名に負ふ住友財閥を背景にしてゐるだけに、英才は全國より調集し、頭角をあらはすことはなかく、容易な業ではなかつたが、品性高潔、舉措端麗、しかも業務に忠實熱心なる氏のこと故、忽ち幹部の信任を博し下社員の衆望を聚め、遂に現在では別子鑛業所製鍊部長として、斯業が群立して覇を競ひつゝある中に燦として光芒を放つてゐる。その手腕、その卓見、その經驗等何れも幾多錚々たる業者を抑へて立つだけの貫祿は、最早業界に押しも押されぬ偉大なる地歩を確立して居り、その間に於ける功績にも亦偉大なるものがある。資性剛毅のなかにもおのづから溢れる情味がある。

山陽製鋼・取締役會長

山本 東作氏

鐵鋼商を營む山本東作氏と云へば大阪に於ける洋鐵商の元祖として知られてゐる。即ち當家の四代前に當る東助氏夙に鳥取縣より大阪に出て和鐵商を營みしに始まり、先々代東助氏の時明治初年に洋鐵商を創めたもので、之ぞ同地に於ける洋鐵商の草分けとして、その令名はあまねく知られてゐるところである。爾來發展に發展を重ね次第に産を積むと共にその基礎いよゝ／＼固く、遂に今日の盛大を迎ふる直接の因をなすに至つたものである。氏は先代東作氏の長男として明治二十九年十一月に誕生、大正十五年先代の隱退と共に家督を相続し前名東五郎を改めて襲名に及んだ。夙に大倉商業學校を卒業して斯界を志し祖業を繼承すると共に、現に山陽製鋼株式會社取締役會長並びに合名會社山本東作商店代表社員として一身同體、絶體不可分の關係にあつて共に經綸を進めつゝあるが、流石先代が斯界に於ける一方の驍將なら氏も亦之に劣らざるの智將で、今や父子相傳の範を示すものとして異彩ある存在をなしてゐる。

東洋化成工業・専務取締役

山本 源治氏

大横濱實業界に在つて青壯派のベテランを求むるならば、先づわが山本源治氏が挙げられるであらう。氏は現在山本商店を本據として株式賣買業を營み乍ら横濱株界に活躍しつゝあるが、また東洋化成工業専務取締役たり、日本水産皮革、京濱機械製作所、本郷テンプ、太陽、バルブ各取締役たり、また京濱製糖、東京製糖工業、青龍鑛業各監査役、富士化學工業、三和商會、山本商店各出資社員として、化學工業、水産皮革、バルブ、機械製作、製糖、鑛業等各般に亘る事業に乗り出してゐるが、新進氣鋭の氏の向ふところ可ならざるは無く、各社共に着々として好業績を擧げてゐる。氏は神奈川人山本重太郎氏の二男として明治二十九年十一月出生した。大正四年中央大學を出て鐵道省庶務課に勤務してゐたが、大正十五年に至り東京に於て洋品雜貨卸商を營み、夙に昭和三年には横濱に歸つて山本株式會社を興して株式界に身を投じ、同十一年同店の組織を變更した。猶ほ氏は先には京濱機械製作所社長の樞席に就いてゐた。

山本工機・社長

山本 暹氏

時局メーカーの白眉たる山本工機株式會社を主宰し、傍ら山本傳動機株式會社代表取締役の要職にあつて、斯界に於ける一城の主として廣く知られてゐる山本暹氏の存在こそ確かに偉大なるものがある。今や單なるメーカーマンとしてのみならず、卓越せる手腕力量をもつて廣くその驥足を伸しつゝ、堂々と時局業界にその經綸を述べてゐる。したがつて今日の輝やかしい存在も、相當の成果を把握してゐるなどの點から云つて寧ろ當然の應報であるといふべきで、決して故なしとしないところである。氏は福島縣の産、荒井恒次郎氏の三男として明治二十九年五月に誕生したが其後山本房吉氏の養子となつた。府立實科機械科を卒業後斯界に入り鋭意向上を圖りつゝあつたが、養父の後を承けて家督を相続すると共に前記の要職に立つて一切を督勵なすに至つたもので、時は好し、バツクは良し、腕に申し分のない氏の將來こそは眞に刮目して見るべきものがある。人と爲り濃厚にして諳曲、讀書、ピクニック等が趣味である。

山本藤助商店・取締役會長

山本 藤助氏

大阪鐵鋼商の横網格として氏が經營する株式會社山本藤助商店の存在は眞に偉大なるものがある。今や鐵鋼商の覇者として業界制覇に胸を進めつゝあるのみか、山本汽船、プレス工業各株式會社社長、株式會社山本商會取締役會長其他の重役を兼ていよゝ／＼事業界に重きを加へてゐる。抑々當家は伊賀安兵衛氏の二男たる三代前の藤助氏が山本を名乗つて古鐵商を營めるに始まり先代藤助氏之を繼承する傍ら、海運業を兼營せしものが歐洲戰亂に際會して互利を博し其を契機として遂に山本藤助商店、山本汽船其他の會社を興して其社長となつたもので、氏は其長男として明治三十六年十二月に誕生、大正十五年家督相続と共に前名丑之助を改めて襲名に及んだものである。昭和二年同志社大學經濟學部を卒業後現在の如く山本藤助商店取締役會長を兼任するに至つたもので、流石に父君の名を取らしめぬ逸材だけに大阪鐵商組合副組長としても、又遺業たる帝塚山學院理事長としても齊しく畏敬の的となつてゐる。

海苔商・山本徳治郎商店主

山本 徳治郎氏

日本橋室町の山本海苔と云へば業界屈指の老舗であり、門前市をなす盛況をもつてよく知られてゐる。今や優秀なる斯界の權威として噴々たる盛名を擧はれてをり、昨今輩出する海苔商とは比較にならぬ豊富なる經驗を有して、絶體に他者の追隨を許さぬ牢固たる存在を示しつゝある。氏は東京府人田中久太郎氏の令弟にあたり明治十七年四月に誕生、其後先代徳治郎氏の養子となつて大正六年に家督相続と共に前名庄之助を改めて襲名に及んだ人と爲り慧眼にしてよく時代の趨向を明察し夙より斯業に従事するや、幾多の實際的智識と豊富な經驗を傾けて材料の精選、風味の絶佳を期して一意研鑽に努めた。かくて深ぐまじき精進は誠實を旨としてゐるだけに日に月の販路を擴張して一路躍進の途上を辿り、今や名實共に帝都一流の海苔商として東京府多額納稅者にふさわしき偉力を發揮しつゝある。まことに同店今日の盛況は店主たる山本氏の確固たる信念と熱誠努力をもつて事に當つた賜物と云はなければならぬ。

宮城電氣鐵道・社長

山本豊次氏

東北電氣事業界の花形として山本豊次氏の令名は噴々たるものがある。氏は宮城送電興業株式會社社長並びに栗駒水力電氣株式會社専務取締役として重きをなし、現に宮城電氣鐵道株式會社社長及び石巻共同運輸株式會社取締役として、東北實業界に隠然たる勢力を扶植しつゝある。勿論これは氏の事業經營の才腕を物語るものであつて、その卓抜なる手腕と縦横の智略とは出で、益々輝かしきものがある。氏は山口縣の産、山本勘藏氏の二男として明治十六年一月に誕生、大正七年に先代の令妹にあたるタメ子氏の後を承けて家督相續に及んだものである。明治三十年東京帝大理工科純正化學科を卒業し直ちに支那政府の招聘に應じ福建學堂の教授となり、大正元年歸朝と共に高田鑛業會社に勤務、高田鑛山鑛業所々長として卓抜なる手腕に物云はせて強引に英才を發揮して來た。而してその霸氣と卓腕とは遂に一方の將として本格的に活躍するに至つたもので、氏の事業經營は時局と共にいよゝその牙えを見せてゐる。

福助足袋・常務取締役

山本秀一氏

文化の進展と共に保健衛生上及び服裝整容の上からしても缺くことのできないのが日本固有の足袋である。永年の傳統に依つて個々小規模のものが多く業界に「體裁よく永持ちする」をモットーに大規模の會社組織と優秀なる機械力によつて、營業の眞價を發揮してゐるのが福助足袋株式會社である。創立以來首腦部の努力奮闘によつて着々と發展、遂に今日の大を招き磐石の如き業礎を築いたのであるが、中にも一際輝かしき存在を示しつゝあるのが同社常務取締役並に福助商事株式會社監査役たる山本秀一氏である。氏が今日實業界の智將として雄名を馳せてゐるのも平和産業を建前に、些かの投機的危險性を持たず充分に權衡を凝らし、堅實なる經營方針を押し進める典型的事業であるからだ。世に事業は人物の反映なりと云ふが、事業界に於けるその地位も今や確固不拔、牢固として搖ぎなき勢力を把握しつゝある氏の場合によくあてはまる言葉である。資性穩健篤實にして人を遇するに實に禮を厚うする人物である。

博進社・常務取締役

山本博氏

今日博進社と云へば我が洋紙界の白眉で、あの關西大同洋紙店に次ぐ業界の花形販賣會社であり、東西の雙壁としてその商務隆々たるものがある。株式會社博進社が今日の覇業を達成したのは一に氏の父君たる山本留次氏の努力精勵振りと、優秀なる經營手腕とに依るものである。少年時代より苦學力行、つぶさに世路の辛酸をなめ、大橋氏に見出だされてより洋紙商として獨立するまでは、文字通り不撓不屈の努力を續けたのである。氏はその長男にして明治三十六年十一月に誕生した。昭和二年早大商科を卒業後父君の經營せる博進社に入り、現に同社常務取締役のほかに株式會社文運堂常務取締役を兼ねて經營運行の衝にあつてゐるが、その才幹は父君に優るとも劣らざる程を示し、將來の利器として内外の信望を博してゐる。昭和五年には歐米各國を視察してその蘊蓄に新たなものを加へるなど、よき二代目としてその將來を大いに期待されてゐる。若さはあるし頭はよし、今後に希望をつなぐ者豈嚴父のみならんやである。

山本證券・社長

山本政太郎氏

所謂世上の成功者の中には確固たる資本と有力なる事業的背景とを以て之に卓腕を揮ひ赫々たる成果を収めたものと、氏の如く徒手空拳、五尺の體軀を資本とも背景とも恃んで健闘を果ね、遂に光明の彼岸に到達したものとがある。氏は和歌山縣人山本嘉八郎氏の長男にして明治四年二月に誕生し同二十九年に家督を相續した。先代嘉八郎氏の高野山御用人として名があつたが、明治維新の際に惜しくも蹉跌するの止むなきに至つた。斯る境遇に在た氏は幼少の頃より辛酸をなめつゝも密かに將來の大成を期し履物商を営み拮据勉勵、次第に向上して大正八年には遂に組織を改めて合名會社山本政商店を興すに至つた。現に同社代表社員として精勵しつゝあるほか、其後の加速度的發展に伴つていよゝ證券界へも突入、現に大阪株式取引所取引員であり山本證券株式會社社長として令名なだゝるものがある。昭和十二年十一月に紺綬褒章を同十三年十一月同飾版を下賜するの餘榮をもつて氏の全貌を窺ふに足るものがある。

浦賀船渠・常務取締役

山本幹之助氏

浦賀船渠株式會社の大黒柱的存在としてその經營に或ひは技術の指導に懸念に精進しつゝある山本幹之助氏は、夙に官界に在つて赫々たる功勞を樹てた人物で正四位勳二等、海軍造船中將の肩書が其間の消息をよく物語つてゐる。氏は京都府土族山本寛義氏の二男にして明治十六年十月に誕生し大正十四年に家督を相續した。明治四十年東京帝大工學部造船科を卒業後、海軍造船中技士を振り出しに海軍大學校教官兼海軍軍醫學校教官、海軍經理學校教官、海軍技術本部員兼造船監督官兼海軍艦政本部員兼造船監督官、舞鶴要港部員、横須賀海軍工廠造船部長佐世保海軍工廠長、海軍艦政本部第四部長に歴任、幾多の功績を収めて豫備役編入となるや、選ばれて昭和十三年二月に浦賀船渠の取締役となつたもので現に常務取締役兼浦賀工場所長として會て官界に在つた如く牙えた手腕をもつて最後の奉公に身を賭さん意氣込のもとに着々と實績をあげつゝある。時局今や多事、切に氏の健闘を祈つて止まない。

近元商會・會長

山本元三郎氏

浦賀船渠株式會社近元商會々長、木村實業、東京車輛製作所各株式會社取締役其他の重役を兼ねるの奮迅ぶりに實に目覺しきものがある。氏は幼少時代から天稟の英質を顯はれ必ずや他日大成を見るであらうとは夙に郷黨の人々によつて噂されてゐたところであつたが、果せるかなその期待に背かず英質を實際的に有能に生かして、華々しく活躍しつゝあるところは將に八面六臂の鬼才の人とでも謂ふべきであらう。氏は滋賀縣人先代元三郎氏の三男にして明治三十四年六月に誕生、大正十五年家督相續と共に前名房三郎を改め襲名に及んだものである。斯界の重鎮として鳴つた先代の薫陶を受けて商才を磨いた氏の手腕が、常に同業界の意表に出づる牙えを見せて居るのは當然であるが、かうした事業的遠見のみではなく、氏は亦情理を盡した圓滿大悟の人格者としても同業界からも畏敬の的となつてゐる。

滿洲工廠・社長

山本盛正氏

滿洲事業界に驍將の名をほしいままにして居る偉材に山本盛正氏が在るものと、氏は技術家として業界に發足したのであるが、その優秀技術と共に事毎に豪膽果敢な經營の才能は、遂に現在の如く滿洲工廠株式會社々長として一切を引受けてかりそめにも後顧の憂を無からしめてゐる。氏は鹿兒島縣土族山本盛秀氏の長男として明治六年五月に誕生、大正二年に家督を相續した。明治三十三年東京帝大工學部造船科を卒業して川崎造船所に入り造船工作部長を経て川崎車輛、川崎造船各株式會社取締役を兼ねてゐたが昭和八年に之を辭し、爾來滿洲工廠の一筋道を歩んで來たのだが、深奥を究めた學殖と卓抜練達の手腕とをもつて振興統制の衝にあたり、實績輝やくものあるはまことに適材適所の感が深い。したがつて氏は滿洲工業界の巨人として常に指導的立場に置かれてゐる人物であり、その地歩も今や牢固として抜くべからざるものがある。現に滿洲工業會理事長の任にあつて斯界のリーダーマンたることを如實に示しつゝある。

大分セメント・常務取締役

山本義人氏

大分縣に於けるセメント界の第一流に在つて敢然同業を睥睨し、その販路全國主要都市に普しと云ふ大分セメント株式會社は、その規模の大なること、基礎の強固なる點に於ては斷然他の追随を許さぬものがある。殊に同社取締役たる山本義人氏のハリキリかたはまた格別で、流石に手腕卓見あり、而も經驗に富むだけあつて斯業經營に對する熱情は眞に燃ゆるが如きものがある。實業家として膽も据り愈々これからは働らき盛り、といふ年輩だけに、今後大いに期待が持てる。氏は大分縣土族山本泰雄氏の四男として明治二十五年四月に誕生、大正十年に家督を相續した。夙に實業界に在つて活躍、現に大分セメント常務たるのほかに日本ドラマイト株式會社、大分縣農工銀行等の重役を兼ねて同業界に颯爽として呼號しつゝある。氏の重役は決して伴食ではなく又所謂重役稼業でもない、一々微に入り細を穿つて經營の樞機を凝らし、何れも指導發展を遂げしめてゐる。茲に於て氏の非凡なる手腕を再認識せざるを得ないのである。

日本運輸・代表社員

山本龍作氏

浪華に於ける運輸界の立役者として山本龍作氏の令名は夙に名だゝるものがある。氏は静岡縣の産、山本辰五郎氏の二男として明治二十二年五月に誕生した。大正六年東京帝大法學部政治科を卒業して湊商會に入り、累進して同社營業部主任となつたが、もと／＼霸氣に富んだる氏のこと、日頃より雄心勃々たるものがあり、惜しまるうちにひとまづ之を辭し、いよいよ獨立して海運業を営むことになつた。爾來氏の手腕は實に濶濶として飛躍街道を騁進し現に日本運輸會社代表社員大阪臨港運送株式會社社長、浪速海運株式會社取締役其他の重役を兼て文字通り業界をリードしつゝある。壯年の域を脱したばかりの謂はゞ漸くあぶらの乗りきつた働らき盛りだけに、氏の斯業に對する蘊蓄は到底他の追隨を許さぬものがある。華やかさはないからあまり目立たないが、しかし確實なものである流石に清水港の流れを引いてゐるだけに氣骨稜々、その前途は大海原の如くであるが、しかし氏は既に之を呑むの概がある。

鞍馬電氣鐵道・事務取締役

山本和七氏

氏は單なる重役ではない。電氣事業界の秀れた逸材であり又業界有数の權威者である。多分に學究的肌合を持つ氏は事業經營の傍ら、只管斯學の研鑽に怠りない。從て氏の斯界に對する蘊蓄は非常なもので、その卓見は常に社業の好轉を圖りつゝある。氏は兵庫縣人先代和七氏の長男として明治十六年三月に誕生、同二十一年家督相続と共に襲名に及んだ。明治四十年京都帝大理工科電氣工學科を卒業と共に斯界へと乗り出し、現に鞍馬電氣鐵道株式會社事務取締役、京都電燈株式會社常務取締役其他の重役を兼て名實共に電氣事業一本鎗で押し進んで來た。したがつて氏の今日までの經歷は又同社發展の過程でもあり、同社の社歴は取りも直さず氏の輝やかしき經歷でもあるのだ。事ほどさやうにして同社と氏とはそこに切つても離せない不可分關係があり、一脈相通するものがあるのだ。今日京都に於ける業界隨一の人氣者と云つたら、氏を措いて他には見當るまい。經營が古いと云ふだけではなく徳望を備へてゐるからだ。

森村同族・事務取締役

山脇正吉氏

森村財閥の偉業に光芒を添へしめてゐるのが山脇正吉氏である。現に森村同族株式會社事務取締役、程ヶ谷ゴルフ、東洋タイプライター、森村組其他の重役を兼ねて名實共に森村財閥の巨星としての令名はあまりにも有名である。何しろ吐は出來、經驗は充分積んで來てゐるし、更に森村財閥といふ背景が控えてゐるから、事業家として大成するのも當然かも知れない。しかしそれにも増して卓抜な頭腦の閃めきを以て着眼する新事業への企畫は正に百パーセントの偉大を示し、往くとして可ならざるなき有様を示してゐる。氏は東京府士族山脇正敏氏の長男として明治十六年七月に誕生した。明治三十九年東京帝大工學部電氣科を卒業後事業界へと臨み白山水力電氣株式會社取締役を経て現在の如く颯爽とその卓抜なる手腕と横縦の智略とに物云はせて、今や益々成果をあげてその大黒柱的存在を無言の裡に誇示しつゝある。

竹中工務店・事務取締役

山脇友三郎氏

今や皇國の大體政策の進展に呼應して隣邦滿支の樞要都市に驥足を伸ばし、建築日本の眞價を發揮すべく、著々その歩みを運ばせつゝある株式會社竹中工務店は、現在大阪を本據に東京、神戸、京都、名古屋等に支店を置き横濱、福岡に出張所を設けて全國的に活躍しつゝある。その竹中の事務取締役たる權位に在つて、よく竹中社長を補佐する一方大清水鐵道高等を向ふに廻して、あつたれば本邦土木建築界の驍將として、あまねく業界人の耳底を響いてゐるのが我が山脇友三郎氏である。氏は大阪府人山脇庄次郎の二男にして明治十六年八月に誕生した。夙に卓抜な技術才幹と稜々たる氣骨とは、温容の中にも統領たる器をもつて漸次進展、今や同社事務のほかに堂島ビルディング、雲山觀光ホテル各株式會社取締役を兼て重きをなしてゐる。氣骨稜々たる人物であるだけに氏は亦直情徑行なところがある、正義感が強く曲つたことは金輪際許さぬといふ氣韻味の溢れた偉丈夫で、當代稀に見る清節の人物である。

大和護謨製作所・社長

大和眞太郎氏

ゴムの使用量をもつてその國工業の發達如何を推し計ることが出來ると云はれてゐるが、ゴムこそは眞に文化のバロメーターと云ふべく、ゴムの栽培地を繞つて列強の競走が激化するほどゴムの價値は高まつてゐるのである。この秋にあつて斯界に錚々たる名を轟はれつゝ、優秀なる成績をあげてその將來に多大なる期待をかけられてゐるものに株式會社大和護謨製作所がある。ゴム工業の異常なる發展を遂げつゝある今日、その大きな潮流に掉して斯業は何れも隆々たる躍進の過程を辿りつゝある。中にも同社の如き製作技術の優秀性を誇るだけあつて、その發展も凄まじく殊に斯界の權威として知られてゐる大和眞太郎氏が専心その經營の衝に當つてゐることゝ、今やその名聲業界を壓するかの觀がある。氏は福井縣人大和宇三郎氏の長男で明治二十三年四月に誕生、大正九年に家督を相続したものである。夙にゴム製造業を營みつゝ粒々辛苦の星霜を経て遂に今日の如く大和ゴム製作所社長として時めくに至つたものである。

湯淺伸銅・社長

湯淺讓氏

湯淺伸銅、京濱鋼管工業各(株)社長、湯淺商店(株)監査役として業界に異彩を放つてゐる氏は、關西財界の中堅的存在として名聲が高い。氏は明治二十四年九月に、大阪の人湯淺元十郎氏の長男として出生し、同三十八年、嚴父退隱の後を承けて家督を相続したのである。氏の令弟湯淺二郎氏も業界の信望極めて篤い人で、兄弟揃つての逸材として知られてゐる。我が國の工業は、なんと云つても關西を第一とするが、事變以後の軍需景氣は同地を席捲して全面的に活況を呈し、中小工業者がこゝに群雄割據の態勢をとるに至つた。だがその中にあつて湯淺氏は敢然と立ち、前記諸會社を傘下に、堂々他を威壓して躍進を續けてゐる實力あり、才腕あり、加ふるに高邁なる人徳あり、數多くの従業員、社員に號令して徳望頗る篤く、業界一方の驍將として全く相應はしき傑物である。我が帝國も未曾有の非常時に直面し、一大轉換を餘儀なくされた業界にあつて、出で、天賦の才を發揮、尙一層活躍されんことを衷心より切望する。

參松製鉛・社長

横山長次郎氏

有爲轉變は世の習ひと云ふ。事實目まぐるしき世の變遷につれて、その境遇に新たなるものを加ふるは、寧ろ當然とも云ふべきで、そこに新人生觀を招來し、所謂「人間味」の體得ができるのである。時局の進展と共に華々しい存在をつゞけて來てゐる横山氏なども、過去三十餘年に亘る財界生活を顧みるとき、そこには山あり、谷ありで、或時は得意の絶頂にあり、又或時は不運をかこつたこともあるといふ風に、その事業生活に幾轉々を味はつたものである。氏は岩手縣の産、横山久太郎氏の長男として明治十三年八月に誕生、大正十年に家督を相続した。明治三十五年慶大理財科を卒業後事業界に入り、鮮やかな手腕を示しつゝ活躍をつゞけてゐるが、今や參松製鉛株式會社社長として隆々たる勢威を築きつゝある。曩に三陸汽船株式會社社長として君臨しつゝあつた際氏の手腕力量は既に充分認められてゐたのだから、改めてこゝに喋々の要はない。現に同社相談役として以前に變らぬ信望をつないでゐる。

南滿洲加工品・社長

吉家敬造氏

南滿洲加工品株式會社と吉家敬造氏の關係は、最早切つても離せない絶體不可分のものであり、同社の大黒柱として重きを成してゐるだけに、その經營の推進力と呼稱されてゐる。氏は長野縣人吉家捨藏氏の長男として明治十六年二月に誕生した。早大専門部法律科を卒業後、方角違ひの實業界目指して押し進んで來たのだが、流石にその才腕は争はず、ピツチをあげつゝあつたが滿洲鑛山藥株式會社取締役の頃からいよ／＼本格的にその牙を嵌めて來た。而して永にき互る氏の苦闘は南滿洲加工品株式會社の社長となるに及んで、今や全く結實の秋を迎へるに至つた。それにも増して何事にも精理をかたむけて、萬全の努力を拂ふ氏の風貌は語らずして、よく察知できるのである。宿志成つて同社の社長に納まるの日、氏の感慨また一入なるものがあらう。同社もまた吉家氏の如き所謂「ハリカリ」型の逸材を得てゐる以上、その經營陣に大いに見るべきものがあると云つてさしつかへなからう。

東京寶塚劇場・社長

吉岡重三郎氏

東京寶塚劇場社長吉岡重三郎氏は後樂園スタヂアム社長として本邦舞踊映畫界經營の大立物である。梅田映畫劇場専務取締役、大映映畫劇場常務取締役、寶塚ルナパーク、寶塚映畫、東寶映畫、寶塚土地建物各取締役、寶塚會館、第一興業、寶塚ホテル各監査役に就任し、凡そ著名な劇場經營に氏の息の掛らぬものはない程偉大な事業界の存在である。氏は大阪府吉岡勘三郎氏の三男、明治十六年生れで、豪毅英邁を以て有名である。嘗て寶塚劇場の帝都進出に際しての葛藤をもあつさり擲いて堂々たる發展を示し、斯の道の特殊な複雑な事情をも鮮かな手際で解決して行く非凡な才幹には唯々敬服の外はない。寶塚を中心としての其の勢力の偉大なことは正に驚嘆に値する。人氣稼業だけに其の經營には微細な點まで注意して大衆の心理を攫まねばならぬ。氏は其の呼吸にかけての天才で、豪放洒落中に綿密と周到さを持つ英雄的存在といふも過言でない。今や時世の流れを汲んで社會を指導するは正に重責である。研究琢磨を望む。

東京芝浦電氣・參事

吉岡不二彦氏

氏は山口縣士族吉岡悌輔氏の長男にして明治二十二年二月に生れ、同十七年家督を繼いだ父縁に薄い仁である。明治四十二年山口高商卒業の逸材であつて帝都に職を求め、東京電氣會社に其の一步を印したのが抑も氏が財界への發足であつた。氏は茲に實務を見習ひ乍ら電氣事業に關する諸般の研鑽を怠らず、實力の涵養をはかり勤勉刻苦黙々として専心社業に盡瘁した。氏は誠實格動で抱負識見の卓抜せるものあるにも拘らず、濫りに發表をしないが、偶々決河の辯を揮ひ其の造詣を示し人をして傾聽せしめる事がある。現在同社參事として經營を指導し重要な地位を占めてゐる。尙日本電氣副社長、聯合紙器、名古屋バルブ製造各社監査役を兼務し財界に躍進し新進を誦はれるに至つた。東京芝浦電氣會社三十有餘年の功績は決して尠くない。名利を追うて轉々する徒輩と同日に論ずべからず、汝々として社運進展の爲めに粉骨碎身して倦まざる氏こそ眞の實業家といふべきである。將來財界に覇を制することを確信して疑はぬ。

日産汽船・代表取締役

吉川小三郎氏

歐洲の風雲欲まり東亞に新秩序完成の曉に於て我が國事業界の發展こそ眞に世界を驚倒せしむべきものであらう。同時に海運事業が之に即應すべきこと勿論である。劍戟の戦禍終結と共に世界の經濟戦は愈々深刻の度を加へ、樽俎折衝の舞臺に稱へるには海軍制海の權を先づ以て把握することが要諦である。日産汽船會社は近海航路を握る有力な存在である。船質改善助成法施行以來業績の發展目覚ましく我が世の春を謳ふ盛況裡に軍需輸送にも貢献しつゝある。吉川小三郎氏は同社に代表取締役として君臨し其の運營の樞機を握り、監督指導の重責を果して餘裕猶々たる傑物である。日本汽船常務取締役、鹽竈汽船取締役として社外海運界に燦たる存在を示し、其の力量と手腕は定評ある所、眞に斯界の一種威といへる。抱負に於て經綸の才に於て卓抜の聞えが高いとはいへ、氏は技術者肌で地味な堅實一本槍で進んで行く所其の面目の躍如たるものがある。健康法としては戶外運動を以て唯一の道として居るといふ事である。

履物商

吉川小治郎氏

塗下駄の主産として京都と静岡とは本邦に於ける東西の樞綱であり、内地は勿論滿支朝鮮に移出する額も相當多額に上つて居る。男女ともに比年洋服着用が普及せられ靴履が多くなつたことは争はれない。然も古來から常用せられた草履木履は日本獨特の情味を持ち親み深いといふ點からも減退するものとは考へられない。殊に塗下駄の持つ感觸は宛然たる繪巻であり純粹な美術品とも見られる。京都東七條の履物問屋吉川小治郎商店は父祖の代から斯業の老舗として有名である。氏は明治三年先考小治郎氏の長男として生れ、同四十年父退隱の後を承け前名佐五郎を改めて襲名し家業繼承した。少年時代から先代に仕込まれただけに其の道の巧者で商機商略にも長じ、時代洞察にも機敏であつて夙に大陸にも顧客を持ち業態益々盛況の裡に終始してゐる。氏は至つて濃厚圓滿で京都特有の優しさが有り、其の如くない應對振りはよき第一印象となり、顧客跡を絶たずといふ繁榮振りで御家萬代洵に慶祝此上もない。自愛の程を切に祈る。

東海電線・社長

吉田伊兵衛氏

三重縣四日市に大勢力家吉田伊兵衛氏がある。氏の聲名は今更云々すべくもなく餘りにも顯著である。氏は小林伊兵衛氏の四男として明治十六年に生れた。同四十年に同縣吉田家の養子となり家督を相続したが、大正三年に前名徳造を改め襲名した。夙に慶大に學び、現時東海電線(株)社長、北紀銀行、參宮急行電鐵、四日市銀行、霞浦土地、四日市製材、四日市土地建物、四日市倉庫各(株)取締役、日本無線電氣電話、四日市商事各(株)監査役の大任にあり、奮迅の勢ひをもつて業界に飛躍してゐるが、曩に四日市市會議長、三重縣々會議員、四日市商工會議所常議員、同副會頭に推され名聲赫々たる有力者、功績絶大である。また穩健重厚なる高潔の士で、仕事第一主義をもつてその信條となし、現三重縣財界の巨頭として搖るぎない存在だ。數多くの關係會社が何れも整然たる統一と融和をもつて、堅實に進展してゆくのを見ても、氏の人格の如何なるかは察するに餘りある。この非常時財界を背負ふは正に氏であらう。

京都拓殖・専務取締役

吉田永三氏

氏は京都府士族吉田永昭氏の長男にして明治十二年九月生れ、同三十一年に家督を相続し、現時京都拓殖株式會社専務取締役、第一工業製藥株式會社取締役を兼ね、更に稻垣合名會社支配人として辣腕をふるつてゐる。氏の事業界への進出は餘り派手なものではないが、反面確固たる堅實性があり、堂々たる押し出しは實力派の大御所たる貫録を遺憾なく發揮してゐる。現今京都拓殖株式會社が業界の一角に起つて、愈々急ピツチを上げて雄飛してゐるのは、とりもなほさず、當社の經營の堅實と人的要素の優秀さを立證するもので、隆々たる同社今日の雄姿は一つに經營首腦者吉田永三氏の奮闘努力の賜であることは多言を要さない次第である。多年同社にあつて力戦をつゞけ、社業の發展に、社運の隆盛に、只管努力した氏の功績は餘人の到底及ぶべきものではなく、而してこゝに氏が偉大なる成果を得て最高の指導者として樞機にあるのだが、過去に於ける偉大なる足跡から推してみれば當然の歸結といふべきであらう。

共和電氣・社長

吉田岩平氏

吉田硝子製造所現當主吉田岩平氏を語るには先づ先代岩吉氏の功勞を語らねばなるまい。滋賀縣先代岩吉氏は夙に硝子製造業を志し、苦心研究の後明治十九年に大阪に獨立創業し、爾來熔解爐の發明、煙道の餘熱利用、原料の改良等十幾種の特許新案權を獲得した。當主岩平氏はその長男にして明治二十三年四月に出生、大正七年に家督を相続、前名信藏を改め家業を繼承、嚴父の遺志を受けて只管研鑽を積み硝子コップ、卓上硝子器類の製造輸出業を營んでゐるが、傍ら共和電氣、東洋光珠各株式會社を主宰、社長として指導の任に當つてゐる。氏は天賦の經營的才幹が拔群なるは云ふまでもないが、一方硝子工業界の技術者として吾が國の權威者でもある。曩に印度、南洋方面に硝子市場の調査に自ら出張して斯道の進歩發展に貢獻、また「印度と南洋」なる著書がある。旅行、俳句日本畫を趣味として、風雅なる風格を成す。濃厚篤實にして淡泊なる氏の人爲は、實に業界のホープとしてその大器を謳はれてゐる。

大鮮砂金・社長

吉田嘉四郎氏

氏は大鮮砂金株式會社長たるのほかに、日本倉庫株式會社監査役として業界に名をなす逸材である。また東京米穀商品取引所(株)常任理事としてその信望極めて厚い温容の人、産業の開發に盡した功績も尠くない。云ふまでもなく氏が現在主宰してゐる大鮮砂金は、頗る好調を續け、黄金狂時代を反映して將來非常に有望なる優良會社である。多年に亘る氏の拮据經營は、砂金採取能率に、社業改革に、業績向上に大きく現れ、統制ある昨今の内容充實ぶりは明らかに氏の手腕の鮮やかさを示してゐるものである。夙に業界に入つて研磨され、洗練された氏の商才は、透徹せる時流の直感力と相俟つて、最早熟達の境地にあるの感さへするではないか。これは當社最近の業績に現れた數字においても示し得やうと思ふ。見識あり、熱情あり、而して霸氣あり人望あり、ひろく業界に響いてゐる氏の名聲も決して故なしとは云へないであらう。柔和なる風貌、典雅なる風格、眞摯質朴の人爲も氏に洵に相應はしく將來性のある人格者だ。

吉田商店・社長

吉田芳太郎氏

明治、大正、昭和と三聖代に亘り、
紗を相手に暮して来た。吉田芳
太郎氏と云へば、直ちに斯界の權威
者となすことが出来る。ところが御當人は之を少しも誇らうとはし
ない。今こそ業界も比較的平穩になつたもの、氏の若い時分にはよくいさ
こさが起つたものだ、ところでその調停役に必らず擔ぎ出されるのが氏であ
る。今にして氏が感慨にふけるならば、おそらく今昔の情切々たるものがあ
らう。曩に京濱羅紗商同盟會々長及び相談役として斯界に盡すところ少くな
かつたのも、氏の人となりをよく物語つてゐる。氏は大阪府の産、吉田與八
氏の三男にして明治十年十月に誕生、同三十六年に令兄太郎氏より分家
した。明治三十六年内毛織物直輸出入商を開業し後に合名會社となし、更
に大正九年に株式會社に改組と共にその社長となつたもので、傍ら丁子屋、
睦商會各株式會社取締役を兼てゐる。資性温厚篤實にして尙壯者を凌ぐ元氣
をもち、謡曲、書畫、園藝、將棋等に趣味を抱いてゐる。

大平生命保險・専務取締役

吉田義輝氏

事業界を文字通り天馬空を征くが如
き敏腕をもつて風靡しつゝあるのが
吉田義輝氏であるしたがつてその経
營下に屬する事業も頗る廣範に及び、殆んど氏が之を切つて廻してゐるとい
ふ有様である。即ち大平生命保險、富國徵兵保險各株式會社専務取締役を始
めとして鐵道、重工業、殖産興業、瓦斯、土地、汽船會社等々實に十指にあ
まるものがある。元々豪腹で人物も大きいし、スケールも宏量に出来てゐる
から、その快腕も今や各界から刮目され異常の好評を博しつゝある。成功
は運・鈍・根と云ふ。運が良く鈍根でなければならぬ。鈍根とは才子でな
くして努力精進を根氣よくつゞける人のことを云ふのである。氏はその成功
傳の典型とも云ふべき人物であり「天は自ら助くる者を助く」を地で行つた
のである。氏は山梨縣の産、吉田義久氏の二男にして明治七年二月に誕生し
大正十年令兄太郎氏より分家したものである。流石老練な手腕を揮して
ゐるだけに、徒らに功を焦らす益々重厚性を加へしめてゐる。

東京灣埋立・取締役兼支配人

吉野美都義氏

東京の港設備は大震災後後に於ける
帝都の復興事業中でも、最も大きな
事業であつたが、之れには東京灣埋
立會社があつて重要な役割を務めて来たのである。わが吉野美都義氏は同工
事の初年大正十三年以來同社にあつて、寧ろなき活動を續けて来たもので、
大東京港の完成には、殊動甲の貢献を致して居る。氏は現在同社取締役
にして支配人たり、且つ經理課長をも兼ねてゐるが、その事業經營の手腕
は快刀亂麻を斷つのがあり、業界の絶讃を浴びつゝある。氏はまた八洲電
機、川崎自動車運輸各取締役たる他、川崎鶴見臨港バス、川崎合同タクシー
各監査役、鶴見臨港鐵道理事に任じてゐて、聲名噴々たるものがある。氏は
明治二十六年十一月群馬縣人吉野慶三郎氏の長男として誕生したが、大正三
年家督を相續した。先是明治三十九年十四歳にして淺野商店に入つたが、此
間、大志を抱く氏は苦勞力行し乍ら大正六年日大商科を卒業し、大正十三年
大淺野系の東京灣埋立に轉じ、今日の大成をなしたのであつた。

東洋汽船・専務取締役

吉原政智氏

郵船と商船が本邦海運界の兩横綱な
らば、わが東洋汽船は日産汽船と相
並んで兩大關と見立てられる。しか
も同社は古い歴史に物を言はせて居り、且つ八、九千噸級を主體に四、五千
噸級の優秀船を揃へてゐるから、遠洋航路にも大いに幅を利かせてゐる。わ
が吉原政智氏は當年四十五歳の青壯者であるが、同社専務取締役として斯界
に萬丈の氣を吐きつゝある開將で、その馬、觸れば馬を切り、人、觸れば
人を斬る概ある力戦振りは、流石に猛將開將揃ひの斯界を驚嘆せしめてゐる
氏はまた東洋海運取締役としても名采配を揮ひ、好評噴々たるものがある。
氏は明治二十九年十月佐賀縣土族吉原政道氏の三男として出生した。藤隠れ武
士の血を享けてゐる人である。大正十一年東大法學部を卒業して安田保善社
に入り、爾來安田銀行貸付課勤務、阿波鐵道支配人等を経て現職に就いたも
ので、先には歐米各國を視察巡遊して来た。今や海國日本は英國の没落を眼
前にして世界に覇を稱へんとする秋、切に氏の自重を祈る次第である。

大連汽船・常務取締役

吉富金一氏

滿洲事變の功に依つて勳五等を賜は
つた吉富氏のことである。滿洲の新
天地とは切つても切れぬ間柄にあり
それだけに事業に打込む精氣にもおのづからほとばしるほどのものがある。
氏は一度事業經營の衝にあたるや天分を發揮して遺憾ないまでに手腕を驅使
する。もとより實業界中に見る眞摯なる手腕家であつて、その謹嚴なる態
度と表裏なき實業生活とは、常に不正不義を斷乎否定し清廉をもつて畏敬を
聚めてきたのである。氏は長崎縣人山口要吉氏の四男にして明治二十二年九
月に誕生、同三十七年先代テル氏の養子となり大正五年養母退隱に因り家督
を相續した。明治四十四年神戸高等商業學校卒業後、直ちに南滿洲鐵道會社
に入り埠頭事務所長、大連事務所長等を歴任し、昭和十年大連汽船會社に入
り今や推されて同社常務取締役の要職に在り、しかもその眞摯なる堅實性を
よく事業に反映せしめて、只管事業報國に精勵しつゝある。唯一の趣味は謡
曲で朗々たる音の中に自我を没してゐるといふ。

日本團體生命保險・常務取締役

吉野孝一氏

悠々として迫らざる典雅寛容の大度
量と、謹嚴篤實な資性をそのまゝ、反
映した言行とは、氏をして目先の才
智を街ふ小才子よりぐんと引離し、斷然輝くばかりの床しい品格を示し、業界
一般の尊敬にも格別なものがある。氏は山口縣の産、吉野秋太郎氏の長男と
して明治二十年九月に誕生した。明治四十四年大阪高等工業學校を卒業後同
校助教となつたが、大正五年に同校を辭しやがてエンヂニヤリング社を創
立した。斯くて昭和元年には大阪工業會常務理事に就任し、同九年には日本
團體生命保險株式會社の創立と共に常務取締役兼大阪支店長に選ばれたもの
で、傍ら旭内燃機株式會社監査役の任にある。流石は累代地方切つての素封
家であり德行の家として聞えた家柄の嫡子であり、而も傑材たる父君の薫化
を受けて成育しただけに、深き學殖と英才を抱いて些かも侮はず、柔剛宜し
きを得た高潔なる人格は、國際労働會議に使用者側代表顧問として渡瑞した
のを見ても充分領ける譯である。尙大阪俱樂部、清交社各會員である。

圓滿地鑛山・専務取締役

吉見國之助氏

獨立自營を以つて成功して立志傳的
人物は數多くあるが、中でもわが吉
見國之助氏の如きは第一頁を飾
たる地位を占め、赫々たる聲名を轟はれてゐるが、その人と爲りは資性剛健
にして何ものをも怖れず、何ごとにも屈せざる大丈夫の志堅き人である。かか
るが故に一度び意を決して事業に當るや初志を貫徹せしむる止まずとなして
居り、しかも永年の苦勞によつて人世の機微に通曉してゐて、部下一同の絶
對的信頼を得てゐるから、今後の圓滿地鑛山は氏の眞摯を盡した指揮采配下
に國策線に沿つて隆々たる業績を示し、業界羨望の的となつてゐる。氏は明
治十六年滋賀縣人吉見松治郎氏の二男として誕生したが、夙に大志を抱いて
上京、早稻田中學卒業後は、それこそ文字通りの粉骨碎身の精進を續け、漸
く昭和元年に至つて獨力圓滿地鑛山を經營することになり、同九年業務發展
の爲め株式に改組して専務の椅子に就いたのであつた。

鹿兒島化學研究所・専務取締役

吉峰長作氏

南九州實業界に人物を求めらるなら
第一指は先づわが吉峰長作氏に向け
られるであらう。氏は鹿兒島實業界
の元老格として巨星の如き燦たる光芒を放ちつゝある偉材で、その聲名は雷
の如くに響き渡つてゐる。現在氏は鹿兒島化學研究所専務取締役として同社
を主宰してゐるが、氏の應用科學に對する研究心は實に眞摯なるものがあり、
心身を打ち込むといふ熱烈さをもつてゐるから、同社の齎しつゝある成果は
國策上にも大きな貢獻となつてゐる。また氏は丁字屋商店、日本水電、南薩
鐵道各取締役任じてゐるが、練達堪能の域にある氏の名采配に各社共賑々
たる業績を示し、業界羨望の的となつてゐる。氏は明治九年七月鹿兒島縣人
吉峰次右衛門氏の二男として出生したが、大正十二年令甥喜八郎氏方から分
家して一家を立てた。夙に家業として鹽元賣捌業を営み乍ら廣く實業界に乘
り出し今日の大を成した。ミツエ令夫人との間には二男二女の子寶があり、
長男一郎氏は丁字屋商店取締役として氏の事業を輔けてゐる。

新興産金・常務取締役

吉村 尚一氏

世界經濟は今や轉換期の絶頂を越へて新形態形成に向つて邁進しつゝあると観るべきであらう。従つて氏は硬貨及び準備貨として用ゐられてゐた金に對する通念は、今日に於ては外貨獲得のための金と大變革を來たし、その外貨獲得のためには工業其他の金材使用が極端に制限され、且つまた金を得るための産金事業に對しては、局局は全力的な支持援助を與へつゝある現狀である。斯かるが故に刻下の産金界は前古未嘗有とも云ふべき股賑時代を招來してゐる。わが吉村尚一氏はその産金界の花形として盛業を誇つてゐる新興産金常務取締役たる巨豪であるが、同社今日の隆盛は同社長高木次郎氏、専務高木秀夫氏父子を輔けて名采配を揮つてゐる氏の貢獻に負ふところ多大である。また氏は安田物産、兩羽鑛業各取締役としても、令名噴々たるものがある。氏は明治十五年五月東京府士族吉村金之助氏の長男として出生、同四十年家督を相続した。猶ほ氏は先には昭和土地林業及び昭和林業各社重役に任じてゐた。

粟本鐵工所・常務取締役

吉本源之助氏

氏は京都帝國大學工學部教室に、其の蘊蓄を講ずる一方大阪府立工業獎勵館囑託として工業教育、工業發展に關する貴重な職に就き、致々として精進する學究的態度には自ら敬虔の念が湧いて來る。又一面實業界の現役として鑄たる巨頭捕ひの阪神財界に堂々として肩を並べて活躍する逞ましい手腕は驚異に價する。粟本鐵工所が氏の如き知能と手腕を兼備する傑物を招致し得たことは心強い限りで其の發展の主因も茲に存するといふも過言ではない。氏は吉本龜吉氏の長男として明治二十六年の出生、麒麟兒を以て誦はれ、大正八年京都帝國大學卒業後、汽車製造會社に入り機械工場主任に昇進し同社の柱石的存在をなしたが、昭和二年粟本鐵工所に轉じ、沈滞せる同社を盛り返し今日の盛況に導いた手腕は推賞に餘ありといふべし。又日本高壓パイプ取締役、明光重工業監査役を兼ね大阪財界に出藍の名を擲して居る大阪生え抜きの土地兒である。暇あれば書に親しみ内外の事情に精通すること蓋し氏の如きは稀であらう。

大橋本店・専務取締役

吉谷 專吉氏

我が財界の王座を占有し堂々たる、偉容を以て實業界に君臨する大橋本店の専務取締役吉谷專吉氏は現代の偉傑である。頭取たる當主大橋新太郎氏の懐刀となつて、株式會社大橋本店を本據とし、博文館を始め幾多の關係會社を統轄して整然たる進軍譜を奏して居る氏の手腕才幹の並々ならぬことは勿論である。氏は鐵壁の如き堅き信念の下に徹頭徹尾、實力踐實努力をモットーとして進む奮闘家である點を買はれたのである。果せる哉、入店後の氏の精進には店主大橋氏も舌を巻いた程であり將來爲すある人物なりとの烙印を捺された。氏は明治二十一年宮城縣渡邊爲成の三男として生れ、古谷藤三郎氏の養子となり家を繼ぐ、大正三年東京帝大法科を卒業し、東京灣埋立會社庶務課長、京城電氣參事、共同印刷専務取締役總務部長を経て大橋本店に入り、現在博文館専務取締役、大橋圖書館理事其他數社の重役を兼務し、帝都財界の樞軸をなし出色の名を擲はれて居る。氏の今日あるは其の實踐躬行と奮闘努力の所産である。

萬年筆株式會社・専務取締役

米澤熊之進氏

職業の専門化傾向は各種の新興事業を誘發し多量生産廉價供給を策する事態に進むて來たことは、國民生活上是に喜ばしい現象である。萬年筆が輸入された歴史は僅か三十有餘年前のことと、大衆的に愛用せられ出したのは第一次世界大戰以後と記憶する。爾來、同業者の不斷の研究によつて、今日は輸出を敢てする隆昌發展を遂げた事は、技術日本の誇でなければならぬ。米澤熊之進氏は斯業に従事し、粒々の苦心研究を積み、業界に寄與する所妙からず、其の名譽を擲はれたのである。夙に大阪有数の萬年筆株式會社専務取締役兼經理部長として指導的存在を示して居る。氏は優良品製作の爲めには全生命を傾けて腐心し大正十一年歐米に渡り一職工として研究し技術を磨いて歸つたのである。その血の滲む奮闘は長撒短く能はざるものがある。氏は山口縣の出身で、明治六年米澤國藏の六男として生れ大正七年兄爲之助氏の後を承けて相續し現在に及ぶ。書畫骨董に精しく殊に巨匠の丹青に對する鑑識は驚くべきものがある。

盛岡トヨタ自動車販賣・社長

米城榮一 郎氏

氏は宮城縣米城兵衛氏の長男で明治二十九年の生れ、早大専門部政治科を卒業したのが大正八年であつて昭和七年家督を相続し家業たる味噌醬油の醸造に従事し致々として家運の發展を企圖して居る極めて素朴質實な士である。先代範兵衛氏は宮城縣多額納税者に列した程で、地方の素封家として知られて居る。氏は眞摯にして行ふ所篤く古川町を中心とし其の近郷に名望高く公共の爲めに力を盡すこと亦頗る多い。現在盛岡トヨタ自動車販賣會社社長たる他、仙北倉庫、東北金屬工業各監査役として實業界に活動し、地方財界の中樞的存在として勢威並び行れる地位を確保し、古川町商會長の公職を帯び地方の發展と向上とに努力して居る。家庭は妻タミ子女史を中心に一弟一妹二女があり、母堂さと刀自(明治一一生)を加へて七人暮りして頗る圓滿を極め、常に春風胎蕩の如き薫々たる團樂の樂園其の物で、氏の一日の疲勞を醫して餘りありといふべきである四十代の血氣盛りの氏、地方自治民育に對しても盡瘁を望む。

金福鐵路公司・副社長

和田 駿氏

鐵道界の鼻祖として重きをなす和田駿氏は現に金福鐵路公司(株式會社)副社長の要職にあつて、同社實務指導の第一線に勇奮努力しつゝある。氏は大阪府の産、橋本正徳氏の二男として明治十五年二月に誕生、同二十三年に和田家の養子となつて分家したものである明治四十二年京都帝大法學部法律學科を卒業するや、直ちに朝鮮總督府に入り同鐵道局に勤務し、更に山東鐵道、東京市電氣局等に轉じ現在の如く金福鐵路公司副社長を始め、東京高速鐵道株式會社取締役其他の重役を兼ねるに至つたもので、今や我が鐵道事業の世話役として自からも任じ、しかし已れを空として斯業發展に事日なき活動をつゞけてゐる。従て鐵道事業に於ける氏の勢力は隠然として偉大なるものがあり、その過去に於ける功績にも甚大なるものがある。斯くの如く鐵道事業に於けるリーダーマンとして知られてゐる氏のことである、過去四十に垂んとする業界生活に氏が何を體驗し何を爲して來たか、それは氏の現在の地位が雄辯に物語るであらう。

嘉義自動車・社長

林 抱氏

氏は臺南州東石郡の出身で明治二十七年十二月に誕生した。夙に大志を抱いて實業界に臨み、大正八年朴子街に於て米穀雜穀業を創めたのを皮切りに、同十年には嘉義自動車株式會社を組織してその社長に就任した。氏が今日の交通界の恩人として讃えられてゐるのも、常に目を高いところに置いて「自分の上には更に上がある」と更にその最上のものへ向つて、自分を進めやうとした不斷の努力精進の賜物にほかならない。志は須く大きいほど好い。人間誰しも機會に恵まれ努力をすれば必ず成功はできるものである。徒らな大言壯語は幼稚な獨りよがり過ぎないが、と云つて心から大を望むものがそれを無理に押し潰して、小さな現狀に満足しやうとするのは意氣地なしである。例へ他人からは何と云はれやうと、心に望み自信を持つたならば、よろしく志は大にすべきである。歩一歩と志の大を實現させた氏の場合を見るにつけ、この感を深くするものである。

室蘭船渠・社長

和田 三郎氏

氏は北海道士族和田惟一氏の三男にして明治十七年十月に誕生、大正七年に分家した。明治四十一年東京帝大工科を卒業して函館船渠株式會社に入り支配人を経て、現在では常務取締役の樞位に在り、大塚社長との名コンビに依つて縦横に才腕を駆使しつゝある經營の逸材である。しかもその卓腕は更に餘力を驅て室蘭船渠株式會社社長としても異常な牙を見せたり、行くとして可ならざるなき力量手腕は將に正宗の名刀にも比すべき鮮やかさを發揮してゐる。したがつて氏は朝氣満々の團將として業界に特殊性を課はれてゐるのであつて、その信望厚き點などは今更暇々を要せぬほどである。曩に函館市會議員として市政に參與したのもみなざる徳望の現はれであり、氏の背後に立籠る所謂和田宗の團結の如何に強固であるかを如實に物語るものである。もとゞ技術家出身なだけに氏の性格は精悍そのものである。すべきことをなし行ふべきことを行ふ自己の意慾の赴くところ常に實踐躬行が伴なつて範を示してゐる。

富士航空計器・代表取締役

和田 恒輔氏

近代の機械製作界は世界を擧げての競争熱に第一層の躍進を遂げ、また技術的には益々各部門が分科、専門化されてゆく傾向にある。世界の代表的製作會社獨逸シメンス會社と特殊關係にある古河系の富士電機製造、富士航空計器、富士通信機製造の三姉妹會社はそれ／＼専門の製作を行ひその優秀なる權威的製品を以て知られてゐる。わが和田恒輔氏はこの富士航空計器代表取締役、富士電機製造常務取締役、富士通信機製造取締役としてその比類なき經營の才能を發揮し、股販産業界の花形としてときめく逸材である。氏は明治二十年十一月山口縣に出生四十二年神戸高商卒業するや古河鑛業に入つたが、古河商事に轉じてから外國課長、上海支店長を歴任し、その拔群の手腕と功績を認められ、古河の新興産業たる富士三社の樞機に采配を採ることになつたもので、時局の浪に乗つて三社が躍進的な事業擴張を行ひ増資に次々増資を斷行する勇姿を氏は巧みに操縦する名航海長として瞻目されてゐる。

富士撚絲工業・専務取締役

若尾 義角氏

若尾義角氏は謂ゆる甲州の若尾一門の一人であるが、氏は敢て中央に乗り出さず専ら甲府に止まり、山梨縣實業界の元老とし郷黨の指導に任じてゐる人徳者である。氏は明治八年二月の出生で山梨縣人岡源八氏の弟同治光氏の叔父であるが、同三十二年先代保重郎氏の養子となつて若尾姓を名乗り、大正六年先代の跡を承けて家督を相續した。若尾本家との續柄は、氏の養母みわ刀自が本家現戸主ハル女の養叔母に當つてゐる。現在氏は若尾商店を主宰して生絲繭商を營んでゐるが、また富士撚絲工業専務取締役に任じて名采配を揮つてゐる。時局下にあつて生絲界は第一次歐洲大戰當時とまではゆかないが近來にない活況にあり、従つて自家の若尾商店は富士撚絲工業と共に頗る盛況を極めて良好の業績を示しつゝある。氏は本年とつて六十八歳であるが、老來彌々矍鑠たるものがあり、高雅な人格は益々光芒を加へて衆望一身に染まり、甲府商工會議所會頭の公職に推されてゐる。銜後のために切角自愛を祈る次第である。

日本光機工業・社長

若月 國立氏

動八等若月國立氏は時局股販産業中の白眉たる日本光機工業社長として光芒燦たる明星の如き存在を業界になしつゝある巨豪である。同社の事業は灣港及び航空燈臺用レンズ及び照明器の製作であるが、現時の皇戰下に於て之れは軍需としても極めて重要なものであり、従つて同社は陸海軍の指定工場として盛況を極めて居り、倍額増資、生産設備の大擴張と矢繼早やな發展飛躍を續けてゐる。氏は明治二十五年九月山梨縣人若月權重郎氏の二男として出生した。夙に實業界に身を投じて活躍してゐた氏は大正十四年日本光機に入り、その拔群の才腕を認められて、庶務係から會計主任を経て監査役に累進重役陣に列し、昭和十年専務取締役たり、同十四年遂に社長の樞機に就いたのである。氏はまた東洋内燃機、保土ヶ谷製作所兩社長に任じてゐるが、兩社共に氏の名采配下に賑々たる業績を示しメーカ界を驚異させてゐる。氏は當年四十九歳、愈々これから圓熟境に入るところである。時局下多端の折柄切に自重を祈る。

愛知製粉・社長

若林 秀雄氏

若林秀雄氏は當年四十歳の青年實業家として關西業界に馳驅しつゝある驍將で、その千萬人と雖も我れ行かんずの猛闘振り若人の意氣萬丈として、斯界を睥目せしめてゐる。氏は明治三十七年兵庫縣人若林三茂氏の長男として出生したが、後ち家督を相續した大正十三年神戸商大を卒業し、夙業を離らせて實業界に身を投じたが、現在は愛知製粉社長として颯爽たる名采配を揮つて賑々たる業績を擧げ、また高砂鑛業取締役、日本砂鐵工業常務監査役にも任じて好評々たるものがある。日本砂鐵工業は本邦最大の該工業會社で設立後まだ日は浅いが、わが國特産の砂鐵を使用する點に於て最も國策的な會社で事業内容はインゴット、パイ、フェロバナヂウム、チタン、バナヂウム鋼鐵、炭素鋼、酸化チタニウム等の軍需的に必須な鋼類の製造販賣であるが、その成績も頗る可良で時局産業の花形として増資、擴張と發展の一路を辿つてゐる。先に氏は同社の取締役に任じてゐたが現在は常任監査役に轉じたものである。

安立電氣・常務取締役

脇坂 貫一氏

安立電氣常務取締役たるわが脇坂貫一氏は帝都メーカ界の花形としてその非凡なる經營手腕を顯はれてゐる逸材であるが、氏が今日の地位を獲ち得るまでには並々な苦闘に打ち克つて來たのであつた。氏は明治十五年十月兵庫縣人脇坂武平氏の長男として出生したが、二十九年嚴父逝去の跡を承けて家督を相續したのは十五歳の時である。將來電氣界に勇飛せんと志を立て、出京、三十四年東京電信學校を卒業したのは二十歳の春、通信省に入つて勤務に精勵し業に卓越する成績を示して認められ、遂に通信技師に累進したが、甲種工業程度出身としては異例なる出世振りも、氏の優秀な才幹と刻苦精勵の賜であつた。大正八年には藤倉電線に聘せられて工務部長として活躍したが十二年退社した。現在は安立電氣常務として含蓄ある名采配を揮つてゐるが、先には日本國產取締役にも任じてゐた。氏は濃厚篤實なる人格者でその趣味も謡曲を嗜む典雅さであるが、また四男三女の慈父として定庭も圓滿幸福に満ちてゐる。

長崎電氣軌道・専務取締役

脇山 勘助氏

氏は福岡縣の産、岸高丈夫氏の令弟にあたり明治二十一年五月に誕生、大正二年に脇山啓次郎氏の養子となつたものである。長崎高等商業學校を卒業後實業界に臨み現に長崎電氣軌道株式會社専務取締役として重きをなし、その眞摯なる態度は業界の畏敬を聚めつゝある。氏が特に力を注いでゐるだけに同社の發展もめざましく、同社今日の業容の進展は畢竟、氏の努力にまつところ多く、同社のホープとして絶對の信頼をつなぎつゝあるのも宜なる哉と云へやう。脇山氏は一見して非常にもやはらかな感じがする。それでゐる内に剛を備へてゐるのである。圓滿な性格をもつてゐるくらいであるから、自分から避けても人と争ふやうなことをしない。ひと通りの苦勞をなめてきた人物だけに、はなしの判る人であり、暗いかげなどみじんもない。それと云ふのも繁忙のうちにあるが、寸暇をさいてスポーツを楽しむといつたやうな氣風が影響してゐるのであるまいか——運動のほかに長唄にも趣味をもつてゐる。

鷺野機械・社長

鷺野 卯八氏

東京メーカ界に於て鷺野機械、鷺野製機商事の名は震販産業中のピカ一として業界の羨望の的となつてゐる。それと云ふのも鷺野卯八氏の如き人格、識見、手腕兼備の人物が社長として實務萬端に卓越せる采配を揮つてゐるからで、兩社ともに時局景氣の追風に滿帆をはらませた形で賑々たる躍進を續け、驚異的な業績を擧げてゐることは慶賀の至りである。氏は明治十六年十二月岐阜縣の人三輪安治郎氏の長男として誕生したが、四十四年鷺野徳治郎氏の養子となり、昭和十一年家督を相續してゐる。若い時から養父に指導されて事業界に入り、百戰萬馬の戰場裡も馳驅して來てゐるだけに機械製作の實地に明るく、商機をとらへることには鋭い牙へを見せるので、今日の堅實な鷺野城が完成したのも當然のことと言ふべきである。猶ほ令息茂三氏は同志社大學法科經濟部出身の逸足で、氏の事業を補つて鷺野商事今村工場長の任に就いてゐるが、この親にこの兒を加へた鷺野一家の事業はその將來に燦たる光明輝くばかりである。

東洋護謨化工・専務取締役

鷺 埜 甚之助氏

日支事變以來可成りの制限を受けてゐた護謨原料は歐洲第二次大戰開始によつて大暴騰を來たし、このために護謨栽培業界は盛況を極めてゐるが、護謨工業界は原料高の上にもまた國內統制輸入制限が酷くなつたので大打撃を受けつゝあるが、それは主として小工業、家庭工業的部分に響いてゐて、軍需的乃至國策的な大所は順調に運営されてゐるやうだ。わが鷺埜甚之助氏は本邦に於ける護謨工業界の副將として廣く斯界に驍足を伸ばしてゐる俊豪である。即ち氏は東洋護謨化工専務取締役の他、日産護謨工業、金壺護謨各代表取締役たり、また東洋タイヤ工業旭化工各取締、堺重工業、東洋タロス各監査役を兼ねてゐて、護謨工業界に於ける氏の一舉手一投足は大きな力を有つてゐる。氏はまた東洋紡績の總務部長としても俊銳なる手腕を揮つて、大東洋紡に異彩を放ちつゝある。氏は明治二十一年八月大阪府人阿海政吉氏の長男として出生したが、四十五年鷺埜タネ女の家督に入り、大正十一年分家して一家を成した。

東京精機製作所・代表取締役

渡部 修氏

氏は東京府士族渡部朝氏の二男として明治三十四年九月出生す。父君朝氏は農商務技師として長く官界生活を...

渡邊榮一商店・社長

渡邊 榮一氏

氏は愛知縣人にて明治二十九年に生れた少壯實業家である。名古屋商業卒業後、祖業たる鐵商を經營し、株式...

入山探炭・事務取締役

渡邊 寛一郎氏

厚生大臣が探炭獎勵のために現地に赴く程の石炭必需時代のことにて、今や炭業界はなかくの大景氣である。入山探炭は福島縣下第一の大炭山で、北九州に大濱、西戸崎の兩仔會社...

鹿島組・事務取締役

渡邊 喜三郎氏

吾が國建築界の大御所たる鹿島組の飛躍は全く素晴らしいものがある。同社生え抜きの腕利きに渡邊喜三郎氏があるが、氏は夙に敏腕の譽れ高く自他共に許す俊秀である。明治二十七年四月生れ、岩手縣の人渡邊喜代松氏の長男であるが學校は東京商科大學、在學中早くも他に擢んで將來を囑望された英才だといふから、その手腕力量...

三惠製作所・事務取締役

渡邊 郡 逸氏

渡邊郡逸氏は三惠製作所事務取締役として帝都メーカ界一方の雄たり亦日東製水代表取締役として新界に鳴らしてゐる逸材である。氏は力行主義の典型的人物でその經歷は一卷の奮闘史を綴るに應はしきものがある。現在に於ても自ら工場に赴いて監督指導をなす程で、また従業員も氏の人格と恩情に服して業務に精勵するから、製作所も製水會社と共に隆々たる業績を擧げてゐて、業界から羨望されてゐる...

大阪機械工作所・取締役

渡邊 節氏

大阪財界が誇る渡邊節氏は、福島縣士族陸軍少將渡邊祺十郎氏の長男で明治十七年十一月生れ、同四十一年東京帝大工科建築學科を拔群の成績で卒業して韓國度支部技師として就任、同四十五年に歸朝し鐵道院技師に任命された。斯様に氏は卓抜なる建築家として建築界に既に定評ある人物だが、歐米に前後二回の漫遊をなし、先進國の建築を研究、現時大阪中島にある大阪ビルに渡邊建築事務所を設けてパリの名聲家である。またその傍ら大阪機械工作所(株)取締役、渡邊建築事務所(名)代表社員をも兼ね、業界にも八面六臂の活躍を示してゐる。氏は一度必決心するや、斷乎として所信に邁進して止まない性質の人だ。しかもその反面非常なる熱慮家で、堅實な計畫性、方針と豊富な識見とは、氏の事業の手堅さによく現れ、實に目覚ましい躍進ぶりをみせてゐる。氏の豪華な風貌にも窺へる如く、とてもスケールの大きな人物は、多角經營を行つて業界を馳驅するには全くの恰好な俊才である。才氣煥發、高德の士だ。

第一生命保險・神戸支部長

渡邊 退 助氏

氏は第一生命保生えぬきの人。第一生命保險相互會社と云へば、經濟界に知らぬ人としてない、かの有名な一言居士矢野恒太氏の主宰する吾が國屈指の優秀會社。歴史古く信用篤く、年毎にその契約率は増加の一途を辿り業績は益々向上發展を遂げてゐる。渡邊氏は同社の至寶とまで謳はれる重鎮だが、現時同社神戸支部長として社務統率の任に當つてゐる。新潟縣人渡邊清次郎氏の長男で明治二十二年に生れた氏は東京帝大經濟科の出身、大正十年同社に入り契約課勤務となつたが、後大連、朝鮮各支部長を経て今日に至つたもの。全く終始一貫保險事業に邁進し同社を遂に日本一の生保會社に築き上げるに力あつた氏は偉大だ。謹嚴にして徳望あり、一度氏が神戸支部長として臨むや、支部全社員の精神的結合を強調し、着々と実績を擧げつゝ今日に至つた。社會公共的意義をもつ生保事業の指導者としては眞に得難い逸材といはねばならぬ。氏が信望を博し世評頗るよいのもその豊潤なる手腕の賜でもあらう。

豊州鐵道・社長

渡邊 幸氏

鐵道に、はたまたバスに、氏の手腕は今や伸び放題である。豊州鐵道(株)社長、京王電氣軌道(株)常務取締役、京都乗合自動車(株)取締役、甲州街道乗合自動車、高尾遊覽自動車各(株)監査役、宇佐參宮自動車(株)相談役として輝かしき成果を築きつゝあるが、その重厚篤實にして研究心の深いことは幾多エピソードを残してゐる次第だ。氏は明治十九年十二月に大分縣渡邊製作氏の二男として生れ大正三年に見準一氏の後を承けて家督を相続したものである。日常社務に熱心なるは比類を見ず、社員間に信望極めて篤い、わけへだてのない氏の紳士的態度によるものであらうか。とにかく、その多方面に亘る進出ぶりには驚異的なものがある。燃えるが如き霸氣と野心を持ち、加ふるに大器的な深さと絶え間なき研究心とがある。そしてまた温厚な人柄からくる各方面の信望があるのだ。帝都交通界地方交通界の革新に、發展に、多年研究を重ねた蘊蓄を傾けて堂々斯界に聲名を馳せるのも間近い事を確信する。

京濱コークス・社長

渡邊 扶氏

時局下産業界の重大任務を擔つて躍進する京濱コークス株式會社は今年昇天の隆盛を示してゐる。當社は長は渡邊扶氏。氏は福島縣の人渡邊長綱氏の二男として明治十九年一月に出生し、昭和五年駒崎氏方より分家した。學校は東京帝大工科應用化學科に學び、明治四十三年に卒業、夙に業界入りをして名聲高く、一方の將として堂々進軍を續けてゐる。現時京濱コークスを主宰するほか、帝國コークス(株)常務取締役、鶴見瓦斯、東京瓦斯副産各(株)取締役と、その勢力は大したもの、國策の線に沿うて燃料報國に邁進してゐる。名利に恬淡にして謙讓の志篤き氏は、ひたすらに社業の隆昌のために盡瘁してゐるのだ。氏の事業經營振りは、あまり派手ではないが、その代り堅實一路を行く人だ。京濱コークスが斯界の雄として君臨してゐるのも、一に氏の温健着實なる經營方針の賜といつてよいだらう。資性明朗にして調達、同社を見事前進せしめて、その躍進譜を聞く今日、自らなる愉悅を感ずるものがあらう。

渡邊正三郎商店・社長

渡邊 恒太郎氏

氏は山形縣渡邊正三郎氏の長男にして明治二十二年五月に生れた。大正二年に東京帝大醫學科を卒業し昭和三年に至り家督を相續した人である。嚴父正三郎氏は偉大なる人格者で山形市會議長、山形瓦斯副社長、山形商工會議所副會頭に擧げられ、藍綬褒章、紺綬褒章を賜つた人であるが、氏はこの人の重陶を受けて生長、よく父の遺志を繼いで業界に名を成し、先代に劣らぬ敏腕家、英才の士として敬愛せられてゐる。現時、渡邊正三郎商店、南信興業、鹿島織維工業各(株)社長日本産紙工業(株)取締役、福星洋行(株)監査役、オリエンタル寫真工業(株)参事、秋工業貿易、高木硝酸製薬所各(株)相談役の諸重役を兼ねて愈々意氣軒昂、大活躍してゐる。氏が今日の大成をなしたは、勿論父正三郎氏の影響大なるは云ふまでもないが、たゞそればかりではない、氏の機まざる屈せざる健闘と、時流を見透す正確なる識見とがものを云つてゐるのだ。とまれ、經濟國策遂行のために奮闘してゐる氏の前途を大いに期待しよう。

渡邊藤吉本店・代表社員

渡邊 藤吉氏

福岡縣多額納稅者渡邊藤吉氏は、同縣先々代藤吉氏の四男にして明治十五年二月に出生、大正八年に先代兄藤吉氏の後を承けて家督を相續し、前名愛次郎を改め襲名した。先代の遺志を繼いで家業にいそしみ、更に英米佛白獨の諸國より板硝子の直輸入をなし次で建築材料並びに石油發動機、電氣モートル、自動車の販賣を營む傍ら、渡邊鐵工所取締役として敏腕ぶりを發揮してゐる。また博多商工會議所副會頭に推された人望家で、腕あり、才あり、徳あり、三拍子揃つた奇才である。公共に盡す忠節の士で、進取の氣象に富み氣宇豁達、積極的營業方針をとつて社業の擴張發展に努めてゐる。渡邊藤吉本店は近時インフレの眞只中であつて全く好調、氏はその統率者として能率増進、生産力擴充に大奮である。社員に對するに對等をもつて臨み、かゝるが故が全員のまつたき信望を博して慈父の如く敬慕せられるも高徳のいたす所以のものであらう。非常時財界を擔つて先陣を承る氏の今後の活躍こそ正に刮目すべきであらう。

北海道漁業雜誌・代表取締役

渡邊 藤作氏

四周海に包圍された島國我が日本は世界の屈指の水産國であり、また漁獲の多いことも誇りとするところである。そしてまた魚類の罐詰製造も大いなるひ、國內はもとより遠く海外に距てた諸外國への輸出が、吾が國貿易の重要な役割を占めてゐることは云ふまでもあるまい。渡邊藤作氏は、この罐詰製造業の覇者ともいふべき人で、現時北海道漁業雜誌、蟹罐詰協和會、共同販賣各(株)代表取締役、北千島水産(株)取締役、太平洋漁業(株)監査役と斯界の代表的會社の要職を握り全く素晴らしい羽振りでゐる。氏は新潟縣人先代藤作氏の長男にして明治十八年十一月の生れ、大正十二年に家督を相續して前名眞作を改め襲名したものである。その事業的才腕はさておき、業界にあつて多年、斯業の發展に貿易の振興に、飽くことなき努力研鑽を續けてきた氏の足跡は輝かしくも大きい。今や全く罐詰製造業界の權威者として、また有能なる實業家としてその前途は祝願されてゐるのである。よろしく自愛せられ尙一層の奮發を希む。

間組・常務取締役

渡邊 藤平氏

今、間組にあつて堂々建築界に勇名を馳せてゐる渡邊藤平氏とは如何なる人物であらうか。氏は岡山縣渡邊吉氏の長男として明治二十年十二月に生れた。氏の社會人としての上陸第一歩は鐵道省であつたが、後間組に轉じて持ち前の腕前はいやがうへにも鍊磨され、事業家としての天分が遺憾なく發揮せられるに至つた。即ち同社東京支店次長兼建築部長、營業部長と累進、名聲を轟ち得たが、昭和六年取締役役に拔擢され同時に營業部長も兼務し辣腕家の名を恣にしたのであつた。更に昭和十一年には常務取締役に推され、こゝに於て全く確固たる基礎は築かれた次第、今や飛躍する機會や來れ、と待機の姿勢をとつて構へてゐるのである。氏の機敏にして果敢なる才腕は、よく同社々業に伸張をもたらし、當社の支柱として人望洵に篤い。間組の指導者として、吾が國建築界、事業界のよき師として氏の活躍は各方面から期待され刮目されてゐるも宜なるかな、天賦の才が今後如何に伸びるか、みものであらう。

渡邊同族・副社長

渡邊 富三郎氏

ミナトYOKOHAMAの名は、日本人は勿論遠く外國の隅々まで有名であるが、こゝ新興横濱の財界に全く著名な兄弟の實業家、否財閥がある。それは一體誰だ——？ かの名聲高き渡邊利三郎、富三郎兩氏である。今此處に筆者は令弟富三郎氏を語らんと思ふのであるが、利三郎氏は現横濱商工會議所議員、神奈川縣多額納稅者として同地に大勢力を有する権力者であることを敢て附言し、當家が如何に壓倒的地位を占めてゐるかを判然とさせる次第である。富三郎氏は明治二十年九月の生れ、大正十一年に分家したもので、現在渡邊同族(株)副社長、東洋真空工業(株)取締役、日本特殊鋼、日本研磨砥石各(株)監査役として名實共に財界の重鎮、業界の雄將として君臨してゐる。また曩に渡邊銀行監査役でもあり兄君をよく輔けて業務に精勵、徳望絶大である。斯の如き今日の大成を見るに至つたも、偏に父君の薰陶と兄弟協力一致萬難を排すの心意氣の賜であらうか。加ふるに氏の明晰なる頭腦と天才的敏腕は鬼に金棒である。

渡邊鐵工所・社長

渡邊 福雄氏

現時博多商工會議所會頭渡邊福雄氏は、福岡縣藤城善七氏の二男にして明治十年六月に生れた。同三十七年に先代ハル氏の入夫となり家督を相續したものであるが、ハル氏は有名な福岡縣多額納稅者にして實業家たる渡邊藤吉氏の妹である。福雄氏は現時渡邊鐵工所、太刀洗製作所各(株)社長、及び西部瓦斯(株)監査役を兼ね、財界の「時の人」として活躍、徳望全く篤い。内外の經濟事情に通じた氏には時流を見透す素晴らしい識見と事業的センスあり、加ふるにリフアインされた社交術と將來を約束された經營手腕とを堅持し、現事業界をリードする指導者としての貫録を申し分なく兼ね備へてゐる。又、昭和十年に開催された第十九回國際労働會議使用者代表委員として華々しく登場し、日本の面目を大いに躍如たらしめたのも、氏の大きな功績の一つとして、また氏の人爲の一面を窺ひ知る證左として興味深いものがあらう。更に多事なるわが財界の長老的存在として日本を押し進めるに力ある氏の今後を大いに期待しよう。

金森商船・常務取締役

渡邊 正雄氏

秀でたる材幹を講はれる函館の實業家渡邊正雄氏は靜岡縣の産である。明治十七年に同縣加藤定太郎氏の二男として生れたが、後渡邊孝平氏の養子となり、養父の後を承けて家督を相續したのである。夙に東京正則英語學校に學び、明治四十年に青雲の志を抱いて北海道に渡つた。本州の北端、荒海を臨むこゝ蝦夷地にあつて孤軍奮闘商船業に従事して獨力獨歩、志遂に成り今日の大成を獲ち得たのであつた。よく健闘、よく努力した氏の温顔に刻まれた皺の一筋一筋にも、往年の刻苦精勵の歴史の跡がたゞまれてゐるかと思へば、氏の人間性の偉大さを痛感せざるを得ない次第である。現時金森商船(株)常務取締役、大東燐寸(株)取締役として北海道事業界に高名を馳せ、堅實なる人格者として各界から敬慕を寄せられてゐるが、氏を見るに、よく荊棘の路を踏み越えてきた人に見られる卑屈因循な點が微塵もなく、激浪に鍛えられた強氣な積極性で押し通し、その機略縱横にして弾力性に富む手腕には敬服の他はない。

402
305

昭和二十六年
念版人物之日本 (中)
昭和十五年十一月七日印刷納本
昭和十五年十一月十日發行

非賣品

禁無斷轉載

東京市芝區新橋五丁目十八番地
發行兼編輯人 山本義昭
東京市京橋區築地二ノ四
印刷人 栗原義雄
東京市京橋區築地二ノ四
印刷所 富士精版印刷所

發行所

東京市芝區新橋五丁目十八番地

人物之日本社

電話芝(43)一二九六番
振替口座東京一五六二八〇番

東京市芝區新橋五丁目十八番地

終

